

岡谷大溝散布地
三須今溝遺跡
三須河原遺跡
三須畠田遺跡
三井手見延遺跡
井手天原遺跡

国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅱ

2001

岡山県教育委員会

岡谷大溝散布地
三須今溝遺跡
三須河原遺跡
三須畠田遺跡
三井手見延原遺跡
井手天原遺跡

国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅱ

2001

岡山県教育委員会

序

国道429号線は、倉敷市から都窪郡山手村・総社市を通り津山市に至り、やがて兵庫県へ通じる主要幹線道路の一つです。周辺には、山陽自動車道倉敷インターチェンジや岡山空港など広域交通の拠点が存在するため、県の南北を連結するうえで、重要な役割を果たしています。近年、交通量の増加が著しく、特に、改良区間の倉敷市西坂から総社市井手までは、交通渋滞や歩行者の安全確保に対処するため早期改良が望まれております。

岡山県教育委員会は、山手村および総社市内の工区に所在する遺跡の保存について、関係機関と協議を重ねましたが、遺跡の現状保存が困難なものについてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存の処置をとりました。

調査対象となりました7遺跡・1散布地のうち山手村内の2遺跡は、すでに報告書を行しております。本書には総社市内を中心とした5遺跡・1散布地を収録いたしました。これらの遺跡は、作山古墳のある西の丘陵と備中国分寺のある東の丘陵にはさまれた沖積平野に立地する、弥生時代から近世にかけての集落遺跡です。遺跡全体では、合計39軒の竪穴住居や14棟の掘立柱建物などが発見され、それぞれの遺跡で遺物も数多く出土しています。なかでも、三須畠田遺跡で検出された6世紀前半の竪穴住居5軒は、調査例の少ない時期であり、多量の須恵器や土師器を伴っている点でも注目されます。さらに、井手見延遺跡では、奈良時代の方形土壙から完形の丹塗り土師器高杯などが須恵器を伴って出土しています。また、付近からは円面硯や風字硯など官衙関連遺物も見つかっており、備中国府を考えるうえでも重要な発見です。ここ数年来、周辺地域は、総社市教育委員会による発掘調査も進み、三須河原遺跡で「郡殿」と墨書きされた須恵器が出土するなど、重要な発見も相次いでいます。これらの成果と本報告書の成果で、さらにこの地域の集落の動向・特色が、より具体的に浮き彫りになることを期待してやみません。

この報告書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、吉備地域の歴史を研究する一助となれば幸いります。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成に際しまして、岡山県文化財保護審議会委員の先生方の有益な御指導・御助言を賜りました。また、関係機関各位、発掘調査・整理の作業員の皆様方、さらに地元の方々から暖かい御理解と多大な御助力をいただきました。末筆ながら、記して厚くお礼申し上げます。

平成13年2月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 瞳夫

例言

- 1 本報告書は国道429号線改良に伴い、岡山県土木部道路建設課（倉敷地方振興局）の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが、平成4～10年度に調査を実施した都窪郡山手村内の岡谷大溝散布地、および総社市内の三須今溝遺跡・三須河原遺跡・三須畠田遺跡・井手見延遺跡・井手天原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 国道429号線改良に伴う発掘調査報告書は、2分冊にわたる刊行であり、本書はその第2分冊目にあたる。
- 3 遺跡の名称変更を行った。調査時名称の大溝・今溝遺跡を岡谷大溝散布地と三須今溝遺跡に、調査時名称の三須畠田遺跡を三須河原遺跡と三須畠田遺跡に、調査時名称の金井戸見延遺跡を井手見延遺跡と井手天原遺跡に、それぞれ分離し、名称を変更した。これは、総社市教育委員会の国道429号線周辺の発掘調査の成果をふまえたもので、変更に際しては、同市教育委員会と協議を行った。詳しくは「第1章 第2節 報告書の作成」を参照されたい。
- 4 調査は、平成4年度1月から平成7年度9月まで、間に他事業との調整による2ヶ月の調査中断期間をはさみ、継続して行った。その後は、条件整備の進捗に合わせ、平成8年度5月～6月、10月～12月、平成9年度4月～6月、平成10年度6月～7月、11月～1月に断続して行った。
- 5 発掘調査にあたっては岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎・水内昌康両氏よりご指導、ご助言をいただいた。記して厚く感謝の意を表する次第である。
- 6 報告書の作成は、平成8年度1月～3月、平成11年度4月～3月に岡山県古代吉備文化財センターにて行った。
- 7 本書の編集は物部・亀山・小嶋が担当し、執筆は物部・金田・小嶋・亀山・姥原・高田・葛原・重根・宇垣・岡本が分担し、とりまとめを物部が行った。
- 8 特殊な遺物の自然科学分野における鑑定・分析を下記の諸氏・機関に依頼し、有益なご教示・報告文をいただいた。記してお礼申し上げる次第である。

歯の鑑定	小田嶋梧郎（岡山大学）
鉄滓鑑定・分析	大澤正己（たらら研究会委員） 鈴木瑞穂（株式会社九州テクノリサーチ）
胎土分析	白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
獣骨鑑定	富岡直人（岡山理科大学）
樹種同定	畦柳 鎮（岡山商科大学）
石材鑑定	妹尾 譲（倉敷芸術科学大学）
樹種鑑定	パリノ・サーベイ株式会社

- 9 周辺の遺跡および古代の土器について武田恭彰氏に御教示いただいた。記して厚くお礼申し上げる。
- 10 遺物写真については江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。
- 11 出土遺物・図面・写真等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

凡例

- 1 本報告書に記載された高度値は海拔高であり、方位は特に示さない限り磁北である。
- 2 本報告書に掲載した地図のうち、第7図は国土地理院発行の1/25,000地形図を複製し、加筆したものである。
- 3 本報告書に掲載した遺物の掲載番号は遺跡・散布地ごとに1から付けている。また、図・表の番号は第1章～第7章までを通し番号とし、第8章のみ、各項それぞれで付けている。
- 4 遺構・遺物の略記号・略称は次のとおりである。

堅穴住居=住 堀立柱建物=建 柱穴列=柱 土壌=土 井戸=井 土壌墓=墓
溜池状遺構=池 粘土塊=粘
土製品=C 石器=S 金属器=M 玉類=J

- 5 遺構・遺物の個別実測図の縮尺は次のとおりである。

堅穴住居・堀立柱建物: 1/60 土壌: 1/30・1/40 溝断面: 1/40・1/60
土器: 1/4・1/5・1/6 土製品: 1/2・1/3 石器: 1/2 金属器: 1/2

- 6 図版の遺物写真的うち、縮尺設定したものは表示した。
- 7 土器の実測図の中で中軸線左右に白抜きのあるものは、小片のため口径・底径がやや不正確なものである。
- 8 溝断面図において使用した記号Eは東、Wは西を表わし、記号のないものは西方向あるいは南方から見た実測図である。
- 9 遺構の実測図において使用した点描等は、注記のない限り次のとおりに統一した。



被熱面



焼土粒の散布範囲



炭散布範囲

- 10 文章の執筆は各調査担当者が分担し、文責を文章末尾に示した。
- 11 土器の実測図において、赤色顔料の塗布面と黒色土器の炭素吸着面には点描をかけた。
- 12 本報告書における土層名称は、各発掘調査担当者によって異なり、統一できていない。
- 13 本報告書の記述に使用した時代区分は、一般的な政治史区分に準拠する。古墳時代は7世紀前半まで、古代は7世紀後半から12世紀中頃までを指している。また、遺構・遺物の時期については、『津寺遺跡2～5』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書98・104・116・127)で使用された土器編年案に従い、表記法も踏襲する。ただし、5世紀以降は実年代を併用した。

目次

序

例言

凡例

目次

第1章 序 言	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 報告書の作成	10
第3節 地理的・歴史的環境	12
第2章 岡谷大溝散布地・三須今溝遺跡	15
第1節 岡谷大溝散布地の調査の概要	15
第2節 三須今溝遺跡の調査の概要	17
第3節 三須今溝遺跡の遺構・遺物	18
第3章 三須河原遺跡	25
第1節 調査の概要	25
第2節 弥生時代の遺構・遺物	28
第3節 古墳時代の遺構・遺物	29
第4節 古代・中世の遺構・遺物	34
第5節 遺構に伴わない遺物	35
第4章 三須畠田遺跡	37
第1節 調査の概要	37
第2節 弥生時代の遺構・遺物	40
第3節 古墳時代の遺構・遺物	79
第4節 古代の遺構・遺物	100
第5節 中世の遺構・遺物	103
第5章 井手見延遺跡	115
第1節 調査の概要	115
第2節 弥生時代の遺構・遺物	118
第3節 古墳時代の遺構・遺物	139
第4節 古代の遺構・遺物	148
第5節 中・近世の遺構・遺物	156
第6章 井手天原遺跡	163
第1節 調査の概要	163
第2節 弥生時代の遺構・遺物	165
第3節 古墳時代の遺構・遺物	167
第4節 古代の遺構・遺物	187

第5節 中・近世の遺構・遺物	189
第7章まとめ	203
第8章 自然科学分野における分析・鑑定	207
第1節 三須畠田・井手天原遺跡中世墓出土の歯の鑑別	小田嶋梧郎 207
第2節 国道429号線改良に伴う発掘調査出土	
製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査	大澤正己 鈴木瑞穂 210
第3節 三須畠田遺跡出土の白色粘土および土器の胎土分析	白石純 222
第4節 井手天原遺跡出土動物遺存体	富岡直人 224
写真図版	
報告書抄録	

図 目 次

第1図 調査位置図 (1/200万)	
第2図 路線図 (1/25000)	1
第3図 調査区配置図1 (1/2000)	3・4
第4図 調査区配置図2-既報告分 (1/3000)	5
第5図 土層高低図 (1/80)	6
第6図 調査区周辺地形図 (1/10000)	11
第7図 周辺遺跡分布図 (1/40000)	14
岡谷大溝散布地	
第8図 トレンチ配置図 (1/3000)	15
第9図 土層図 (1/60)	16
第10図 出土遺物 (1/4)	16
三須今溝遺跡	
第11図 調査区配置図・基本層序 (1/3000・1/60)	17
第12図 遺構全体図 (1/400)	18
第13図 溝1・出土遺物 (1/40・1/4)	19
第14図 溝2・出土遺物 (1/80・1/4)	19
第15図 溝3・護岸・出土遺物 (1/80・1/4)	20
第16図 溝4~10 (1/40)	21
第17図 溝4・10出土遺物 (1/4)	21
第18図 溝11・護岸 (1/400・1/100・1/60・1/40)	22
第19図 溝11出土遺物 (1/4・1/2)	23
第20図 溝12・13 (1/40)	24
第21図 包含層出土遺物 (1/4・1/2)	24
三須河原遺跡	
第22図 調査区配置図 (1/3000)	25
第23図 立会調査遺構配置図・遺構断面図 (1/1200・1/80)	26
第24図 遺構全体図 (1/400)	27
第25図 溝7~10・出土遺物 (1/40・1/4)	28
第26図 壓穴住居3・出土遺物 (1/60・1/4)	29
第27図 壓穴住居4・出土遺物1 (1/60・1/4)	30
第28図 壓穴住居4出土遺物2 (1/5・1/4)	31
第29図 壓穴住居4出土遺物3 (1/5・1/4)	32
第30図 溝11・12・溝12出土遺物1 (1/40・1/4)	32
第31図 溝12出土遺物2 (1/5)	33
第32図 溝13~16・出土遺物 (1/40・1/4)	33
第33図 掘立柱建物 (1/60)	34
第34図 柱穴列 (1/60)	34
第35図 溝17~19・出土遺物 (1/40・1/4)	34
第36図 遺構に伴わない遺物1 (1/4・1/2)	35
第37図 遺構に伴わない遺物2 (1/4)	36
三須畠田遺跡	
第38図 調査区配置図 (1/3000)	37
第39図 遺構全体図・弥生~古墳時代 (1/400)	38
第40図 遺構全体図・古代以降 (1/400)	39
第41図 壓穴住居1・出土遺物 (1/60・1/4)	40
第42図 壓穴住居2・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)	41
第43図 壓穴住居3・4・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)	42
第44図 壓穴住居5・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)	43
第45図 壓穴住居6・出土遺物 (1/60・1/4)	44
第46図 壓穴住居7・出土遺物 (1/60・1/4)	45
第47図 壓穴住居8・中央穴 (1/60・1/20)	46

第48図 堪穴住居8出土遺物 (1/4)	47	第89図 堪穴住居12出土遺物 2 (1/4)	83
第49図 柱穴列 (1/30)	48	第90図 堪穴住居12出土遺物 3 (1/4・1/2)	84
第50図 土壙1・出土遺物 (1/30・1/6・1/4)	48	第91図 堪穴住居13・出土遺物 1 (1/60・1/4)	85
第51図 土壙2~5・出土遺物 (1/30・1/4)	49	第92図 堪穴住居13出土遺物 2 (1/4)	86
第52図 土壙6・7・出土遺物 1 (1/30・1/4)	50	第93図 堪穴住居13出土遺物 3 (1/4)	87
第53図 土壙7出土遺物 2 (1/4)	51	第94図 堪穴住居13出土遺物 4 (1/4・1/2・1/1)	88
第54図 土壙7出土遺物 3 (1/4・1/2)	52	第95図 堪穴住居14・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)	88
第55図 土壙8・出土遺物 1 (1/30・1/4・1/3)	53	第96図 堪穴住居15 (1/60)	89
第56図 土壙8出土遺物 2 (1/4)	54	第97図 堪穴住居15出土遺物 (1/4・1/2)	90
第57図 土壙8出土遺物 3 (1/4・1/2)	55	第98図 堪穴住居16 (1/60)	91
第58図 土壙9・出土遺物 (1/30・1/4)	55	第99図 堪穴住居16出土遺物 (1/4)	92
第59図 土壙10・11・出土遺物 1 (1/30・1/4)	56	第100図 堪穴住居17 (1/60)	92
第60図 土壙11出土遺物 2 (1/4・1/2)	57	第101図 堪穴住居17出土遺物 (1/4)	93
第61図 土壙12・13・土壙12出土遺物 (1/30・1/4)	58	第102図 堪穴住居18・19・出土遺物 (1/60・1/4)	94
第62図 土壙13出土遺物 (1/4)	59	第103図 堪穴住居20・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)	95
第63図 土壙14~16・出土遺物 (1/30・1/4)	60	第104図 堪穴住居21・出土遺物 (1/60・1/4)	95
第64図 土壙17・出土遺物 (1/30・1/4)	61	第105図 土壙31・出土遺物 (1/40・1/4)	96
第65図 土壙18・19・出土遺物 (1/30・1/4)	62	第106図 土壙32~34・土壙32出土遺物 (1/30・1/4)	97
第66図 土壙20・出土遺物 (1/30・1/4)	63	第107図 溝10~13・溝12出土遺物 (1/40・1/5・1/4)	98
第67図 土壙21~23・出土遺物 (1/40・1/30・1/4)	64	第108図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)	99
第68図 土壙24~29 (1/30)	65	第109図 土壙35・出土遺物 (1/60・1/4)	100
第69図 土壙27~29出土遺物 (1/4)	66	第110図 溝14・15・出土遺物 (1/40・1/4)	100
第70図 土壙30・出土遺物 (1/40・1/4)	66	第111図 遺構に伴わない遺物 1 (1/4)	101
第71図 溝1~3・出土遺物 (1/40・1/4)	67	第112図 遺構に伴わない遺物 2 (1/4)	102
第72図 溝3出土遺物 1 (1/4)	68	第113図 掘立柱建物 1・出土遺物 (1/60・1/4)	103
第73図 溝3出土遺物 2 (1/4・1/3)	69	第114図 掘立柱建物 2 (1/60)	104
第74図 溝4・出土遺物 (1/30・1/4)	70	第115図 掘立柱建物 3・出土遺物 (1/60・1/4)	104
第75図 溝5~9 (1/40)	70	第116図 掘立柱建物 4・出土遺物 (1/60・1/4)	105
第76図 溝9出土遺物 1 (1/4)	71	第117図 柱穴出土遺物 1 (1/4)	105
第77図 溝9出土遺物 2 (1/4)	72	第118図 柱穴出土遺物 2 (1/4・1/2)	106
第78図 溝9出土遺物 3 (1/4)	73	第119図 井戸・出土遺物 (1/40・1/4)	107
第79図 溝9・7出土遺物 4 (1/4)	74	第120図 土壙36~38・40 (1/40・1/30)	107
第80図 粘土塊・出土遺物 (1/30・1/4)	75	第121図 土壙39・41・42 (1/40・1/30)	108
第81図 土器溜まり出土遺物 (1/4・1/2)	76	第122図 土壙36・37・39・40・41出土遺物 (1/4・1/2)	108
第82図 遺構に伴わない遺物 1 (1/4)	76	第123図 土壙43・44・出土遺物 (1/30・1/4・1/2)	109
第83図 遺構に伴わない遺物 2 (1/4)	77	第124図 土壙墓1・2・出土遺物 (1/30・1/2)	
第84図 遺構に伴わない遺物 3 (1/4・1/2)	78		
第85図 堪穴住居9・出土遺物 (1/60・1/4)	79		
第86図 堪穴住居10・出土遺物 (1/60・1/4)	80		
第87図 堪穴住居11・出土遺物 (1/60・1/4)	81		
第88図 堪穴住居12・出土遺物 1 (1/60・1/4)	82		

.....	109	138
第125図 土壌墓3・4・出土遺物 (1/30・1/3・1/2)	110	第165図 壺穴住居4・出土遺物 (1/60・1/4)	139
第126図 溝16~19・出土遺物 (1/40・1/4)	111	第166図 壺穴住居5・出土遺物 (1/60・1/4)	140
第127図 畦畔 (1/40)	111	141
第128図 畦畔出土遺物 (1/4・1/2)	112	第167図 壺穴住居6・出土遺物 (1/60・1/4)	142
第129図 下がり・出土遺物1 (1/60・1/4)	112	142
第130図 下がり出土遺物2 (1/4)	113	第168図 壺穴住居7 (1/60)	142
第131図 遺構に伴わない遺物1 (1/4)	113	第169図 掘立柱建物1・出土遺物 (1/60・1/4)	142
第132図 遺構に伴わない遺物2 (1/4・1/2)	114	143
井手見延遺跡		第170図 土壌7 (1/30)	143
第133図 基盤層出土の縄文土器 (1/4)	115	第171図 溝2~4 (1/60)	143
第134図 調査区配置図 (1/3000)	115	第172図 溝4出土遺物1 (1/4)	144
第135図 遺構全体図1 (1/400)	116	第173図 溝4出土遺物2 (1/4)	145
第136図 遺構全体図2 (1/400)	117	第174図 溝4出土遺物3 (1/4)	146
第137図 壺穴住居1 (1/60)	118	第175図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)	147
第138図 壺穴住居1出土遺物 (1/4・1/2)	119	第176図 掘立柱建物2 (1/80)	149
第139図 壺穴住居2 (1/60)	119	第177図 土壌8・出土遺物 (1/60・1/4)	150
第140図 壺穴住居2出土遺物 (1/4・1/2)	120	第178図 土壌9 (1/60)	150
第141図 壺穴住居3 (1/60)	121	第179図 溝5~10・出土遺物 (1/40・1/4)	151
第142図 壺穴住居3出土遺物 (1/4・1/2)	122	第180図 遺構に伴わない遺物1 (1/4)	152
第143図 袋状土壌1・2 (1/30)	122	第181図 遺構に伴わない遺物2 (1/4)	153
第144図 袋状土壌2出土遺物 (1/4・1/2)	123	第182図 遺構に伴わない遺物3 (1/4)	154
第145図 袋状土壌3・4 (1/30)	123	第183図 遺構に伴わない遺物4 (1/4)	154
第146図 袋状土壌3・4出土遺物 (1/4)	124	第184図 遺構に伴わない遺物5 (1/4)	155
第147図 袋状土壌5・6 (1/30)	125	第185図 掘立柱建物3・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)	156
第148図 袋状土壌6出土遺物1 (1/4)	126	第186図 土壌10~12 (1/30)	157
第149図 袋状土壌6出土遺物2 (1/4)	127	第187図 土壌墓・出土遺物 (1/30・1/5)	158
第150図 袋状土壌7・出土遺物 (1/30・1/4)	128	第188図 溝池状遺構・出土遺物 (1/60・1/4)	158
第151図 袋状土壌8・出土遺物 (1/30・1/4)	128	159
第152図 袋状土壌9・出土遺物1 (1/30・1/4)	129	第189図 溝11~20 (1/60・1/40)	159
第153図 袋状土壌9出土遺物2 (1/4)	130	第190図 溝13出土遺物 (1/4)	159
第154図 袋状土壌10・11・出土遺物 (1/30・1/4)	131	第191図 低位部土層断面図 (1/60)	160
第155図 袋状土壌12・13・出土遺物 (1/30・1/4)	132	第192図 遺構に伴わない遺物1 (1/4)	161
第156図 袋状土壌14・15 (1/30)	133	第193図 遺構に伴わない遺物2 (1/3・1/2)	162
第157図 袋状土壌15出土遺物 (1/4・1/2)	133	井手天原遺跡	
第158図 土壌1・出土遺物 (1/30・1/4・1/2)	134	第194図 調査区配置図 (1/3000)	163
第159図 土壌2・出土遺物 (1/30・1/4・1/2)	135	第195図 遺構全体図 (1/400)	164
第160図 土壌3・4 (1/30)	136	第196図 土壌1・出土遺物 (1/30・1/4)	165
第161図 土壌5・6・出土遺物 (1/30・1/3)	136	第197図 土壌2~4 (1/30)	165
第162図 溝1・出土遺物 (1/4)	137	第198図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)	166
第163図 遺構に伴わない遺物1 (1/4)	137	第199図 壺穴住居1検出状況 (1/60)	168
第164図 遺構に伴わない遺物2 (1/4・1/2)		第200図 壺穴住居1 (1/60)	169
		第201図 壺穴住居1出土遺物 (1/4・1/2)	170
		第202図 壺穴住居2・出土遺物 (1/60・1/4)	171

第203図 堪穴住居3・4・出土遺物 (1/60・1/4)	172	第224図 溝3・4・出土遺物 (1/40・1/4) 188
.....		第225図 遺構に伴わない遺物 (1/4) 188
第204図 堪穴住居5 (1/60) 172		第226図 掘立柱建物2 (1/60) 189
第205図 堪穴住居5出土遺物 (1/4) 173		第227図 掘立柱建物3 (1/60) 190
第206図 堪穴住居6 (1/60) 174		第228図 掘立柱建物4 (1/60) 191
第207図 堪穴住居6出土遺物 (1/4) 175		第229図 掘立柱建物5 (1/60) 192
第208図 堪穴住居7・出土遺物1 (1/60・1/4)	176	第230図 掘立柱建物6 (1/60) 193
.....		第231図 掘立柱建物7 (1/80) 193
第209図 堪穴住居7出土遺物2 (1/4) 177		第232図 柱穴列1・2 (1/60) 194
第210図 堪穴住居7出土遺物3 (1/4) 178		第233図 掘立柱建物出土遺物 (1/4) 194
第211図 堪穴住居7出土遺物4 (1/4) 179		第234図 土壙10・11・出土遺物 (1/60・1/40・1/4) 195
第212図 堪穴住居7出土遺物5 (1/4) 180		第235図 土壙12~14 (1/30) 196
第213図 堪穴住居8・出土遺物 (1/60・1/4)	180	第236図 土壙墓・出土遺物 (1/30・1/4) 196
.....		第237図 潤池状遺構 (1/300・1/60) 197
第214図 堪穴住居9 (1/60) 181		第238図 潤池状遺構出土遺物 (1/4) 198
第215図 堪穴住居9a・b (1/80) 182		第239図 溝5・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)
第216図 堪穴住居9出土遺物 (1/4・1/2) 182	 198
第217図 土壙5・出土遺物 (1/30・1/4) 183		第240図 溝6・出土遺物 (1/60・1/3・1/2)
第218図 土壙6 (1/30) 184	 199
第219図 土壙7・出土遺物 (1/40・1/4) 184		第241図 溝7~20 (1/40) 200
第220図 土壙8・9 (1/40) 185		第242図 溝7~20出土遺物 (1/4・1/2) 201
第221図 溝1・2 (1/40) 185		第243図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2) 202
第222図 遺構に伴わない遺物 (1/4) 186		第244図 井手天原遺跡出土遺物 (1/4) 206
第223図 掘立柱建物1 (1/60) 187		

表 目 次

第1表 遺構の変遷 206 | 第2表 岡山県出土の回転台形土器一覧 206

図 版 目 次

岡谷大溝散布地

- 図版1 1. 近景 南から
2. T 6 西壁 東から
3. OT-1 東壁 西から
4. OT-3 東壁 東から

- 図版2 1. OT-5 西壁 東から
2. OT-8 西壁 東から

三須今溝遺跡

- 図版3 1. 溝1 西から
2. 溝3 護岸 北から
3. 溝4 南西から

- 図版4 1. 溝8 南西から
2. 溝10 西から

3. 溝11 北から

- 図版5 1. 溝11 南から

2. 溝11護岸 北東から

3. T 4 西壁 東から

4. T 1 西壁 東から

- 図版6 1. 溝1・溝2・溝11出土遺物

三須河原遺跡

- 図版7 1. 遺構全景 (13区) 南から

2. 溝16・溝10・溝9・溝8

(手前から) 北から

- 図版8 1. 堪穴住居3 北から

2. 堪穴住居4 南東から

3. 柱穴列 北から

- 図版9 堪穴住居3・4出土遺物

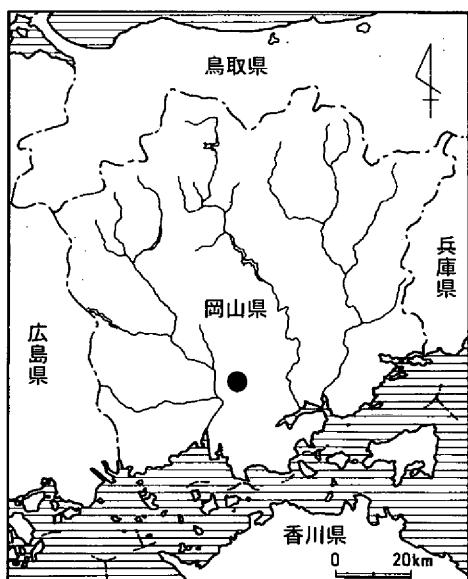
- 図版10 堪穴住居4・溝12出土遺物

三須畠田遺跡

- 図版11 1. 壊穴住居6 上層床面 西から
 2. 壊穴住居7 北から
 3. 壊穴住居8 南から
- 図版12 1. 土壙7 南東から
 2. 土壙8 南西から
 3. 粘土塊 北西から
- 図版13 1. 壊穴住居10 西から
 2. 壊穴住居12 南から
 3. 壊穴住居13 東から
- 図版14 1. 壊穴住居15 南から
 2. 壊穴住居18 鉄滓出土状況 西から
 3. 壊穴住居20 南西から
- 図版15 壊穴住居2・4・6・8・土壙7出土遺物
- 図版16 土壙7・13出土遺物
- 図版17 土壙8・溝9出土遺物
- 図版18 遺構に伴わない遺物、壊穴住居10出土遺物
- 図版19 壊穴住居12・13出土遺物
- 図版20 壊穴住居13・14出土遺物
- 図版21 壊穴住居15・土壙31・土壙墓3・
 柱穴出土遺物、遺構に伴わない遺物
- 井手見延遺跡**
- 図版22 1. 遺構全景(2区) 北から
 2. 壊穴住居1 北から
 3. 壊穴住居2 南西から
- 図版23 1. 袋状土壙4 南から
 2. 袋状土壙6 北東から
 3. 袋状土壙15 西から
- 図版24 1. 壊穴住居5 南から

2. 壊穴住居5カマド 南から

3. 壊穴住居6 南から
- 図版25 1. 掘立柱建物2 南から
 2. 土壙8出土遺物 南から
 3. 土壙墓 南東から
- 図版26 壊穴住居1・袋状土壙2・4・6出土遺物
- 図版27 袋状土壙9・土壙2出土遺物
- 図版28 土壙2・壊穴住居4・溝4出土遺物、
 遺構に伴わない遺物
- 図版29 溝4・土壙8・溝5出土遺物、
 遺構に伴わない遺物
- 井手天原遺跡**
- 図版30 1. 壊穴住居1検出状況 北から
 2. 壊穴住居1 北から
 3. 壊穴住居2 南から
- 図版31 1. 壊穴住居6 南から
 2. 壊穴住居7 南から
 3. 壊穴住居9 南から
- 図版32 1. 中世遺構全景(16区) 南から
 2. 中世遺構全景(15区) 北から
 3. 中世遺構全景(29区) 南から
- 図版33 1. 土壙墓 南から
 2. 溝8 南から
 3. 溝池状遺構出土獸骨 南から
- 図版34 壊穴住居1・2・5出土遺物、
 遺構に伴わない遺物
- 図版35 壊穴住居6・7出土遺物
- 図版36 壊穴住居9・土壙7・溝4~20・
 土壙墓・柱穴出土遺物、遺構に伴わない遺物



第1図 調査位置図 (1/200万)

第1章 序 言

第1節 調査の経緯と経過

(1) 調査の経緯

岡山県は、山陽自動車道の開通による周辺アクセス道路の交通量の増加や交通渋滞の解消を目的とし、倉敷・総社間の一般国道429号線の改良工事を計画した。計画路線は、現道を拡幅するほか一部バイパスもあり、丘陵部の削平と水田部への新設が予定されていた。

路線内の埋蔵文化財の取り扱いについては、平成元年度に岡山県教育庁文化課に事前協議がなされ、現地分布調査を一部実施した。平成3年度は予定路線沿線の民間開発（ガソリンスタンド建設）に伴う発掘調査にあわせ、国道拡張部及び国道側溝部の調査を総社市教育委員会に依頼した。また、用地買収が終了した部分から一部工事が開始され、一部の新発見遺跡（現在の三須河原・美濃田遺跡部分）について立会調査を実施した。

そして、平成4年10月26日付で、岡山県倉敷地方振興局長から文化財保護法第57条の3に基づく協議書が岡山県教育委員会に提出され、本格協議に入った。この時点では、現地踏査等の結果では古墳1、集落跡3か所の存在が判明しており、両者で保存について協議を重ねたが、周辺部の状況等から現状保存が困難であるとの結論に達し、岡山県教育委員会は平成4年10月30日付で倉敷地方振興局長に対して、遺跡部分については工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

以上の協議経過に基づき、岡山県教育委員会は、都窪郡山手村と総社市分の関係遺跡の用地買収等の条件整備の整った部分から、平成5年1月になって発掘調査を開始した。そして、その後も用地買収の遅れ等から部分的な発掘調査の実施を余儀なくされたが、平成11年1月末をもって終了した。（物部）



- 1. 前山遺跡
- 2. 鎌戸原遺跡
- 3. 岡谷大溝散布地
- 4. 三須今溝遺跡
- 5. 三須河原遺跡
- 6. 三須畠田遺跡
- 7. 井手見延遺跡
- 8. 井手天原遺跡

第2図 路線図（1/25000）

(2) 調査の経過

第1次調査

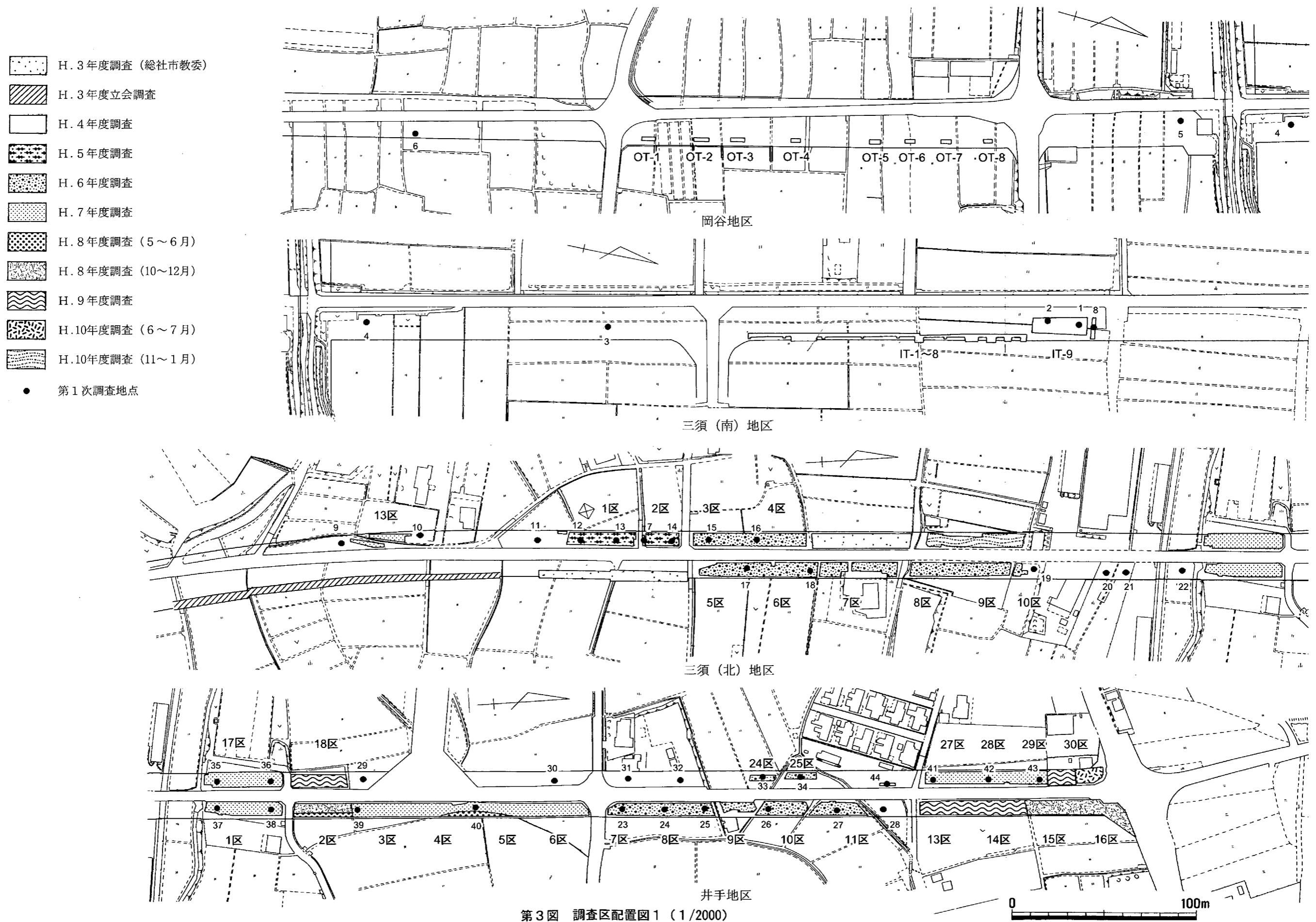
遺跡の広がりを確認することを目的とし、第1次調査を行った。都窪郡山手村前山遺跡から総社市井手天原遺跡までの約3kmの間に合計58地点でトレンチを設定した。そのうち、今回報告分は44地点で、1×3m、2×2mの広さを中心とする。調査は全面調査と並行して、農閑期に実施した。期間は岡谷大溝散布地・三須今溝遺跡関連(T1~6、8)が平成4年度1~2月、三須河原・畠田遺跡関連(T9~22)が平成5年度12月、1月、3月、井手見延・天原遺跡関連(T23~44)が平成6年度10月、12月、2月、平成7年度4月、平成8年度10月にそれぞれ1~3日間を要した。調査後、必要な場合は石灰と機械で固めながら埋め戻し耕作土をのせた。

調査の結果、6つの微高地と5つの低位部、上幅約100mの旧河道が確認された(第5図)。基本的に遺構のない低位部および旧河道部、そして微高地上であっても遺構・遺物が確認されなかつた地点は全面調査を行わない方針をとったが、低位部でも遺構が検出された場合、または遺物が多く見られる場合は、トレンチの拡張あるいは全面調査を実施した。

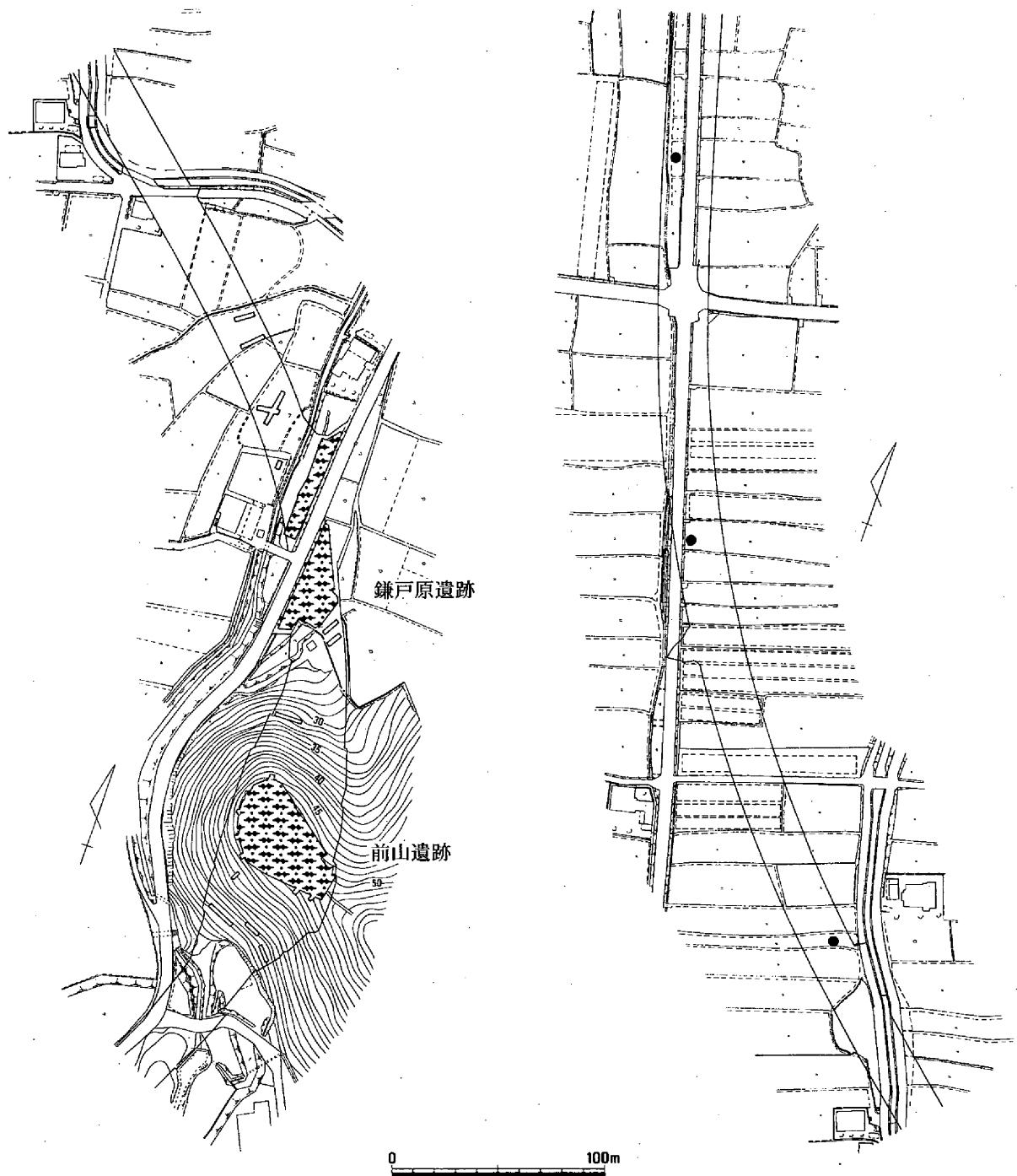
微高地の基盤層は下から礫層・粗砂層・褐色弱粘質微砂層とかさなり、褐色弱粘質微砂層上面で遺構が検出される。礫層・粗砂層が表土直下まで上がっている場所もある。低位部の基盤層(無遺物層)上面と微高地部遺構検出面との比高差は0.4~1.0mである。井手見延・井手天原量遺跡を隔てる低位部(T23~27・33・34)の基盤層上面では古代の鋤痕を検出した。旧河道部(T19~22)の南岸は緩やかに下がり、中世の水田層が確認できる。T20~22の表土下1m以上は粗砂が堆積し、その粗砂に混じて粒状になった早島式土器のかけらが多数あることから、旧河道の深さは不明であるが、少なくとも中世の段階でほぼ現状程度に埋まっていたと考えられる。

全面調査

全面調査は道路工事を急ぐ区間から、岡谷大溝散布地・三須今溝遺跡、鎌戸原・前山遺跡、三須河原・三須畠田遺跡、井手見延・井手天原遺跡の順に行った。平成4年度は1月から3月まで調査員4名1班体制で岡谷大溝散布地・三須今溝遺跡の調査を行った。岡谷大溝散布地では、旧山陽道がこの付近を通っていたと考えられ、2×8m前後のトレンチを8本設定した。三須今溝遺跡ではT2で護岸と考えられる無数の杭が密集した状況で検出されたことから、広く拡張したIT-9区を設けた。平成5年度4月~3月は調査員2名(1月から3名)1班体制で鎌戸原・前山・三須河原遺跡の調査を行った。この間9~10月の2ヶ月間他事業との調整により調査を一時中断した。平成6年度4月~7年度9月まで調査員3名1班体制で三須畠田・井手見延・井手天原遺跡の調査を実施した。第1次調査の結果をうけ、井手見延遺跡のT29では微高地上ではあるが遺構・遺物が全く確認されなかつたことから全面調査を行わなかった。また、T23~27は低位部であるが微高地に近く、遺物も多量に出土したことから、全面調査またはトレンチの拡張を行った。T30~32は低位部であり、遺物も僅かであったので第1次調査をもって調査終了とみなしした。T28・44では微高地上であるが基盤の粗砂層が表土直下までせり上がりており、遺構・遺物とも確認されず同様に第1次調査をもって終了とした。その後は用地買収等の条件整備が間にあわず、調査を一旦中止し、3月まで鎌戸原・前山遺跡の報告書の作成に入った。以後、条件整備の進捗に合わせた断続的な調査となる。平成8年度5~6月に調査員2名1班体制で井手見延遺跡を、同年度10~12月に調査員3名1班体制で井手見延・井手天原遺跡を調査した。その後1月から3月まで調査員1名が報告書の作成を行う。平成9年



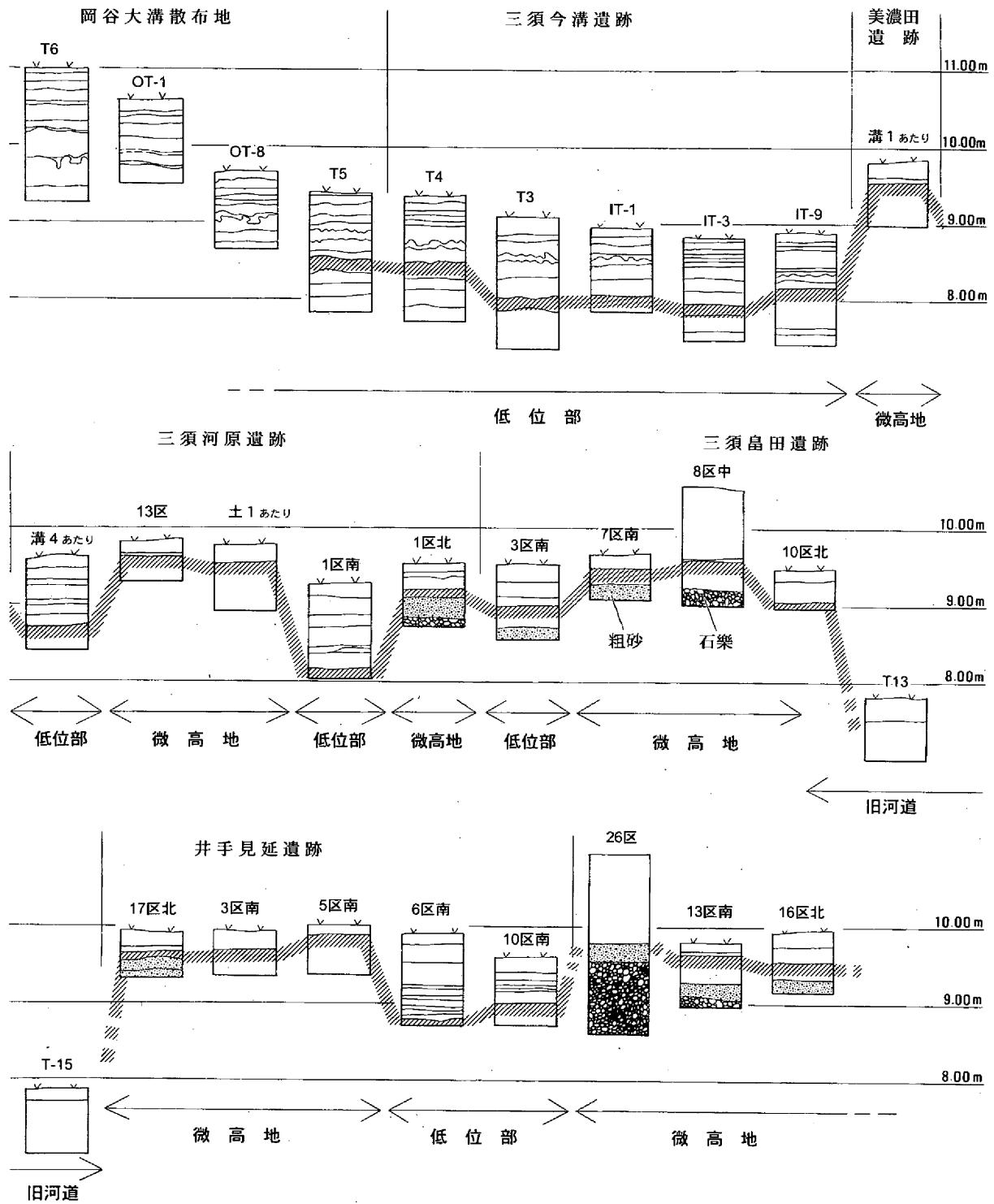
第3図 調査区配置図1 (1/2000)



第4図 調査区配置図2-既報告分（1/3000）

度4～6月に調査員3名1班体制で井手見延・井手天原遺跡を、平成10年度6～7月に調査員2名1班で井手天原遺跡、11～1月まで調査員3名1班で三須畠田遺跡を調査し、これをもって国道429号線改良に伴う発掘調査を終了した。

調査期間を通して倉敷地方振興局、文化課、岡山県古代吉備文化財センターの三者で、時に総社市や道路工事請負業者を交え、条件整備の確認、調査の進捗・方針、排土用の借地依頼などを話し合う現地協議を再三開いた。また、平成6年度1月に埋蔵文化財専門委員会を開催し、指導・教示を得た。調査にあたっては、非常に交通量の多い道路の両側であるため、歩行時には注意をはらった。また、ガードレール等が無い部分については夜間に車が調査区に飛び込まぬよう電柱から100Vを下ろし、



第5図 土層高低図 (1/80)

※斜線は基盤層上面

チューブライトを設置した。雨水や地下水の排水はコンパネで水槽を作り、オーバーフローさせた。調査区は水田と車道にはさまれた部分が多く、シート等が飛ばぬよう台風時には特に気を付けた。また、調査区が民家の出入り口、商店の出入り口・駐車場になっている場所あるいは排土置き場の借地が困難な場所は狭い範囲を3~4分割して進入道・駐車場を確保しながらの調査となった。住宅への入り口が限定される場所は進入道も限定され、どうしても調査できない範囲が生じた。表土剥ぎは主に重機を用い、調査終了後は、道路工事と連動する箇所以外は重機・人力にて埋め戻した。(物部)

調査体制**平成4年(1992)年度**

岡山県教育委員会

教育長 竹内 康夫

岡山県教育庁

教育次長 森崎岩之助

文化課

課 長 渡辺 淳平

課長補佐(埋蔵文化財係長) 柳瀬 昭彦

主 査 時長 勇

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 横山 常実

次 長 河本 清

文化財保護参事 葛原 克人

<総務課>

総務課長 北原 求

課長補佐(総務係長) 小西 親男

主 査 石井 茂

主 査 石井 善晴

<調査第一課>

課 長 葛原 克人(調査担当)

課長補佐(第二係長) 岡田 博

文化財保護主事 三上 修二(調査担当)

主 事 竹原 伸之(調査担当)

主 事 長門 修(調査担当)

平成5年(1993)年度

岡山県教育委員会

教育長 森崎岩之助

岡山県教育庁

教育次長 岸本 憲二

文化課

課 長 渡辺 淳平

課長代理 松井 新一

課長補佐(埋蔵文化財係長) 高畠 知功

主 査 時長 勇

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 横山 常実

次 長 葛原 克人

<総務課>

総務課長 北原 求

課長補佐(総務係長) 小西 親男

主 査 石井 茂

主 査 石井 善晴

主 任 三宅 秀吉

<調査第一課>

課 長 正岡 瞳夫(調査担当)

課長補佐(第二係長) 山崎 康平

文化財保護主任

主 事

楳野 芳典(調査担当)

物部 茂樹(調査担当)

平成6年(1994)年度

岡山県教育委員会

教育長

森崎岩之助

岡山県教育庁

教育次長 岸本 憲二

文化課

課 長 大場 淳

課長代理 松井 新一

課長補佐(埋蔵文化財係長) 高畠 知功

主 査 若林 一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 河本 清

次 長 葛原 克人

<総務課>

総務課長 丸尾 洋幸

課長補佐(総務係長) 杉田 卓美

主 査 石井 善晴

主 任 三宅 秀吉

<調査第一課>

課 長 正岡 瞳夫(調査担当)

課長補佐(第三係長) 岡本 寛久

文化財保護主任 逸見 優一(調査担当)

主 事 物部 茂樹(調査担当)

平成7年(1995)年度

岡山県教育委員会

教育長 森崎岩之助

岡山県教育庁

教育次長 黒瀬 定生

文化課

課 長 大場 淳

課長代理 横田 俊二

参 事 葛原 克人

課長補佐(埋蔵文化財係長) 高畠 知功

主 査 若林 一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 河本 清

次 長 高塚 恵明

次 長(文化課本務) 葛原 克人

<総務課>

総務課長 丸尾 洋幸

課長補佐(総務係長) 井戸 丈二

総務主幹 守安 邦彦

主 事 石井 善晴

第1章 序 言

主 任	木山 伸一
〈調査第一課〉	
課 長	正岡 瞳夫(調査担当)
課長補佐(第一係長)	松本 和男
文化財保護主任	岡田 達也(調査担当)
主 事	物部 茂樹(調査担当)

平成8年(1996)年度

岡山県教育委員会

教育長 森崎岩之助

岡山県教育庁

教育次長 黒瀬 定生

文化課

課 長 大場 淳

課長代理 松井 英治

参 事 葛原 克人

課長補佐(埋蔵文化財係長) 平井 勝

主 査 若林 一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 河本 清

次 長 高塚 恵明

次 長(文化課本務) 葛原 克人

〈総務課〉

総務課長 丸尾 洋幸

課長補佐(総務係長) 井戸 丈二

総務主幹 守安 邦彦

主 査 木山 伸一

〈調査第一課〉

課 長 高畠 知功

課長補佐(第一係長) 江見 正己

文化財保護主任 大橋 雅也(調査担当)

主 事 金田 善敬(調査担当)

〈調査第三課〉

課 長 柳瀬 昭彦

課長補佐(第三係長) 岡田 博

文化財保護主任 高田恭一郎(調査担当)

主 事 尾上 元規(調査担当)

主 事 小嶋 善邦(調査担当)

平成9年(1997)年度

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 平岩 武

文化課

課 長 高田 朋香

課長代理 白井 洋輔

課長代理	西山 猛
参 事	葛原 克人
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井 勝
主 査	三宅 美博

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 細木 克之

次 長 正岡 隆夫

〈総務課〉

総務課長 小倉 昇

課長補佐(総務係長) 井戸 丈二

主 査 木山 伸一

〈調査第二課〉

課 長 伊藤 晃

課長補佐(第二係長) 山磨 康平(調査担当)

文化財保護主任 高田恭一郎(調査担当)

主 事 重根 弘和(調査担当)

平成10年(1998)年度

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 平岩 武

文化課

課 長 高田 朋香

課長代理 西山 猛

参 事 正岡 隆夫

課長補佐(埋蔵文化財係長) 松本 和男

主 査 三宅 美博

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 葛原 克人

次 長 大村 俊臣

〈総務課〉

総務課長 小倉 昇

課長補佐(総務係長) 安西 正則

主 査 山本 恭輔

〈調査第一課〉

課 長 高畠 知功

課長補佐(第一係長) 中野 雅美

文化財保護主任 岡本 泰典(調査担当)

主 事 重根 弘和(調査担当)

〈調査第二課〉

課 長 伊藤 晃

課長補佐(第二係長) 下澤 公明

文化財保護主幹 山磨 康平

文化財保護主査 光永 真一(調査担当)

文化財保護主事 金田善敬(調査担当)

文化財保護主事 蟹原啓介(調査担当)

調査日誌

平成4年度

1月25日 岡谷大溝散布地調査開始
 1月27日 三須今溝遺跡調査開始
 1月28日 岡谷大溝散布地調査終了
 3月31日 三須今溝遺跡調査終了

平成5年度

4月1日 鎌戸原遺跡調査開始
 6月16日 鎌戸原遺跡調査終了、前山遺跡調査開始
 9月1日～10月31日 他事業との調整により前山遺跡調査
 一時中断
 1月13日 埋蔵文化財専門委員会開催
 1月17日 三須河原遺跡調査開始
 2月15日 前山遺跡調査終了
 3月31日 三須河原1・2区調査終了

平成6年度

4月1日 三須畠田遺跡調査開始
 11月7日 井手見延遺跡調査開始
 12月22日 三須畠田3～10区調査終了
 3月31日 井手見延7～11、19～25区調査終了

平成7年度

4月1日 井手見延遺跡1区から調査開始
 4月21日 三須河原13区調査開始

5月12日 三須河原遺跡調査終了
 5月17日 井手天原遺跡27区から調査開始
 8月22日 井手天原27・28・29区調査終了
 9月29日 井手見延1・17・3・4西半・5区西半
 ・6区調査終了

平成8年度

5月13日 井手見延2区東側から調査開始
 6月13日 井手見延2・4・5区東側調査終了
 10月1日 井手見延2区西側調査開始
 11月5日 井手見延2区西側調査終了
 11月25日 井手天原16区から調査開始
 12月24日 井手天原15・16区調査終了

平成9年度

4月4日 井手天原13・14区から調査開始
 6月5日 井手見延18区調査開始
 6月25日 井手見延18区調査終了
 6月27日 井手天原13・14・30(南半)調査終了

平成10年度

6月4日 井手天原30区(北半)調査開始
 7月16日 井手天原遺跡調査終了
 11月4日 三須畠田11・12区調査開始
 1月26日 三須畠田遺跡調査終了

第2節 報告書の作成

報告書の作成は平成8年度1～3月（調査員1名）、平成11年度4～3月（調査員前半2名後半1名）で行った。

7年間にわたる調査の結果、微高地や低位部の状況が把握され、また、総社市教育委員会による圃場整備に伴う発掘調査等が周辺で進展し、それぞれの微高地の特色も明らかになりつつある。そこで、総社市教育委員会と協議をし、遺跡をくくり直し、それに従って報告書を作成した。以下詳細を記す。南から、調査時の名称「大溝・今溝遺跡」を「岡谷大溝散布地」と「三須今溝遺跡」に分けた。両者間の距離と緩斜面と低位部という立地の違いを考慮した。また、岡谷大溝は遺構が確認されず散布地とした。その北、調査時に「三須畠田遺跡1～13区」とした区間は、小字「河原」の北側小字境（矢印1）がちょうど低位部に沿っており、ここに境を設定し、北側を「三須畠田遺跡」（3～12区）、南側を「三須河原遺跡」（1・2・13区）とした。13区は正確には低位部をはさんで中須賀遺跡が所在する別の微高地であるが、総社市教委の調査で、「郡殿」の墨書須恵器や棟方向と同じくする奈良時代の掘立柱建物群など重要な発見が相次いだ三須河原遺跡と一連の総柱建物群が検出されており、三須河原遺跡に含めた。その南は低位部をはさみ美濃田遺跡～天満遺跡が所在する。三須畠田遺跡の北には「三須」と「井手」の大字境（矢印2）になっている旧河道がある。この大字境から国道180号までを調査時は「金井戸見延遺跡」と呼称した。この区間も中央部に低位部が所在し、小字「天原」

報告書作成の体制

平成8年(1996)年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
-----	-------

岡山県教育庁

教育次長	黒瀬 定生
------	-------

文化課

課長	大場 淳
----	------

課長代理	松井 英治
------	-------

参考事	葛原 克人
-----	-------

課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井 勝
---------------	------

主査	若林 一憲
----	-------

岡山県古代吉備文化財センター

所長	河本 清
----	------

次長	高塚 恵明
----	-------

次長(文化課本務)	葛原 克人
-----------	-------

《総務課》

総務課長	丸尾 洋幸
------	-------

課長補佐(総務係長)	井戸 丈二
------------	-------

総務主幹	守安 邦彦
------	-------

主査	木山 伸一
----	-------

《調査第三課》

課長	柳瀬 昭彦
----	-------

課長補佐(第三係長)	岡田 博
------------	------

主事	小嶋 善邦(整理担当)
----	-------------

平成11年(1999)年度

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬 定生
-----	-------

岡山県教育庁

教育次長	宮野 正司
------	-------

文化課

課長	松井 英治
----	-------

課長代理	佐々部和生
------	-------

参考事	正岡 瞳夫
-----	-------

課長補佐(埋蔵文化財係長)	松本 和男
---------------	-------

主任	奥山 修司
----	-------

岡山県古代吉備文化財センター

所長	葛原 克人
----	-------

次長	大村 俊臣
----	-------

《総務課》

総務課長	小倉 昇
------	------

課長補佐(総務係長)	安西 正則
------------	-------

参考事	山本 恭輔
-----	-------

《調査第一課》

課長	高畠 知功
----	-------

課長補佐(第二係長)	下澤 公明
------------	-------

文化財保護主任	亀山 行雄(整理担当)
---------	-------------

文化財保護主事	物部 茂樹(整理担当)
---------	-------------

の南境（矢印3）をもって北を「井手天原遺跡」、南を「井手見延遺跡」とする。井手天原遺跡は国道180号を越えて伸びることが確認されており、また、すぐ東の金井戸天神遺跡と同一微高地上に立地する可能性がある。また、井手見延遺跡は小字「西鴻崎」「東鴻崎」に所在する金井戸鴻崎遺跡と同一微高地上に立地し、井手見延遺跡低位部出土の遺物は金井戸鴻崎遺跡との関連が強い。（物部）



第6図 調査区周辺地形図（1/10000）

第3節 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

岡山県の南西部に位置する総社平野は、総社市東部から山手村・清音村・岡山市の西部にまたがっている。北に面する経山(372m)から鬼城山(403m)にかけての山塊は吉備高原の南縁にあたり、平野に面した山容は比較的けわしい。また、南に連なる福山(302m)から仕手倉山(223m)にかけての山塊は、なだらかな南面に比して北面は急峻な傾斜をもち非対称な山容をみせる。これらの山塊は白亜紀の花崗岩からなるが、軽部山辺りでは古生代の堆積層が見られる。また、福山と仕手倉山の間には南北に走る断層があり、狭長な谷部を形成している。現在国道429号が走るこの谷は、総社と倉敷を結ぶ交通路として古くから利用されており、その沿線には多くの遺跡が点在する。

この国道429号が南北に縦断する総社平野は、古高梁川の東分流によって形成されたものである。この河道は、井尻野辺りで分岐して東流し、古足守川と合し板倉付近で南に向きを変え、「吉備の穴海」と呼ばれた内海へと注いでいたものと想定されている。平家物語や太平記に見える板倉川がこれにあたり、現在の前川はその一部と推定される。この河道は次第に流路を変えながら幾重にも分岐し、さながら網の目のような痕跡を大地に刻み込むとともに、その流域には大小の自然堤防を発達させている。縄文時代以来の集落はこうした自然堤防上に立地しており、その傾向は現代の伝統的集落においても踏襲されている。

また、自然堤防の周囲に広がる低位部は、河道跡などをを利用して水路が巡らされもっぱら水田として利用してきた。しかし、近年では埋め立てによって工場の進出や宅地化が顕著となってきている。

一方、南北の山裾にはなだらかな低丘陵が広がり、一部では扇状地が発達している。これらの地帶は現在、水田や畠地として利用されているが、かつては居住の場として、あるいは数多くの古墳群に示されるように墳墓の地として利用してきた。

(2) 歴史的環境

この地域における人類の足跡は旧石器時代に溯る。総社平野を取りまく丘陵上では旧石器が点々と採集されており、ここに生活の場を求めた人々がいたことを物語っている。平野部の遺跡は、長良山遺跡や真壁遺跡など縄文時代早期から見られるが、本格的な進出が始まるのは後期以降のことであり、井手見延遺跡においても晩期の土器が数点出土している。こうした立地変化の背景には南溝手遺跡の粉痕土器が示唆するような生業の変化があったものと思われる。

弥生時代前期～中期中葉の遺跡は南溝手遺跡のほか山津田遺跡・鎌戸原遺跡などさほど多くはないが、中期後半になると遺跡数は増加し、三須畠田遺跡もこの頃に集落の形成が始まっている。中期後半には平地式の建物が多く見られるようであるが、後期になると大形の竪穴住居が主体となり貯蔵穴が増加する傾向にある。総社平野では三須で銅鐸の出土が伝えられるものの、足守川流域に比べれば青銅器の出土は少なく、他地域との活発な交流を窺わせるような遺物も乏しい。しかし、後期に入ると集落規模が拡大するとともに、丘陵上に前山遺跡や鋳物師谷遺跡・岩屋山遺跡といった集団墓が営まれるようになり、やがて宮山遺跡のような前方後円形の墳丘墓が出現する。

古墳時代前期には天望山古墳(約55m)や三笠山古墳(約70m)といった前方後円墳が築かれるが、足守川流域のように100mを越えるような古墳は見られない。しかし、中期にはいると加茂造山古墳(350m)に続いて三須作山古墳(286m)、宿寺山古墳(114m)といった大規模な前方後円墳が造営さ

れる。また、周辺の丘陵部では後期にかけて数百基の古墳が築かれるが、その中には堅穴系横口式石室と呼ばれる初期の横穴式石室を導入するものもあり、この地域の特色をなしている。やがて山陽道でこの時期最大の前方後円墳(約100m)であるこうもり塚古墳が築かれるが、続く江崎古墳(45m)を最後に前方後円墳は姿を消す。ところで、この地域では津寺一軒屋遺跡の鍛冶炉や隨庵古墳(約40m)の副葬品に示されるように早くから鉄器生産が行われているが、後期には鉄鉱石を原料とする製鉄が千引かなくろ谷遺跡などで始まり、窪木薬師遺跡のような鍛冶専業集落も現れる。また、奥ヶ谷窯跡では須恵器の生産がいち早く行われており、末ノ奥窯跡で生産された飛鳥瓦は奈良県平吉遺跡にも運ばれていることから中央政権(蘇我氏)とのかかわりの深い地域であったことが指摘されている。

律令制下において、この地域は窪屋郡美賀郷と賀陽郡八田部郷に比定され、その境は三須畠田遺跡と井手見延遺跡の間を東西に走る河道にあるものと想定されている。古代山陽道は、津峴駅に比定される矢部遺跡を経て備中国分寺・国分尼寺の南を西に走るものと推定されているが、「郡殿」の墨書土器などを出土した三須河原遺跡を窪屋郡衙に擬するならば、総社宮周辺に想定されている備中国衙、あるいは柏寺廃寺の辺りに存在されるとする賀夜郡衙へ向けて北上する古道がこの周辺を通過していたかもしれない。平安時代には、福山山塊に福山寺や朝原寺・広谷寺などの山上寺院が建立されている。なかでも藤原成親出家の地として平家物語に表れる朝原寺(安養寺)は、応安2年銘の瓦経が出土したことで知られる。

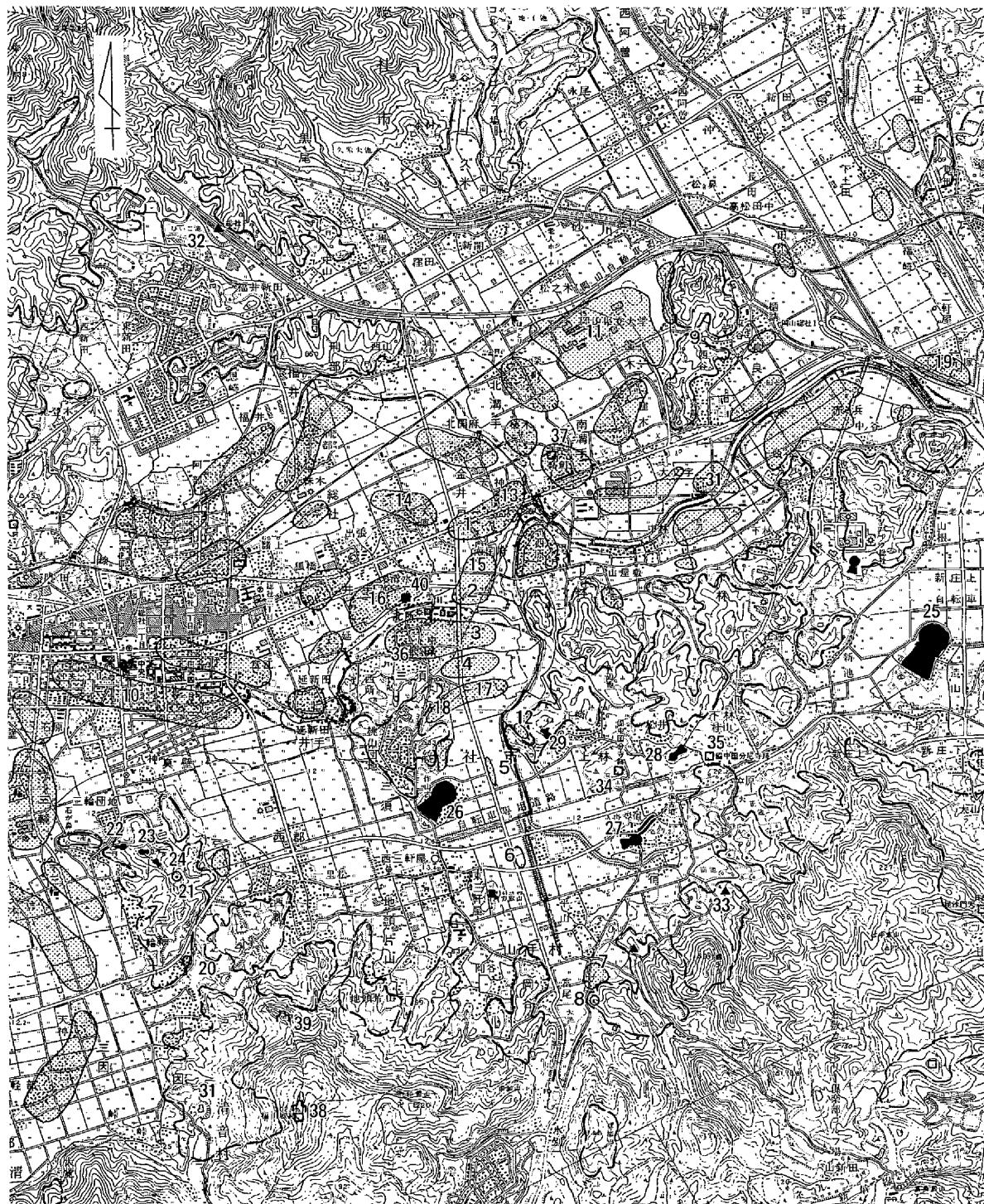
鎌倉時代には東大寺復興の料所となった備前を拠点とする重源の活動がこの地において伝えられている。南北朝時代には福山城をめぐる攻防が繰り広げられ、福山寺も兵火にかかるて焼失している。やがて備中は細川氏の領国となり、この地域は幸山城に拠る守護代石川氏の支配下におかれた。このころには、守護所のおかれれた松山への往来が整備され、総社宮の存在もあいまって八田部村界隈は賑わいを増していくものと推測される。応仁の乱後、細川氏の支配が弱ると、尼子や毛利、織田氏の進攻を招き、庄氏や三村、瀬屋、薬師寺、中島、生石氏といった国人を巻き込んだいわゆる備中兵乱が勃発する。しかし、高松城をめぐる攻防が織田氏優位のうちに終わると、これに与した宇喜多氏の支配するところとなる。関ヶ原の合戦後、宇喜多氏に代わって三須・井手には蒔田氏が、岡谷には早水氏(後に池田氏)が入封する。宝暦年間に井手に開かれた蒔田氏の陣屋は火災を被った後浅尾に移されるが、幕末の浅尾騒動に際して灰燼に帰している。

明治に入り、井手村は総社村に合併され、昭和29年には三須村をも併せて総社市となる。また、岡谷村は明治22年に山手村に合併され今に至っている。現在、三須・岡谷地区は吉備路風土記の丘県立自然公園に指定され、休日ともなれば県内外から多くの観光客を迎えていている。一方、井手地区は市街地整備事業によって宅地化が進み、その景観を一変させた。今回の国道429号の拡幅整備によって、この地域の景観はさらなる変貌を遂げつつある。

(亀山)

<主要参考文献>

- 『岡山県通史』岡山県、1930
- 『岡山県史1~30』岡山県、1981~1991
- 『総社市史』総社市、1987~1998
- 『総社市埋蔵文化財調査報告書1~15』総社市教育委員会、1984~1999
- 『総社市埋蔵文化財調査年報1~9』総社市教育委員会、1991~1999
- 『岡山県歴史の道調査報告書1・9』岡山県教育委員会、1992~1994
- 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47・65・100・115』岡山県教育委員会、1982~1987・1995~1997



- | 集落 | 古墳群 | 弥生後期集団墓 | 寺院跡 | 旧河道 |
|------------|-------------|------------|-------------|------------|
| 1. 井手天原遺跡 | 9. 長良山遺跡 | 17. 美濃田遺跡 | 25. 造山古墳 | 33. 末の奥窯跡 |
| 2. 井手見延遺跡 | 10. 真壁遺跡 | 18. 天満遺跡 | 26. 作山古墳 | 34. 備中國分寺 |
| 3. 三須畠田遺跡 | 11. 窪木南溝手遺跡 | 19. 高塚遺跡 | 27. 宿寺山古墳 | 36. 備中國分尼寺 |
| 4. 三須河原遺跡 | 12. 山津田遺跡 | 20. 鎌物師谷遺跡 | 28. こうもり塚古墳 | 36. 三須廃寺 |
| 5. 三須今溝遺跡 | 13. 金井戸天神遺跡 | 21. 岩屋遺跡 | 29. 江崎古墳 | 37. 栢寺廃寺 |
| 6. 岡谷大溝散布地 | 14. 金井戸新田遺跡 | 22. 宮山遺跡 | 30. 緑山古墳群 | 38. 福山城跡 |
| 7. 鎌戸原遺跡 | 15. 金井戸鴻崎遺跡 | 23. 天望山古墳 | 31. 窪木薬師遺跡 | 39. 幸山城跡 |
| 8. 前山遺跡 | 16. 井手村後遺跡 | 24. 三笠山古墳 | 32. 奥ヶ谷窯跡 | 40. 浅尾藩陣屋跡 |

第7図 周辺遺跡分布図 (1/40000)

第2章 岡谷大溝散布地・三須今溝遺跡

第1節 岡谷大溝散布地の調査の概要

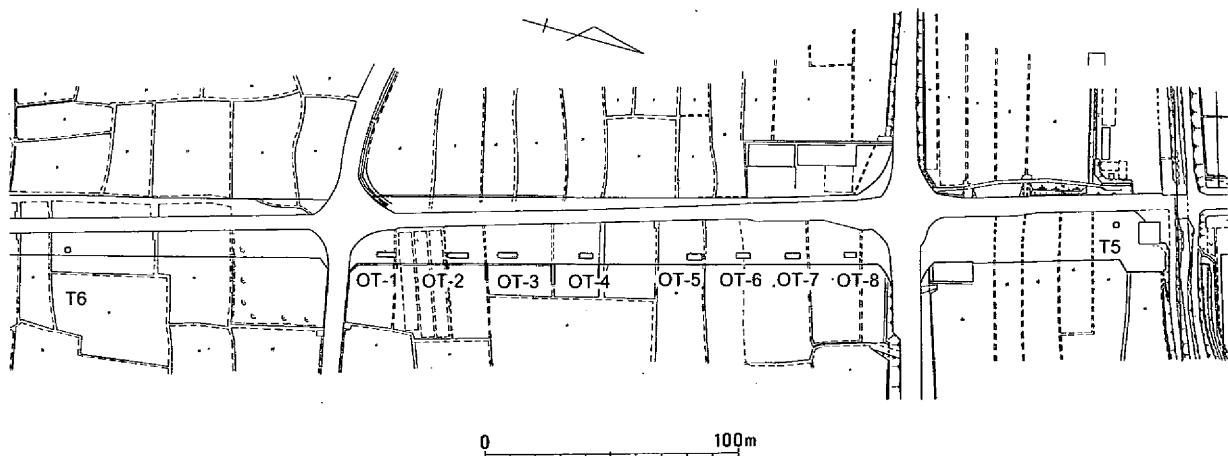
岡谷大溝散布地は都窪郡山手村岡谷字大溝に所在し、北緯 $34^{\circ}39'30''$ に位置する。天平期の旧山陽道と推測されている現在の吉備路自転車道と、その南約300mにある江戸期の旧山陽道とされる現在の県道清音真金線の間を中心にして、トレンチによる調査を行った。その結果、少量の遺物が出土したもののが確認されなかったので、散布地として取り扱うこととした。

通称「水別れ峠」から北に向けて緩斜面が広がっている。峠付近の谷水を集めた貯水池「大池」に発した「大溝川」が緩斜面のほぼ中央を北流し、三須今溝遺跡の所在する低湿地に至り、やがて前川に合流する。調査区はこの大溝川の西約100mにあり、このあたりの大溝川は天井川と化している。

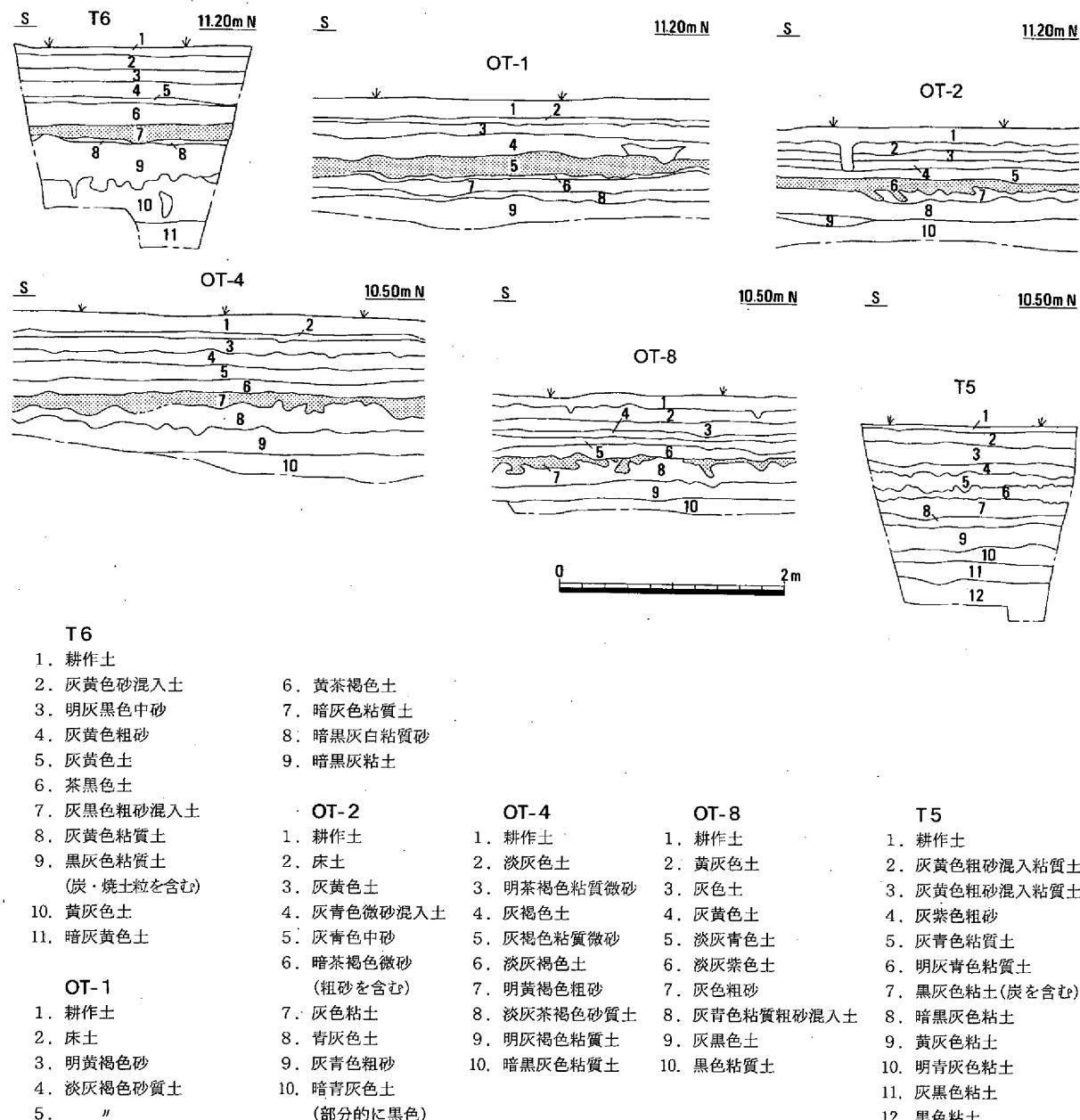
T 6 の現在の水田面の標高は11.05m、T 5 では9.45mで、両者の比高差は1.60mある。現水田耕作土の下は黄灰色を呈する砂質土層であるが、これはおそらくは近世以降の水田層と考えられる。その下層には、色調にやや違いのある粗砂を多く含む土層と粗砂層が、T 6 からOT-8 にわたり見られる。これらの層は大溝川の氾濫・堆積層を示すものと推測される。T 5 では第4～6層に相当するようと思われるが、そうであれば後節の三須今溝遺跡におけるC層に接続する可能性が高く、時期は中世となる。その下層は黒色を帶びた粘質土層になる。OT-2 の第9層・OT-4 の第9層など粗砂層を挟んでいる場所がみられ、やはり、大溝川の氾濫に起因した堆積層の可能性が強い。

遺物は全体で10点出土した。いずれも小片で、かつ摩耗している。T 6 では遺物は皆無である。OT-1においては近世かと思われる細片1点。OT-2 では弥生後期Ⅲの鉢1が1点出土。OT-3 では遺物は未発見。OT-4 では須恵器の小片が2点。OT-5・6 ではいずれも遺物なし。OT-7 で8世紀前葉の須恵器杯2が1点出土。OT-8 では遺物なし。T 5 で平安時代と考えられる土師器皿3が1点、凹面に布目・凸面に縄目タタキが残る平瓦4が1点、その他、土師質の細片が3点出土した。これらの遺物は明らかに南上方より流入してきたもので、付近に集落の存在を推定することは難しい。また、旧山陽道に関連すると思われるような遺構・遺物とも認められなかった。

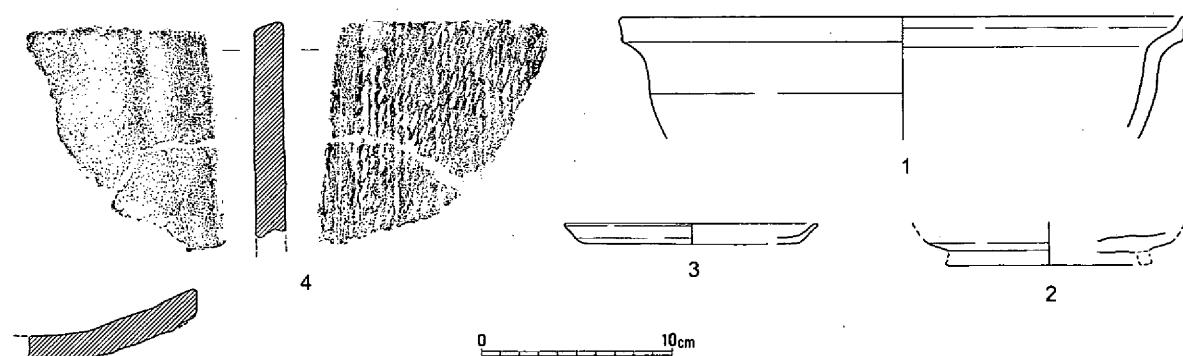
(葛原)



第8図 トレンチ配置図 (1/3000)



第9図 土層図 (1/60)



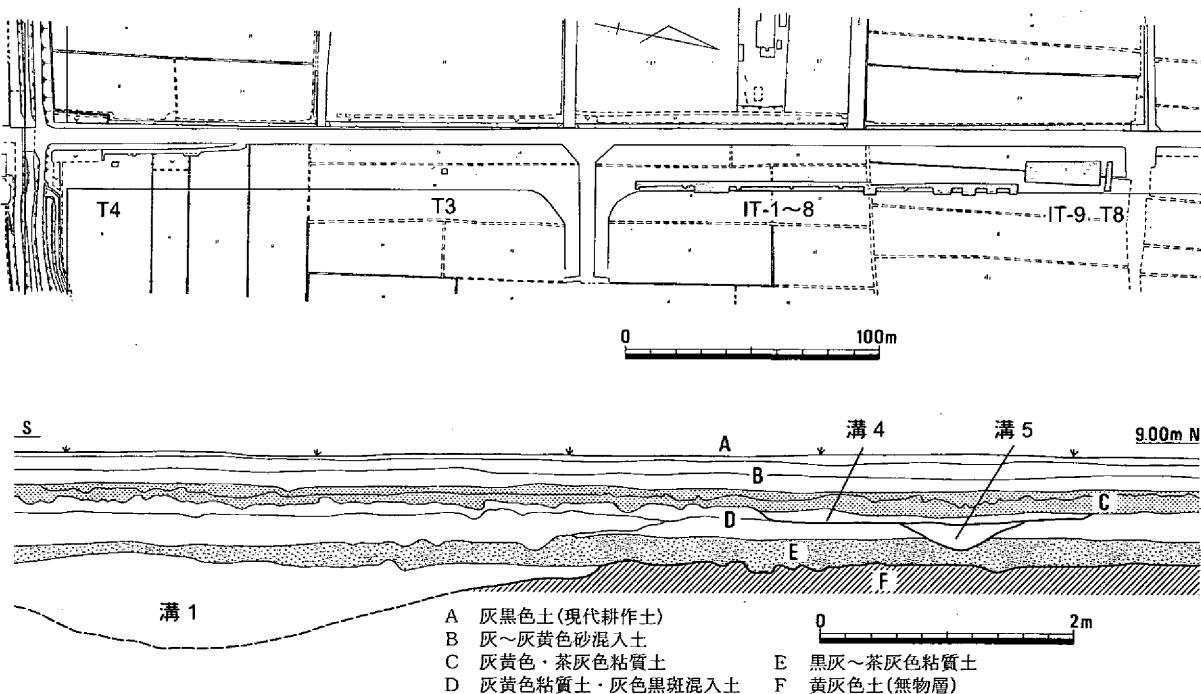
第10図 出土遺物 (1/4)

第2節 三須今溝遺跡の調査の概要

三須今溝遺跡は、総社市三須字今溝に所在し、北緯 $34^{\circ}39'49''$ 東経 $133^{\circ}46'39''$ に位置する。当地の地形は、北に美濃田遺跡の微高地、東に江崎古墳などが所在する低丘陵、西は作山古墳を南限とする低丘陵、南は都窪郡山手村と倉敷市を隔てる福山山塊の山裾緩斜面などに周囲を囲まれた低湿地帯で、現在は広く水田化され、条里地割りがみられる。周囲から集まる用排水路は東側の丘陵に沿って流れる前川に注ぎ、北へと抜ける。標高は8.80～9.00mと低く、大雨時には水田が冠水し、容易に水が引かない場所である。調査区はこの低湿地のほぼ中央部にあたる。

現代耕作土下には厚さ20～30cmの近世水田層（B層）があり、16世紀末～17世紀前葉の絵唐津の碗や18世紀の唐津・伊万里の碗・京焼きの皿がわずかにみられる。その下は厚さ10～15cmの灰～茶灰色を呈する中世水田層（C層）となる。この層の下面是激しく乱れ、洪水の痕跡と考えられる。その下の粘質土（D・E層）は土師器様の細片が少量出土したのみで、正確な時期は決めがたいが、この層を基盤とする溝10に包含された土器の年代観から古墳時代中期以前の堆積層と推定される。そして、黄灰色土（F層）から無遺物層になる。遺構面は2面。現地表下50～80cmのD層上面と約90cmのF層上面である。D層上面では溝が10条確認され、5～6世紀の溝が8条、古代の溝が1条、中世の溝が2条である。F層上面では弥生前期の溝1条、弥生中期後半の溝3条を検出したにすぎない。弥生中期後葉の溝3をのぞき、弥生前期～古墳時代の溝は流路を南西～北東にとるのに対し、古代～中世の溝は南～北、東～西を指す。遺物の総量は土器小片300～400片程度で、IT-1～IT-9区のそれぞれから10数片ずつ出土。縄文晚期、弥生前期II・中期III・後期I・IV・古墳前期、中期II・後期、中世（鎌倉）、近世の各時期が確認された。T4では摩耗した瓦片と近世後半の備前焼きを含む小片5点が出土したが、T3は無遺物であった。検出された溝は排水路と考えられ、周囲に弥生前期水田が存在する可能性もある。

(葛原)



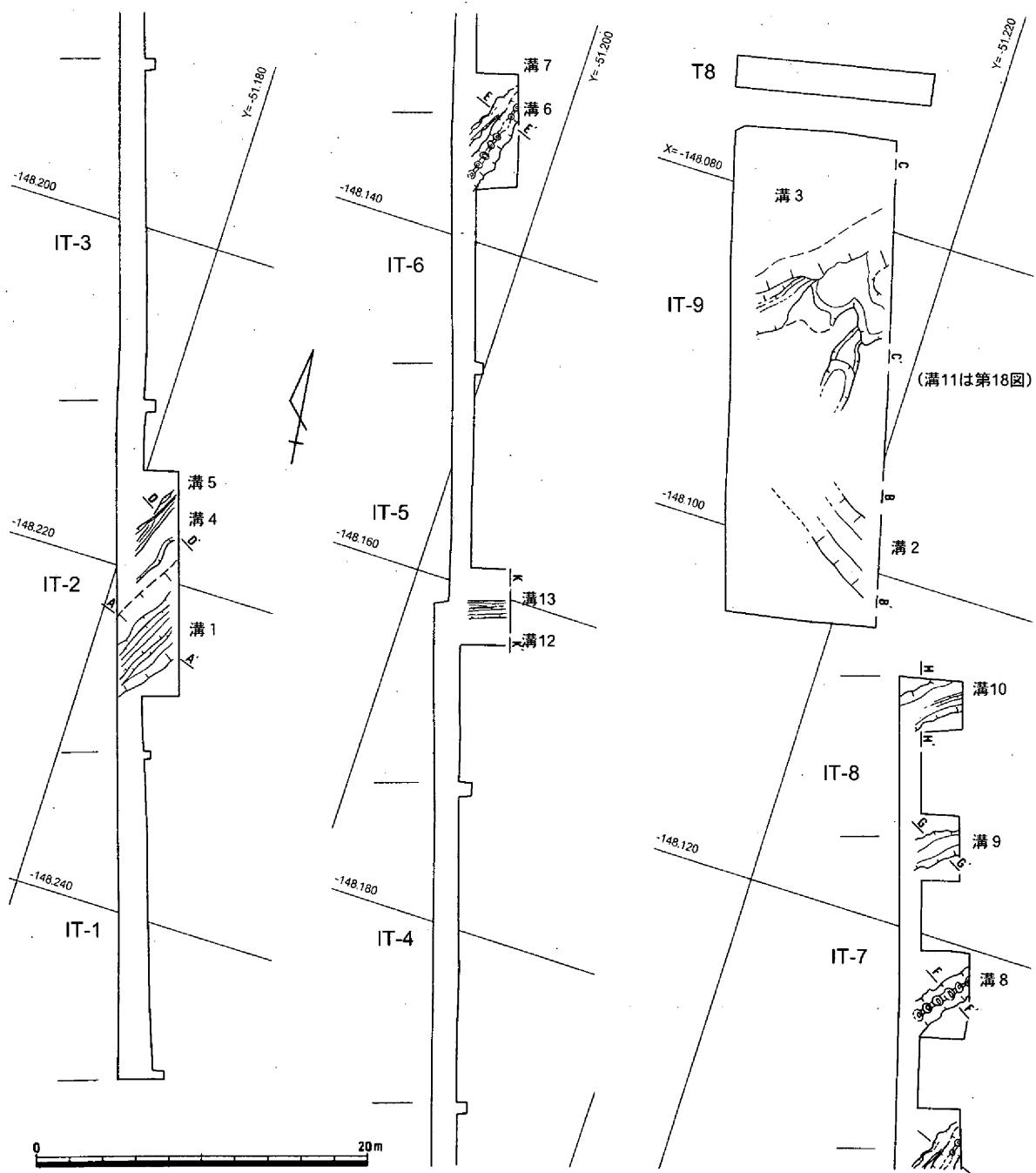
第11図 調査区配置図・基本層序 (1/3000・1/60)

第3節 三須今溝遺跡の遺構・遺物

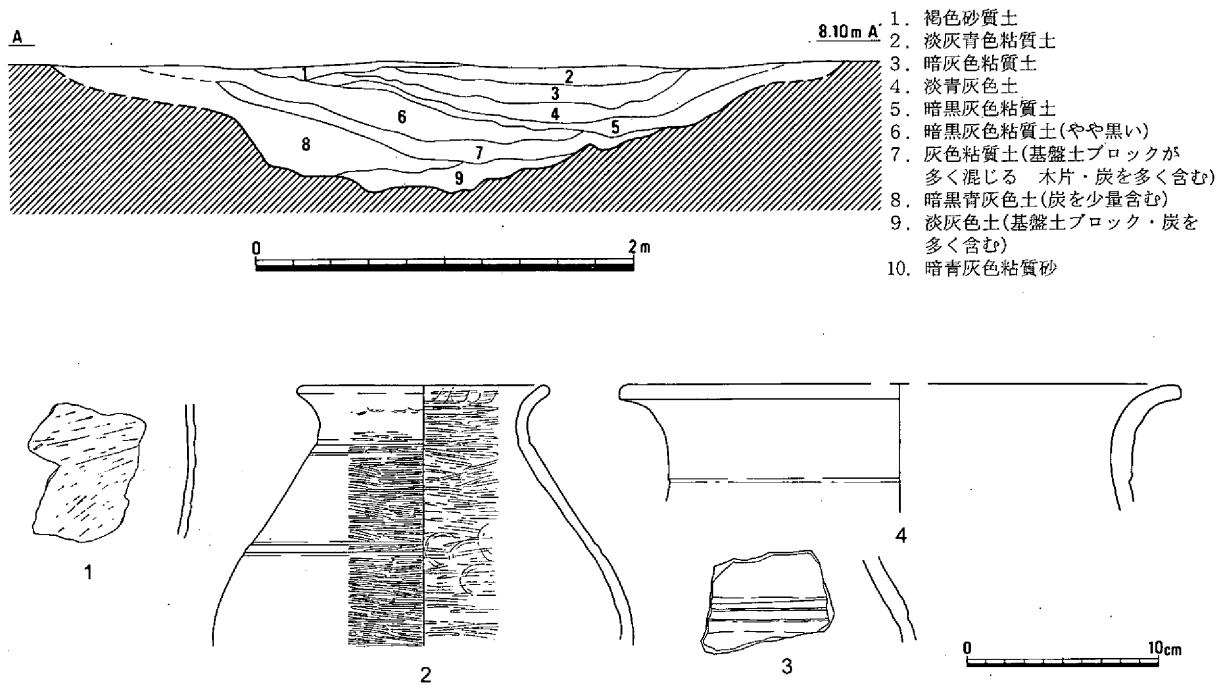
(1) 溝

溝1 (第13図 図版3・6)

IT-2区で検出された溝1は最も南に位置する遺構である。検出面の標高は約8.00mと低い。幅4.1m、深さ0.65m。現在の地形からすると南西から北東に流れていたと思われる。埋土は粘質土である。7層には枝状の流木が多数みられ、また溝の南側斜面で土器が集中して見つかった。おそらく5層の底部に堆積したものであろう。1は縄文晩期の深鉢体部、2・3は弥生前期の壺、4は甕である。特に2の壺は状態がよく内外のヘラミガキも明瞭である。時期は弥・前・IIと考えられる。(葛原)



第12図 遺構全体図 (1/400)

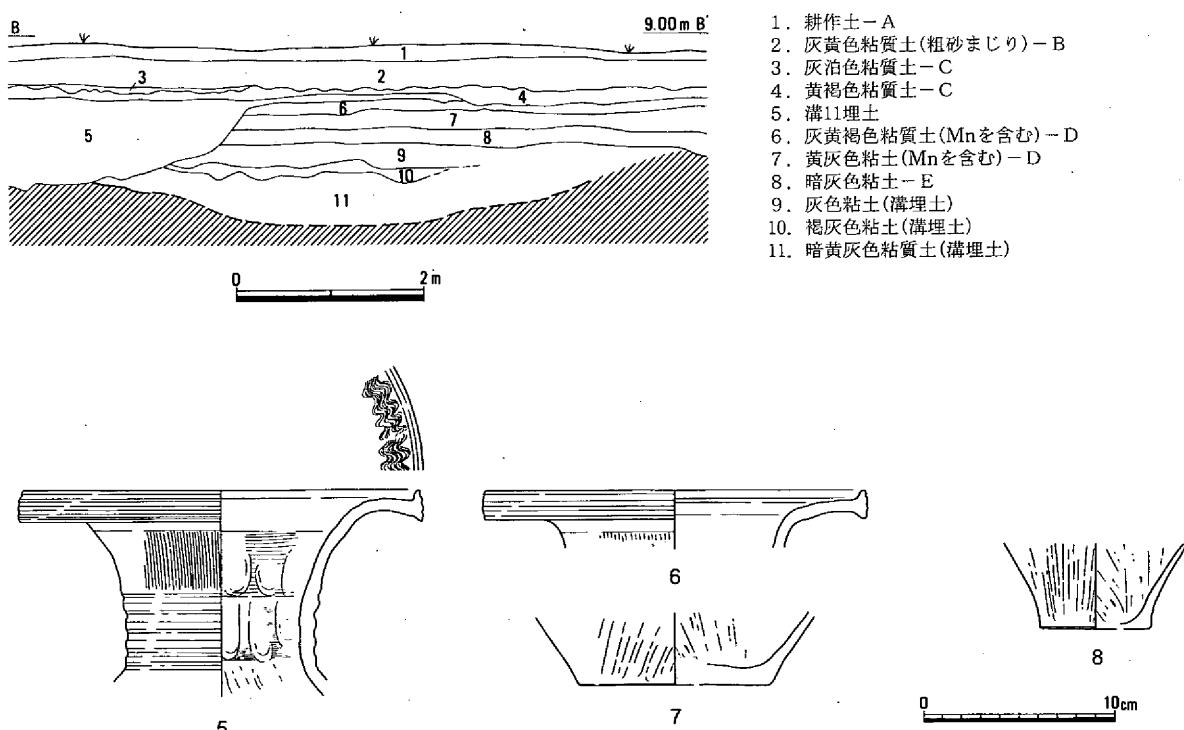


第13図 溝1・出土遺物 (1/40・1/4)

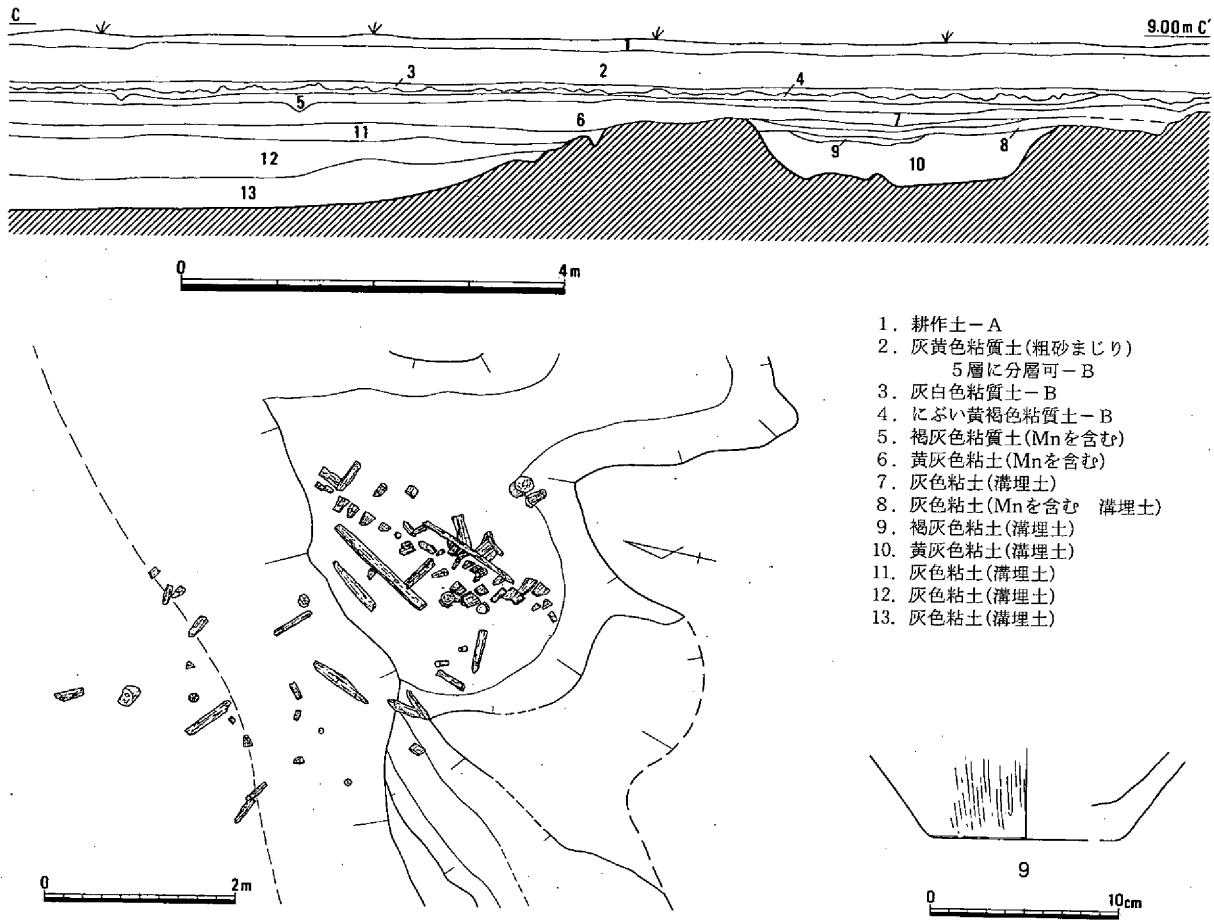
溝2 (第14図 図版6)

IT-9区の南部に位置する。幅3.3m、深さ0.85mを測る。溝11によって分断されている。周辺地形から北西から南東への流走方向が推定される。出土遺物には土器片が約20点あり、そのすべてが弥・中・Ⅲの時期と考えられる。この溝2は、同時期の溝3から分岐するものと思われ、1点 (5の壺) ではあるが土器の接合もみられた。

(物部)



第14図 溝2・出土遺物 (1/80・1/4)



第15図 溝3・護岸・出土遺物 (1/80・1/4)

溝3 (第15図 図版3)

IT-9区の北半部に位置する。南西一北東に主軸をとる大きな溝と考えられる。北側の肩口は調査区外になり、溝幅は不明である。検出幅9.0m、深さ0.9mを測る。南側肩口に不正形な窪みがみられ、このうち溝のり面に近い部分に縦杭と横木で構成される護岸がある。縦杭の頭はすべて溝3の方に傾いている。おそらくは窪みを埋め立てる際の土留めと考えられる。出土遺物には土器片が少量あるが、そのほとんどが灰白色の砂粒の少ないものであり、溝2出土土器との接合関係もあることから、時期は弥・中・Ⅲと考えられる。

(物部)

溝4 (第16・17図 図版3)

IT-2区で検出された溝である。溝1に隣接するが、層位的には溝1より上位にある。中世包含層(C層)に上部を削平されている。幅2.0m、深さ0.07mと広く浅い。約100点の土器片が出土した。弥・後・I、IVの土器片に混じって須恵器が12~14など5点あった。時期は6世紀後葉。(葛原)

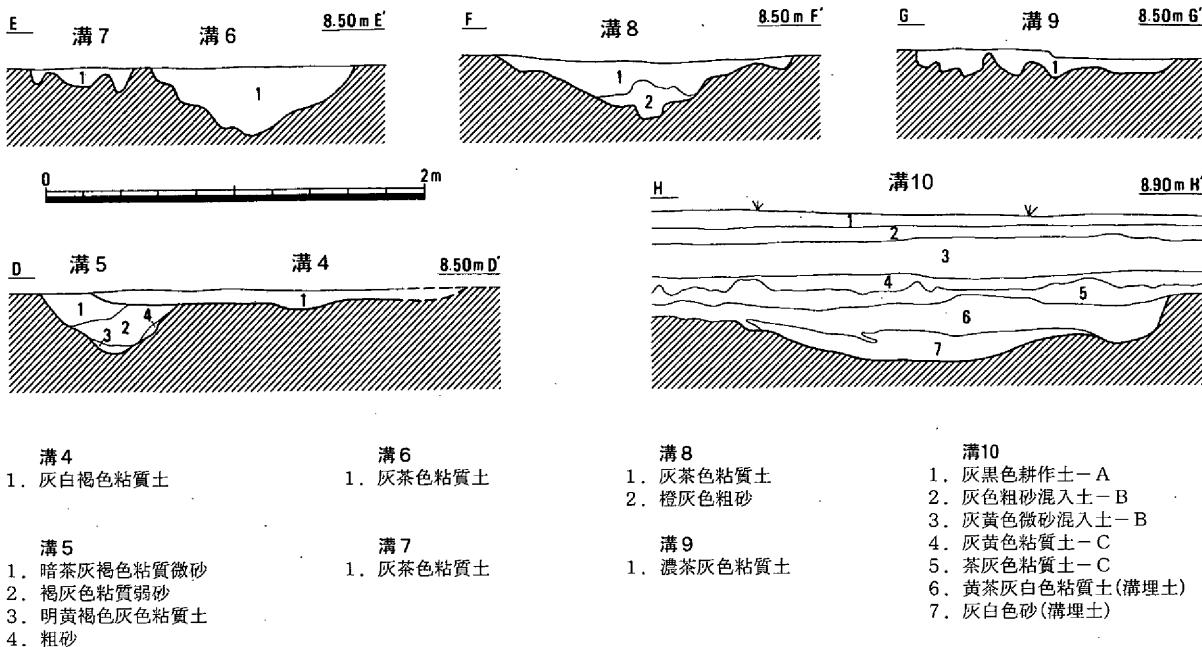
溝5 (第16図)

IT-2区に位置し、溝4に上部を削平されている。幅0.73m、深さ0.32mを測る。周辺地形から流走方向は南西から北東と考えられる。出土遺物は土器細片がわずかに2点である。時期は決めがたいが、溝4以前でもそろ離れない古墳時代後半期の中でとらえてよい。

(葛原)

溝6 (第16図)

溝5から北へ約55m離れたIT-6区の北端部に位置する。周辺地形から流走方向は南西から北東と



第16図 溝4～10 (1/40)

考えられる。底面に径8cm、深さ10cm程の穴が約15cm間隔で並ぶ。出土遺物はない。時期は溝7を切っていることから古墳時代後半期の中と考えられる。
(葛原)

溝7 (第16図)

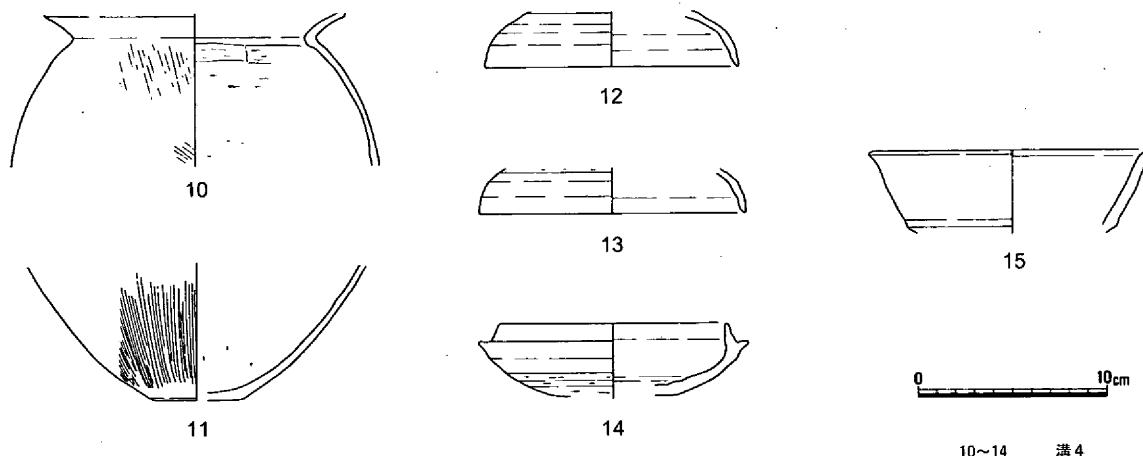
IT-6区からIT-7区にかけて走り、溝6に切られていって、幅0.53m、深さ0.1mを測る。上部を削平され中世包含層(C層)によって覆われている。埋土は溝6と類似する。出土遺物は須恵器小片が1点あるにすぎない。灰白色を呈する焼成不良のものである。時期は古墳時代後半。
(葛原)

溝8 (第16図 図版4)

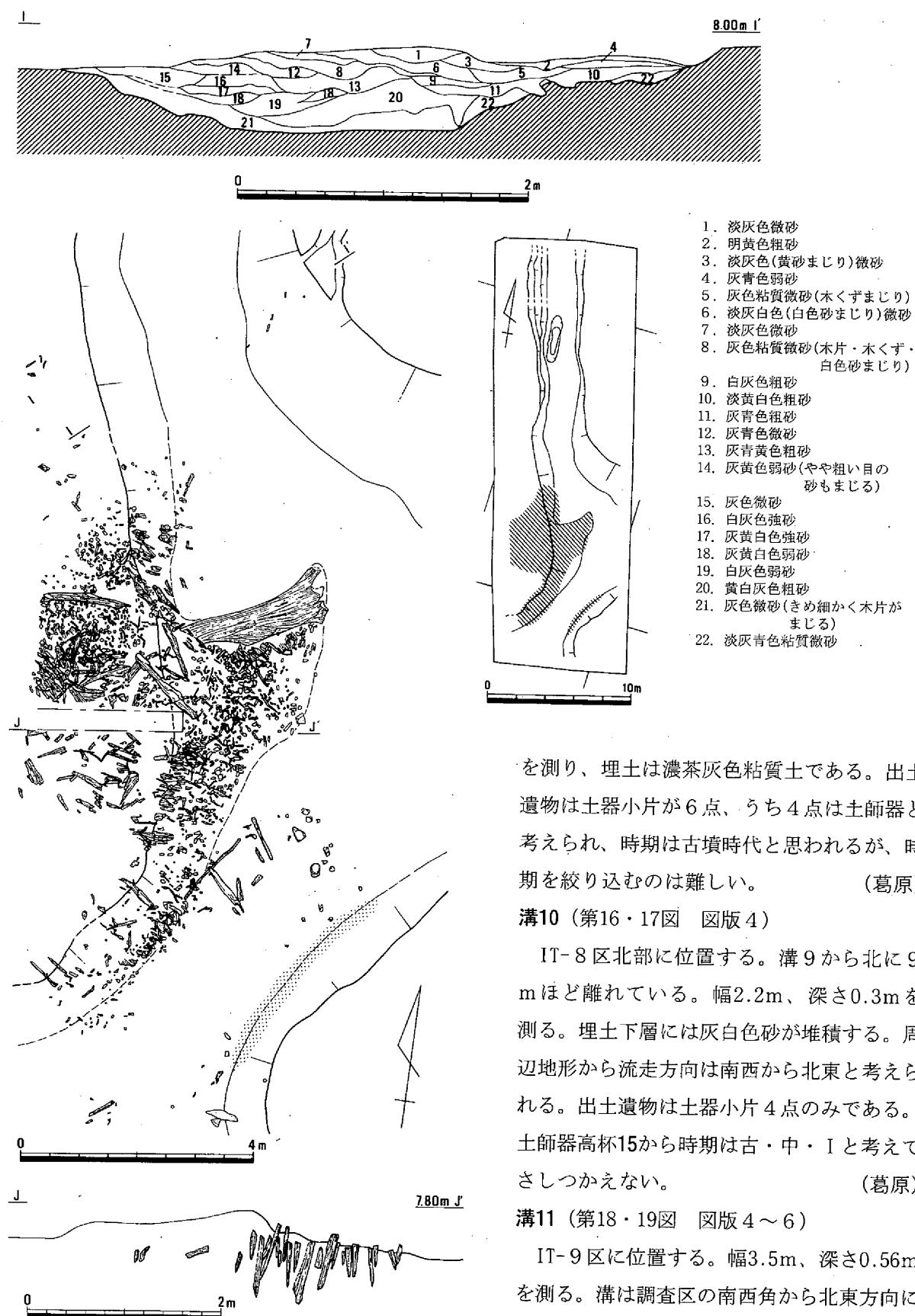
IT-7区の中央部に位置する。溝7から北に10mの距離にあり、幅1.5m、深さ0.26mを測る。底面には溝6と同様の小穴がやはり15cm間隔で並ぶ。穴には粗砂が堆積する。周辺地形から見て、流走方向は南西から北東を指す。出土遺物は土器細片1点のみで、時期は古墳時代後半期か。
(葛原)

溝9 (第16図)

IT-7区とIT-8区の境界の位置にあって、溝8から北に約8mを隔てる。幅1.35m、深さ0.13m



第17図 溝4・10出土遺物 (1/4)



を測り、埋土は濃茶灰色粘質土である。出土遺物は土器小片が6点、うち4点は土師器と考えられ、時期は古墳時代と思われるが、時期を絞り込むのは難しい。

(葛原)

溝10（第16・17図 図版4）

IT-8区北部に位置する。溝9から北に9mほど離れている。幅2.2m、深さ0.3mを測る。埋土下層には灰白色砂が堆積する。周辺地形から流走方向は南西から北東と考えられる。出土遺物は土器小片4点のみである。土師器高杯15から時期は古・中・Iと考えてさしつかえない。

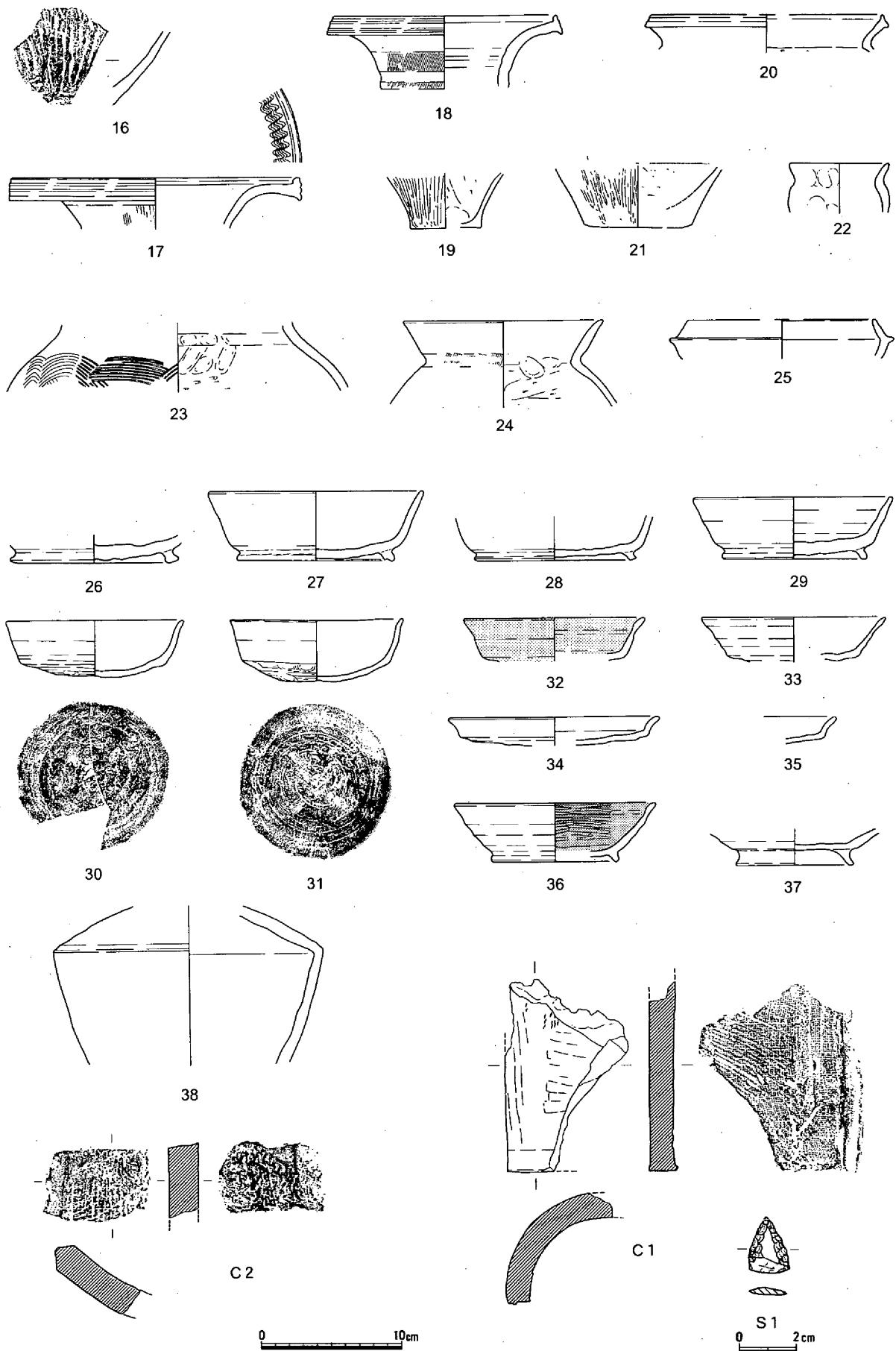
(葛原)

溝11（第18・19図 図版4～6）

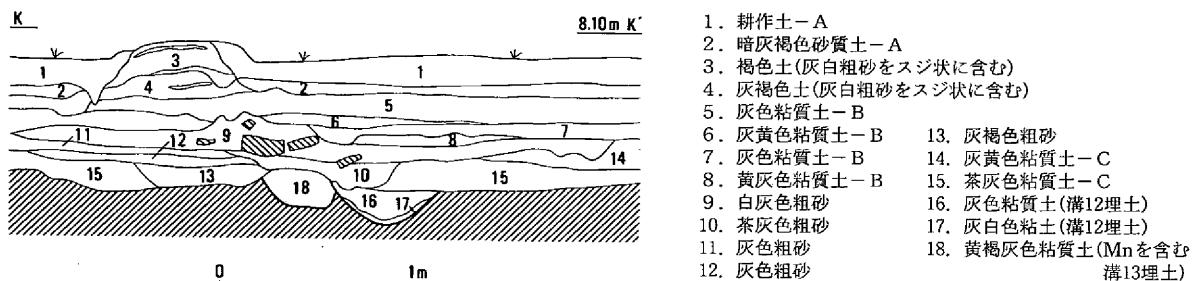
IT-9区に位置する。幅3.5m、深さ0.56mを測る。溝は調査区の南西角から北東方向に8m程の所で西と北北東の二方向に枝分かれする。埋土には粗砂層が多くみられる。この二股に分かれる部分の西側斜面を中心に無数

第18図 溝11・護岸

(1/400・1/100・1/60・1/40)



第19図 溝11出土遺物 (1/4・1/2)



第20図 溝12・13 (1/40)

の杭が密集して打ち込まれた護岸施設がある。杭は直径約5cmの丸杭や幅10cm前後の割杭があり、長さは平均約80cm。樹種は鑑定の結果、アベマキ・カシワ・アラカシ・ケヤキなど多種あり、選択性はみられない。また杭の傾きも多方向である。太い流木が杭を押し倒し、溝を塞ぐように引っかかっている。対岸の東側斜面の裾部（アミ目部分）にも杭群がみられる。杭の密集する所はちょうど溝2埋土部分にあたる。この護岸は南から、あるいは北から流れる水流をある程度西に流すために作られたものと考えられる。出土遺物には縄文晩期から古代までの各時期があるが、完形や完形に近い土器は8世紀のもので、数量も多い。26～29は須恵器杯で高台が外に踏ん張る。30・31は須恵器杯で、外方に比較的直立する口縁を持ち、いわゆる杯Aと呼ばれるもので、底部外面はヘラ切り後、押圧、ナデを若干施す。32～35は土師器杯・皿・椀、36は黒色土器（内黒）椀である。溝11はこれらの土器の特徴によって8世紀第2四半期から9世紀頃に機能していたと考えられる。

(物部)

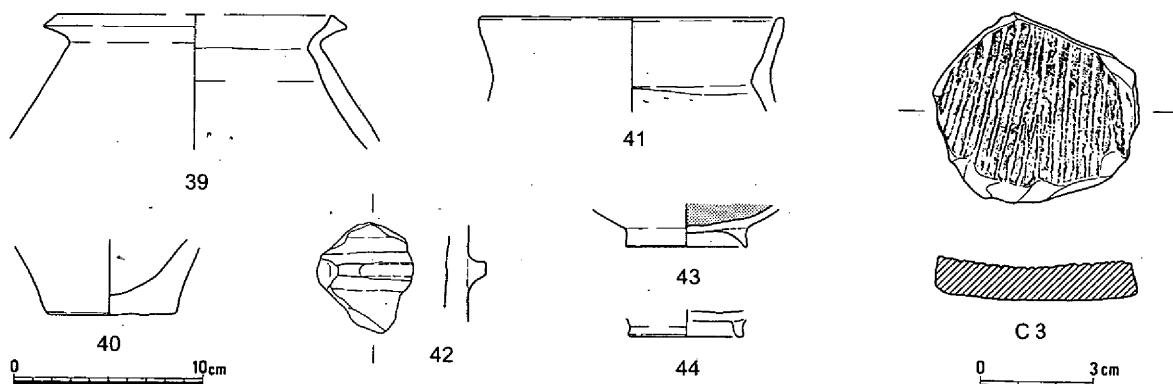
溝12・13 (第20図)

IT-5区の中央部に位置する。2つの溝は並走し、溝12が溝13の北側肩部を切り込む。溝12は幅0.56m、深さ0.2m、溝13は幅0.38m、深さ0.2mを測る。出土遺物は両溝ともにわずかな量で、溝13から中世羽釜の鐔が出土している。両溝は現在の畦畔と重なる位置関係にあり、同様の近世の畦畔も確認していることから水田畦畔に伴う溝と考えられる。時期は中世に比定できよう。（葛原）

(2) 包含層出土遺物 (第21図)

遺物の多くはC層およびその上層から出土した。数量は少ないが、縄文晩期、弥生前期・中期III・後期、古墳、古代・中世・近世の各時期が確認できる。39・40は弥生後期の甕、41は土師器の甕、42は明黄褐色を呈する円筒埴輪で、非常に高いタガを持ち、表面はよく摩耗している。43は内黒の椀、44は早島式土器の椀、C3は備前焼擂り鉢を転用した円盤である。

(物部)



第21図 包含層出土遺物 (1/4・1/2)

第3章 三須河原遺跡

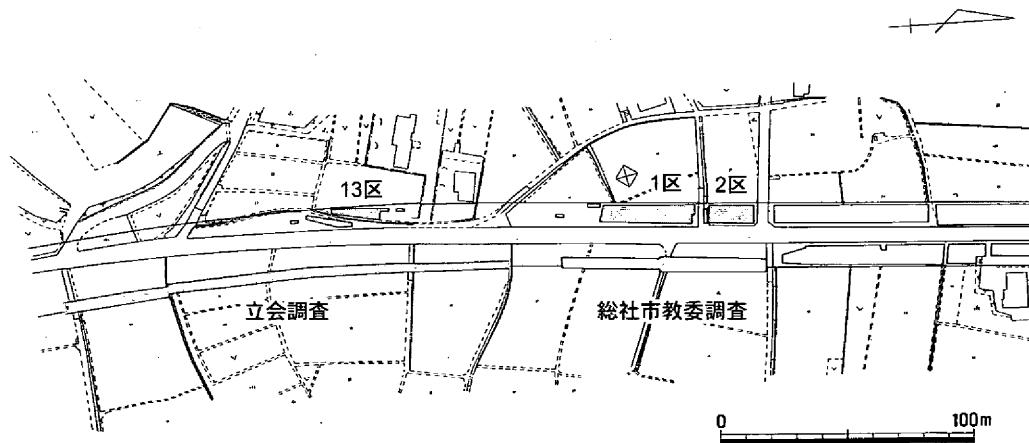
第1節 調査の概要

三須河原遺跡は総社市三須字河原を中心と所在する。調査地点の字名は窪田、茶柄杓である。当初、三須畠田遺跡として調査を実施したが、2区と3区の間に上幅約50mの浅い低位部が確認され、これより北を三須畠田遺跡、南を三須河原遺跡とした。

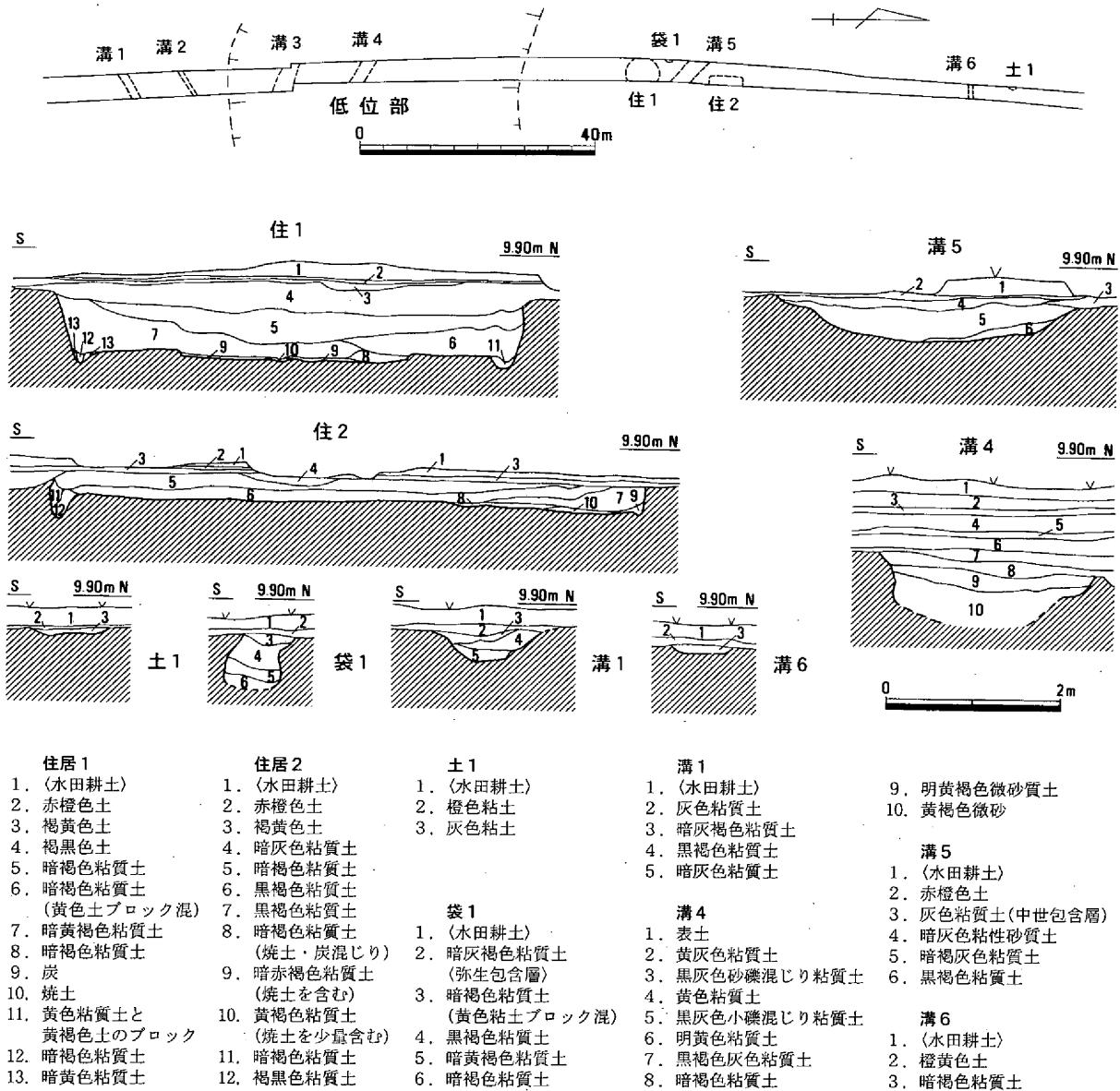
また、三須河原遺跡は幅20~30mの低位部をはさみ、北の微高地と南の微高地に分かれる。北側の微高地は平成8・9年度の総社市教委の圃場整備に伴う発掘調査で8世紀前半の南北に棟方向をとる掘立柱建物群や「郡殿」の墨書のみられる蓋杯が出土し、窪屋郡の郡衙の可能性が指摘されている。南の微高地は平成10年度に総社市教委の同様の調査において北の微高地で検出された建物群と主軸を同じくする8世紀初頭の総柱の掘立柱建物群の存在が明らかになった。今回の調査地はこれら奈良時代前半の建物群から西に約70m離れている。南の微高地は従来、中須賀遺跡とされてきたものであるが、三須河原遺跡にまとめて報告する。また、平成2年度の立会調査ではその南端で、美濃田遺跡の所在する微高地にかかっており、溝2条が確認されている。

1・2区の在る北の微高地は現代水田耕作土下ににぶい黄褐色砂質土の中世と考えられる包含層があり、これを除去した褐色土上面で遺構が検出される。その褐色土の下には微高地の基盤を成す粗砂層、その下に礫層がみられ、1区と2区の境ではこの粗砂・礫層が中世包含層直下までせり上がり、微高地の最頂部となっている。13区の在る南の微高地は現代耕作土直下で遺構が検出される。

1・2区で出土した遺物の中には、弥生時代中期中葉から後期前葉の土器片が少量ある。遺構は、微高地の下がりに沿う弥生時代後期後葉の溝2条、古墳時代後期の溝3条、微高地部に古墳時代中期の竪穴住居2軒、古代と考えられる柱穴列1列と溝1条、鎌倉時代の掘立柱建物1棟がある。また、瓦片が総数21点出土し、西約100mの三須廃寺との関連が考慮される。13区での遺物・遺構の初現は弥生時代後期である。立会調査で弥生時代と古墳時代後半期の竪穴住居が1軒ずつ確認され、平成7年度の総社市教委によるガソリンスタンド建設に伴う調査においても6世紀後半の竪穴住居が検出されている。また、13区に直角に曲がると考えられる溝があり、区画溝の可能性が考えられる。(物部)



第22図 調査区配置図 (1/3000)



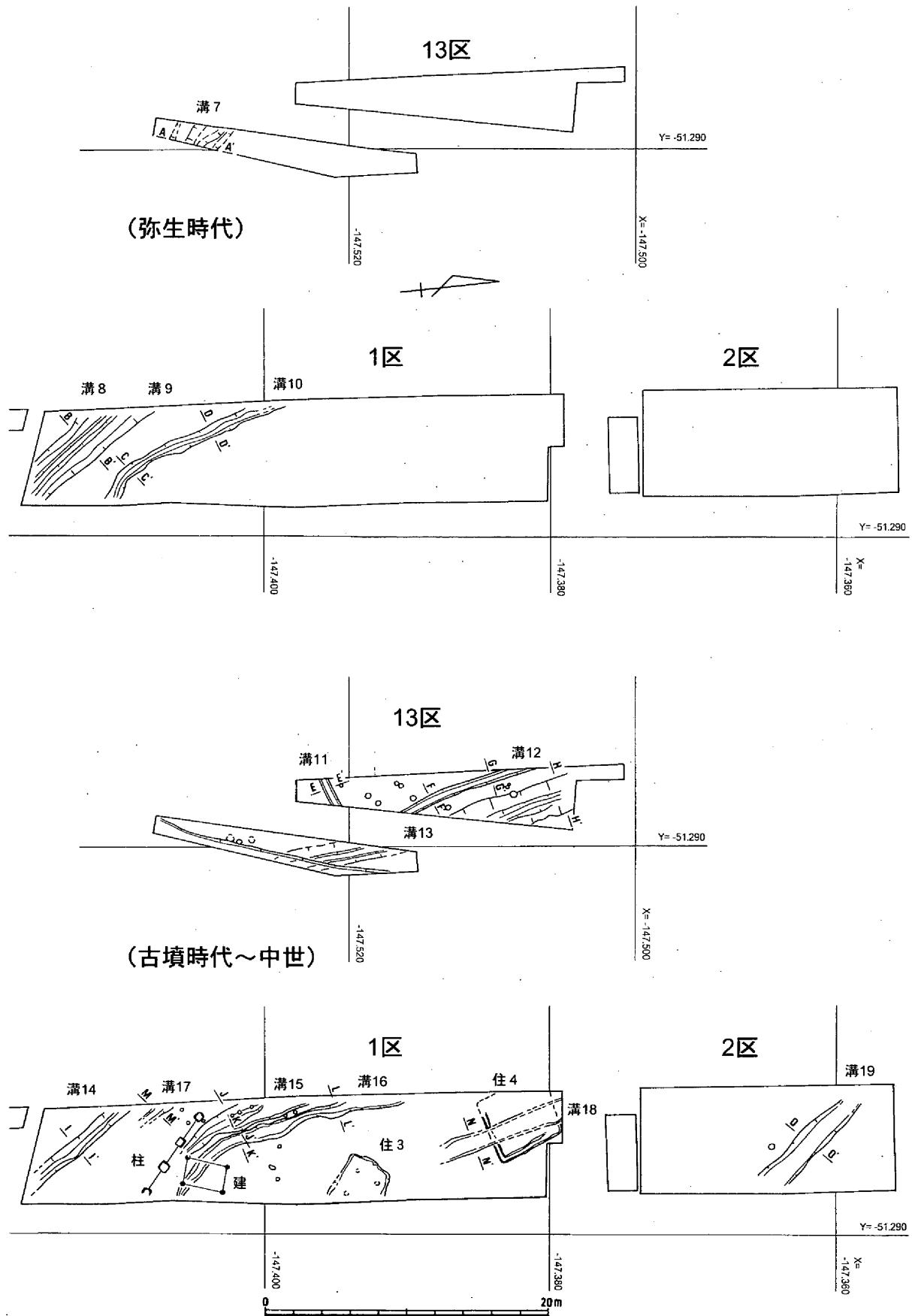
第23図 立会調査遺構配置図・遺構断面図（1/1200・1/80）

立会調査の概要

当初、遺跡の範囲を十分に把握できていなかったため、工事の進行に応じて文化課職員が立会・試掘の措置を行っていたが、13区以南では遺構・遺物の所在は認められなかった。掘削が13区東側に及んだ際にこの部分に遺構が所在することが判明したが、すでに遺構面は失われており、やむをえず工事掘削壁面の実測をおこなった。調査期間は平成4年1月6日から3日間である。

以上のような状態であったため、遺物を採集することができず遺構の時期は明確でないものが多い。遺構は低位部北側の微高地に集中する。竪穴住居1は推定径5.6m、深さ0.36mを測り、弥生時代とみられる。袋状土壌1も弥生時代であろう。竪穴住居2は北側にかまどをもつ古墳時代後半期の住居とみられる。溝のうち5は古代ないし中世の可能性が強いが、他は時期が明確でない。これら以外に溝5付近を中心に径0.5~0.3mの柱穴8基や土壌を確認した。

(宇垣)



第24図 遺構全体図 (1/400)

第2節 弥生時代の遺構・遺物

(1) 溝

溝7 (第25図)

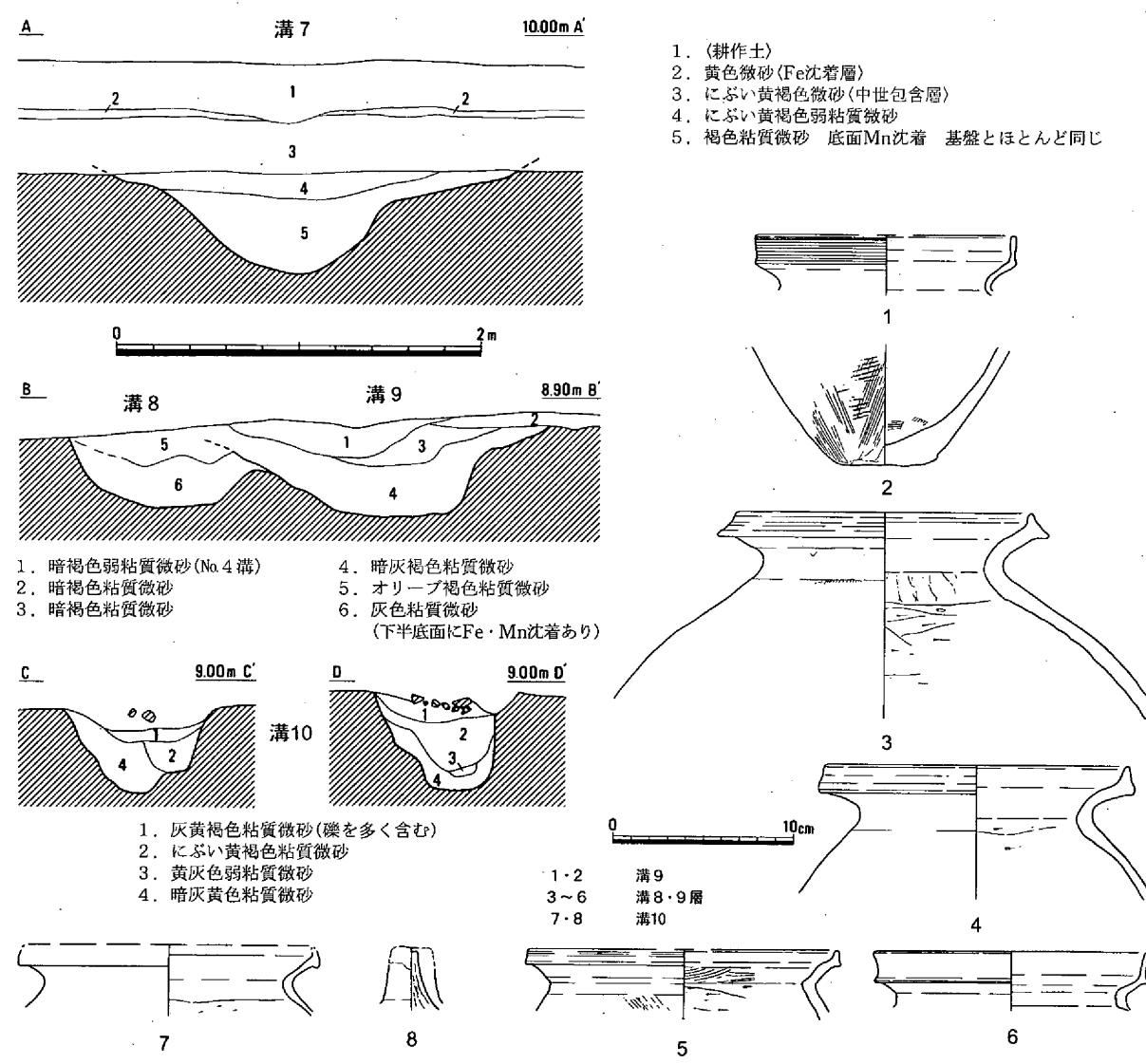
13区の南端に位置する。幅2.25m、深さ0.55mを測る。遺物は無し。総社市教育委員会が平成7年度にガソリンスタンド建設に伴って調査した中須賀遺跡の溝状遺構と同一と思われる。(物部)

溝8・9 (第25図 図版7)

1区の南端に位置する。溝8は幅1.05m、深さ0.45m、溝9は幅1.8m、深さ0.55mを測る。溝8の北岸を溝9が切る。溝9は甕1・2から弥・後・IV。溝8は遺物が無く、溝8・9上層の土器片から弥・後・IIとも思われるが、きれいに溝9に並走していることから弥・後・IVの中と考えたい。(物部)

溝10 (第25図 図版7)

1区南部、溝8・9の2m程北に位置する。幅0.4m、深さ0.27mを測る。北から湾曲しながら南西へ流れる。少なくとも1回の掘り直しがある。上層に円礫の堆積がある。微高地の南西縁に沿って流れる用水路と考えられる。時期は弥・後・III。(物部)



第25図 溝7~10・出土遺物 (1/40・1/4)

第3節 古墳時代の遺構・遺物

(1) 壇穴住居

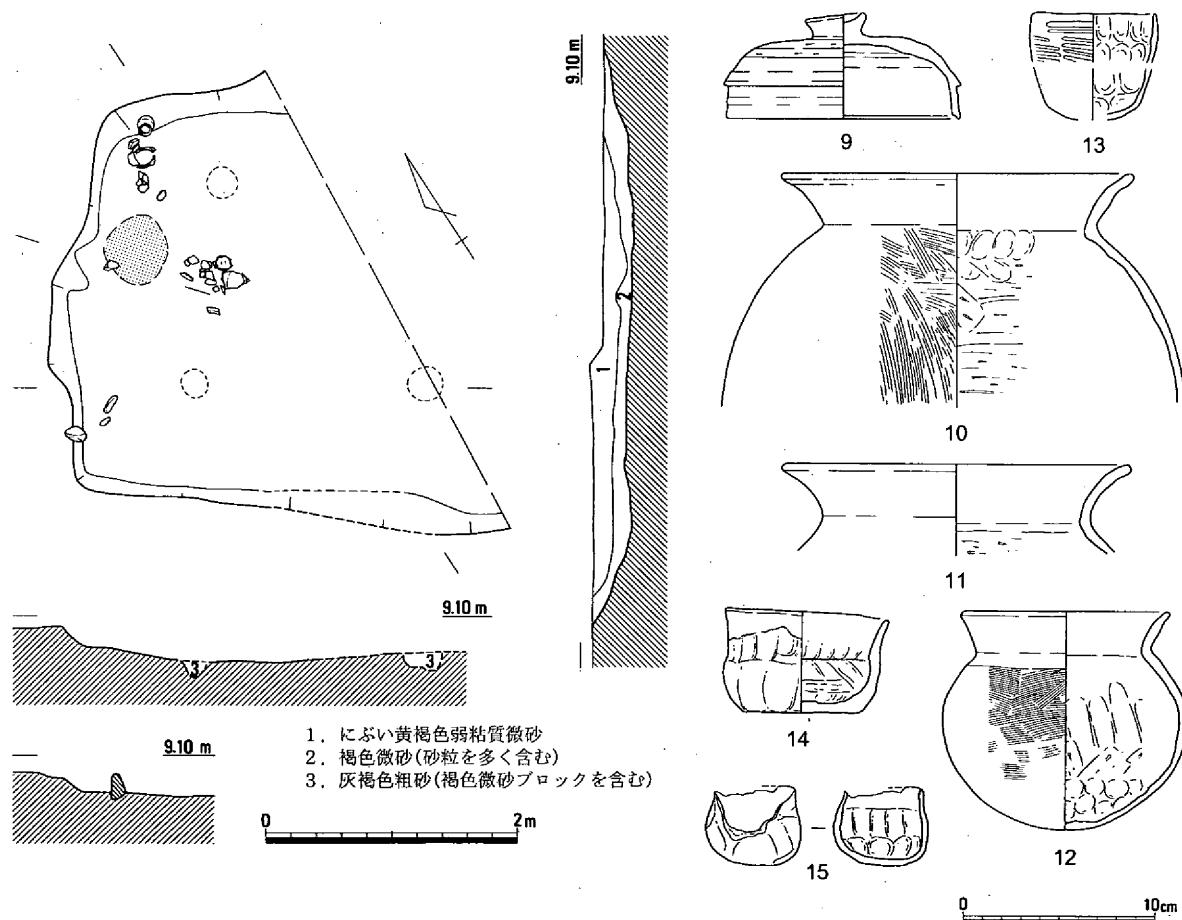
壇穴住居3 (第26図 図版8・9)

1区のほぼ中央に位置する竈付きの方形住居である。北東部1/3は調査区外になる。平面検出時には周囲より黒っぽい微砂で埋まった不整形のたわみ状であったが掘り進めるうちに方形を呈するようになり、焼土面並びに支柱石が見つかり、住居と認識できた。3.3以上×3.0m、床面の標高8.70mを測る。微高地の基盤となる粗砂層に掘り込まれており、また、地下水位が高いせいで床面まで下げるとき水がしみ出した。柱穴の確認も困難を伴ったが、断面の観察から粗砂の中に褐色微砂のブロックが多数含まれる部分があり、柱の痕跡と考えた。出土遺物は住居が埋まる過程で投棄されたものと思われる。須恵器は完形の高杯の蓋9と内面のタタキをナデ消した甕体部など小片が3点。土師器甕10・11、完形で小形の甕12、いれこになって検出された鉢14と手捏ね15、製塩土器13がある。時期は須恵器がTK-208に比定され、古・中・Ⅱの古相と考えられる。

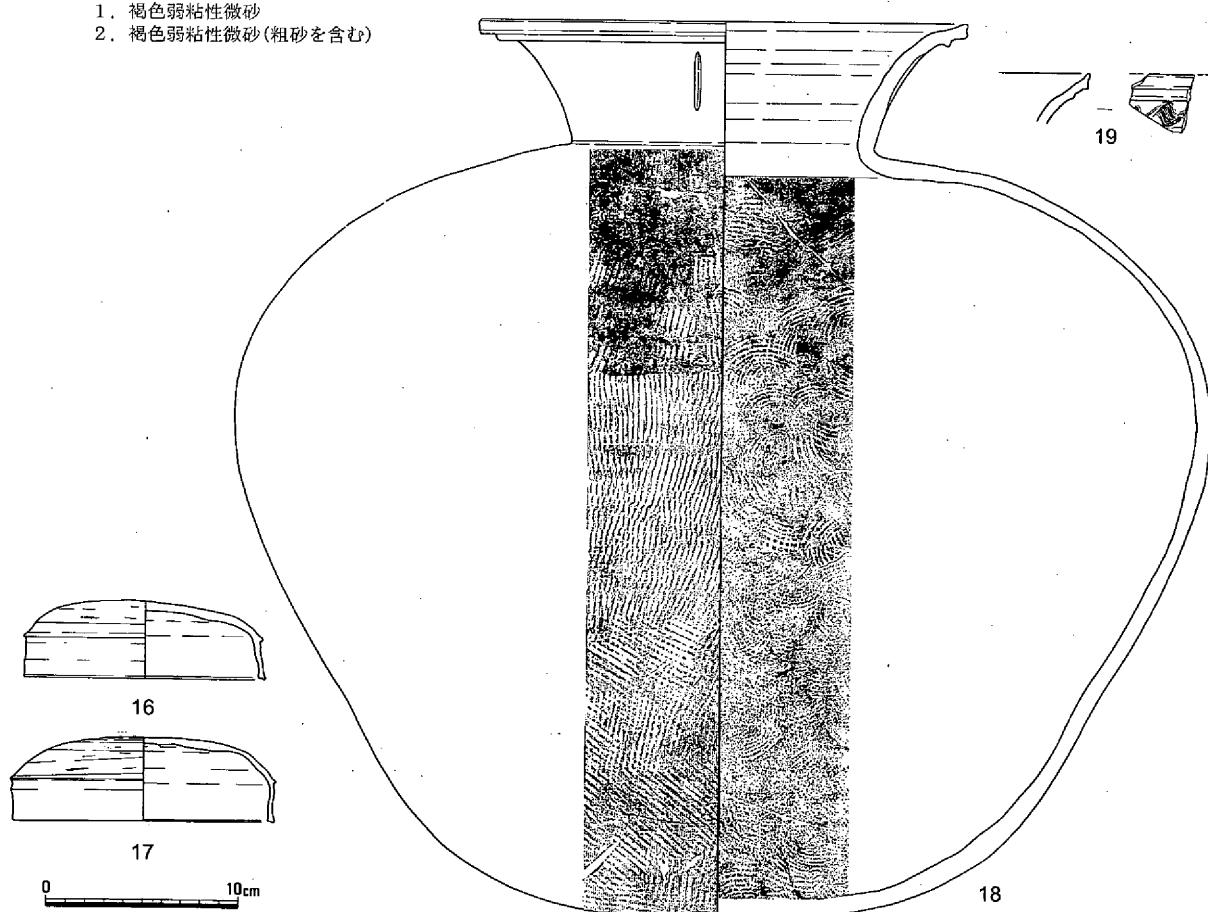
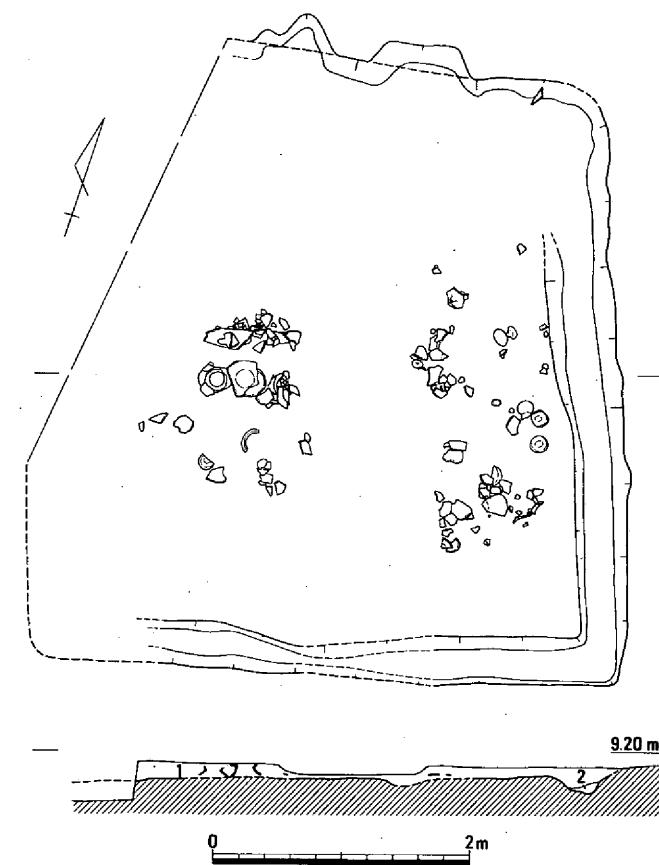
(物部)

壇穴住居4 (第27~29図 図版8~10)

1区北端、壇穴住居3から北へ約8mに位置する方形の住居跡である。北西コーナーが調査区外になる。4.56×4.4m、床面の標高8.99mを測る。微高地の基盤層である粗砂層の下にある礫層が地表近くまで上がっており、住居は粗砂層を掘り込み床面は礫層上面になる。住居の北縁は崩れている。



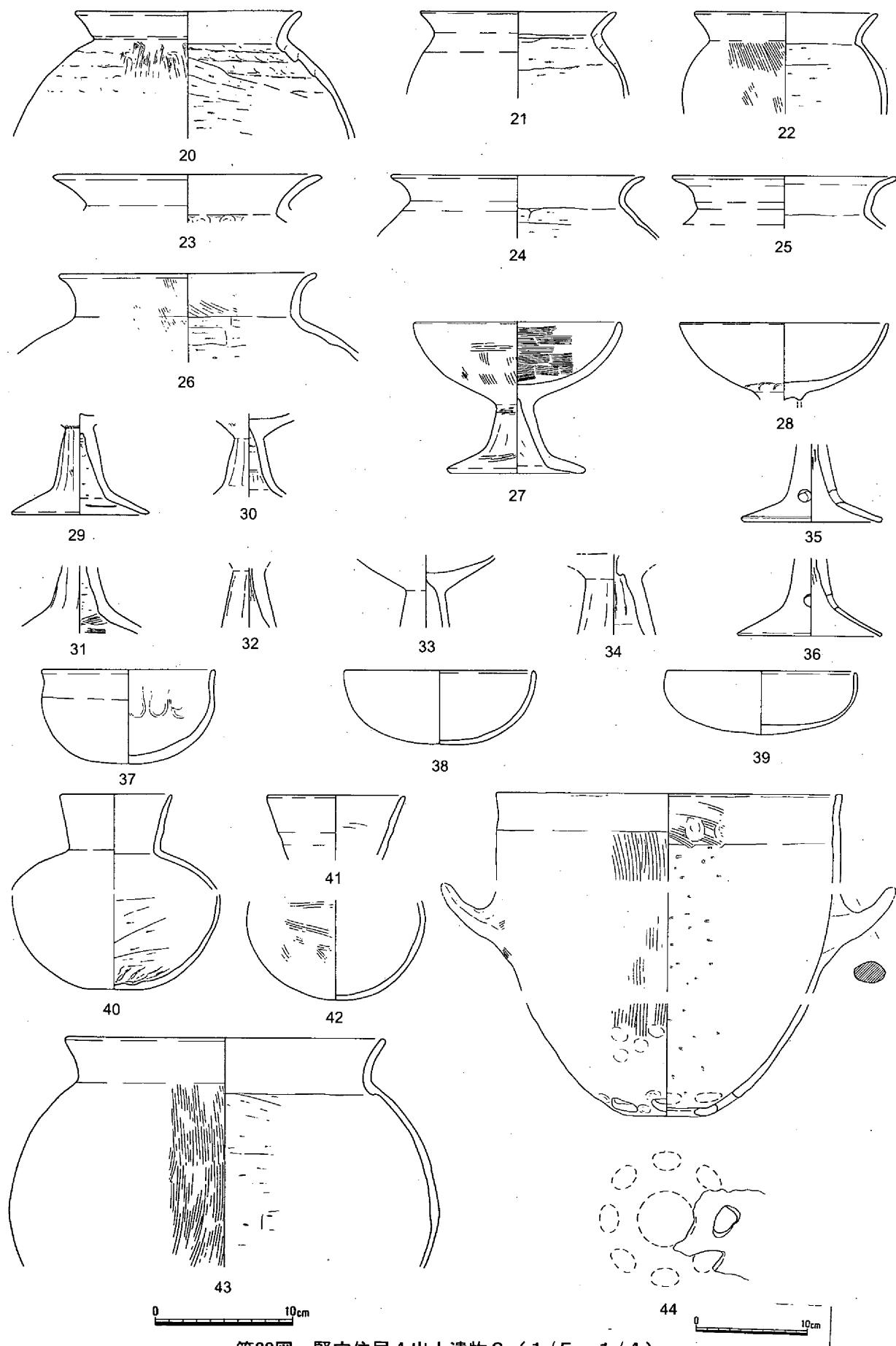
第26図 壇穴住居3・出土遺物 (1/60・1/4)



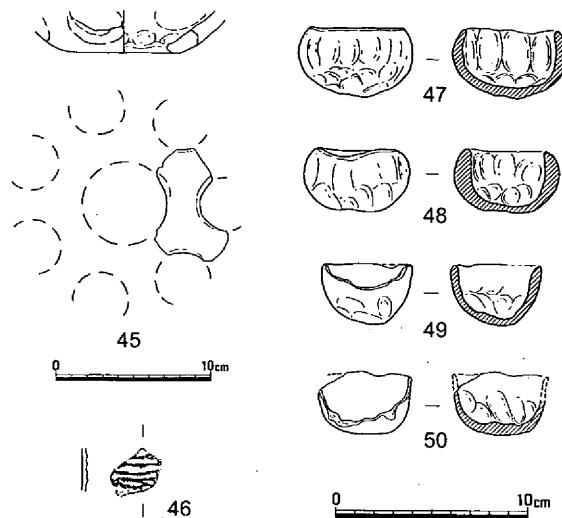
住居中央を溝18が床面付近まで切っている。住居の東・南辺に浅い壁体溝が検出された。出土遺物は多量にあり、住居の埋没過程の早い段階に破棄されたものと考えられる。須恵器には杯蓋16・17と同様形態の小片2点。1/2以上に復元される壺18と壺口縁部の小片19がある。土師器は各種ある。甕11個体、高杯12個体、鉢6個体、直口壺2個体、鍋1個体、甑3個体、手捏ね土器6個体、製塩土器片13点が残存する。甕の内面調整はヘラケズリが目立つ。甕25・26は口縁部がいったん上方に立ち上がってから外湾する。高杯35・36および鉢39は精良な胎土をもつ。43は口径が大きいので鍋と推定される。時期は須恵器からTK-208相当、古・中・Ⅱ古相と考えられる。

(物部)

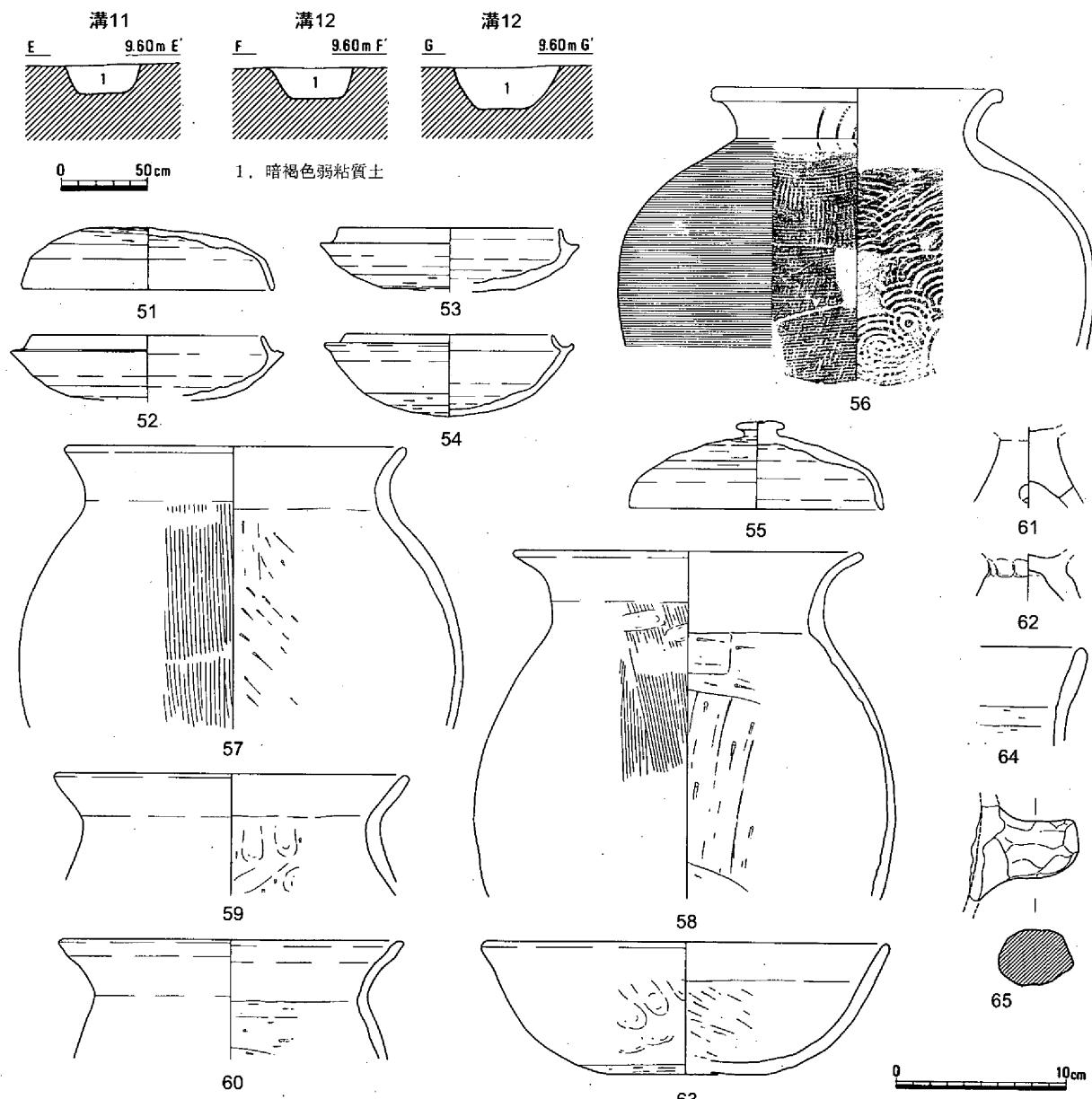
第27図 堪穴住居4・出土遺物1 (1/60・1/4)



第28図 墓穴住居4出土遺物2 (1/5・1/4)



第29図 堅穴住居4出土遺物3 (1/5・1/4)

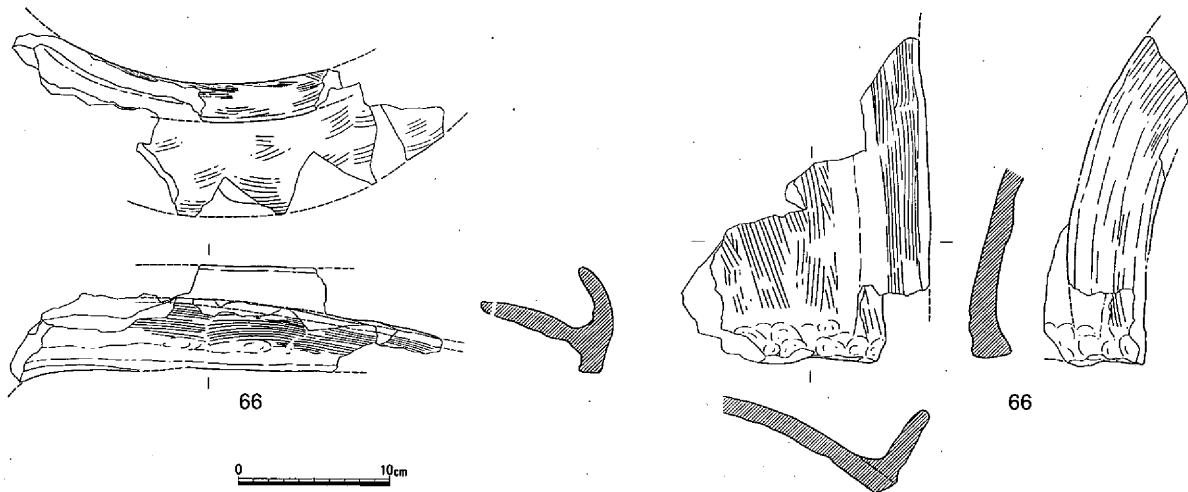


第30図 溝11・12・溝12出土遺物1 (1/40・1/4)

(2) 溝

溝11・12 (第30・31図 図版10)

13区の西側調査区で検出された。溝11は幅0.45m、深さ0.16m、溝12は幅0.5~0.6m、深さ0.18~0.24mを測る。両溝の主軸はほぼ直交する。西側の調査区では中世の包含層が一段深く入っており切りあいの有無は確認できない。しかし、両溝の断面形および埋土が非常によく似ており、直角に折れ曲がる同一の区画溝である可能性が高い。遺物は溝12にみられ、一括廃棄された状況であった。須恵器蓋杯51~54、高杯の蓋55、口縁外面に3条以上のへ



第31図 溝12出土遺物2(1/5)

ラ記号のある甕56、61・62は土師器の高杯、63は大形の鉢、64は瓶、66は移動式竈である。その器種構成は、一軒の住居の廃棄土器のような印象を受ける。時期は古・後・II。(物部)

溝13(第32図)

13区に位置し、溝12とほぼ並行する。幅2.0m、深さ0.82mを測る。遺物は小片で約50点あり、大半が上半部から出土した。67・68は須恵器、69・70は土師器。時期は古・後・II。(物部)

溝14(第32図)

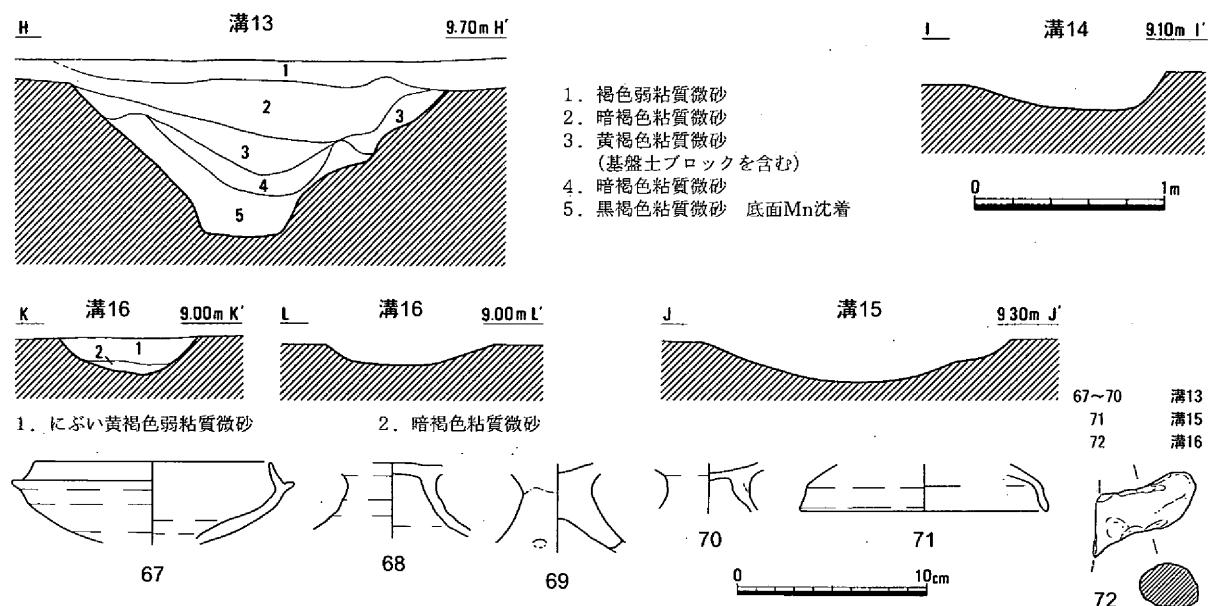
1区南端部、溝8・9の上部に位置する。幅1.08m、深さ0.24m。出土遺物は少量。弥・中・III、弥・後・I、弥・後・III、古墳初めなどの各時期を含むが須恵器があり、古墳後期と考えられる。(物部)

溝15(第32図)

1区中央部、溝14から北約8mに位置する。幅1.8~0.7m、深さ0.2mを測る。出土遺物小片60点の内、50点は弥中III、4点が須恵器である。時期は杯蓋71から古・後・IIと考えられる。(物部)

溝16(第32図 図版7)

1区中央部、溝15の北に隣接する。幅0.72m、深さ0.2mを測る。溝10・15と同様に南から西にカーブする。出土土器は小片10点のみ。72は貼り付け式の把手。時期は古墳後期だろうか。(物部)



第32図 溝13~16・出土遺物(1/40・1/4)

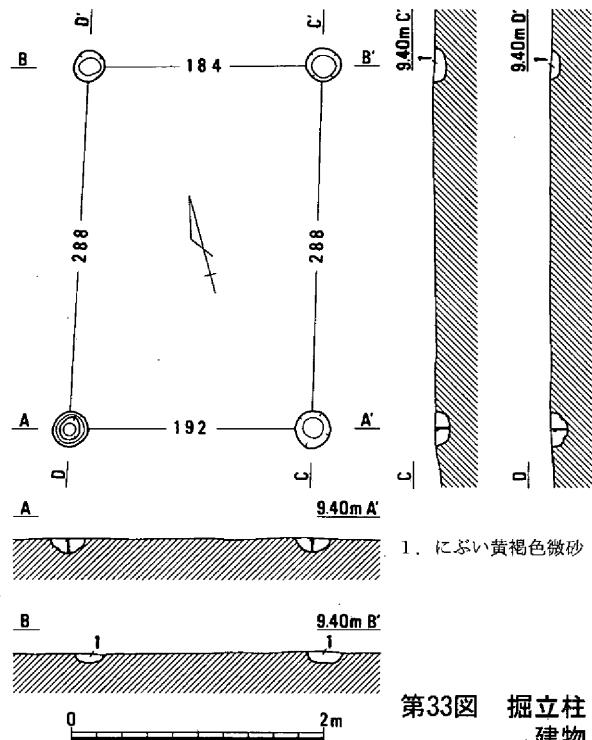
第4節 古代・中世の遺構・遺物

(1) 掘立柱建物 (第33図)

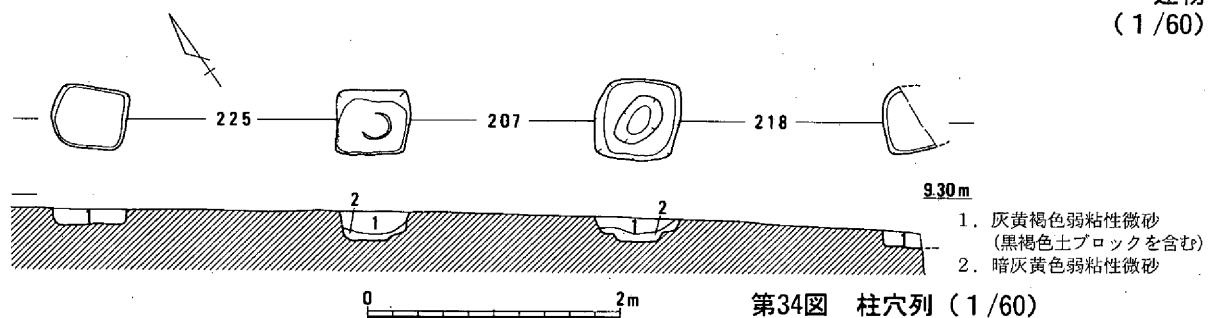
1区のほぼ中央部に位置する。1×1間の建物と考えられるが、東方の調査区外にのびる可能性もある。柱穴の深さは検出面より0.14m程しかなく、上部は現代の耕作土で削平されている。遺物は柱穴から早島式土器碗底部片が1点出土した。鎌倉時代。(物部)

(2) 柱穴列 (第34図 図版8)

1区の南半に所在する。1辺0.5~0.6mの方形の堀形をもつ柱穴が4基検出された。基盤層は南西に向けて下降しており、柱穴列の南側に対になる柱穴があった可能性は残る。出土遺物は無く、時期不明であるが、古代と考えている。総社市の調査によって検出された建物群とは主軸を異にする。(物部)



第33図 掘立柱建物 (1/60)



第34図 柱穴列 (1/60)

(3) 溝

溝17 (第35図)

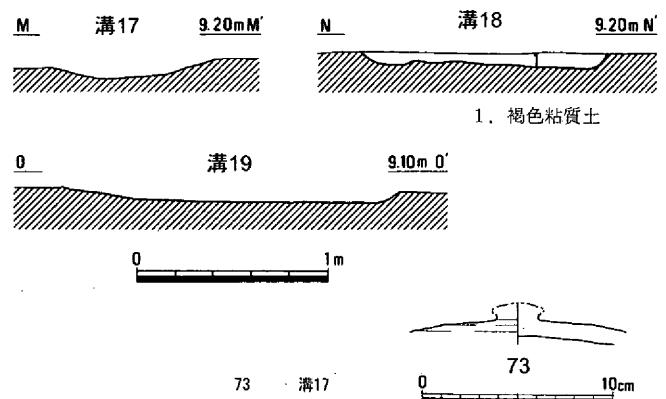
1区の南半、溝14と15の中間に位置する。幅0.87m、深さ0.08mを測る。須恵器蓋73が1点出土。時期は8世紀以降と考えられるが、埋土が黄色土なので中世まで下る可能性もある。(物部)

溝18 (第35図)

1区北半に位置し、竪穴住居4を切る。幅1.5m、深さ0.07m。時期は住4の遺物の中に混入した8世紀の須恵器の摘付き蓋片があり、それ以降と考えられる。(物部)

溝19 (第35図)

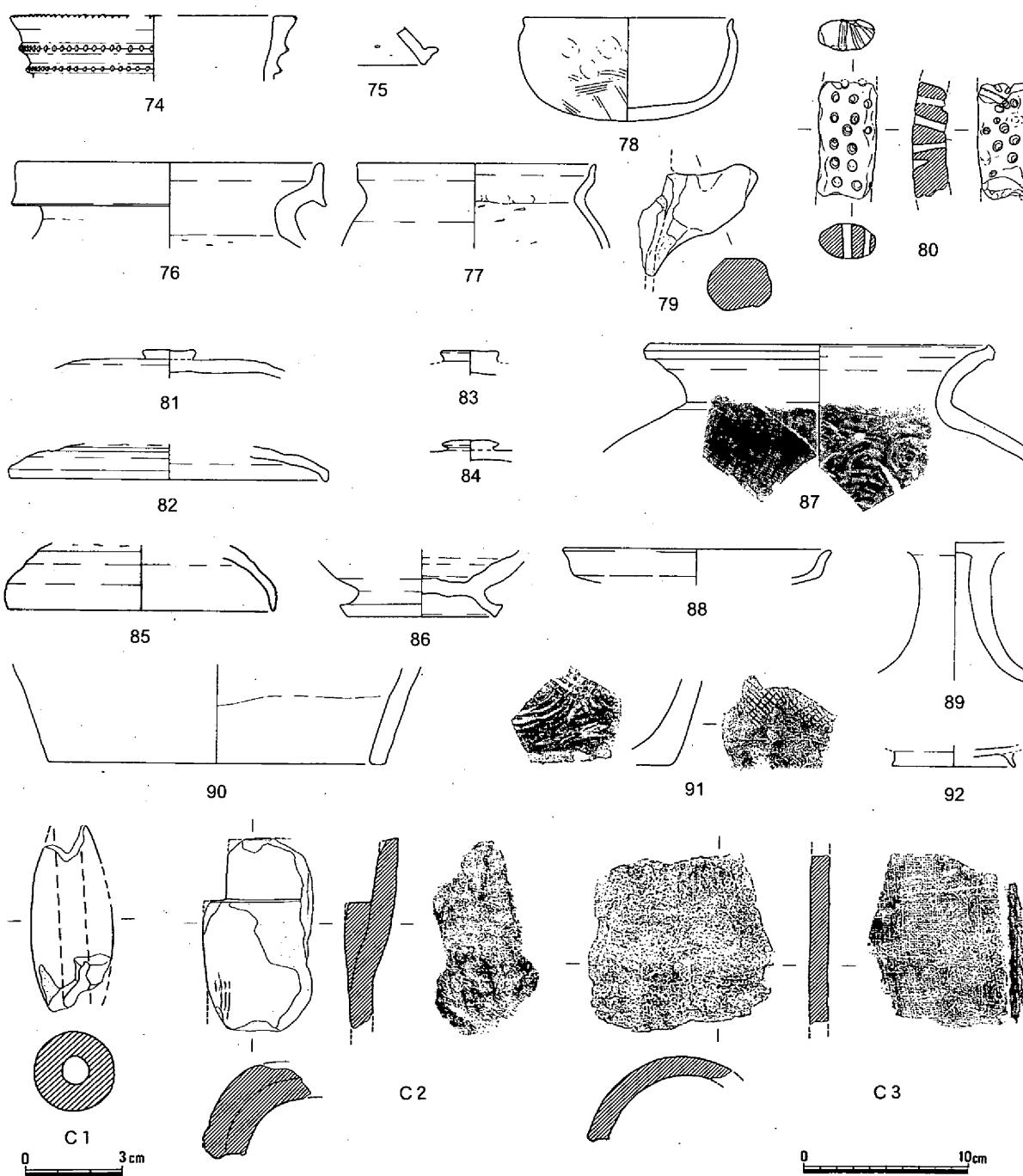
2区に所在する。幅1.8m、深さ0.07mを測る浅いたわみ状の溝である。時期は格子目タタキのある須恵器甕片が1点出土しており、古代～中世。(物部)



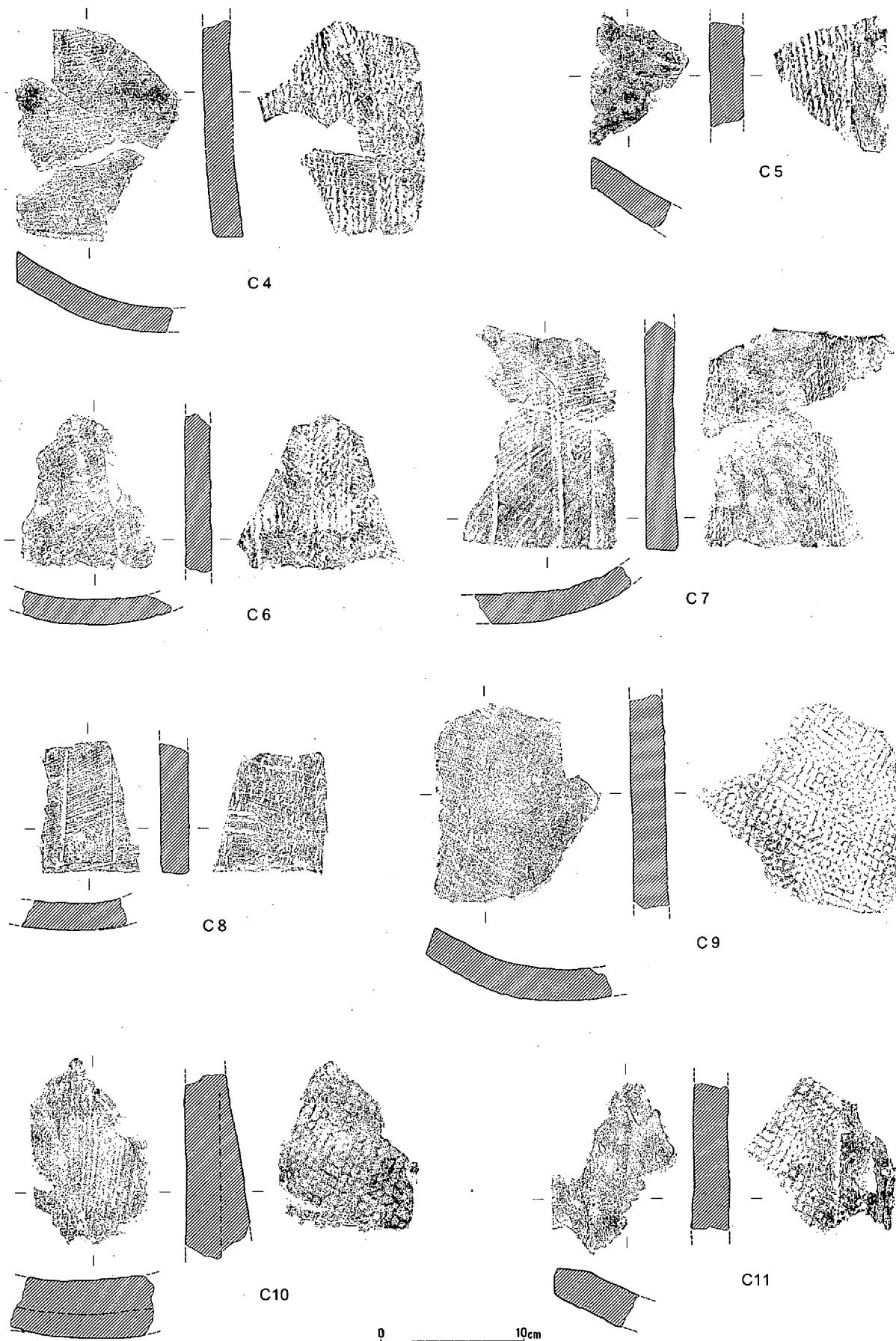
第35図 溝17~19・出土遺物 (1/40・1/4)

第5節 遺構に伴わない遺物

遺構検出段階で出土したもの、および時期の異なる遺構に混入していたものを掲載する。82・C9～C11は13区、74・75・83は2区、それ以外は1区から出土した。74は弥・中・Ⅱの壺、75は弥・中・Ⅲの高杯、76・77は弥・後・Ⅳの壺と甕である。78は口縁端部に縫を持つ土師器の鉢、79は土師器の把手。80は不明品である。時期は古墳時代以前。81～86は須恵器、88～90は土師器の皿・高杯・甕である。91は亀山焼の甕、92は早島式椀。瓦片は1・2区で21点、13区で3点出土した。C2の丸瓦は粘土を貼り付けて玉縁を作り出している。平瓦は凸面縄目、凹面布目のものがほとんどで、糸切り痕・模骨痕も明瞭にみられる。13区出土のC9～11はすべて凸面格子目であった。(物部)



第36図 遺構に伴わない遺物1 (1/4・1/2)



第37図 遺構に伴わない遺物2（1/4）

第4章 三須畠田遺跡

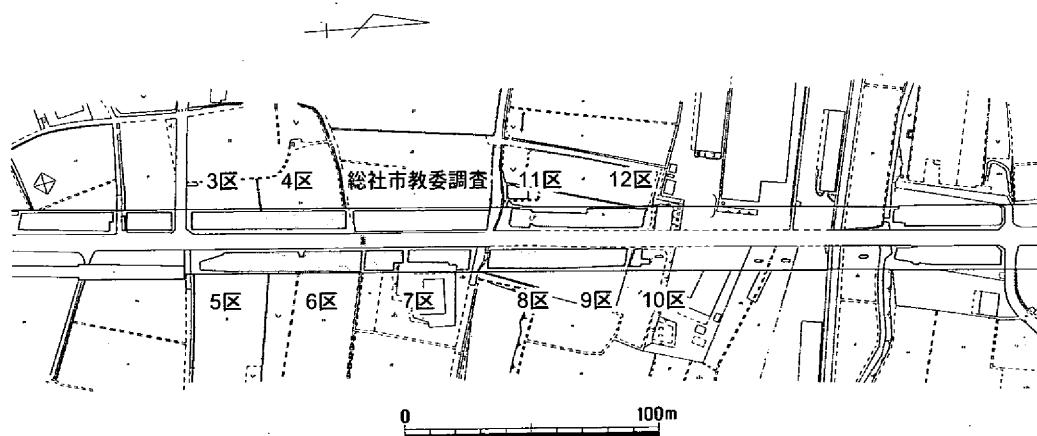
第1節 調査の概要

三須畠田遺跡は東西に流れる川幅約100mの旧河道南岸に発達した自然堤防上に立地する弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。総社市三須字畠田に所在し、北緯 $34^{\circ}40'18''$ 、東経 $133^{\circ}46'25''$ に位置する。当初、三須河原遺跡を含め、三須畠田遺跡として調査を行ったが、2区北半から3・5区にかけて浅い低位部が確認され、低位部および北の微高地を三須畠田遺跡と呼称することにした。

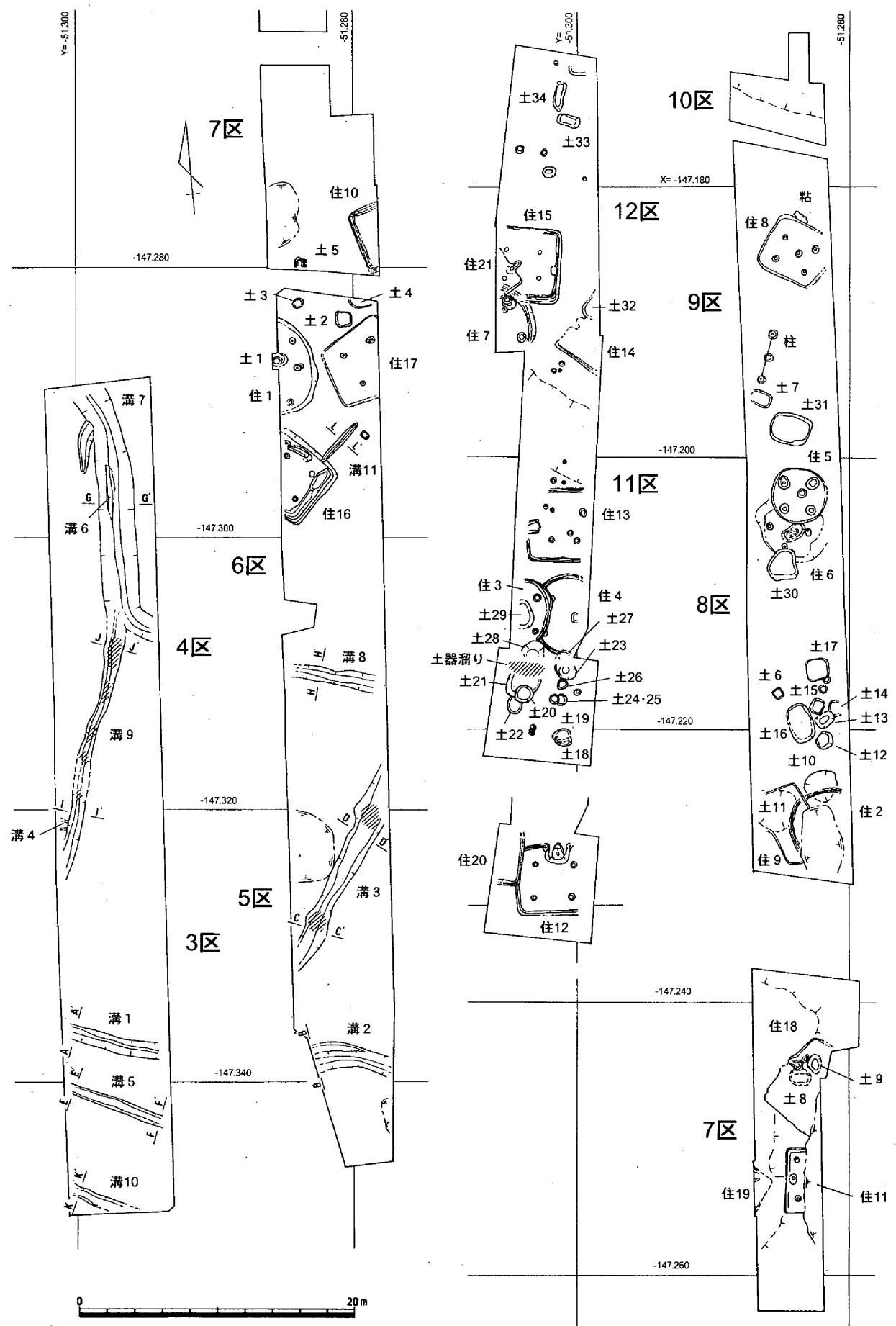
この微高地の大きさは南の低位部から北の旧河道まで約130m、東は平成8年度に総社市教委の圃場整備に伴う確認調査により、国道から約150mまで、弥生時代～古墳時代の竪穴住居などが確認されている。西側については不明であるが、大きく広がる可能性がある。

遺構は現代水田耕作土直下で検出され、検出面の標高は9.4m。低位部の幅は約50m。現代耕作土下には厚さ20cmほどの近世以降の水田層、その下に厚さ10cm前後の中世水田層がみられ、微高地から低位部にかけての斜面部では特に厚い。その下が基盤層で遺構面になり、標高約9.0mである。

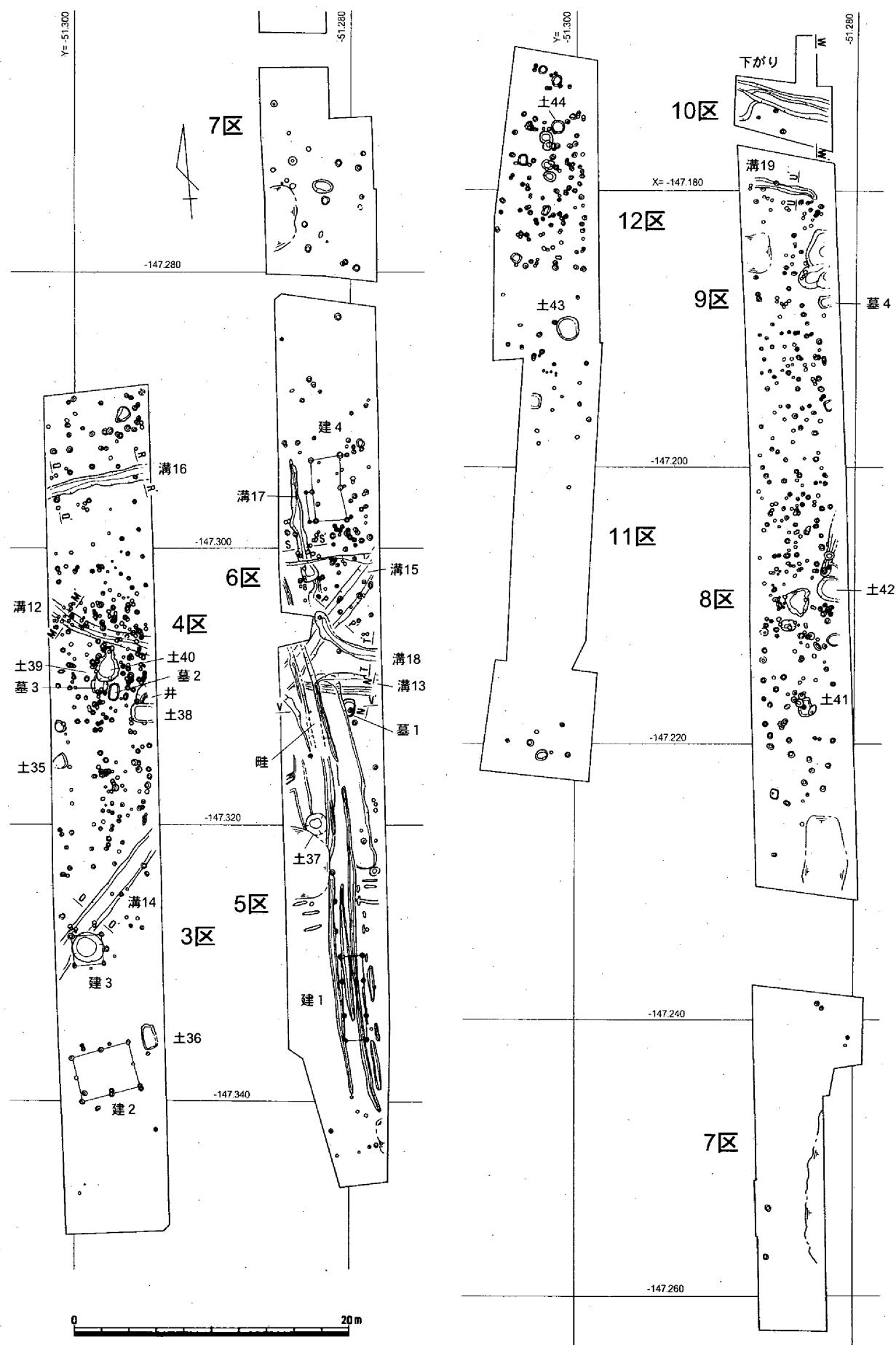
三須畠田遺跡の今回の調査で検出された遺構の中で一番古い時期のものは弥生時代中期後葉の竪穴住居1軒、土壙7基、溝3条などである。出土土器もかなり大量にあり、時期の違う遺構埋土にもほとんどにこの時期の土器片が混入している状況がみられた。弥生後期前葉には土壙9基が検出されたが、8・11区の南半に群集する特徴がある。後期中葉には遺構・遺物とも僅かになる。後期後葉～末になると、遺構は竪穴住居7軒、土壙12基など格段に増加し、遺物も大量に出土する。古墳時代に入り、前期から中期にかけて再び遺構・遺物が希薄な状態になるが、後期前半に竪穴住居4軒、後期後半に竪穴住居5基と増え、平成3年度の総社市教委の調査ではこの時期の竪穴住居が12軒、掘立柱建物が2棟検出され、三須畠田遺跡の最も中心となる時期である。古代前半の遺構は土壙1基、溝1条であり、遺物も少ない。古代後半にはさらに少なくなる。古代末から鎌倉時代には微高地を中心とし、低位部まで多数の柱穴が検出される。15世紀頃から低位部の水田化が始まり、微高地上もおそらくこの時期水田へと変化していった可能性がある。なお、遺物には弥生前期中葉および中期前半の土器も僅かながら出土しており、この遺跡の形成がその時期までさかのぼる可能性がある。（物部）



第38図 調査区配置図 (1/3000)



第39図 遺構全体図・弥生～古墳時代 (1/400)



第40図 遺構全体図・古代以降 (1/400)

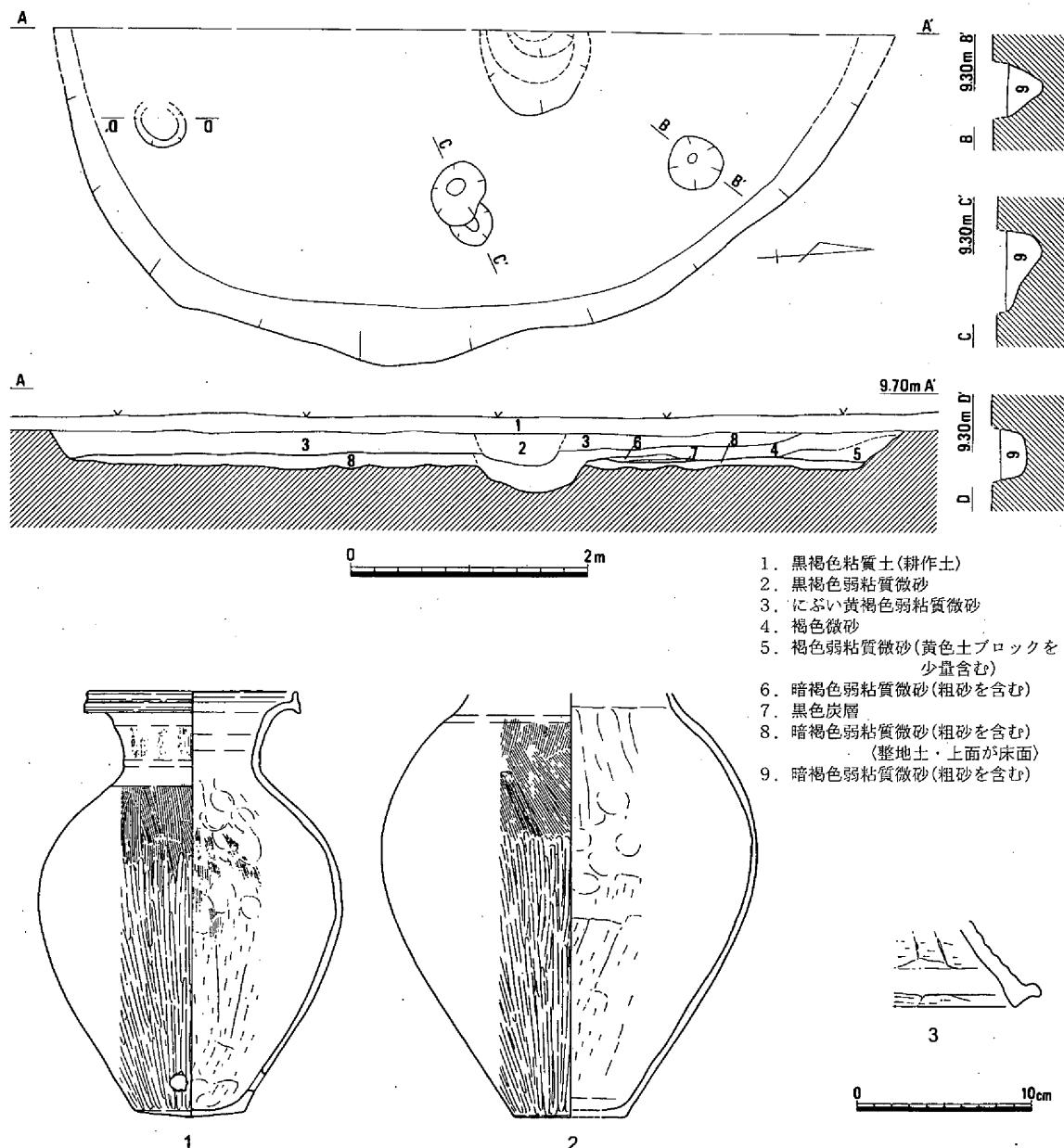
第2節 弥生時代の遺構・遺物

(1) 壁穴住居

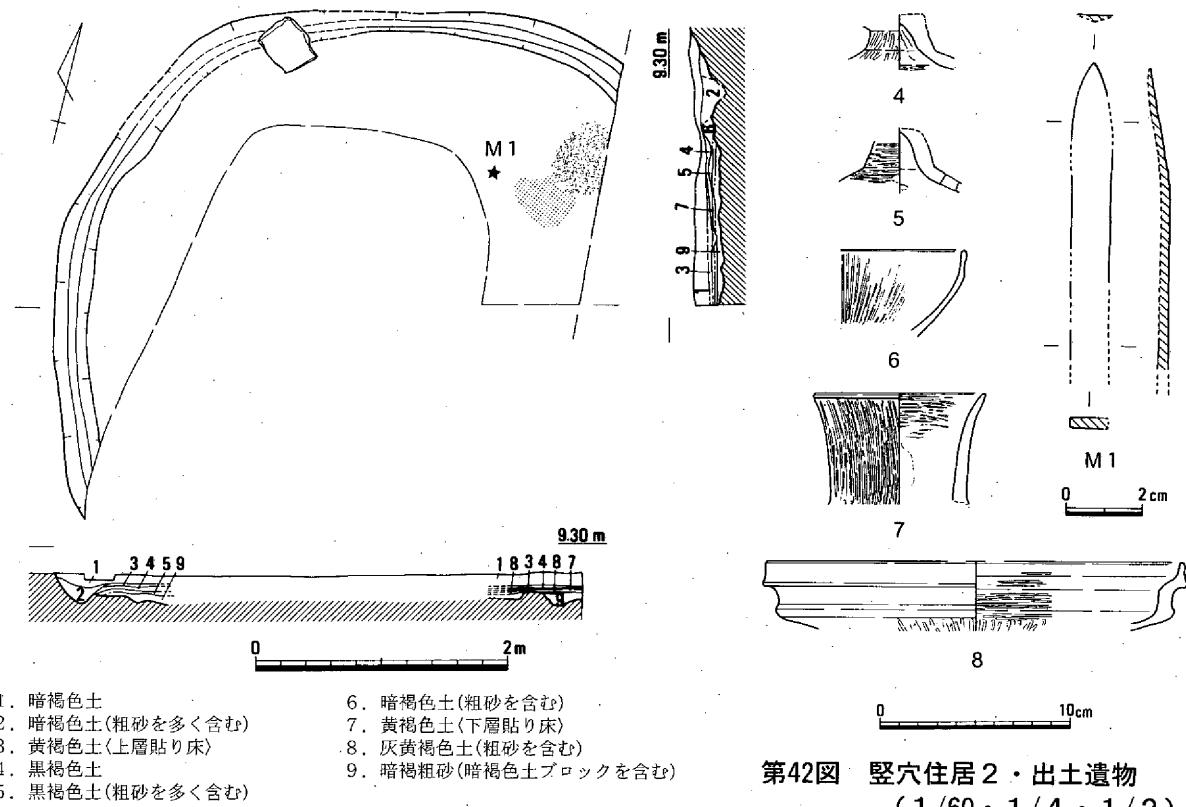
壁穴住居1 (第41図)

6区北半部で検出された円形の住居である。西半分は調査区外になる。土壙1が埋土を切り込んで掘られている。壁穴住居1の直径は推定7.4m、床面標高9.12m。壁は粗砂が基盤のため、かなり崩れている。床面は第8層(整地土層)上面の水平面と考えられ、一部に炭層もみられた。柱穴は整地土層を除去した段階で3基確認された。柱穴の間隔を計算すると、7~8本柱と推定される。住居の中央やや北東よりに直径約1m、深さ0.35mの浅い土壙がある。遺物は住居の東側肩部から流れ込んだ状況で少量出土した。1は壺で2/3程に復元された。体部下端に穿孔がみられる。2は甕、3は器台の脚部である。いずれも灰白色を呈する。時期は弥・中・Ⅲと考えられる。

(物部)



第41図 壁穴住居1・出土遺物 (1/60・1/4)



第42図 壇穴住居2・出土遺物
(1/60・1/4・1/2)

壇穴住居2 (第42図 図版15)

8区の南端で検出された。中央部を現代の攪乱が入る。また、壇穴住居9に西半部を切られ、土壙10・11を切っている。直径5.8mの円形住居である。柱穴は確認されなかった。黄褐色土の貼り床2面が明瞭に観察された。上層貼り床面は8.96m、下層貼り床面は8.93mを測る。上層の貼り床面の北東部で直径0.5m程の焼土面と炭の散布面がみられた。北側の壁際で40cm台の各礫が上面を水平にして検出されたが、使用痕はみられない。出土遺物は200片あまりあったが、すべて小片であった。4の高杯は壁体溝、5・6の高杯は貼り床土中、7の直口壺と鉄製のM1は上層床面上から出土。8は埋土中から出土した備中南西部のチョコレート色を呈する丹塗りの高杯。時期は弥・後・IV。(物部)

壇穴住居3 (第43図)

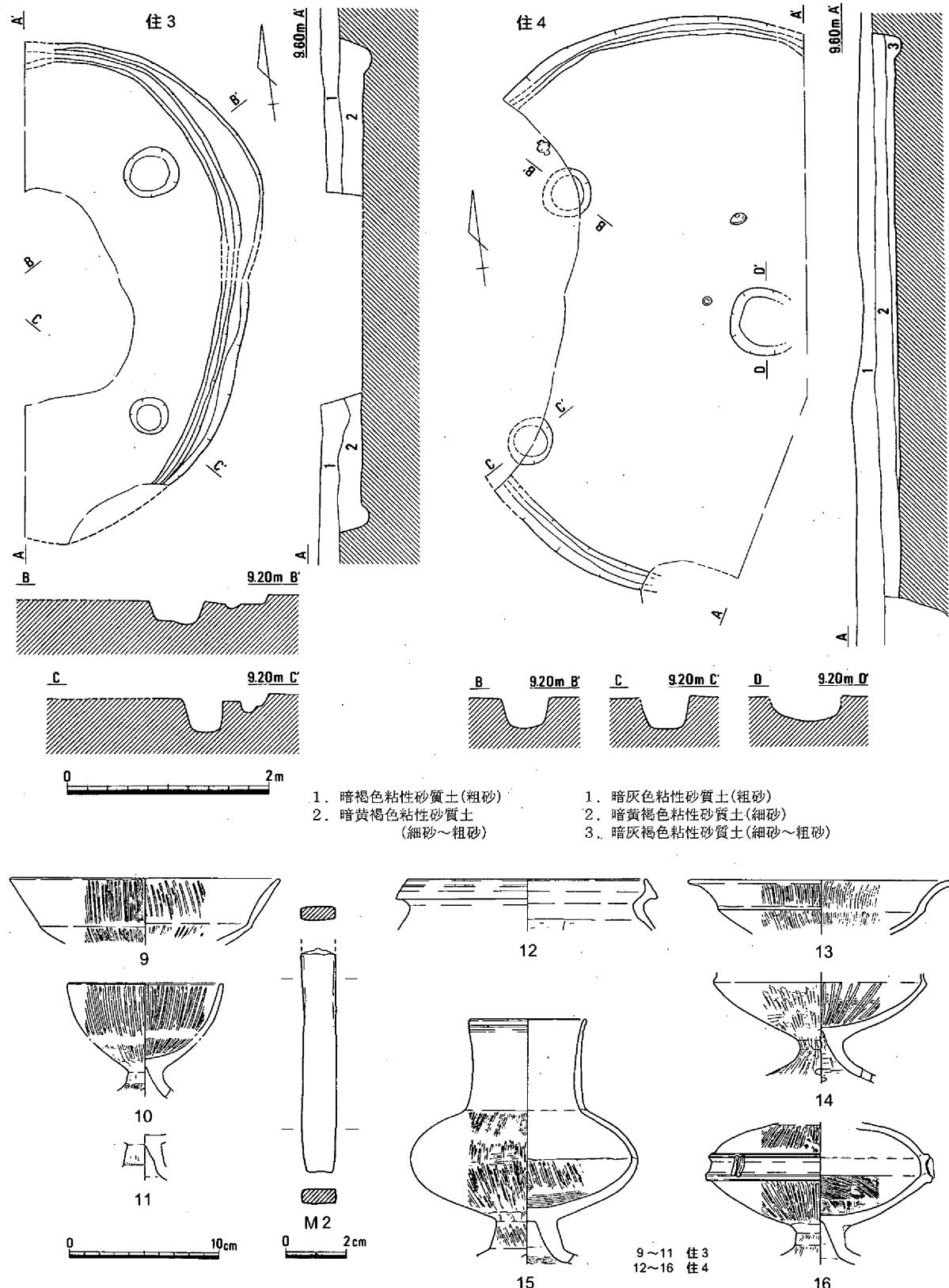
壇穴住居4の西にあり、土壙28に南側・土壙29に西側を切られている遺構である。西側は調査区外に延び全体は検出しえなかったが、平面形は直径5.0mの円形を呈すると思われる。検出面からの深さは約0.3mで、ほぼ平らな床面をもつ。床面の外側には幅0.2~0.25m、深さ0.1~0.15mの壁体溝を巡らしている。主柱穴は2基のみを確認しているが、全体では4基あったものと想定される。柱間距離は0.244mを測る。また、壁面は壁体溝からはなれ少し外側に張り出して存在し、その張り出し部分のレベルは床面より幾分低い。建て替えによるものだろうか。出土遺物には高杯9~11があり、9・10は内・外面に縦方向のヘラミガキがなされている。この遺構の時期は弥・後・IIIか。(蛇原)

壇穴住居4 (第43図 図版15)

壇穴住居3の東隣に位置する。土壙27に南側の一部を切られ、東側は調査区外に延びるが、残存部より直径5.87mの円形を呈すると思われる。床面は検出面より約0.25mの深さにあって、外側には壁に沿って幅0.2~0.25m、深さ0.1mの壁体溝が掘られている。埋土は2層に分かれるが北側から南側に向かって傾斜するように堆積している。主柱穴は2基確認しているが、その位置関係から床面全体

では4基ないしは5基あったと考えられる。また、中央穴は円形で径0.7mを測り、堆積土中には炭が含まれていた。遺物は12が甕で、13・14が高杯、15・16が台付壺である。16は胴部に棒状浮文が2本単位で施されている。この遺構は弥・後・Ⅲの範疇に入るであろう。

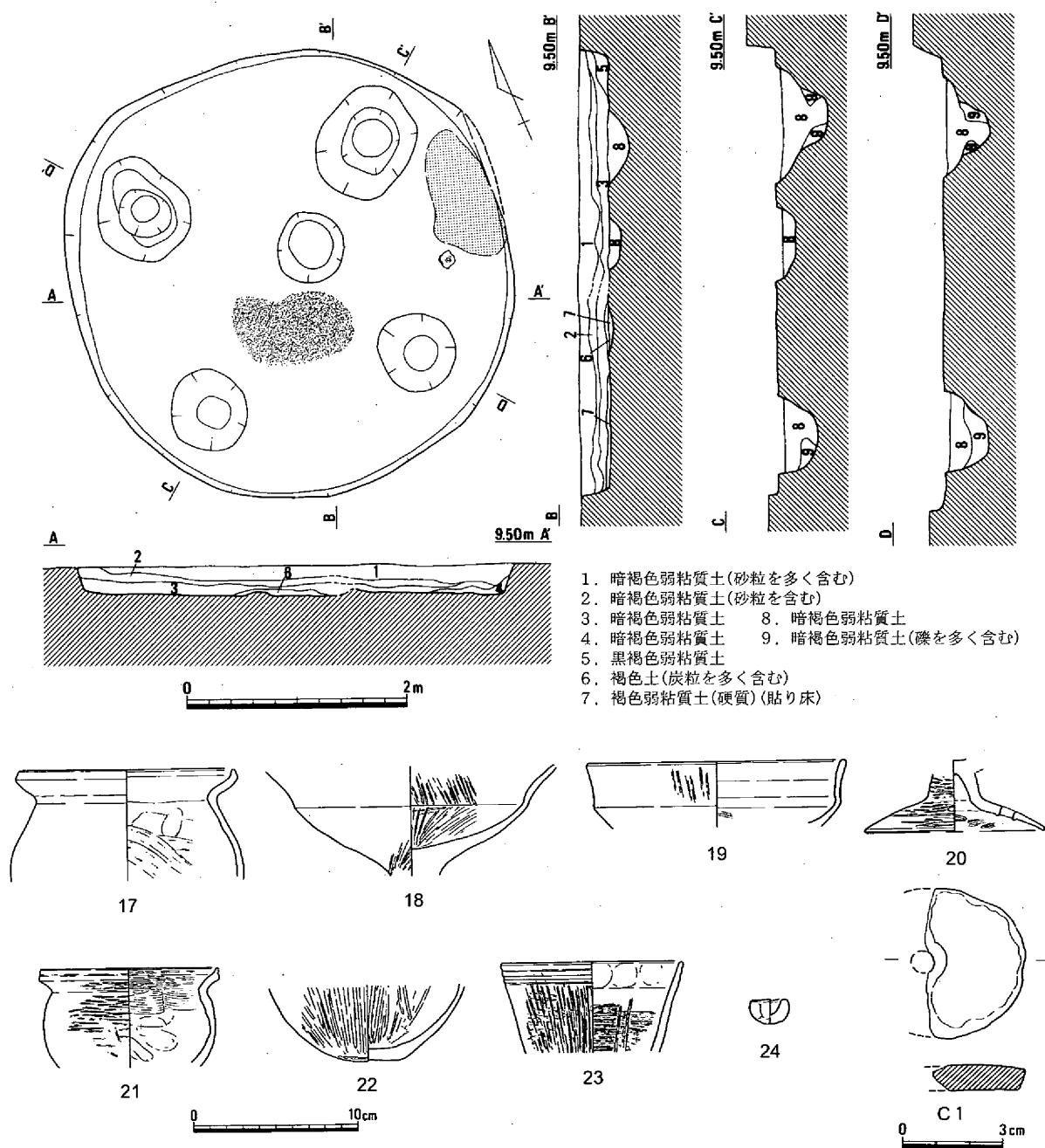
(姥原)



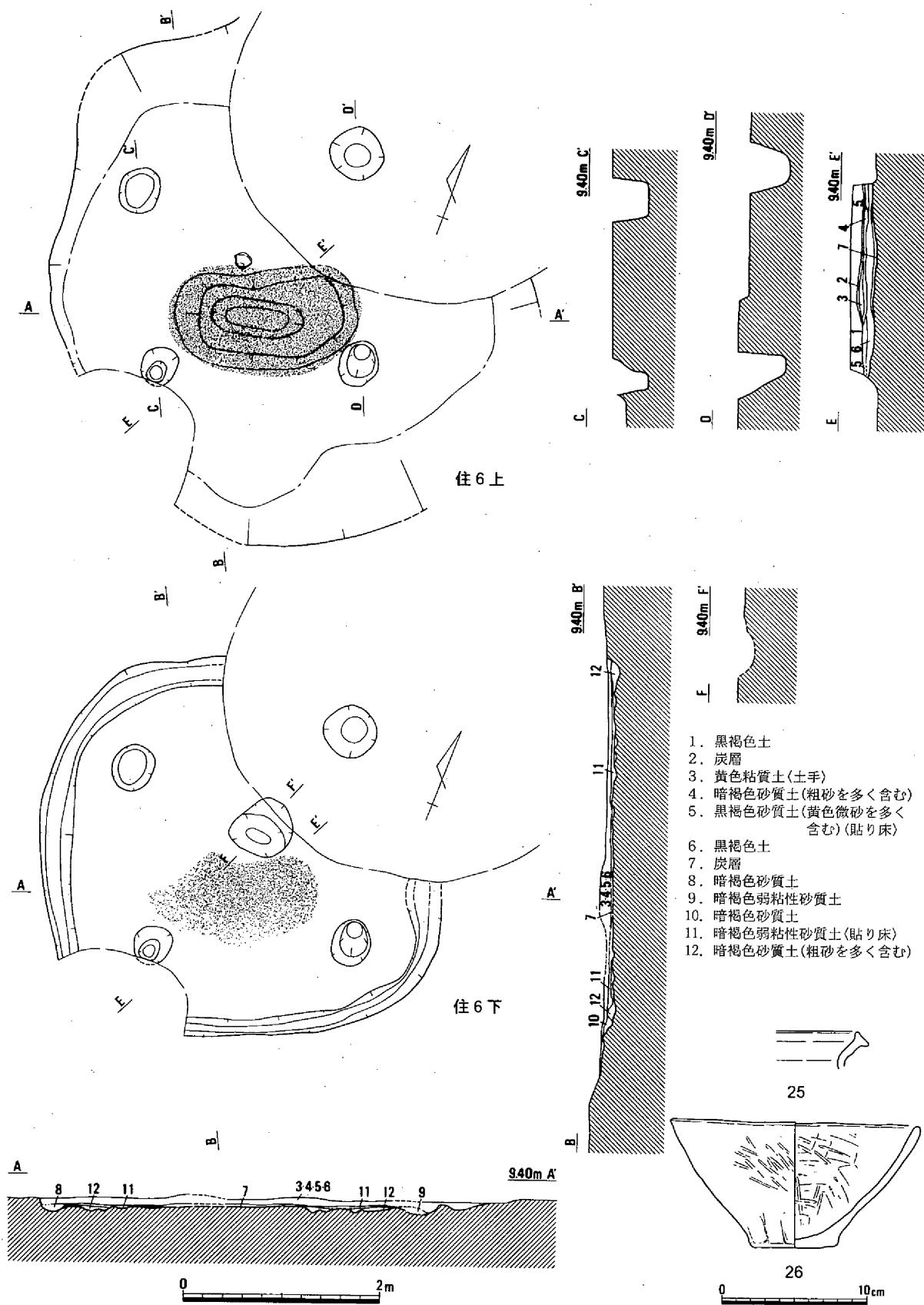
第43図 壇穴住居3・4・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)

堅穴住居5（第44図）

8区と9区の境に位置し、後述する堅穴住居6を切っている。直径4.00mの円形を呈し、検出面からの深さは0.25m、床面の標高は9.04mを測る。住居の底面は微高地の基盤である礫層に達し、床面の窪んだ部分に褐色弱粘質土の固く締まった貼り床がみられた。直径1.0~0.7m、深さ0.4m前後の柱穴が4基、また中央やや北東よりに直径0.6m、深さ0.1mの浅い中央穴が礫層を穿って掘り込まれている。この中央穴の南側1.1×0.6mの範囲に炭の散布がみられた。東壁沿いには、1.2×0.5mの範囲に焼土が広がっていたが焼土面ではなく、多量の焼土粒が堆積したものであった。遺物はすべて埋土中から出土したもので小片ばかりである。17は甕、18~20は高杯、21・22は小形の鉢、23は直口壺、24は非常に小さな手捏ね土器、C1は土製紡錘車である。20・21・23・24は精良な胎土を持つ。流入した土器なので正確さに欠けるが、弥・後・III~IVの範疇で考えられる。（物部）



第44図 堅穴住居5・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)



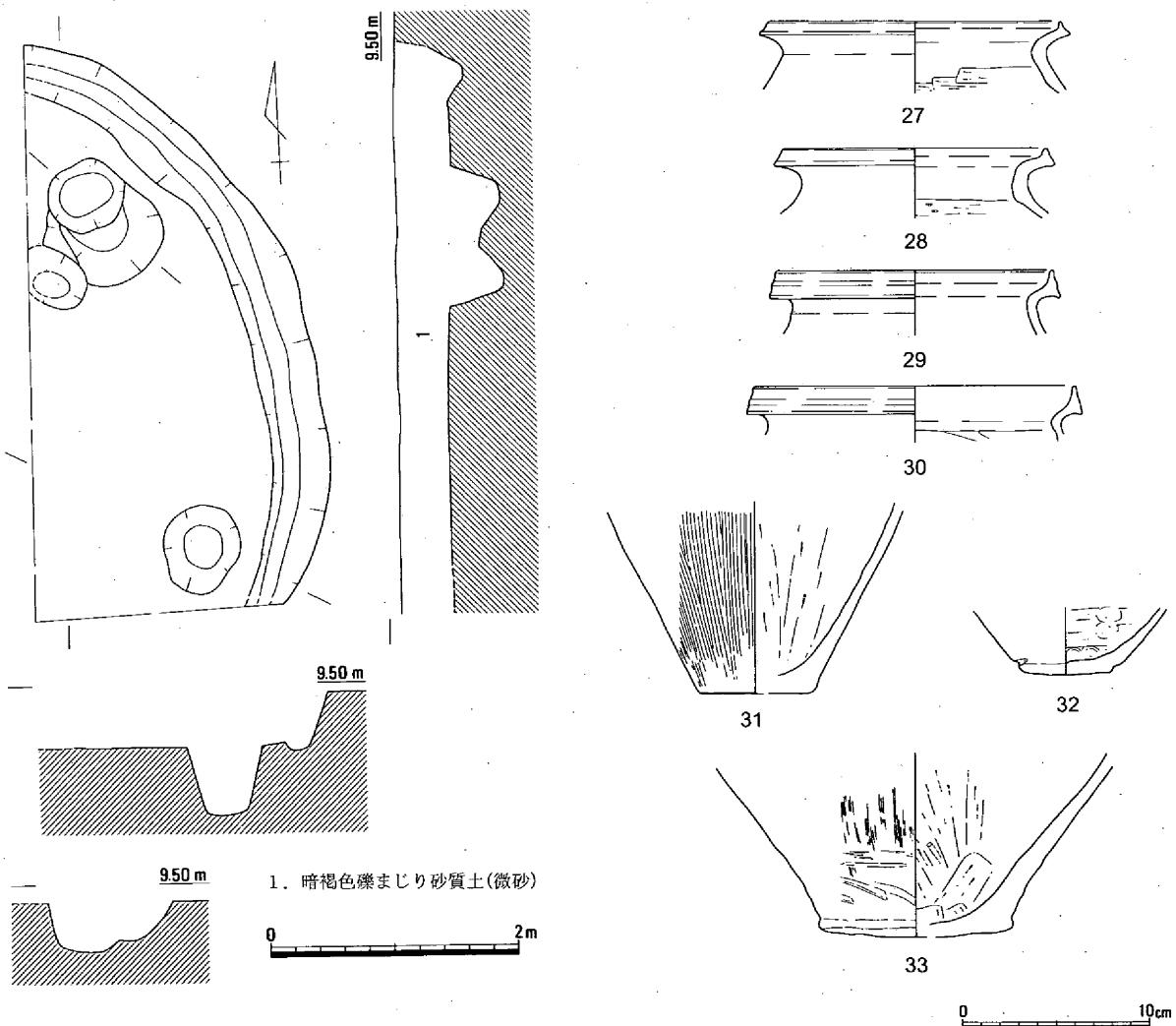
第45図 壇穴住居6・出土遺物 (1/60・1/4)

豊穴住居6（第45図 図版11・15）

8区北部に位置し、豊穴住居5に北側1/4を削平されている。貼り床2面が確認された。上層床面の標高は9.14m、下層の床面は9.10mを測る。上層床面に伴う住居は上半部を削平され、輪郭は不明。ただ、黄色微砂を含む貼り床は明瞭で平面的に追うことができた。この貼り床が北側と東側で下層の住居の輪郭の外に広がっていることから拡張したものと考えられる。床面中央には黄色粘質土を使って幅0.4～0.7mの土手を長方形に巡らしている。また土手の上面全面に炭が散布している。柱穴は4基確認された。下層床面に伴う住居では壁体溝が確認された。平面形は3.76×3.70mの隅丸方形を呈する。柱穴は上層床面で確認された4基以外には検出されず、拡張の際、柱の移動はなかったと思われる。床中央やや北寄りに浅い中央穴があり、その南に1.7×0.7mの範囲に炭の散布がみられる。出土遺物26は上層床面に接して出土した鉢、27は柱穴から出土した甕である。下層床面に伴う土器はないが、上層床面と大差ないと思われ、弥・後・Ⅲの範疇に収まると考えられる。（物部）

豊穴住居7（第46図 図版11）

12区の南西隅に位置する。調査区の制約で豊穴住居の東側のみを調査した。豊穴住居の平面形は円形で、周囲に壁体溝がめぐる。復元で径約6.7mを測る。住居床面から柱穴と考えられる穴を2基検出した。そのうち、南側のものは径0.7m、深さ0.45mを測る。北側のものについては複数の柱穴の

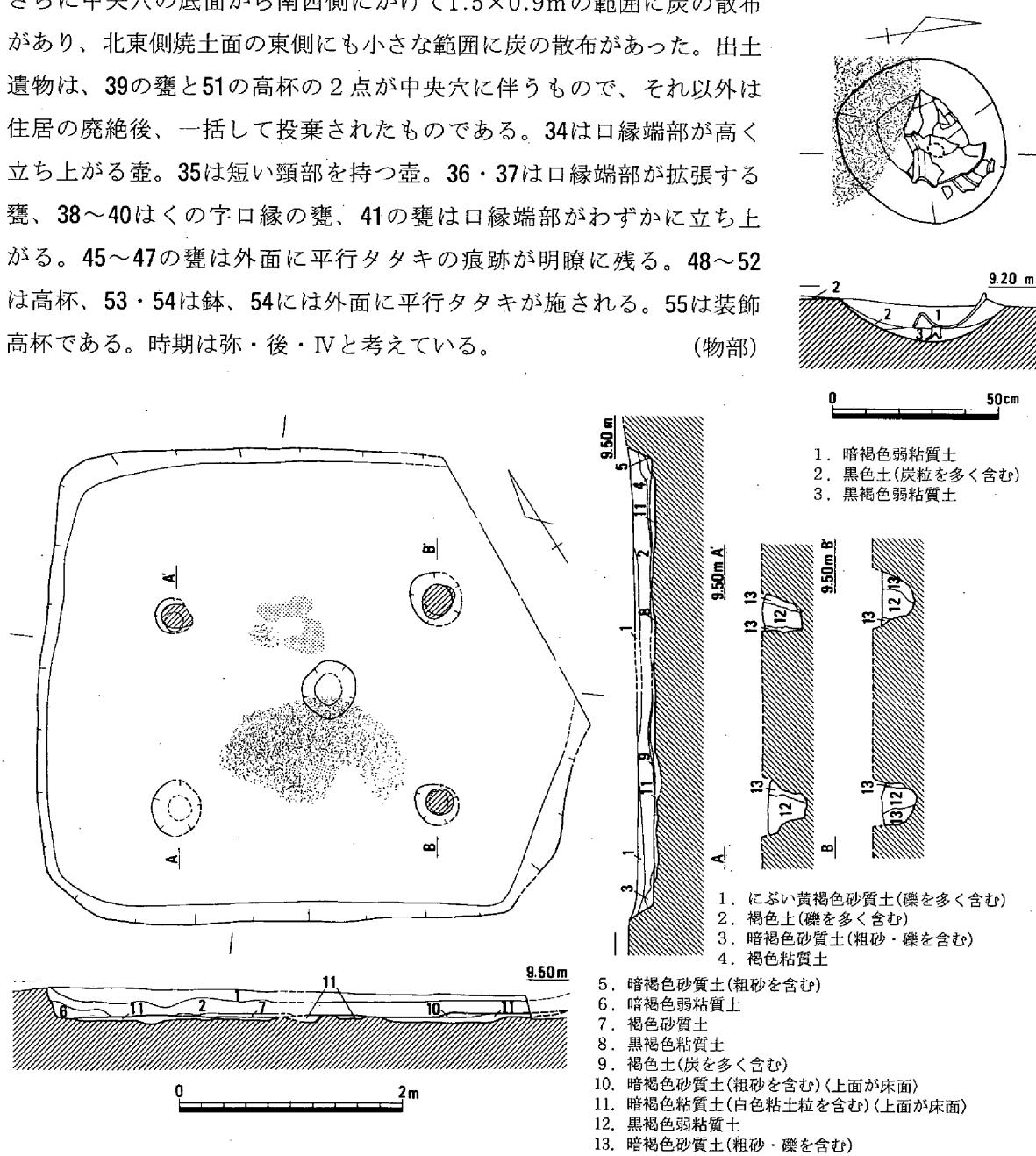


第46図 豊穴住居7・出土遺物（1/60・1/4）

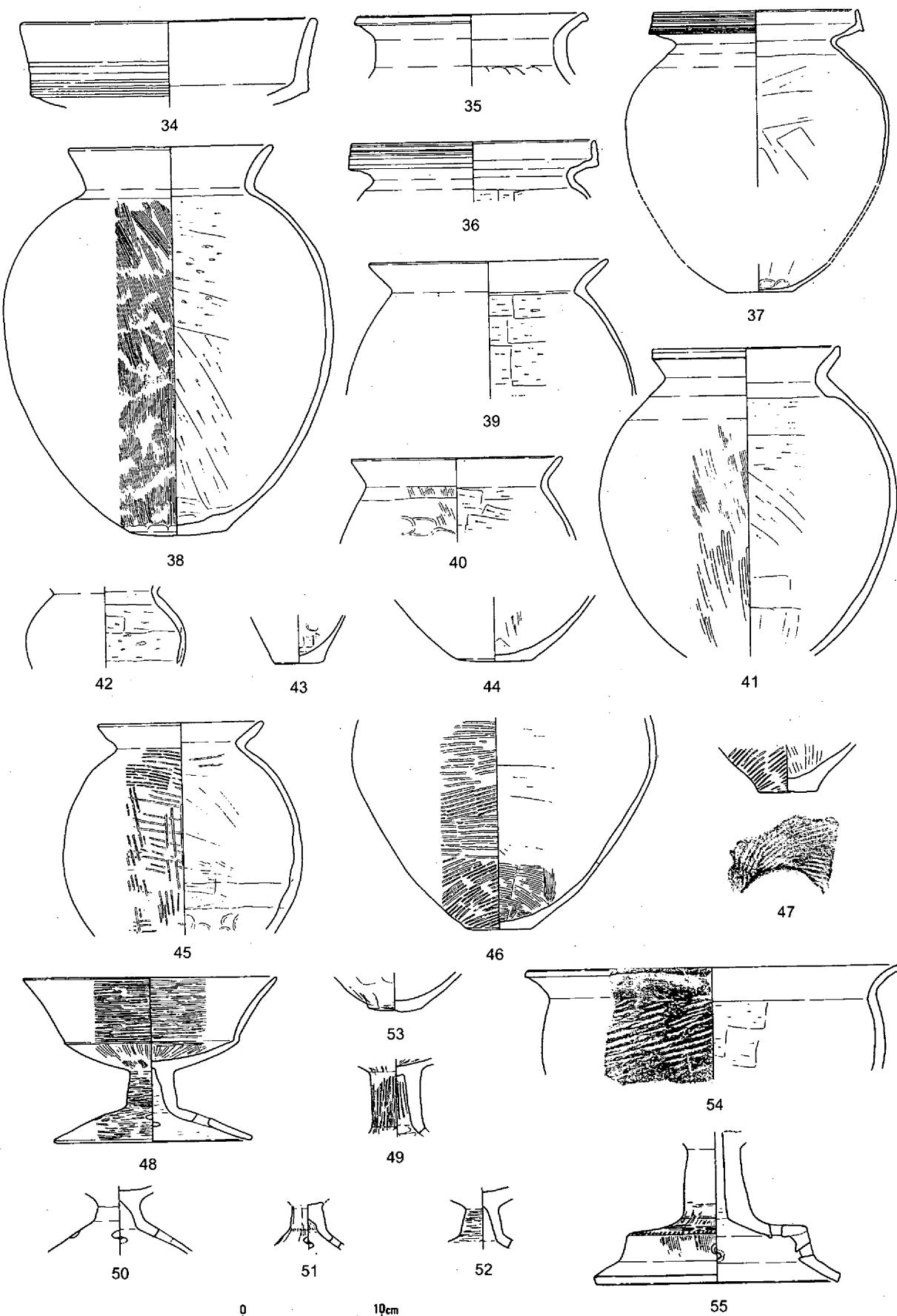
痕跡がみられ、径約0.6~1m、深さ約0.4mを測る。住居跡内には礫を含む暗褐色土が堆積しており、埋土中から弥生土器が出土した。27~30は甕の口縁部である。31~33は底部である。これらの出土遺物から、この住居跡の時期は弥生・後・Ⅲであると推測できる。
(金田)

竪穴住居8（第47・48図 図版11・15）

9区北半に位置し、後述の粘土塊を切っている。東角が一部調査区外になる。平面形は南東辺がやや開き気味であるが、4.95×4.28mの方形を呈する。底面は微高地の基盤である礫層上面に達し、3~8cmの整地土（第10~13層）を敷いて床面を整えている。床面の標高は9.18mを測る。柱穴は直径0.4~0.5m、深さ0.4m前後のものが4基検出された。そのうち3基には柱痕が確認できた。また、直径0.5m、深さ0.1mの浅い中央穴がある。その北東側と南西側に小さな焼土面がみられた。さらに中央穴の底面から南西側にかけて1.5×0.9mの範囲に炭の散布があり、北東側焼土面の東側にも小さな範囲に炭の散布があった。出土遺物は、39の甕と51の高杯の2点が中央穴に伴うもので、それ以外は住居の廃絶後、一括して投棄されたものである。34は口縁端部が高く立ち上がる壺。35は短い頸部を持つ壺。36・37は口縁端部が拡張する甕、38~40はくの字口縁の甕、41の甕は口縁端部がわずかに立ち上がる。45~47の甕は外面に平行タタキの痕跡が明瞭に残る。48~52は高杯、53・54は鉢、55には外面に平行タタキが施される。55は装飾高杯である。時期は弥・後・Ⅳと考えている。
(物部)



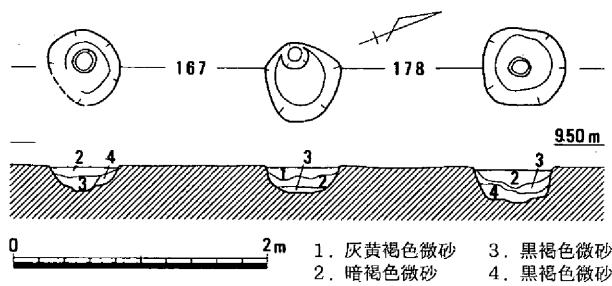
第47図 竪穴住居8・中央穴 (1/60・1/20)



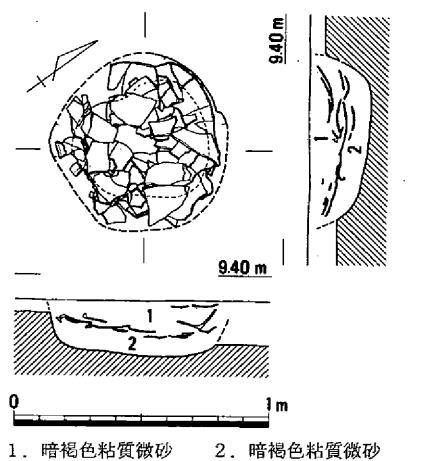
第48図 堅穴住居8出土遺物（1/4）

(2) 柱穴列 (第49図)

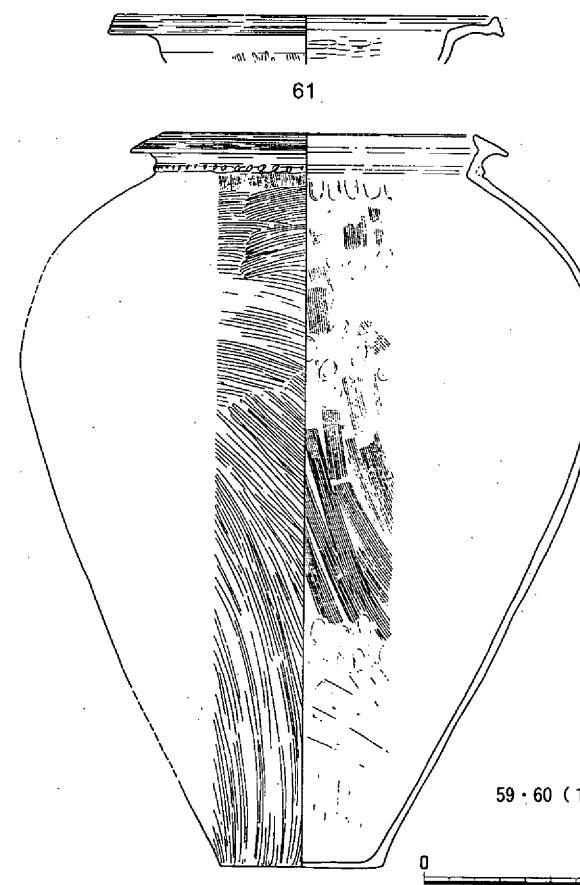
9区で検出され、竪穴住居5と8のほぼ中間に位置する。直径約0.6m前後の不正円形を呈する柱穴が3基並ぶ。主軸は、N-89°-Wである。遺物は混入土器小片のみ。その中に精良な胎土の高杯口縁部があり、緩やかに外反しながら高く立ち上がる特徴から弥・後・IVの時期と考えられる。(物部)



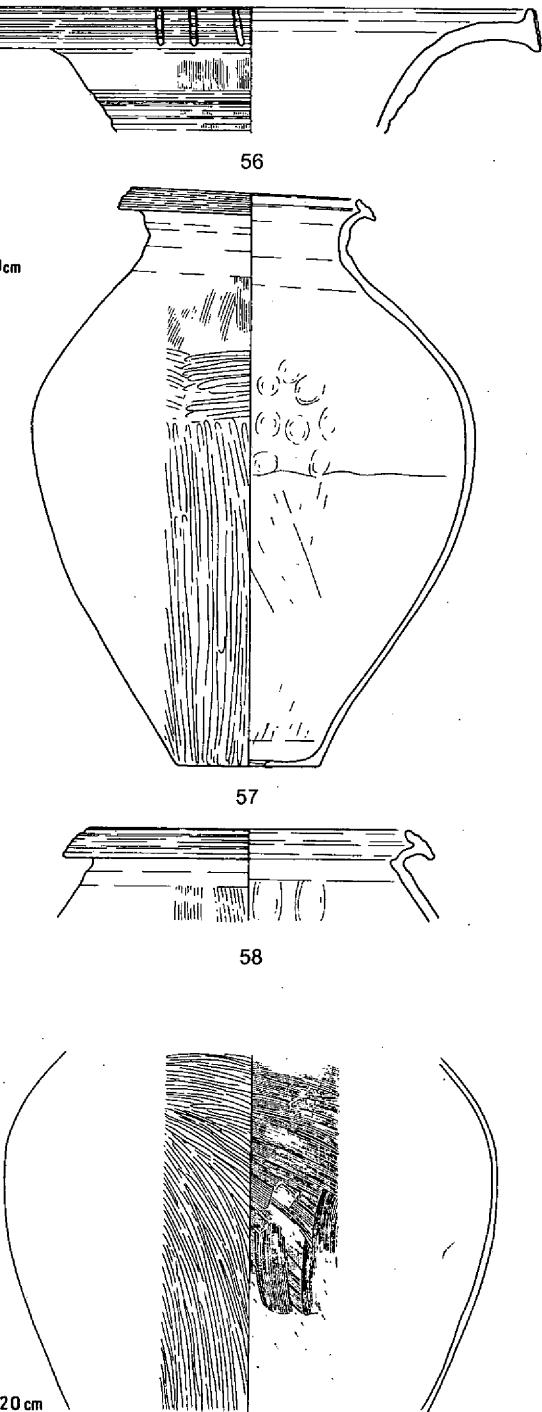
第49図 柱穴列 (1/30)



1. 暗褐色粘質微砂 2. 暗褐色粘質微砂



59



60

第50図 土壌1・出土遺物 (1/30・1/6・1/4)

(3) 土壙

土壙1 (第50図)

6区の北半に位置する。竪穴住居1の中央穴のちょうど上部にあたるが、埋土を切り込んでいることが確認された。直径0.7mの円形を呈す。土壙上半部は現在の耕作土によって削平されている。内部には、器高30.7cmの壺57の上に器高58.7cmの甕59が横位で重なりあってつぶれていた。この2個体はほぼ完形に復元された。57の底部には穿孔がみられる。その他に壺口縁部56、甕口縁～肩部58、甕体部60、鉢61の小片などが認められた。棺身と棺蓋という関係がなく、土器棺墓の可能性はあるが断定できない。時期は弥・中・Ⅲである。

(物部)

土壙2 (第51図)

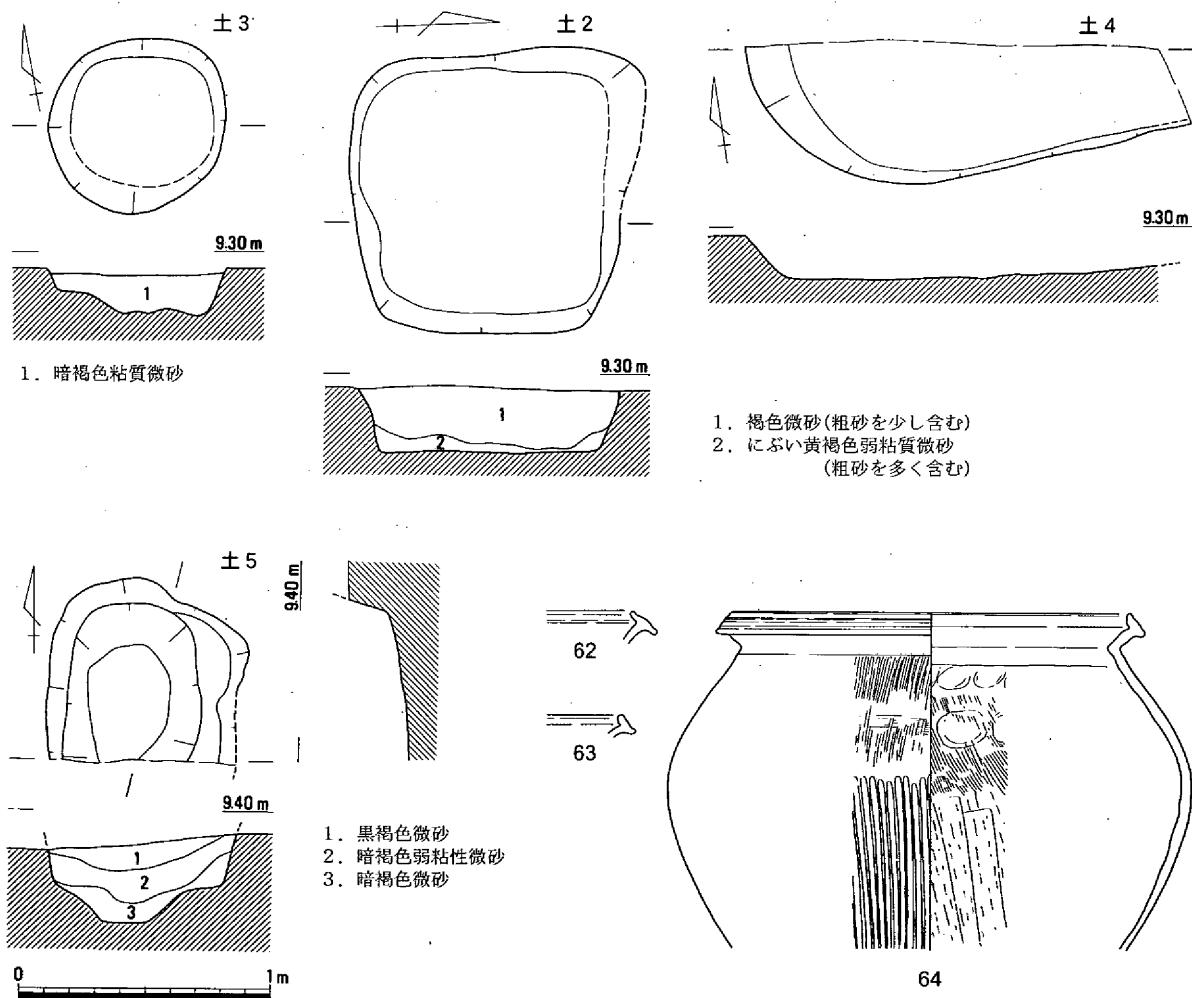
6区の北部、土壙1の北東約4.5mの位置に在る。一边1.1mの方形を呈する。検出面からの深さ0.26mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平らである。埋土から僅かに混入土器小片が数点出土した。甕口縁部62・63の形態は弥・中・Ⅲの時期を示している。

(物部)

土壙3 (第51図)

6区の北部、土壙2の北西約2.5mに位置する。直径約0.77mの円形を呈する。埋土は土壙2とよく似た微砂で、土器小片が少量混じっていた。時期は埋土から弥・中・Ⅲと推定される。

(物部)



第51図 土壙2～5・出土遺物 (1/30・1/4)

土壤4 (第51図)

6区北端に位置し、土壤2の北東側に隣接する。北側と東側が調査区外になるため、正確な形状は不明であるが、7区で検出されなかつたので、2m前後の方形を呈する土壤と推測される。出土遺物は、土器小片が少量。埋土が土壤2・3とよく似ており、土壤4の時期は弥・中・Ⅲと推定する。(物部)

土壤5 (第51図)

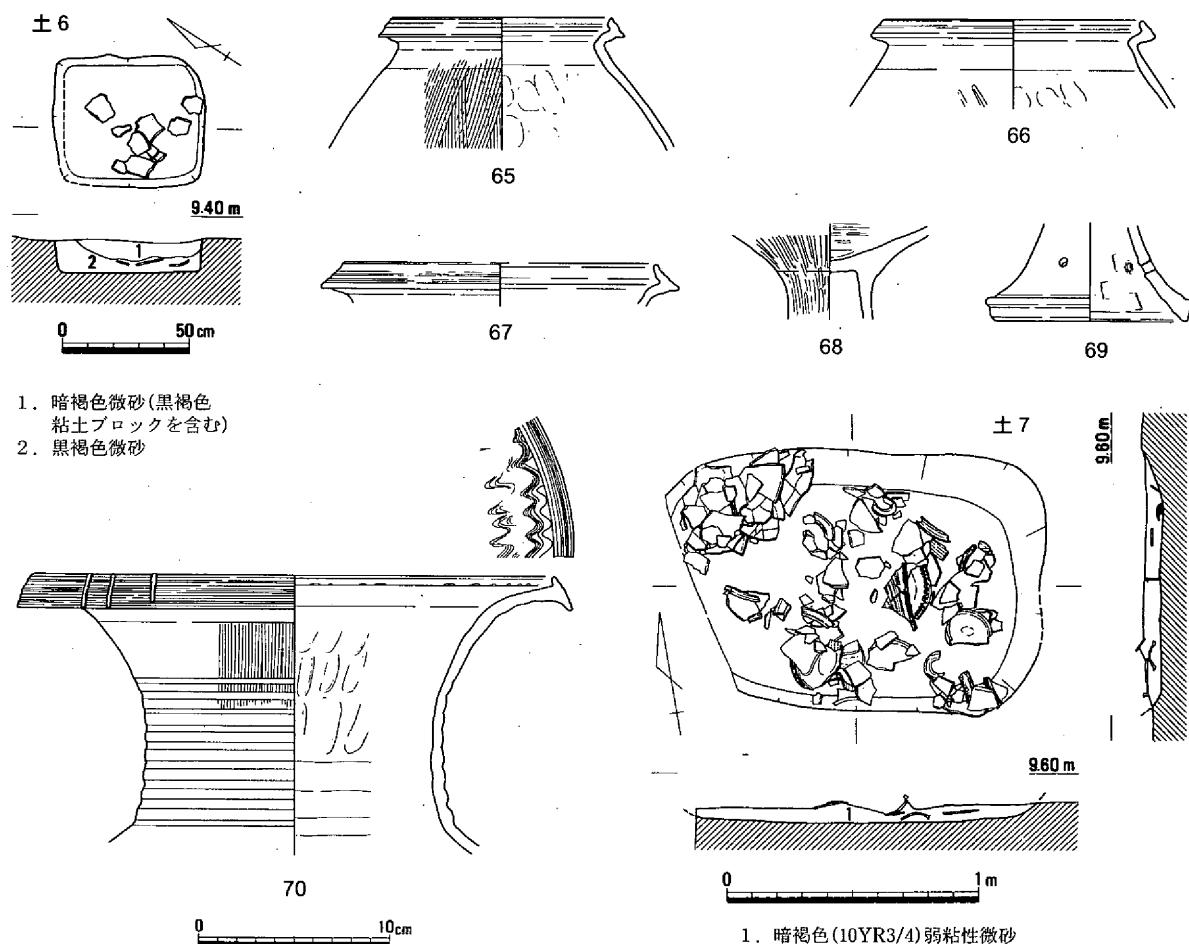
7区南端、土壤3の北約2mに位置する。南部は調査区外になるが、1m前後×0.75mの不正長方形と推測される。2段に掘り込まれ、検出面からの深さは0.3mを測る。遺物は埋土上層から甕の口縁～体部にかけての破片64が1点出土したのみである。時期は弥・中・Ⅲと考えられる。(物部)

土壤6 (第52図)

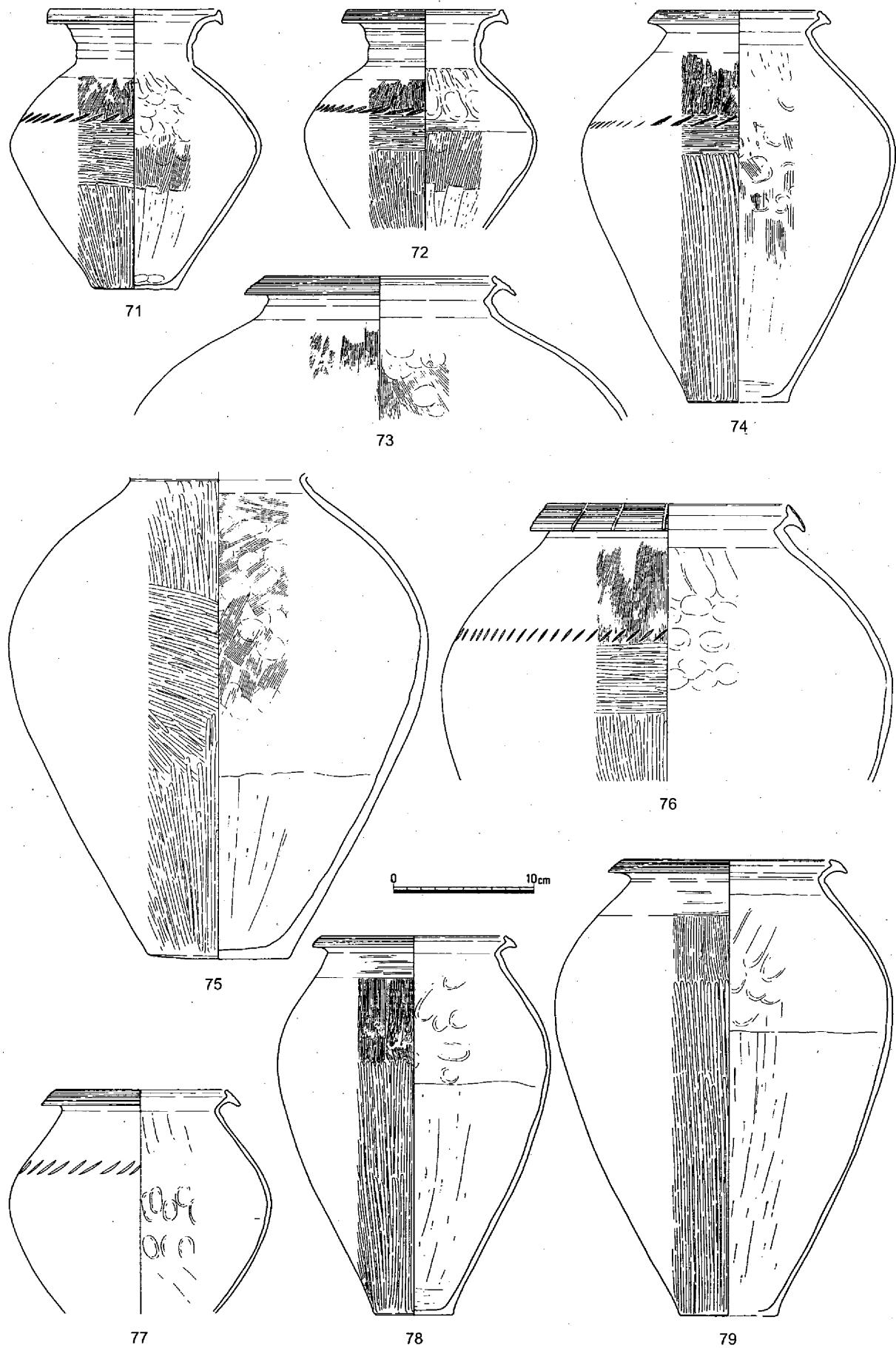
8区の中央部に位置する。平面形は $0.6 \times 0.52\text{m}$ のほぼ正方形を呈し、検出面からの深さは0.15m、底面の標高は9.17mを測る。壁は垂直、底面は平らである。埋土中から土器小片が26点出土した。65～67は甕、68・69は高杯で、すべて灰白色を呈する。時期は弥・中・Ⅲと考えられる。(物部)

土壤7 (第52～54図 図版12・15・16)

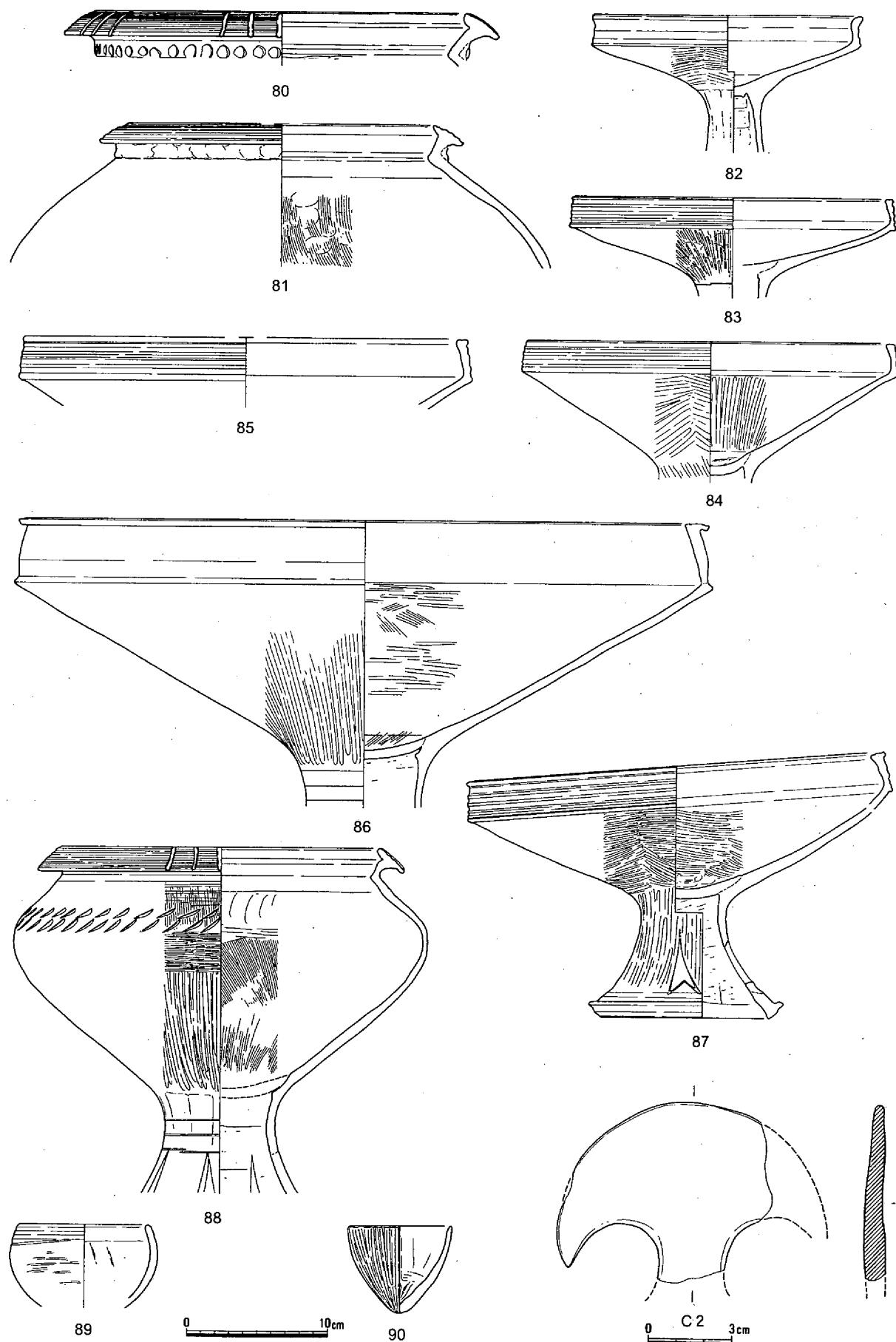
9区の南半部、土壤6から北へ約21mに位置する。 $1.4 \times 1.03\text{m}$ の隅丸長方形を呈する浅い土壤である。内部から多量の土器が出土した。すべて灰白色を呈し、1mm大以下の砂粒を含む比較的きれいな胎土を持つ。70～75は壺である。70は大形で口縁部外面に棒状浮文、口縁部内面に櫛描き波状



第52図 土壌6・7・出土遺物1 (1/30・1/4)



第53図 土壙7出土遺物2 (1/4)



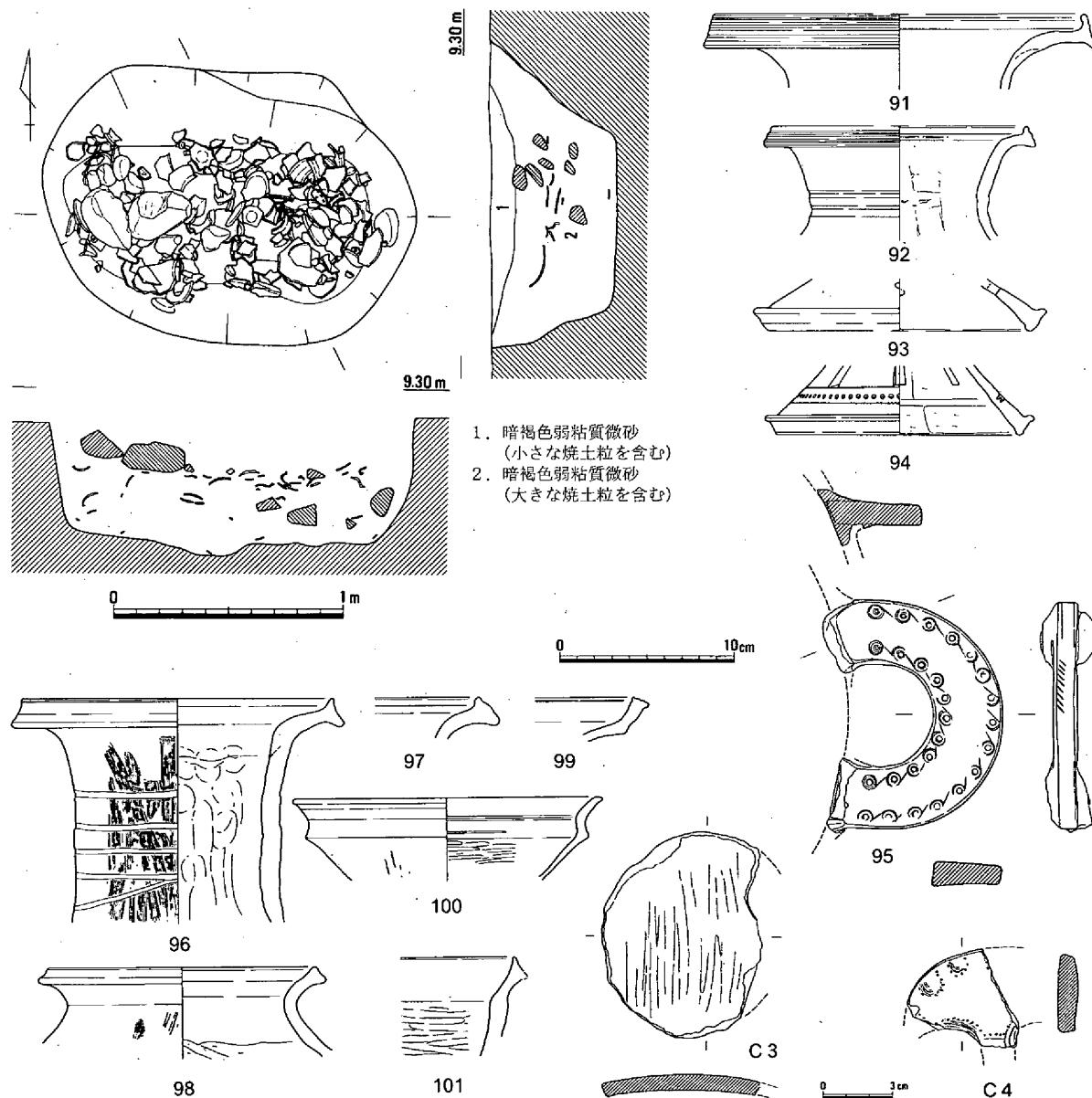
第54図 土壌7出土遺物3 (1/4・1/2)

文を施す。甕は頸部に突帯のあるもの80・81とないもの76～79がある。82～87は高杯である。すべて口縁部が内傾して立ち上がる。82・83は口縁端部が若干外方へ拡張する。また受け部外面のヘラミガキが多角形のものと放射状のものがある。86は大形で口径46cmある。87は脚部に矢羽根透かしが施される。88は台付き鉢で内面はハケメ調整、脚註部に三角形透かしがある。89・90は小形の鉢。90は尖底で外面に丁寧なヘラミガキを施している。C 2は分銅形土製品である。時期はこれらの土器の特徴から弥・中・Ⅲと考えられる。

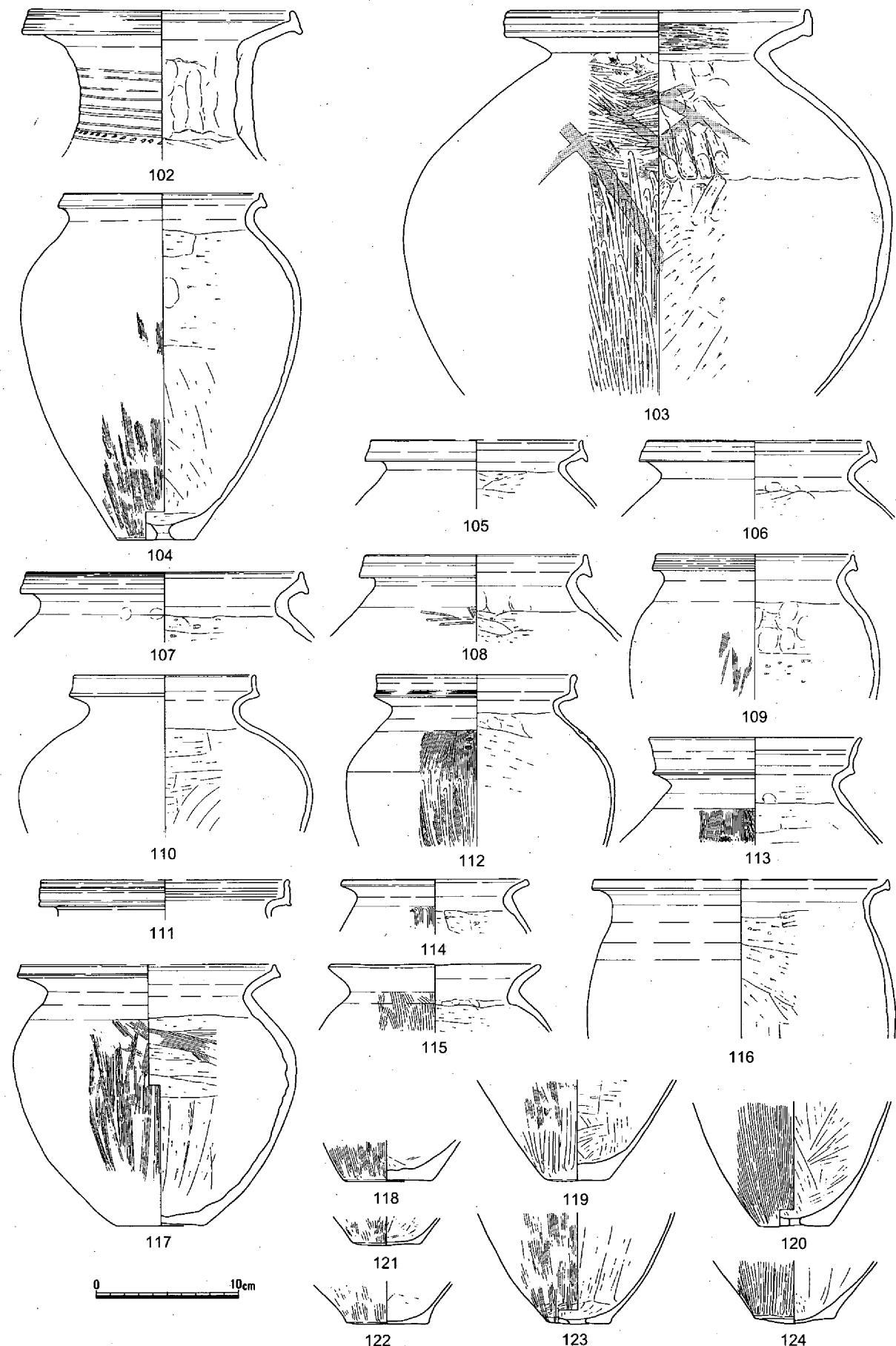
(物部)

土壤8 (第55～57図 図版12・17)

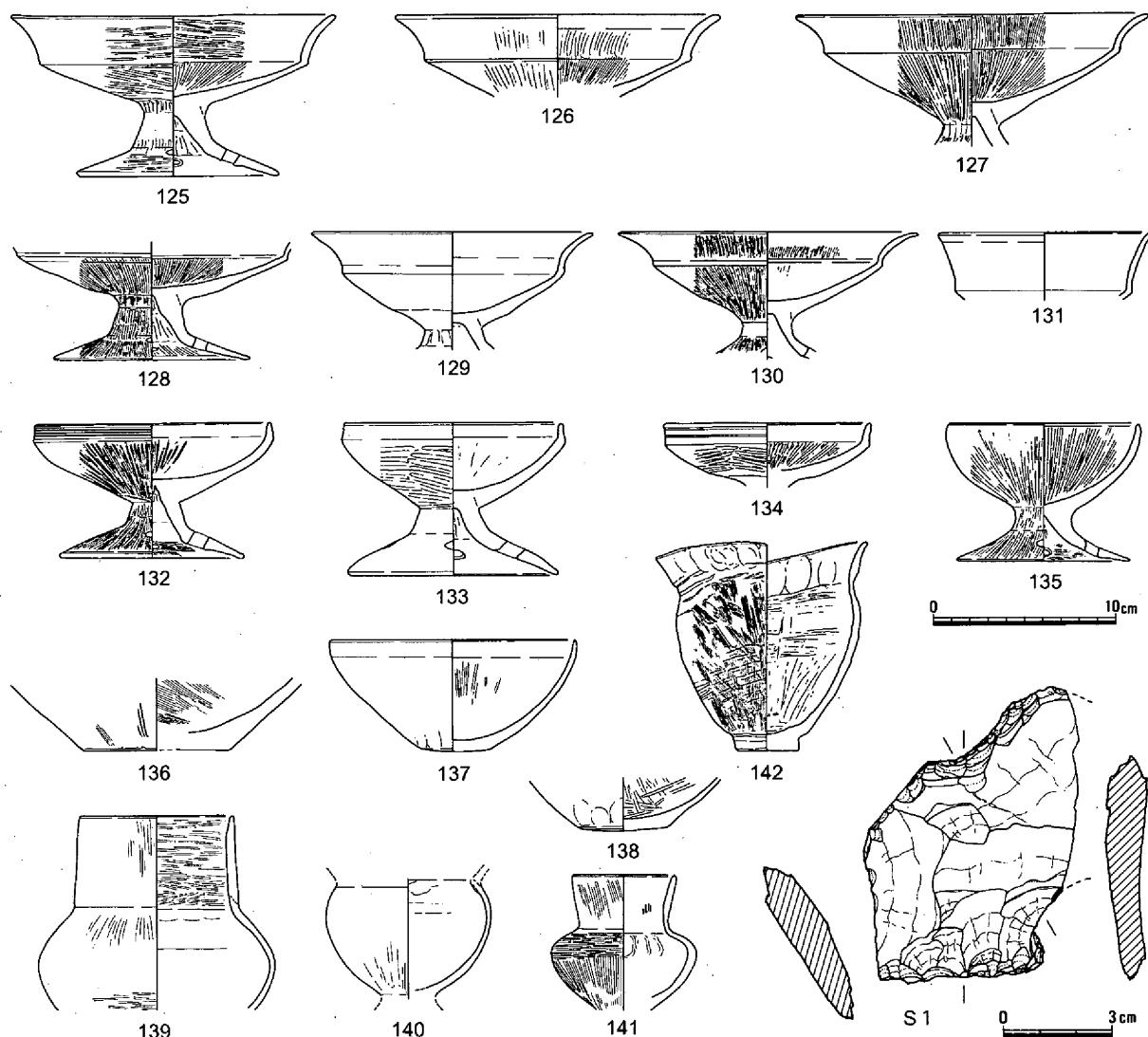
7区北半に位置する。後述する竪穴住居18に上部を削平されている。平面形は $1.63 \times 1.17\text{m}$ の精円形を呈し、検出面からの深さは0.4mを測る。多量の土器および20cm大以下の礫を包含し、埋土には焼土粒を含む。焼土面など被熱痕跡はみられない。出土遺物には土器・土製品・石器があり、弥・中・Ⅲ、弥・後・I～Ⅲの各時期が混在する。その割合は弥・後・Ⅲが8割、弥・中・Ⅲ、弥・後・



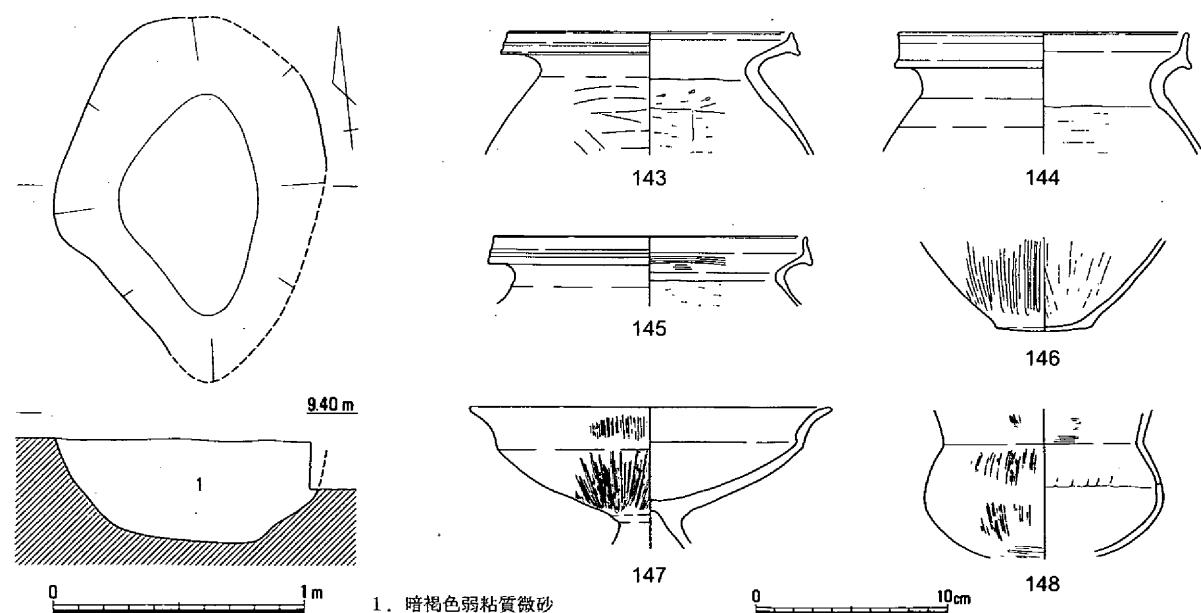
第55図 土壌8・出土遺物1 (1/30・1/4・1/3)



第56図 土壌8出土遺物2(1/4)



第57図 土壌8出土遺物3(1/4・1/2)



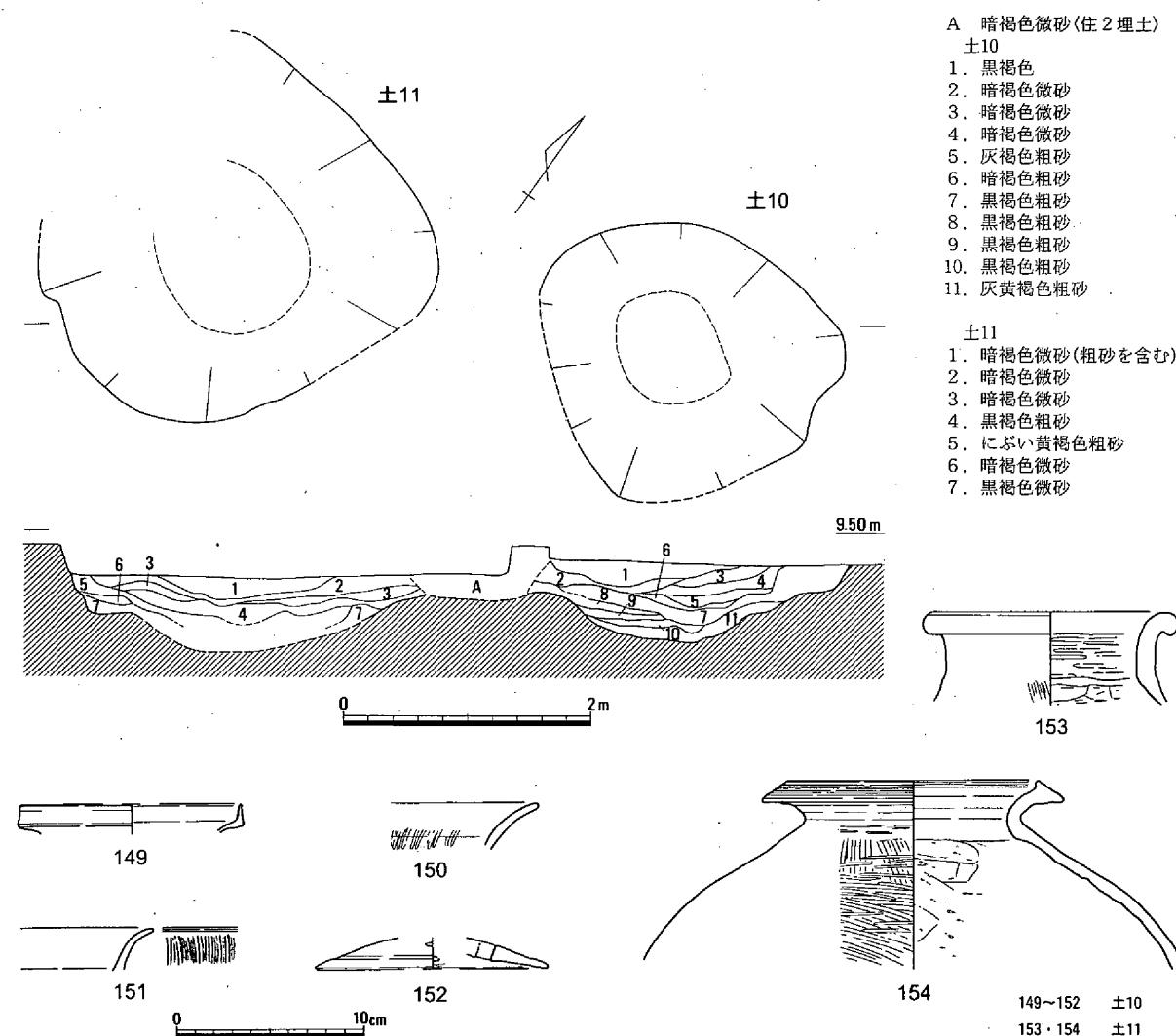
第58図 土壌9・出土遺物(1/30・1/4)

I～IIが2割である。91～94は壺と高杯、95は差込式の把手ではなかろうか。C3は甕体部を転用した土製円盤、C4は分銅形土製品である。以上は形態および胎土・色調から弥・中・Ⅲと考えられる。96～101は弥・後・I～II。壺96・97、甕98、高杯99・100、鉢101である。102は長頸壺、103は壺でカゴメが残る。104～124は甕である。104～106は口縁端部を強いヨコナデにより引き出している。110～112は口縁端部を長く上方に拡張するもので、胎土は砂粒を多く含む。114・115はくの字口縁の甕、116は肩が張らずだらりと下がる器形を呈する。117は寸胴である。119～120は比較的分厚い底部を持つもの、121～124は底部器壁が非常に薄いもので、下方に少し突出し安定の悪いものも見られる。125～135は高杯である。口縁端部が外湾するものと、上方に短くつまみ出すもの132～134、そのまま丸く收める135と3種類が見られる。136～138は鉢である。139～141は脚付きの直口壺で口縁部が上方に伸びるものと外傾するものがある。S1は2箇所にえぐりを持つスクレイパーである。出土土器は全部で100個体前後あった。色調の全く異なる破片の接合が多く見られた。完形に復元されるものは少なかった。時期は弥・後・Ⅲと考えられる。

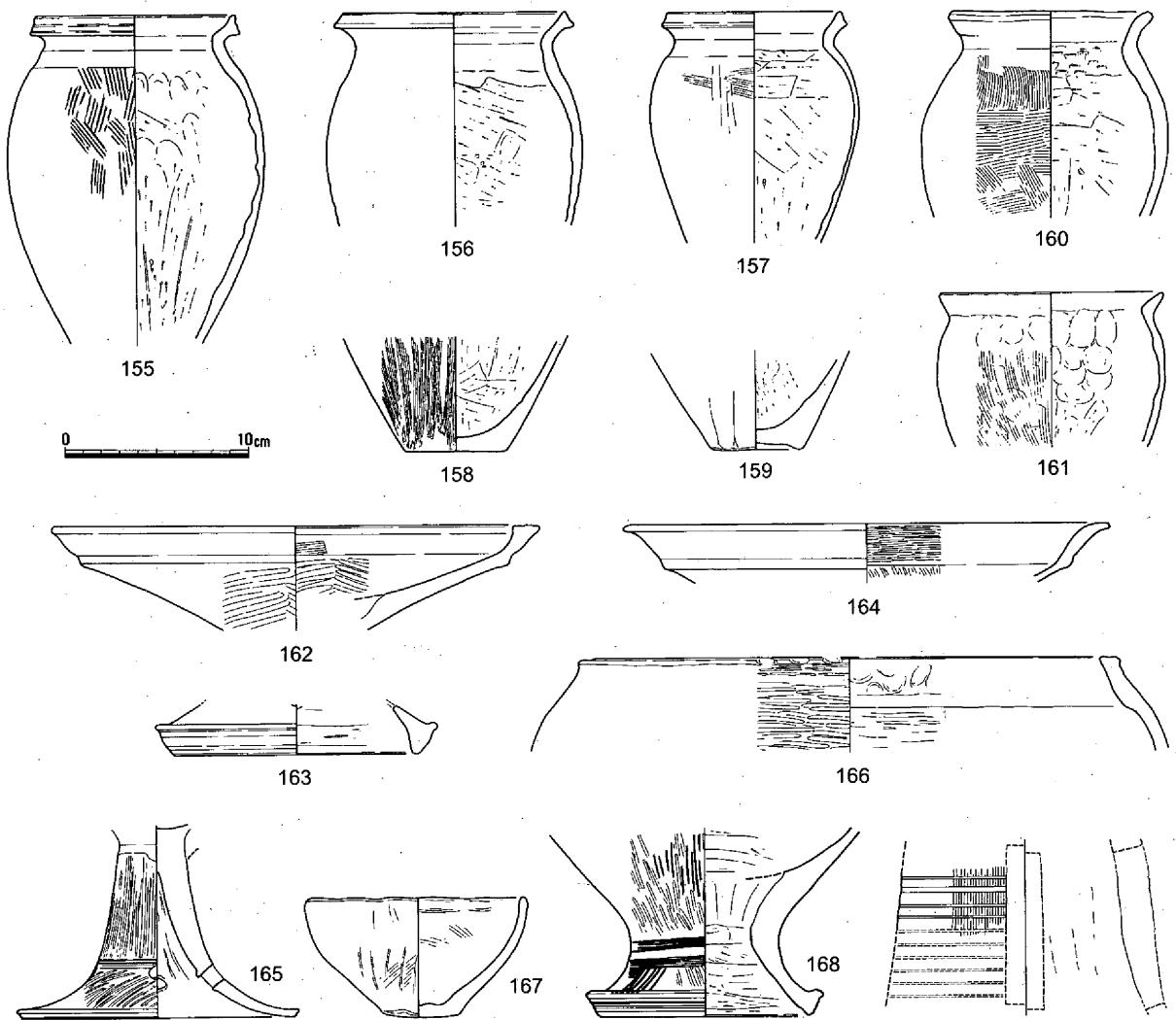
(物部)

土壤9（第58図）

7区北半に位置し、土壤8北東に隣接する。1.45×1.06m、検出面からの深さ0.4mを測る。上半を堅穴住居18に削平され、埋土上部にはこの住居に伴うと考えられる土器片が混入していた。出土



第59図 土壌10・11・出土遺物1 (1/30・1/4)



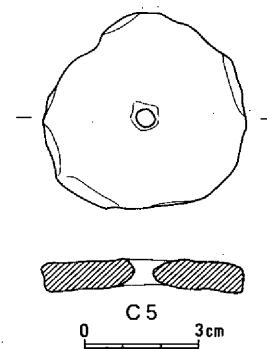
第60図 土壙11出土遺物2(1/4・1/2)

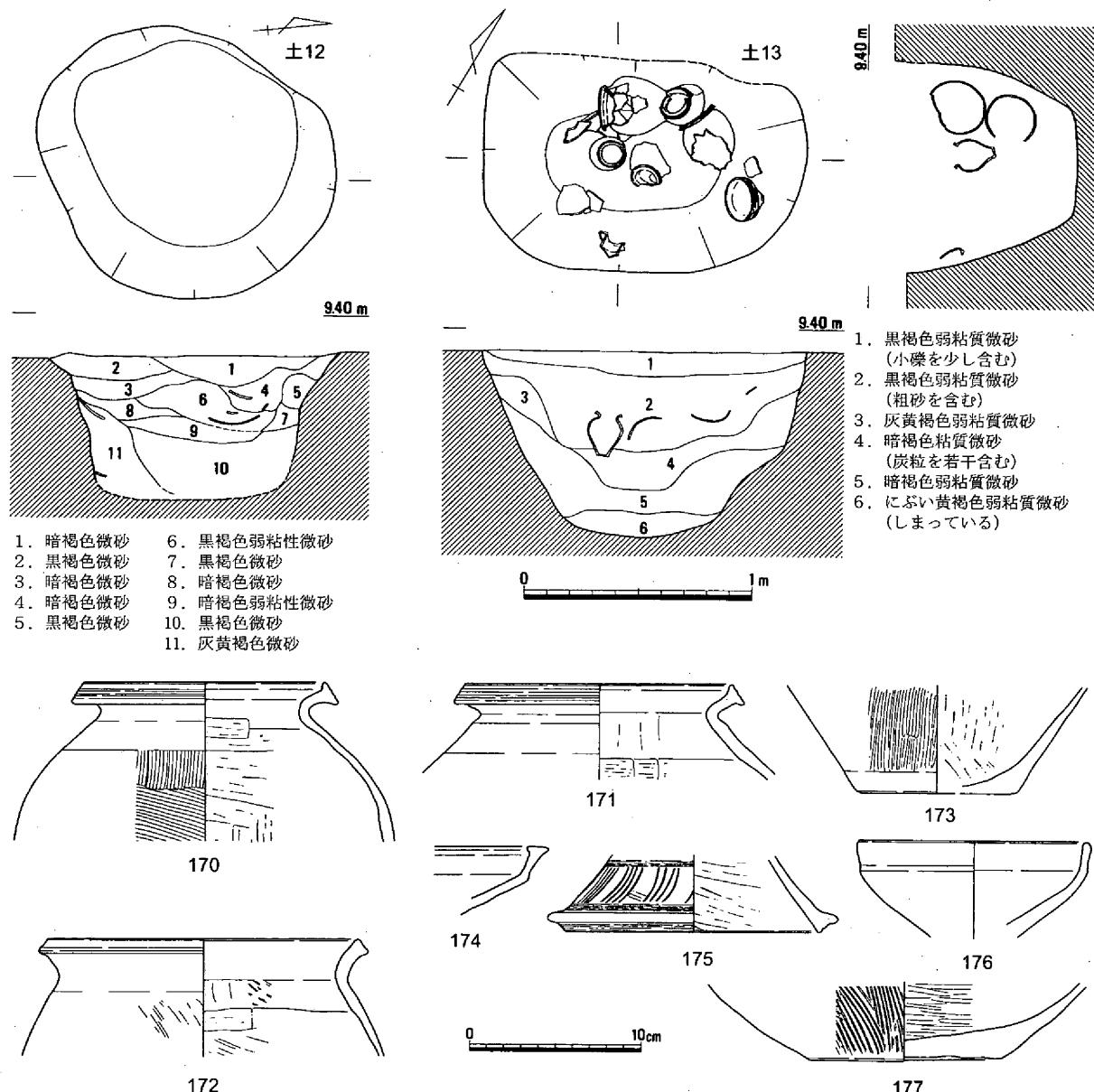
遺物には甕143～146、高杯147、脚付き直口壺148のほか、土器小片100点があり、弥・中・Ⅲの土器片の混入がある。時期は弥・後・Ⅲ。(物部)
土壙10(第59図)

8区の南部に位置し、竪穴住居2に南半上部を削平されている。2.36×1.3mの不正方形を呈し、検出面深0.63mを測る。掘り方は微高地の基盤である粗砂層に達し、湧水が見られた。出土遺物は小片のみ。弥・中・Ⅲ、弥・後・Iの時期の土器片が混入する。時期は弥・後・Ⅲ。(物部)

土壙11(第59・60図)

8区の南部に位置し、土壙10の西側に隣接する。竪穴住居2に一部、後述の竪穴住居9に上部を削平されている。西端部は調査区外になる。約3.0×3.0mの不正方形を呈す。土壙10と同様に粗砂層を掘り込み、湧水が激しいため、底面まで掘りきることはできなかった。出土遺物は破片が少量見られた。153・154は壺で、前者は口縁が玉縁状を呈する。155～161は甕。160の口縁は丸く収まる。161は体部内面上半に指頭圧痕が目立つ。162～165は高杯である。166・167は鉢。168は脚台付きの鉢か壺と思われる。169は長方形透かしを持つ器台。C5は甕か壺の体部を転用した土製紡錘車である。弥・後・IとIIの2時期が混在している。土壙の時期としては弥・後・IIと考えられる。(物部)





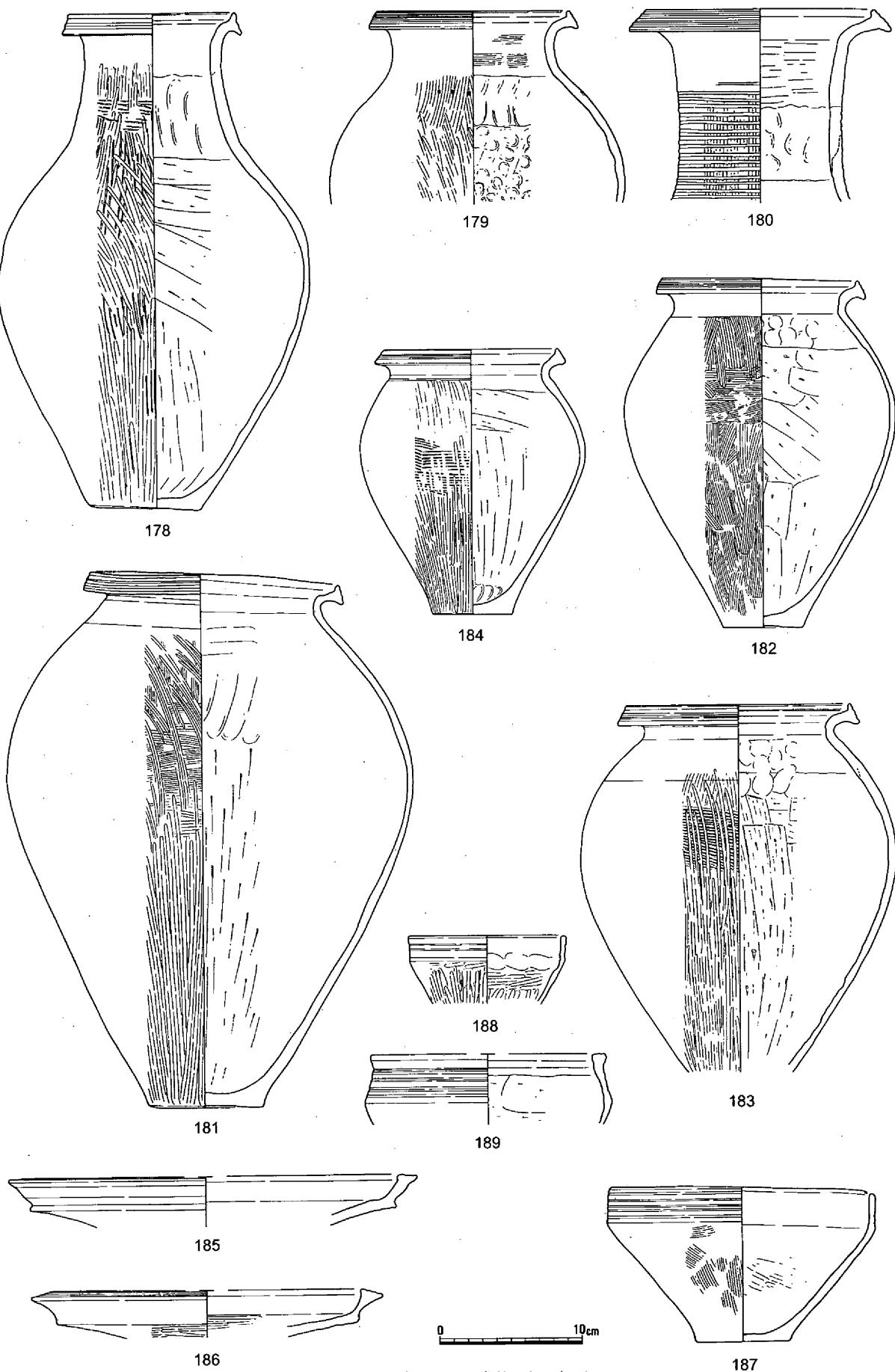
第61図 土壌12・13・土壌12出土遺物 (1/30・1/4)

土壌12 (第61図)

8区の中央、土壌10の北1.5mに位置する。平面形は $1.28 \times 1.20\text{m}$ の円形を呈し、検出面からの深さは0.65mを測る。出土遺物には土器小片が、弥・中・Ⅲの時期の混入を含め、約80片見られた。甕170～173、高杯174・175、鉢176・177などがある。いずれも1～2mm大以上の砂粒を含み、橙色を呈する。土器の特徴からこの土壌の時期は弥・後・Iと考えられる。
(物部)

土壌13 (第61図 図版16)

8区の中央に位置し、土壌12の北側に隣接する。平面形は $1.42 \times 0.94\text{m}$ の隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは0.82m、底面の標高は8.48mを測る。にぶい黄褐色を呈する埋土最下層(第6層)は固く締まり、整地土とも考えられる。出土遺物は、壺3個体、甕21個体、高杯9個体、鉢4個体、器台2個体が確認された。いずれも1～2mm大以上の砂粒を含み、橙色を呈する。時期は弥・後・Iと考えられる。少量の弥・中・Ⅲの土器片が混入していた。また黄白色を呈する6cm大の粘土塊が出土し、この粘土塊と178壺、および甕・高杯の小片を胎土分析に供した(第8章第3節)。
(物部)



第62図 土壌13出土遺物（1/4）

土壤14 (第63図)

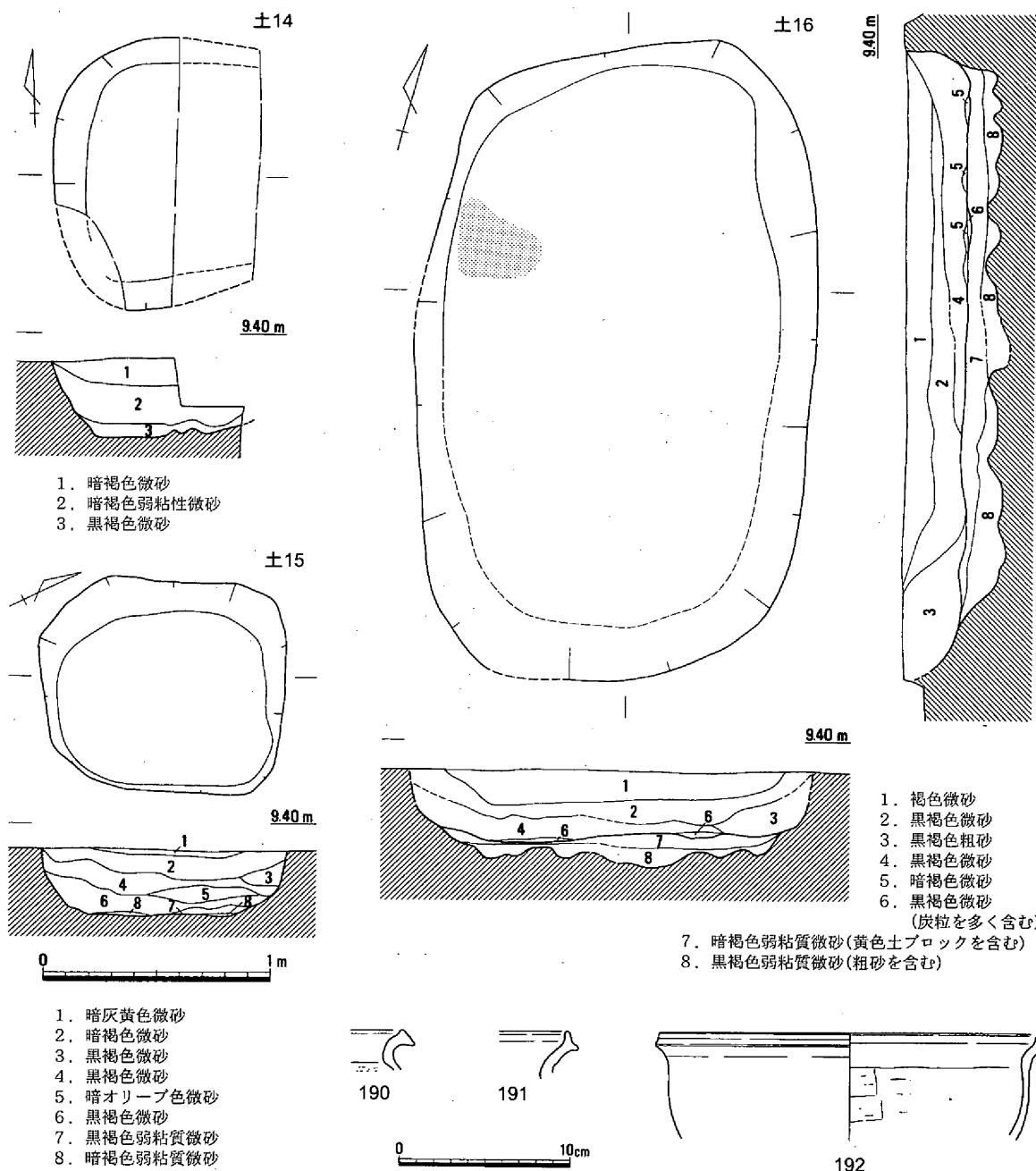
8区中央に位置し、土壤13に南西隅を切られている。また、東半は調査区外になる。平面形は $1.2 \times 0.9\text{m}$ 以上の隅丸方形を呈すと考えられ、検出面からの深さは 0.35m 、底面の標高は 8.94m を測る。出土遺物は土器小片が約60点あり、その特徴から弥・後・Iの時期と推定される。
(物部)

土壤15 (第63図)

8区中央に位置し、土壤14の東、土壤13の北に隣接する。平面形は $1.07 \times 0.93\text{m}$ の隅丸方形を呈し、検出面からの深さは 0.29m 、底面の標高は 8.99m を測る。底面は平らである。遺物は土器小片が約40点ほど混入していた。190は壺の口縁部で弥・後・Iの特徴を示す。
(物部)

土壤16 (第63図)

8区中央部に位置し、土壤12・13・15の西に隣接する。平面形は $2.80 \times 1.75\text{m}$ の隅丸長方形を呈



第63図 土壌14~16・出土遺物 (1/30・1/4)

190 土15
191・192 土16

し、検出面からの深さは0.47mを測る。底面は凸凹が著しいがその上に厚いところで約20cmの整地土（第7・8層）を施して平らな床面を作っている。床面上には一部に被熱面があり、炭粒の散布が確認された。遺物は土器小片が50点ほどみられたが、すべて埋土中から出土した混入遺物である。191は甕、192は鉢で、どちらも1mm大以上の砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。土器の特徴から土壤の時期は弥・後・Ⅲと考えられる。

(物部)

土壤17（第64図）

8区中央、土壤5の北約1.2mに位置する。平面形は 1.62×1.60 mの正方形を呈し、検出面からの深さは0.4mを測る。土壤16と同様に凸凹した底面上に整地土を施し、平らな床面を作っている。床面の標高は9.10m。床面直上には炭粒を含む砂質土層が広く観察された。出土土器のほとんどは埋土中に混入したもので、小片60点ほどがあった。193・194は上方に拡張する口縁端部を持つ甕、195は甕の底部である。195の1点のみ床面に着地する。時期は弥・後・Ⅲと考えられる。

(物部)

土壤18（第65図）

11区の南西部で検出した。北側を竪穴住居12に切られているため平面形、規模等は不明である。東西方向の長さは1.13m・検出面からの深さは0.26mを測る。床面は平らで立ち上がり比較的急である。出土遺物には196がある。当遺構の時期は弥・後・Ⅰであろう。

(姥原)

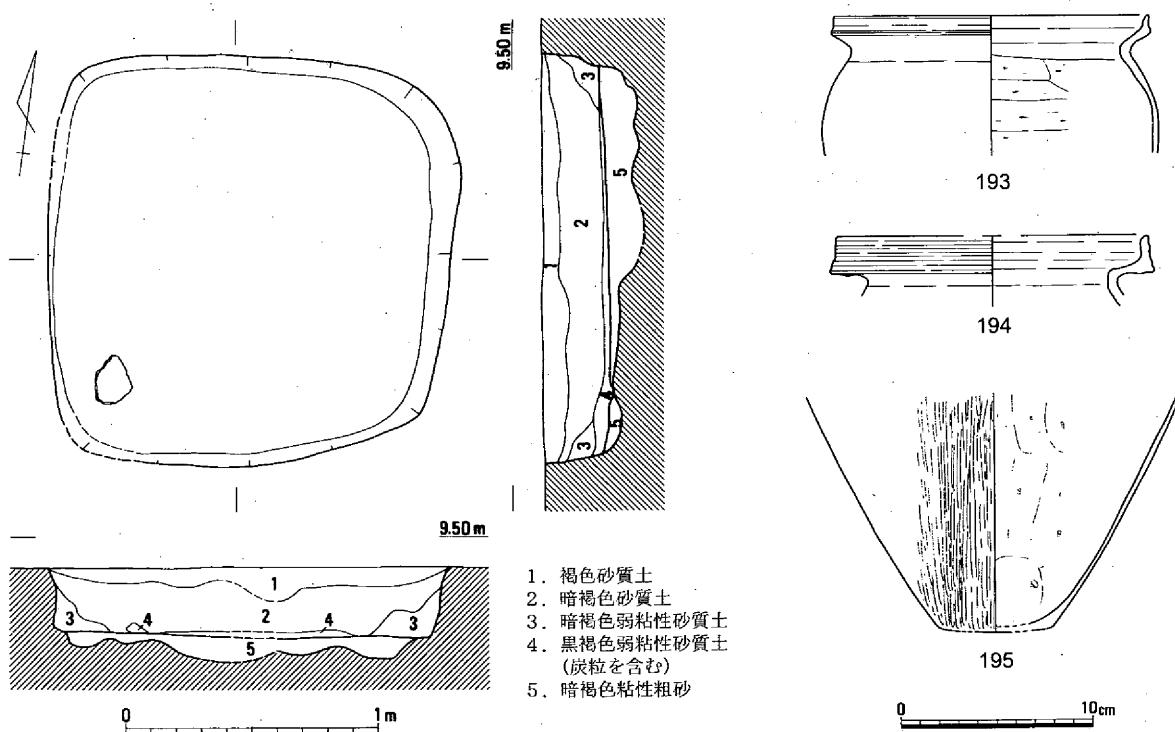
土壤19（第65図）

11区の南側において、竪穴住居12及び土壤18に切られた状態で検出した。平面形は橢円形を呈し床面の規模は 0.98×0.74 mを測る。また、床面は平らである。遺物は、弥生土器の壺197・甕198～201が出土した。時期は、弥・後・Ⅰであろう。

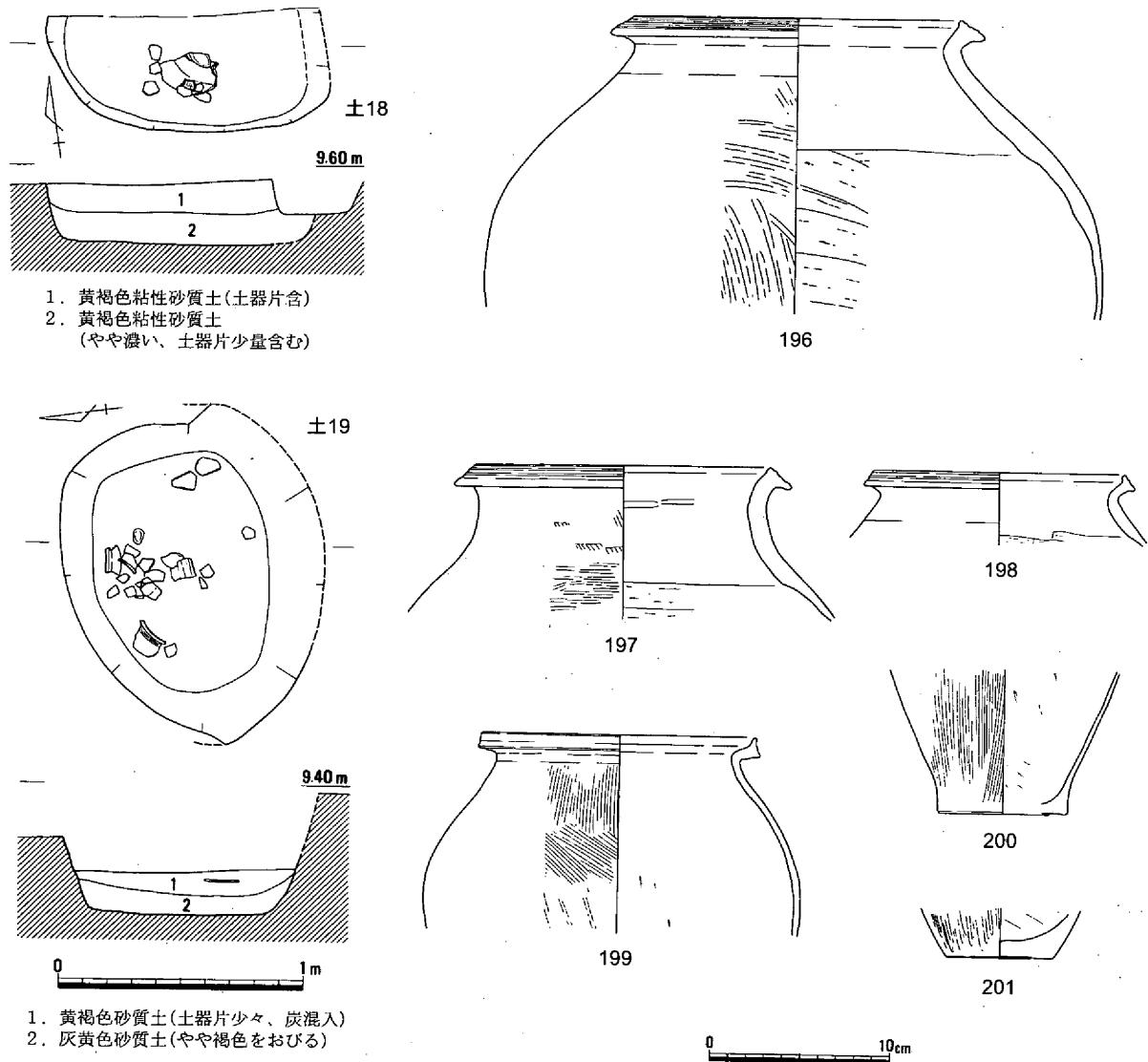
(姥原)

土壤20（第66図）

11区の南側において存在した遺構で、竪穴住居12の全掘後に検出した。平面形は 1.3×1.19 mの円



第64図 土壌17・出土遺物（1/30・1/4）



第65図 土壌18・19・出土遺物 (1/30・1/4)

形を呈する。断面形は上半分はやや急に立ち上がるものの下部では幾分かすぼまりながら底部へと向かう。検出面からの深さは1.05mを測るが、竪穴住居3の下部に存在したため、本来は現存する以上に深かったことも考えられる。またこの土壌は、その形態と4層に分かれる埋土のうちの第4層付近より湧水のみられたことなどから、井戸として機能していた可能性もある。

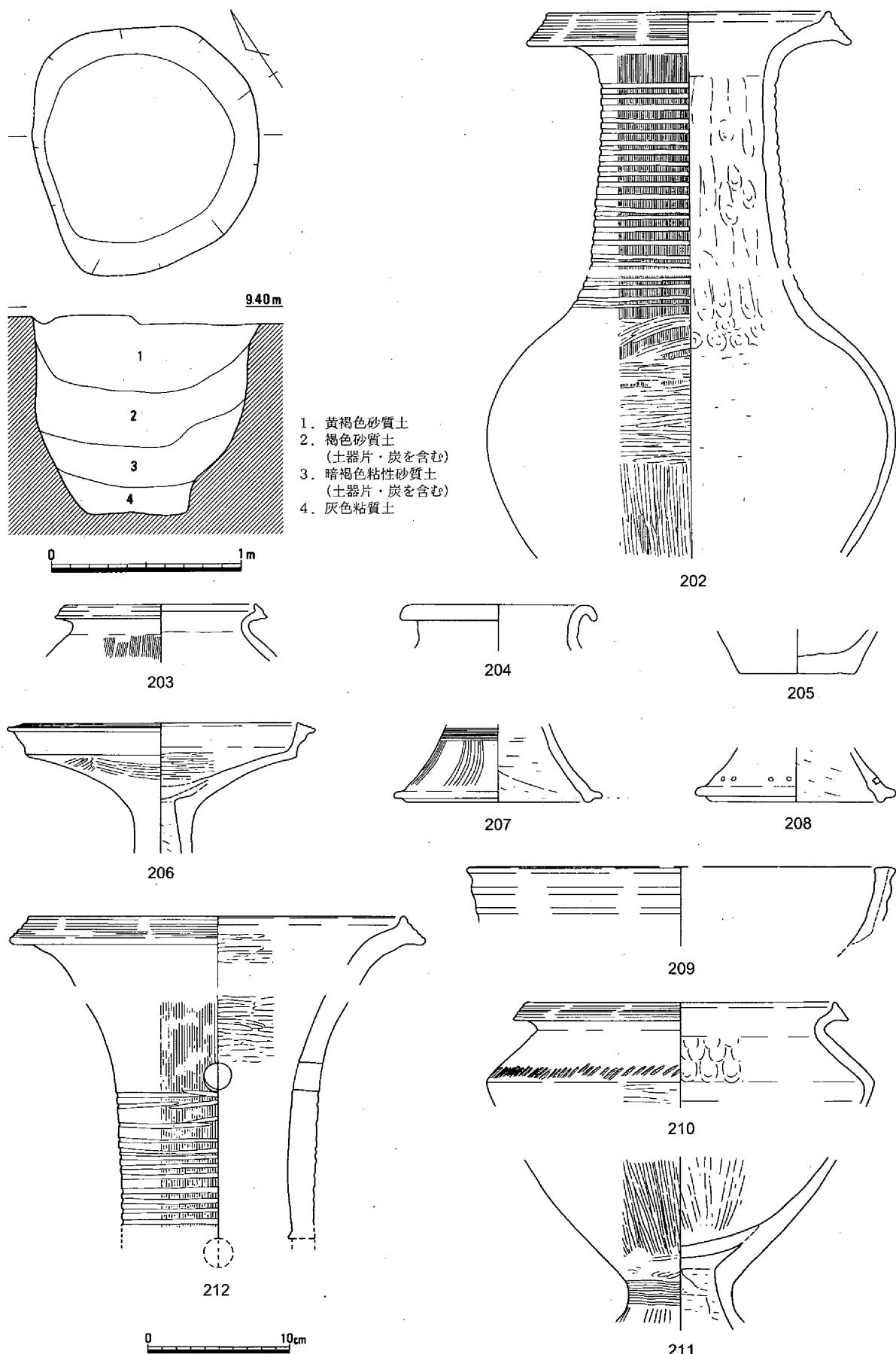
主な出土遺物は弥生土器の長頸壺202、壺204、甕203・205、高杯206～208、鉢209、台付鉢210・211、器台212がある。高杯の脚部にはヘラ描文を施す207と、円形文を施す208がある。なお台付鉢の210・211は同一固体であろうか。これらの遺物の多くが第2層ないしは第3層より出土しており、本来の機能を果たした後に投棄されたことも想定される。当土壌の時期は、出土遺物などから勘案して弥・後・Iと思われる。

(姥原)

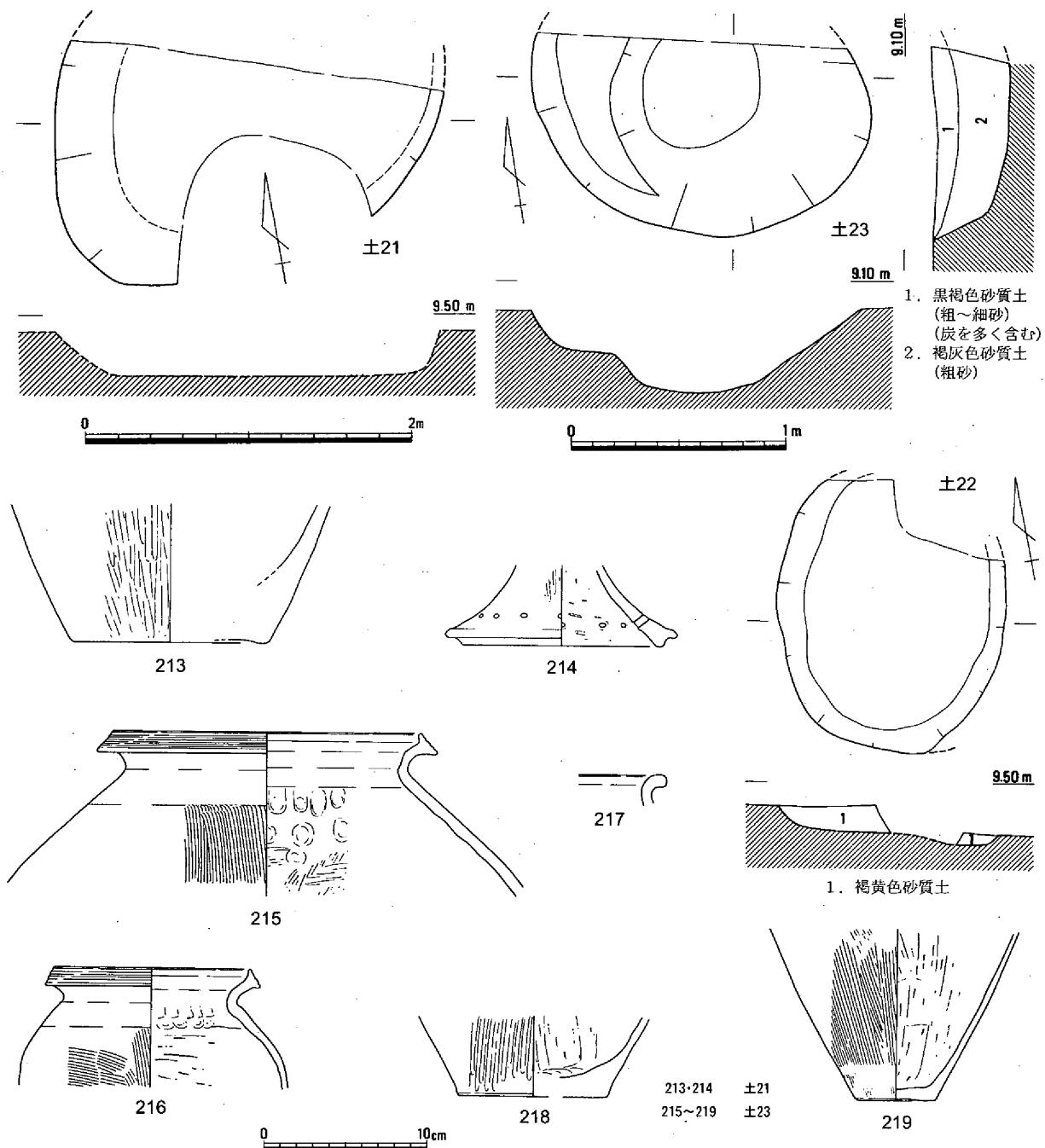
土壌21 (第67図)

11区の南側で検出した遺構である。南側の一部を土壌20に切られているため規模は不明であるが平面プランは残存部から不整円形と思われる。東西方向の長さは1.17m、深さは0.14mをそれぞれ測る。床面は平らで、東側は急に西側は緩やかに立ち上がる。遺物は甕の底部213・高杯の脚部214がある。214には円形の透かしがある。この遺構の時期は弥・後・Iであろう。

(姥原)



第66図 土壌20・出土遺物 (1/30・1/4)



第67図 土壌21～23・出土遺物（1/40・1/30・1/4）

土壌22（第67図）

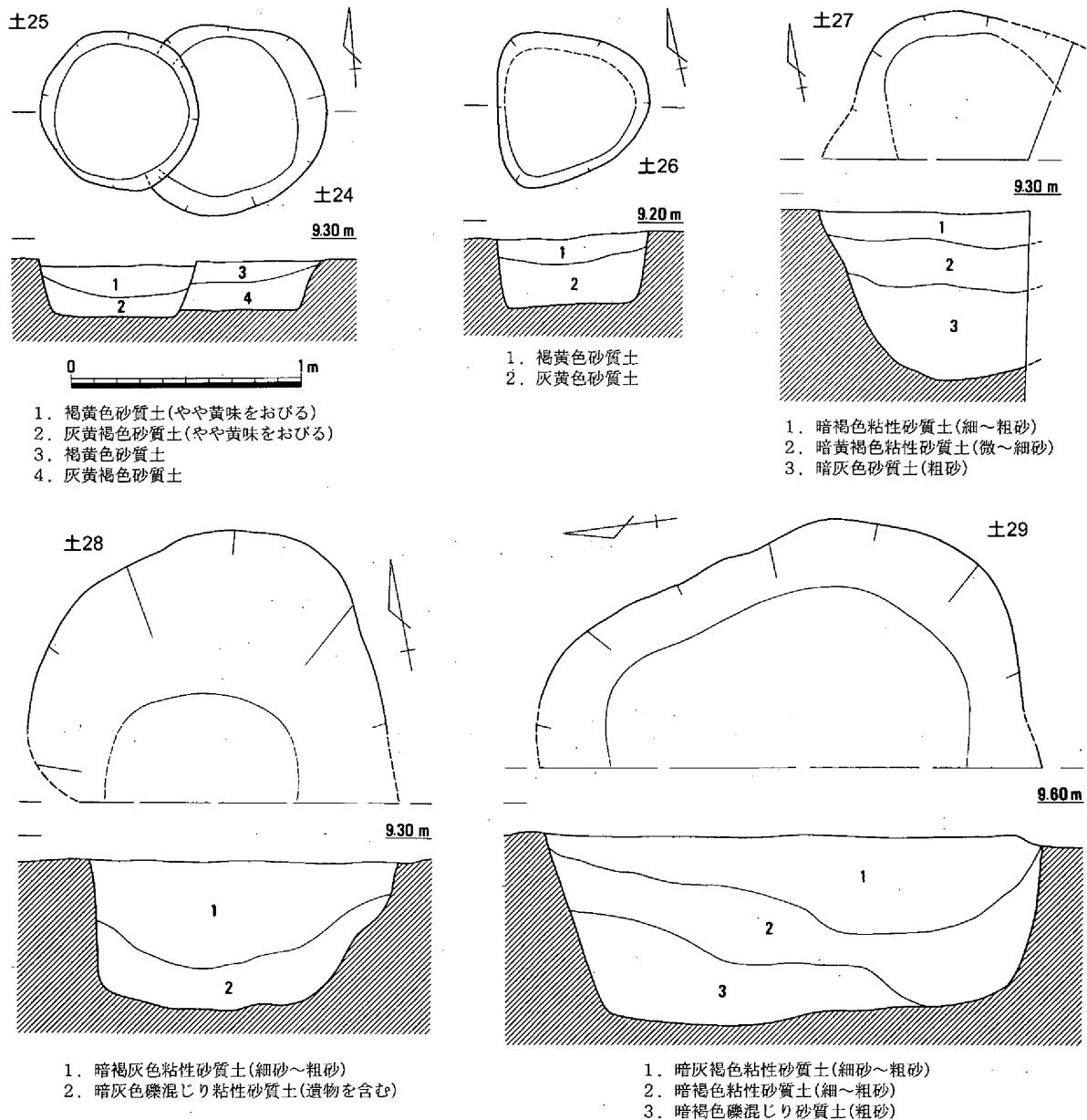
豎穴住居3と土壌21に切られて存在した遺構である。平面は楕円形を呈し規模は推定で 1.26×1.07 mを測る。検出面からの深さは0.18mである。床面は西から東に向けて緩やかに傾斜する。出土遺物は細片のみだが、他の遺構との関係・遺構内の埋土から弥・後・Iと思われる。

(姥原)

土壌23（第67図）

土壌26に隣接する位置で検出した遺構である。北半分は調査条件の制約により詳らかでないが、残存部より平面形は楕円形を呈すると想定される。残存部の規模は 1.26×1.07 mである。深さは検出面より0.4mを測る。床面は丸みを帯び掘り方の西側では二段掘りとなる。また、第1層には多くの炭が含まれていた。出土遺物には甕215～219がある。時期は弥・後・Iであろうか。

(姥原)



第68図 土壙24～29 (1 / 30)

土壙24 (第68図)

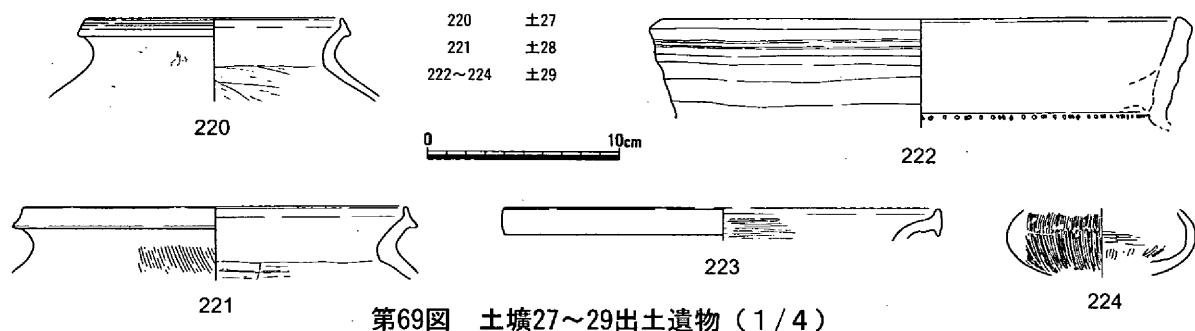
土壙25に切られる形で検出した。平面は円形で残存部の規模は $0.82 \times 0.6\text{m}$ を測る。出土遺物はなく時期の確定は困難であるが、埋土などから弥・後・Ⅲであろう。
(姥原)

土壙25 (第68図)

土壙24の西に位置する遺構である。平面形は円形を呈し、 $0.69 \times 0.63\text{m}$ の規模をもつ。深さは検出面から24cmを測り、床面は平坦である。堆積土は2層に分層できた。出土遺物は皆無で時期は特定しにくいが、埋土や、他の遺構との関係から弥・後・Ⅲと思われる。
(姥原)

土壙26 (第68図)

土壙23の南側で検出した遺構である。平面形は不整方形をなし規模は $0.65 \times 0.63\text{m}$ である。深さは検出面から0.35mを測り、平坦な床面をもつ。埋土は2層に分層できるが、堆積はやや水平に近い。出土遺物が皆無なため時期は特定しにくいが、おそらく弥・後・Ⅲであろう。
(姥原)



第69図 土壌27~29出土遺物 (1/4)

土壌27 (第68・69図)

竪穴住居4の南端部を切る状態で検出した。この遺構は大半が側溝や壁の法面部分にかかる為全体の形状は詳細にしえないが、残存部より不整形のプランをもつと思われる。深さは検出面より0.73mを測り、床面は丸みを帯びる。遺物は甕220があり、当遺構の時期は弥・後・Ⅲであろう。(姥原)

土壌28 (第68・69図)

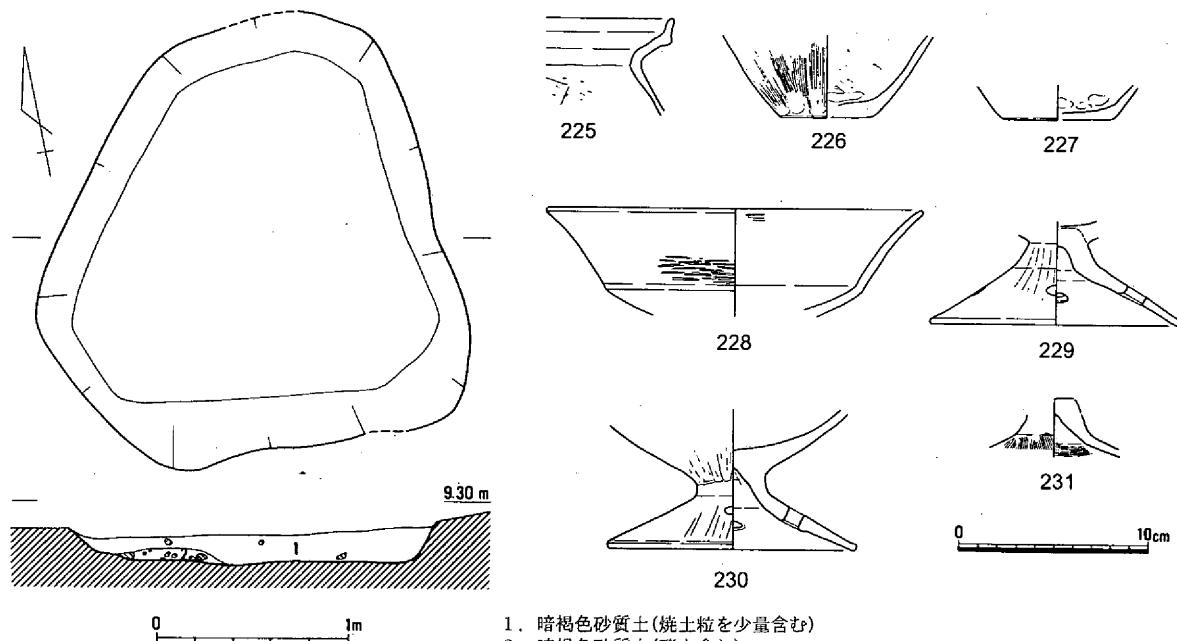
竪穴住居3の南東部分を切る位置にあった遺構である。この遺構の南側は側溝により切られている為全体の規模は不明である。平面は不整円形を呈し東西方向の長さは1.57mである。0.64mの深さをもち、床面及び壁面には凹凸がある。遺物には甕221があり、時期は弥・後・Ⅲであろう。(姥原)

土壌29 (第68・69図)

竪穴住居3の中央部分を切り存在した遺構である。平面形は不整円形をなし南北方向の規模は2.16mである。検出面からの深さは0.82mあり床面は北側が幾分低くなっている。埋土は北側から南側に傾斜して堆積している。遺物には222~224があり、時期は弥・後・Ⅲと想定される。(姥原)

土壌30 (第70図)

8区北部に位置し、竪穴住居6の南端を切っている。平面は2.30×2.26mの不正形であり、検出面からの深さは0.20m、底面の標高は8.96mを測る。埋土中から50点ほどの土器小片が出土した。口縁部が外湾気味に長く外傾して立ち上がる高杯228から時期は弥・後・Ⅳと考えられる。(物部)



第70図 土壌30・出土遺物 (1/40・1/4)

(4) 溝

溝1・2 (第71図)

8区南半で検出された溝1と5区南半で検出された溝2は、位置関係から一連の溝と考えられる。三須畠田遺跡と三須河原遺跡の両微高地の間に浅い低位部に立地する。溝幅は、検出面の高さの違いを考慮すると1.5m前後と推定される。断面形は逆三角形を呈する。平面においては、両溝は逆方向に僅かに湾曲する。溝2では、攻撃面にあたる北岸上部が外方へ広がっている。遺物は、溝1・2とも灰白色を呈する土器小片が少量出土した。233は甕か壺の肩部、234は高杯、235は回転台脚部の可能性がある。溝1・2の時期は土器の特徴から弥・中・Ⅲと考えられる。

(物部)

溝3 (第71~73図)

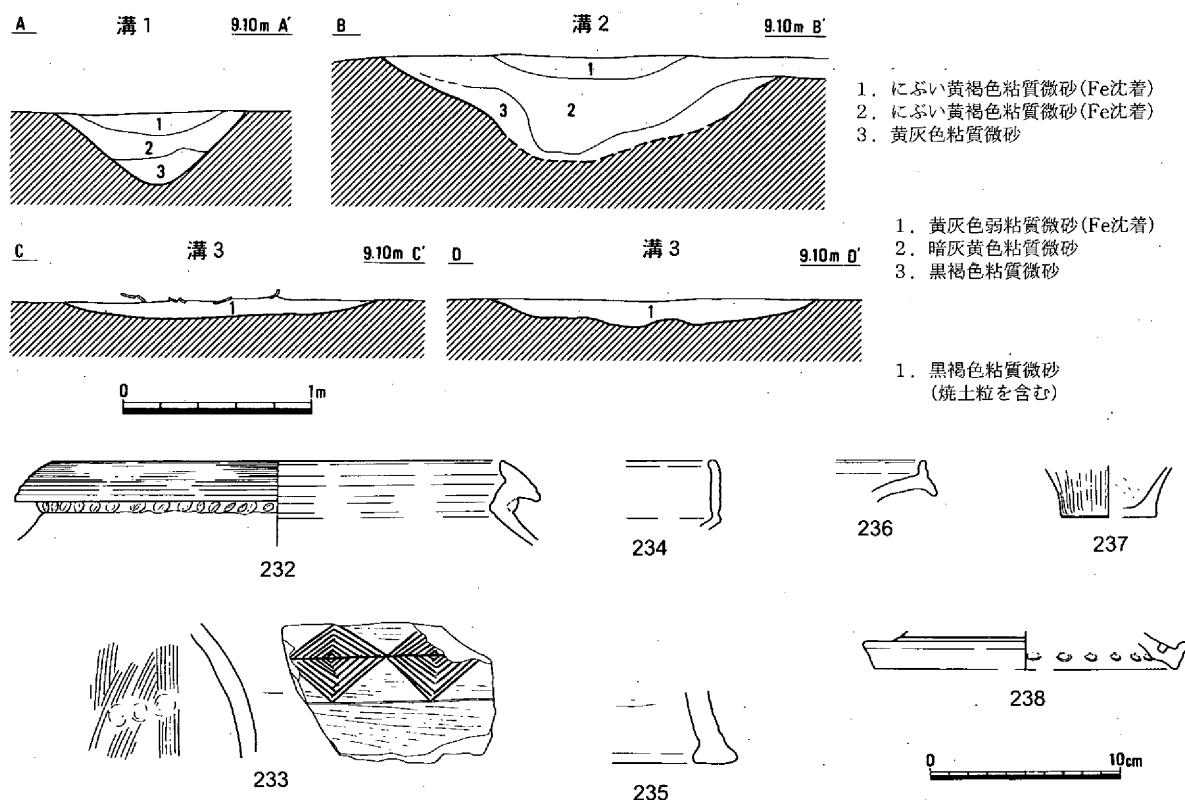
5区中央に位置し、三須畠田遺跡の微高地南端部から浅い低位部にかけて立地する。幅1.70m、検出面から深さ0.12mの浅いたわみ状の溝である。主軸はN-31°-E。出土遺物は多く、約7mの間隔をあけ、2箇所(第39図の斜線部)に集中していた。それを比較したが時期、器種とも差はなかったので、一括して掲載した。大形の壺241の肩部には竹管文を斜線で繋ぐ文様が施されている。276は回転台と考えられる。227は土壙8で出土した把手?に類似する。278は器種不明。C6・7は表面が剥離した分銅形土製品である。溝の時期は弥・中・Ⅲと考えられる。

(物部)

溝4 (第74図)

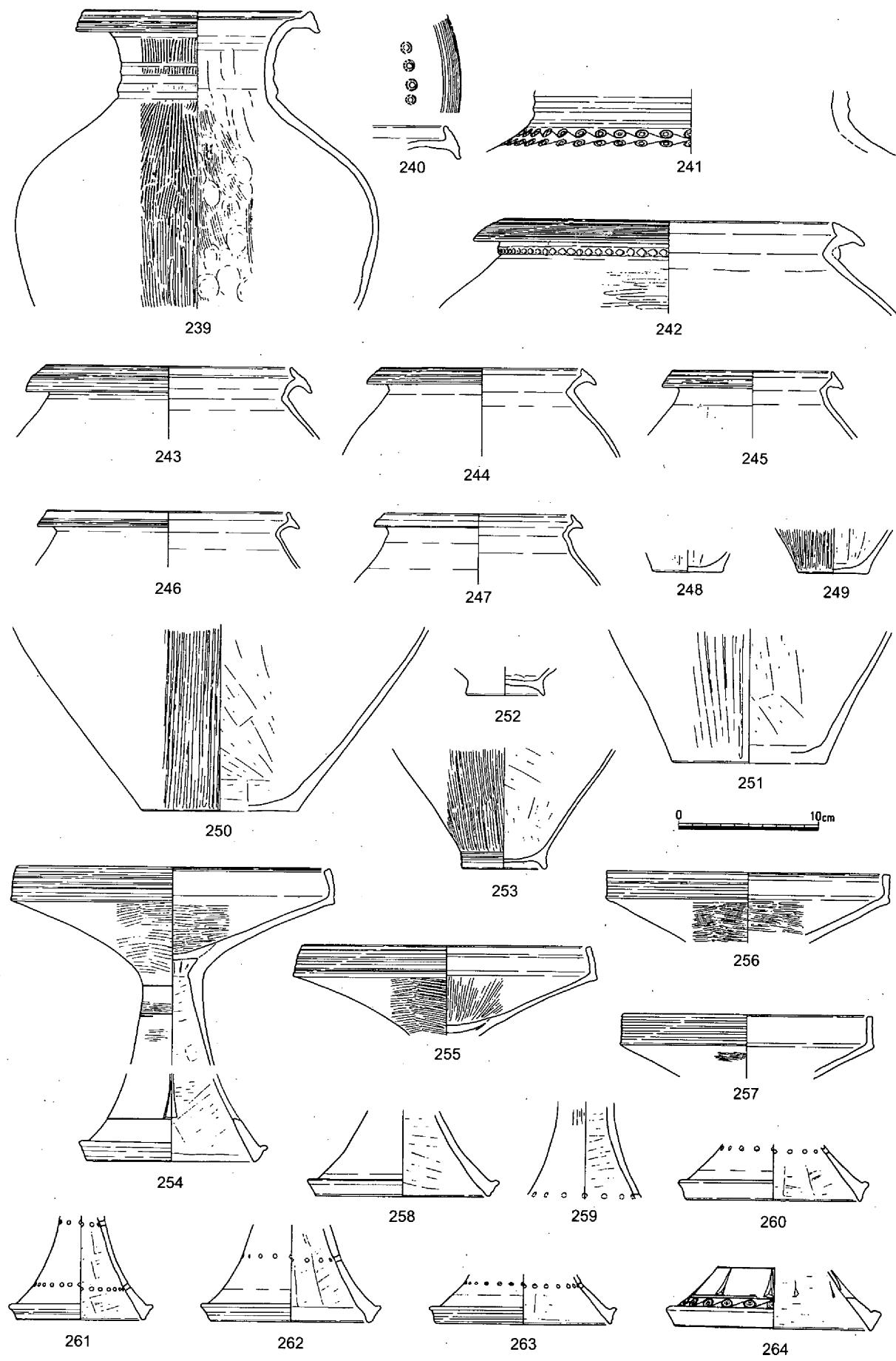
3区の北端に位置する。東部を溝9に切られ、それより東に検出されなかつたので、あるいは土壙かもしれない。幅0.70m、深さ0.43m。ほぼ東西に主軸を持つ。埋土上層より、一括投棄されたような状態で土器が集中して出土した。279の壺はほぼ完形に復元された。それら土器の形態から時期は弥・中・Ⅲと考えられる。

(物部)

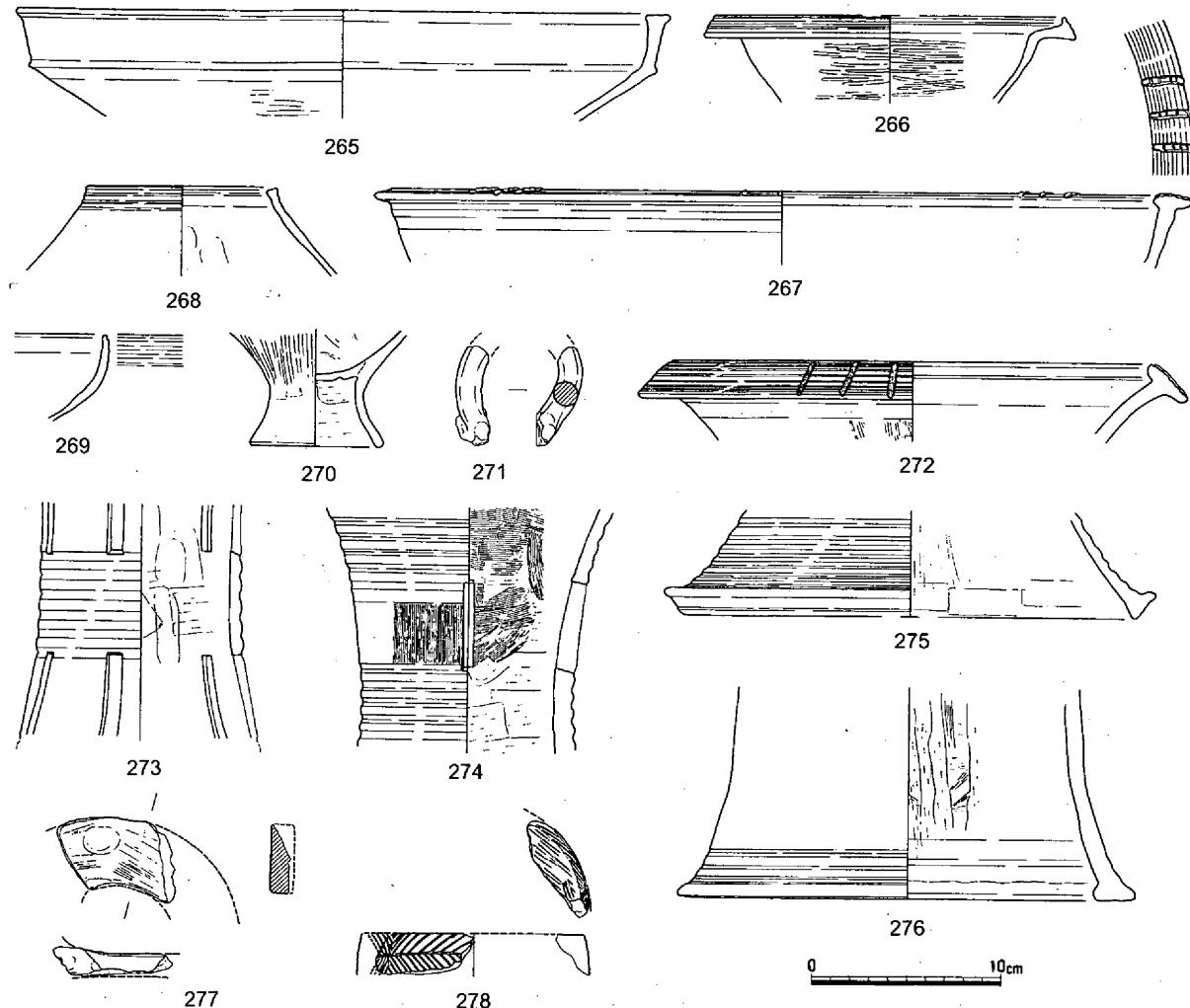


第71図 溝1~3・出土遺物 (1/40・1/4)

232~235 溝1 236~238 溝2



第72図 溝3出土遺物1 (1/4)



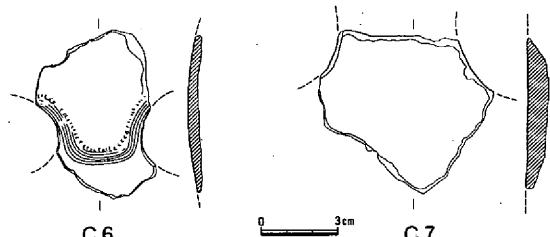
溝5（第75図）

3区南半、溝1の南約3mに位置し、浅い低位部に立地する。検出面での幅0.7m前後、深さ0.14mを測る。出土土器は小片約20点。大半が灰白色を呈するが橙色のものもある。弥生後期か。（物部）

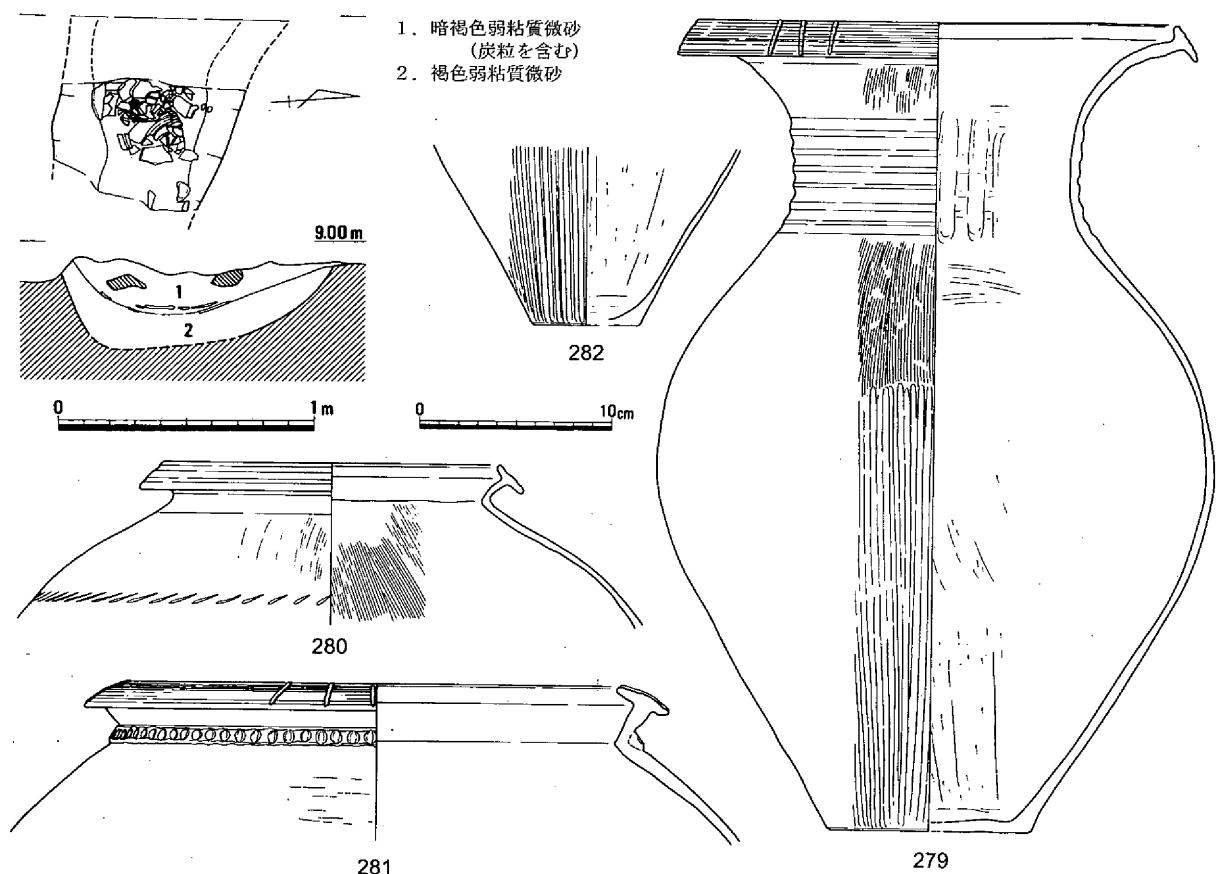
溝6・7・8・9（第75～79図 図版17）

溝6は溝7に大部分を削平され、溝7の西側底面からのり面にかけて長さ4.5mにわたって検出された。残存していたのは溝の底部のみである。後述する一連の溝7・8・9と同様の流路を持っていた可能性がある。出土遺物は土器小片6点。すべて灰白色を呈し、弥・中・Ⅲの時期である。

溝7・8・9は一体の溝である。4区・3区北半・5区北半に位置し、微高地上からその南端および低位部にかけて立地する。溝9は溝7・8より底面の標高が20cm高く、溝7・8が本流、溝9は支流と考えられる。溝7の北方は総社市教委が平成3年度に調査した三須畠田遺跡A地区溝1につながる。地形から溝7から溝8への水の流れが推定される。溝9はその南半部で基盤層下の礫層が上がっており、溝7へ流れ込んでいた可能性がある。溝7の上層からは360高杯や361甕など須恵器が3片出土していることから、この溝の埋没時期は6世紀後半代に求められる。溝6下層および溝8からは弥・中・Ⅲ、弥・後・I、弥・後・Ⅲの各時期の遺物がみられ、溝の開削時期を確実につかむこと

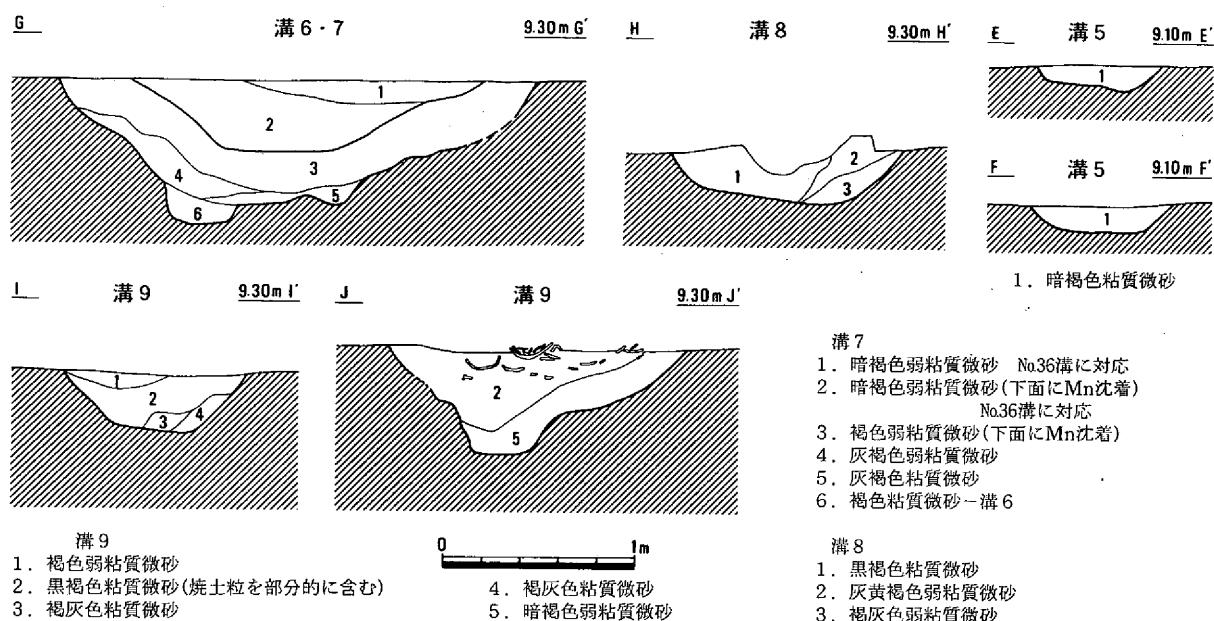


第73図 溝3出土遺物2 (1/4・1/3)

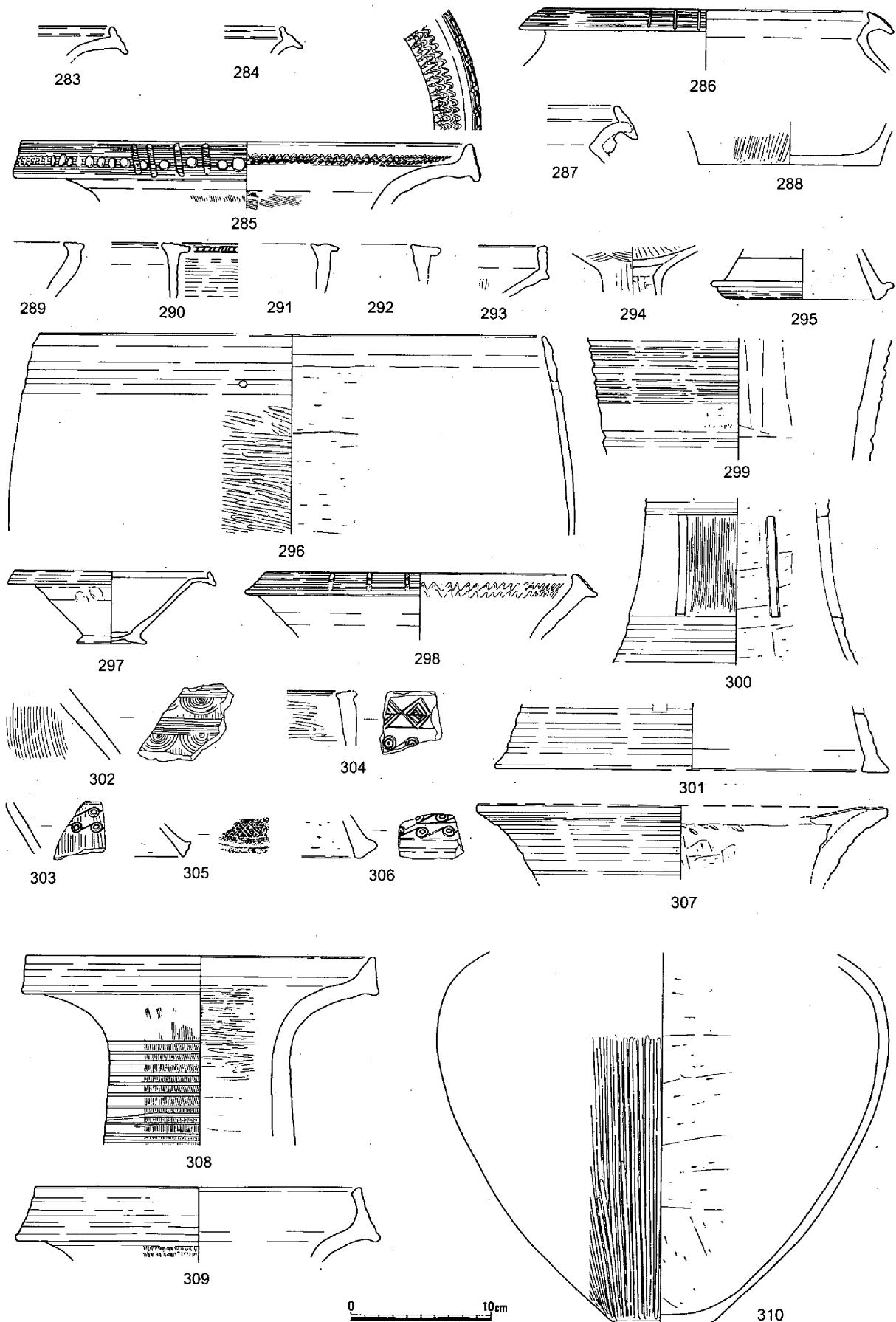


第74図 溝4・出土遺物 (1/30・1/4)

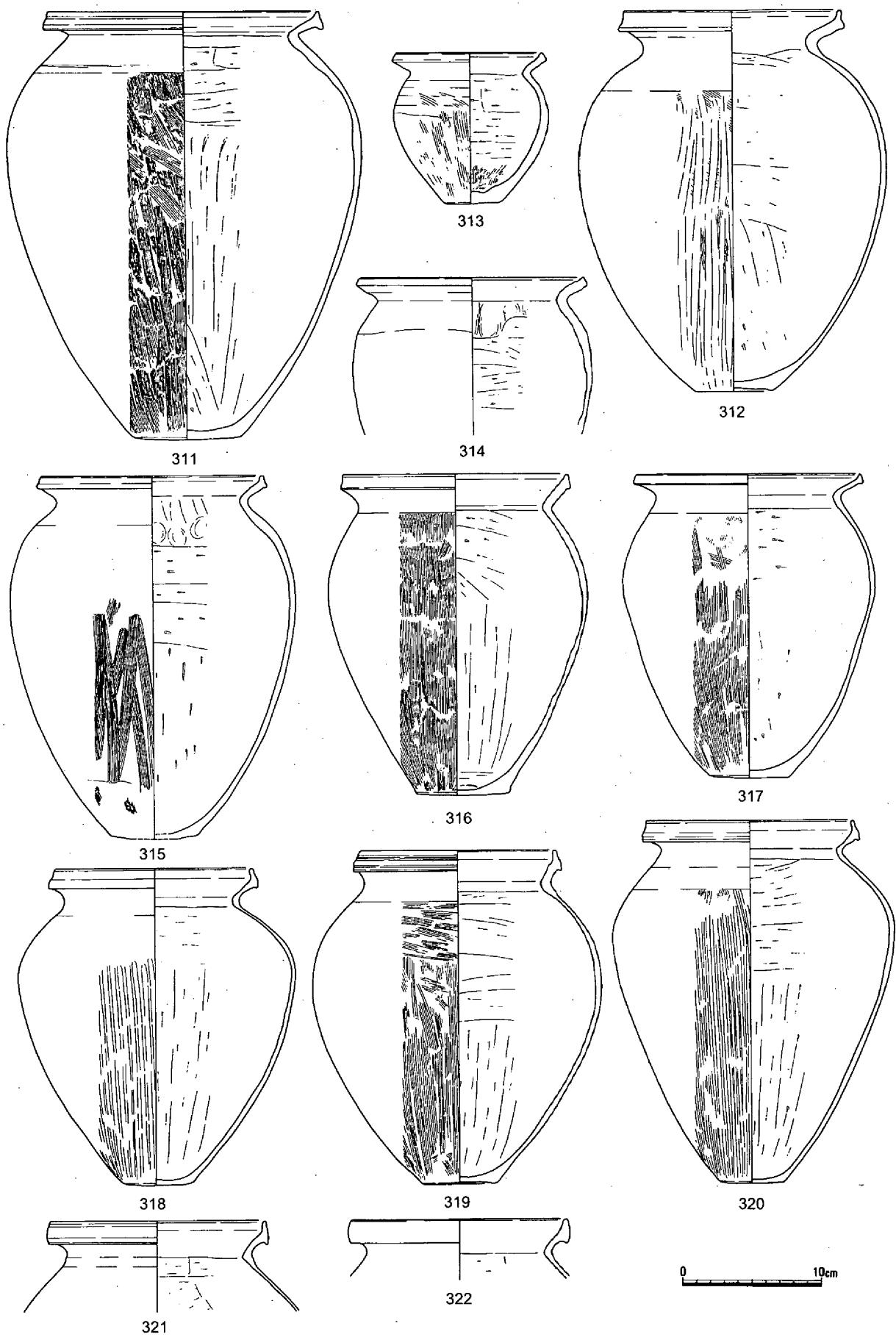
ができなかったが、量的に弥・後・Ⅲが多いことから、この時期に求めたい。溝9には溝を埋め尽くすように4箇所に大量の土器が投棄されていた。4箇所とも時期・器種に違いはなく、9割は弥・後・Ⅲ、ついで弥・中・Ⅲ、極少量の弥・後・Ⅰ～Ⅱ、そして上層に弥・後・Ⅳ、須恵器が数点みられた。溝9は弥・後・Ⅲの時期に機能を停止した可能性が強い。283～307は弥・中・Ⅲの時期の混入土器である。296は内面ヘラケズリで器壁の薄い鉢で類例のないもの。307は回転台形土器である。(物部)



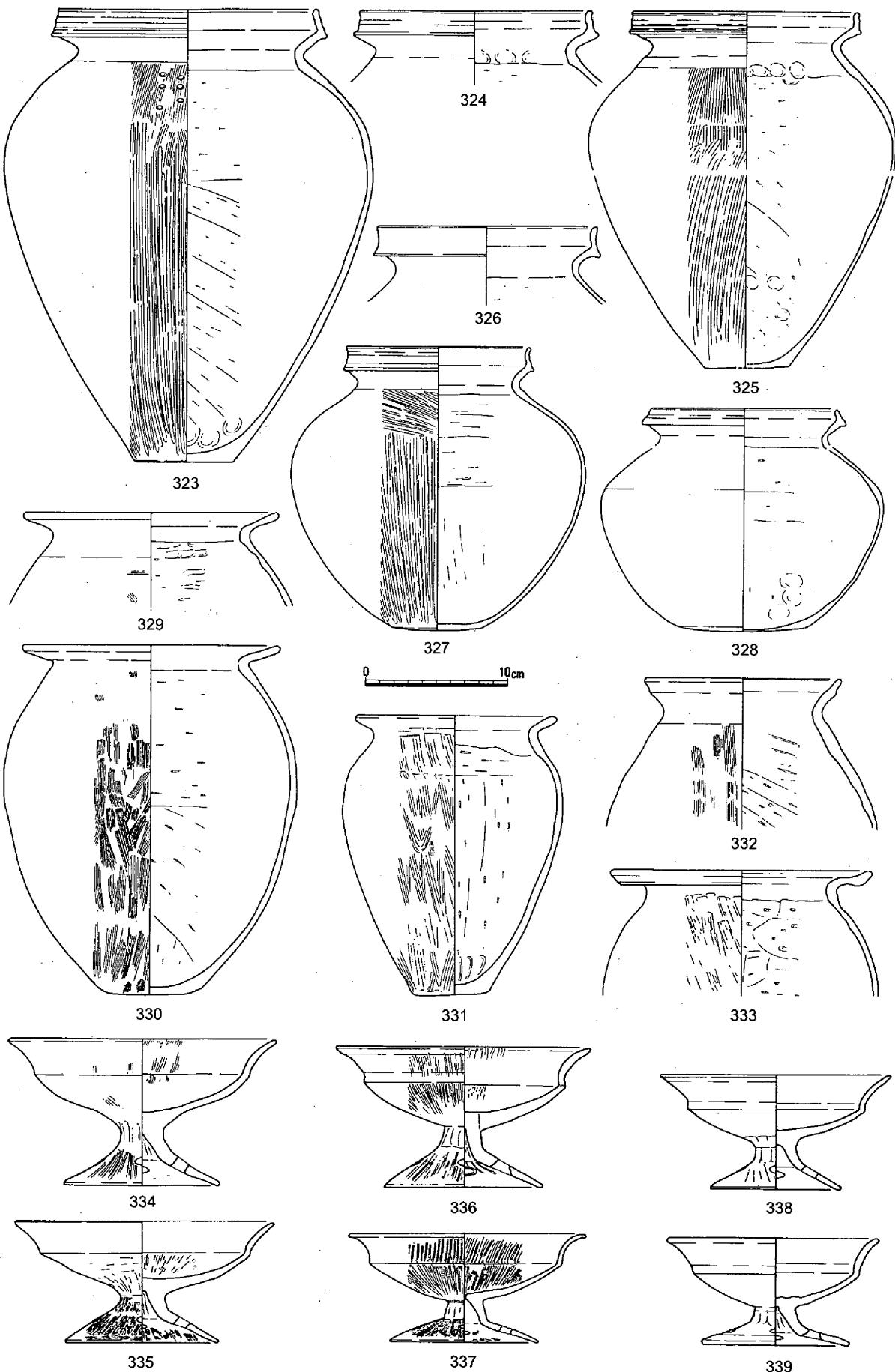
第75図 溝5～9 (1/40)



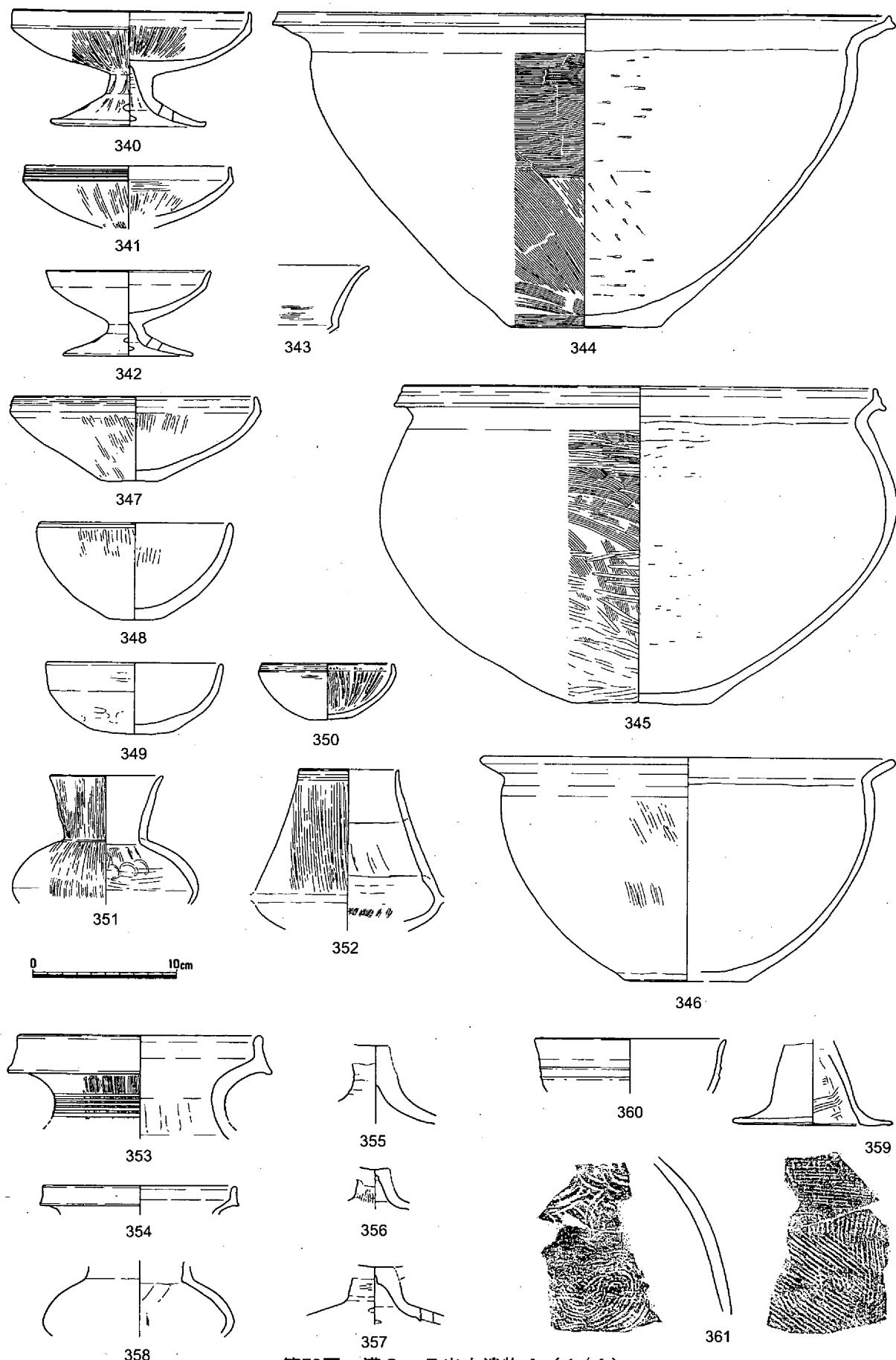
第76図 溝9出土遺物1 (1/4)



第77図 溝9出土遺物2(1/4)

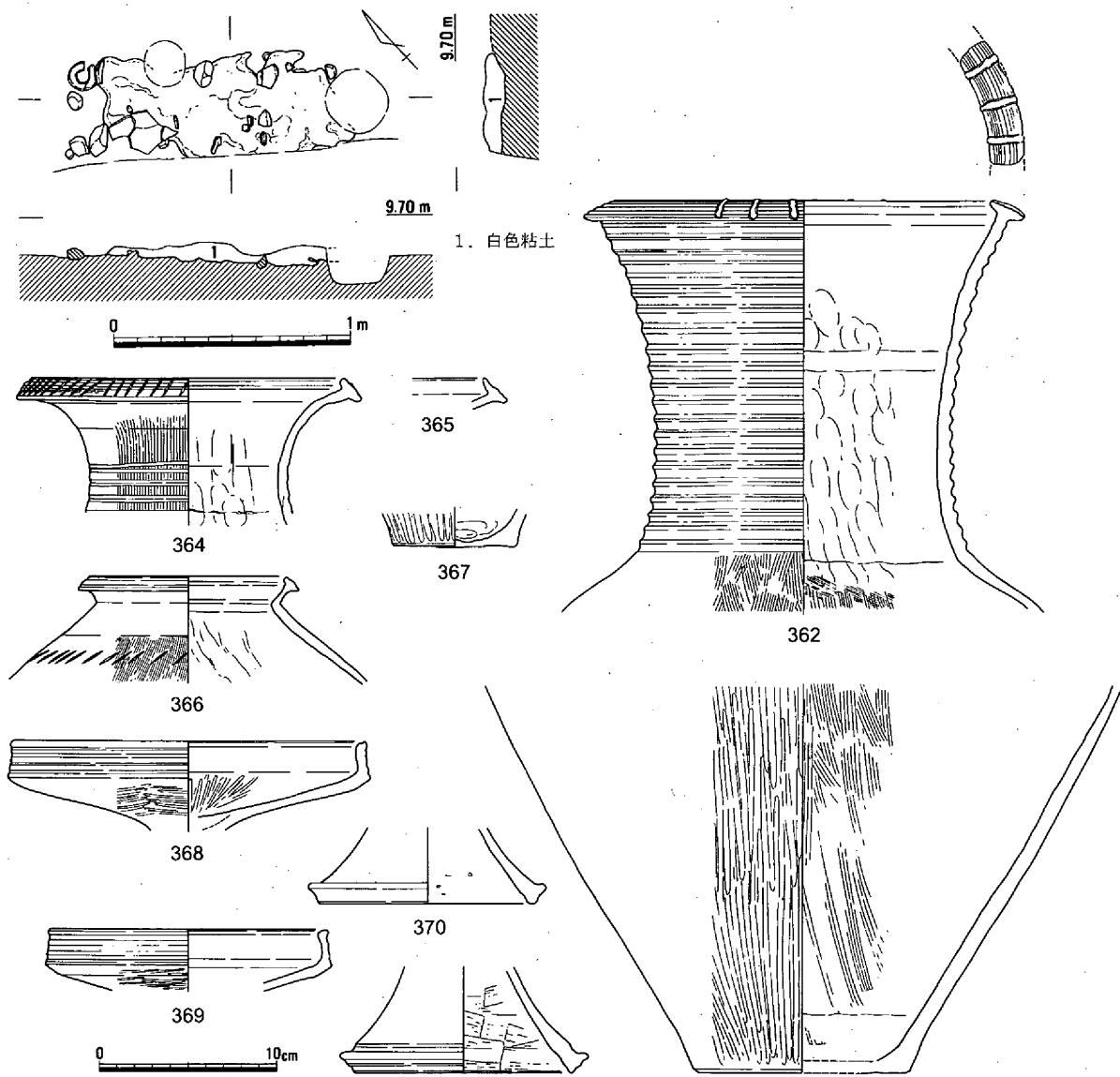


第78図 溝9出土遺物3 (1/4)



第79図 溝9・7出土遺物4 (1/4)

353~361 溝7



第80図 粘土塊・出土遺物 (1/30・1/4)

(5) 粘土塊 (第80図 図版12)

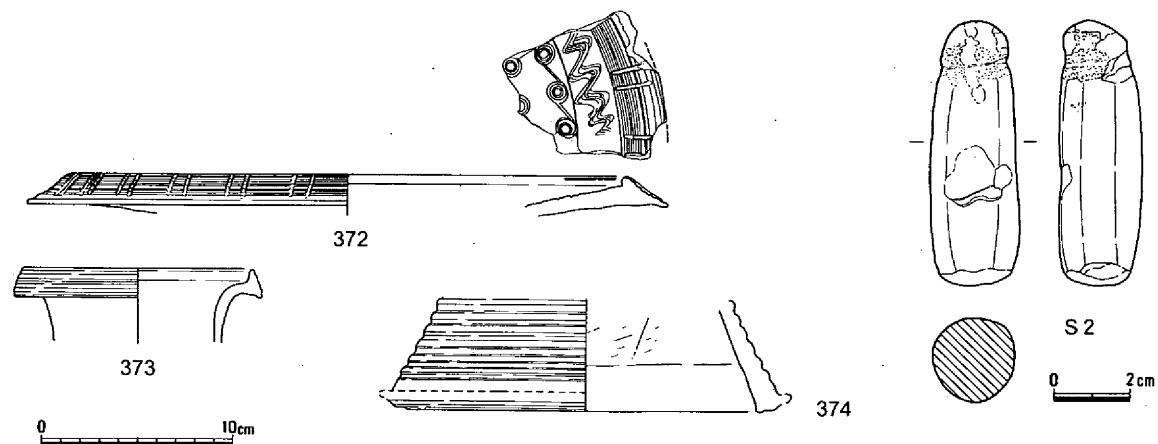
9区北部に位置し、竪穴住居8に一部切られる。大きさは、長さ1.05m、幅0.43m、厚さ0.09mを測る白色粘土で、土器の破片をかみ込んでいた。僅かな窪地に廃棄されたものと考えられた。時期は
弥・中・Ⅲ。362壺、366壺、369高杯と粘土の胎土分析を行った。(第8章第3節) (物部)

(6) 土器溜まり (第81図)

土壙21の北側に土器の散布が見られる箇所が存在した。散布範囲は約3×1mを測る。出土遺物には壺372・373、器台374がある。壺372には口縁部に棒状浮文が、内面には波状文・竹管文・ヘラ描文が施されている。時期は弥・中・Ⅲであろう。(蛇原)

(7) 遺構に伴わない遺物 (第82~84図 図版18)

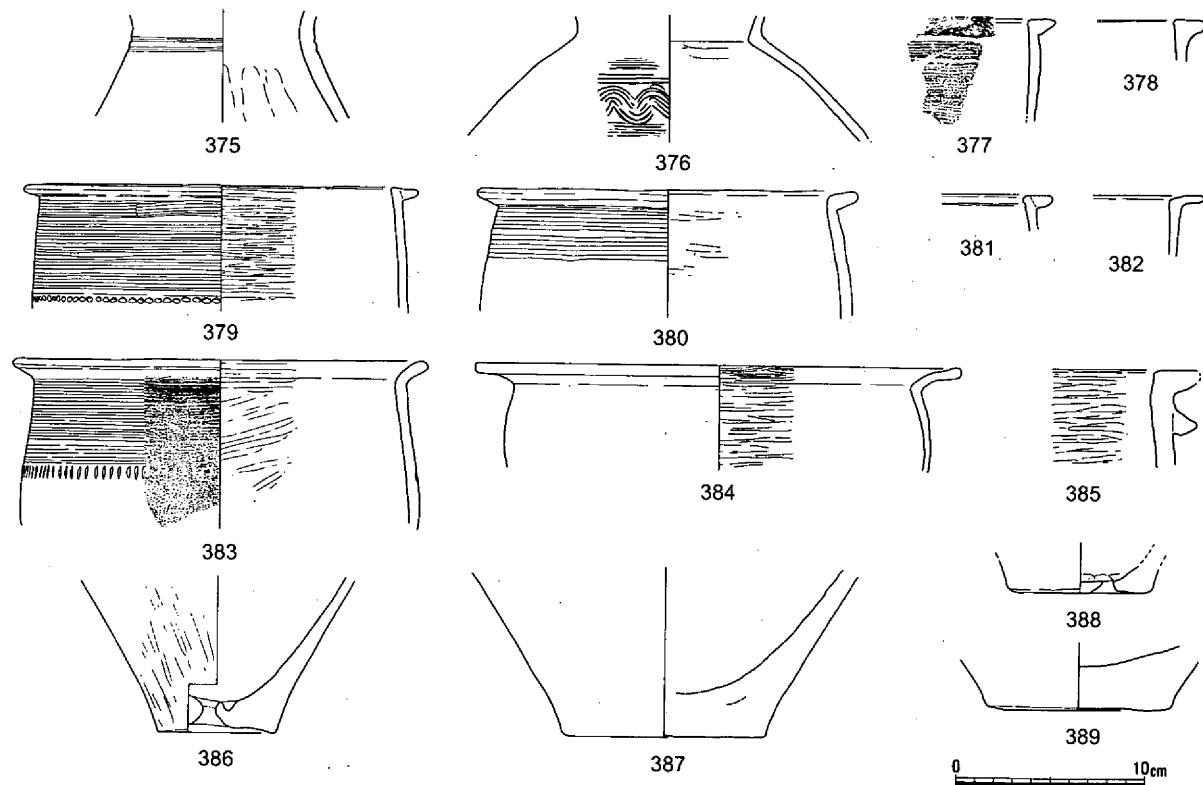
土器、土製品、石器がある。後・I~Ⅲの時期の土器を紙面の都合上ほとんど割愛した。375・376は広口壺で、375は頸部に2条のヘラ描沈線、376は肩部に平行櫛描文と波状櫛描文を施す。377~389は赤褐色を呈する甕で、口縁部は倒「L」字形のもの377~381と水平またはやや上方に折り曲げたもの382~384がある。体部上半の沈線はすべて櫛描。385は甕か鉢で、口縁下に貼付突帯が付く。以



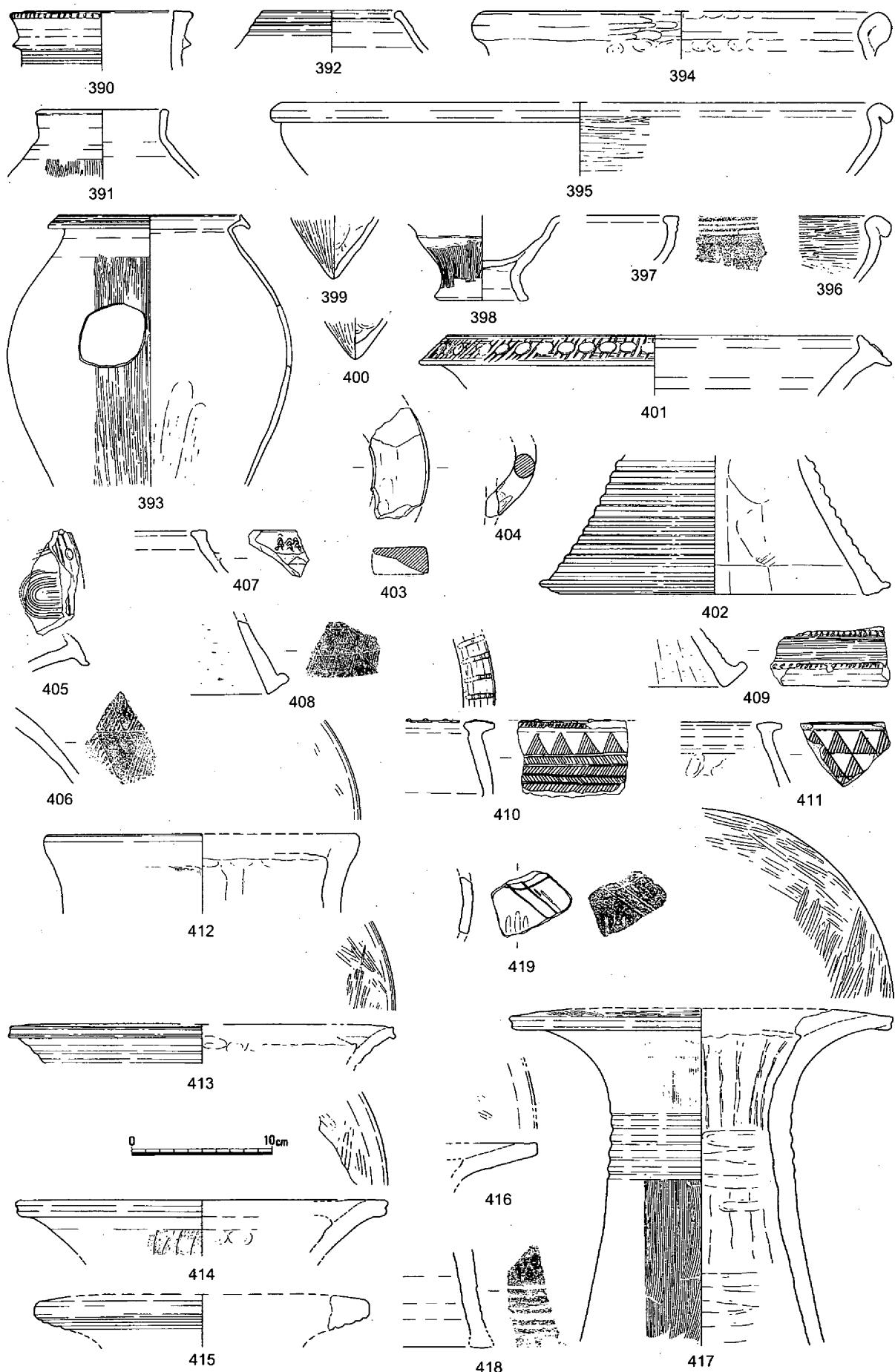
第81図 土器溜まり出土遺物（1/4・1/2）

上は弥・前・Ⅱ～弥・中・Ⅱの土器で、9割以上が8・9・11区の微高地上から出土した。390～419は灰白色を呈し、砂粒の少ない土器で弥・中・Ⅲの時期に比定できる。393壺体部には直径4cmの穿孔がある。394～396は口縁部が玉縁状の鉢、399・400は外面に丁寧なヘラミガキを施した尖底で小形の鉢。把手には断面円形404と長方形403がある。施文も各種ある。412～417は回転台形土器。上面外縁部が外方へ大きく拡張する413～417と拡張しない412がある。上面径は22～30cm。器台としての機能が考えられる。413～417は11区から出土した。421～423・425・426は7区から出土し、弥・後・Ⅳに属す。C8～14は分銅形土製品。C13・14は分厚く、黄橙色を呈する。それ以外は灰白色を呈し、弥・中・Ⅲ～後・Iの範疇に入るものと考えられる。C15は不明土製品。上面は剥離し、内面は押圧が著しい。C16は箱形土製品。C17・18は動物形土製品で尻尾の形状から鹿の可能性が高い。頭部と四肢を欠損し、胸部に穴を通している。以上の土製品の胎土は弥・中・Ⅲの土器と類似している。C16～18は11区から出土。S3は緑色片岩製の石包丁である。

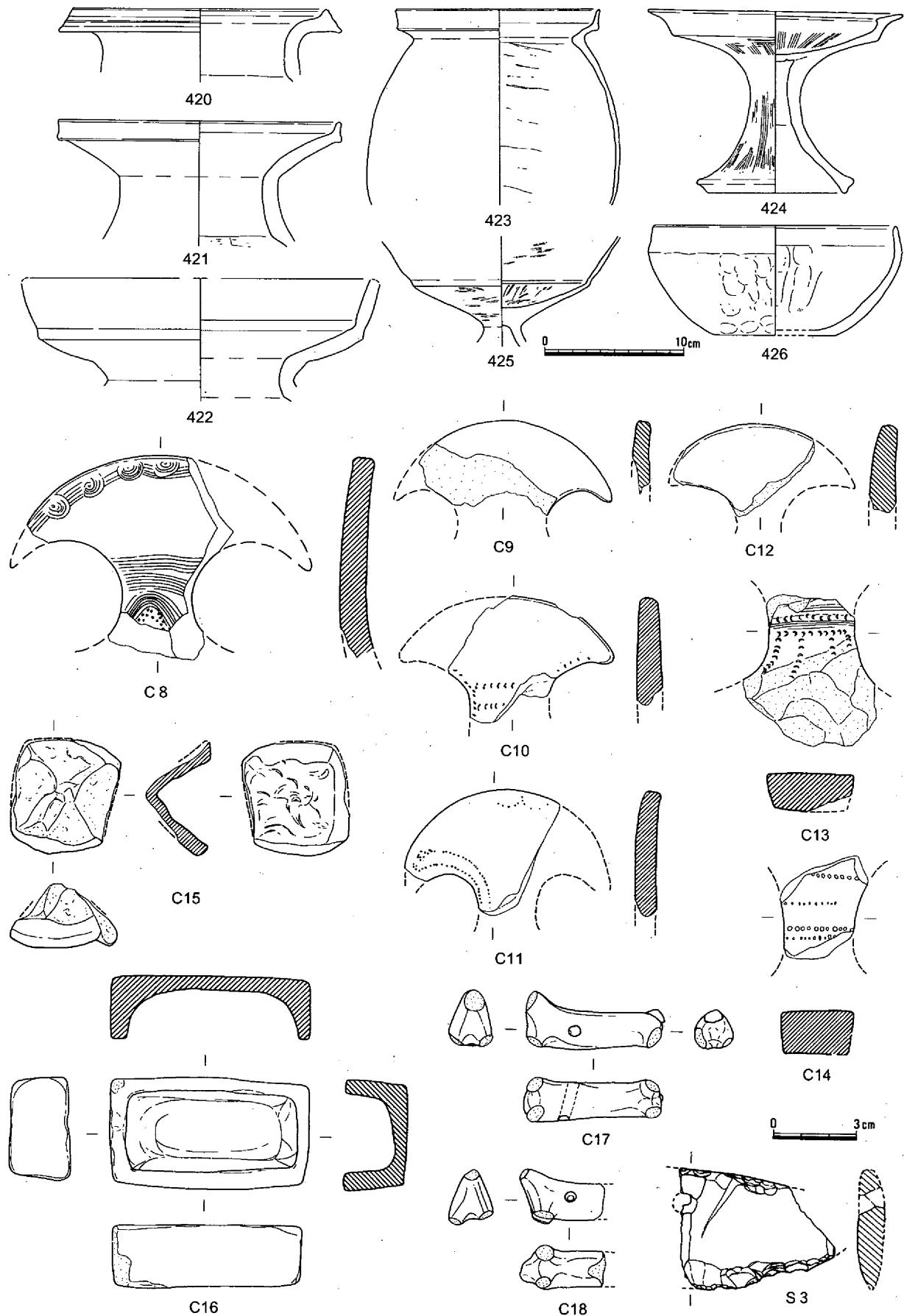
(物部)



第82図 遺構に伴わない遺物1（1/4）



第83図 遺構に伴わない遺物2 (1/4)



第84図 遺構に伴わない遺物3 (1/4・1/2)

第3節 古墳時代の遺構・遺物

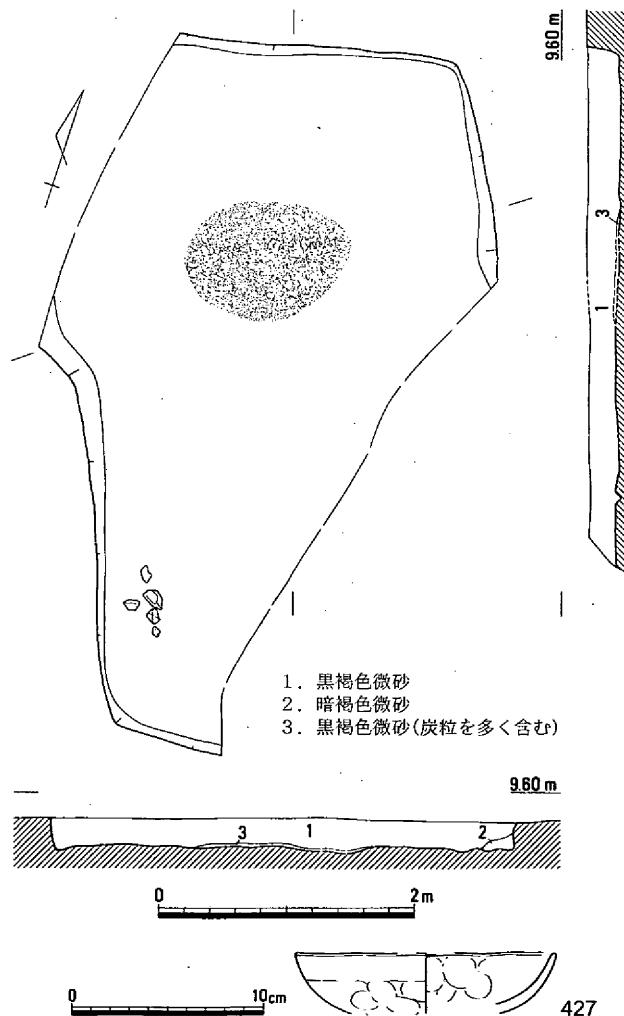
(1) 壁穴住居

壁穴住居9 (第85図)

8区南端部に位置し、壁穴住居2および土壙11の上部を切っている。また、南西部は現代の擾乱により削平され、北西部は調査区外になる。5.60×3.2~3.45m以上の北西部がやや張り出すような不正長方形を呈すると考えられる。検出面から底面までの深さは約20cm、底面の標高は9.18mを測る。壁体溝や柱穴は検出されなかった。貼床および整地土もなく、底面がそのまま床面となる。床面上には南西部に5~10cm大の小礫5点と中央部やや北寄りに1.2×0.8mの範囲に炭の散布が見られた。出土遺物は土器小片のみであり、ほとんどは弥・後・Ⅲ~Ⅳの時期のものである。そのうち何点かは壁穴住居2出土土器との接合が確認され、下層の遺構に伴う土器が混入しているものと考えられる。**427**は内外に押圧、ナデ調整が見られる土師器の鉢である。時期は古墳時代前期と思われる。(物部)

壁穴住居10 (第86図 図版13・18)

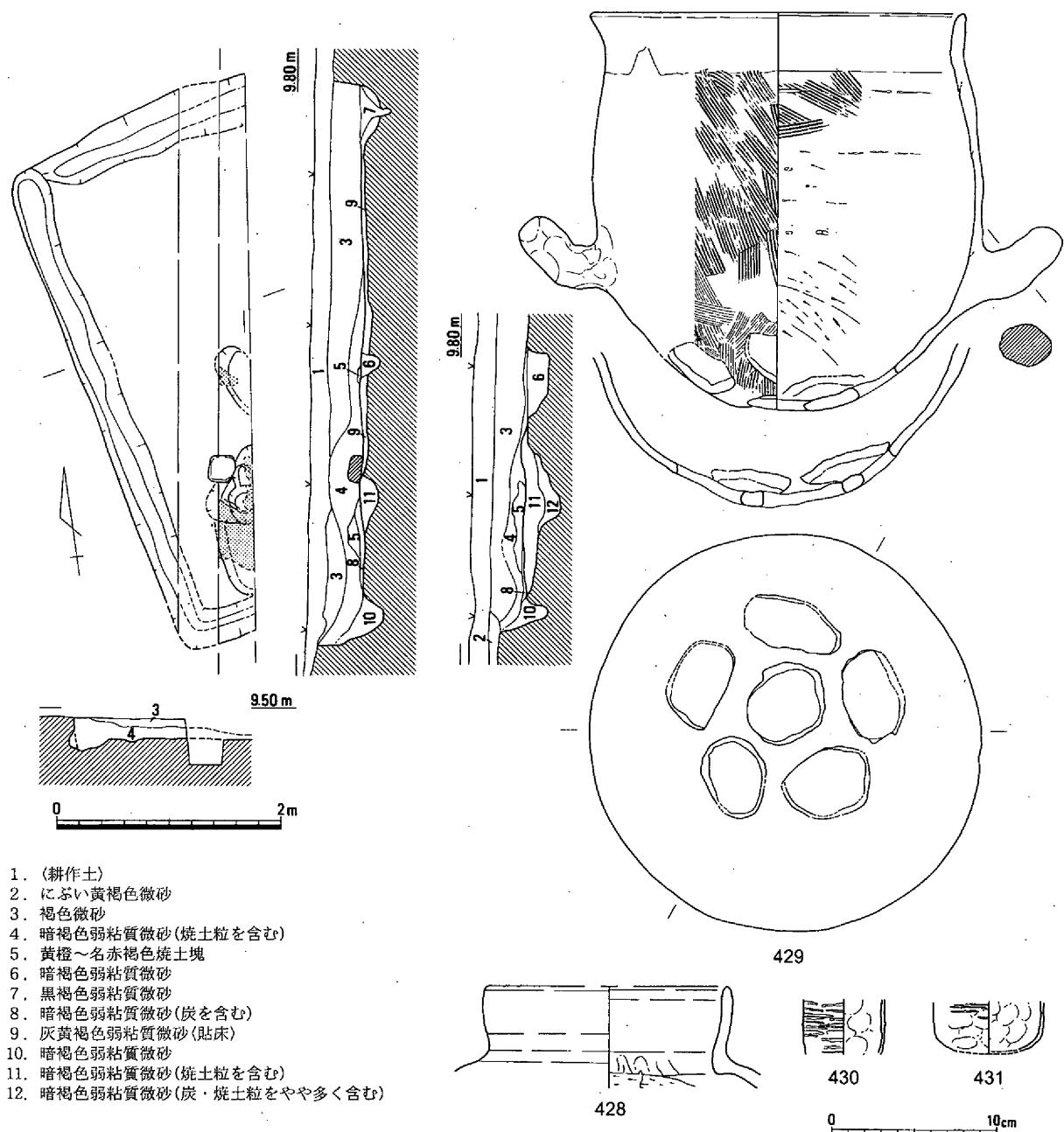
7区の南東隅に位置する。東側2/3は調査区外になる。平面形は4.34×2.0m以上の方形を呈し、検出面からの深さは約33cm、床面の標高は9.21mを測る。柱穴は確認されなかった。灰黄褐色の貼り床が見られる。住居の南西隅からやや東に寄った所に比較的大きな焼土塊が集中する。竈の残骸と考えられる。焼土塊を取り除くと炭粒を含む平らな床面があり、その面に焼土面は確認されなかつたので、竈本体はこのすぐ東側の調査区外に在ると考えられる。また、焼土塊の北に接して被熱した四角い石が床着であり、使用痕などを見られないことから竈を構成する石材であった可能性がある。焼土塊下の床面下には深さ30cm程度の不正形な深い土壙が確認された。埋土には焼土粒や炭粒を含んでいる。出土遺物には、口縁部が内湾気味に垂直に立ち上がる壺**428**、ほぼ完形に復元された瓶**429**、小形で非常に器壁の薄い製塩土器**430・431**がある。その他須恵器の細片が2点ある。いずれも埋土中からの出土であり、**429**の瓶片は北西部から一括して出土し、住居の埋没過程に投棄されたものと思われる。この住居の時期は、瓶や製塩土器の形態から古・中・Ⅱと考えられる。また、壁体溝より、2cm大の黄色粘土塊が検出され、瓶**429**とともに胎土分析を行った。(物部)



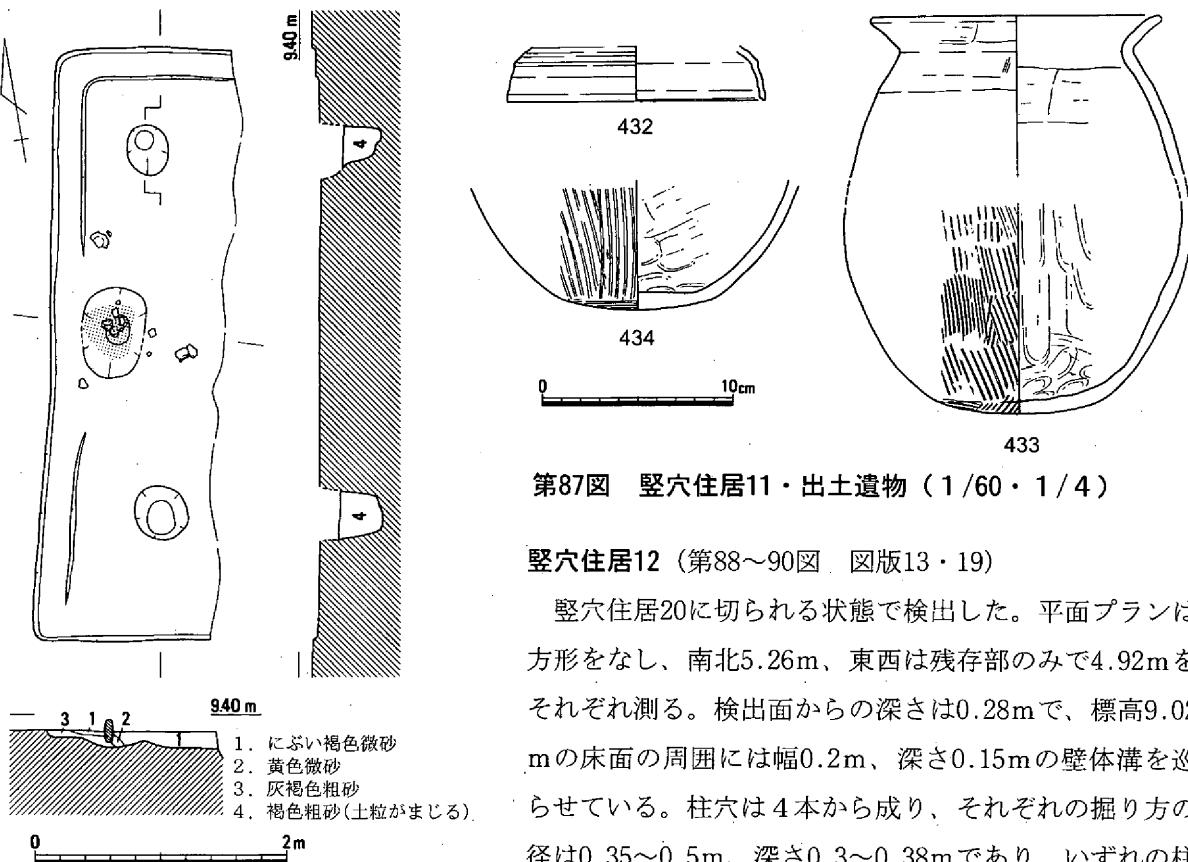
第85図 壁穴住居9・出土遺物 (1/60・1/4)

堅穴住居11（第87図）

7区の北半部、堅穴住居10の北約20mに位置する。住居の東半分以上を現代の攪乱によって削平されている。平面形は4.60×1.4m以上の方形を呈し、検出面からの深さは0.1m、床面標高は9.24mを測る。壁体溝はない。壁から20cm前後内側に僅かな段があり、その内側が2cmほど低くなっている。基盤層が粗砂のため、柱穴の確認は難航したが、壁に近い位置に2箇所、土混じりの粗砂が埋土の柱穴らしきものが確認された。そして、住居西辺中央に全体がよく焼けた浅い窪みと、その中央に被熱した支柱石が立った状態で検出された。支柱石はその根本を粘土で固めている。竈の痕跡と考えられる。出土遺物は少量である。432は須恵器杯蓋、433・434は土師器の甕で、外面に粗いハケメ、内面はヘラケズリ後ユビナデが見られる。432・434は竈内の窪みから、433は床面から出土した。それらの土器の特徴から住居の時期は古・中・Ⅱ古相と考えられる。（物部）



第86図 堅穴住居10・出土遺物（1/60・1/4）



第87図 墓穴住居11・出土遺物 (1/60・1/4)

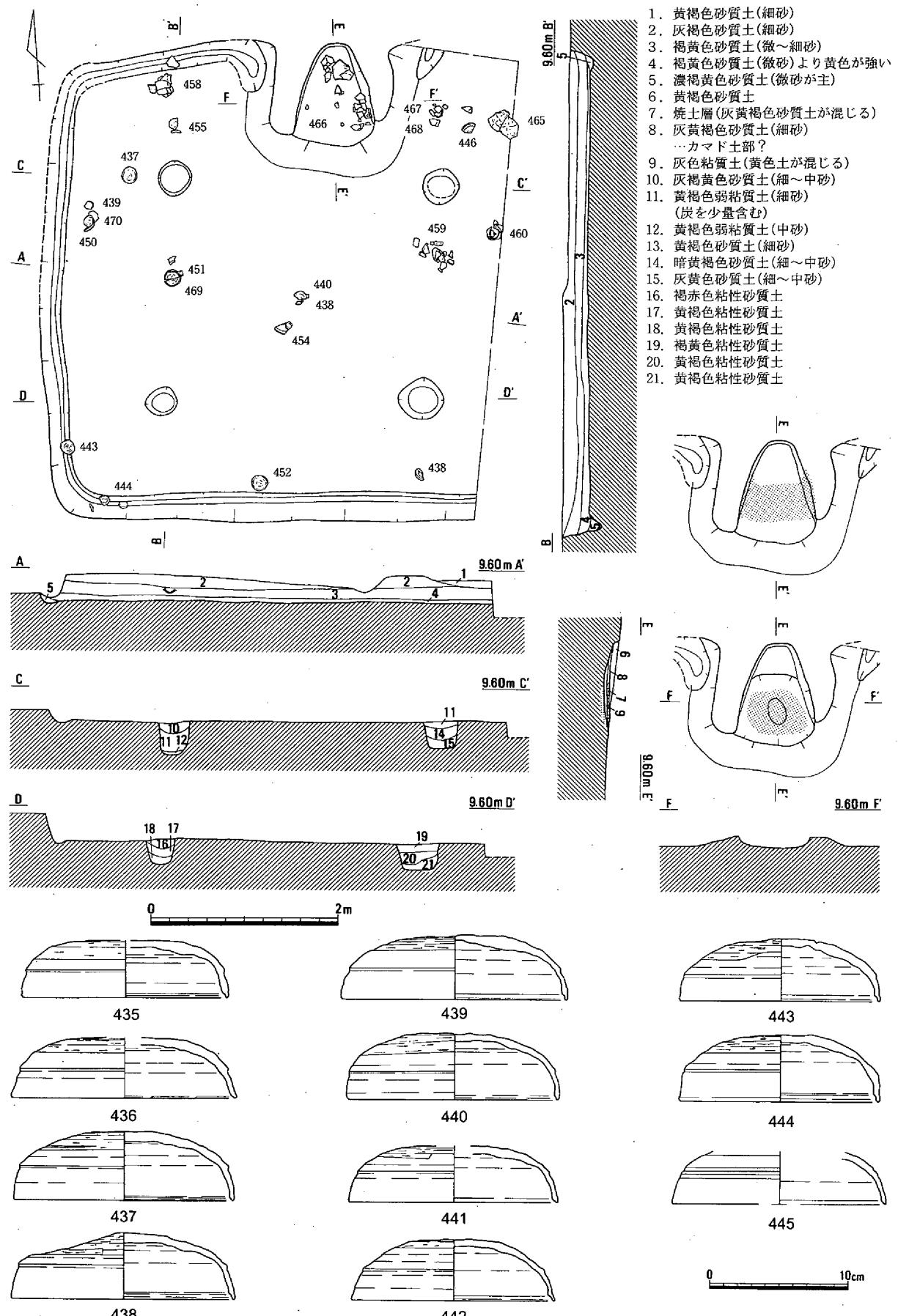
墓穴住居12 (第88~90図 図版13・19)

墓穴住居20に切られる状態で検出した。平面プランは方形をなし、南北5.26m、東西は残存部のみで4.92mをそれぞれ測る。検出面からの深さは0.28mで、標高9.02mの床面の周囲には幅0.2m、深さ0.15mの壁体溝を巡らせており。柱穴は4本から成り、それぞれの掘り方の径は0.35~0.5m、深さ0.3~0.38mであり、いずれの柱穴においても抜き取られたためか柱痕跡は見られなかつた。

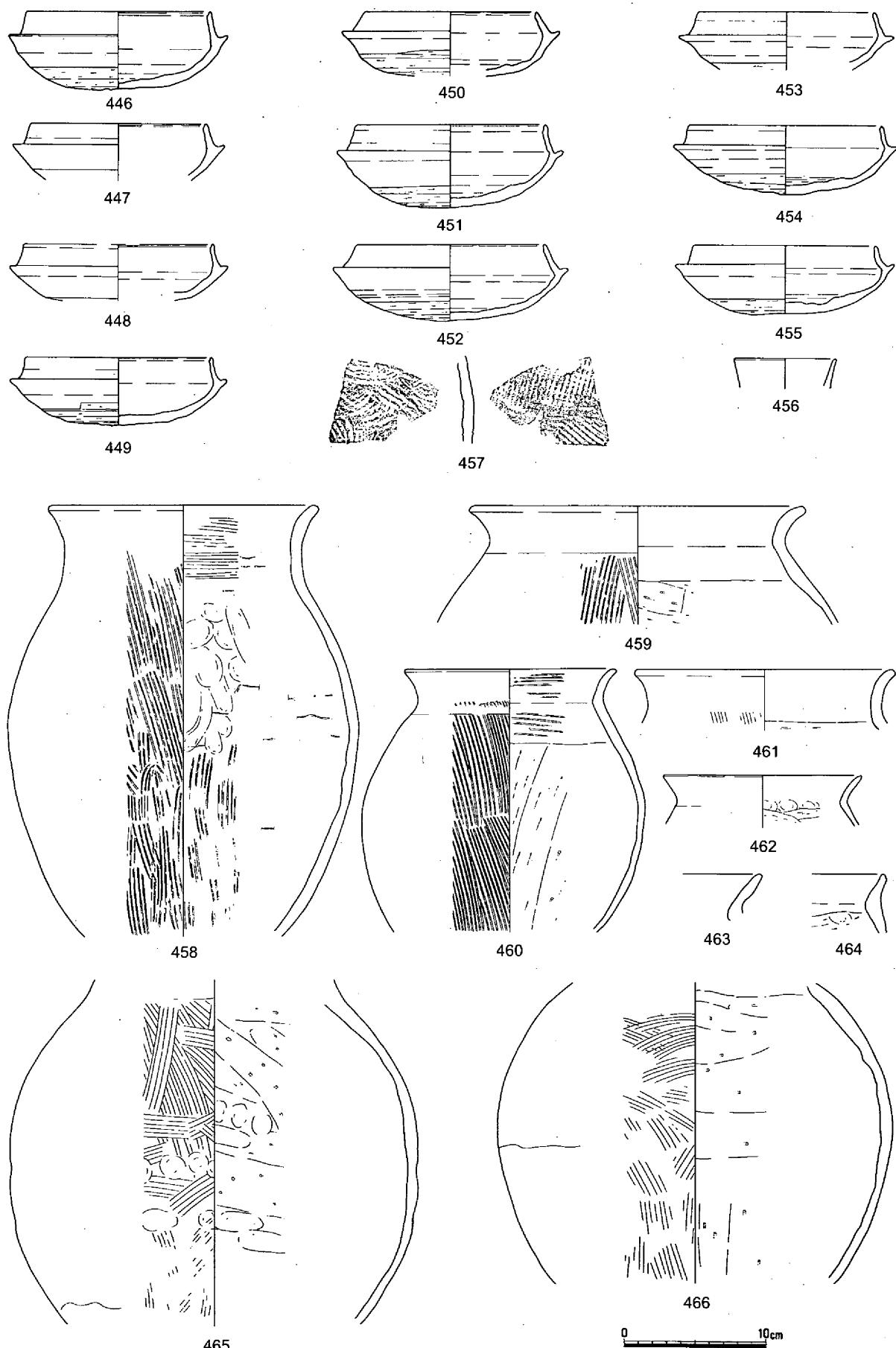
また柱間距離は最大で2.84m、最小で2.34mを測りややばらつきが見られる。さらに、住居北壁の中央部分には造りつけのカマドが設けられており、壁体溝はカマドの周囲では途切れていた。このカマドは検出部分の長さ0.97mを測り、煙出し部は住居外には出ていない。燃焼部と思われる被熱面は灰色粘質土をはさみ2面存在し、少なくとも1度構築し直されていることが想定される。2面とも床面、壁面がよく焼けており、そのうちの上面から甕460が割れた状態で出土した。

主な出土遺物は須恵器杯蓋435~445、杯身446~455、提瓶456、甕457、土師器甕458~471、高杯472、鉢473・474、瓶475、手づくねの鉢476、動物型土製品C 1等がある。須恵器杯蓋・杯身は、ともに回転ロクロにより整形されており、回転方向は時計回りと半時計回りが存在する。多くが前者に属し、回転方向の判明するもののうち杯蓋は445、杯身は451・452・454・455が後者に属す。土師器甕は、体部が倒卵形をなすもの458・460・467・468と球形をなすもの465・466がある。外面はハケメ調整によるものが多数をしめる。その中で465はハケメ調整をした後に胴部にユビオサエがなされ、469は縦方向のヘラミガキが施されている。一方、内面の形態は、ヘラケズリをしているものが多く見られるがハケメの後ユビオサエをするもの458、ヘラケズリの後ユビオサエをするもの465、内部調整が完全になされず粘土紐の跡が明瞭に残るもの467・468がある。鉢473は一見製塩土器風である。

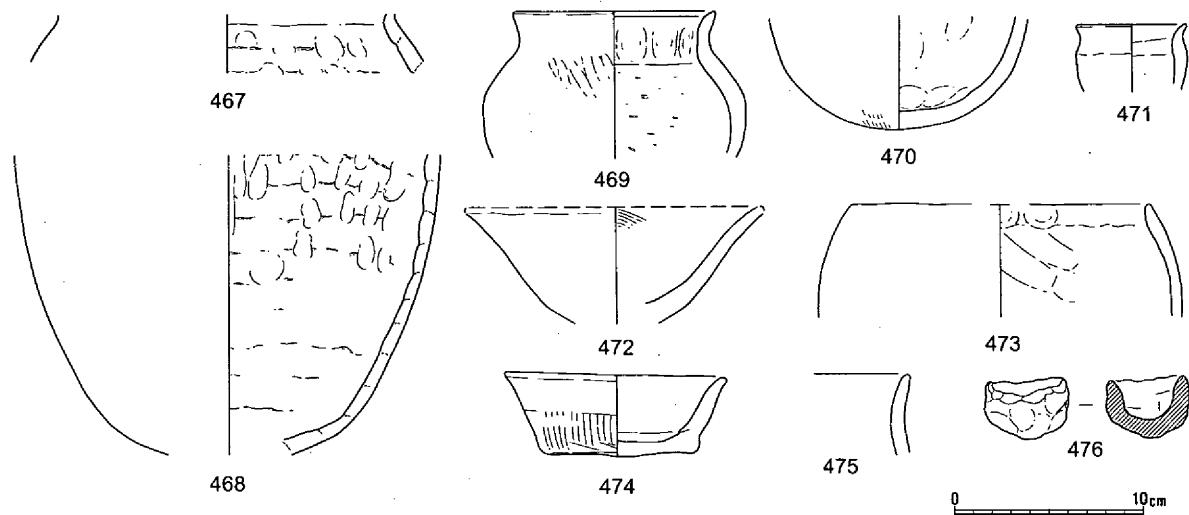
当遺構からは、須恵器、土師器が数量的に同程度出土している。その中で供膳具は一部土師器があるものの須恵器が多くを占め、他方、煮沸具は土師器が主体となっている。器のもつ機能によって性質の違う土器が使われている様子が現れている。さらに土器の出土地点に注目すると、概ねカマド周辺に煮沸具、そして、それを取り巻くように供膳具が分布する傾向が見られた。住居内の空間的な使い分けの結果であろうか。なお、埋土中には多量の弥生中期末から後期にかけての土器が混入してお



第88図 壇穴住居12・出土遺物1 (1/60・1/4)



第89図 竪穴住居12出土遺物2 (1/4)



第90図 壇穴住居12出土遺物3(1/4・1/2)

り、周辺にはそれらの時期の遺構も存在したことが想起される。この遺構の時期は古・後・Iである。(姥原)

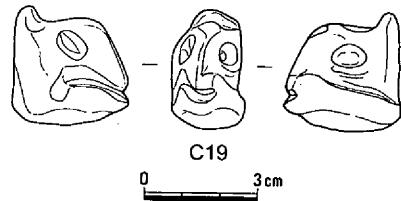
壇穴住居13(第91~94図 図版13・19・20)

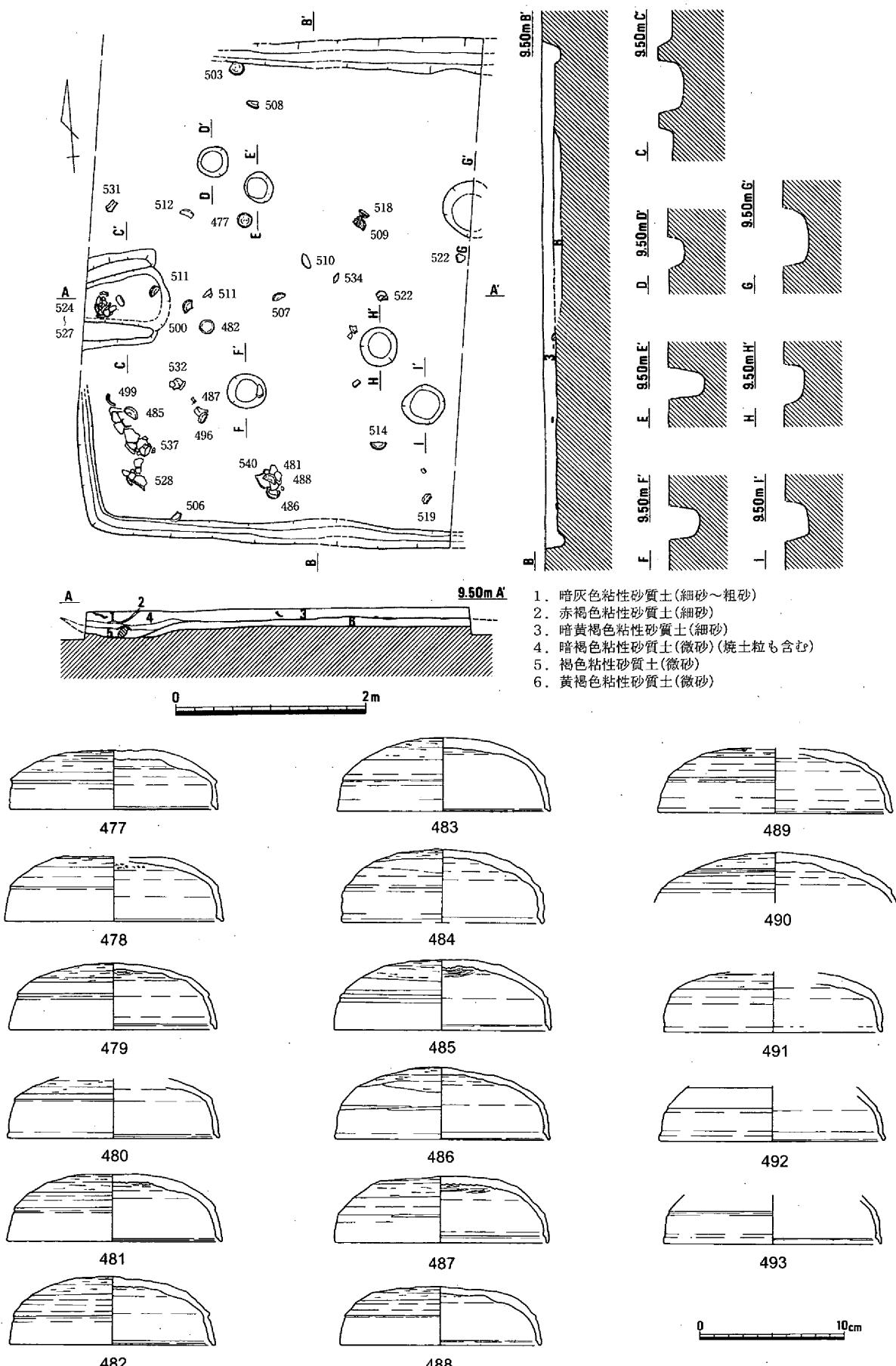
11区のほぼ中央に位置する。方形の平面形を呈し、周囲に壁体溝がめぐっている。調査区の制約で東側は調査できていないが、大きさは長さ5.38m、残存幅は4m以上を測る。主軸はN-86°-Wである。住居の西辺のほぼ中央にカマドが存在する。カマドには被熱痕跡がみられ、左右に袖が残存する。カマドの中央部には支柱として利用されたと考えられる棒状の石が存在した。住居内からは柱穴と考えられる穴が検出されている。E・F・G・Iが主な柱穴と考えられ、4本の柱をもつ住居であったと推測できる。柱穴はいずれも浅く、床面から約0.3m前後を測る。住居内からは床面付近を中心に多くの土器片が出土している。須恵器は住居床面全体に散乱した状態で出土したのに対して、土師器の多くはカマド周辺を中心で出土している。

477~521は須恵器であり、その器種のほとんどは杯蓋および杯身である。477~498は須恵器杯蓋である。口径13~16.2cm、器高4.1~5.2cmを測る。天井部にはヘラケズリが施されている。499~517は須恵器杯身である。口径12~14cm、器高4.1~5.5cmを測る。これらの須恵器のうち、478、489、481、482、485、487、494、497、502、504、515の内面には同心円文の当て道具の痕跡がみられる。518は長脚の無蓋高杯である。杯部の中央付近に波状文が施されており、脚部には透しがみられる。519は短頸壺である。520は壺の口縁部である。521は破片であるが、壺か甕の体部と推測できる。外面には格子タタキが施されているが、内面の同心円文タタキはややすく消し気味である。522~542は土師器である。522~532は甕である。522は粘土紐の痕跡が顕著である。524~527は住居内のカマドの中に残っていた土師器である。528と537はカマドの南側で出土した。533~536は土師器高杯である。537は甕である。把手をもち、内外面に粗いハケメがみられる。538は把手である。539は羽釜の鐸である。540~542は甕である。540の内面にはハケメあるいは指頭圧痕がみられるが、541と542の内面はヘラケズリが施されている。またその他の遺物として製塩土器、玉類、石器が出土している。543~546は製塩土器である。545と546の外面にはタタキの痕跡がみられる。J1は滑石製玉である。S5は砥石で、流紋岩製である。重さは33.3gを測るが、両端が欠損している。

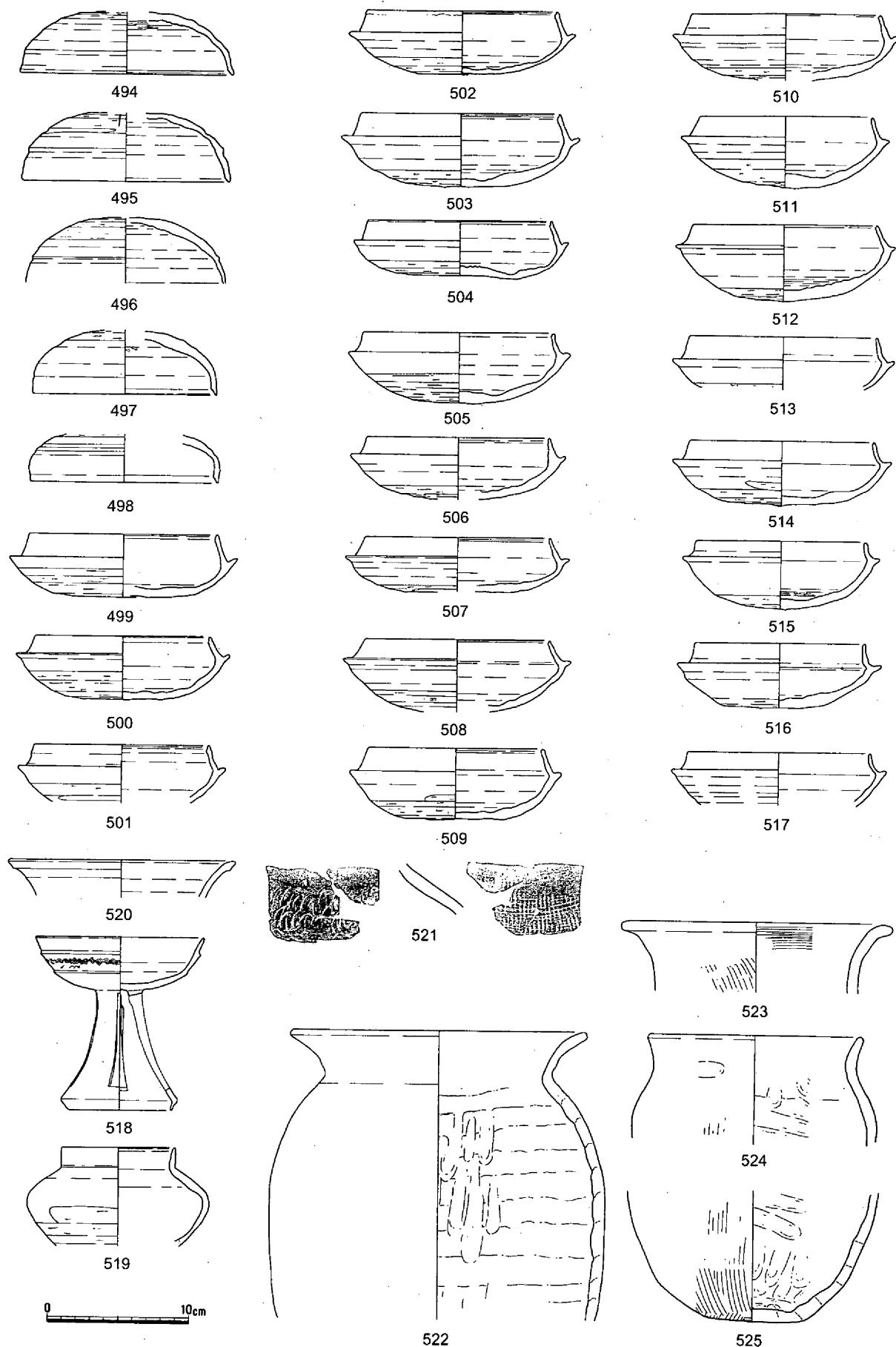
これらの出土遺物から住居跡の時期は古・後・Iであると推測される。

(金田)

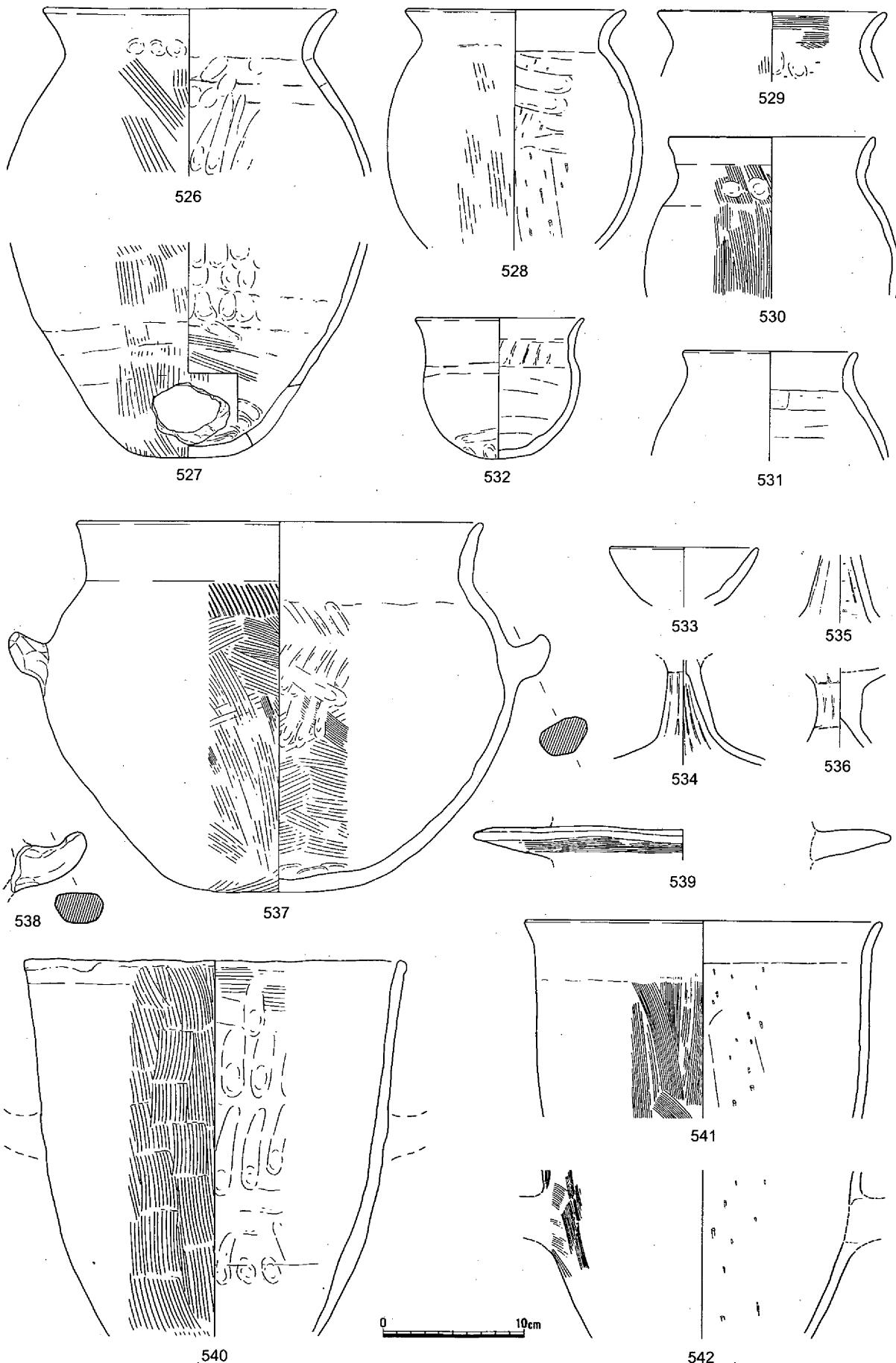




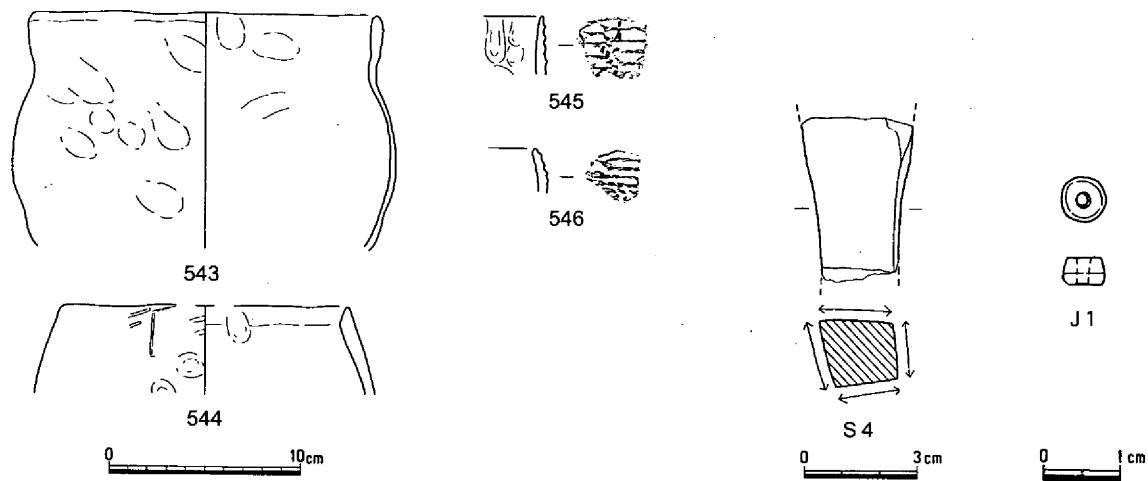
第91図 竪穴住居13・出土遺物1 (1/60・1/4)



第92図 竪穴住居13出土遺物2(1/4)



第93図 墓穴住居13出土遺物3 (1 / 4)

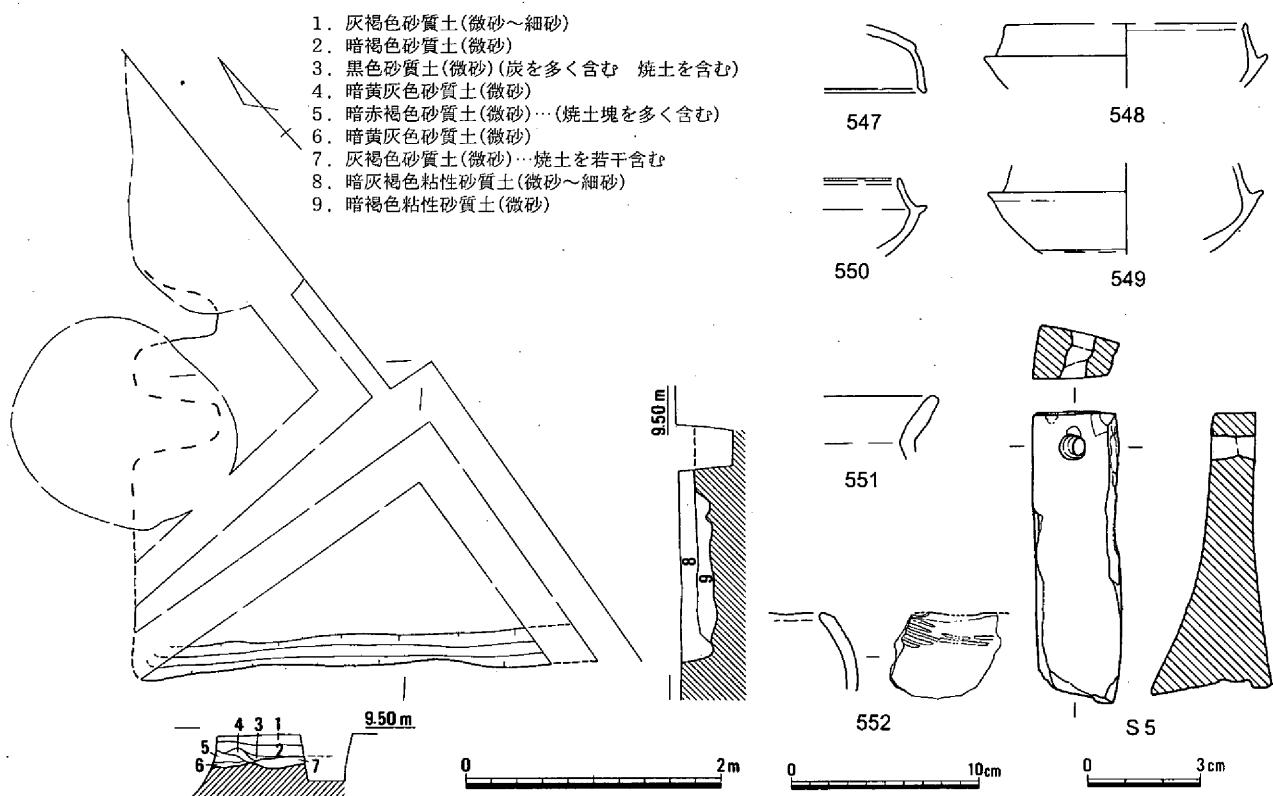


第94図 墓穴住居13出土遺物4 (1/4・1/2・1/1)

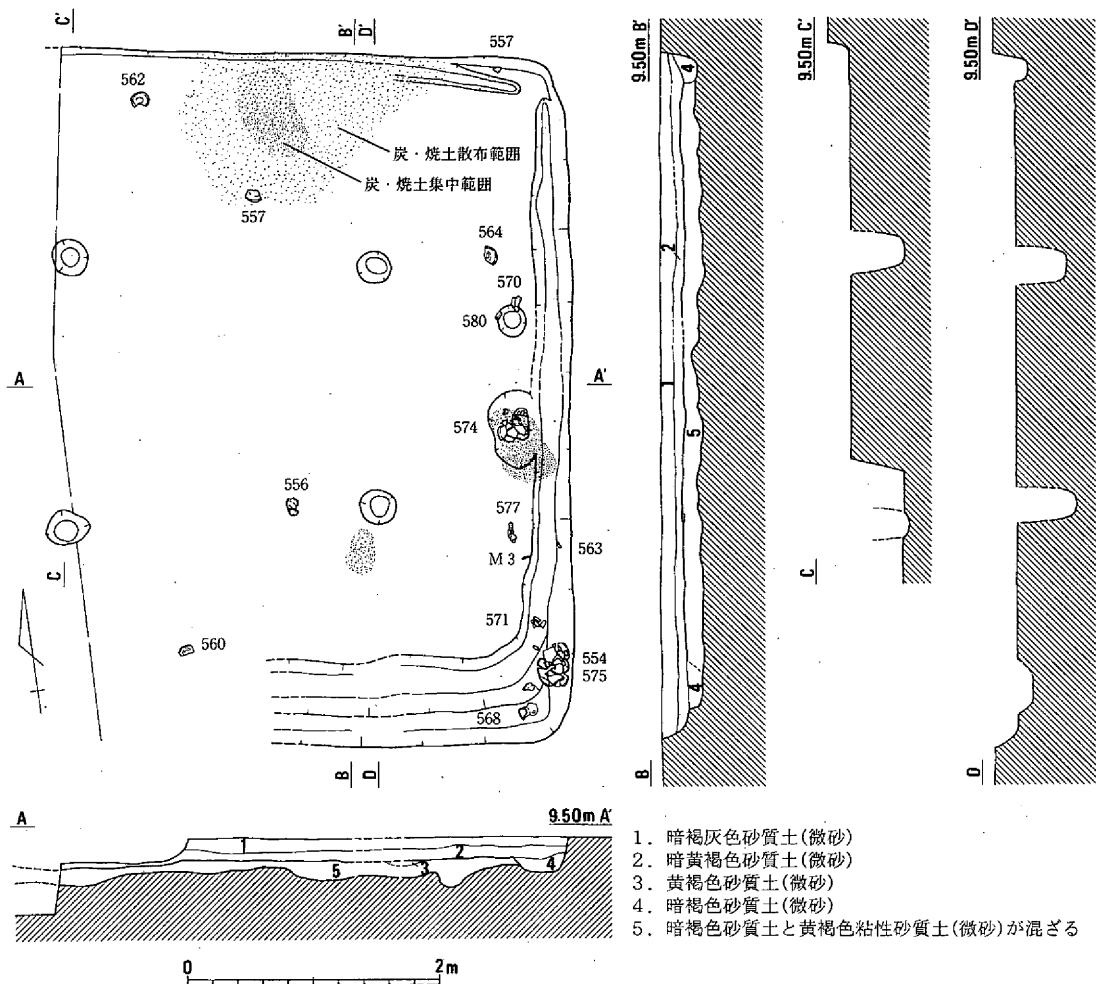
墓穴住居14 (第95図 図版20)

11区と12区の境に位置する。平面形は方形と考えられ、残存長3.5m、残存幅で2.85mを測る。主軸はN-50°-Wである。壁体溝が11区内で検出された。住居の北西側で被熱痕跡がみられカマドが存在していたことがわかった。カマドは土壌32および土壌43により大部分が破壊されていたが、かろうじてその一部を検出することができた。なお、柱穴は検出できなかった。住居埋土から小片であるが、須恵器・土師器等が出土している。547は須恵器杯蓋である。548～550は須恵器杯身である。551は土師器甕である。552は口縁部にタタキが施されており、製塩土器片と推測できる。S5は砥石である。穿孔がみられ、流紋岩製である。58gを測る。これらの出土遺物から、墓穴住居14は古・後・Iと推測できる。

(金田)



第95図 墓穴住居14・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)

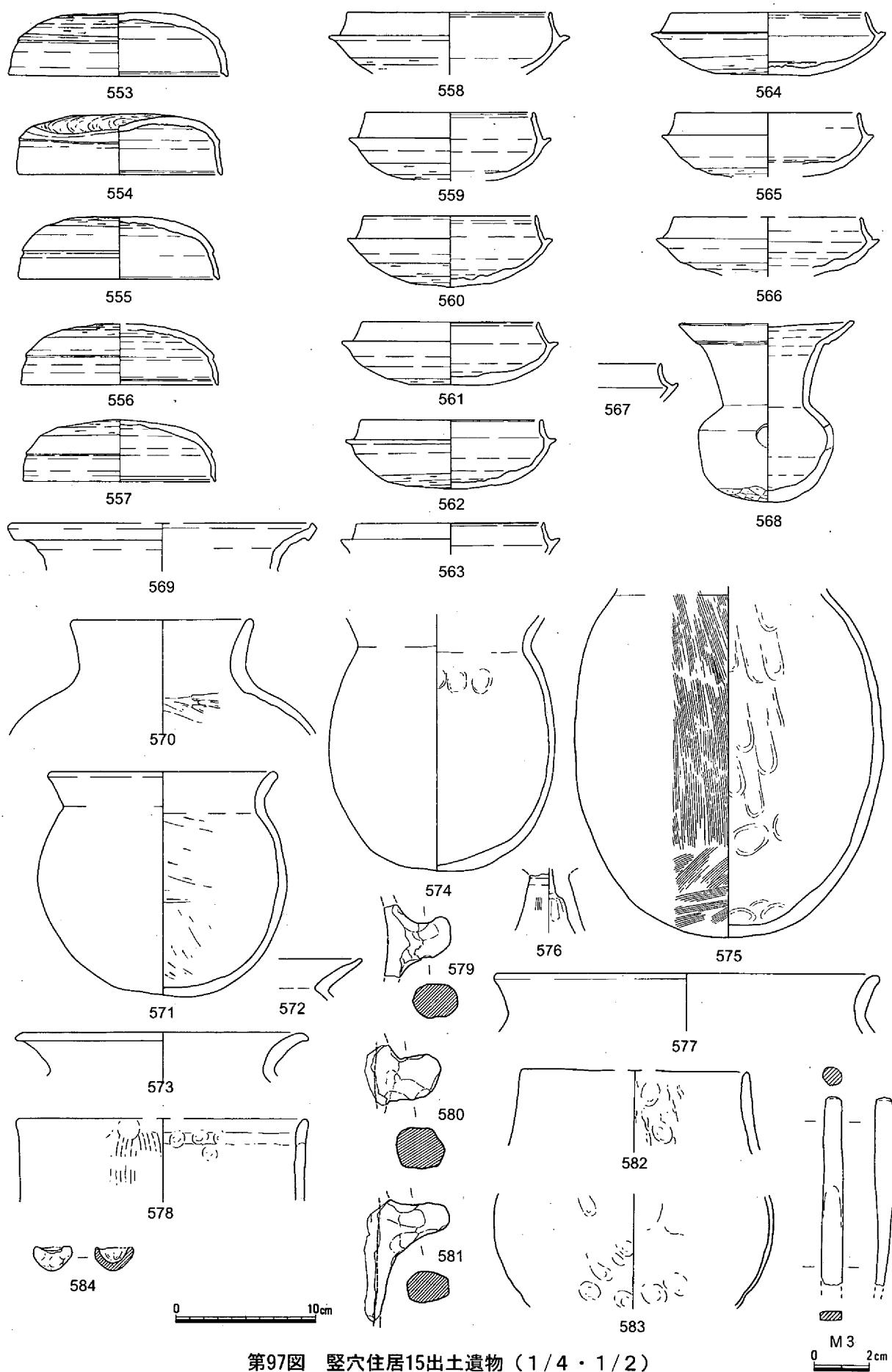


第96図 竪穴住居15 (1/60)

竪穴住居15 (第96・97図 図版14・21)

12区の南半部に位置する。方形の住居跡で、長さ5.49m、幅4.1m以上を測る。主軸はN-9°-Eである。住居跡の周辺には壁体溝が巡っているが、北辺部については壁体溝の存在が確認できなかった。また、南端部では壁体溝が、住居跡の側壁から30cm内側にみられた。住居床面は第2層下面と考えられるが、土層断面観察の結果、第2層の下の第5層においても人為的に掘り返されたような痕跡がみられた。このことから、住居15は建築前に床下を一度掘り返し、床を整えなおしたものと考えられる。床面には柱穴と考えられる穴が4基検出された。住居跡の北端の側壁付近で焼土や炭が散在する箇所が存在したが、カマドのような施設は検出されなかった。よってこの住居にはカマドは付設されていないか、あるいは住居跡の西側に付設されている可能性も考えられる。住居跡内からは須恵器・土師器等多くの遺物が出土した。553～557は須恵器杯蓋である。口径13.6～15.5cm、器高4.4～4.6cmを測る。558～567は須恵器杯身である。口径12～14.5cm、器高4.6～5.2cmを測る。なお、564の内面には同心円文の当て道具の痕跡がみられる。568は甌である。569は壺か甕である。570は土師器壺である。571～575は土師器甕である。571と574の内面の色調が上下で異なっており、液状のものを煮沸した痕跡がうかがえる。576は土師器高杯である。577は土師器甕である。578は甌である。579～581は把手である。582～583は製塩土器である。584は手捏ね土器である。M3は鉄器である。これらの遺物からこの住居跡の時期は古・後・Iと考えられる。

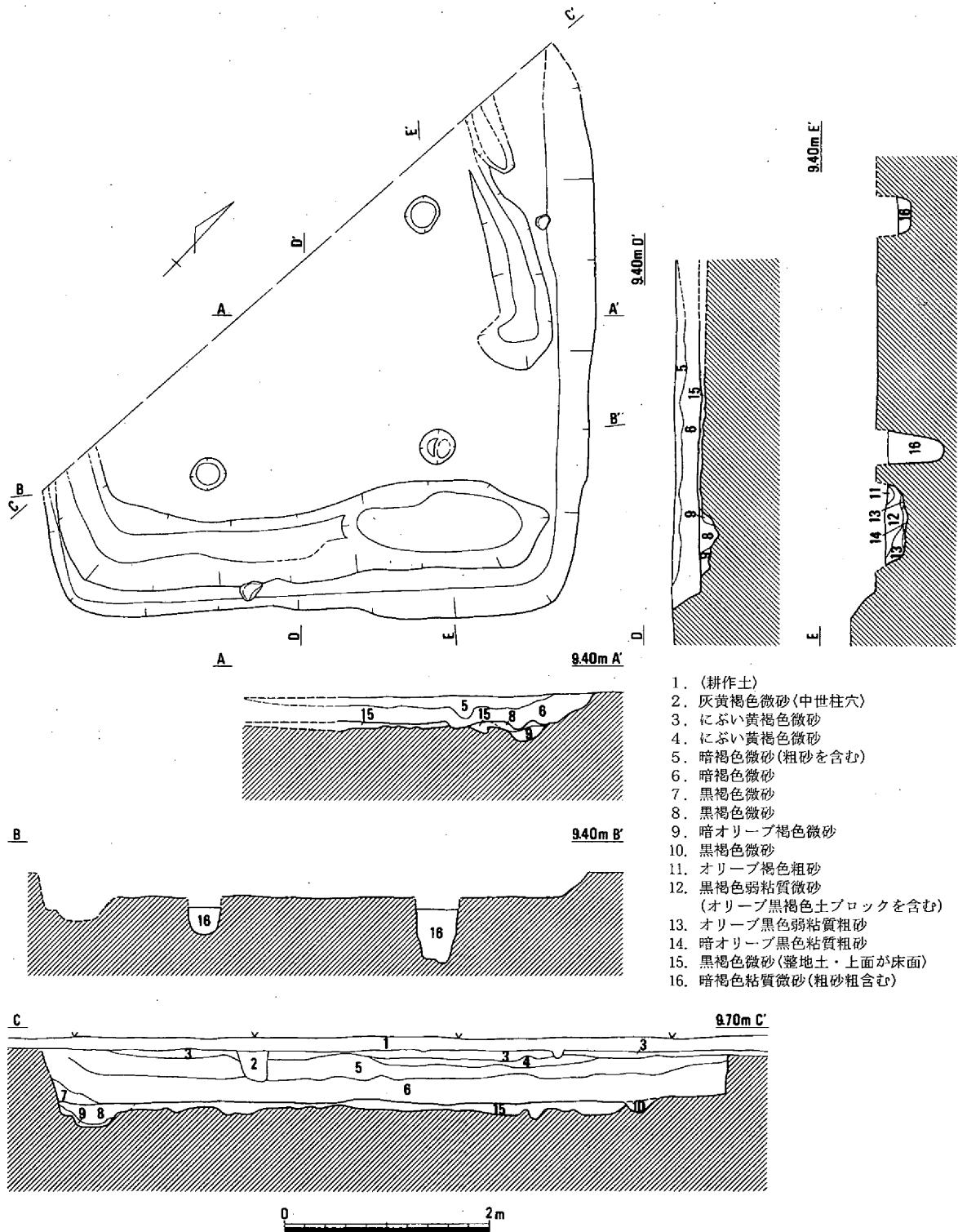
(金田)



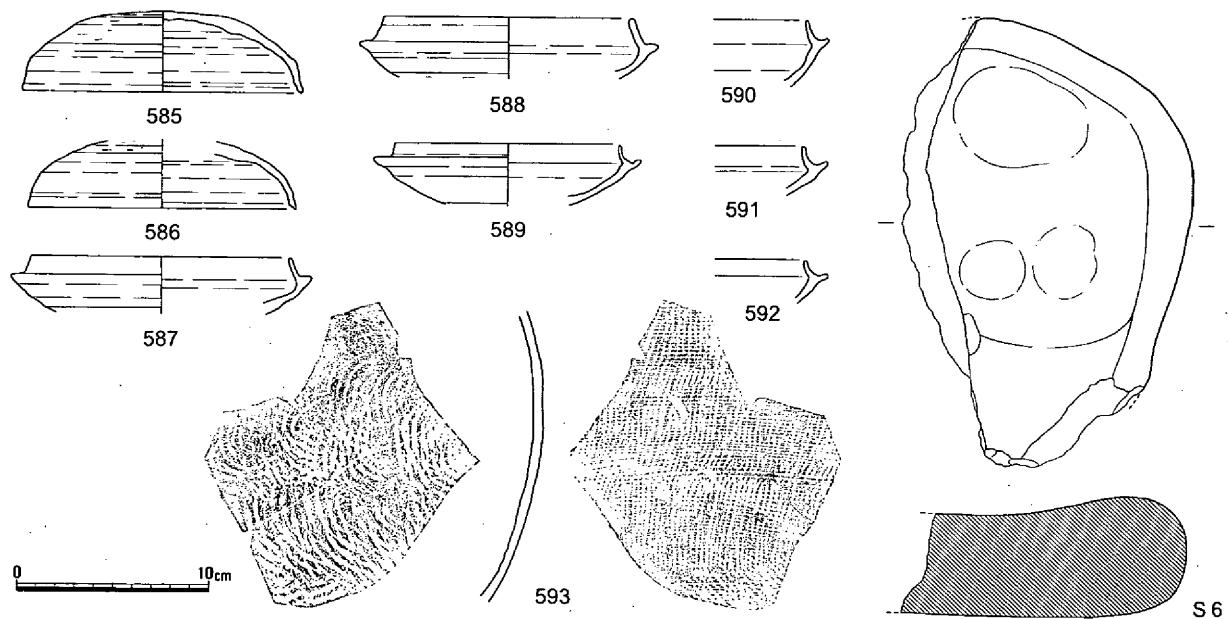
第97図 竪穴住居15出土遺物 (1/4・1/2)

堅穴住居16（第98・99図）

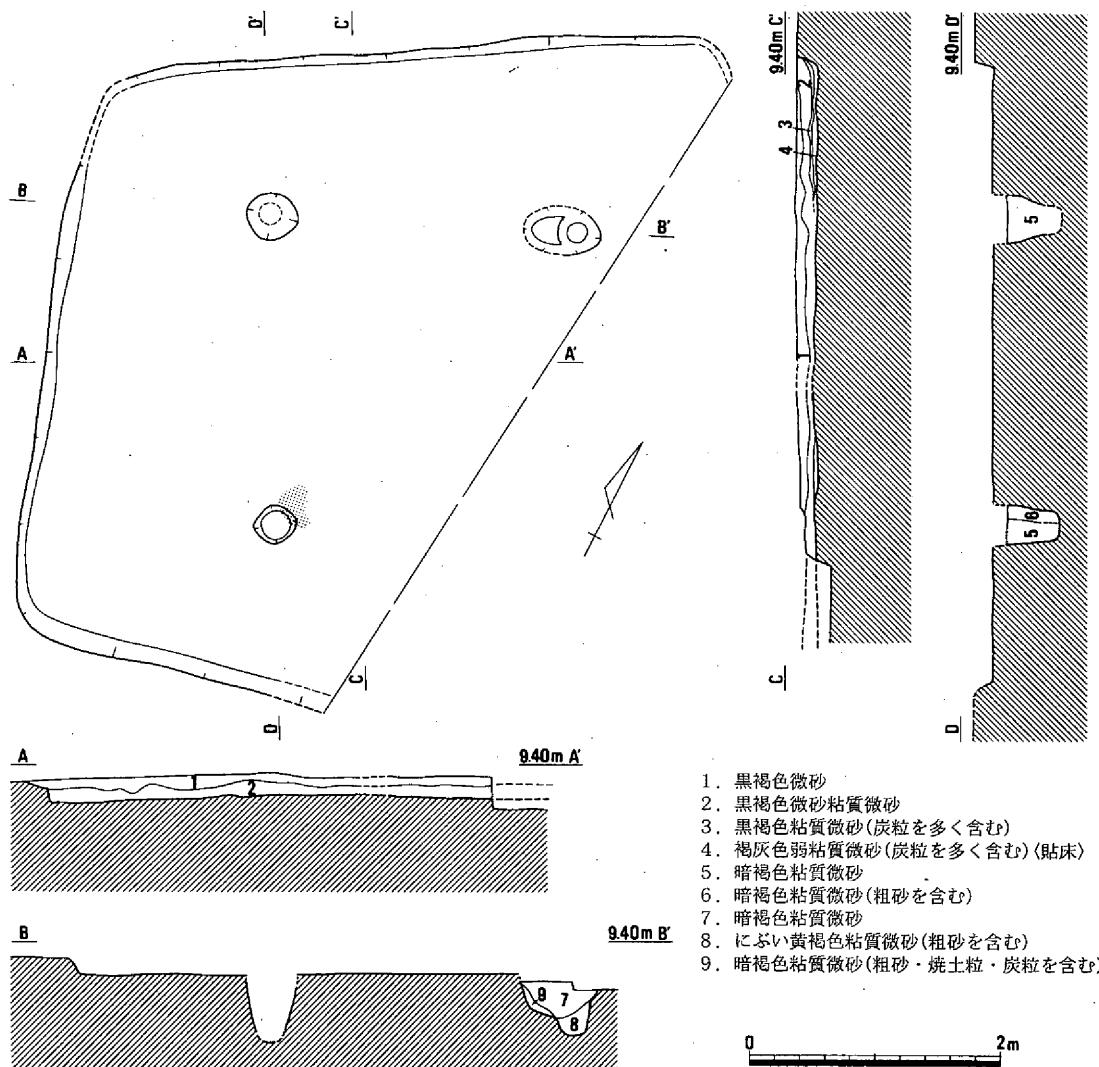
6区中央に位置し、三須畠田遺跡の今回の調査では一番南で検出された住居である。西半分は調査区外になる。平面形は $5.21 \times 4.95\text{m}$ の方形を呈し、検出面からの深さ約 0.5m 、床面の標高 8.86m を測る。底面上に整地土を施し平らな床面を作っている。床面の周囲に幅 $0.5\sim 0.8\text{m}$ 、深さ $0.15\sim 0.3\text{m}$ の浅い溝が巡る。平面形は整ったものではなく、東辺では 1m 程途切れ、幅も細くなる。整地土か



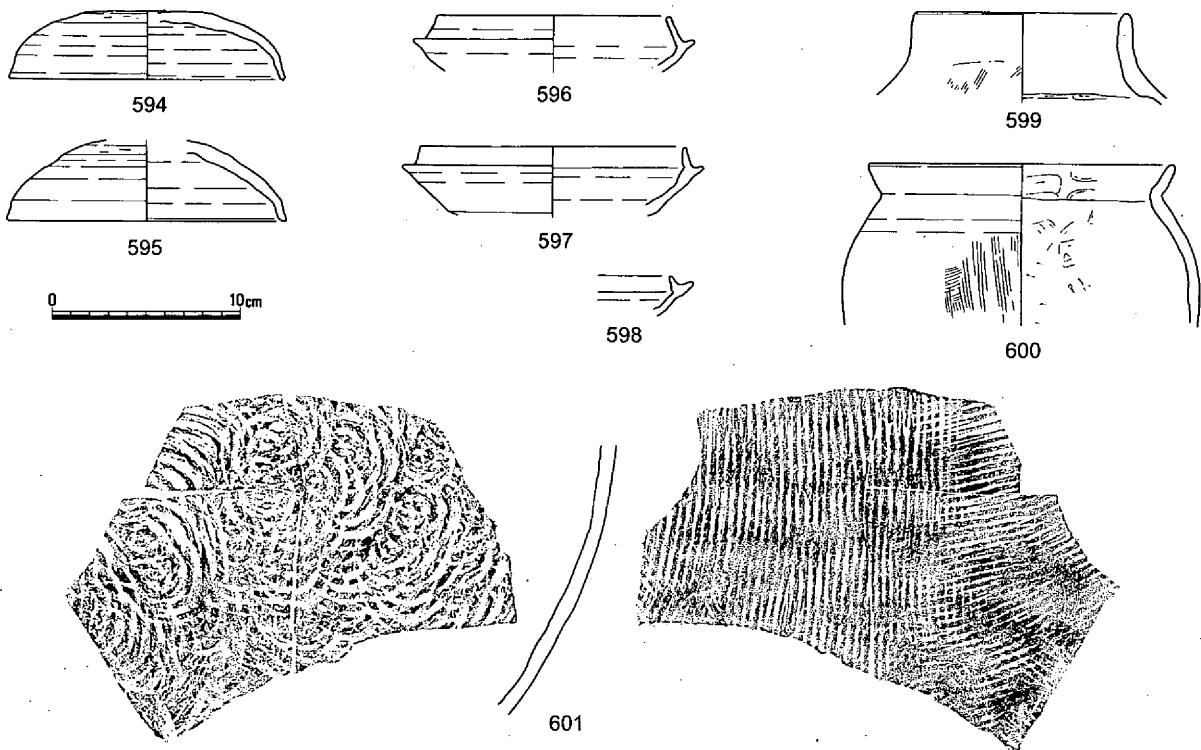
第98図 堅穴住居16（1/60）



第99図 墅穴住居16出土遺物（1/4）



第100図 墅穴住居17（1/60）



第101図 壇穴住居17出土遺物（1/4）

ら掘り込まれているように観察されたが、確信は持てなかった。いずれにしろ、すぐに埋め戻されたものと考えられる。柱穴は3基確認され4本柱と推定される。床面土を水洗した結果、5mm大の鉄滓21点が検出された。鑑定の結果、楕円形鍛治滓・鍛治滓・ガラス質滓・炉の粘土くずなどであった。楕円形鍛治滓の分析を行った。また、調査範囲内には焼土面、竈は検出されなかった。出土遺物には須恵器と花崗斑岩製石皿がある。585・592は床面、586・590は整地土から出土した。古・後・II。（物部）

壇穴住居17（第100・101図）

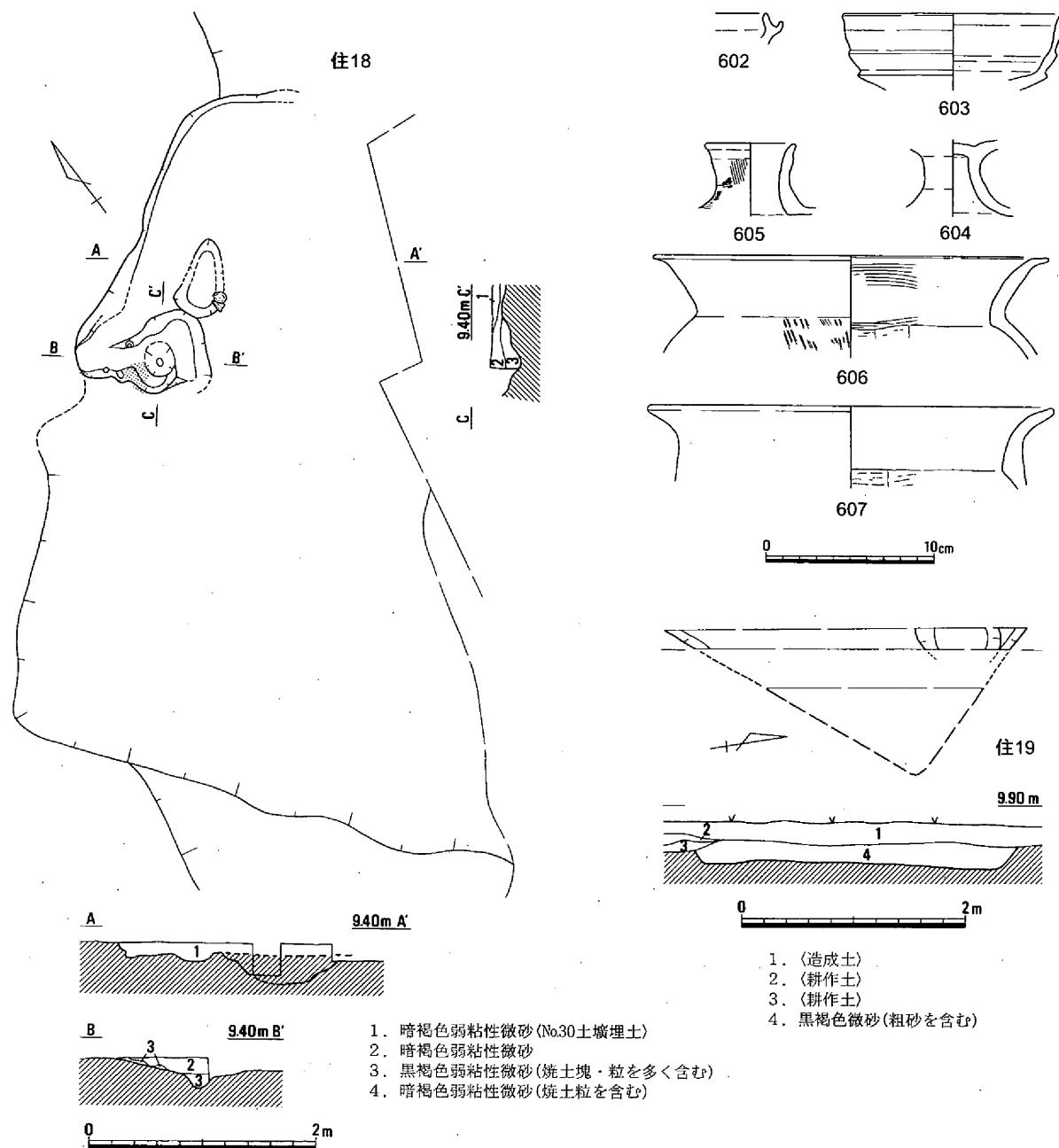
6区の北端、壇穴住居16の北東約4mに位置する。住居の東部約1/4は調査区外になる。平面形は5.20×5.0mの方形を呈し、検出面からの深さ0.15m、床面標高9.14mを測る。一部に褐色の貼り床が見られる。柱穴は3基検出され、4本柱と推定される。南東側の柱穴に接して0.3×0.3mの範囲に焼土面が確認された。紫色に変色しており、弱い被熱である。床面土水洗の結果、鍛治滓・ガラス質滓・炉の粘土くずなど41点が検出された。出土遺物は須恵器蓋杯594～598、甕601、土師器壺599、甕600などがある。いずれも埋土中から出土したものである。時期は古・後・II。（物部）

壇穴住居18（第102図 図版14）

7区の北半に位置し、壇穴住居11の北に隣接する。土壙8・9の上部を切る。住居の南東半分は現代の擾乱により削平されている。6.00×4.2m以上の方形を呈し、北西壁中央に竈が付く。検出深約0.1m、床面標高は9.17mを測る。柱穴は検出されなかった。竈の中央には支柱を置いたと思われる浅い窪みがある。竈の北東に接して0.7×0.4m、深さ0.1m程の深い土壙があり、その北側肩口に炉壁および精錬滓が付着した箱形炉の炉底塊が床着で検出された。その他に鉄滓などは全く見られなかった。炉底塊の分析を行った。遺物は須恵器・土師器が少量ある。古・後・II。（物部）

壇穴住居19（第102図）

7区中央、壇穴住居18の南西約4mに位置する。東側のコーナー部のみ検出された。平面形はお

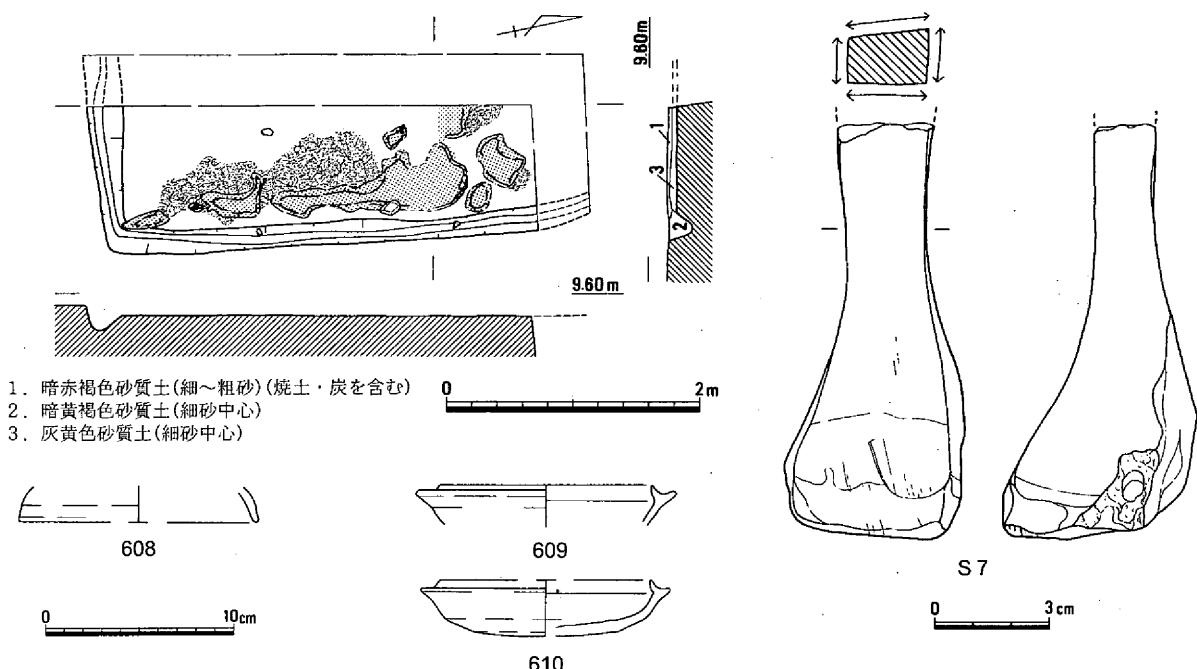


第102図 竪穴住居18・19・出土遺物 (1/60・1/4)

そらく方形を呈すると考えられ、検出面からの深さは0.15m、床面標高は9.36mを測る。北東側壁際に浅い土壤が検出されたが、性格は不明。出土遺物はないが、埋土が竪穴住居18と似ていることから、時期は古墳時代後期に属すると考えられる。
(物部)

竪穴住居20 (第103図)

竪穴住居12の北西隅を切っている遺構である。調査条件により全体の南東部を検出するにとどまつた。平面形は方形をなし、残存部は東西1.58m、南北3.94mを測る。遺構面からの深さは0.12mあり、壁面に沿うように幅0.25m、深さ0.18mの壁体溝が掘られていた。また、床面直上の広い範囲さらに埋土中にも焼土・炭が顕著に認められ、何らかの事情で強い火を受けたものと思われる。なお、精査は試みたものの主柱穴は確認できなかった。遺物は須恵器杯蓋608・杯身609・610、砥石S 7などがある。このうちのS 7は焼土の下部より出土しており、火を受けた時期に存在したのかも知れない。



第103図 竪穴住居20・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)

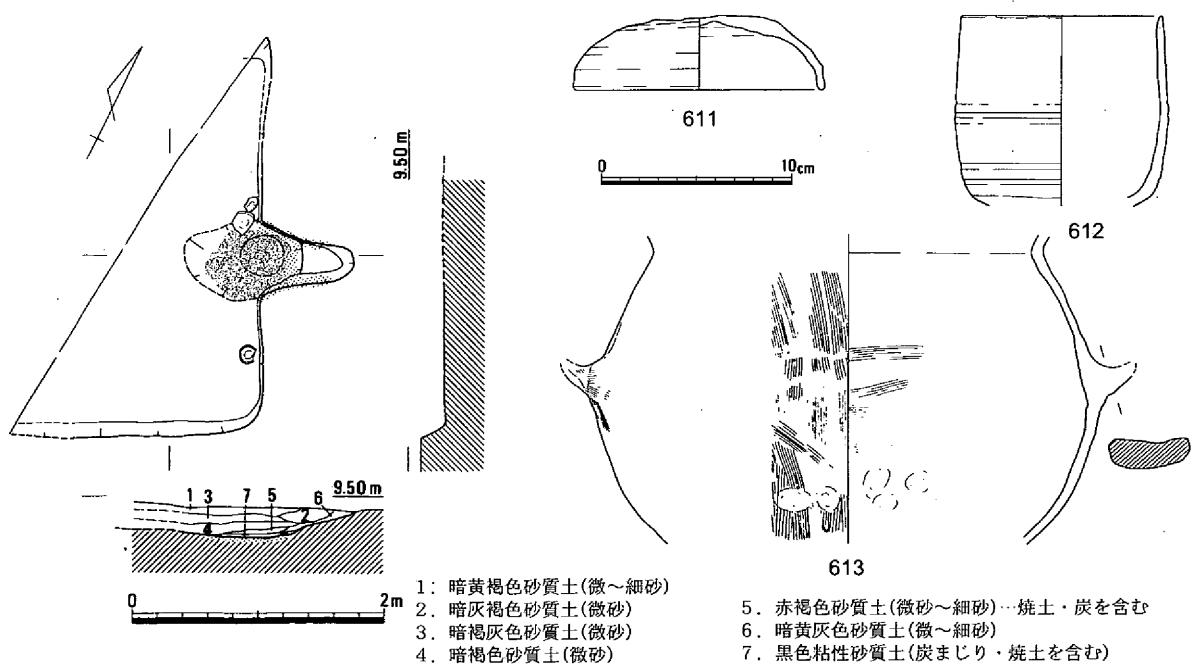
この遺構の時期は出土した土器より古・後・IIであろう。

(姥原)

竪穴住居21 (第104図)

12区の西端部に位置する。竪穴住居15の上面に位置し、それよりも新しい住居である。平面形が方形を呈する住居跡で、長さ3.1m、残存幅1.9mを測る。主軸はN-60°-Eである。なお、壁体溝は検出できなかった。住居の北東側にカマドを有し、埋土中には炭や焼土が混ざっている。また、被熱痕跡が明瞭に残っていたがカマドの袖部は検出できなかった。住居跡内から須恵器・土師器等の遺物が出土した。611は須恵器杯蓋である。612は椀である。613は土師器甕である。以上の出土遺物から、この住居跡の時期は古・後・II (TK209) に比定できよう。

(金田)



第104図 竪穴住居21・出土遺物 (1/60・1/4)

(2) 土壙

土壙31 (第105図 図版21)

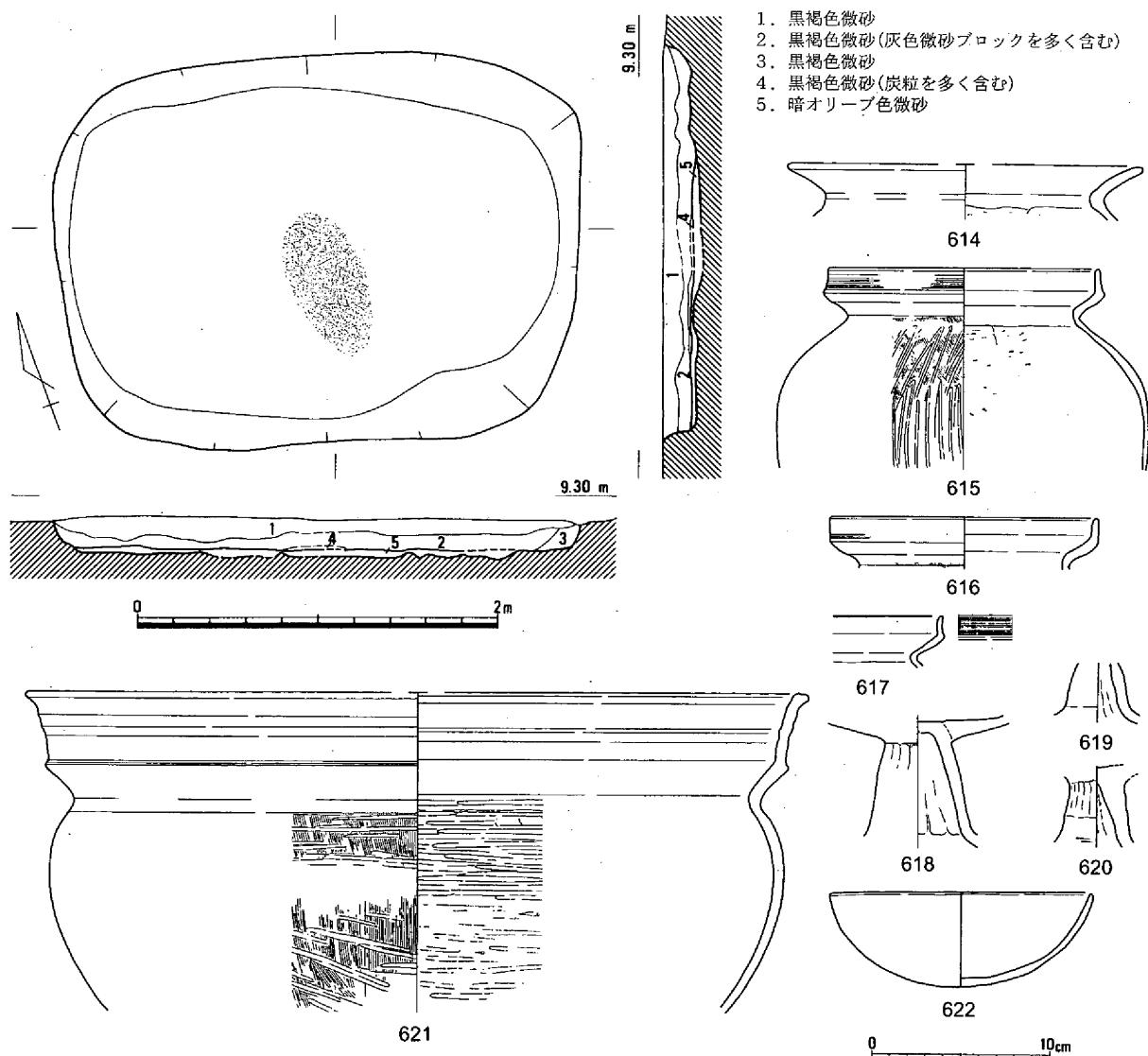
9区南部、竪穴住居5の北約1.5mに位置する。平面形は $2.9 \times 2.17\text{m}$ の隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは0.22mを測る。底面に整地土（第5層）を敷いて平らな床面を作っている。床面の中央やや南よりに $0.8 \times 0.4\text{m}$ の範囲に炭の散布が見られた。埋土中から土器片が少量出土した。621の二重口縁の鉢内外面には赤色顔料の塗布が見られる。時期は古・前・Ⅱと考えられる。（物部）

土壙32 (第106図)

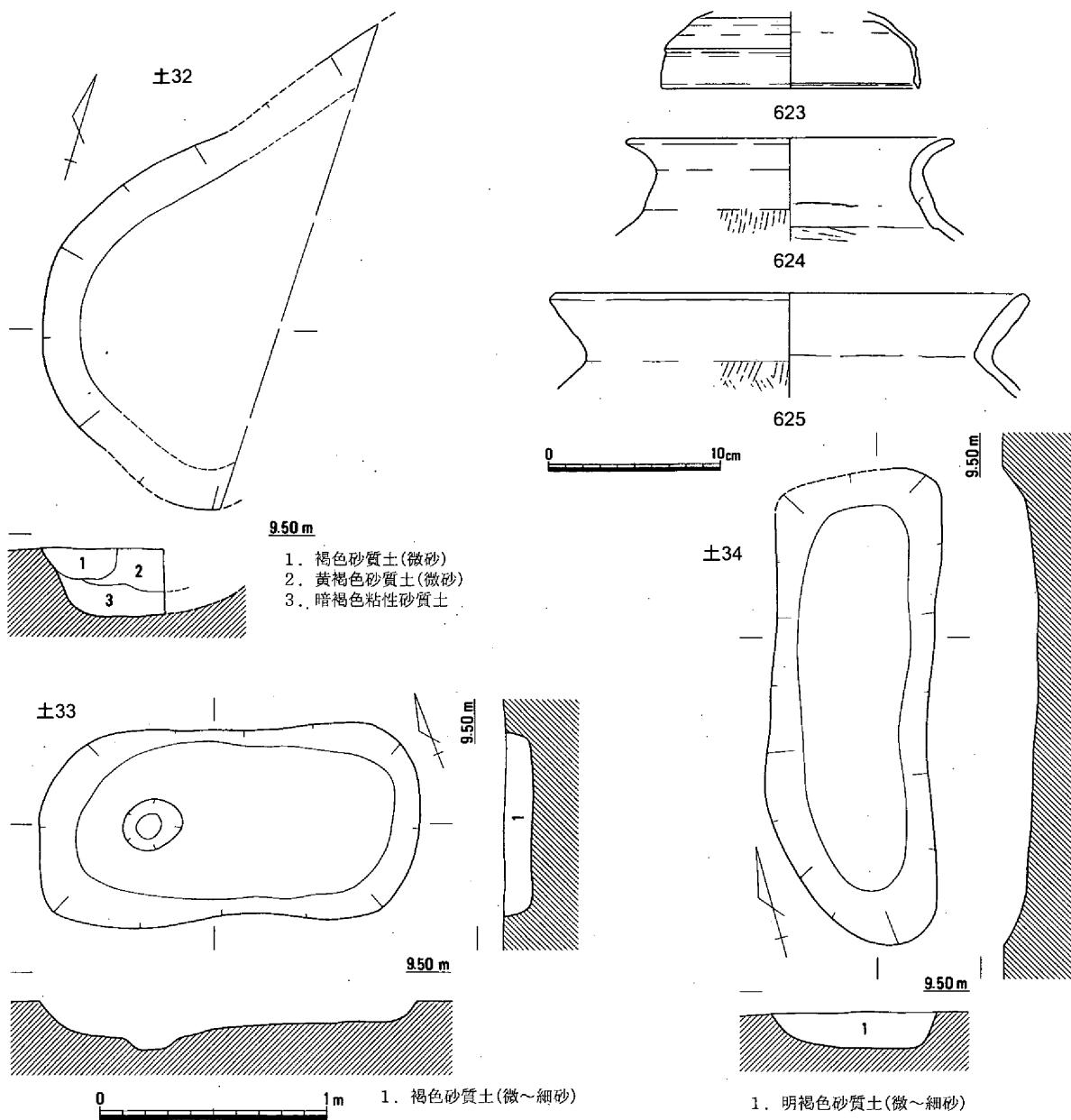
12区の南側に位置する。長さ1.45m、幅1.2m、深さ0.3mを測る。隅丸長方形の土壙である。埋土中から須恵器や土師器が出土している。623は須恵器杯蓋である。624、625は土師器である。竪穴住居14を切っていることから、6世紀中葉以降に位置付けられよう。（金田）

土壙33 (第106図)

12区の北側に位置する。長さ1.67m、幅0.85m、深さ0.12mの隅丸長方形を呈する土壙である。この土壙の時期を特定する土器がないため、時期は不明であるが、埋土の色調等から古墳時代以降の土壙と考えられる。（金田）



第105図 土壙31・出土遺物 (1/40・1/4)



第106図 土壙32~34・土壙32出土遺物 (1/30・1/4)

土壙34 (第106図)

土壙33の北側に位置する。長さ2.08m、幅0.69m、深さ0.16mの隅丸長方形を呈する土壙である。時期を特定できる土器がないため、詳細な時期は不明であるが、埋土等から古墳時代の遺構と考えられる。
(金田)

(3) 溝**溝10 (第107図)**

3区南端、低位部に位置する。主軸は北西一南東。幅0.7m、検出面からの深さ0.33mを測る。埋土下層は粗砂を含む。出土遺物は土器細片1点のみ。この溝は平成3年度に総社市が調査した三須畠田遺跡B区溝-7と同一と考えられ、若干の須恵器含むことから古墳時代と推定されている。(物部)

溝11 (第107図)

6区中央に位置する細い溝である。竪穴住居16と若干切り合うが前後関係は明らかにできなかった。

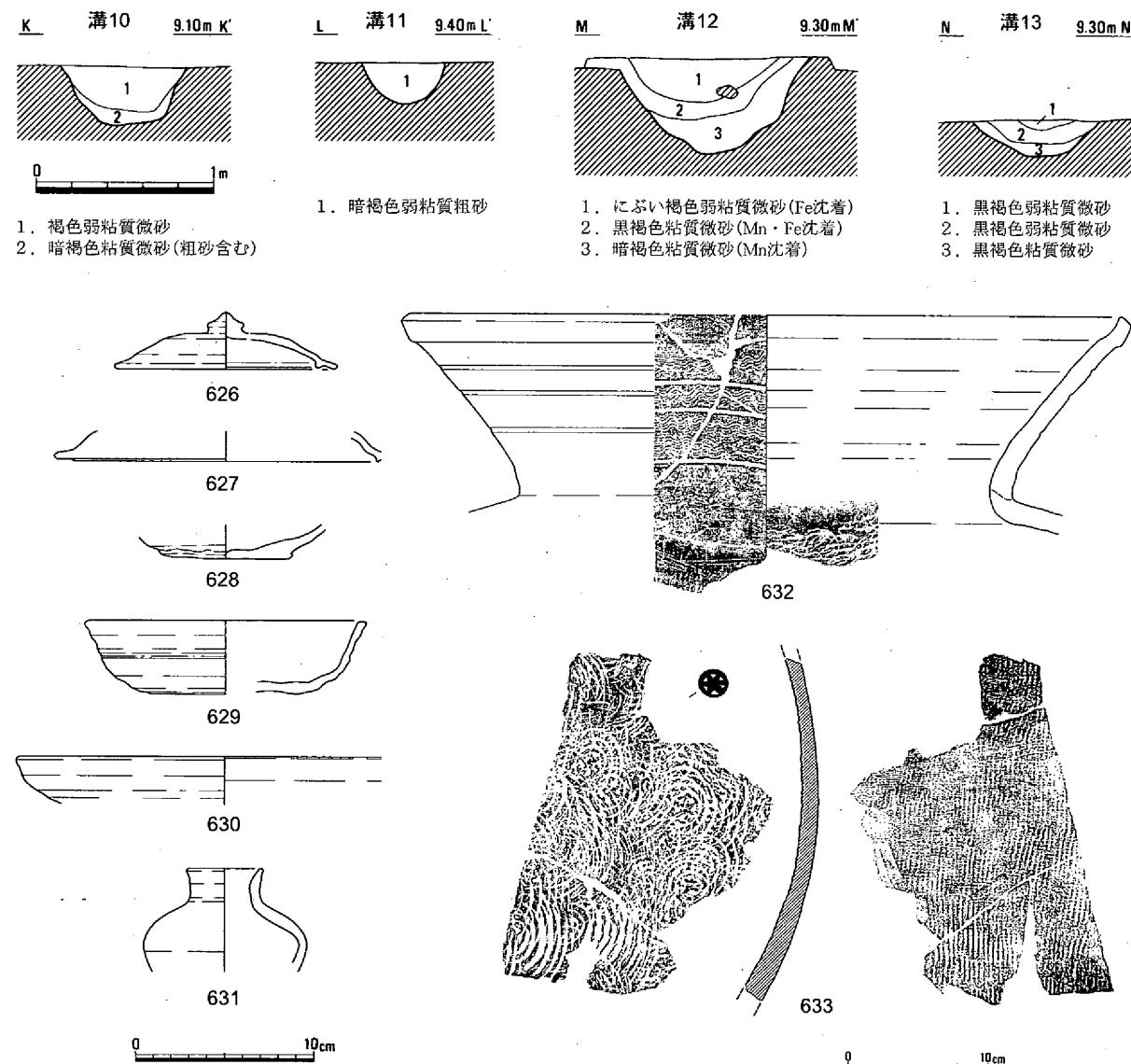
検出長3.8m、幅0.46m、深さ0.23mを測る。主軸は北東—南西。壁体溝かとも考えられたが、性格は不明。時期は竪穴住居16と埋土が似ていることから古墳時代後期の可能性がある。(物部)

溝12・13(第107図)

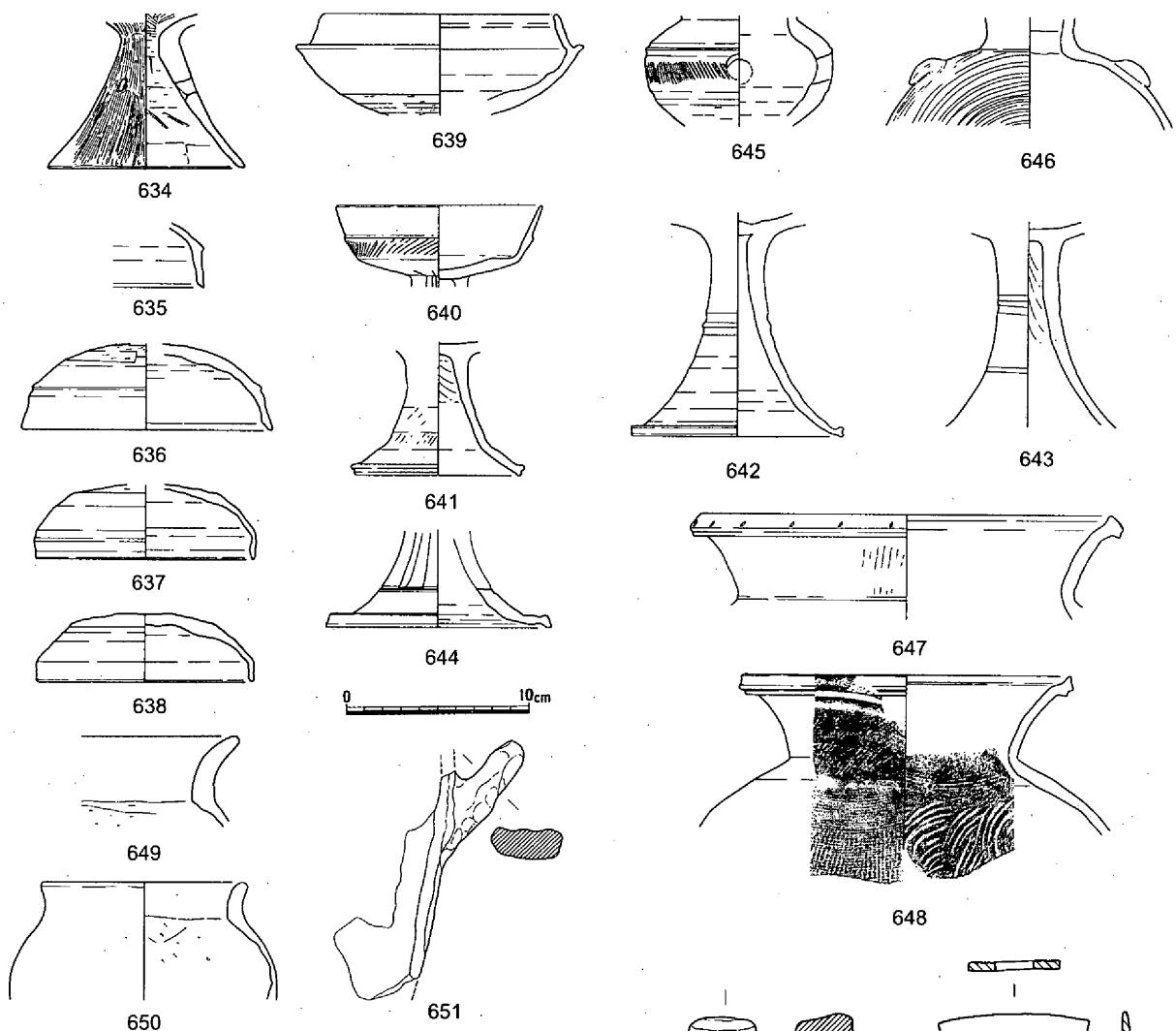
溝12は4区中央、溝13は5区と6区の境に位置する同一の溝である。検出幅1.08m、検出深0.53mを測る。溝13は中世の水田層に上部を削平されており、溝12に比べると検出面が低い。北西から東へ緩やかに湾曲しながら流れる。ちょうど弥・後・Ⅲの時期に中心を持つ溝8と重複する。出土遺物は溝12に多く、弥生時代後期の土器片がかなり混入しているが、須恵器が多数ある。626の蓋は宝珠状の摘みが付く。627の蓋は口径が大きい。628は杯、629は高杯と思われる。630は皿、631は小形の直口壺、633は大甕で、口縁部外面に櫛描波状文、体部内面には車輪文が見られる。時期は古・後・Ⅲ、7世紀前半と考えられる。(物部)

(4) 遺構に伴わない遺物(第108図)

遺構に伴わない遺物は中近世の耕作土、現代の攪乱、側溝の掘り下げなどから出土したものと、異なる時期の遺構に混入したものである。634は受け部が筒状の小形器台である。635・636の杯蓋は天

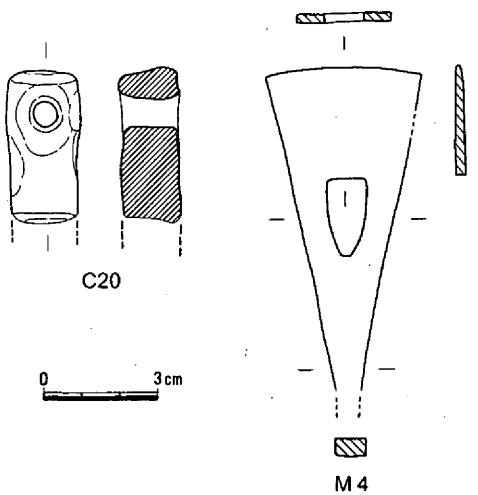


第107図 溝10~13・溝12出土遺物 (1/40・1/5・1/4)



第108図 遺構に伴わない遺物 (1/4 · 1/2)

井部と体部の境の稜は甘い。637・638杯蓋の口径は11.8・11.7cm、639の杯身の口径は12.6cmを測る。640～641は高杯で脚柱部が長いもの、短いもの、透かしが入るものなどがある。645は匙、646は提瓶、647・648は甕である。土師器には649・650の甕、横に平たい把手の付く甕651がある。C20は棒状土錘、M2は透かしのある方頭式鉄鎌である。635の小形器台とC12の棒状土錘は前期、その他はすべて後期に属すと推定される。三須畠田遺跡の遺構は前期・5世紀後半・6世紀前半・6世紀後葉～7世紀初頭・7世紀前半の各時期があり、これらの遺物の時期とほぼ合致する。(物部)



第4節 古代の遺構・遺物

(1) 土壙

土壙35 (第109図)

3区と4区の境に位置し、溝9を切る。平面形は $3.59 \times 1.05 \sim 0.85\text{m}$ の長い長方形を呈する。底面はほぼ平らであるが、北西端部は複雑に凸凹する。床面直上には一部に、貼床状の土が見られた。遺物は埋土中から須恵器の細片28点が出土した。652は須恵器杯蓋である。奈良時代前半。(物部)

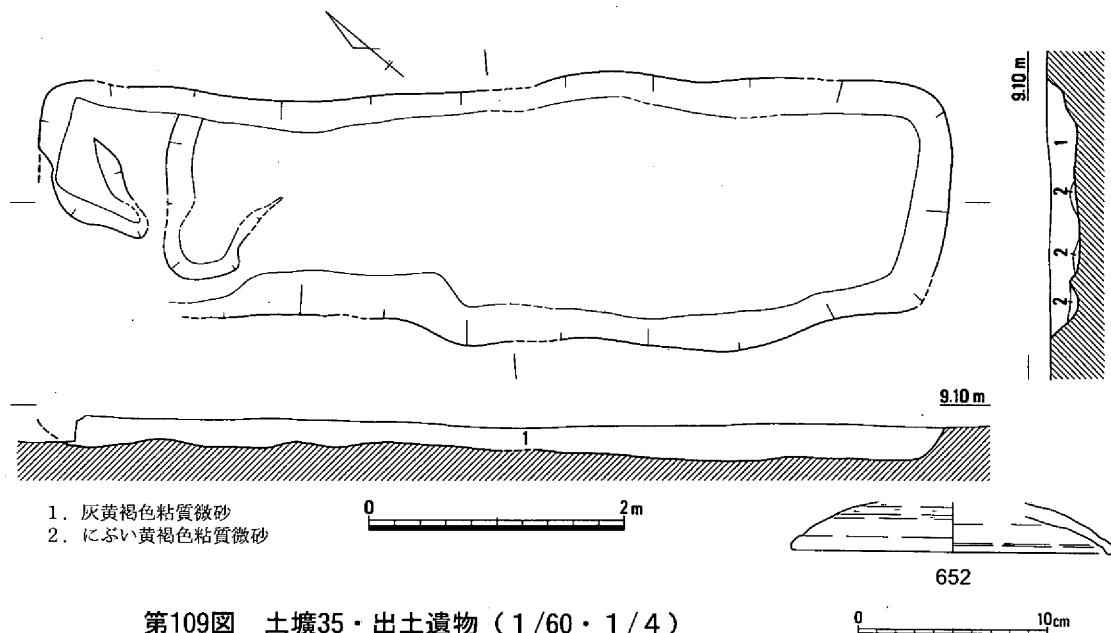
(2) 溝

溝14・15 (第110図)

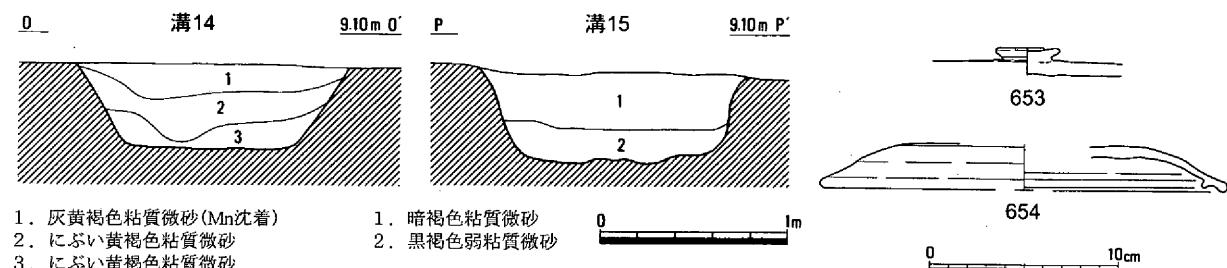
3区北半に位置する溝14と6区南半に位置する溝15は同一の溝である。検出幅は1.4m、検出深は0.45mを測る。流走方向は南西から北東である。溝断面形は幅広のU字形を呈し、粘質微砂が堆積する。埋土中には混入した弥生土器を多く含むが、須恵器が少量出土する。653杯蓋の摘みは上面中央が窪む。奈良時代前半期と考えられる。また、土壙35と主軸が直交することから、一連の遺構である可能性がある。(物部)

(3) 遺構に伴わない遺物 (第111・112図 図版21)

中近世の包含層や側溝の掘り下げ、時期の異なる遺構から出土した遺物である。655～669、672～676が須恵器である。669甕体部片には車輪文が見られる。672～674は鍋で体部に沈線が2条巡



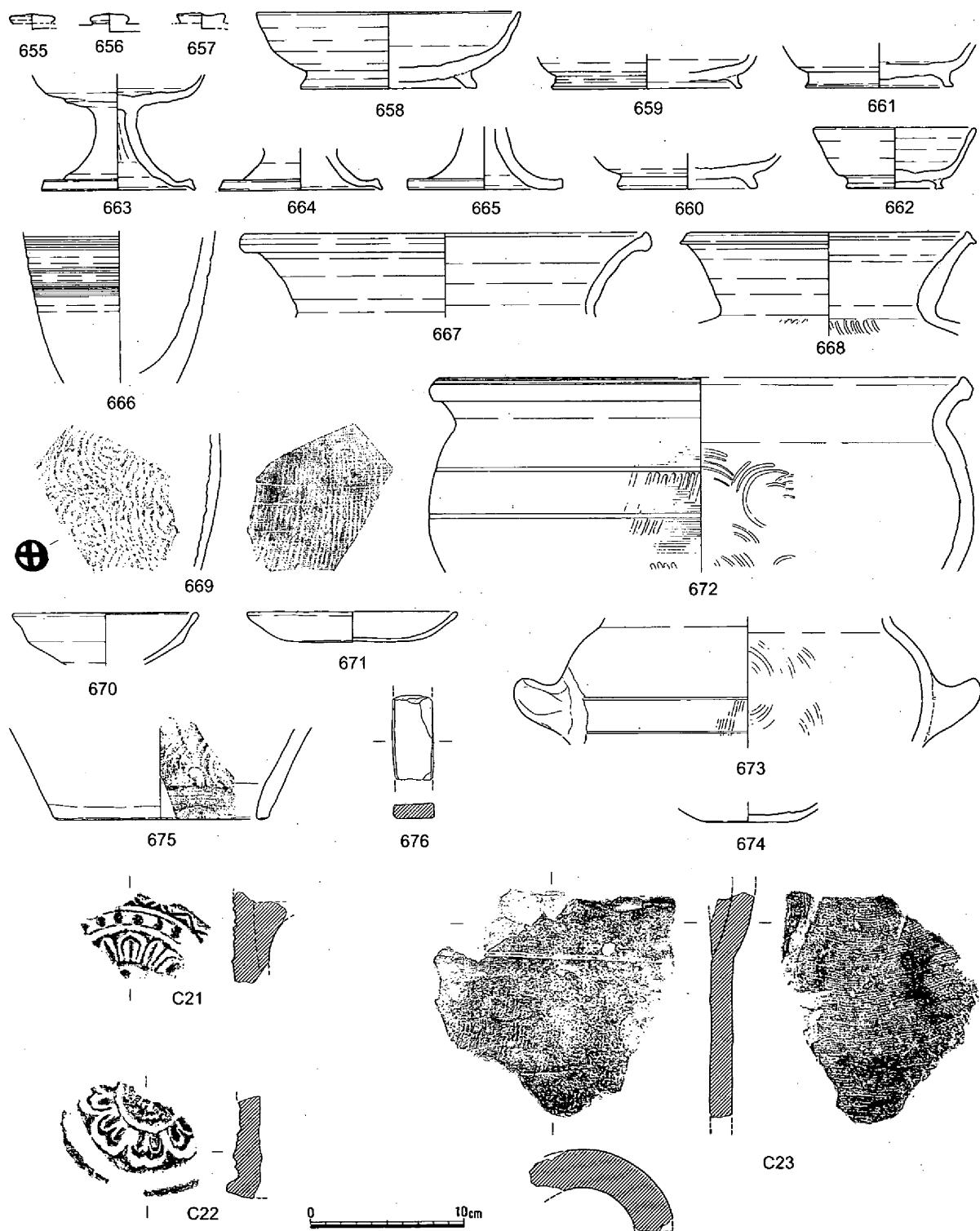
第109図 土壙35・出土遺物 (1/60・1/4)



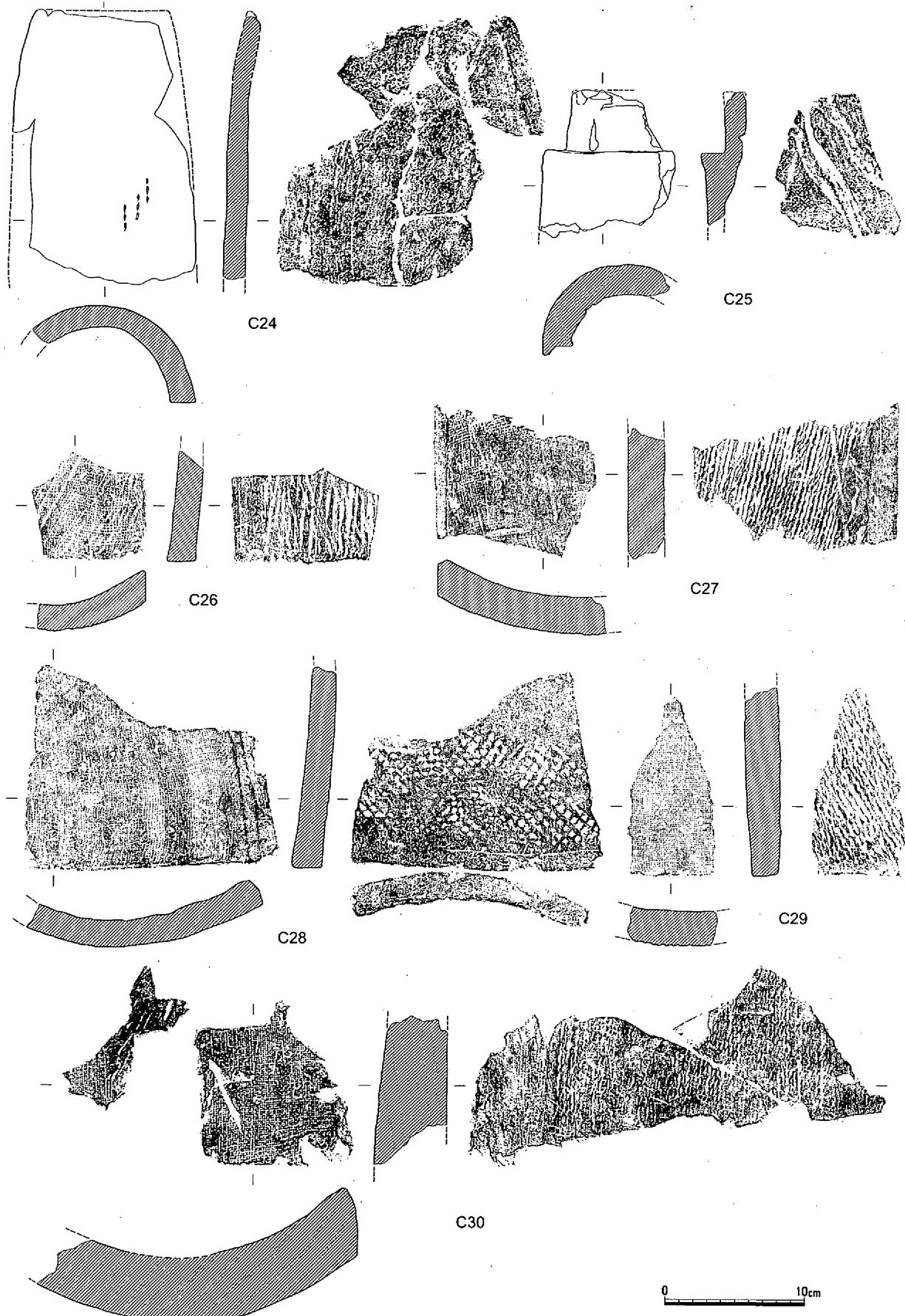
第110図 溝14・15・出土遺物 (1/40・1/4)

る。焼成はやや不良。675は下端部に円孔の開く甌と思われる。676は甌の棧。670・671は土師器である。670は椀でにぶい黄橙色を呈する。671は底部外面に押圧のみられる皿。C21～C30は瓦である。遺跡全体では60点ほどの破片が出土した。大半は3～6区で検出され、7区より北ではほとんどみられなかった。C21は単弁7弁蓮華文軒丸瓦で、三須廃寺推定地出土瓦当の1類である。3区から出土し、3区から三須廃寺推定地中心までの距離は150m程である。C22は複弁蓮華文軒丸瓦で、直径12.6cm、かなり摩耗している。相対的に奈良期の遺物が多く、平安期は少ない。

(物部)



第111図 遺構に伴わない遺物1 (1/4)



第112図 遺構に伴わない遺物2 (1/4)

第5節 中世の遺構・遺物

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第113図)

5区南半に位置する。後述する畦畔に伴うと考えられる溝に着られている。3×1間、棟方向はN-2°-Eでほぼ南北方向である。桁行3間の中間は2.45m前後で広く、両側は1.67~1.85mと狭い。柱穴は直径30cm前後の円形で、検出面からの深さは24~39cmである。直径0.15m弱の柱痕が確認されるものもある。それぞれの柱穴に土器細片が僅かに混入する。677は島式土器の椀、678は土師器の杯で底部はヘラ切りである。13世紀前後と考えられる。

(物部)

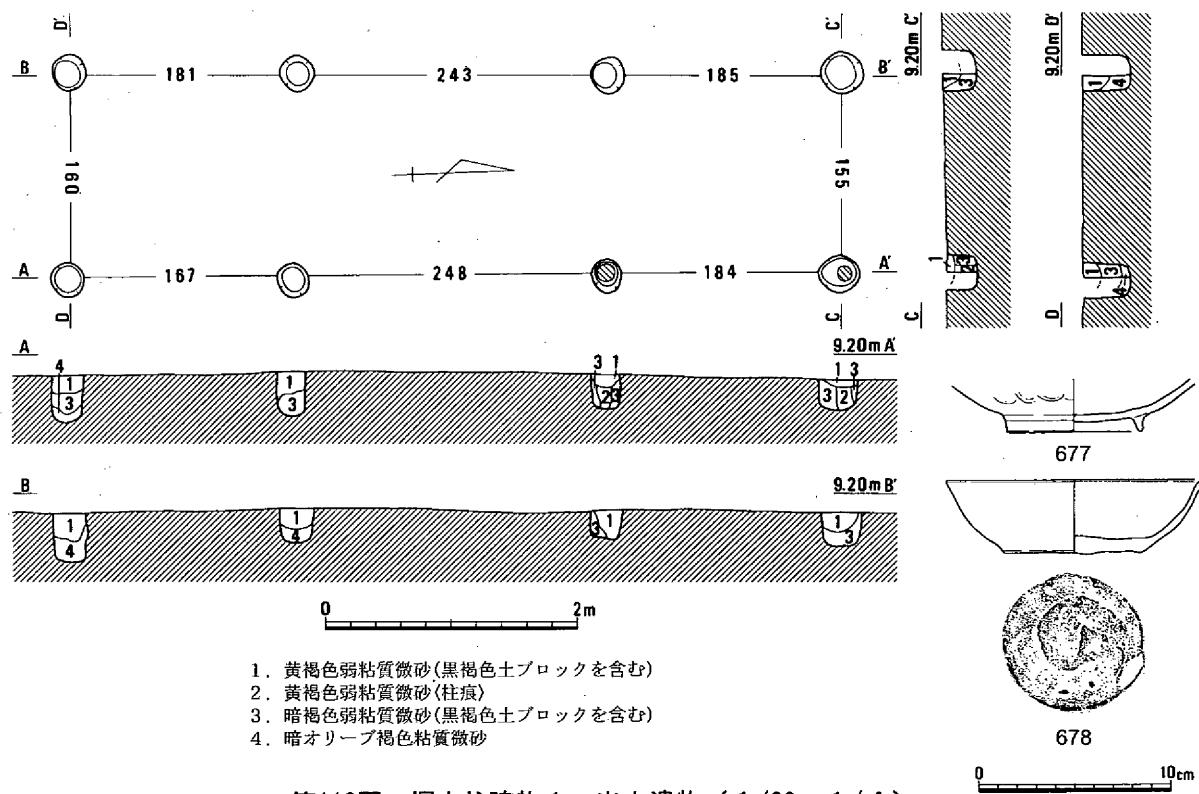
掘立柱建物2 (第114図)

3区南よりに位置する。2×1間の掘立柱建物であり、梁間の中間の柱穴は他と比べ非常に浅いことから床を支える束柱と考えられる。桁行4.32~4.35m、梁間3.35~3.37mを測り、棟方向はN-81°-Eでほぼ東西方向である。柱穴は直径0.3m前後、検出面からの深さ0.45~0.55m、束柱と推定される柱穴は直径0.16~0.25m、深さ0.05~0.15mを測る。遺物は土器細片が僅かにあり、その中の島式土器椀の細片2点や、周辺の柱穴の時期などから鎌倉時代と推定される。

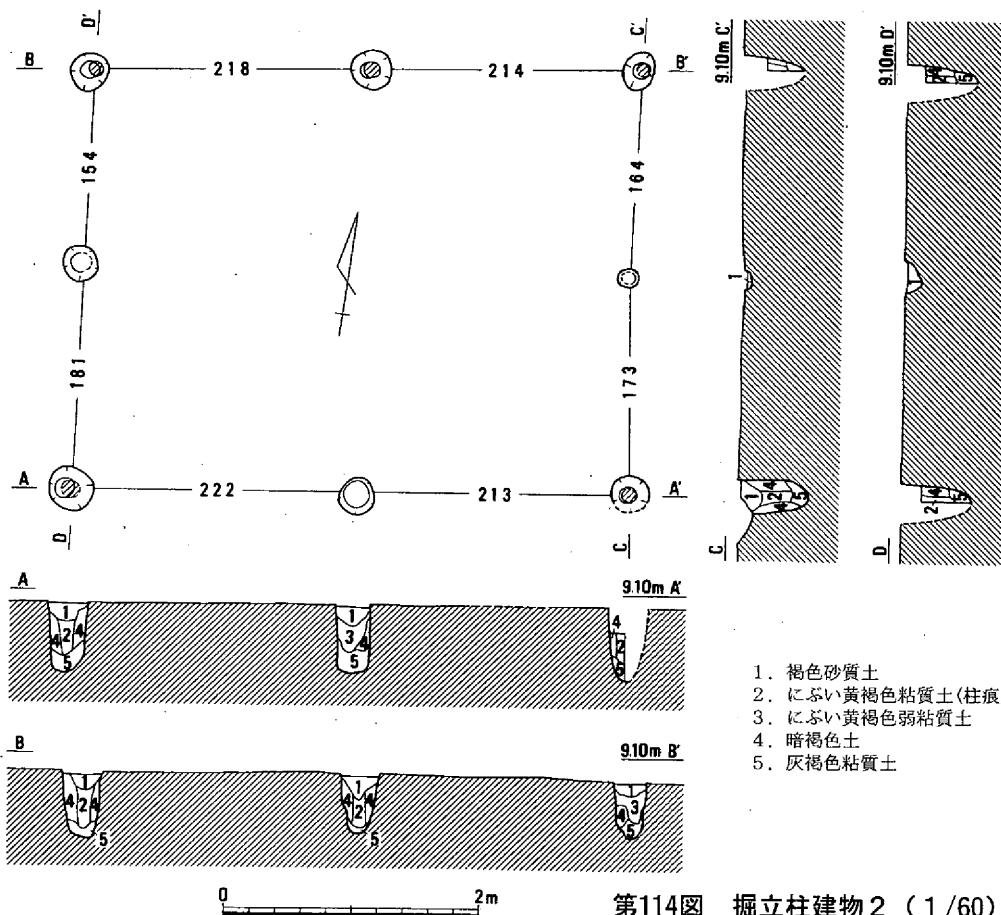
(物部)

掘立柱建物3 (第115図)

3区の中央、掘立柱建物2の北約6mに位置する。1×1間の簡易な建物と考えられる。柱間距離は2.12~2.20mで、平面形は若干東西方向が長いがほぼ正方形を呈す。柱穴の直径は0.2~0.4m、検出面からの深さは0.2~0.3mを測る。この柱穴4基に囲まれた内側に直径2.2m前後、検出深7cm程の浅い窪みがある。埋土は柱穴と同様の白っぽい微砂であることから、一連の遺構である可能性がある。性格は不明。遺物は各柱穴、窪み埋土に土器細片が少量混入していた。679・680の島式土器



第113図 掘立柱建物1・出土遺物 (1/60・1/4)



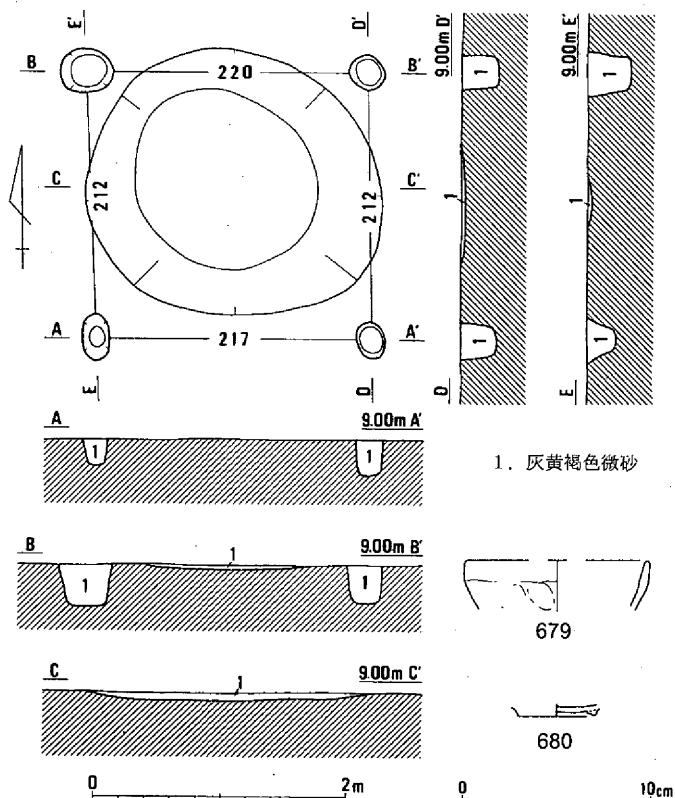
第114図 掘立柱建物2 (1/60)

椀の特徴から時期は13世紀末と考えられる。
(物部)

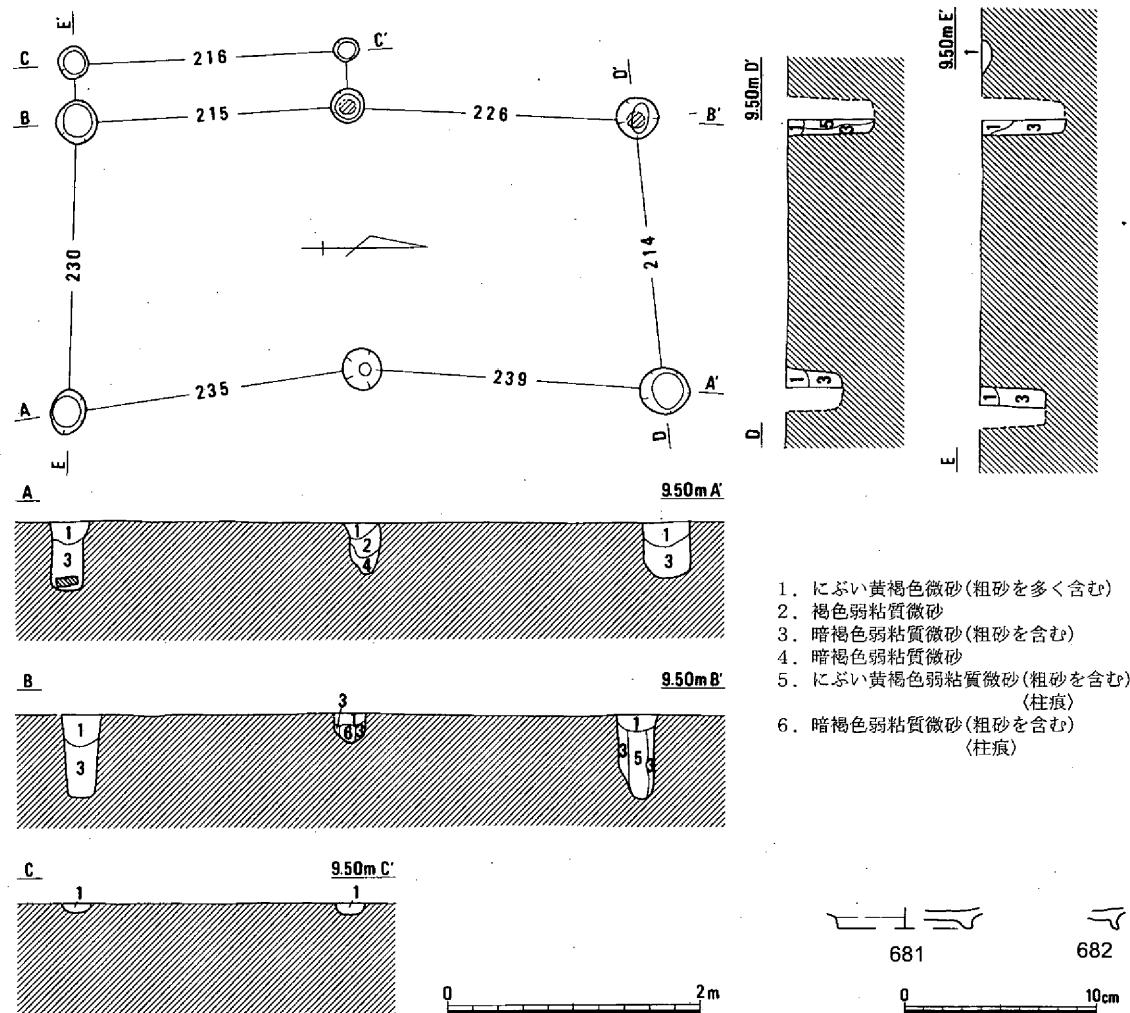
掘立柱建物4 (第116図)

6区北半に位置する。2×1間の掘立柱建物で桁行4.74・4.41m、梁間2.39・2.15mを測る。棟方向はN-1°-Wである。柱穴の直径は0.26~0.4m、四隅の柱穴の深さは0.5~0.67mと深く、梁間中間の柱穴は0.23~0.4mと浅い。この梁間中間の柱穴は四隅の柱穴を結ぶ直線上に乗らず、東柱かもしれない。南西隅の中穴には礎石が設置されている。

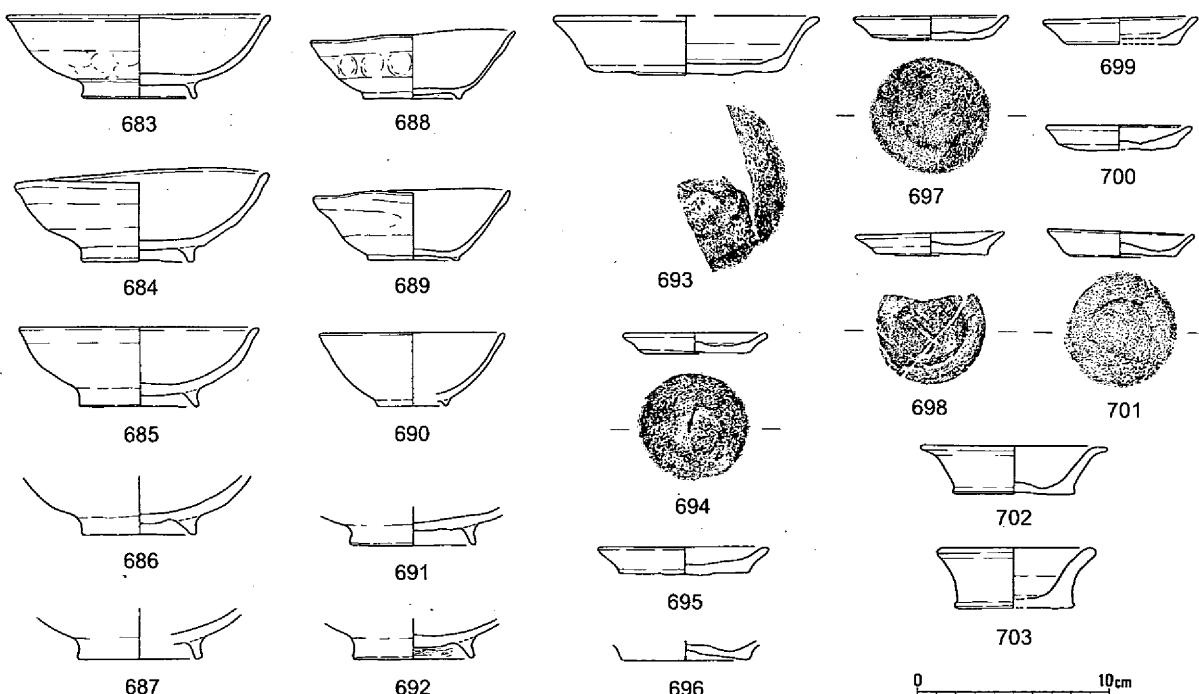
また、この掘立柱建物には南西部に直径0.2m前後、深さ0.1mの小さな柱穴が2基伴う。縁側のような施設ではなかろうか。遺物は各柱穴に土器細片が少量混入する。681・682は早島式土器椀である。時期は鎌倉時代。
(物部)



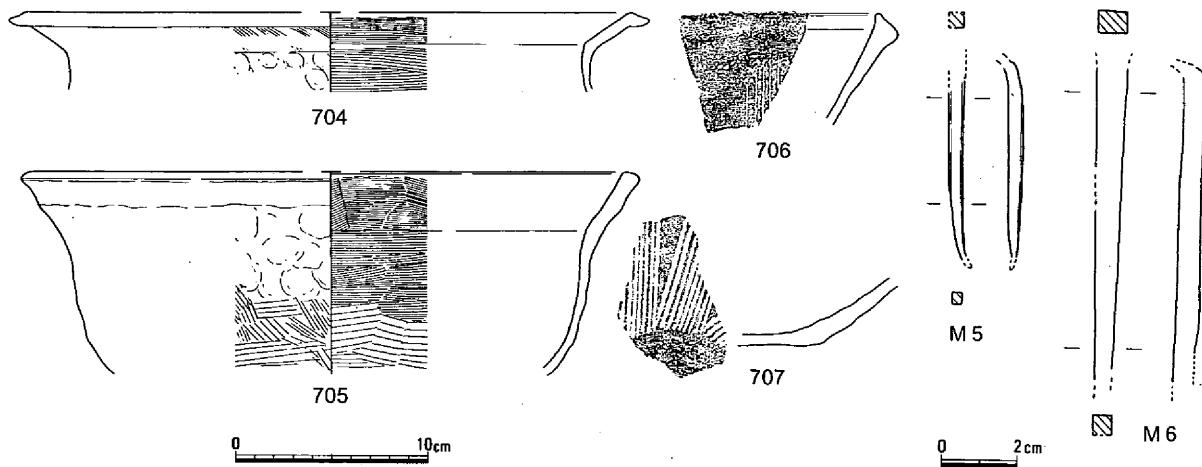
第115図 掘立柱建物3・出土遺物 (1/60・1/4)



第116図 掘立柱建物4・出土遺物 (1/60・1/4)



第117図 柱穴出土遺物1 (1/4)



第118図 柱穴出土遺物2(1/4・1/2)

(2) 井戸 (第119図)

4区南半東側調査区境に位置し、堀り方の東半分は調査区外になる。また、土壌38に南側上部を切られる。平面形は直径約2.4mの円形を呈し、検出面からの深さは1.65m、底面の標高は7.26mを測る。断面形は擂鉢状を呈し、埋土下半は粘土が堆積する。出土遺物は土器小片30点ばかりと曲げ物の破片が1点あった。708～710は早島式土器碗で、708は口径約14cm、内外ナデ調整であり、13世紀前後と考えられる。

(物部)

(3) 土壌

土壌36 (第120・122図)

3区南半、竪穴住居2の北東約1mに位置する。平面形は1.80×0.97mの長方形を呈する。検出面からの深さは0.1mを測る。遺物は埋土中から土器小片30点ほどが出土したのみである。713は早島式土器碗で内外面はナデ、口径は11.8cm前後である。他に竈片、鍋片がある。鎌倉時代。

(物部)

土壌37 (第120・122図)

4区北半に位置する。現代の攪乱に若干切られている。平面形は1.67×1.57mの円形を呈し、検出面からの深さは0.56m、底面の標高は8.43mを測る。715～717土師器鍋、718は亀山焼系擂り鉢、C31備前焼転用の円盤。時期は15世紀後半と考えられる。

(物部)

土壌38 (第120図)

4区南半東側調査区界に位置し、井戸を切っている。土壌東半部は調査区外になる。平面形は1.72以上×1.38mの隅丸長方形を呈すると考えられ、検出面からの深さは0.06mを測る。埋土には退化した高台を持つ早島式土器碗の細片があり、14世紀前後頃と推定される。

(物部)

土壌39 (第121・122図)

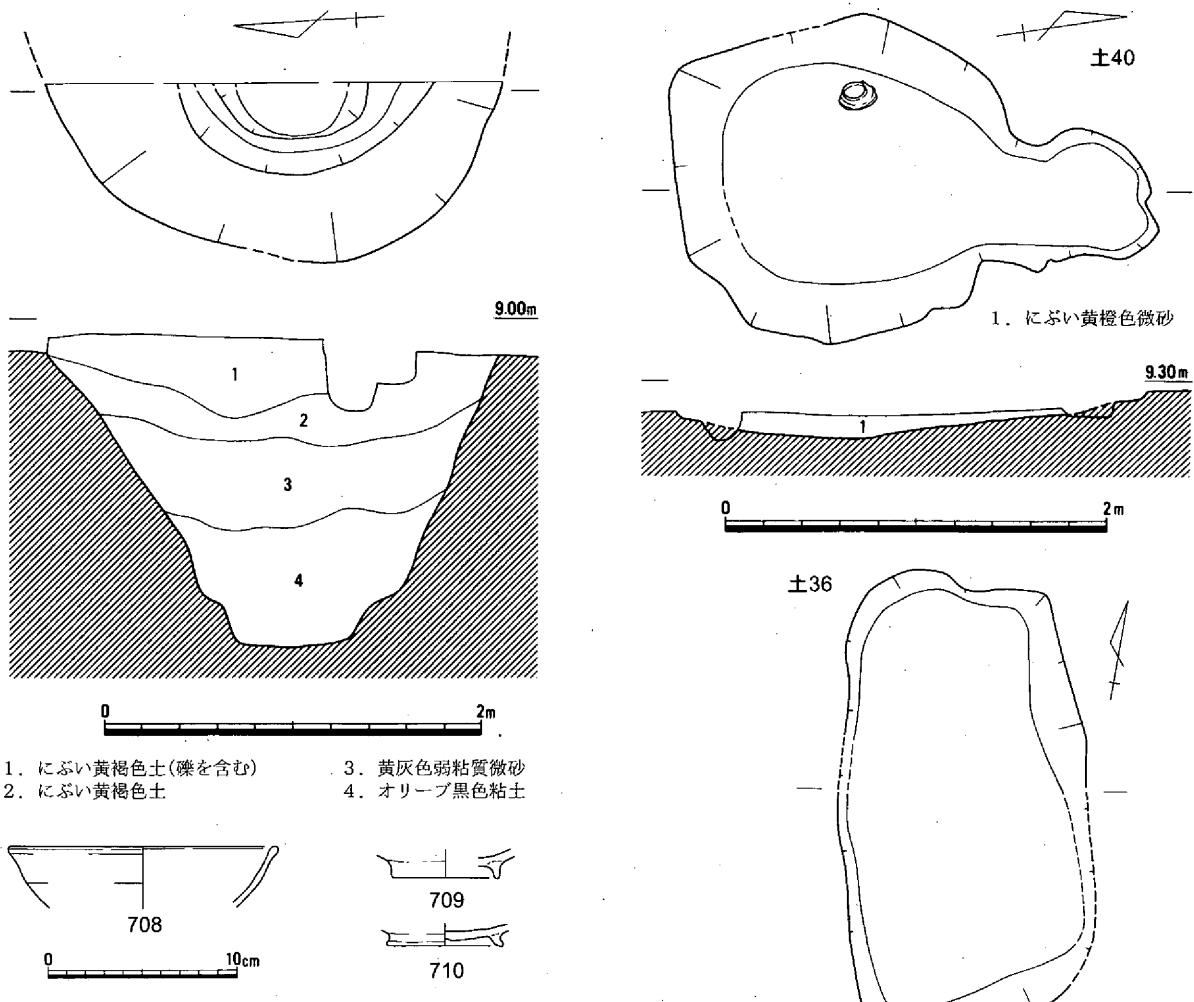
4区南半に位置する。土壌40の西に接し、土壌墓3に南東部を切られる。平面形は1.04×0.55mの隅丸長方形を呈し、検出深は0.03mと浅い。土壌の南東隅に早島式土器碗712が伏せた状態でつぶれていた。内外面はナデ、口径13.9cm、器高5.6cmを測る。12世紀末頃か。

(物部)

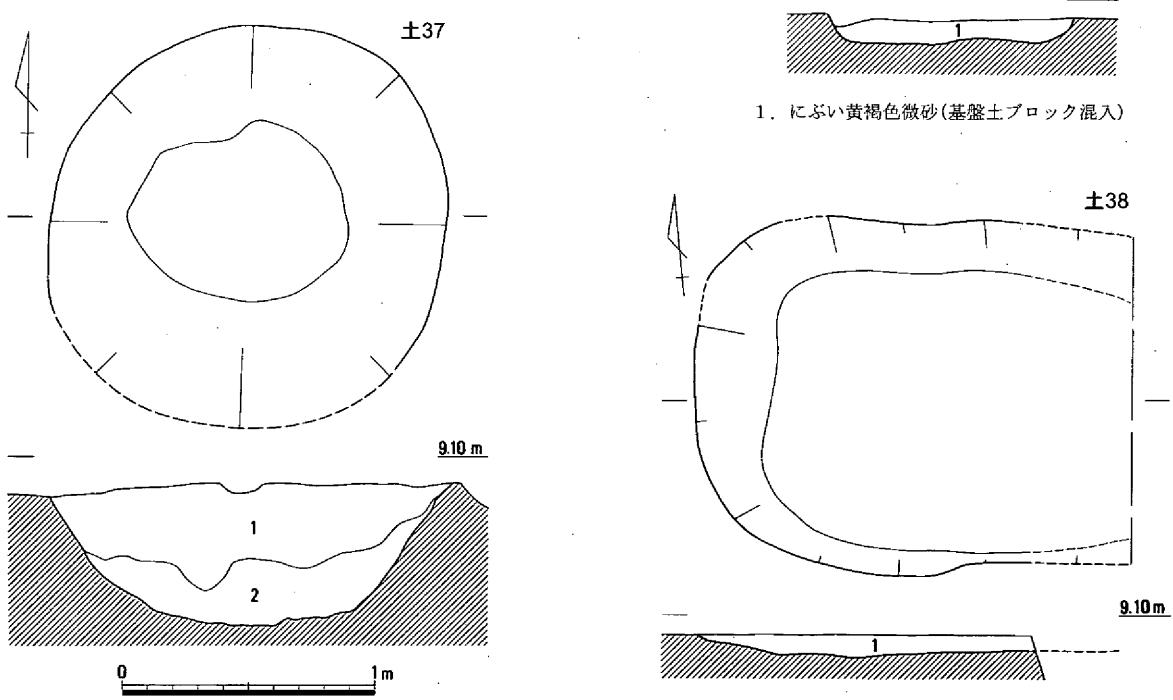
土壌40 (第120・122図)

4区南半に位置する。土壌39に接し、土壌墓3を切っている。平面形は2.47m×0.67～1.7mの不正形であり、検出面からの深さは0.19mと浅い。埋土中から完形の早島式土器碗711が出土したが、後述する土壌墓3が14世紀前後と考えられるので、混入したものだろう。

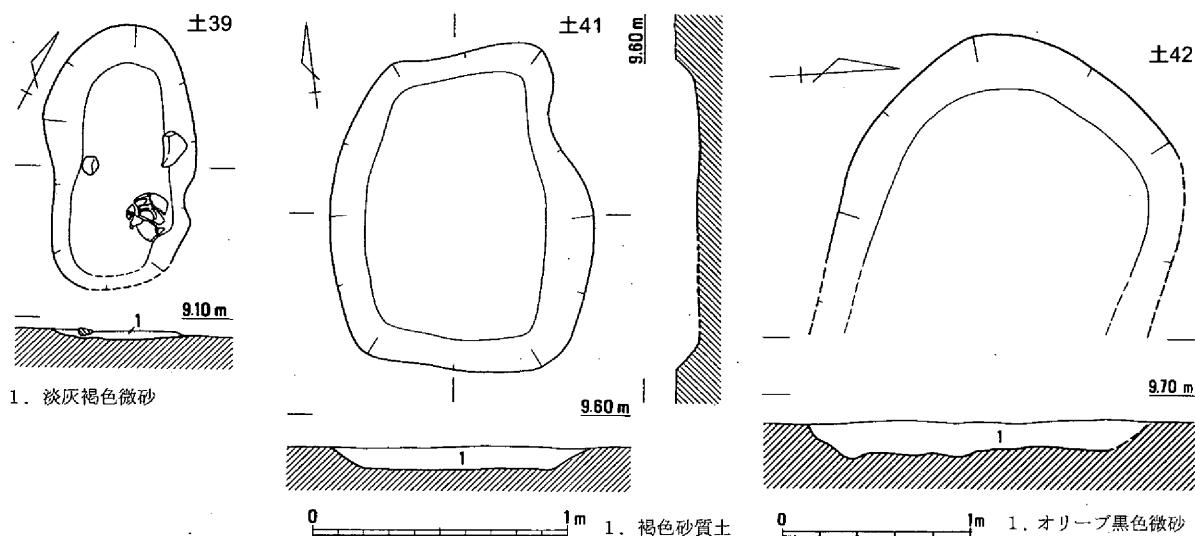
(物部)



第119図 井戸・出土遺物 (1/40・1/4)



第120図 土壌36~38・40 (1/40・1/30)



第121図 土壙39・41・42 (1/40・1/30)

土壙41 (第121・122図)

8区のほぼ中央に位置する。平面形は $1.29 \times 1.04\text{m}$ の不正長方形を呈し、検出面からの深さは 0.09m を測る。埋土中より早島式土器碗の小片714が1点あった。14世紀前後と考えられる。(物部)

土壙42 (第121図)

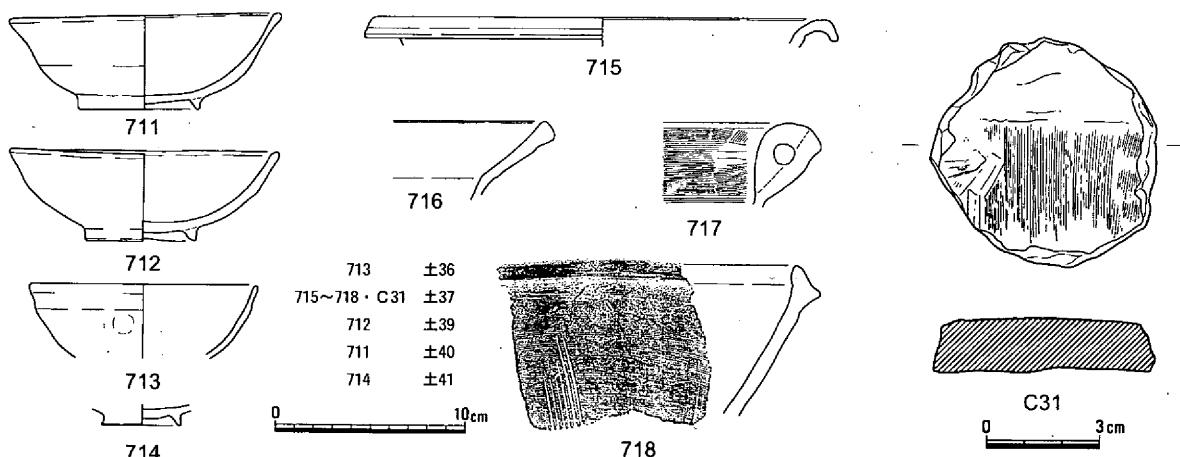
8区北半東側の調査区境に位置する。土壙の東半は調査区外になる。平面形は $1.63\text{m以上} \times 1.70\text{m}$ の隅丸長方形状を呈すると推定され、検出面からの深さは 0.17m と浅い。埋土中から土器小片3点および鉄釘と考えられる鉄器片1点出土した。墓の可能性もある。時期は中世。(物部)

土壙43 (第123図)

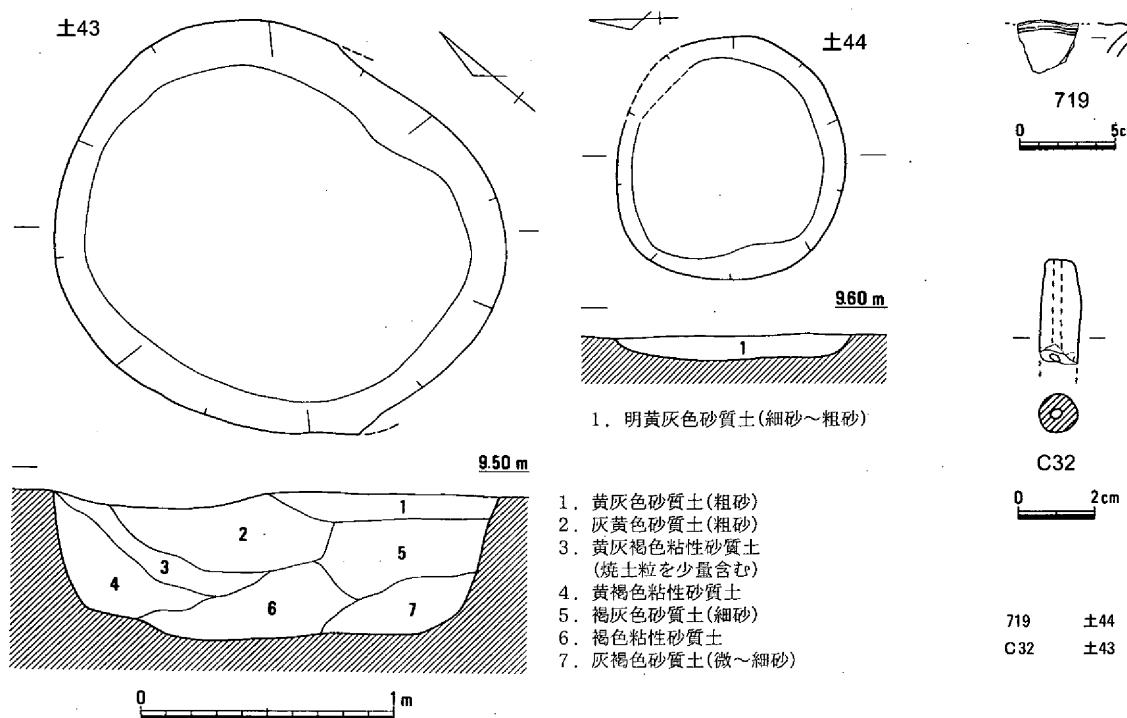
12区の南側に位置する。円形の土壙であり、長径 1.79m 、短径 1.56m 、深さ 0.59m を測る。井戸のような用途が推測されるが、詳細は不明である。土壙内から主に弥生土器片が出土したが、検出面や埋土の状況から中世の遺構の可能性が高い。(金田)

土壙44 (第123図)

12区の北側に位置する。径約 0.9m の円形の土壙である。図示できないが、中世の土師器と思われる小片が出土していることから、中世の遺構であると考えられる。(金田)



第122図 土壙36・37・39・40・41出土遺物 (1/4・1/2)



第123図 土壌43・44・出土遺物 (1/30・1/4・1/2)

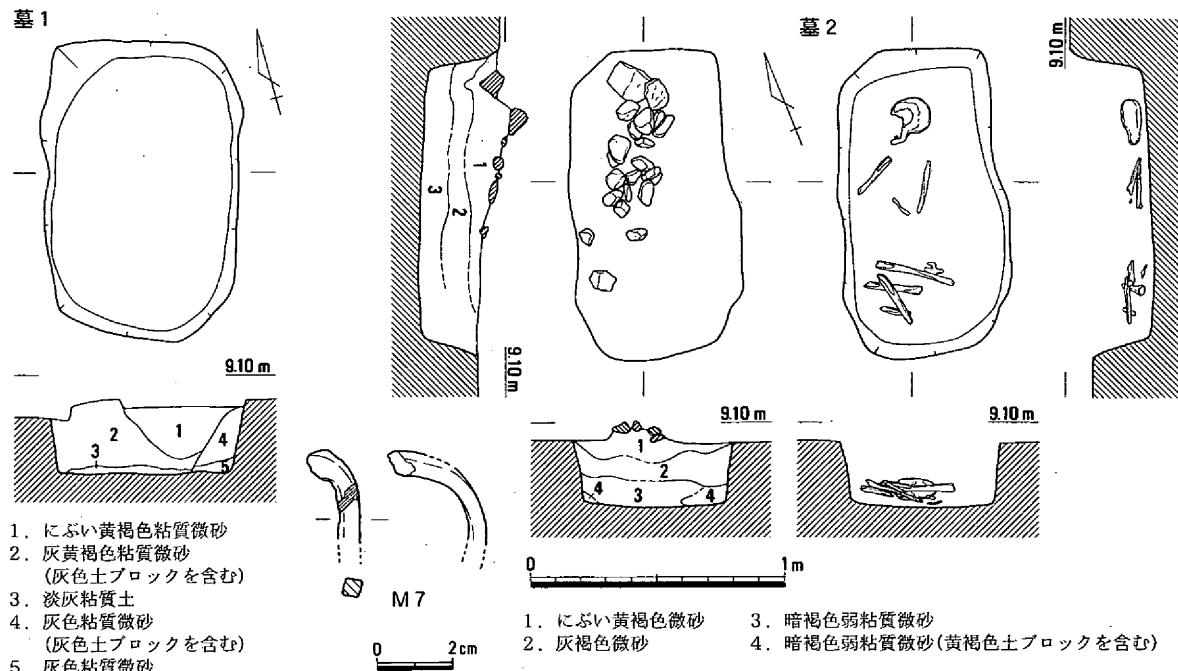
(4) 土壌墓

土壌墓1 (第124図)

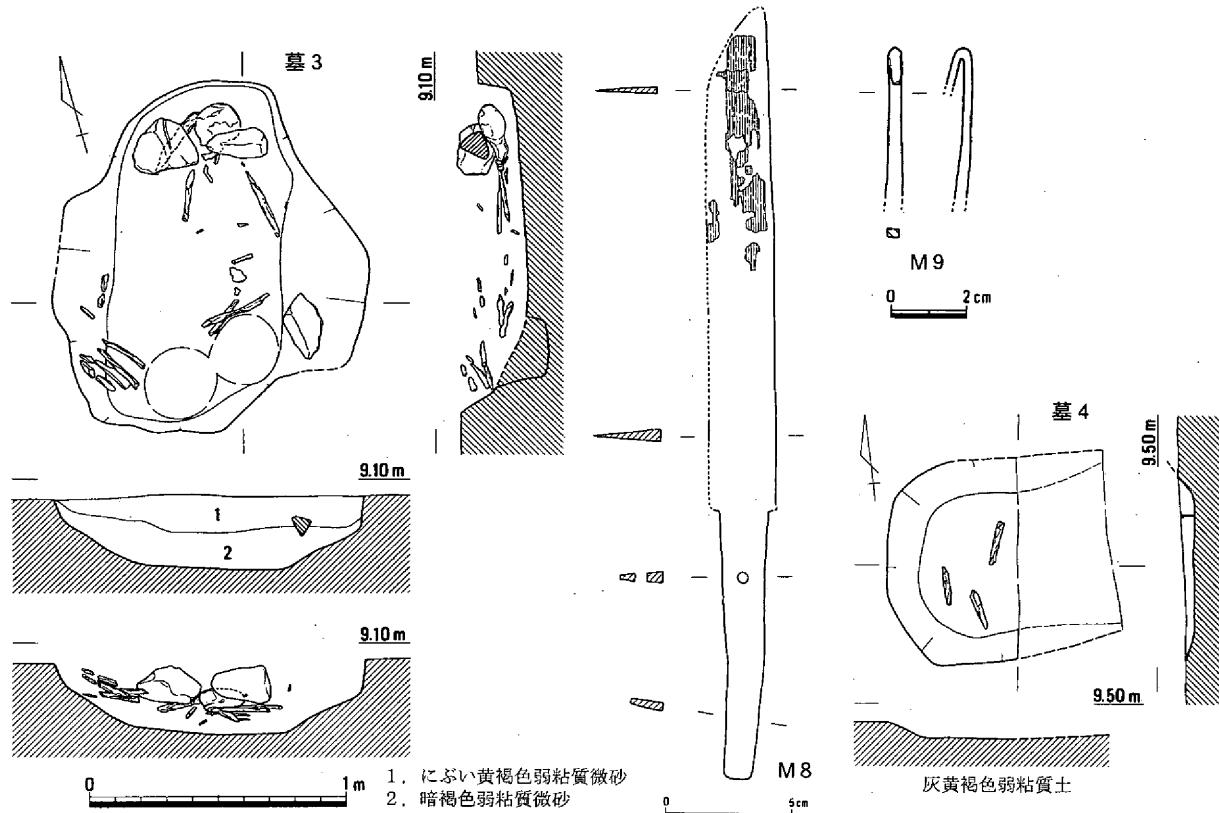
5区北端に位置する。後述の畦畔に伴う溝に切られている。平面形は 1.17×0.77 mの長方形を呈す。主軸はN-30°-E。断面の土層において木棺の痕跡らしき縦に入るラインを検出。埋土中から鉄釘M7が出土。人骨は検出されない。時期は畦畔が室町期と考えられるのでそれ以前。(物部)

土壌墓2 (第124図)

4区南半に位置する。土壌40の南、土壌墓3の東に隣接する。平面形は $1.22 \times 0.60 \sim 0.65$ mの



第124図 土壌墓1・2・出土遺物 (1/30・1/2)



第125図 土壌墓3・4・出土遺物(1/30・1/3・1/2)

長方形を呈す。検出深0.25m。主軸はN-22°-E。埋土最上面のやや北西より0.9×0.3mの範囲に5~20cm大の礫の集積がみられた。人骨は頭、腕、足の骨が遺存した。頭位は北向き、西に体を横向けて足を曲げて埋葬している。埋土中に高台の退化した早島式土器碗の細片が混じっていることから14世紀前後頃と考えられる。歯の鑑別を依頼した(第8章第1節)。

(物部)

土壌墓3(第125図)

4区南半に位置する。土壌墓2の西に隣接し、土壌40に切られている。1.40×1.22~0.80mの不整長方形を呈す。主軸はN-13°-E。人骨は頭、腕、足の骨が遺存した。西に体を横向けて足を曲げて埋葬している。頭部西側に鉄製短刀M8が副葬されている。また、頭骨と短刀の直上に20cm大の礫が乗っていた。木棺の腐朽により落ち込んだものだろうか。他に鉄釘がM9など3点出土。埋土中に高台の退化した早島式土器碗の細片が混じっていることから14世紀前後頃と考えられる。(物部)

土壌墓4(第125図)

9区北半、東側の調査区境に位置し、東半分は調査区外になる。平面形は0.9以上×0.80mの長方形を呈す。検出深0.07m、主軸はS-82°-E。足の骨が遺存する。頭位は東向き。埋土中に早島式土器の細片が少量混入している。時期は中世。

(物部)

(5) 溝

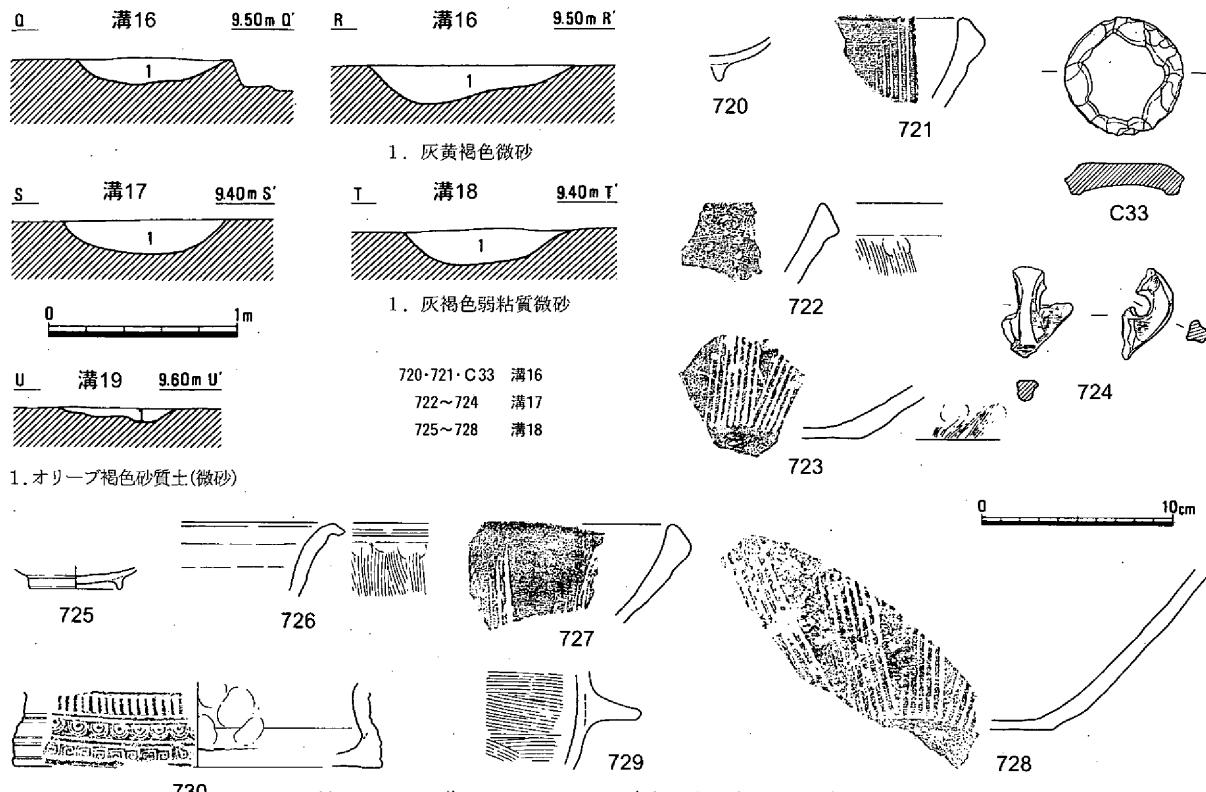
溝16(第126図)

4区北半に位置する。幅0.8~1.08m、深さ0.2mを測る。西から東へ流れていたと考えられる。早島式土器碗720、亀山焼系擂鉢721、青磁碗転用の円盤C33などが出土。15世紀前半頃。

(物部)

溝17・18(第126図)

溝17・18は6区南半に位置し、同一の溝と考えられる。北から南に直線的に延び、一旦2m程途



第126図 溝16~19・出土遺物 (1/40・1/4)

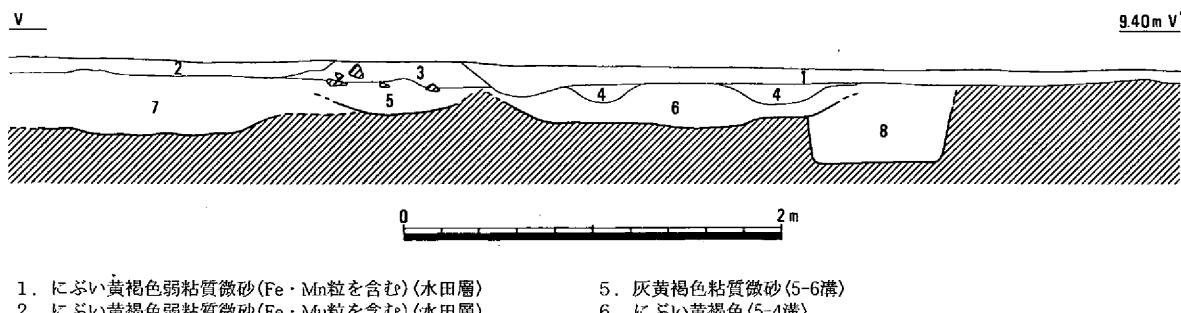
切れ、再び緩やかに湾曲しながら西に流れる。幅0.5~1.0m、深さ0.18m。出土遺物には、早島式土器碗、鍋、羽釜、亀山焼系の擂鉢、風炉などがある。時期は15世紀頃前半と推定する。(物部)

溝19（第126図）

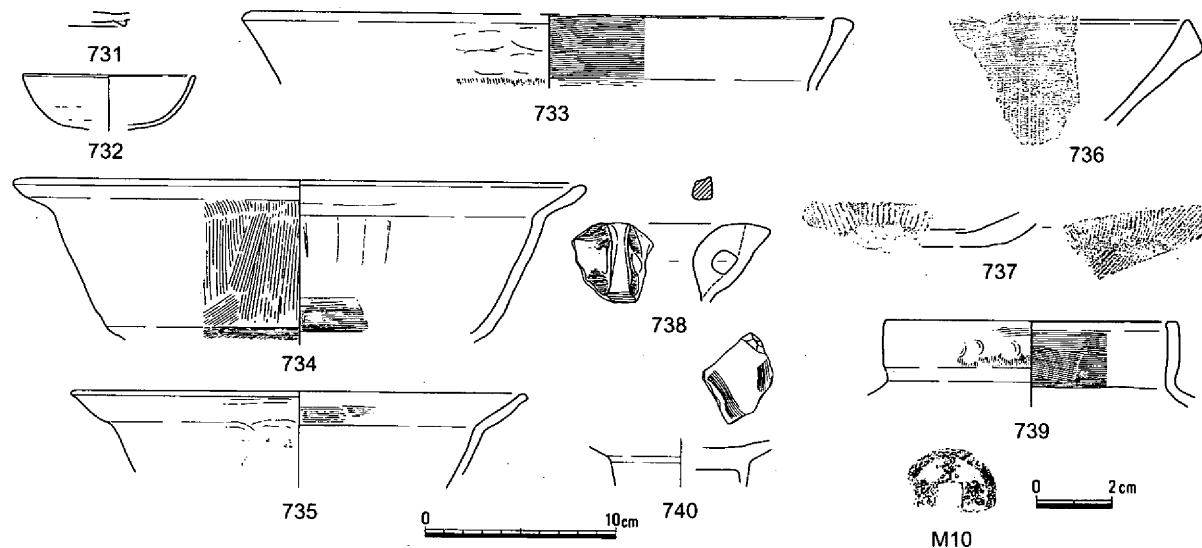
9区北端部に位置する。検出幅0.6m、深さ0.07mの浅い溝である。土器小片が3片出土したが、正確な時期は不明。10区旧河道下がり部の水田に伴う溝と主軸が同じことから、室町時代か。(物部)

(6) 畦畔（第127・128図）

5区および6区南半に位置する。盛り土を確認できたのは5区と6区の境約5mで、それ以外は畦畔の両側に掘られた浅い溝のみ検出された。この溝は2条1対で2対あるので畦畔の改修が想定される。掘立柱建物1、土壙墓1を切っている。検出長39m、基部の幅1.2m、上面の幅0.7m以内、検出面までの盛り土の高さ0.13mを測る。盛り土内部に拳大の礫が多くみられた。畦畔に伴う水田層および段が2箇所で検出された。溝17南端と溝15北端を結ぶ地点に1段、溝13の北に1段あり、南に



第127図 畦畔 (1/40)

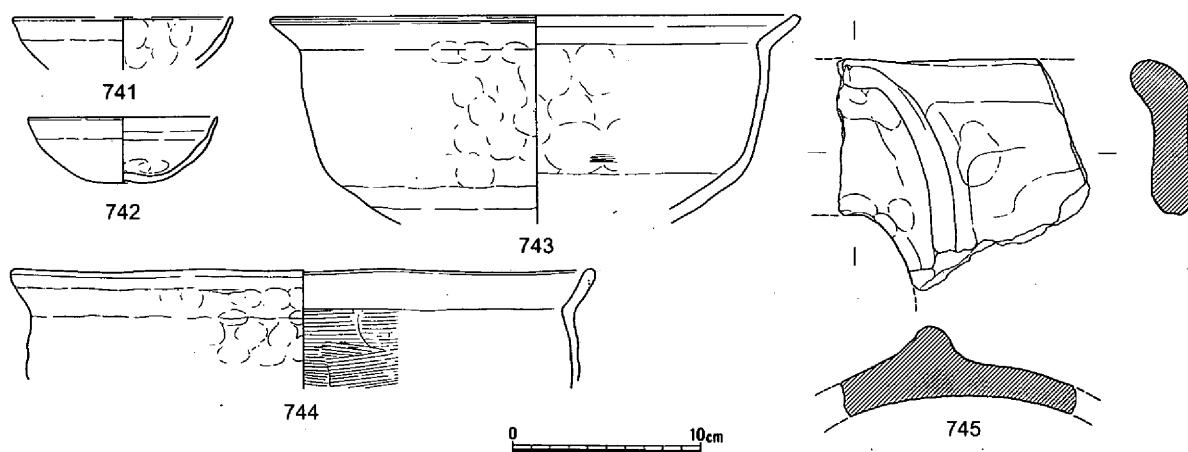
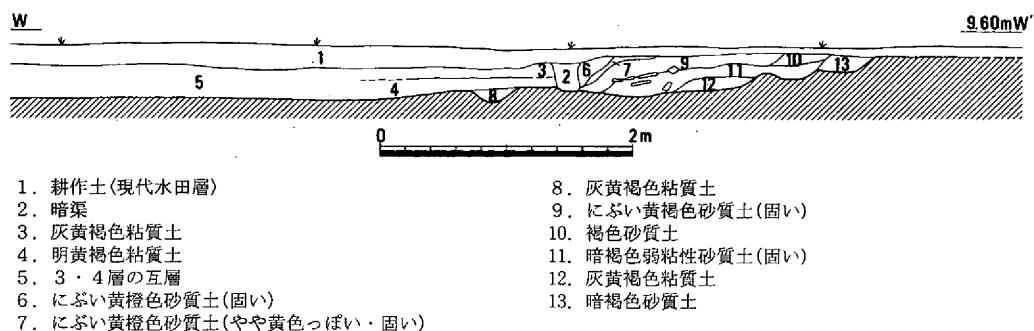


第128図 畦畔出土遺物（1/4・1/2）

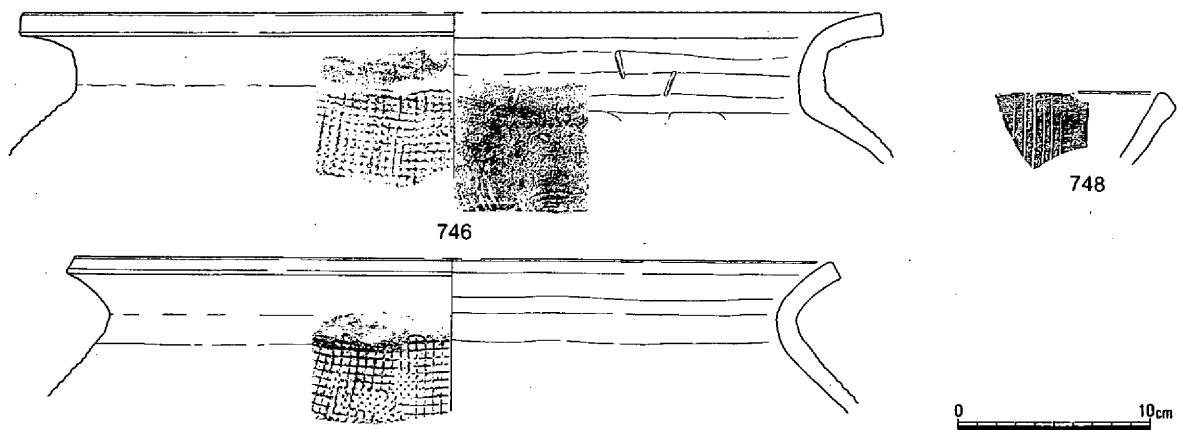
下がる。第128図は畦畔盛土、溝、水田層から出土した遺物である。731・732早島式土器碗、733～735・738土師器鍋、736・737は内面ハケメ調整の亀山焼系擂鉢、739は瓦質の釜、740は櫛描きのみられる青磁碗、M8は初鑄1004年の銅錢「景德元寶」である。時期は15世紀前半頃と考える。（物部）

(7) 下がり (第129・130図)

10区に位置する旧河道南岸の下がりである。緩やかな下がりであり、水田として利用されている。水田層は現代と、灰色・黄色粘質土の互層である近世の二時期が確認されるが、それ以前の水田に伴



第129図 下がり・出土遺物1（1/60・1/4）



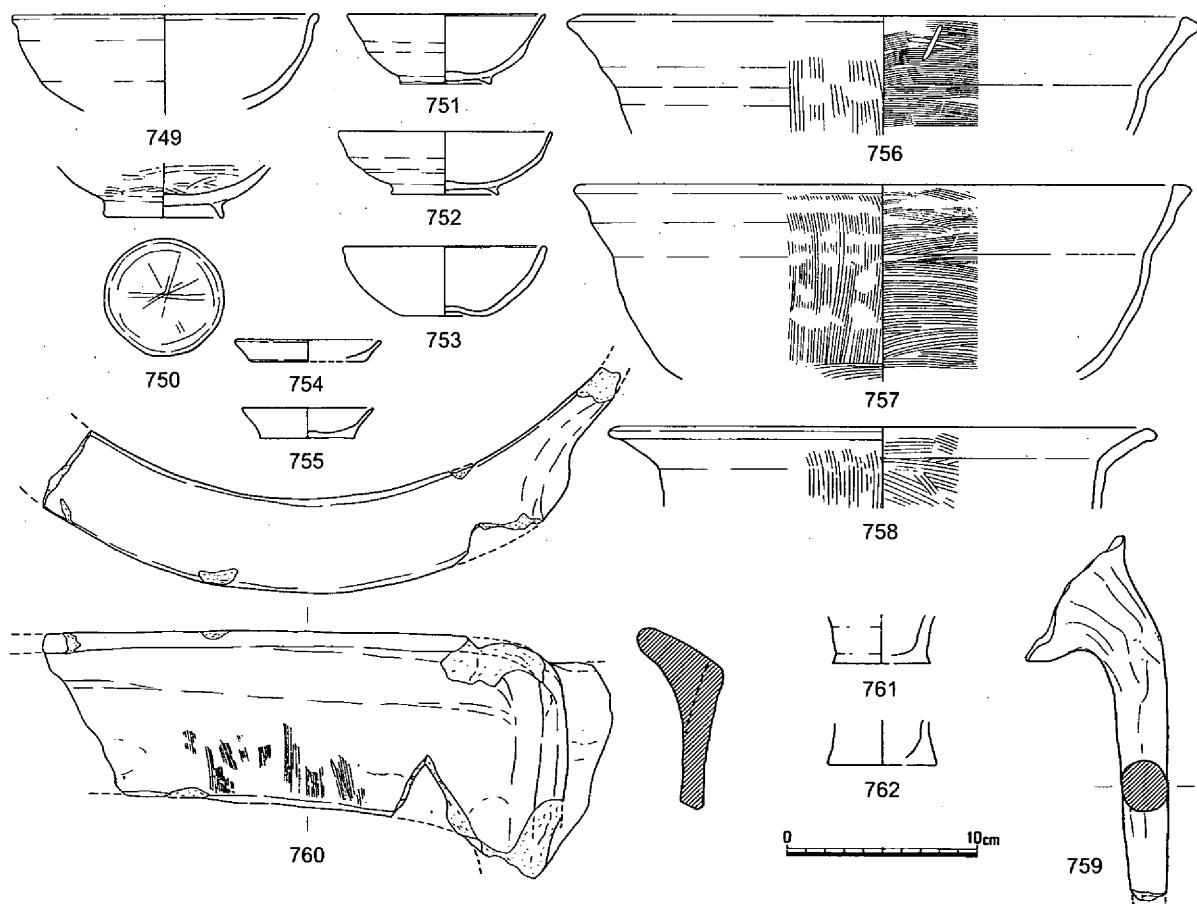
第130図 下がり出土遺物 2 (1/4)

う溝も検出された。また肩部には土手あるいは畦畔と考えられる固く締まった盛り土層が確認された。その盛り土中には礫や土器片が多く投棄されている。741・742は早島式土器碗で742は高台が付かない。743・744土師器鍋、745竈、746・747・748は亀山焼の甕と擂鉢である。時期は14世紀代と考えられる。

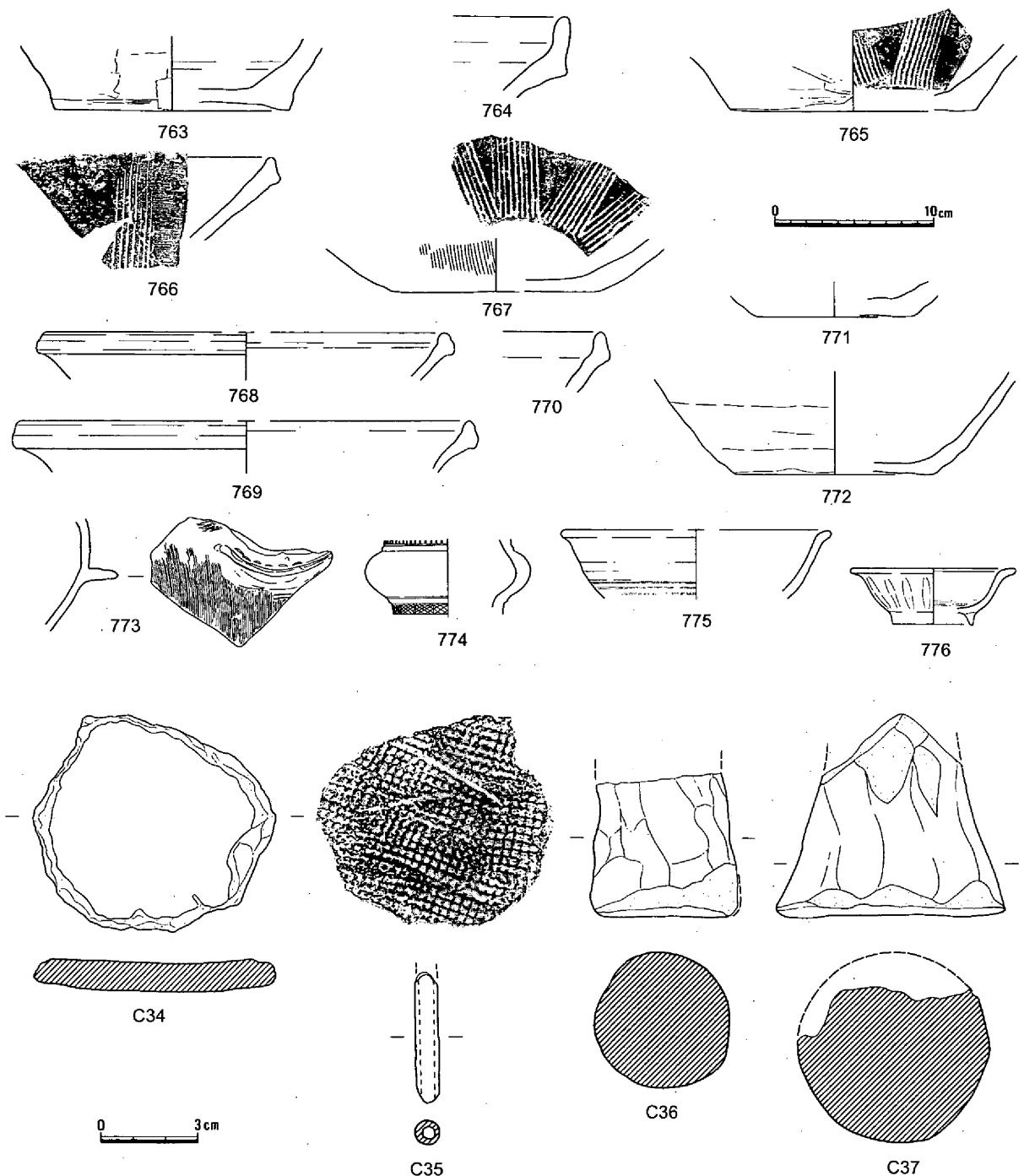
(物部)

(8) 遺構に伴わない遺物 (第131・132図)

大半が3~6区の中世~近世・現代の水田耕作土から出土したものである。741~753は早島式土器碗で、749は口径15.9cm、750は内外面にヘラミガキがみられ、底部外面には2条1単位の線刻を4単位、放射状に描いた記号がある。751の口径は10.4cm、器高4.8cm、752の口径11.2cm、器高5.6



第131図 遺構に伴わない遺物 1 (1/4)



第132図 遺構に伴わない遺物2 (1/4・1/2)

cm、753はいわゆるへそ椀で口径10.6cm、器高3.7cmを測る。754・755は土師器皿、756～759は土師器鍋で、756の口縁部内面には「十」のヘラ記号がある。760は竈の正面上面片。761・762は吉備中山型とされる小杯である。763は備前焼の甕、764・765は備前焼の擂鉢である。766・767は龜山焼系の擂鉢、768～772は東播系の鉢で、灰白色を呈し、砂粒の多い胎土を持つ。773は瓦質土器の鍋で薄く湾曲する把手が付く。774は奈良火鉢と呼ばれる瓦質土器の風炉である。775・776は青磁の椀と皿である。土製品には龜山焼甕体部を転用した円盤C34、土錘C35、灰白色を呈する不明品のC36・C38がある。

(物部)

第5章 井手見延遺跡

第1節 調査の概要

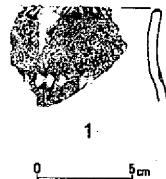
井手見延遺跡は、総社市井手字見延に所在する弥生時代～中世の集落遺跡で、北緯 $34^{\circ}40'24''$ 、東経 $133^{\circ}46'24''$ に位置する。この遺跡は、昭和50年に文化庁より刊行された遺跡地図において金井戸見延遺跡として周知されていた。

しかし、今回の調査によって低位部を挟んで南北二つの微高地に区分されることが明らかとなり、なおかつ調査地点が大字井手に含まれることから、南側の微高地と低位部を併せて井手見延遺跡と呼称することとした。

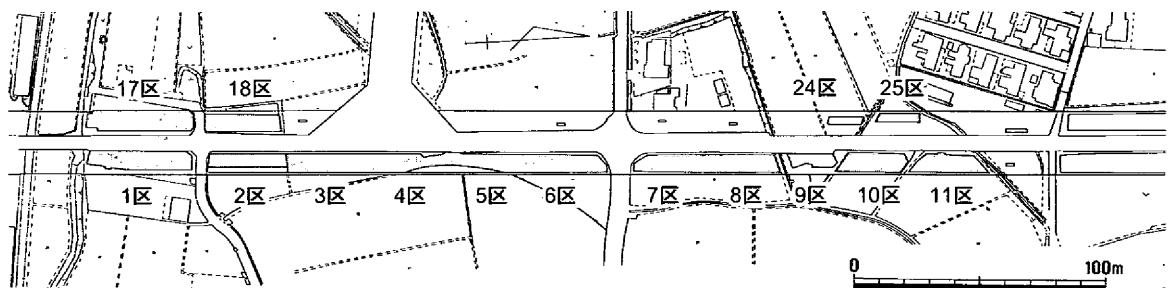
この遺跡の北端は、南西から北東に走る幅約50mの低位部によって井手天原遺跡と隔てられている。また、その南端は西から東へ走る幅約90mの旧河道によって三須畠田遺跡と区切られている。この河道と低位部に挟まれた微高地は、調査地点の東側に東西約250m、南北約400mの規模で広がっており、造成工事に伴い総社市教育委員会によって調査された金井戸鴻崎遺跡もこの微高地上に立地している。現在、遺跡の大半は水田として利用されており、井手天原遺跡に比べ農村としての景観が保持されている。標高10.2mを測る微高地部分では、厚さ40cmほどある近世～現代水田層の下に砂層が広がっているが、弥生時代～中世にわたる遺構はこれを基盤として掘りこまれている。一方、低位部では古代～近世の水田層が厚さ約1mにわたって重複しており、下層の標高は9.0mを測る。また、ここでは明治以降に大幅な地上げが行われており、現在の景観が形成されたのは近時のことである。

今回の調査で明らかとなった遺構のうち、最も古く位置付けられるものは弥生中期前半のものであるが、その基盤となる砂層からは縄文時代晩期の土器が出土しており、この遺跡の形成がこの時期まで遡る可能性がある。弥生時代の遺構の大半は後期前半に属するが、これは中期後半や後期後半が遺跡の主体をなす三須畠田遺跡、井手天原遺跡とは対照的であり、両者が補完的な役割を果たしていたものと推測される。このような関係は古墳時代前期まで続くが、古墳時代後期には独立した集落がそれぞれ営まれるようである。しかし、この時期にはいずれの遺跡においても鉄器生産が行われていることからすれば、それらが全く無関係であったとも思われない。古代の遺構には掘立柱建物や土壙、溝などがあり、低位部も水田として利用され始めている。土器や瓦など多量の遺物が出土したが、その中には陶硯も含まれており、付近に公的施設の存在も予想される。しかし、中世の遺構は少なく、集落の中心は東側にあるものと思われる。近世に入ると耕作にかかる溝が微高地上にも見られるようになり、この時期に遺跡一帯の水田化が推し進められたものと思われる。

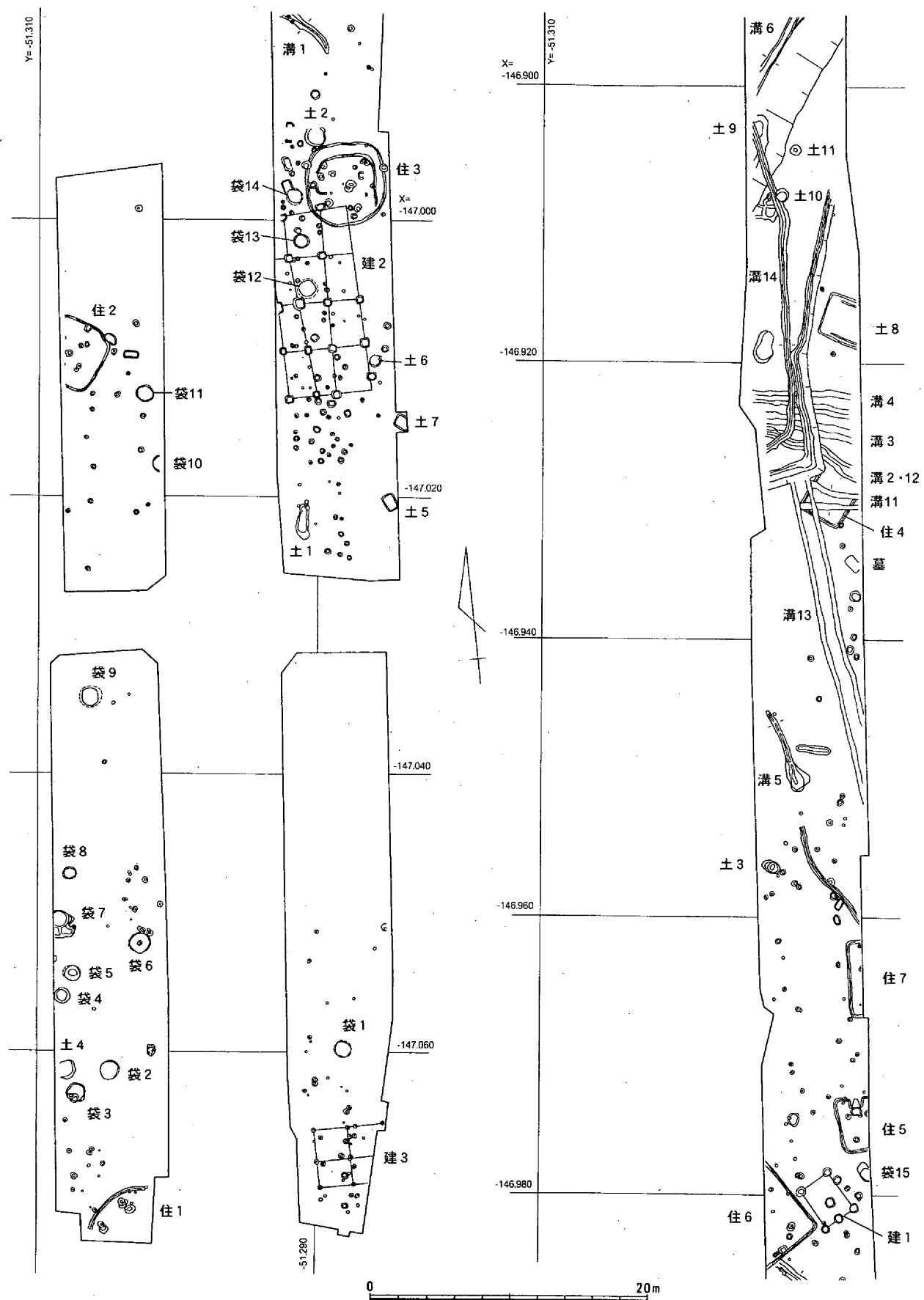
(亀山)



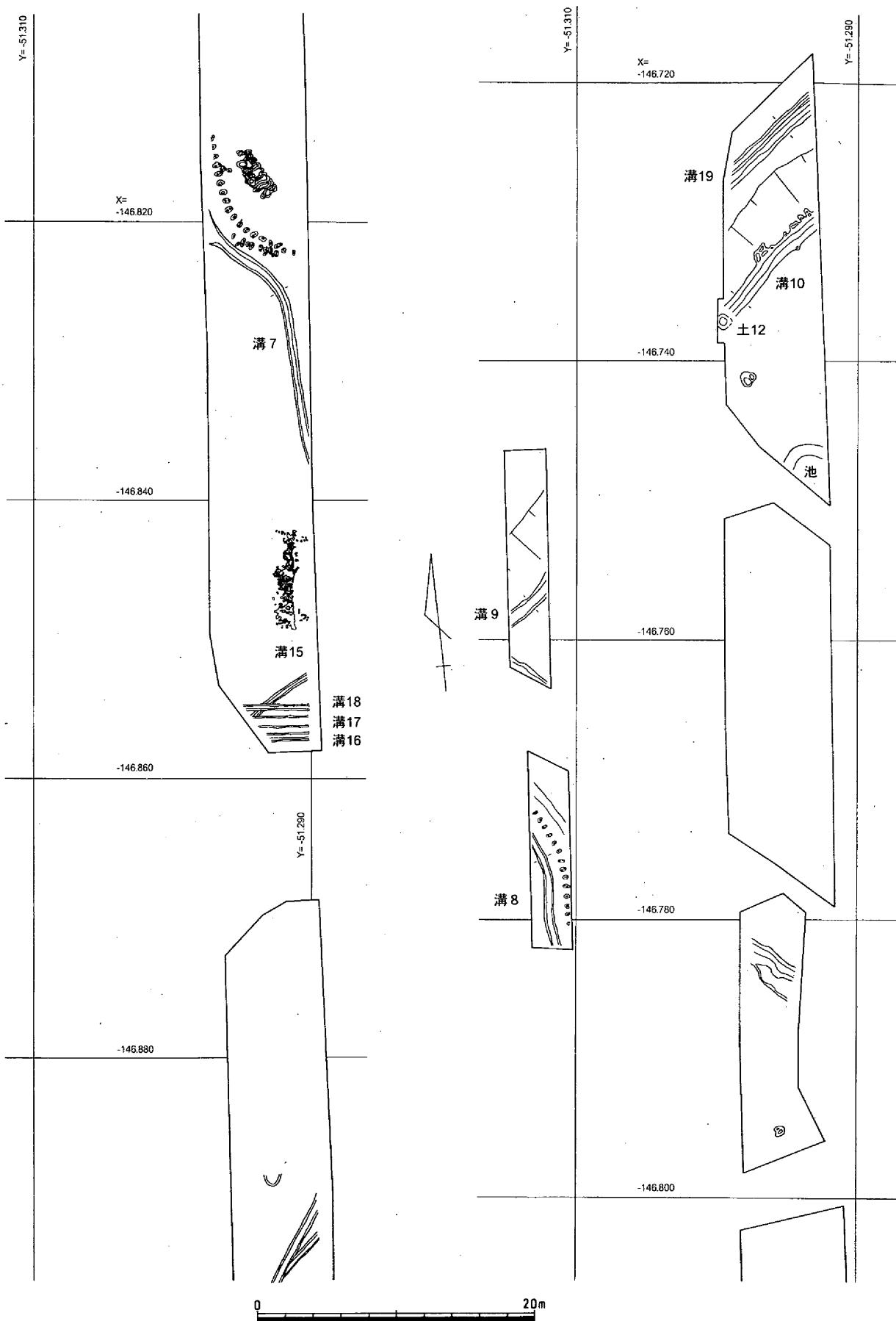
第133図 基盤層出土の縄文土器（1/4）



第134図 調査区配置図（1/3000）



第135図 遺構全体図1 (1/400)



第136図 遺構全体図2 (1/400)

第2節 弥生時代の遺構・遺物

(1) 壁穴住居

壁穴住居1 (第137・138図 図版22・26)

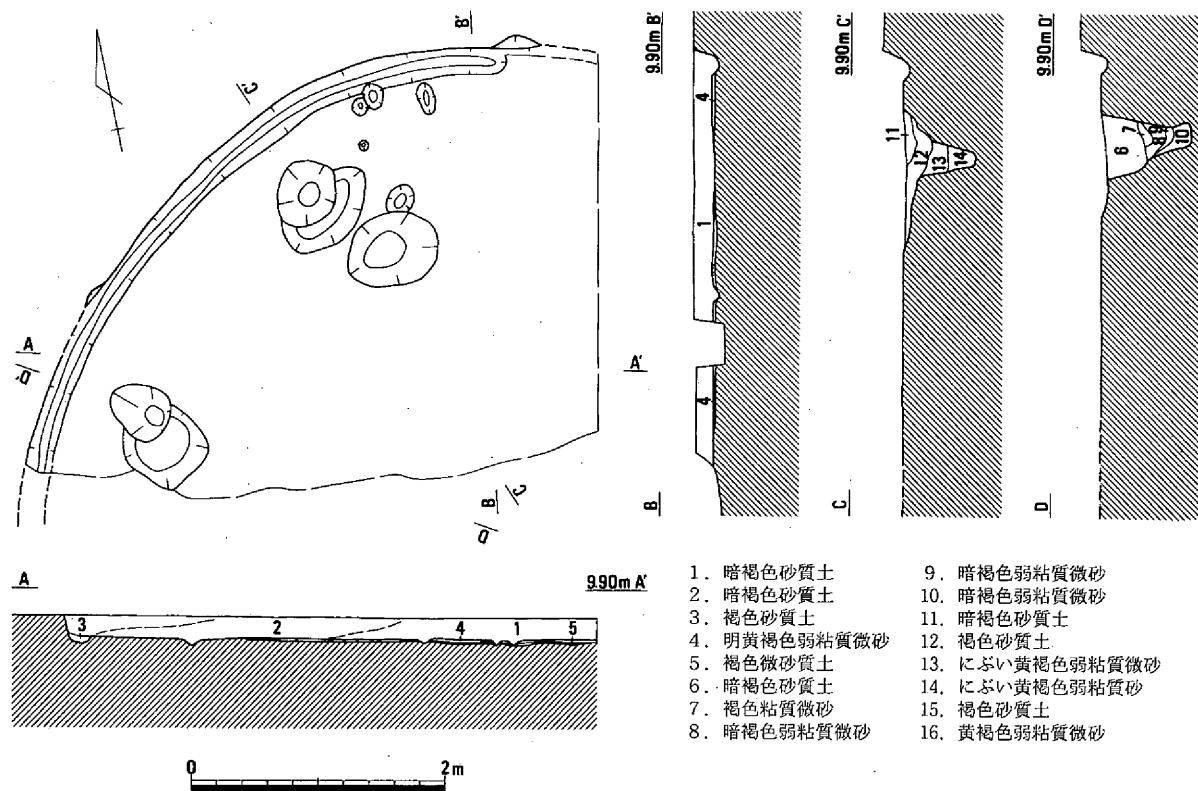
17区南端に位置する。住居の東1/4は調査区外になり、南1/2は現代の用排水路によって掘削されている。このことから、井手見延遺跡の微高地南端は少なくとも10m程度は現状より南に延びていたと推測される。用排水路は旧河道の名残と推定されているもので、いつの時期かははつきりしないが、微高地の南端を削る大規模な掘削があったとみられる。

壁穴住居の平面形は円形を呈し、直径は推定7.8m、検出面からの深さは約0.2m、底面の標高9.48mを測る。底面には明黄褐色弱粘質微砂の貼り床（第4層）を厚さ1cm弱程度施している。中央部付近では貼り床が2面認められ、床の貼り直しが行われている。壁体溝は幅約0.15m、深さ約6cmを測る。北部で一旦途切れるようである。直径0.7m、深さ0.6m程度の柱穴が2基検出された。8～9本柱と推定される。壁体溝から柱穴の中心までの距離は0.6～0.8mである。検出された柱穴2基のうち北側の柱穴の南東に隣接する橢円形の堀り方は、深さ6cmの浅い窪みである。埋土は砂っぽく、東から流入した状況がみられた。

出土遺物は少ない。土器は埋土中からの出土である。2はにぶい黄橙色を呈する甕で、内面はヘラケズリを頸部下まで施す。3は橙色を呈する高杯脚部で端部が拡張する。外面には数条の沈線文があり、また小径の円形透かしが施されている。J1は緑色凝灰岩製と考えられる管玉である。長さ1.8cm、直径0.6cm、床面から出土した。

以上、土器の特徴から弥・後・Iに比定される。

(物部)



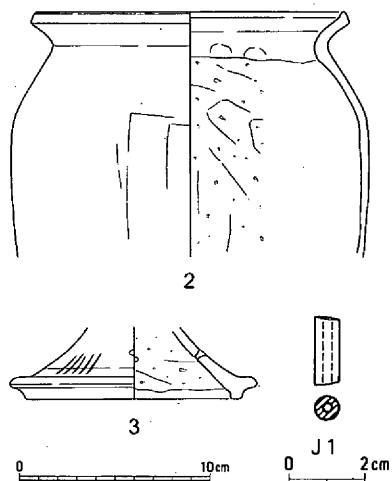
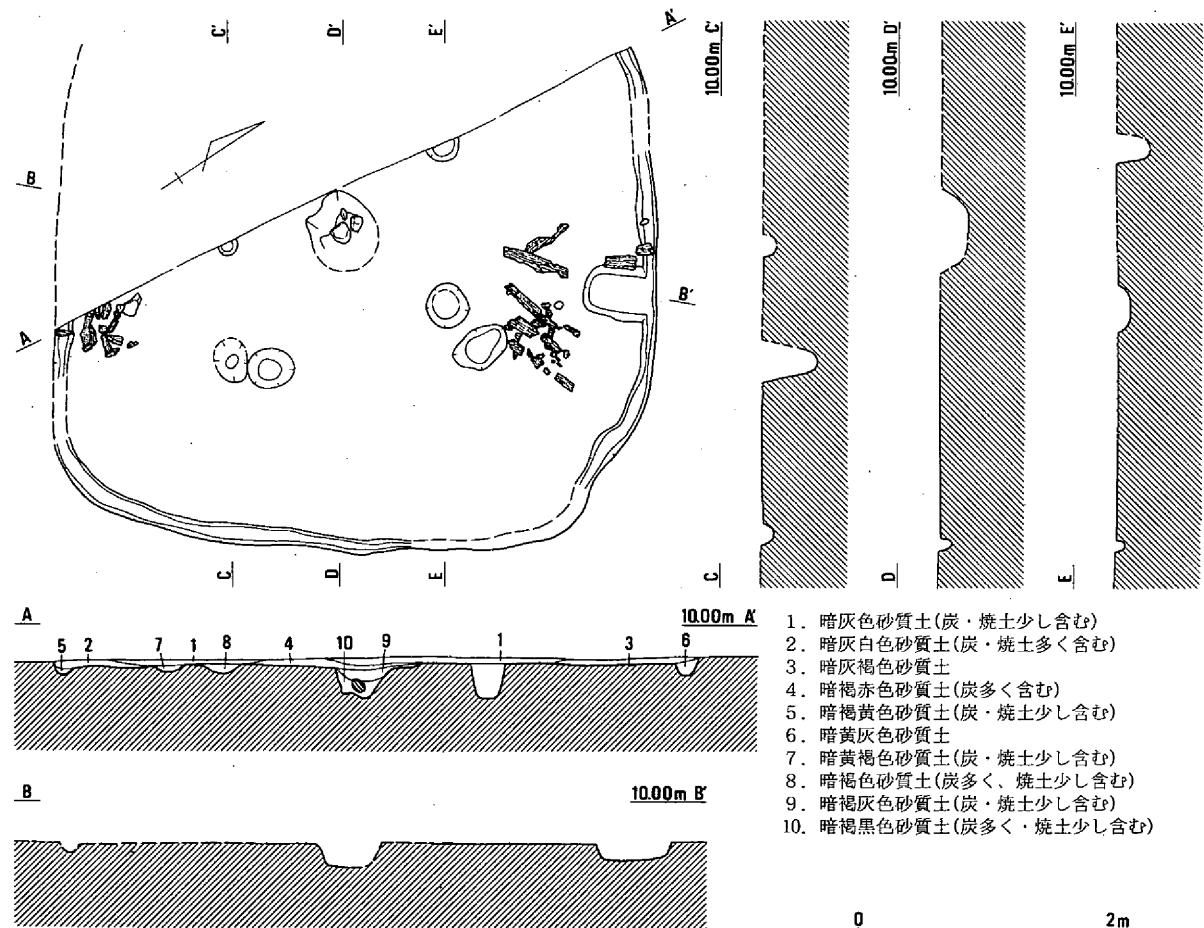
第137図 壁穴住居1 (1/60)

堅穴住居2 (第139・140図 図版22)

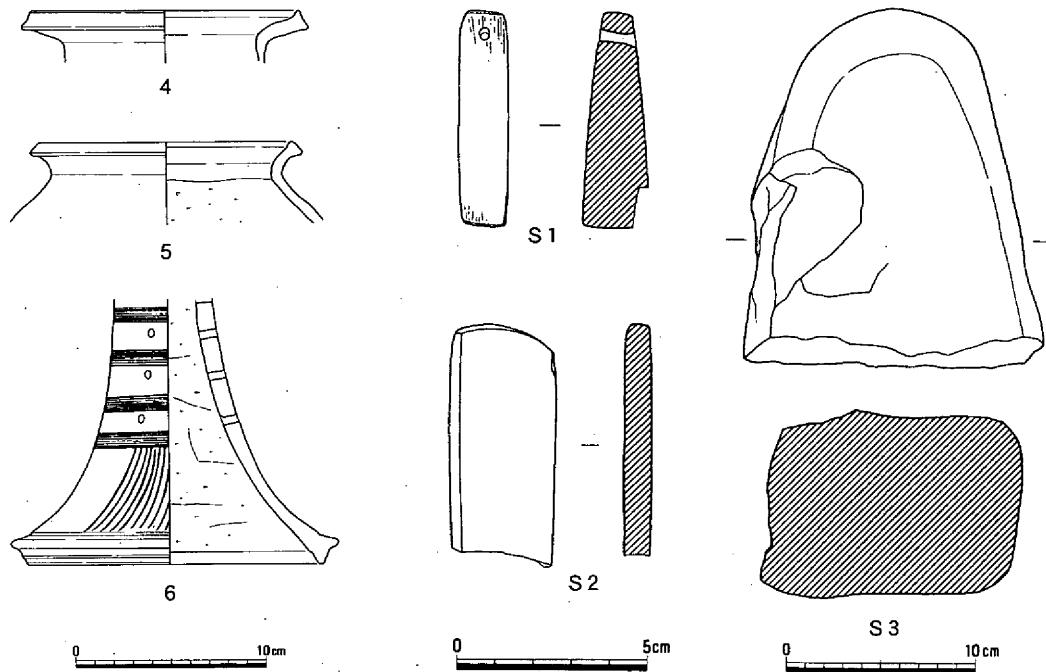
18区の中央西よりに位置する。検出面での平面形は、西側約1/3が調査区外となるため明確ではないが、隅丸方形を呈すると考えられる。規模は、計測可能な部分で長軸4.78m、短軸4.04mを測る。床面中央部において中央穴を、住居北辺の中央付近で隅丸方形の土壙を検出した。中央穴の埋土中には炭、焼土を含むが、被熱痕跡は確認できなかった。床面において炭化材を検出し、さらに床面直上の埋土中に炭、焼土を多く含むことから、この堅穴住居は焼失したものと推測する。

遺物は弥生土器、石器が出土した。壺4は外面にススが付着する。口径13.9cm。甕5は中央穴より出土した。内面は頸部までヘラケズリが及ぶ。口径13.1cm。高杯6は床面の炭化材とともに検出した。残存する脚柱部には7条1単位の櫛描直線文が4本廻り、透かし孔をその間に穿つ。脚裾部には12本1単位のヘラ描沈線文を施す。S1~3は砥石である。S1は穿孔が確認できることから、提げ砥としての機能が推察される。穿孔は両側より施されたものである。北側の壁体溝より出土した。S3は中央穴より出土した。火を受けた痕跡が確認できる。それぞれの石材は、順に流紋岩、ホルンフェルス、凝灰岩である。遺構の時期は弥・後・Iに属する。

(重根)

第138図 堅穴住居1出土遺物
(1/4・1/2)

第139図 堅穴住居2 (1/60)



第140図 壇穴住居2出土遺物（1/4・1/2）

壇穴住居3（第141・142図）

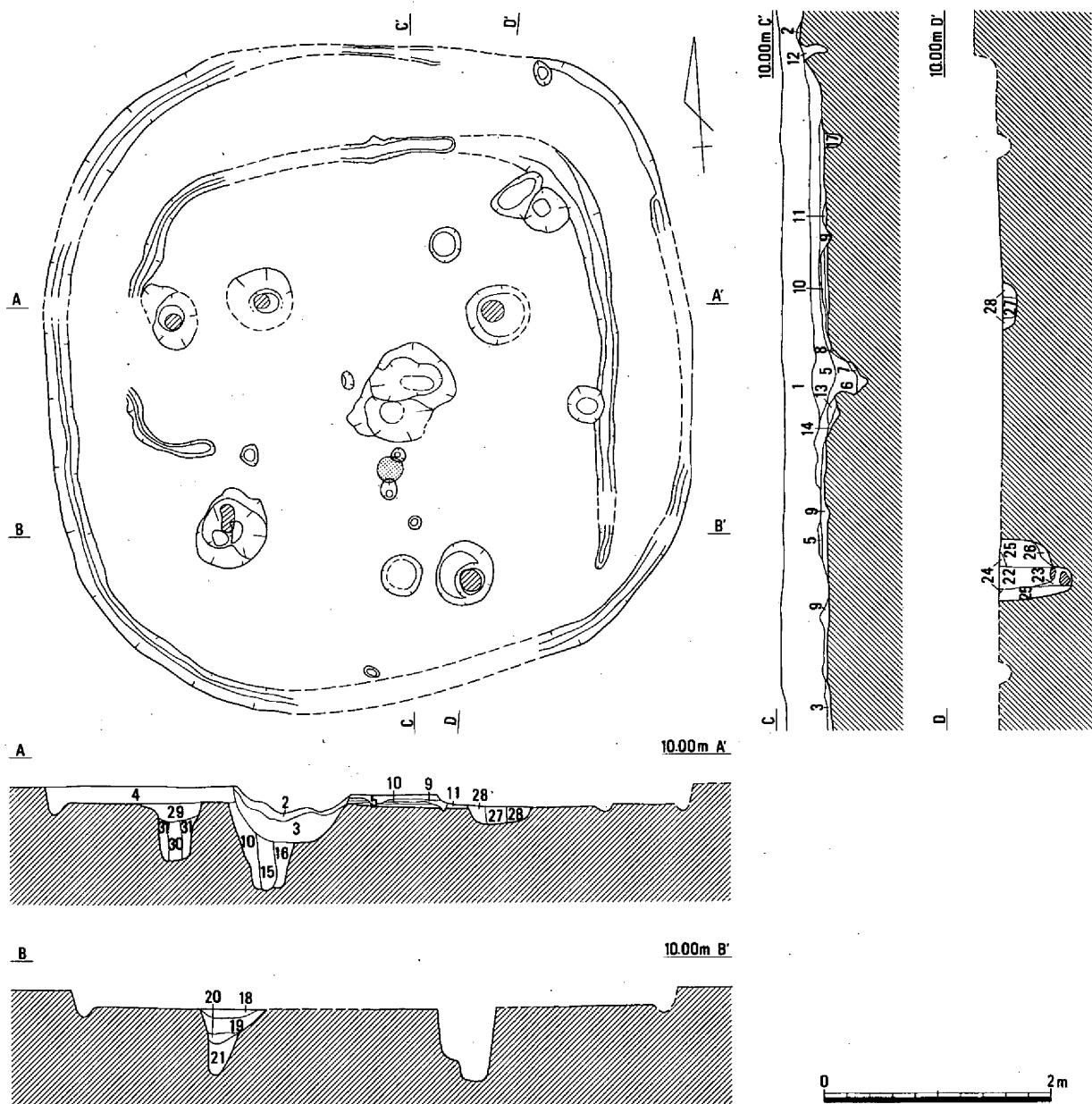
2区の南寄りに位置する壇穴住居である。隅丸方形を呈する平面形の住居を拡張して、円形の住居に建て替えたものと考えられる。その中央部は、現代の搅乱による改変を大きく受けている。

隅丸方形の住居は、東辺と北・西辺の壁体溝の一部を検出したもので、東西長は4.28mを測る。主柱穴は、円形の平面形を呈する4本と考えられ、いずれも柱痕跡を検出している。その規模は径0.6～0.75m、検出面からの深さ0.18～0.75mを測るが、他の3本と比較して北東側の1本が浅くなる。中央穴は、拡張後のものと重複するが、切り合い関係から南側に位置するほうと考えられる。その周囲には顕著な炭層の拡がりを確認している。また、中央穴から0.15m南に位置する被熱面は、検出状況からこの住居に伴うものと考えられる。

拡張後の住居は、ほぼ円形に復元される平面形をもつものである。検出時の規模は、南北長5.93m、東西長5.74m、検出面から床面までの深さは0.13mを測る。床面の標高は9.59mである。壁体溝は、北東部の一部で途切れるほかは全周する。主柱穴の平面形はほぼ円形を呈し、北西側の1本を現代の搅乱で欠くものの、6本で構成されるものと考えられる。隅丸方形の主柱穴と重複する位置にある南西側の1本が径0.60mを測るほかは、0.35～0.5mと拡張前のものと比較して規模の小さいものとなる。中央穴は、床面からの深さで0.6mを測り、炭と焼土塊を顕著に含んでいる。

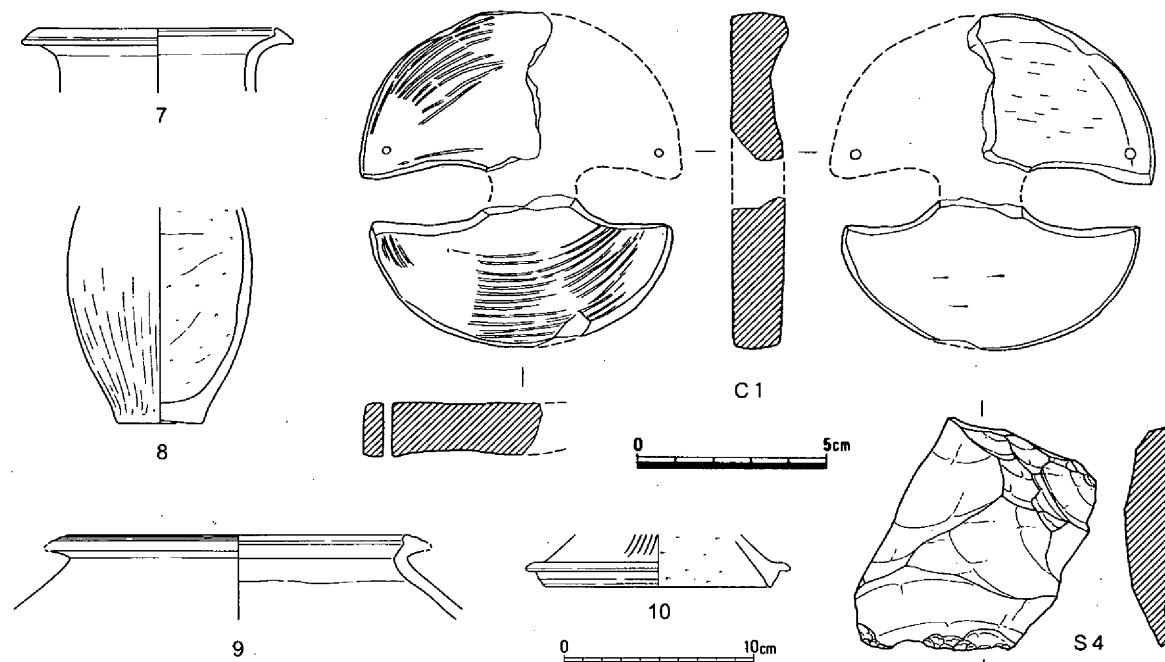
図示した出土遺物は、弥生土器、土製品、石器である。7は口縁端部を拡張する長頸壺である。8・9は甕で、いずれも内面胴部上半に横方向のヘラケズリを施している。10は高杯の脚部で、外面に櫛描線文を施し、端部を肥厚する。C1は分銅形土製品である。その復元形は上半部と下半部がほぼ同大の対象形で、上下間の抉りが深いものである。上半部の先端近くには、表裏を貫通する穴がみられる。また、表面には分銅形の弧に沿うように多数の櫛描文が施される。S4はサヌカイト製のスクリペイパーである。

出土遺物は、拡張後の住居からのものが大半であり、時期は弥・後・Iと考えられる。また、住居周辺には近接する時期の袋状土壙が存在しており、それらとの有機的関係が想定される。（高田）



- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1. 現代搅乱 | 17. 暗黄灰色微砂 |
| 2. 暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む) | 18. 黄褐色砂質土 |
| 3. にぶい黄色粘質土(炭・焼土少し含む) | 19. 暗茶褐色砂質土(炭含む) |
| 4. 黄茶褐色粘質微砂(炭・焼土含む) | 20. 暗灰褐色砂質土(炭含む) |
| 5. 黄茶褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む) | 21. 暗灰褐色粘質微砂 |
| 6. 黄茶褐色粘質微砂(炭・焼土含む) | 22. 暗灰茶褐色砂質土(炭・焼土多く含む) |
| 7. 暗黄灰色粘質微砂(炭・焼土含む) | 23. 暗灰色粘質微砂 |
| 8. 烧土ブロック | 24. にぶい茶褐色粘質微砂(炭含む) |
| 9. 炭層 | 25. 暗黄灰色粘質微砂 |
| 10. 明黄色微砂 | 26. 暗灰褐色砂 |
| 11. にぶい黄色粘質微砂 | 27. 褐灰色砂質土 |
| 12. 黄褐色粘質微砂 | 28. にぶい黄褐色粘質微砂(炭含む) |
| 13. 明黄灰色粘質微砂 | 29. 黄茶褐色粘質微砂(炭・焼土含む) |
| 14. 黄茶灰色微砂(炭・焼土含む) | 30. 暗茶褐色粘質微砂(炭・焼土含む) |
| 15. にぶい黄褐色粘質微砂 | 31. 暗黄灰色粘質微砂(炭・焼土少し含む) |
| 16. にぶい黄褐色粘質微砂 | |

第141図 墓穴住居3 (1/60)

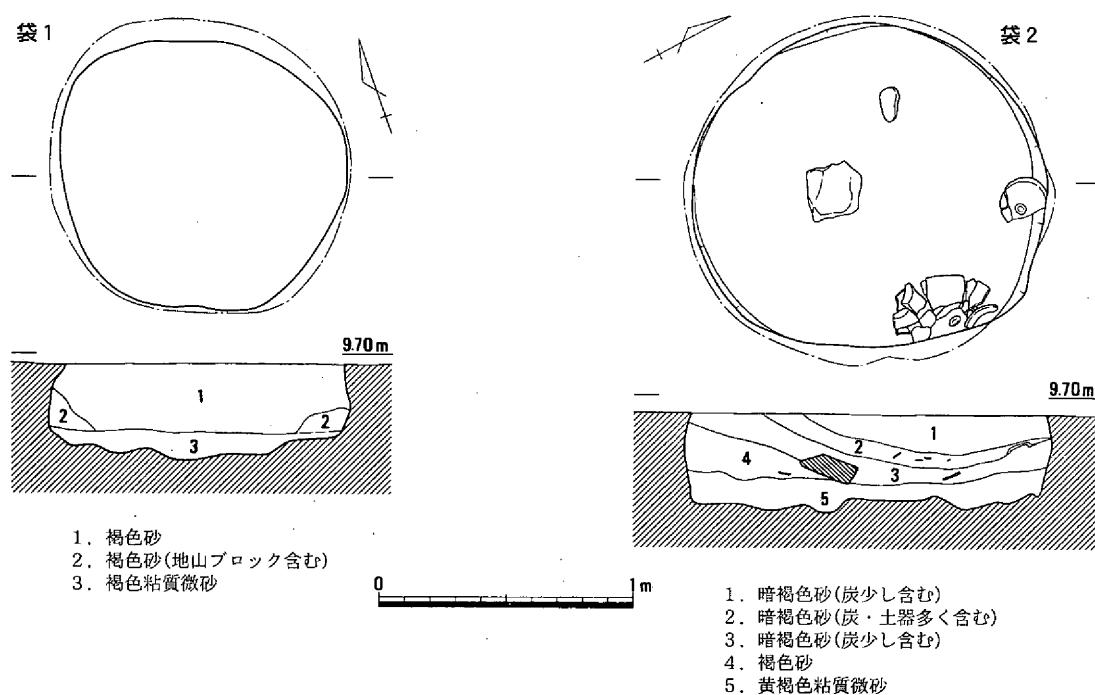


第142図 竪穴住居3出土遺物 (1/4・1/2)

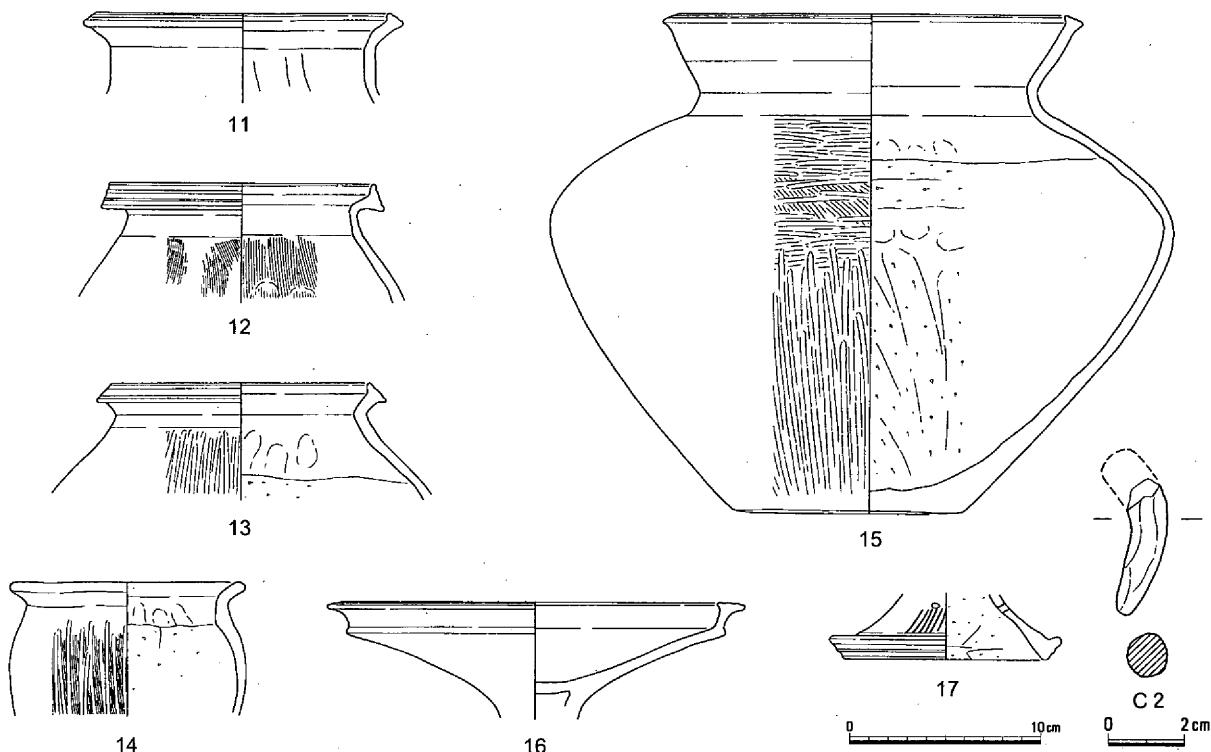
(2) 袋状土壙

袋状土壙1 (第143図)

1区南半部に位置する。平面形は円形を呈す。検出面での直径1.16m、底面径12.8m、検出面からの深さ0.38mを測り、底面の標高は9.28mである。底面上に厚さ10cm前後の褐色粘質微砂（第3層）を敷き詰め、水平な床面を作っている。出土遺物は小片が少量であり、遺構の時期を推定しがたいたが、周囲で検出された袋状土壙と同様な形態であることから弥生時代後期と考えられる。（物部）



第143図 袋状土壙1・2 (1/30)

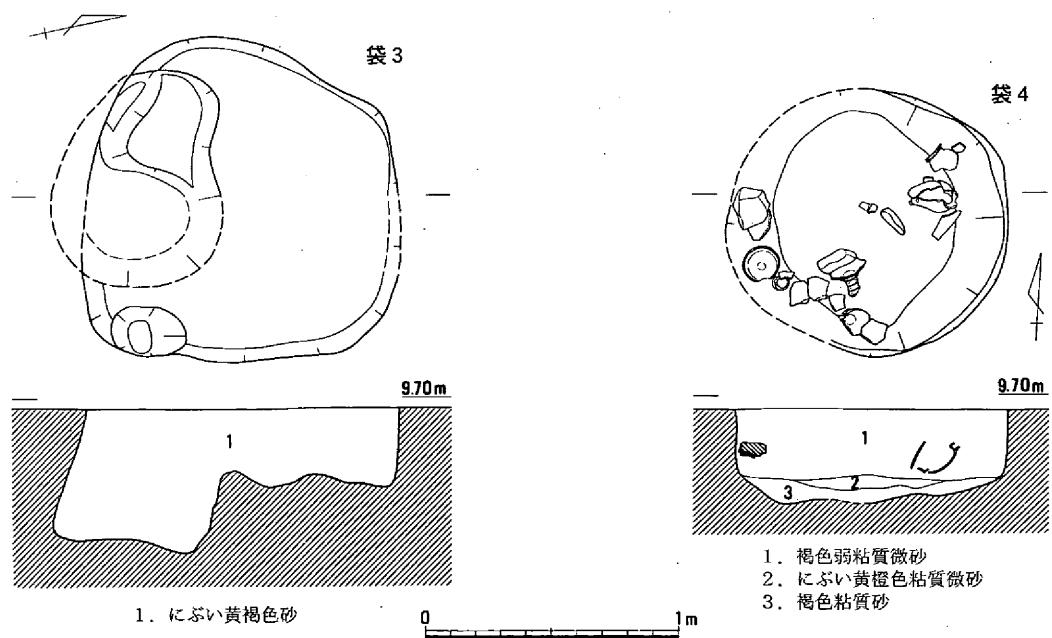


第144図 袋状土壙2出土遺物（1/4・1/2）

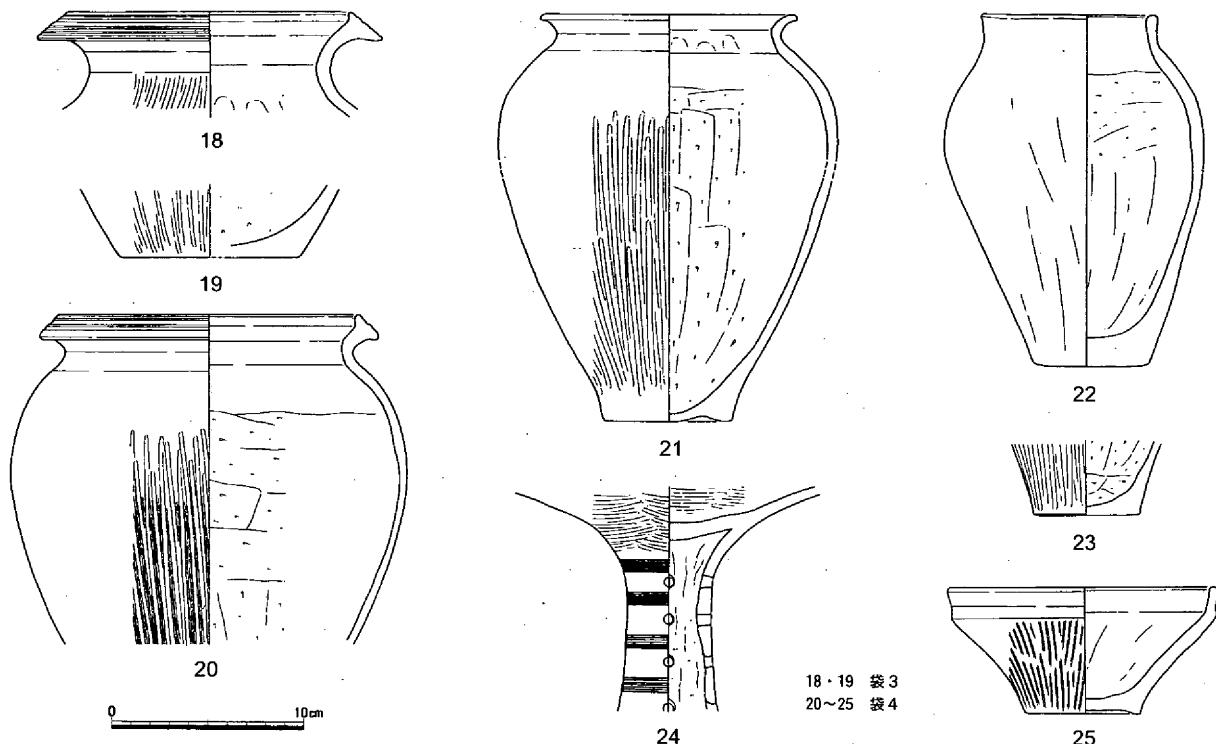
袋状土壙2（第143・144図 図版26）

17区の南半部、堅穴住居1の北約8mに位置する。平面形円形を呈し、検出面での直径1.40m、底面径1.28m、検出面からの深さ0.36mを測る。底面の標高は9.24mで、底面は微高地の基盤である粗砂層に達している。底面上には黄褐色を呈する整地土（第5層）がみられ、水平な床面を作っている。埋土は炭粒を多く含む。

出土遺物は土器の小片が多く、埋没初期に流入あるいは投棄されたものである。11は黄橙色を呈



第145図 袋状土壙3・4（1/30）



第146図 袋状土壙3・4出土遺物（1/4）

する壺で、短頸に短く外傾する口縁部を持つ。胎土は2mm大の砂粒を含む。12・13は橙色を呈する甕で、頸～肩部内面にはハケメや指頭圧痕がみられる。14は口縁端部を丸く收める小形の甕である。15はにぶい橙色を呈する壺で、算盤玉状に張り出した胴部と内湾気味に外傾して立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は僅かに肥厚する。体部外面はハケメ調整の後、肩部に横方向のヘラミガキ、体部下半部に縦方向のヘラミガキが施される。胎土は2mm大以上の砂粒を含む。16・17は橙色を呈する高杯で、口縁端部は外方へ肥厚する。C2は土製の勾玉と考えられる。これらの土器は時期は弥・後・Iの特徴を示す。

(物部)

袋状土壙3（第145・146図）

17区南半、袋状土壙2の南西約1.5mに位置する。検出面での平面形は不整円形を呈し、直径1.39mを測る。検出面からの深さ0.3mで一旦平坦面を作り、さらに南半部の0.9×0.7mの範囲を深さ0.3mほど壁をえぐるように堀窪めている。埋土は一様ににぶい黄褐色砂質土で整地土層はみられなかった。

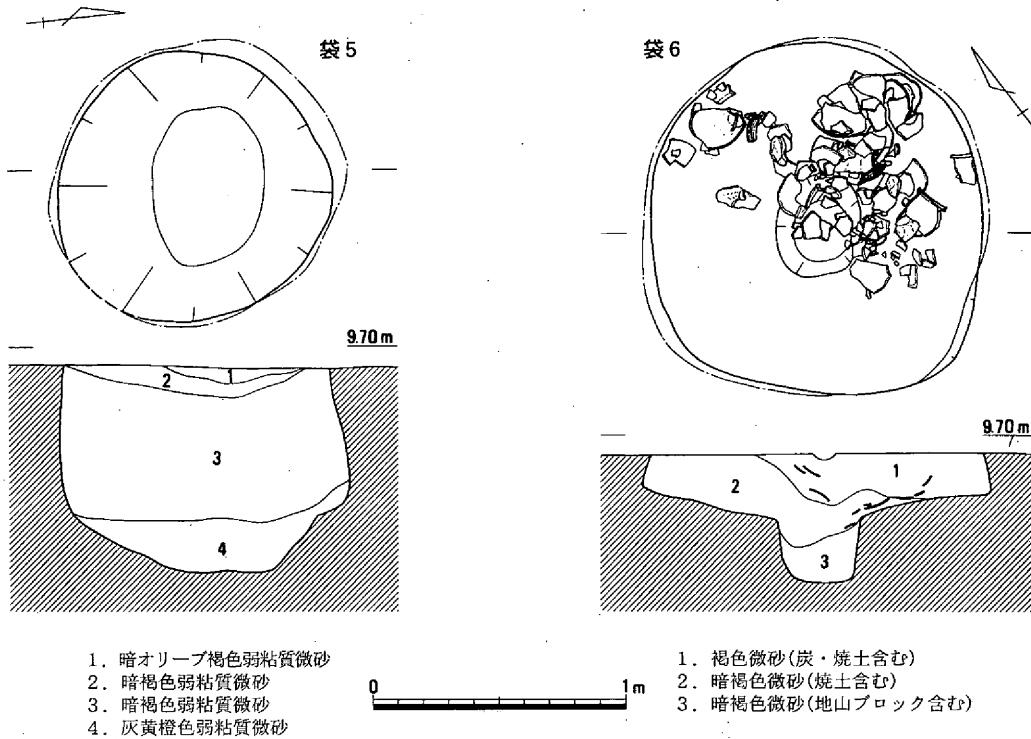
遺物は埋土中から小片の土器が少量出土した。18は橙色を呈する壺で、胎土は2mm大以上の砂粒を含む。19はにぶい橙色を呈する甕の底部で、胎土は2mm大以上の砂粒を含む。弥・後・Iの範疇と考えられる。

(物部)

袋状土壙4（第145・146図 図版23・26）

17区中央部、袋状土壙3の北約6mに位置する。平面形は円形を呈し、検出面での直径1.11m、底面の直径1.09m、検出面から底面までの深さ0.38m、底面の標高9.13mを測る。底面上には厚さ0.15m前後の整地土（第2・3層）を施し、平らな床面を作っている。特に第2層は黄色味がかった粘性の比較的強い貼り床状の土である。

出土遺物は床面付近に遺存し、完形に近いものが多い。床面に設置したものもあるが、壁際の土器は床面からやや浮いており、この袋状土壙廃棄直後に投棄されたものと考えられる。22は壺で口縁



第147図 袋状土壙5・6 (1/30)

部は直立して立ち上がりそのまま丸くおさまる。また底部は分厚い。20・21・23は甕で、21の口縁部は短く外湾し端部は丸くおさまる。24は赤橙色を呈する高杯で、杯部外面には多角形のヘラミガキ、脚柱部外面には条の沈線文と小径の円形透かしが交互に4段確認される。25は橙色を呈する鉢でほぼ完形である。口縁部は直立して立ち上がり、端部は丸くおさまる。外面には粗いハケメが見られる。以上の土器の胎土はすべて2mm大以下の砂粒を含む。遺構の時期はこれらの土器の特徴から弥・後・Iである。
(物部)

袋状土壙5 (第147図)

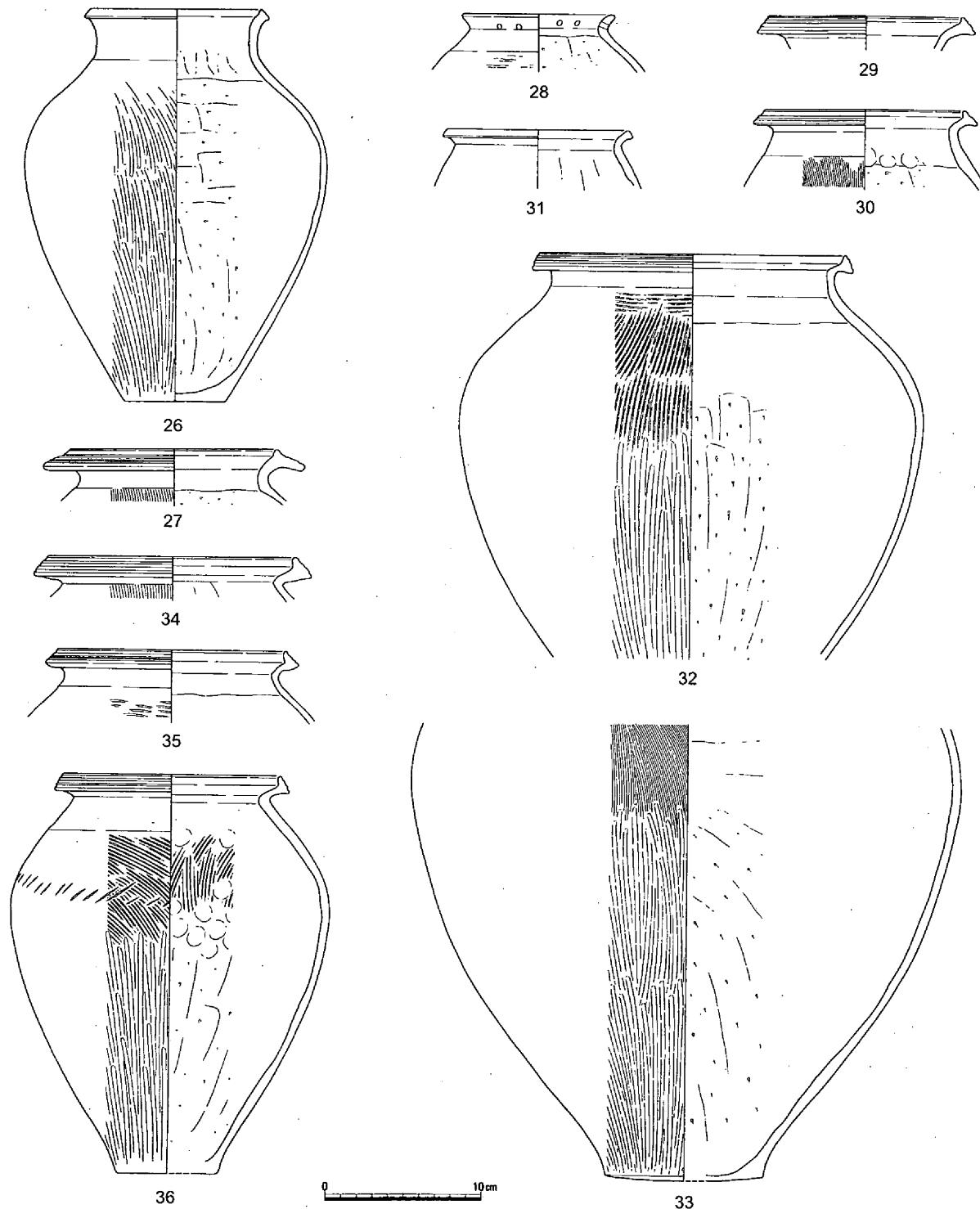
17区中央部、袋状土壙4の北0.8mに隣接する。平面形は円形を呈し、検出面での直径1.09m、底面での直径1.19m、検出面からの深さ0.82m、底面の標高8.80mを測る。埋土最下層（第4層）は黄色味を帯びた弱粘質微砂で整地土の可能性がある。

出土遺物は埋土中から土器小片が少量出土した。時期は弥・後・Iと考えられる。
(物部)

袋状土壙6 (第147~149図 図版23・26)

17区中央部、袋状土壙5の北東約4mに位置する。平面形は円形を呈し、検出面での直径1.45m、底面での直径1.48m、検出面からの深さ0.51m、底面の標高9.40m前後を測る。埋土中には焼土粒や炭粒が含まれる。整地土はみられない。底面中央に直径0.32~0.40m、深さ0.27mの円形の穴が掘られている。柱痕は確認されないが柱穴の可能性があり、簡易な覆い屋を想定できる。

出土遺物は多量の土器片が埋土中に多く含まれていた。26・29は壺、27・30~40は甕、41~43は高杯である。色調はすべて褐色・橙色・赤褐色を呈する。胎土は1mm~2mm大の砂粒を含むものがほとんどである。壺・甕の体部内面の調整は、頸部直下までヘラケズリが及ぶものと、最大径あたりでヘラミガキが止まり、肩部内面はハケメ・押圧のみられるものと2種類が混在する。28の壺口頸部に円孔が2箇所みられる。32・35・36・89の甕は体部外面にタタキ痕が残る。41高杯の口縁部は

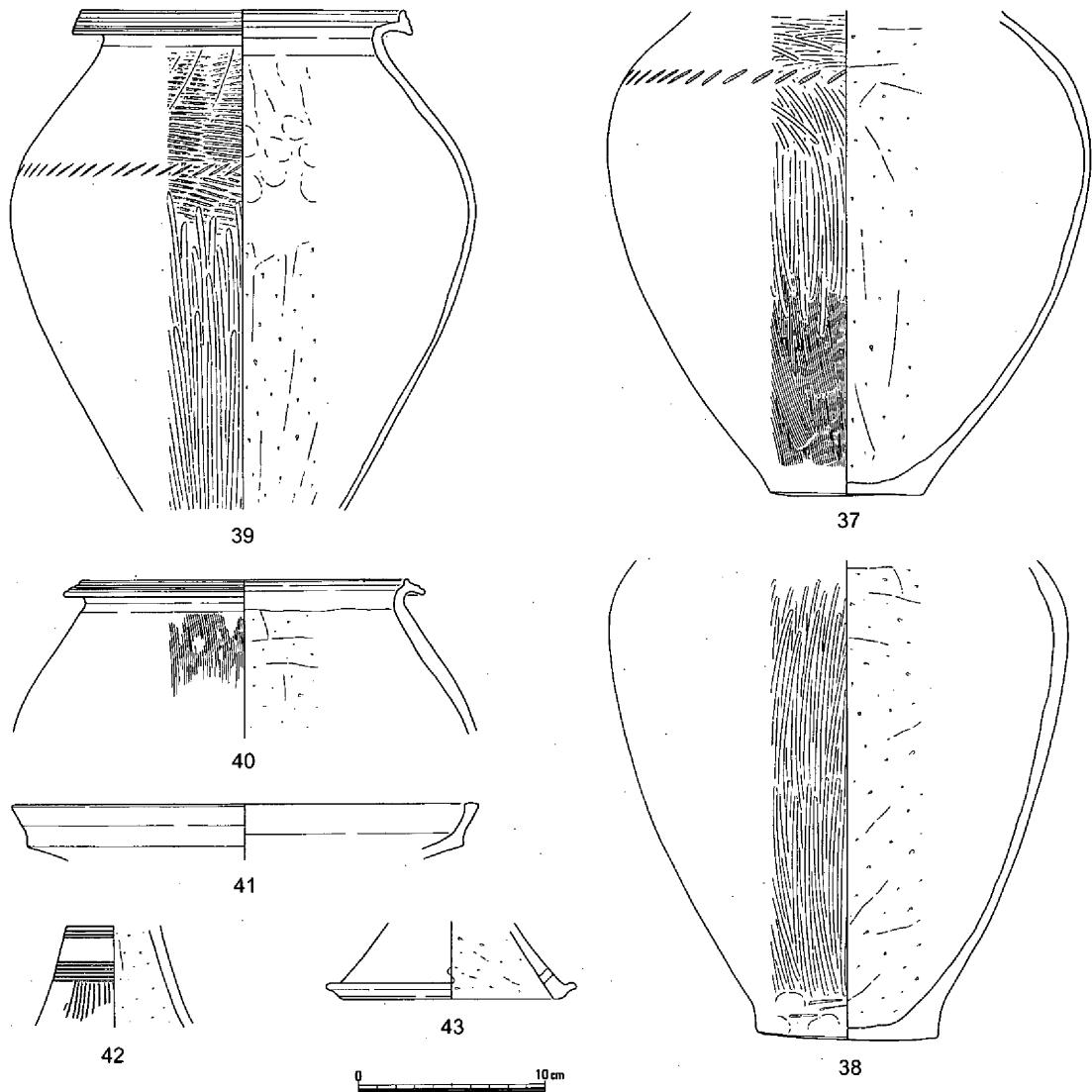


第148図 袋状土壙 6 出土遺物 1 (1/4)

やや外傾して立ち上がり、端部は僅かに拡張する。これらの土器の特徴から袋状土壙 6 の時期は弥・後・I に比定される。
(物部)

袋状土壙 7 (第150図)

17区中央部、袋状土壙 5 の北約 3 m に位置する。西側一部は調査区外になる。検出時においては不正形な平面形を呈しており、いくつかの土壙が切り合っているものと考えた。平面・断面を慎重に観察しながら掘り下げたが、切り合いは全く認められなかった。埋土を全て除去した段階で、底面に



第149図 袋状土壙6出土遺物2 (1/4)

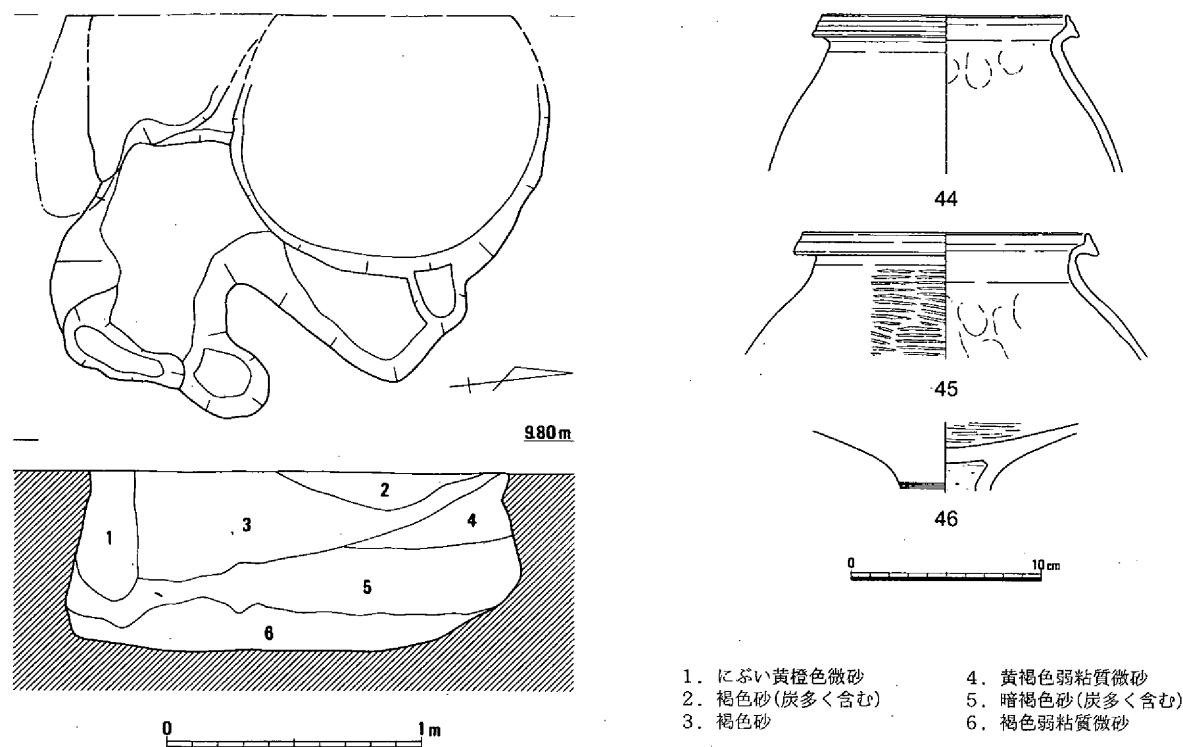
袋状土壙の基部と思われる直径1.16mの円形をした部分を確認した。堀り方上部の東側にある乱れたような落ち込みは、壁面が崩れたものと考えられるが、南側に延びる窪みはその南壁が袋状土壙と同様に下部が上部より広くなっている、自然の崩れとは考えにくい。よって、平面円形の袋状土壙の南側を拡張したものと考えたい。検出面からの深さは0.72m、底面の標高は8.96mを測る。遺物は埋土中から土器小片が出土した。44・45は甕で頸～肩部内面ユビナデの圧痕がみられる。45甕のみ灰白色を呈し、胎土に含まれる砂粒も1mm以下である。肩部外面にはタタキ痕が残る。46は円盤充填の高杯である。これらの土器から袋状土壙7の時期は弥・後・Iと考えられる。

(物部)

袋状土壙8 (第151図)

17区中央部、袋状土壙7の北約2.5mに位置する。円形を呈し、検出面での直径0.84m、底面の直径0.92m、検出面からの深さ0.28m、底面の標高9.32mを測る。底面は微高地の基盤層である粗砂層に達している。底面上にみられる褐～黄褐色粘性砂質土(第3・4層)は上面が少し凸凹するが整地土の可能性がある。遺物は埋土中から土器小片が少量出土した。47は甕の口縁で、赤褐色を呈し、胎土には2mm大の砂粒が含まれる。時期は弥生時代後期前半と推定される。

(物部)

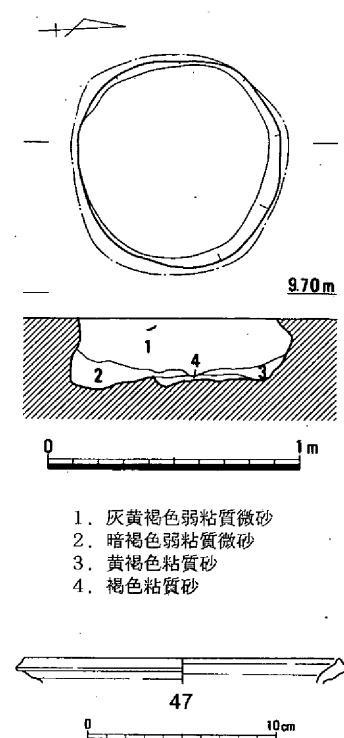


第150図 袋状土壌7・出土遺物(1/30・1/4)

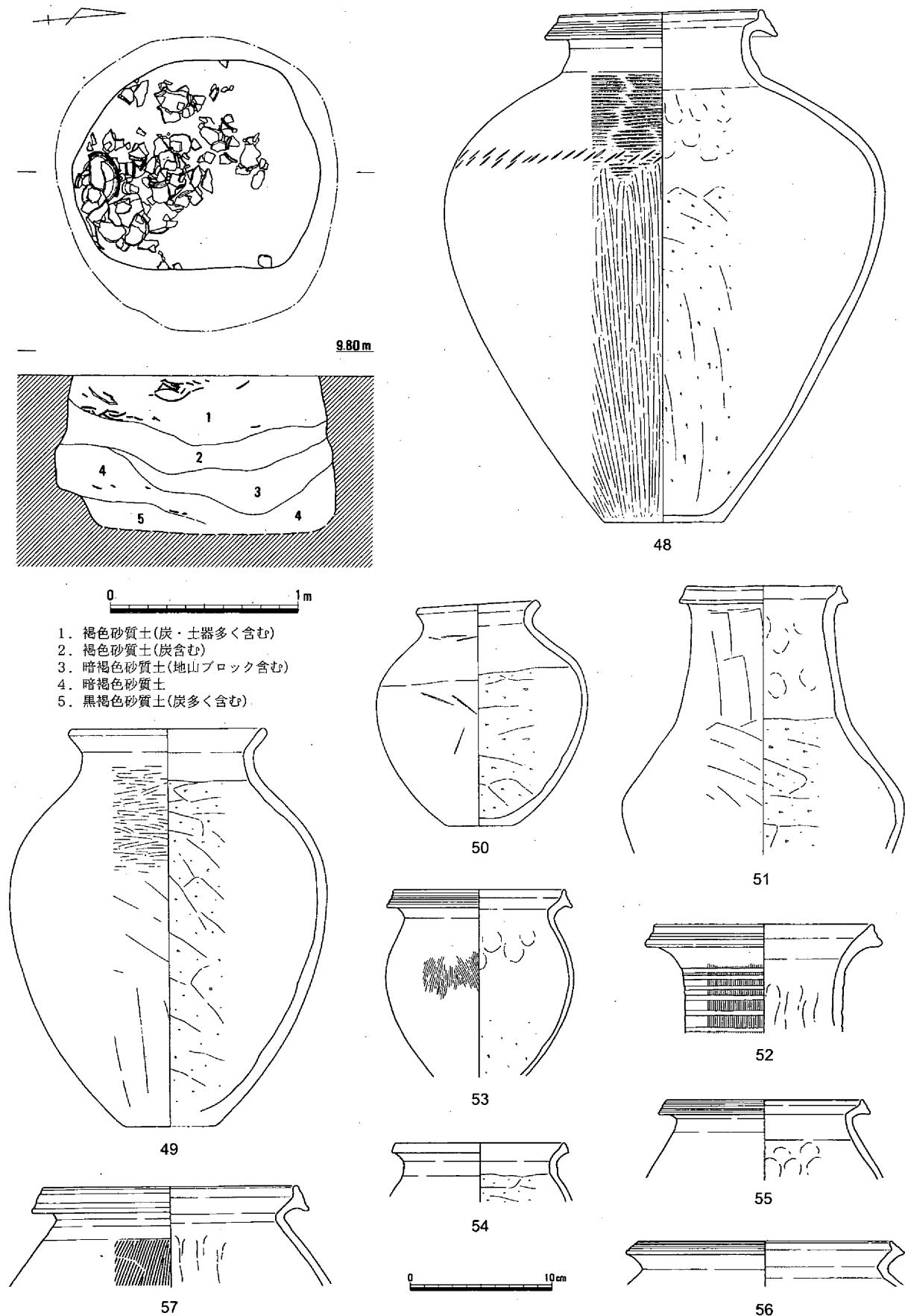
袋状土壌9 (第152・153図 図版27)

17区北部、袋状土壌8の北約11mに位置する。平面形は円形を呈し、検出面での直径1.32m、底面での直径1.56m、検出面からの深さ0.85m、底面の標高8.82mを測る。土壌底部は微高地の基盤層である粗砂層を約20cm掘り込んでおり、湧水が著しく、埋土や底面の状況を精査することができなかった。埋土の第1・5層は炭粒を多く含む。第3層は基盤土ブロックを多く含み壁面の崩落土と考えられる。

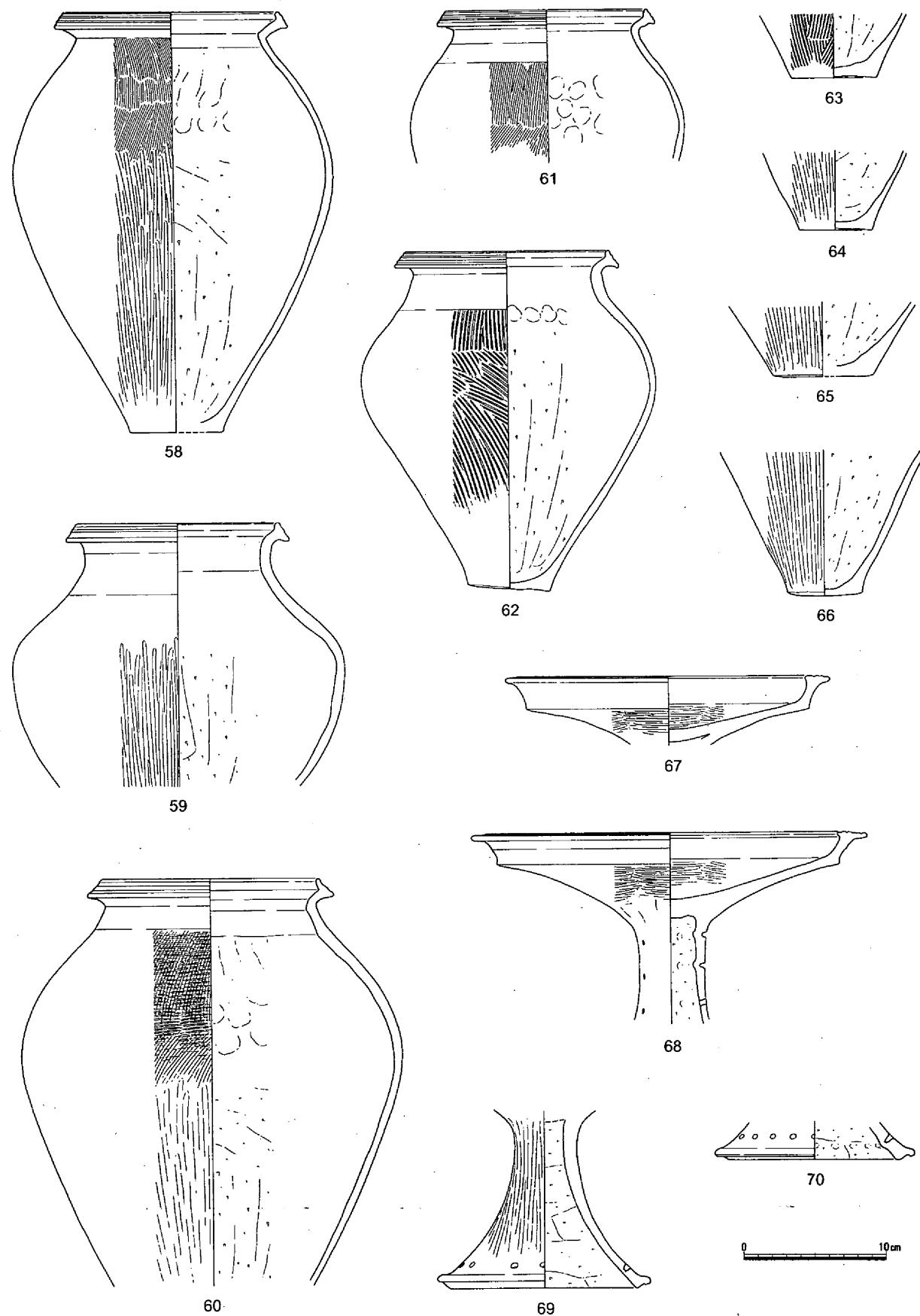
出土遺物は土器片が多量にある。第1層および第4層に包含されていたが層位による土器の形態差は特にみられなかった。48・50～52は壺である。壺48は橙色を呈し胎土には2mm大の砂粒を含む。体部外面は横方向のハケメ調整の後、下半部に縦方向のヘラミガキを施す。内面は底部から最大径あたりまでヘラケズリ、肩部は押圧がみられる。壺50は短く外湾して立ち上がる口縁を持ち、端部は丸くおさまる。胎土は2mm大の砂粒を含む。壺51・52は長頸壺で、51は無文で内傾して立ち上がる頸部に短い口縁部が付く。52はヘラ描き沈線がみられる直立する頸部を持ち、口縁部は緩やかに外湾する。49・53～66は甕である。甕49は肩部外面に横方向のヘラミガキがみられる。灰黄褐色を呈し、胎土は2mm大以上の砂粒を含む。49以外は口縁端部が拡張・肥厚するもので、褐色あるいは橙色を呈し1mm大以上の砂粒を含む。甕54の内面は頸部直下までヘラケズリが施される。その他のものは肩部内面は押圧・ユビナデである。



第151図 袋状土壌8・出土遺物(1/30・1/4)



第152図 袋状土壙9・出土遺物1 (1/30・1/4)



第153図 袋状土壙9出土遺物2(1/4)

また、体部外面の調整は基本的ハケメ調整の後、下半部にヘラミガキを施す。甕60のように肩部にタタキ痕が残るものもある。甕62はヘラミガキがみられないものである。67～70は高杯で、橙色を呈し、2mm大以上の砂粒を含む。口縁端部は外方に大きく拡張し、杯部内外面には多角形のヘラミガキが施される。脚端部も外方に拡張し、脚柱部・脚裾部に小径の円孔がみられるが、貫通していないものが大半である。

袋状土壙9の時期はこれらの土器の特徴から弥・後・Iに比定される。(物部)

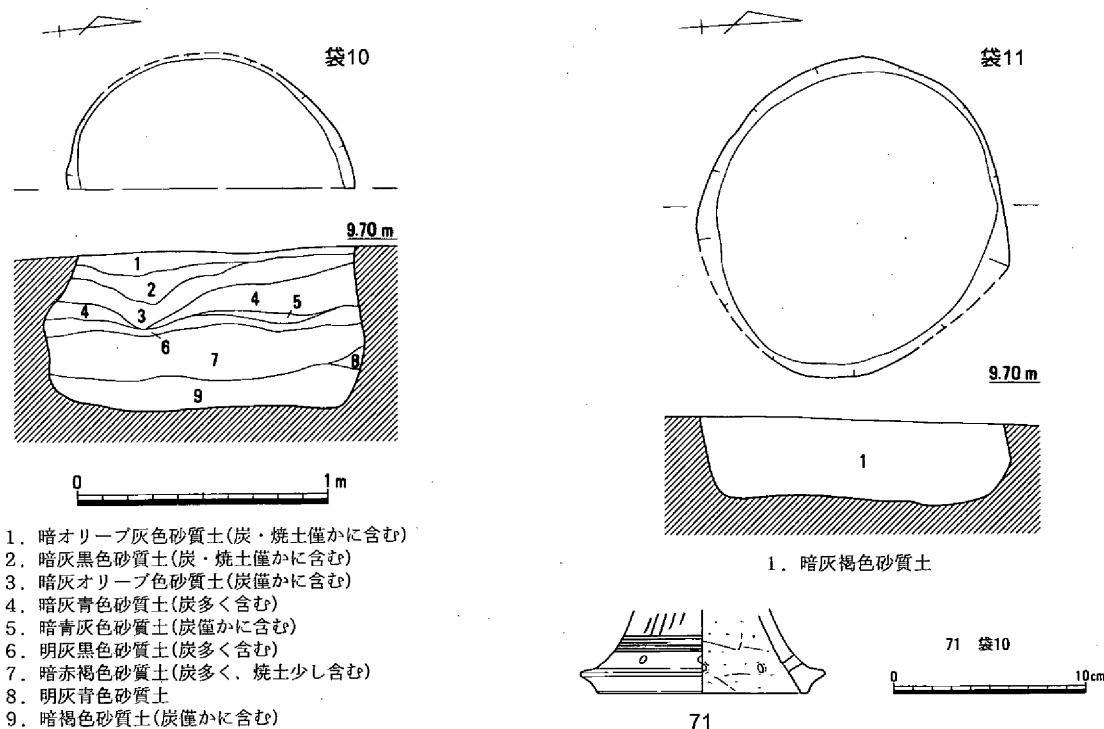
袋状土壙10（第154図）

18区の南東部において検出した。竪穴住居跡2から約7m南東に位置する。検出面での平面形は、東側約1/2が調査区外となるため明確ではないが、おおよそ円形を呈すると考えられる。上面で径1.14m、底面で径1.27mを測り、壁面は内傾する。深さは0.64m残存していたが、上部は後世の削平を受けていると推測する。底面は平坦である。この土壙の断面形は底部付近でやや広がる、いわゆる袋状を呈する。埋土中には部分的に炭を多く、焼土を少量含む。

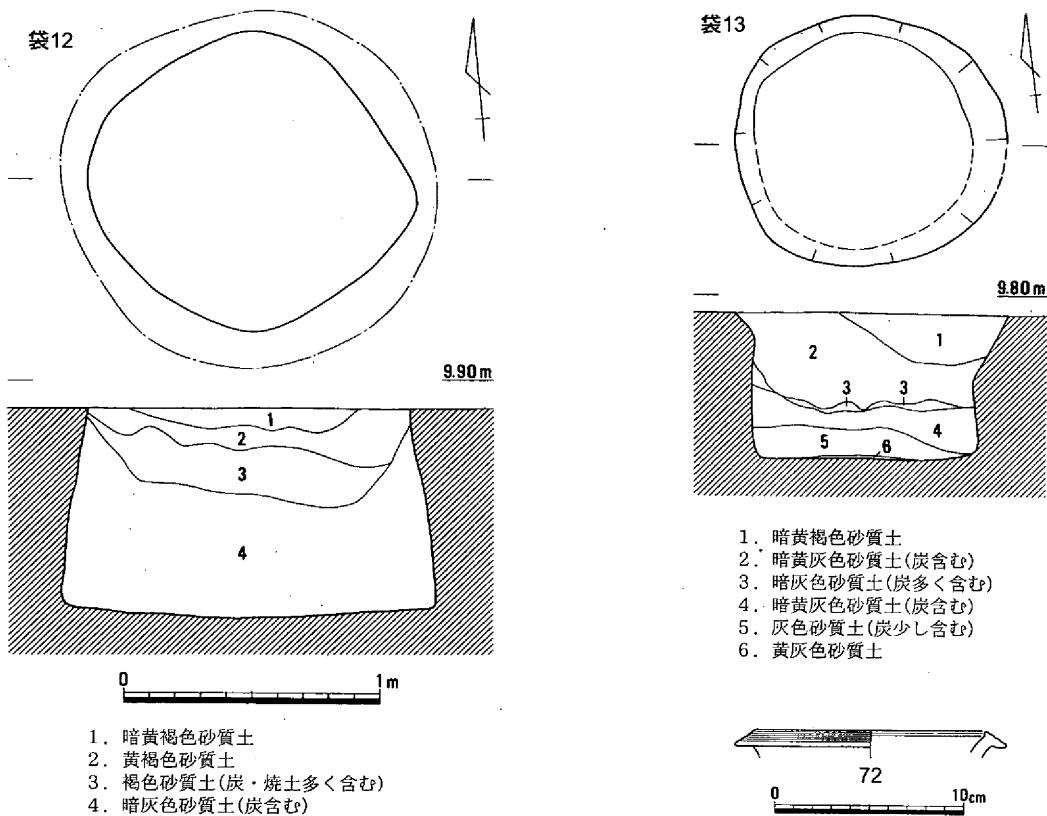
遺物は弥生土器細片が出土した。高杯71は脚部の一部のみ出土した。脚の外面裾部には櫛書き直線文が、そのやや上には篦書き沈線文が施される。櫛書き沈線文のやや下には丸い透かし孔を穿つ。この遺構の時期は弥・後・Iに属すると考える。(重根)

袋状土壙11（第154図）

18区の南東部において検出した。竪穴住居跡2から約3m南東に、袋状土壙10から約4m北に位置する。検出面での平面形はおおよそ円形を呈する。上面で径1.28m、底面で径1.17mを測る。深さは0.36m残存するが、上部は後世の削平を受けていると推測する。底面は平坦である。断面形は底面付近でやや広がる。この土壙の時期は周囲の遺構の時期、埋土より判断すると、弥生時代後期の中に収まると推察するが、土器が出土していないため正確には不明である。(重根)



第154図 袋状土壙10・11・出土遺物（1/30・1/4）



第155図 袋状土壙12・13・出土遺物 (1/30・1/4)

袋状土壙12 (第155図)

2区の中央西側に位置し、袋状土壙13・14とともに約2m間隔で直線上に並んでいる状況で検出された袋状土壙である。これら3基のうち一番南側に所在する。

検出された平面形は $1.29 \times 1.2m$ のやや楕円形である。標高8.95mを測る底面は平坦で、径1.49mのやや円形を呈し、深さは検出面から0.84mである。壁面はハの字状に立ち上がり、断面台形状を呈している。埋土は4層に分けられ、第3層中には炭・焼土を多く含んでいた。

遺物は土器小片とサヌカイト製の剥片が出土している。

時期は、弥・後・Iと考えられる。

(小嶋)

袋状土壙13 (第155図)

竪穴住居3から約1.5m南側で検出された土壙である。前述した袋状土壙12と後述する袋状土壙14の中間に位置している。

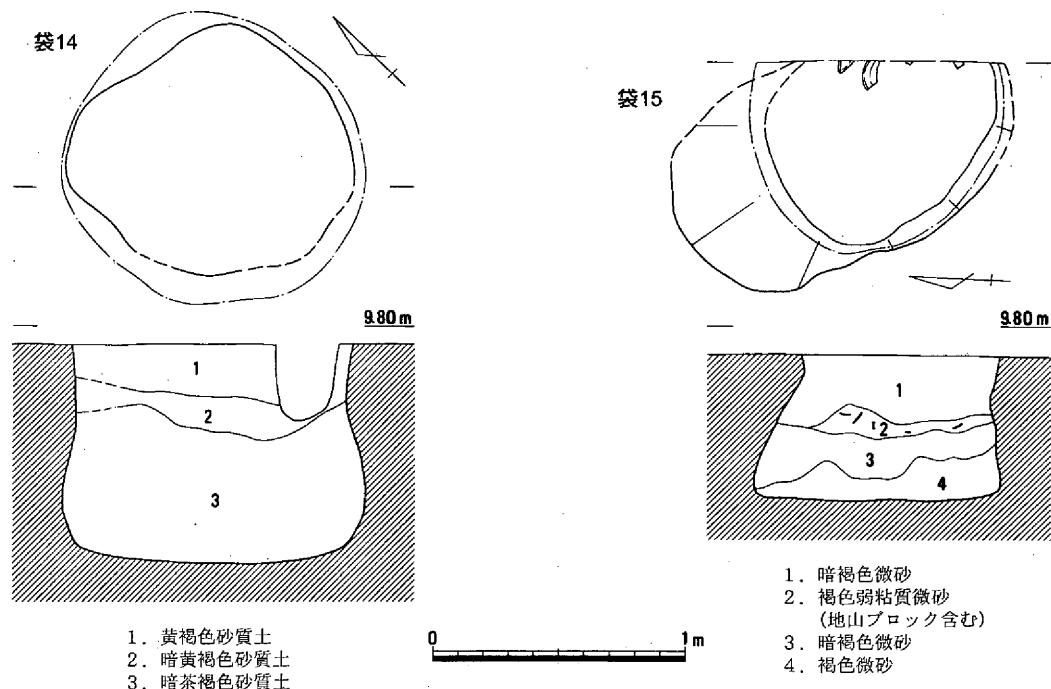
平面形は検出面で径1.08mの円形を呈している。検出面から約0.58mの深さの底面は平坦で、標高9.15mを測る。底面の平面形は径0.87mの円形である。側壁は底面から約0.3m付近まではほぼ垂直に立ち上がるが、それより上部では逆ハの字状に開いている。埋土は6層に分けられ、第3層には炭を多く含んでいた。

出土遺物には弥生土器72があるが、そのほかの土器は小片で図示できるものはなかった。72は口縁部に凹線が3条入った甕である。時期は弥生時代後期に比定される。

(小嶋)

袋状土壙14 (第156図)

直線上に並んでいる袋状土壙のうち一番北側に位置し、竪穴住居3の西側に隣接して検出された。検出面の平面形は $1.14 \times 1.0m$ を測る不整形な円形を呈しており、底面形は径約1.0mの円形であ



第156図 袋状土壙14・15 (1/30)

った。検出面から0.88m低い底面はやや凹状を示し、一番低いところで標高8.85mを測る。断面形はややフラスコ状を呈している。

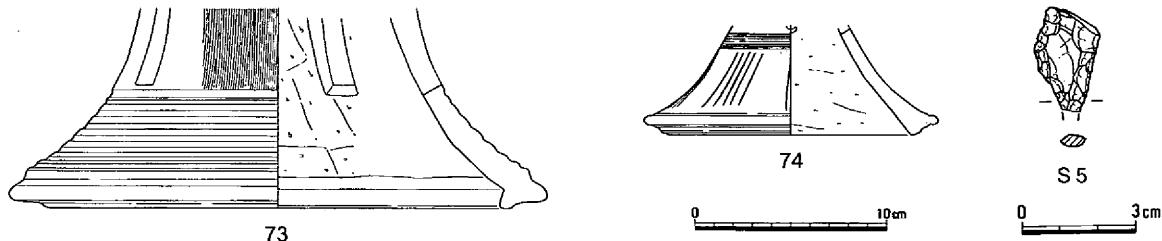
時期は土器が少量出土しているのみであるため明確に特定できないが、埋土等の状況から弥生時代後期と想定される。
(小嶋)

袋状土壙15 (第156・157図 図版23)

3区中央部、袋状土壙14の北東約20mに位置する。東壁沿いで検出され、堀り方の1/3は調査区外になる。また、堀り方の北西部は浅く崩れている。平面形は円形を呈し、検出面での直径は0.95m、底面の直径は1.03m、検出面からの深さ0.58m、底面の標高9.11mを測る。

出土遺物は第2層に包含されており、埋没過程で投棄あるいは流入したものと考えられる。土器・石器がある。73は浅黄橙色を呈する器台で、裾部外面には凹線文がみられ、筒部には長方形の透かしが4方向に穿たれている。胎土には2mm大以下の砂粒が含まれる。74は橙色を呈する高杯で、裾部には縦方向の沈線文が8単位みられる。脚註部には小径の円形透かし孔がある。S5はサヌカイト製の石錐である。

土器の特徴から袋状土壙15の時期は弥・後・Iと考えられる。
(物部)



第157図 袋状土壙15出土遺物 (1/4・1/2)

(3) 土壙

土壙1 (第158図)

2区の南西端で検出した。長軸2.61m、短軸0.92mを測る不整形な橢円形を呈している。検出面からの深さは0.25mを測り、断面形はやや船底形を呈している。

出土遺物には弥生土器75・76やサヌカイト製の石鏃・剥片などがある。75は壺の頸部で、内面は頸部の中程までヘラミガキが施されている。76は口縁部下に櫛描沈線を施し、その下には刺突紋が一列巡らされている甕である。時期は弥・中・IIである。
(小嶋)

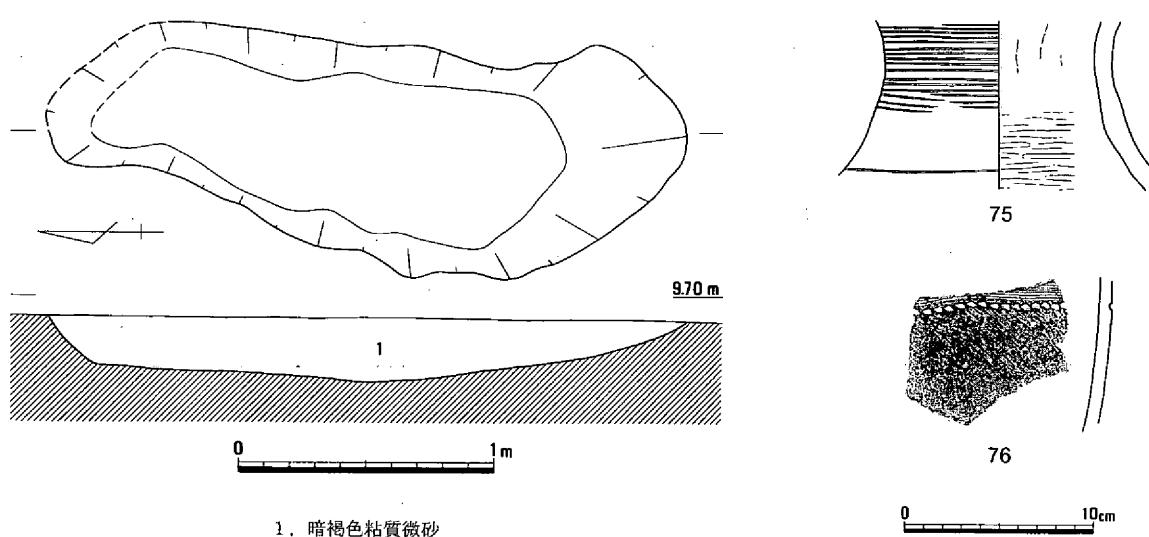
土壙2 (第159図 図版27・28)

2区と3区の境目に所在している。規模は、北辺が調査時の側溝により削平を受けているが、径1.58mの円形を呈していたと思われる。検出面から0.28mの深さを測る底面は平坦で、径約1.2mの円形を呈している。壁面は若干上方に向かって開いており、調査時の所見等から貯蔵穴の可能性も指摘できる。

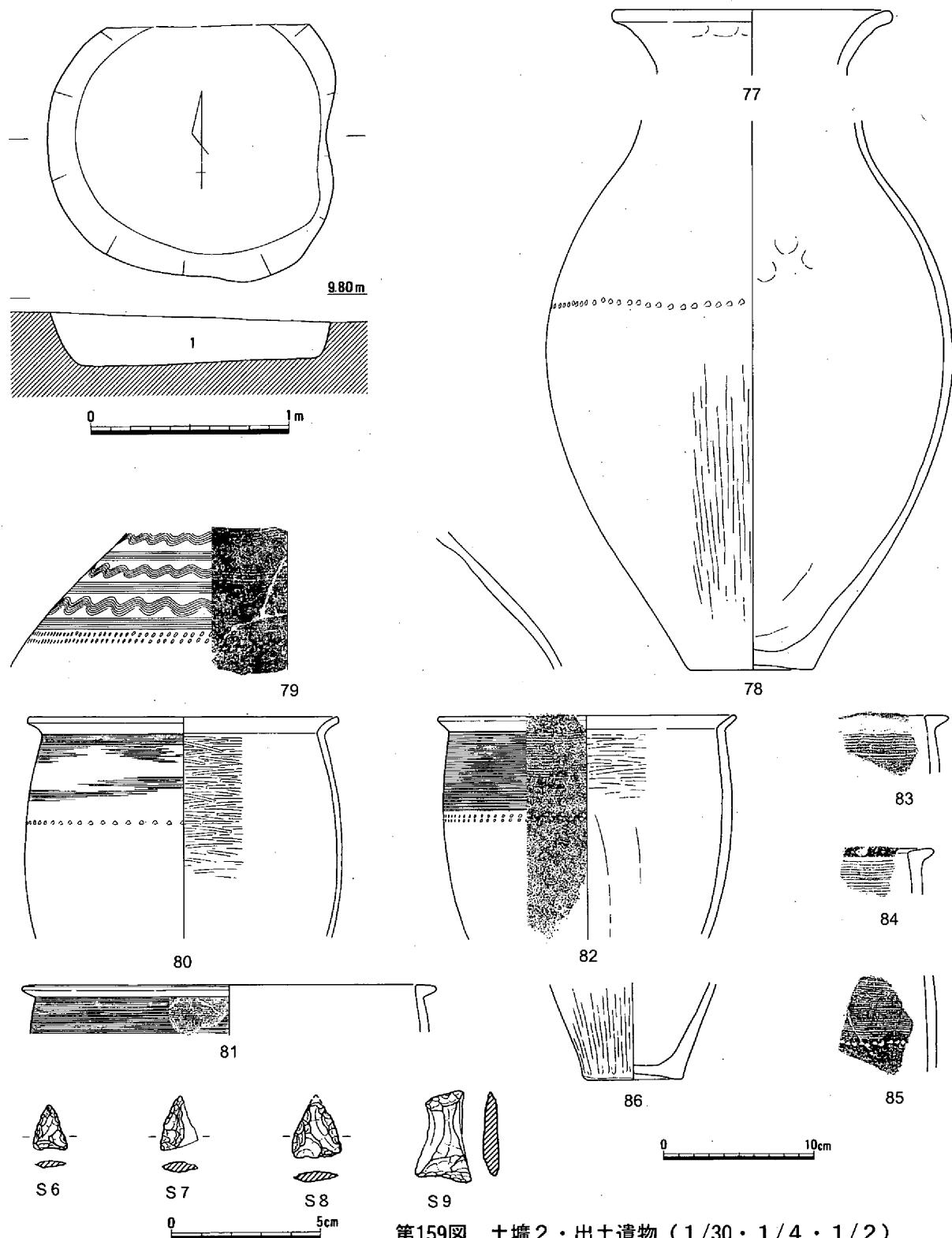
出土遺物には弥生土器77~86や石器S6~S9などがある。79の壺は、肩部に平行櫛描文と櫛描波状文を交互に配し、下端に刺突文が施されている。78の甕は、体部に一列の刺突文が巡らされている。80・82の甕は口縁部をくの字状に折り曲げ、口縁部下に櫛描沈線、その下に刺突文を配し、体部内面にはヘラミガキを施している。81・83・84は口縁部を逆L字形に折り曲げ、口縁部下に櫛描沈線が施されている甕である。石器はいずれもサヌカイト製で、石鏃S6~S8、楔形石器S9がある。この土壙の時期は、弥・中・IIと思われる。
(小嶋)

土壙3

4区の南半、土壙2の北約33mに位置する。平面形は橢円形を呈し、長軸1.29m、短軸0.84m、検出面からの深さ0.66mを測る。北西壁に幅0.2m程の段を設けている。埋土は周囲から土が流入した状況がうかがわれる。第2・4層は多量の焼土粒と炭粒を含んでいる。遺物は埋土中から土器の小~細片が約50点出土した。それらの土器片は赤褐~褐色を呈し、胎土は2mm以上の砂粒を多く含む。多条の平行櫛描文や斜め外方に屈曲する短い口縁部がわずかにみられることから、弥生中期前半に比定される。
(物部)



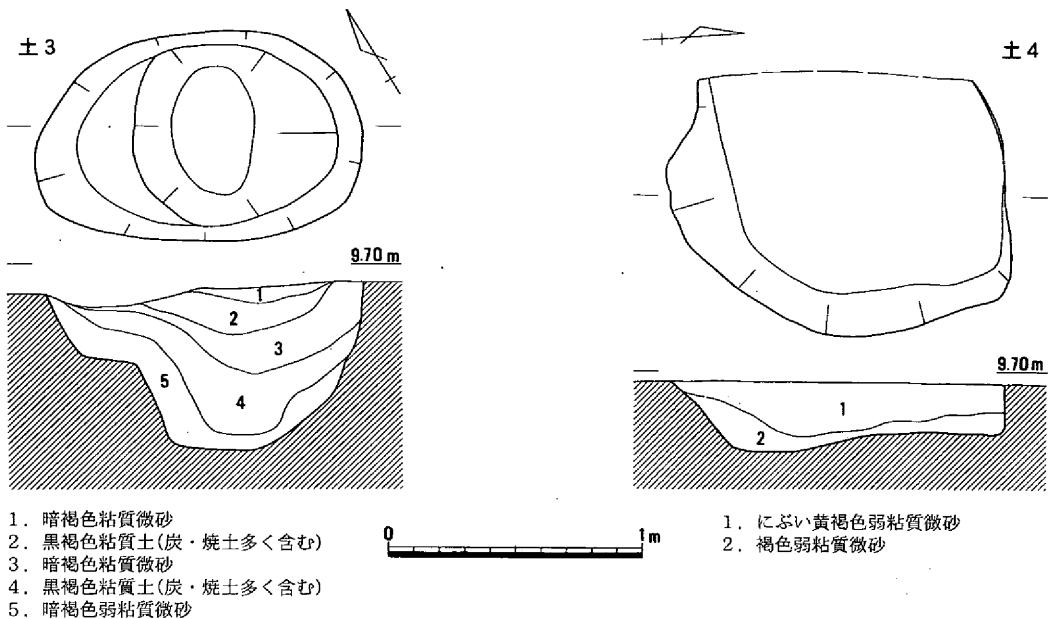
第158図 土壙1・出土遺物 (1/30・1/4・1/2)



第159図 土壌2・出土遺物 (1/30・1/4・1/2)

土壤4 (第160図)

土壌4は17区南半に位置し、袋状土壌3の北西に隣接する。掘り方の西端部は調査区外になる。平面形はやや歪んだ円形を呈し、検出面での直径1.44m、底面の直径1.05m、検出面からの深さ0.28m、底面の標高9.39mを測る。深さが浅く土壌として取り扱ったが、袋状土壌の基底部の可能性がある。遺物は土器小片が僅かに出土したのみである。時期を決めがたいが、周辺の袋状土壌群と一連のものと思われ、弥生時代後期前半ととらえたい。(物部)



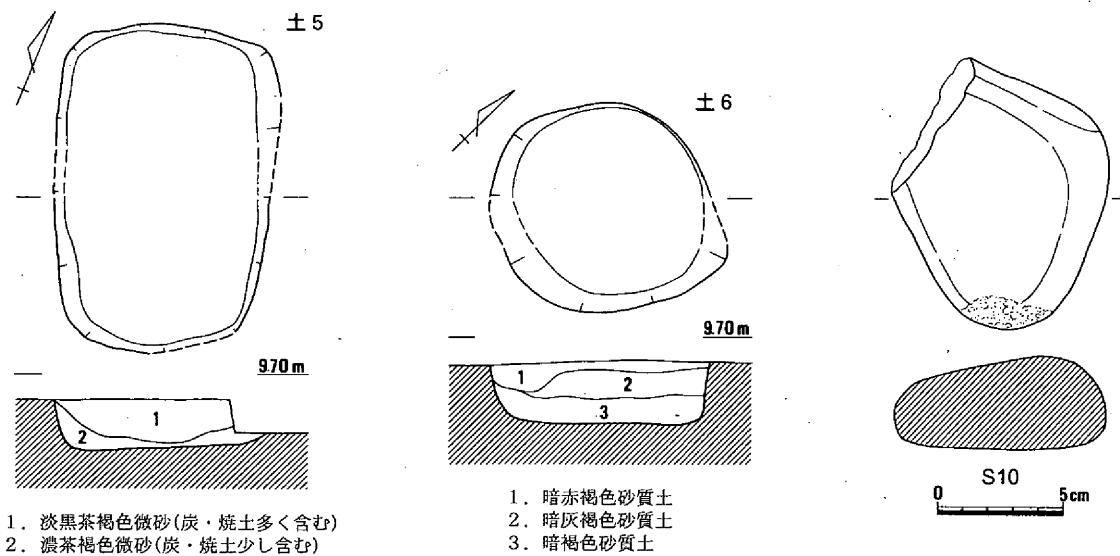
第160図 土壌3・4 (1/30)

土壌5 (第161図)

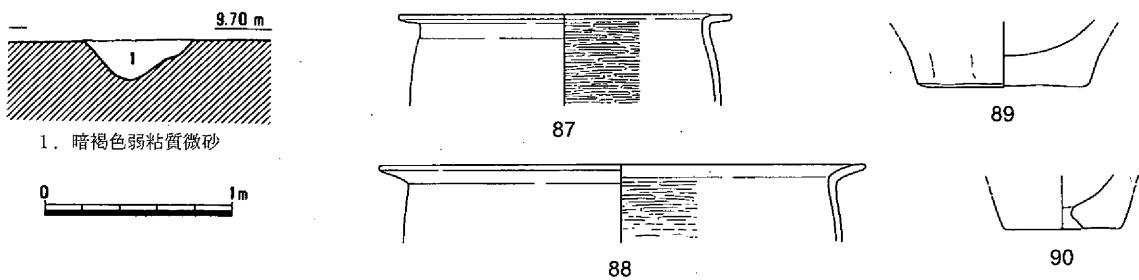
2区の南よりで検出された土壌である。平面形は長方形を呈し、長さ1.31m、幅0.88m、検出面からの深さは0.2mを測る。埋土中には炭や焼土が含まれるが、被熱の痕跡は認められなかった。土壌内からは弥生土器片および石器が出土している。S10は敲石である。凝灰岩製で、一部欠損している。残存長10.7cm、残存幅8.6cm、厚さ3.8cm、重さ420gを測る。時期は出土した土器等から弥・後・Iであると推測できる。
(金田)

土壌6 (第161図)

2区の中ほどで検出された土壌である。平面は円形をなす。長径0.97m、短径0.84m、検出面からの深さは0.25mを測る。土壌の形態から貯蔵穴の可能性も考えられる。土壌内から土器片が若干出土している。これらの遺物等からこの土壌6の時期は弥生時代後期であると推測できる。
(金田)



第161図 土壌5・6・出土遺物 (1/30・1/3)



第162図 溝1・出土遺物（1/4）

(4) 溝

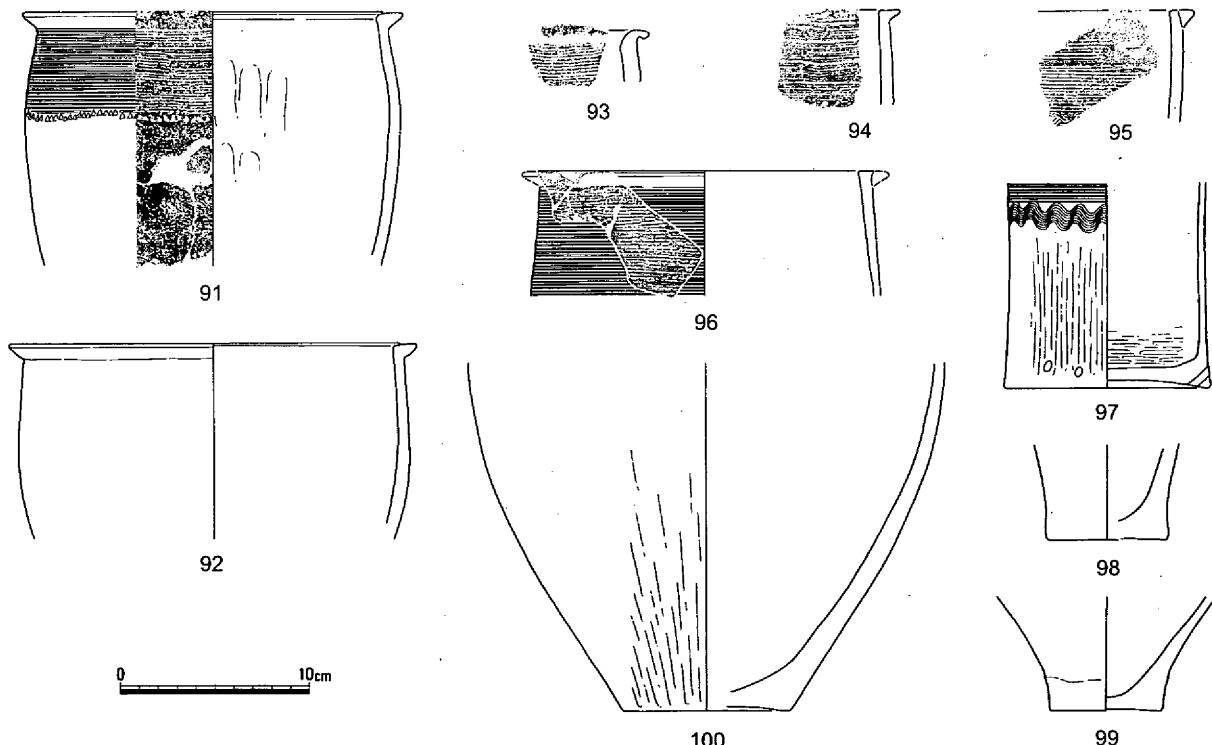
溝1（第162図）

溝1は3区の南半に位置する。検出長4.38m、検出幅0.6m、検出面からの深さ0.21mを測る。南東-北西に主軸をとる。北西部は竪穴住居6によって削平されており、南東部は若干南に向きを変えながら底面の標高を上げ途切れる。遺物は埋土中から土器片が少量出土した。87~90は甕で、赤橙~黄橙色を呈し、胎土には2mm大以下の砂粒を含む。口縁部は外方に屈曲し、肩部はあまり張り出さず無文である。底部は厚く、穿孔のみられるものがある。時期は弥・中・Ⅱ初頭と思われる。（物部）

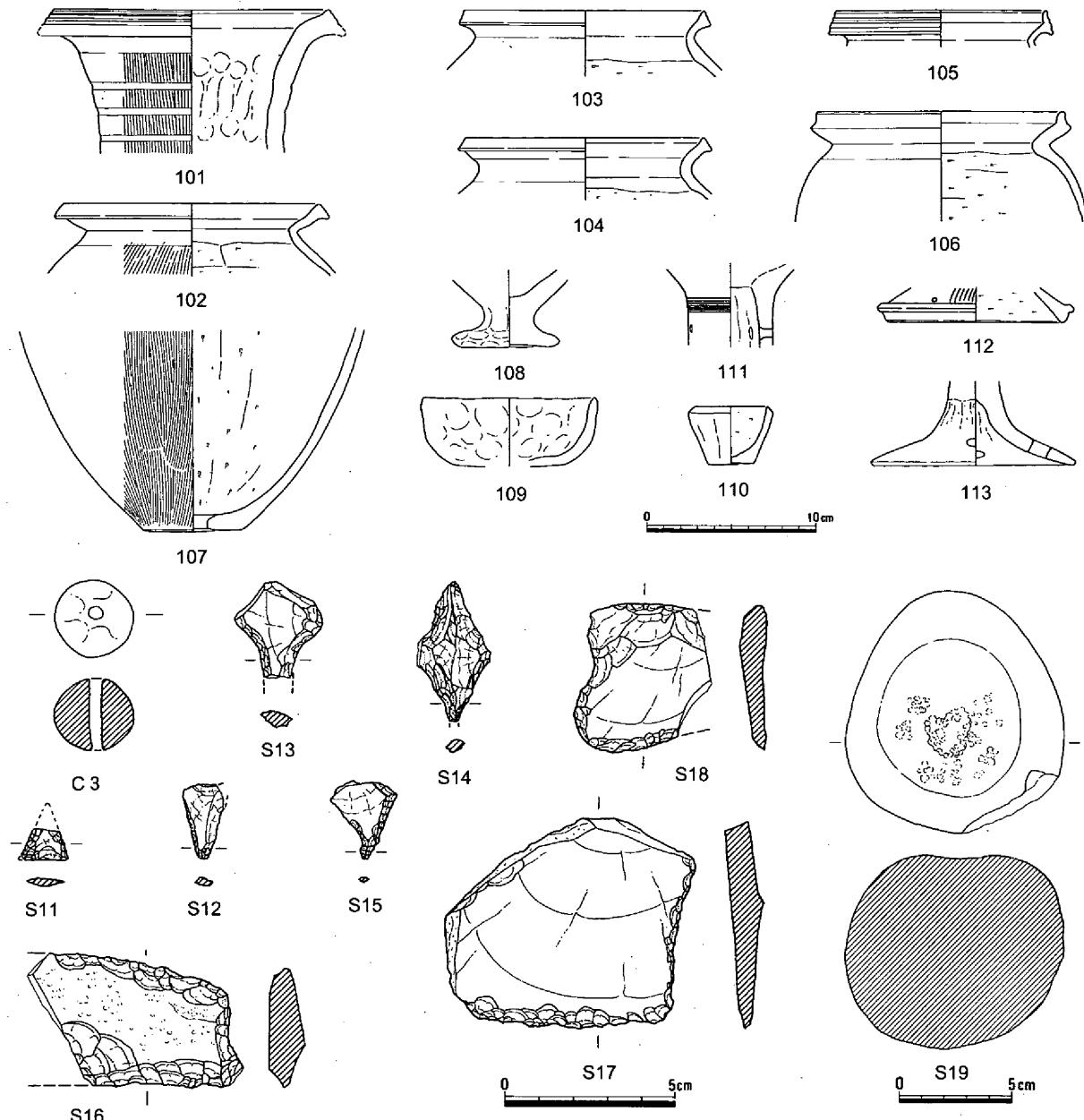
(5) 遺構に伴わない遺物（第163・164図）

遺構に伴わない遺物には、弥生土器のほか、石器や土製品がある。これらは遺構検出段階で出土したもののか、時期の異なる遺構へ混入したものも含まれている。

91~96は倒L字形の口縁部をもつ瀬戸内型甕で、口径20.0cmを測る91では口縁下に多条の櫛描沈線をめぐらし、その下端には刺突文を施している。97はコップ形土器で、外面は櫛描文で飾り、内面をヘラミガキで仕上げている。これらの土器は器表の風化が甚だしく、なおかつ砂粒の多い胎土から一看して後期の土器と区別できる。



第163図 遺構に伴わない遺物1（1/4）



第164図 遺構に伴わない遺物2(1/4・1/2)

101は長頸壺で、径15.8cmを測る口縁部は肥厚して外傾する面をなし、上方にむかって広がる頸部は外面をハケメで調整したのち数条の凹線をめぐらす。甕102～106は口縁部が肥厚して外傾する面をなすものが多いが、105のように上方に拡張して凹線を飾るものもある。外面はナデないしハケメ、内面はヘラケズリで調整しており、107の底部には穿孔が認められる。高杯は一体づくりの111・112と別づくりの113がある。108・109は粗製の鉢で、内外面にユビオサエの痕を顕著に残す。

C3は径2.3cmの土玉で、重量は9.8gある。石器にはサヌカイト製の打製石器S11～18と円礫を利用した凹石S19がある。S11は平基式の石鏃で、先端を欠いているが長さ1.7cm、幅1.3cm、重量0.5gほどに復元される。石錐のうちS12・15は、長さ2cm、厚さ0.4ほどの三角形をなす剥片の先端側面を調整して刃部を作り出している。S16は幅4.2cmの石包丁で、折損した後スクレーパーとして再利用している。S18は不定形の石器で、側面に抉りを設けている。S19は凹石で、長さ10.7cm、幅9.6cm、重量1.28gを測る玢岩の円礫を利用したものである。

(龜山)

第3節 古墳時代の遺構・遺物

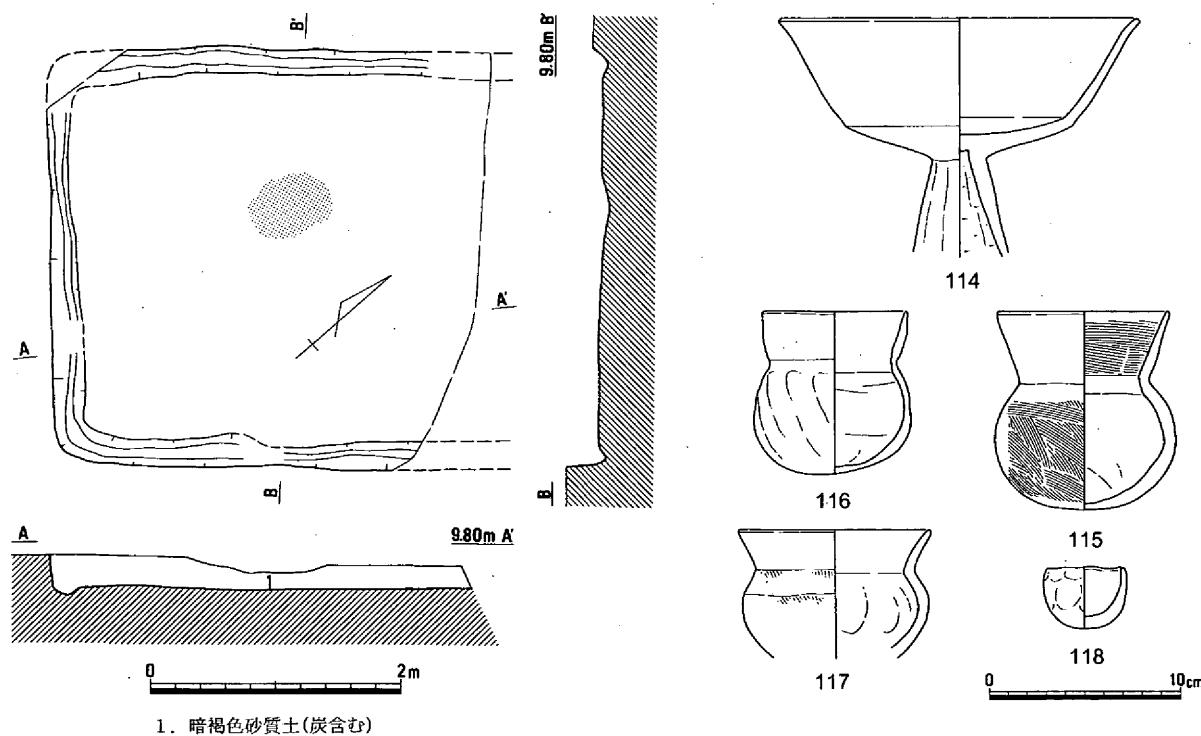
(1) 壇穴住居

壇穴住居4 (第165図 図版28)

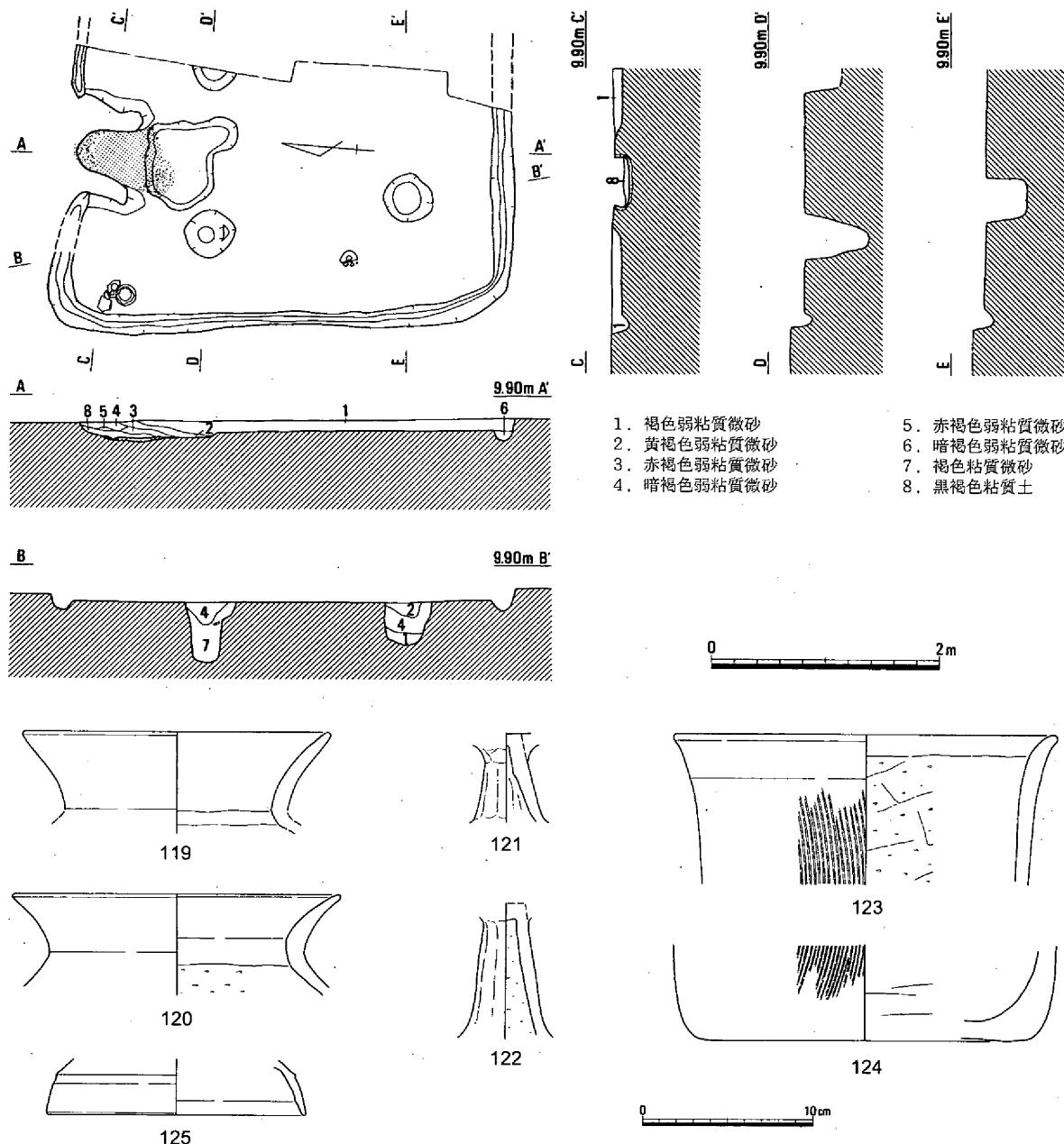
4区の北東隅に位置する隅丸方形の壇穴住居で、中世の溝11に上面の一部を、溝12に北東部を削平されている。壇穴住居4の短辺は3.34mであるが、長辺は残存長で3.52mを測る。検出面から床までの深さは約0.3mである。主軸はN-49°-Wである。床面の周辺には幅約20cm、深さ5cmの壁体溝がめぐっており、床面中央のやや北西よりで長径約0.65m、短径約0.45mの範囲で焼土面を検出した。なお、柱穴は精査したが検出することができなかった。壇穴住居内には炭を若干含む暗褐色砂質土が堆積しており、中から土師器片および鉄器が出土した。114は高杯である。115~117は壺である。118は手捏ね土器で、口径4.0cm、器高3.3cmを測る。壇穴住居4は古・中・Iに比定できる。(金田)

壇穴住居5 (第166図 図版24)

壇穴住居5は3区北半の東壁沿いで検出された。造り付けカマドを持つ方形の住居で、東部1/4は調査区外になる。南北4.05m、東西2.56m以上、検出面からの深さ0.1m、床面の標高9.58mを測る。主軸はN-7°-Wでほぼ南北である。壁体溝が確認され、カマドの部分で途切れる。カマドは北辺のほぼ中央に位置し、基部が良好に遺存した。カマド内部はよく被熱し赤色に変色しおり、底面中央部は被熱硬化がみられる。また、支柱石を立てたと考えられる浅い小さな穴も確認されたが、支柱石は検出されなかった。被熱面直上には厚さ5cm前後の粘土化した炭の堆積層がある。カマド前面部は深さ4cmほど浅く窪む。柱穴は3基検出され、4本柱と推定される。直径約0.4m、深さは0.45m前後である。出土遺物は、須恵器125と土師器119~124および鉄滓がある。119は壺、120は甕であり、どちらも外湾気味に外傾して長く伸びる口縁部を持ち、胎土に3mm以上の砂粒を含む。121・122



第165図 壇穴住居4・出土遺物 (1/60・1/4)

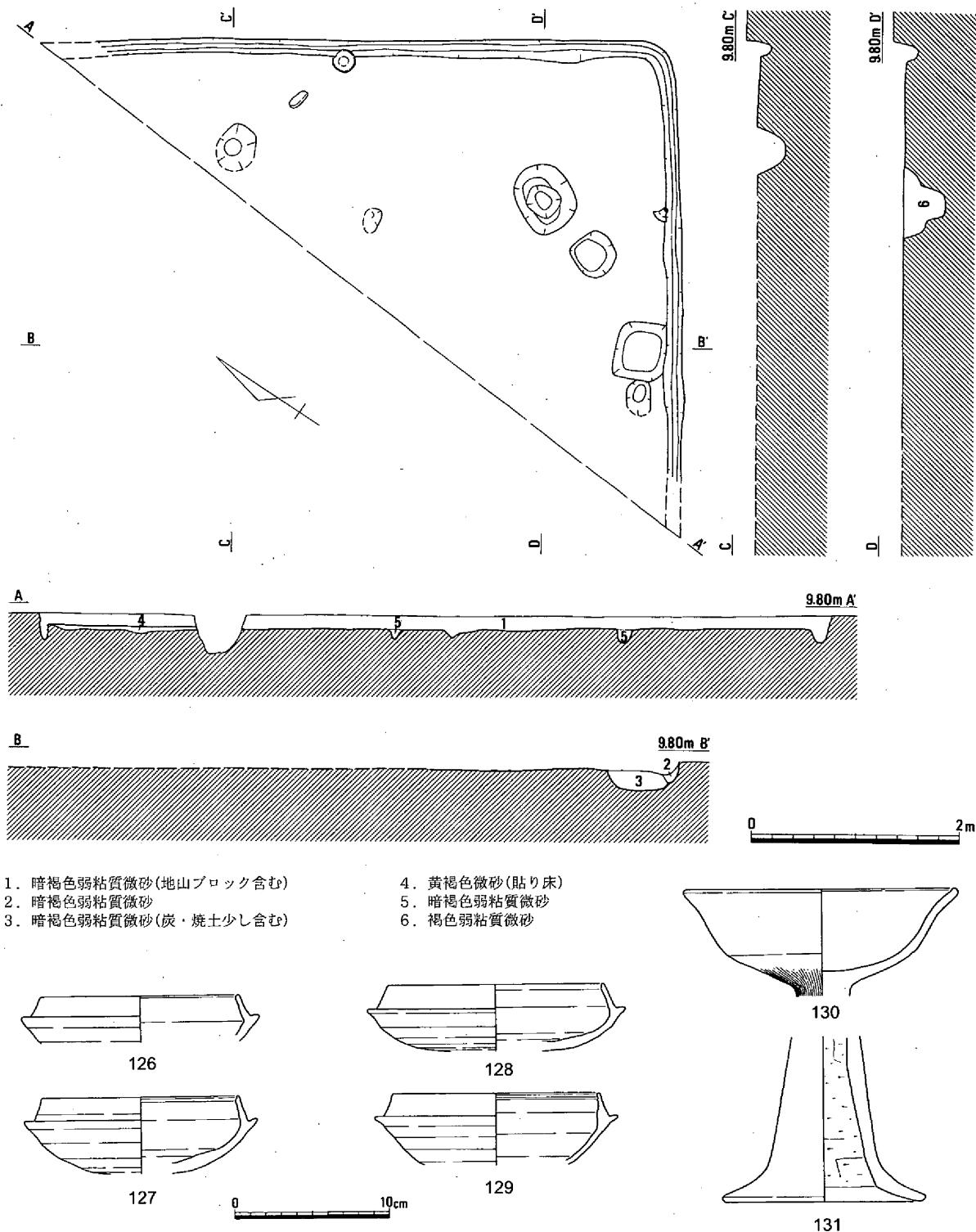


第166図 壇穴住居5・出土遺物 (1/60・1/4)

は高杯、123は瓶である。124は器種不明で胎土は3mm大前後の砂粒が非常に多い。内面底部は強い横ナデ調整である。125は須恵器杯蓋で、口径14.8cm、灰色を呈する。鉄滓は重さ0.05gの鍛冶滓微小片で床面直上の埋土中から2点出土した。時期は古・後・Iと推定される。
(物部)

壇穴住居6 (第167図 図版24)

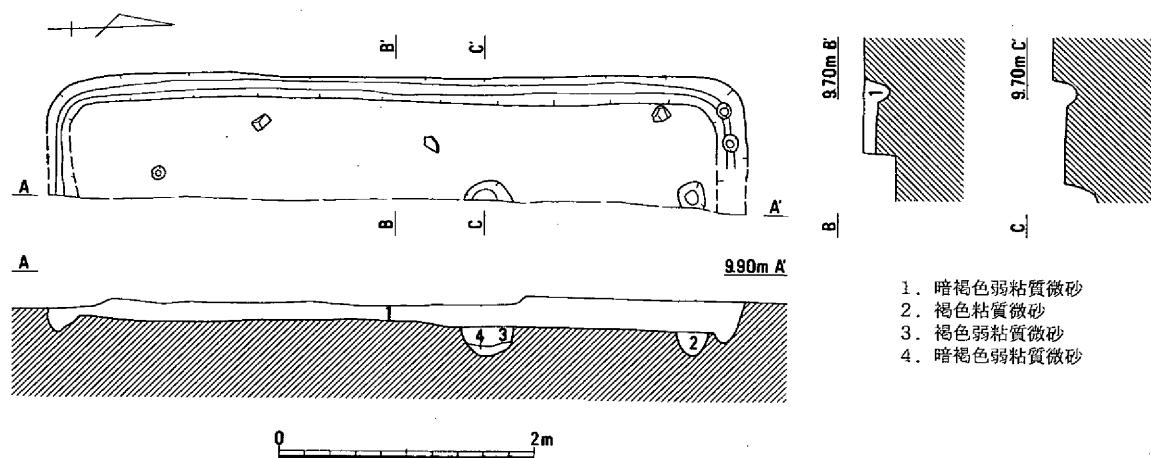
壇穴住居6は3区中央、壇穴住居5の南西約5mに位置する。住居の西半分は調査区外になる。壁体溝を持つ方形の住居で、検出値6.14m以上×4.82m以上、検出面からの深さ0.1m前後、床面の標高9.56mを測る。柱穴は2基確認され、4本柱と推定される。カマドは検出されていないが、調査区外の住居北西辺か南西辺に存在する可能性がある。また南東辺中央部には0.57×0.49m、深さ0.20mの方形の土壙がある。断面ではこの方形土壙の埋土を壁体溝が切っているように観察されたが、明瞭ではなかった。住居底面上の一部、溝1との重複部分に黄褐色微砂の貼り床がみられた。出土遺



第167図 竪穴住居6・出土遺物 (1/60・1/4)

物には須恵器126～129と床面出土の土師器130・131、および鉄滓がある。須恵器は全て蓋杯の杯身で口縁端部内面には僅かに段が残る。130・131は土師器高杯で明赤褐色を呈する。鉄滓は床面および床面直上の埋土中から180片程出土し、大半は1g以下、大きなもので33g、小さなものは0.01g以下の微小なものである。30cm四方の方眼を組み土壤を採取、水洗した。鑑定の結果、楕形鍛冶滓、鍛冶滓、鉄片などを含む。精鍊滓の可能性のあるものも若干みられたが断定はしがたい。周辺に鍛冶炉が存在したことは間違いない。時期は古墳時代後期前半と考えられる。

(物部)

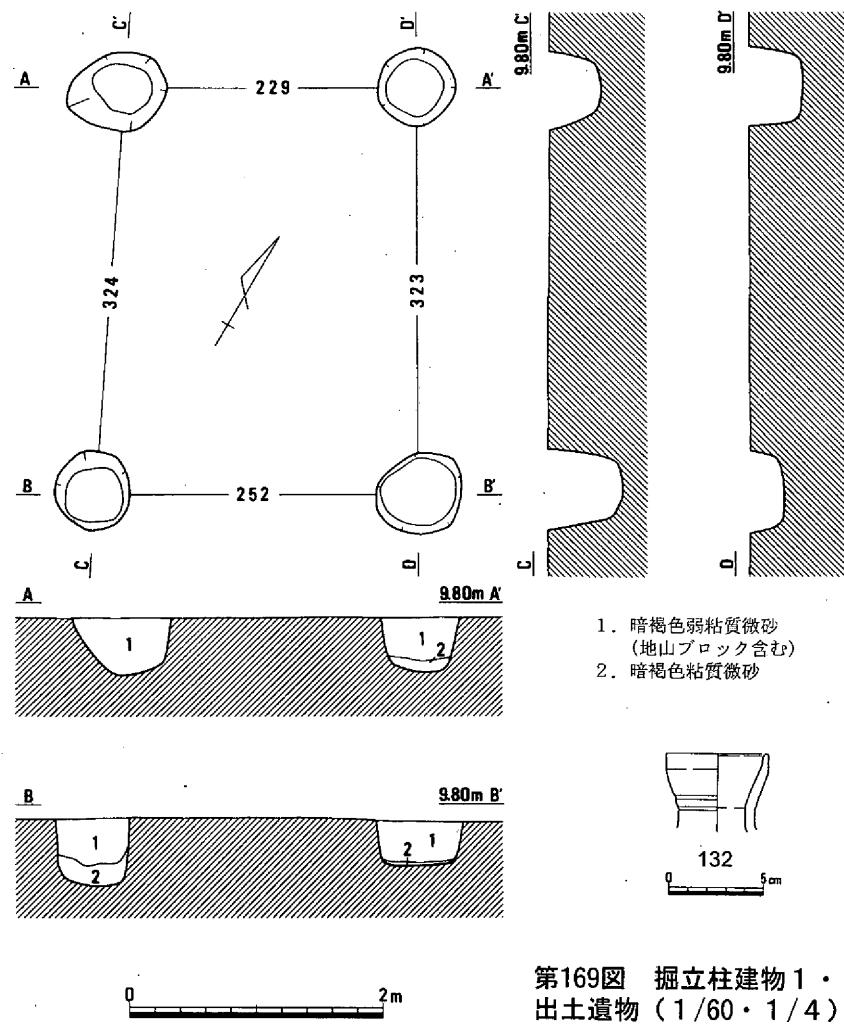


第168図 壇穴住居7(1/60)

壇穴住居7(第168図)

壇穴住居7は4区南端、壇穴住居6の南約5.5mに位置する。住居の大半は調査区外になる。南北5.49m、東西1.0m以上、検出面からの深さ0.1m前後、床面の標高9.60mを測る。壁体溝を持つ。柱穴・カマドは調査範囲内からは検出されなかった。遺物も僅かで、埋土中から土師質の土器小片が約30片ほど出土したのみである。周辺の遺構や遺物の状況から古墳時代後期と考えられる。(物部)

(2) 掘立柱建物

第169図 掘立柱建物1・
出土遺物(1/60・1/4)

掘立柱建物1(第169図)

掘立柱建物1は4区中央部に位置し、壇穴住居6の東に隣接する。桁行3.24m、梁間2.52~2.29mを測る1×1間の建物である。柱穴は直径0.6~0.7mの円形を呈し、検出面からの深さは0.5m前後である。埋土は粘性の違いによって分層されるが、柱痕跡は確認されなかつた。遺物は土師質の土器細片が少量と、南東部の柱穴より平瓶口縁部と思われる須恵器片132が出土しており、時期は古墳時代後期と推定される。また周辺には同様の形態・規模の柱穴が4基確認され、おそらく同じ時期のものと考えられる。(物部)

(3) 土壙

土壙7 (第170図)

2区の南よりに位置する。土壙の南東隅は調査区外に位置するため調査を行っていない。平面形が方形を呈し、長さ約1m、幅0.98m、検出面からの深さは約0.2mを測るいわゆる焼成土壙である。土壙内には暗茶褐色土が堆積していたが、土壙の底面の中央付近を中心に炭が残存しており、土壙全体にわたって被熱痕跡がみられた。土壙内から若干の土器片が出土している。これらの出土遺物および他遺跡の焼成土壙例から、土壙7の時期は古墳時代後期に比定することが可能であろう。

(金田)

(4) 溝

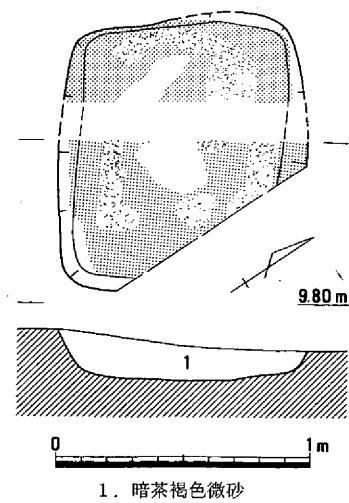
溝2～4 (第171～174図 図版29)

4区と5区の境付近に位置する溝群である。溝2～溝4は切り合い関係にあり、溝3が溝2・溝4に切られており、一番古い時期のものである。

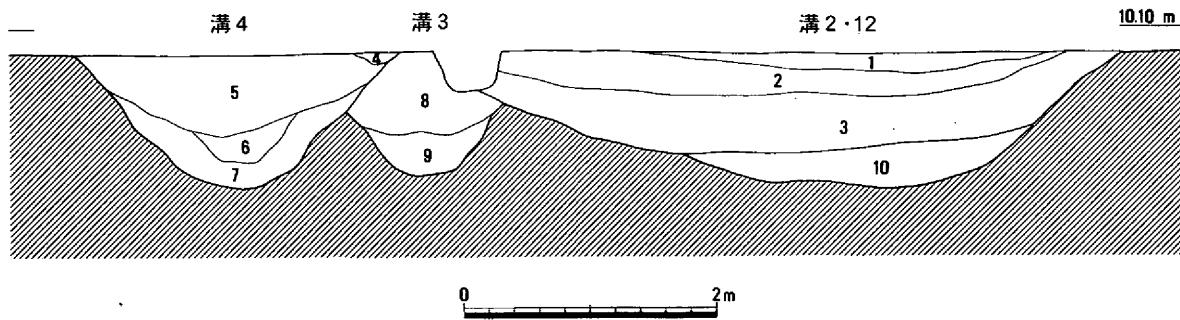
溝2は一番南に位置するもので、幅2.8m以上、検出面からの深さは0.3mを測る。溝2の上面には中世の溝12(第1～3層)が存在している。そのため、竪穴住居4との直接の切り合い関係は不明であるが、竪穴住居より古いものである可能性がたかい。溝内から若干の土器片が出土しており、古墳時代前期の溝であると考えられる。

溝3は溝2と溝4の間に位置し、幅1.82m以上、検出面からの深さは0.95mを測る。溝内から土器片が若干出土している。溝3の埋没時期は溝2と溝4との関係から古墳時代前期と推測できるが、掘削時期は弥生時代後期にさかのぼる可能性がある。

溝4は一番北に位置するもので、幅1.82m、検出面からの深さは1.05mを測る。溝内から多くの弥生土器片および土師器片が出土した。133～137は壺である。133～136は二重口縁を持つ壺である。137は直口壺である。138～165は甕である。138は口縁部に櫛描沈線が施されており、外面に赤色顔料が塗布されている。139～144は「く」の字状の口縁をもつ甕である。そのうち、142～144の体部外面にはタタキメの痕跡がみられる。145～165は二重口縁をもつ甕で、153～162は口縁部に櫛描沈線をもつわゆる吉備型甕である。口縁部は上方にまっすぐ立ちあがるか、やや外反するものが多い。163～165は大きく外反する二重口縁をもつ甕である。166～172は高杯である。いずれも短脚の高杯

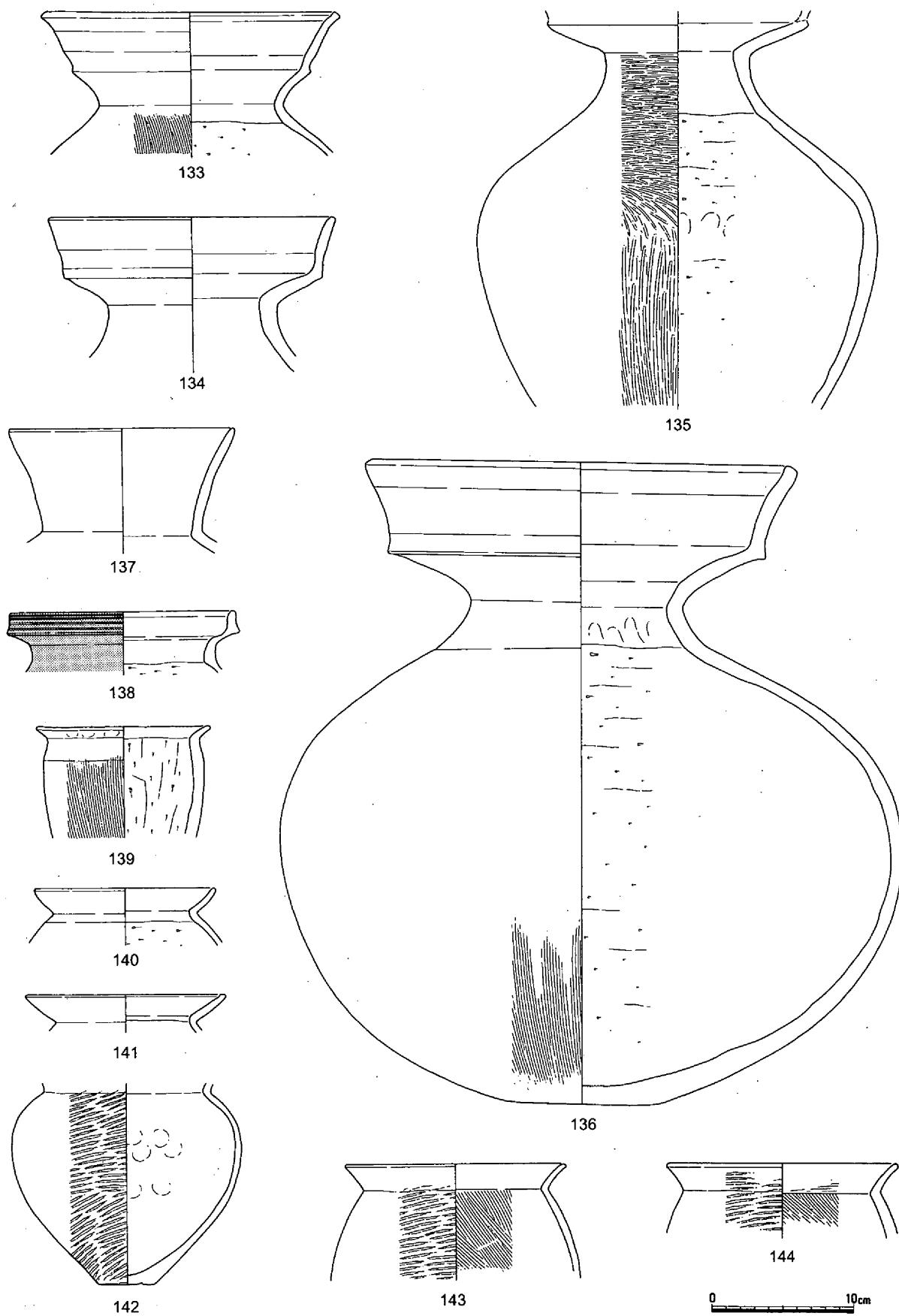


第170図 土壙7 (1/30)

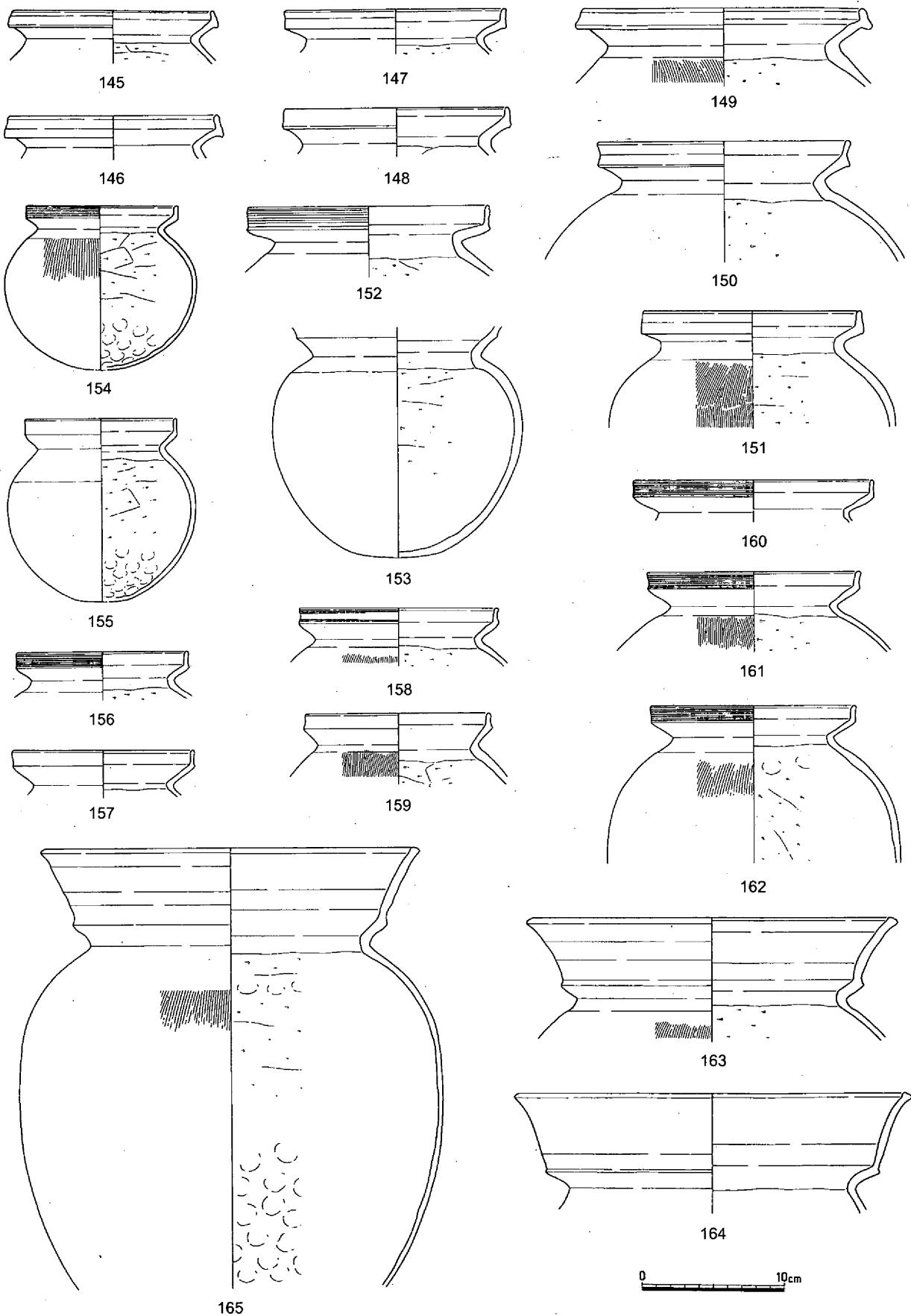


- | | | |
|-------------------------|-----------------|-------------------|
| 1. 灰褐色細砂(マンガン沈着)<溝12埋土> | 5. 黒茶褐色砂<溝4埋土> | 8. 暗茶褐色微砂<溝3埋土> |
| 2. 茶灰色砂(疊含む)<溝12埋土> | 6. 茶褐色砂<溝4埋土> | 9. 灰茶色粘質土<溝3埋土> |
| 3. 灰茶色砂(疊含む)<溝12埋土> | 7. 茶褐色粘質土<溝4埋土> | 10. 茶褐色粘質微砂<溝2埋土> |
| 4. 明灰褐色微砂<溝4埋土> | | |

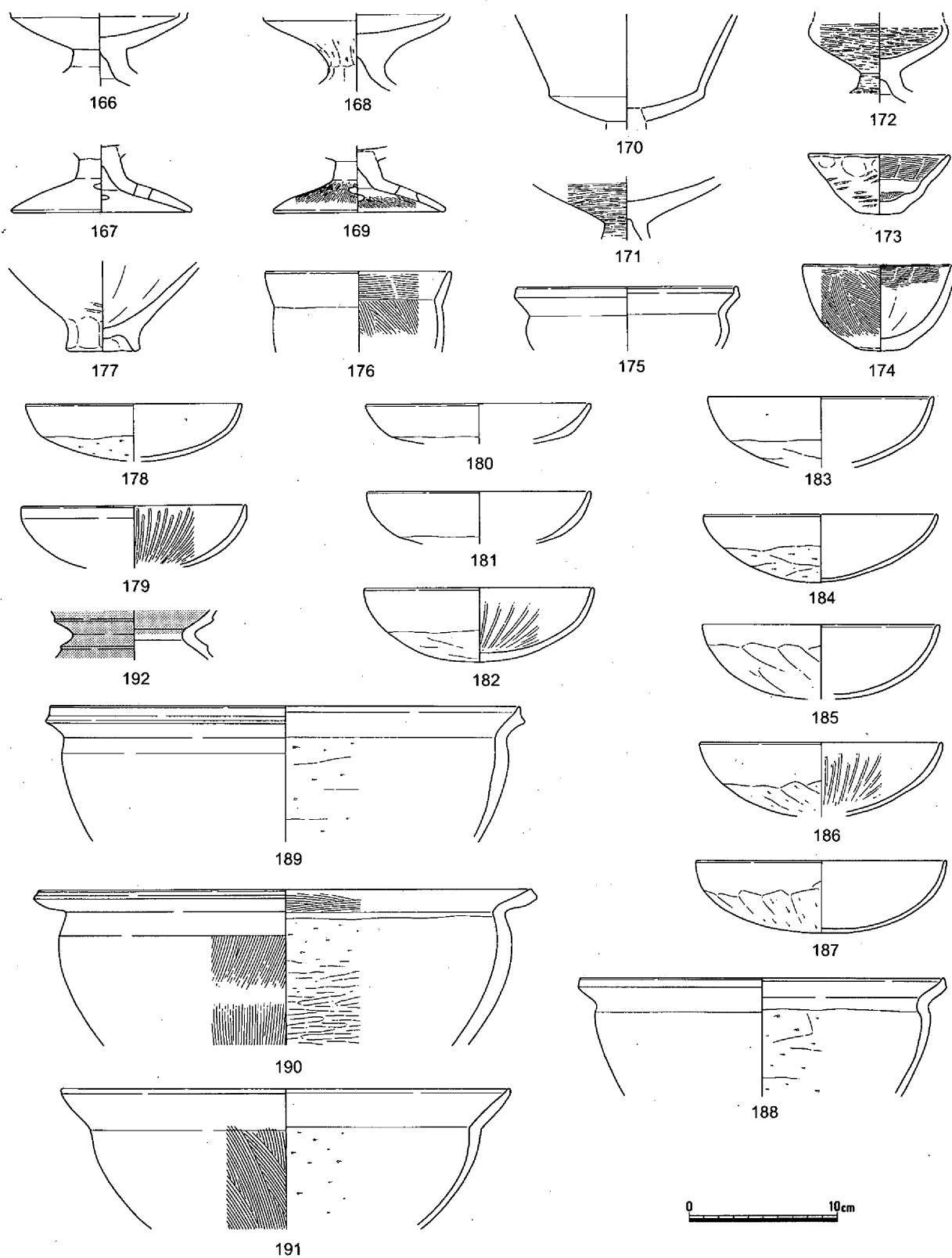
第171図 溝2～4 (1/60)



第172図 溝4出土遺物1 (1/4)



第173図 溝4出土遺物2 (1/4)



第174図 溝4出土遺物3 (1/4)

である。173～191は鉢である。そのうち、178～187は皿形をなす鉢である。192は鼓形器台で、外面に赤色顔料が塗布されている。このように、溝4から出土した土器群は弥・後・IVに遡る土器を含むものの古・前・IIに属する土器もみられることから、溝4の廃絶時期は古・前・II頃であると推測できる。

(金田)

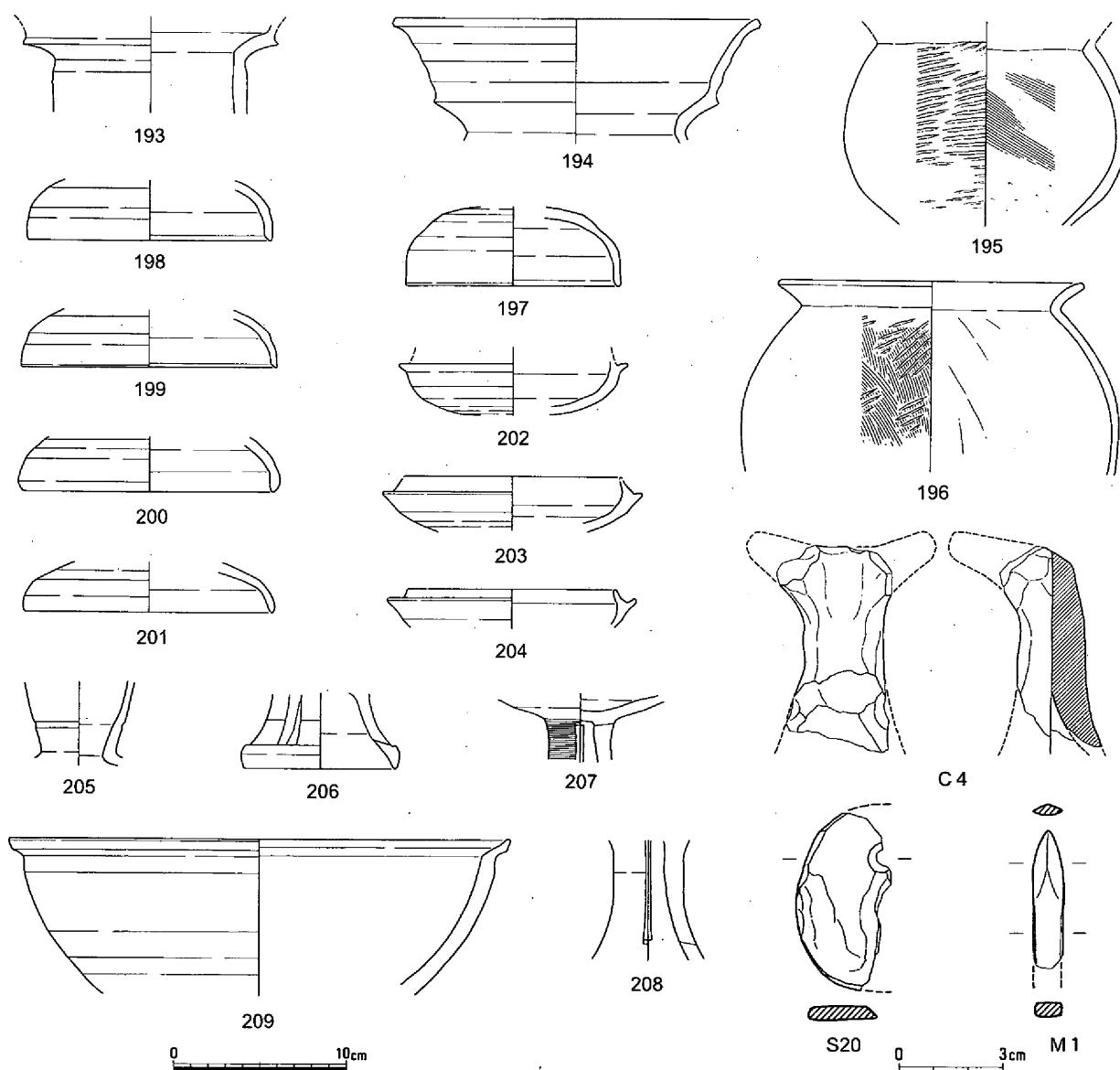
(5) 遺構に伴わない遺物 (第175図)

遺構に伴わない遺物には、土師器・須恵器のほか石製品、土製品、金属製品がある。193は壺の頸部で、筒状をなす頸部から屈折して開く二重口縁をもつ。口径20.6cmを測る194は屈曲する頸部から外反して開く口縁をもつ在地の壺である。195・196はく字形の口縁をもつ甕で、内面はナデとハケメで調整し、外面には平行タタキの痕跡をとどめる。これらは溝4に伴う可能性がある。

須恵器には蓋杯・高杯・平瓶・器台がある。蓋杯は6世紀前半の197・202、中葉の198・199、後半～末の200・201・203・204に分けられる。高杯も、短脚3方透かしの206は6世紀前半に、長脚2方透かしの207・208は6世紀末に位置付けられる。205は平瓶の口頸部、209は器台の受け部で、いずれも6世紀末に属するものと思われる。

C4は中実ぎみにつくられた土製支脚で、2本の支持部と脚部を欠いている。低位部から出土したS20は緑泥片岩製の有孔円板で、過半を失っているものの径4.9cm、厚さ0.4cmの円板状に復元される。鉢M1は基部を欠いているものの現状で長さ3.9cm、幅0.9cmを測る。

(亀山)



第175図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)

第4節 古代の遺構・遺物

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物2 (第176図 図版25)

2区の中央部に位置する建物である。北西側は調査区外のため検出されず、北東端と南東端の柱穴は認められなかつたが、桁行4間、梁間3間の南北棟と考えられる掘立柱建物である。棟方向はN-1°-Eであった。この掘立柱建物は桁行の柱通りが直線的ではなく、梁間の柱通りも断面図に示したA-A'・B-B'を除き直線的ではなかつた。

建物の規模は、桁行全長が13.39~12.96m、梁間全長が5.94~5.95mを測り、床面積は78.2m²と推定される。梁間の柱間距離は一定しておらず、1.41~2.75mと最大約1.3mの差を測る。特に南北の梁間で2間目の差が大きかつた。桁行の柱間距離は3.05~3.57mであった。

柱穴の掘り方は平面方形を呈しているものが多い。掘り方は建物と同様にはば南北に沿う形で方形に掘られている。規模は主に0.6m四方のものが多いが、最大のもので長辺0.92m、短辺0.8mを測る。深さは0.16~0.6mであった。掘り方底面は平坦である。柱穴痕跡も認められ、それから判断すると柱は径0.2mほどのものを用いていたようである。柱は掘り方の中心に据えられていたものが多いが、掘り方の縁に立てられていたものも存在する。

この建物は柱通りが直線的ではなく、柱間距離も一定していないことから、建物として纏まることに関して疑問を持つが、この建物の周囲に方形の掘り方を持つ柱穴が存在していないことから建物として図示した。

出土遺物は少なく、図示できるものも認められなかつた。

時期は、建物の構造と土器から古代に属すると考えられる。

(小嶋)

(2) 土壙

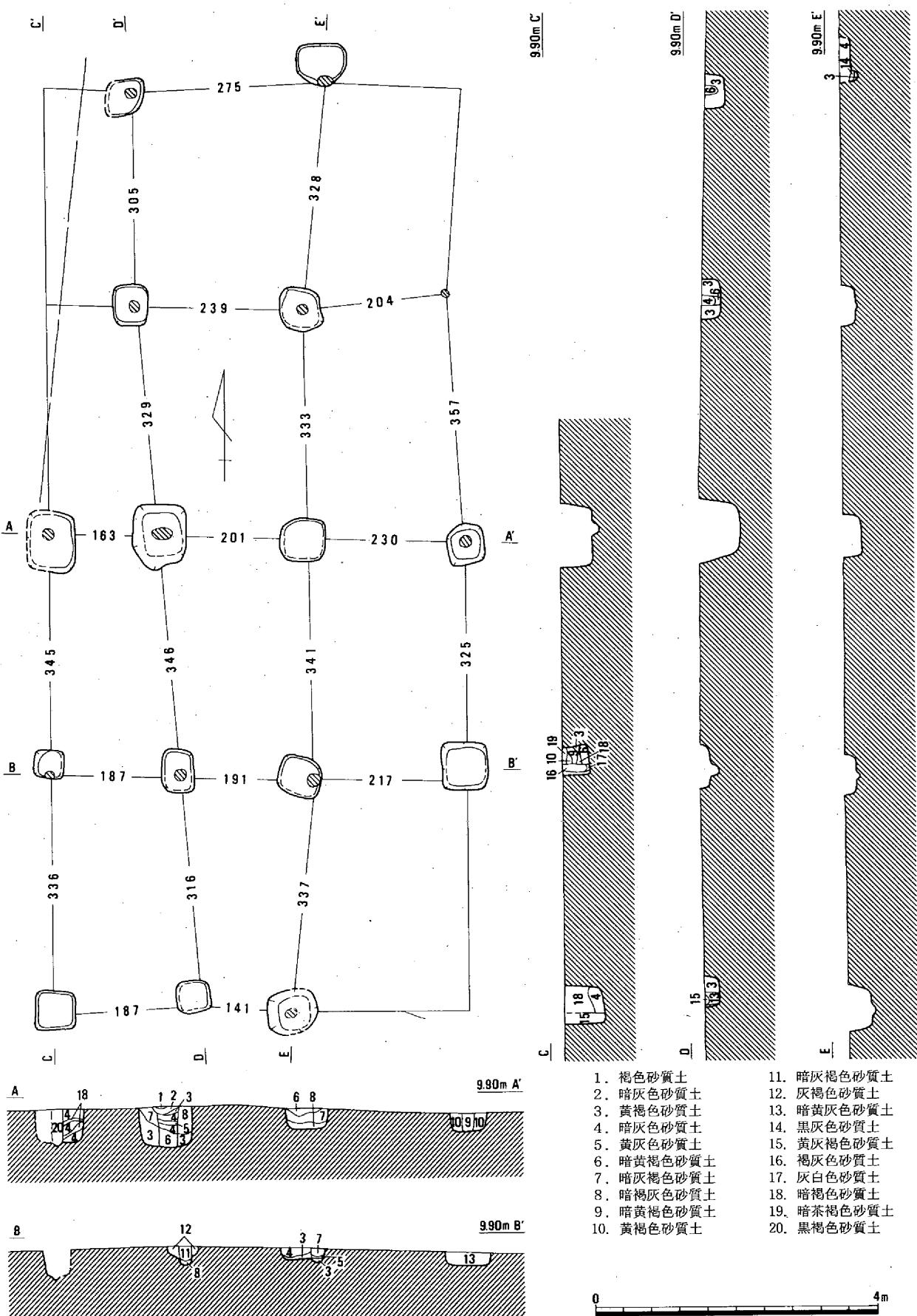
土壙8 (第177図 図版25)

5区の南よりに位置する。方形の平面形を呈する土壙で、南東部は調査区外のため未調査である。土壙8は西辺で3.25m、南辺で3.4m以上、検出面からの深さで0.46mを測る。土壙底面の北辺と南辺では幅約50cm、深さ10cm程度の溝が設けられているが、西辺部については調査区境に位置していたこともあって溝の存在を確認できていない。なお、土壙の中央部には径約0.6mの範囲で被熱痕跡がみられた。土壙内から土師器片や須恵器片が出土した。210~211は須恵器蓋である。212は須恵器杯である。213は土師器甕である。214は土師器皿である。215は土師器高杯である。214と215の土師器の内外面には赤色顔料が塗布されている。211と212は南西隅でセットになって出土した。これらの出土遺物から土壙8は奈良時代に比定できる。

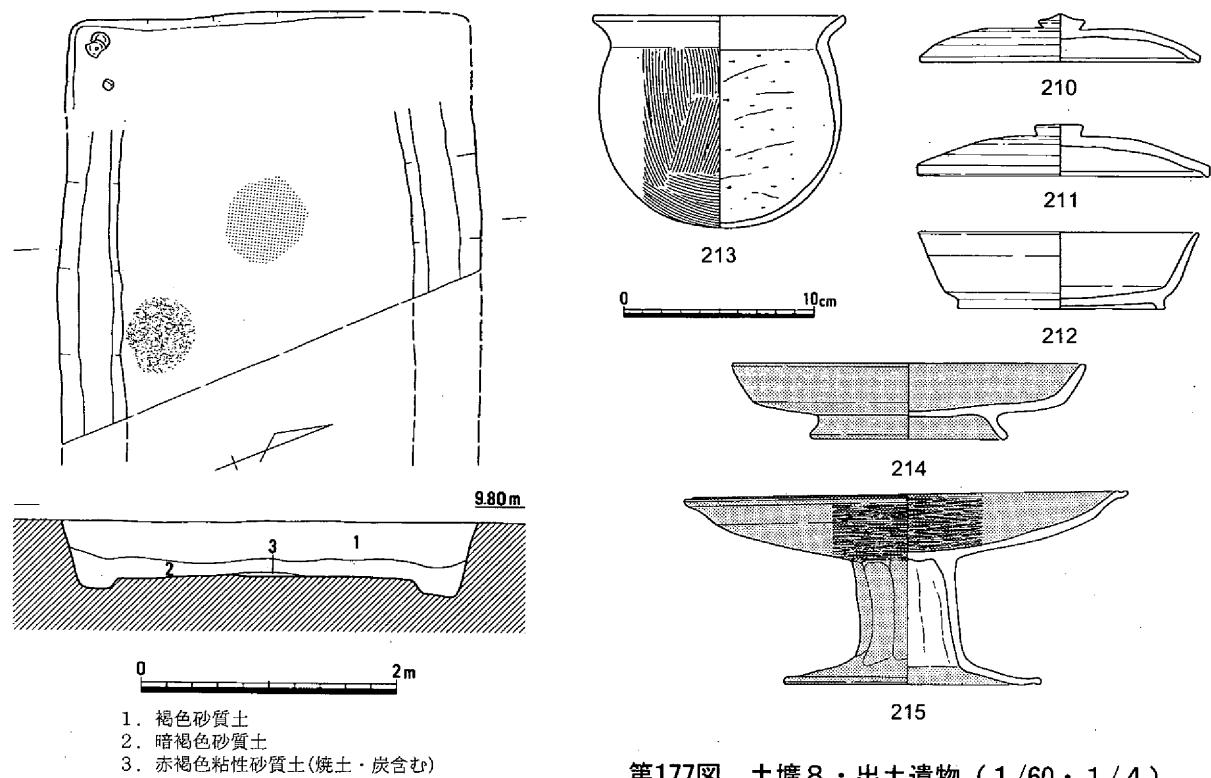
(金田)

土壙9 (第178図)

土壙9は6区南端西壁沿いに位置し、南東の微高地から北西に向けてなだらかに下がる斜面部の基盤層上面で検出された。平面形は不正形で西方の調査区外に向けて大きく広がり、深さも徐々に深くなる。土壙として取り扱つたが、自然の窪みの可能性もある。埋土上層、東側肩口部分の第178図の網目の範囲に多量の鉄滓が溜まつてゐた。鉄滓は中・小形の椀形鍛治滓や鍛造剥片、ガラス質滓などの鍛治滓であり、羽口も2点混入していた。鉄滓は1~2cm大が主で、総点数400点前後、総重量約4.3kg。羽口は直径6~7cmと小形である。これらは東の微高地方向からの流入あるいは廃棄と考



第176図 掘立柱建物2 (1/80)



第177図 土壌8・出土遺物 (1/60・1/4)

えられ、微高地部に鍛冶炉が存在すると思われる。時期は、土壌9の直上層が古代の水田層と推定されることから、それ以前おそらく古代の中に収まるものと考えられる。また、6・7区の包含層中に同様の鉄滓や羽口がかなりの量含まれており、大半は古代の遺物と思われる。

(物部)

(3) 溝

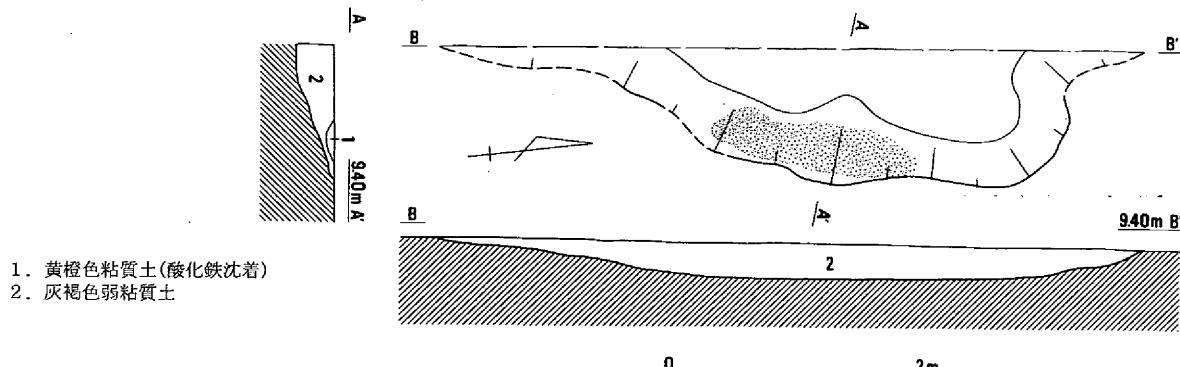
溝5 (第179図)

溝5は4区南半に位置し、微高地に立地する。ゆるやかに蛇行しており、主軸はおよそ北北西—南南東である。検出長16.5m、検出幅0.43m、検出深0.12mを測る。検出長の中央付近で2.4m程溝が途切れる。この途切れる部分の北側溝端部は幅1.4m、深さ0.3mに広く深くなっている。出土遺物は、土師器の細片が少量と須恵器高杯216がある。溝5の時期は奈良時代と推定される。

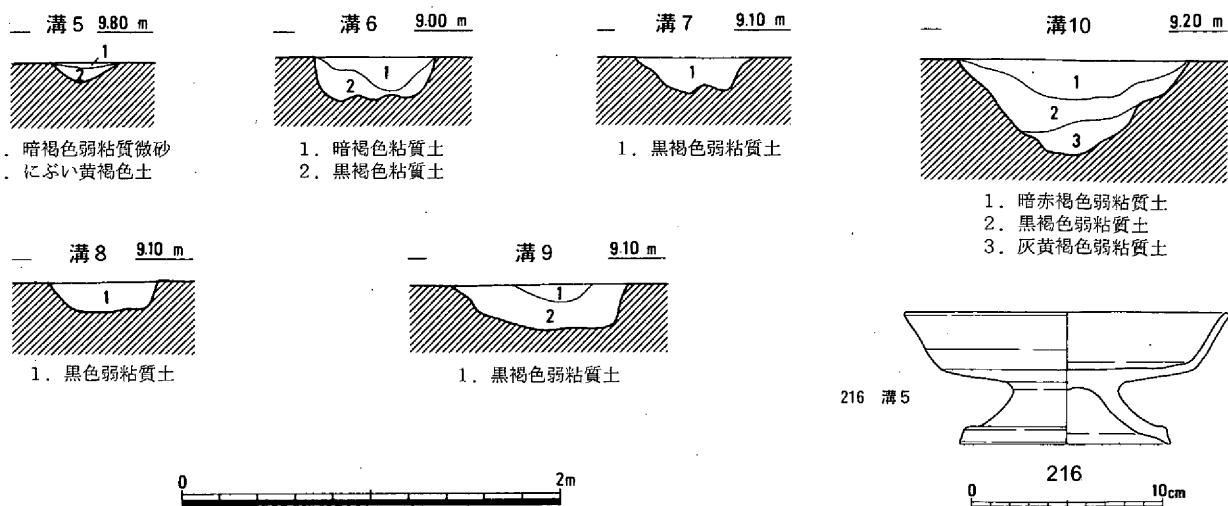
(物部)

溝6 (第179図)

溝6は6区南半に位置し、微高地から低位部への斜面下端に沿って検出された。南南西から北北東へ流走している。検出長12.08m、検出幅0.68m、深さ0.25mを測る。また、溝6とほぼ重複し、より地形に沿って延びる溝も確認された。これらは水田に関連した溝と考えられる。時期は出土遺物



第178図 土壌9 (1/60)



第179図 溝5~10・出土遺物 (1/40・1/4)

か少なく決めがたいが、低位部基盤層上面で検出されたことから古代と考える。 (物部)

溝7・8 (第179図)

溝7は7区北半から8区にかけて、溝8は24区で検出され、形態や位置関係から同一の溝と考えられる。低位部のほぼ中央に立地し、北北西から南南東に向けて蛇行しながら走っている。検出長29.04m、検出幅0.8m前後、検出深0.17mを測る。この溝の北東約0.8mの間隔をあけて柵列状遺構が確認された。一つ一つの平面形は0.3~0.4×0.2mの楕円形または数字の8の字形を呈しているが、直径約0.2m、深さ0.17m前後の円形の穴が2基切り合っている状況が確認された。溝7・8に沿って蛇行して検出されたことから、この柵列状遺構は溝7・8との関連が強いと考えられるが、その性格は不明である。時期は、低位部基盤層上面で検出されたことから古代と考える。 (物部)

溝9・10 (第179図)

溝9は25区、溝10は11区で検出され、同一の溝である。井手天原遺跡の微高地から低位部にかけて南東方向に下がる斜面下端に立地する。南西から北東へ地形に沿って延びる。検出幅1.01~1.20m、検出深0.23~0.49m。時期は、低位部基盤層上面で検出されたことから古代と考える。 (物部)

(4) 遺構に伴わない遺物 (第180~184図)

遺構に伴わない遺物には土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦などがあるが、その多くは低位部から出土したものである。

須恵器には杯、蓋、皿、鉢、高杯、壺、瓶、甕、瓶がある。杯は高台をもつ226~231ともたない217とがあり、前者が主体を占める。217は口径12.8cmを測り、尖りぎみにおさめた口縁端部はわずかに外反する。226~231は断面矩形の高台をもつ。このうち、226~229は口径13.4~14.8cm、器高3.7cmで、口縁部が外反ぎみに斜め上方へ延びる226・228と、直線的に開く227・229に分けられる。また、230・231は全形を知り得ないが、径に比して器高が高い杯である。蓋218~223は、径が15cm前後の224・225と20cm前後の222・223に分けられる。後者は大形の杯のほか高台をもつ皿と組み合う可能性がある。つまみは宝珠形の218やボタン形の219・221、碁石形の220などがある。

皿には径30.2cmの大形の232と15.4~16.4cmの233~237がある。後者はさらに直立する口縁部の先端を丸くおさめる233・234と平坦な面をもつ235・236、口縁部が斜め上方にのびる237に区分される。

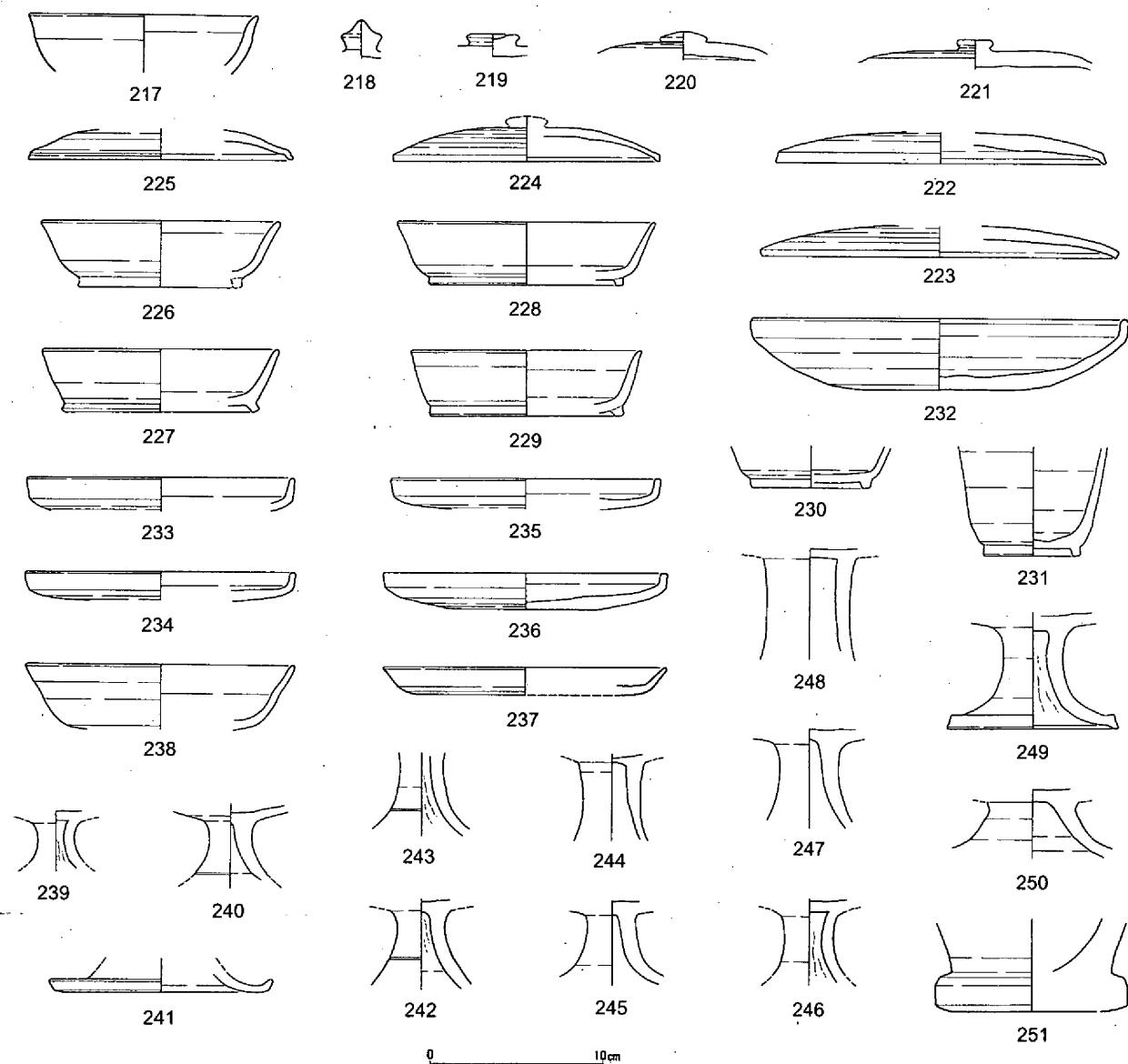
高杯238~250には全形を知り得るものはないが、小形で短い脚部をもつ239~247、長い筒形の脚部

を備えた248、低い脚部の250などに分けられる。

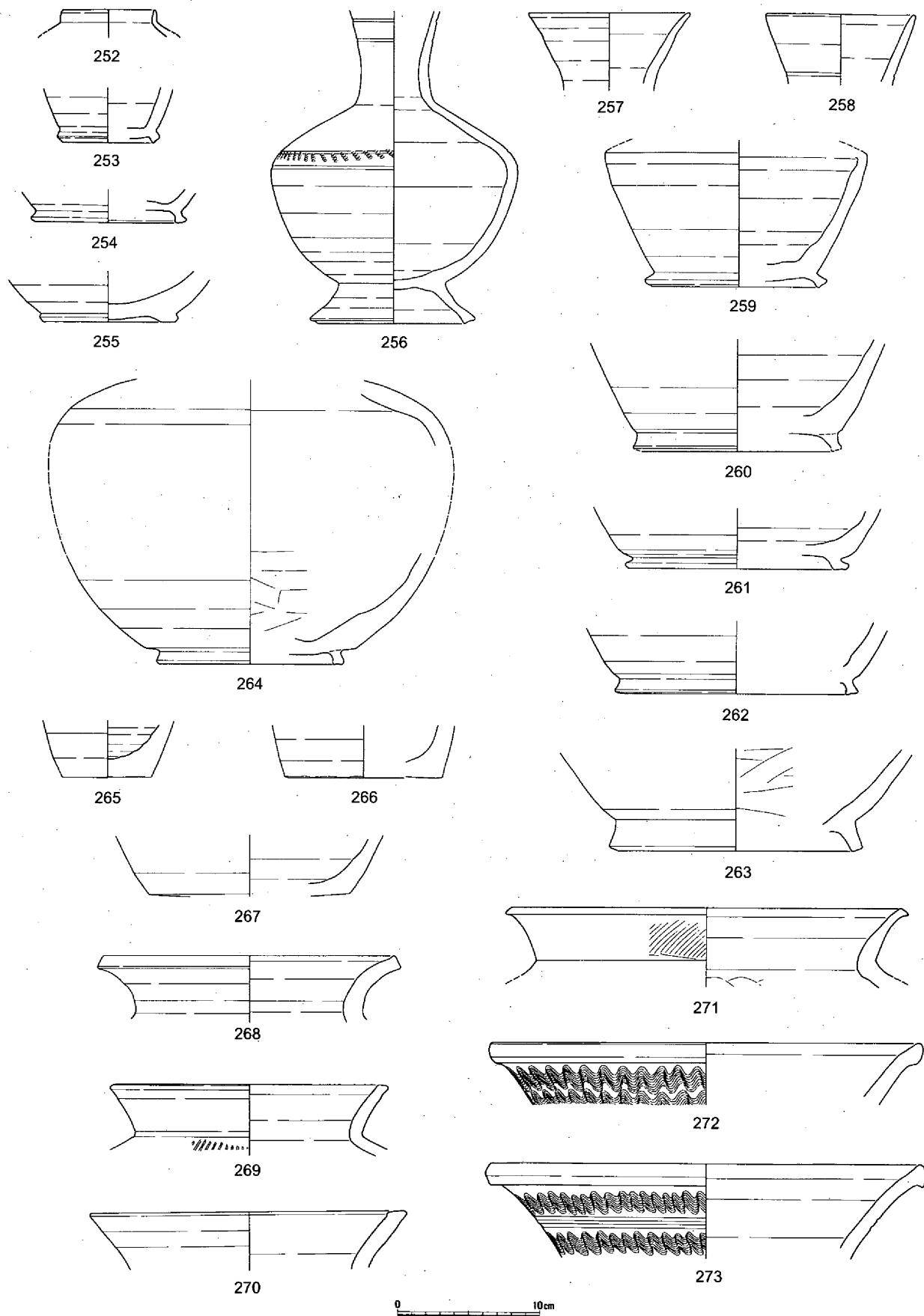
鉢251は径9.2cmを測る底部のみであるが、直線的に斜め上方へ広がる口縁部をもつものと思われる。壺には短頸壺と長頸壺がある。252は小形の短頸壺で、口径6.2cmを測る。264は胴径28.4cmを測る大型の短頸壺で、灰白色の胎土をもち、外面に黄緑色の自然釉がかかる。長頸壺256・257のうち、256は溝5の検出段階で出土したものである。口縁部を欠いているが、胴径17.3cm、現存高21.8cmを測る。長い頸部には2条の沈線をめぐらし、屈折して肩の張る体部には刺突文を飾る。また、底部には下方に長く広がる高台を貼り付けている。

268～270は口径18.2～21.8cmを測る中型の甕で、屈曲して広がる口縁端部は面をもって終わる。236～238は大型の甕で、口径26.8～29.6cmを測る。このうち237・238は口縁端部が肥厚して段をなし、外反する頸には波状文を二段に飾る。

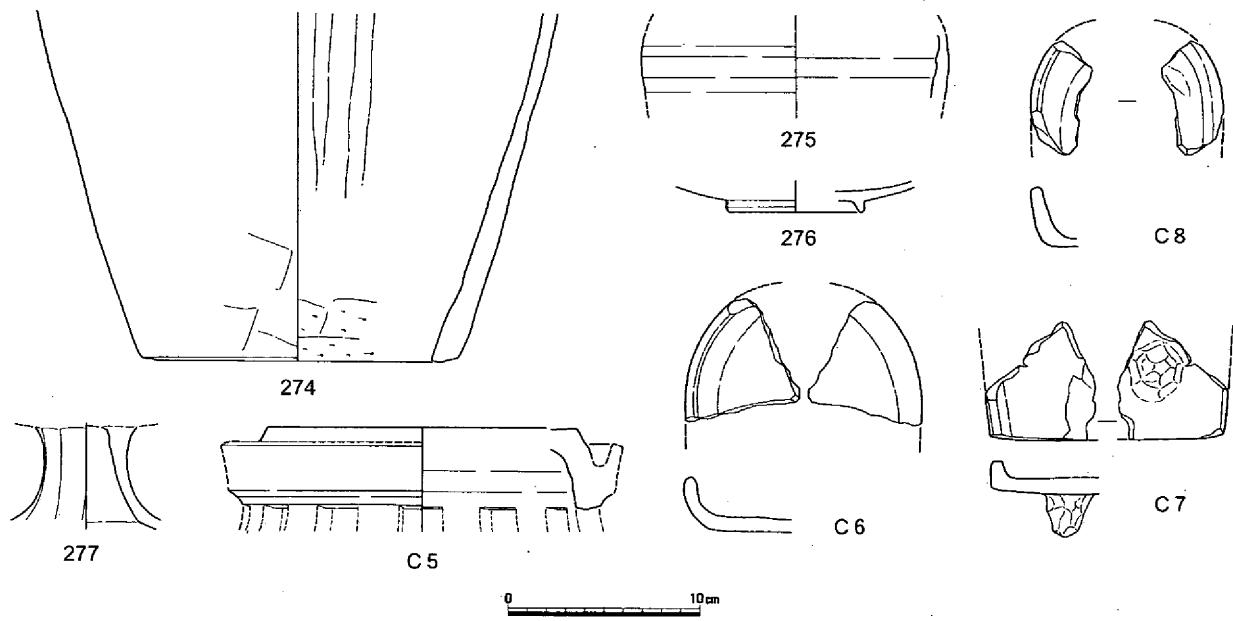
239は溝5に伴う可能性のある甕で、底径14.6cmを測る。甕か鍋のものと見られる把手も数点出土している。



第180図 遺構に伴わない遺物1 (1/4)



第181図 遺構に伴わない遺物2 (1/4)



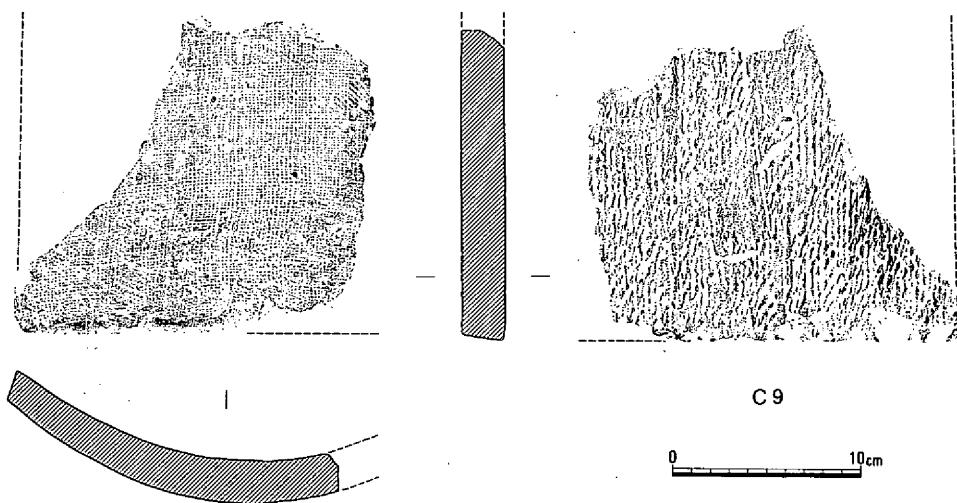
第182図 遺構に伴わない遺物3 (1/4)

灰釉陶器には胴径16.2cmの壺240と、底径6.8cmを測る皿241がある。

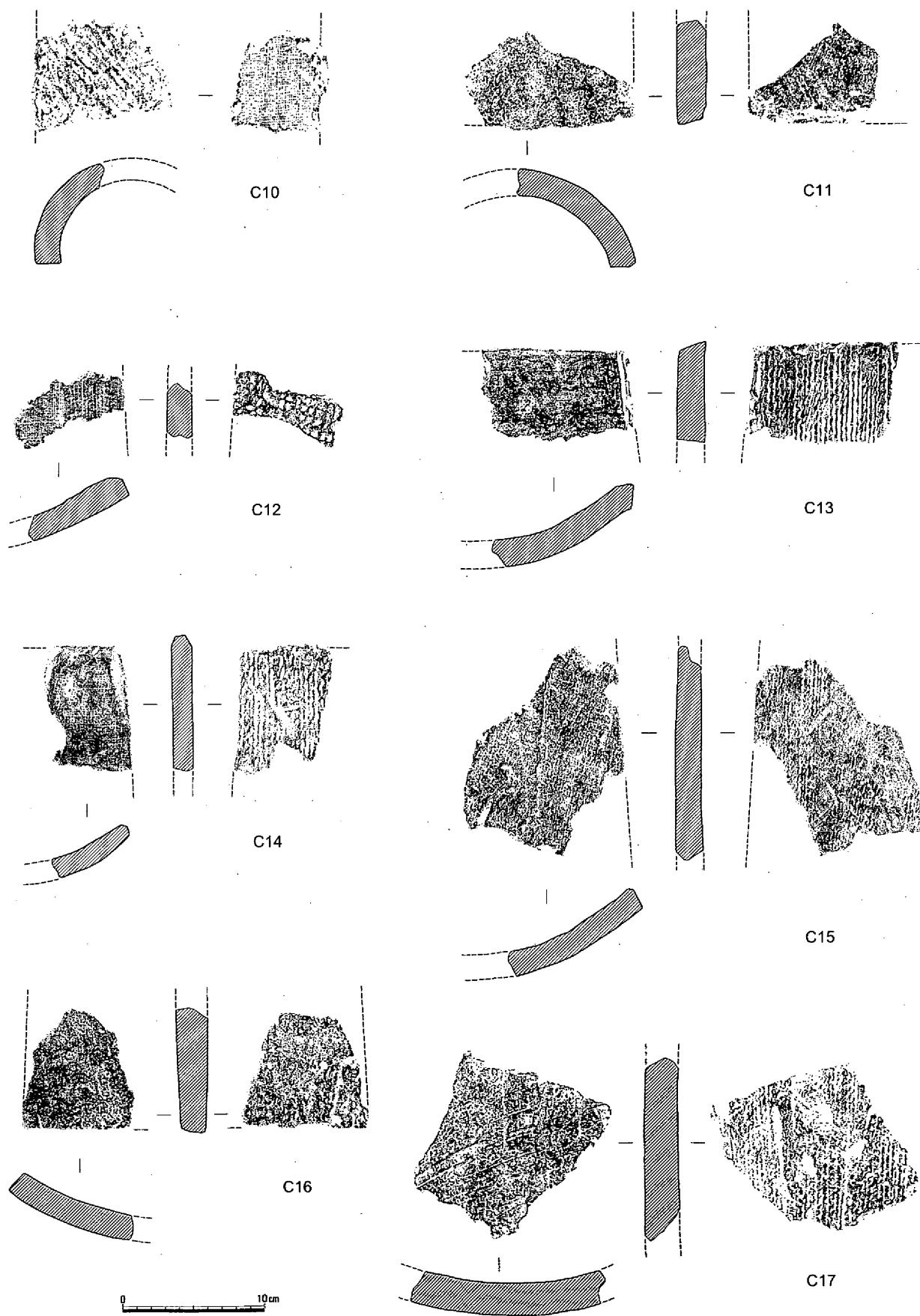
土師器には高杯・甕・竈があるが、甕・竈についてはいずれも小片のため、ここでは脚部外面を面取りする高杯242のみを図示した。

陶硯には、円面硯と風字硯がある。C5は円面硯の陸から海部の破片で、陸部径16.0cmを測る。脚部を欠いているが長方形の透かしを飾るものと推察される。風字硯は3点出土した。C6・8は海の、C7は陸の破片で裏面に長さ2.2cmの突起が残る。いずれも胎土が粗く、焼きもあまり。

瓦は9点出土したが、そのうち丸瓦は2点、平瓦は7点ある。C9・10は丸瓦で、C9は凸面に縄目を残すのに対し、C10はナデで仕上げている。これらは玉縁式と見られ、側面に内側からヘラで分割した痕跡が認められるものもあり、津寺遺跡のものと共通点が多い。平瓦は凸面に縄目を残すものが大半であるが、C11のように格子目タタキを施すものも認められた。
(亀山)



第183図 遺構に伴わない遺物4 (1/4)



第184図 遺構に伴わない遺物5 (1/4)

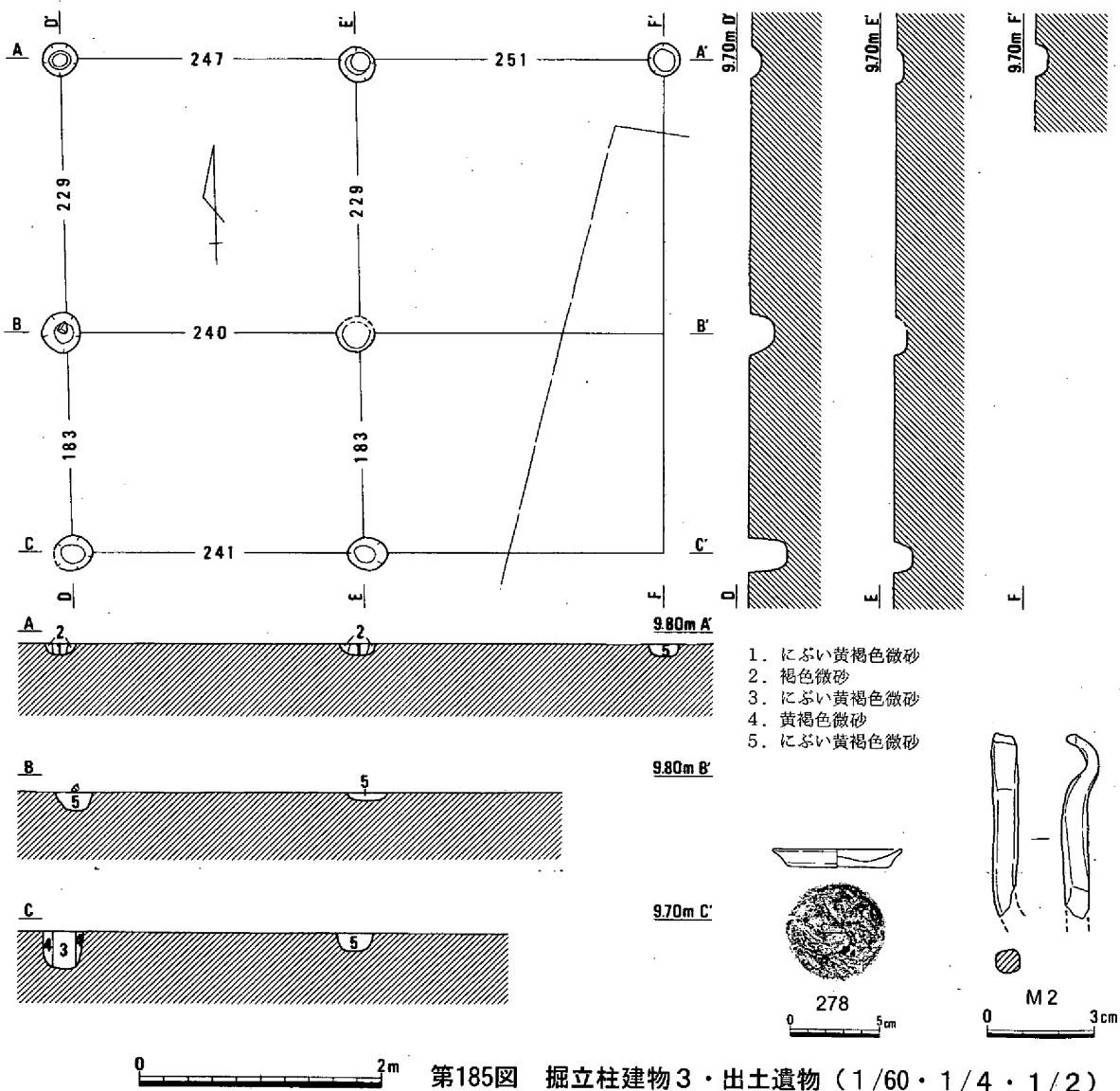
第5節 中・近世の遺構・遺物

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物3 (第185図)

掘立柱建物3は1区南端部に位置する。調査区内で検出されたのは2×2間であるが、東西両側にさらに伸びる可能性はある。桁行の総長は4.98mで、その柱間距離は2.51～2.41mを測る。張間の総長は4.12mで、その柱間距離は2.29～1.83mを測る。棟方向はN-89°-Wで、ほぼ東西方向である。柱穴は直径0.3m前後の円形を呈し、検出面からの深さは、南西角の柱穴が0.30mで、それ以外は0.15～0.09mと浅い。柱痕跡が確認された柱穴は3基あり、柱痕は直径0.13～0.17mの円形である。出土遺物は少量ある。278は黄橙色を呈する土師器の小皿で、口径7.0cm、底部外面はヘラ切り後、簡単にナデている。これ以外の土器片は細片のみで、中には早島式土器碗の破片が含まれる。M2は鉄製の釘で、頭部を折り曲げている。時期は土器の特徴から14世紀頃と推定される。また、中世の柱穴は1区北半では全く検出されず、隣の17区でも同じような状況であった。この周辺は大規模な地下げが行われたと伝えられており、その際に削平された可能性もある。

(物部)



第185図 掘立柱建物3・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)

(2) 土壙

土壙10 (第186図)

土壙10は5区と6区の境に低位部に位置する。平面形は円形を呈し、直径0.96m、検出面からの深さは0.42m、底面の標高8.46mを測る。断面形はU字形を呈する。埋土は褐灰色の弱粘質～粘質土で下層には砂質土が薄くある。また、埋土中には5～20cm大の川原石が10個ほど含まれていたが、礎石というようなものではなく混入あるいは投棄されたものと考えられる。出土遺物は土器細片が20片ほどである、やや黄色味がかったりは早島式土器碗の破片と思われるものがあり、また、鎌倉時代と考えられる溝14を切っていることから、土壙10は鎌倉時代以降と考えられる。

(物部)

土壙11 (第186図)

土壙11は6区南端、土壙10の南南西約2.5mに位置する。土壙10と同様に低位部に立地する。平面形は円形を呈し、直径0.78m、検出面からの深さ0.36m、底面の標高は9.04mを測る。断面形は浅い椀形で、埋土は灰白色粘質土で底面には鉄分が沈着している。内部に10cm大の礎が1点みられた。遺物はほとんどない。埋土が低位部にみられる中世の水田層とよく似ていることから、土壙11の時期も中世と考える。

(物部)

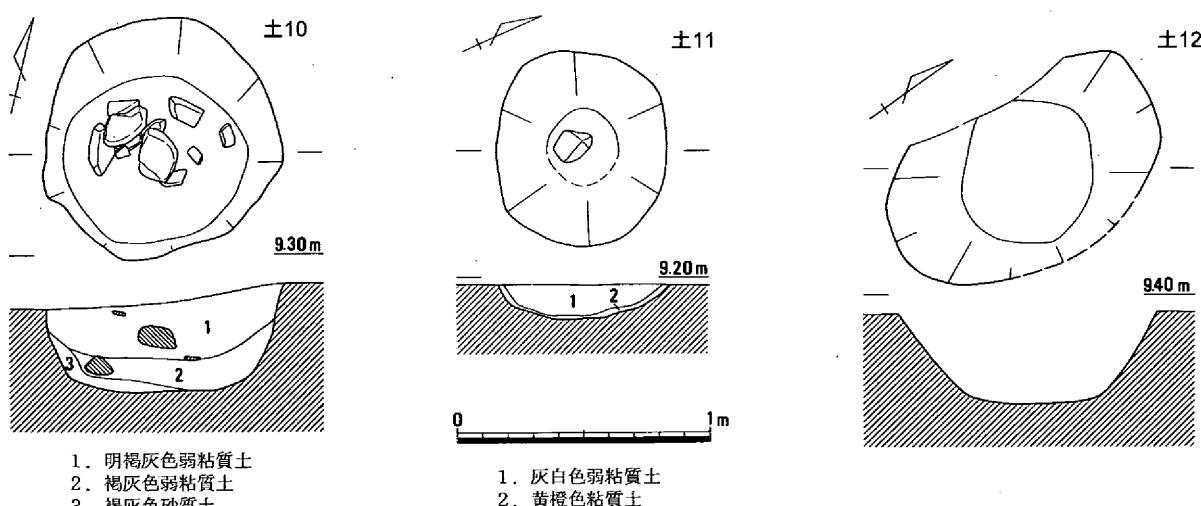
土壙12 (第186図)

土壙12は11区西壁沿いに位置し、低位部に立地する。溝10を切る。平面形は楕円形を呈す。埋土は黄灰色微砂で基盤土のブロックを含む。遺物は土器細片のみ。時期は中世と推定される。(物部)

(3) 土壙墓 (第187図)

4区の中央付近に位置する土壙墓である。長方形の掘り方を呈しており、長さ1.19m、幅0.73mを測る。検出面からの深さは約9cmで、土壙墓の上面は著しい削平を受けており、遺構の残存状況は良くなかった。土壙墓内から人骨一体分を検出した。人骨の保存状況は良くなく、人骨の取り上げはできない状態であったが、頭蓋骨および背骨や四肢骨の一部など主要な骨格部分の位置は確認することができた。このことから、遺体の頭位はN-37°-Wで、右側臥屈葬であったことがわかる。土壙墓内から小刀が、ちょうど被葬者の手に握られていたかのような位置で出土した。また、脛に近接して径約20cm程度の礎が検出された。なお、土壙墓内から土器片や釘等の出土はなかったが、土壙墓8は鎌倉時代頃に属するものと推定できる。

(金田)



第186図 土壙10～12 (1/30)

(4) 溝池状遺構 (第188図)

溝池状遺構は11区南端部に位置し、低位部に立地する。その約3/4は調査区外になる。南隣の10区まで延びないことから、平面径は5m前後、深さ2.2mの規模と推定される。埋土の下半は粘土（第8層）が一様に堆積している。上層は基盤土ブロックを多く含む褐色微砂で人為的に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物には土器小片が少量と、獸骨がある。279は備前焼の擂鉢。獸骨は第8層に包含され、その一部を取り上げたが、大半は調査区外に残存する。牛骨と考えられ、下顎骨、脊椎、肩甲骨、四肢骨がみられた。下顎骨は2個体分ある。散乱したような出土状況であった。時期は15世紀以降と考えられる。

(物部)

(5) 溝

溝11（第189図）

4区の北よりに位置する。古墳時代の竪穴住居4の上面で検出された。幅は1.73mで、検出面からの深さは約0.4mである。溝11は西端を溝13に切られており、溝13より古い時期の溝であると考えられ、鎌倉時代から室町時代にかけての溝であると推測できる。（金田）

溝12（第189・171図）

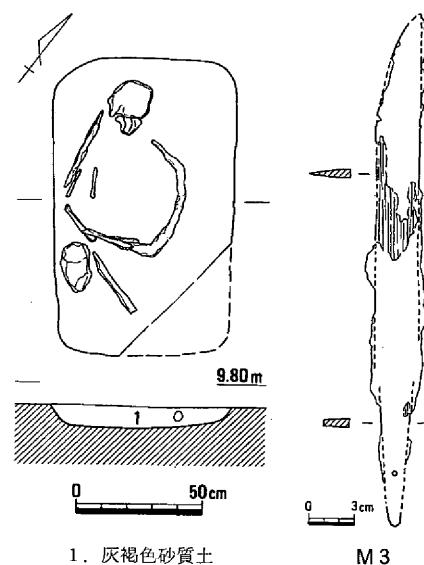
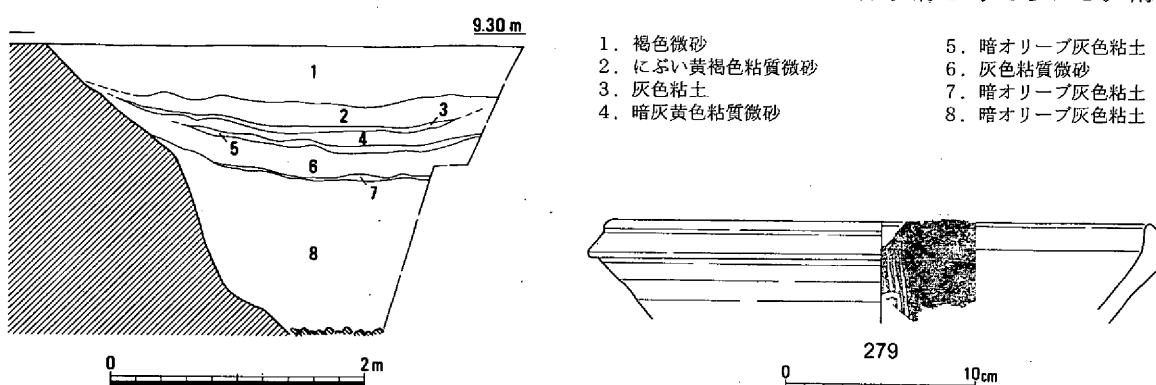
4区の北よりで検出された東西に走る溝である。古墳時代の溝2の上層に位置し、竪穴住居4の北東部を切っている。幅は2.8mで、検出面からの深さは0.78mを測る。鎌倉時代から室町時代にかけての溝である可能性が考えられる。なお、溝内から古代瓦C9が出土した。（金田）

溝13（第189・190図）

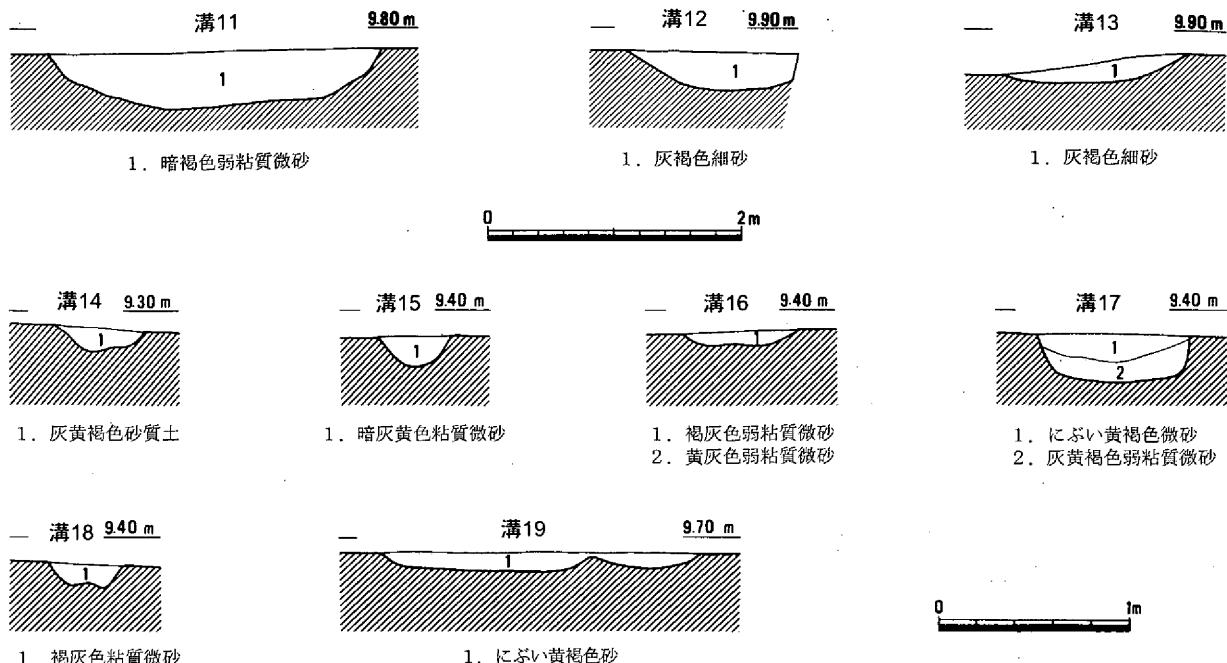
4区に位置する。幅約1.1m、検出面からの深さは約0.3mを測る。溝は調査前の水田畦畔とほぼ同じ位置に存在していることから、溝13は調査区の東側に広がる微高地の西側縁辺部をめぐっていたものが、埋没後にその位置が水田畦畔へと踏襲されたことがわかる。溝内から土師器、須恵器、亀山焼、備前焼等が出土している。280～281、282は土師器鍋である。283は備前焼擂鉢である。これらの出土遺物から、溝13の時期は室町時代に比定できよう。（金田）

溝14（第189図）

溝14は5区から6区にかけて検出された。低位部に立地し、水田に伴う溝と考えられる。南西か

第187図 土壙墓・出土遺物
(1/30・1/5)

第188図 溝池状遺構・出土遺物 (1/60・1/4)



第189図 溝11~20 (1/60・1/40)

ら北北西に鉤形に屈曲する。検出長25.01m、検出幅0.77m、検出深0.12mを測る。出土遺物は土器細片が少量ある。その中に高台の付く早島式土器碗がみられ、このことから時期は鎌倉時代と推定される。また、溝14のすぐ東に同様の水田に伴う溝があり、時期は近世である。時期が下るに従って微高地の端部を掘削して水田化した様子がうかがえる。

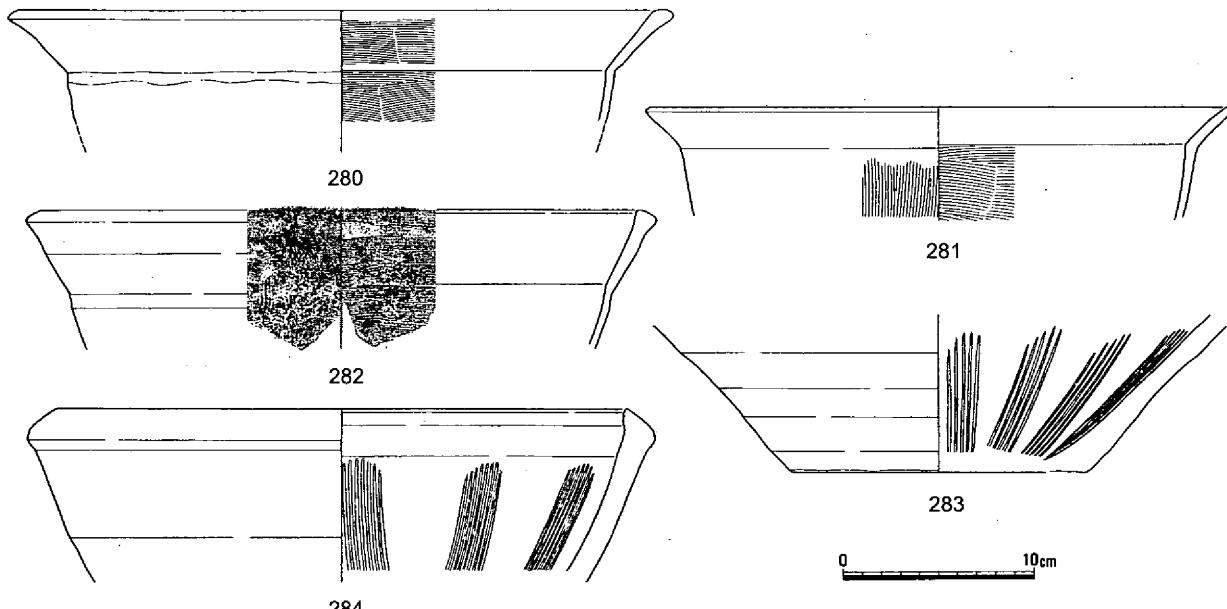
(物部)

溝15（第189図）

7区南端、低位部に位置する。水田に伴う溝である。溝17・18に切られている。南西から北東に僅かに湾曲して延びる。遺物は僅かである。中世の水田層を切っており、時期は中世以降。（物部）

溝16（第189図）

7区南端、併走する溝16~18のうち一番南に位置する。低位部に立地し、水田に伴う溝である。



第190図 溝13出土遺物 (1/4)

ほぼ東西に主軸を持ち、現代の水田畦畔と同一方向である。時期は近世以降である。 (物部)

溝17 (第189図)

7区南端、併走する溝16~18のうち中央に位置する。低位部に立地し、水田に伴う溝である。埋土下層に5~20cm大の礫や粗砂を含む。層位から時期は近世以降で、溝16より新しい。 (物部)

溝18 (第189図)

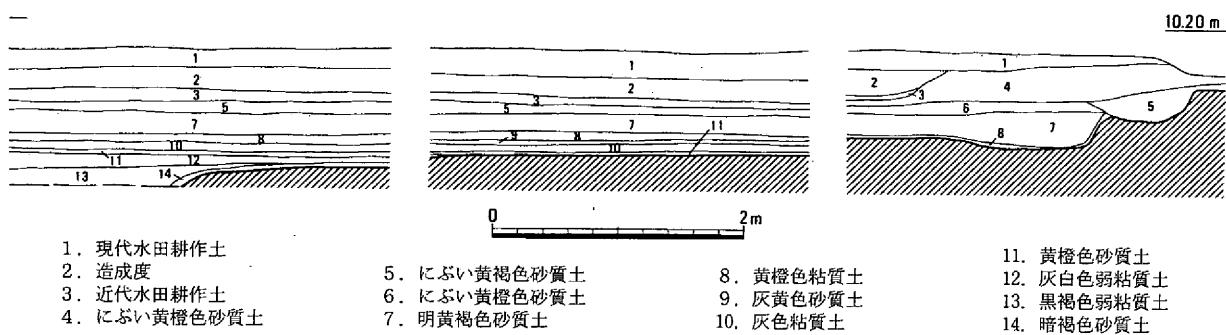
7区南端、併走する溝16~18のうち一番北に位置する。低位部に立地し、水田に伴う溝である。層序から溝16→17→18の順で新しくなり、おそらく水田畦畔が少しずつ北へ移動した状況を示すものと考えられる。 (物部)

溝19・20 (第189図)

溝19・20は11区北端、井手天原遺跡の所在する微高地南端部に位置する。両者は南西ー北東方向に併走し、溝19が溝20を僅かに切っている。水田に伴う溝である。遺物は皆無であった。時期は層序から近世以降と考えられる。 (物部)

(6) 水田 (第191図)

井手天原遺跡の所在する北の微高地と、井手見延遺跡や金井戸鴻崎遺跡の所在する南の微高地の間は低位部となる。北西方向から南下する低位部と南西方向から北上する低位部がちょうど調査区の部分で連結し、11区の北西方向へ抜けていると推定される。低位部の幅は40~50mと考えられるが、調査区が連結部にあたるため、調査区における低位部の幅は5~11区まで200m近くある。微高地の基盤層上面の標高は9.85m前後、低位部の基盤層上面の標高は約9.00mで、比高差は約0.85mである。この低位部には古代から現代までの水田層がみられた。第191図は5~6区の東壁断面図である。第1層は現代水田耕作土、第2層は第1層に伴う客土である。第3層は近代の水田耕作土、第7層は近世の水田耕作土で、漂白層と鉄分の沈着した明黄褐色を呈する層の互層である。第10層は灰色を呈する粘質土で中世の水田耕作土と考えられる。第11層は鉄分の沈着層である。第12層も中世の水田層と推定される。第13層は黒褐色弱粘質土で古代の水田層と考えられ、基盤が低いところでは3層に分層される。第11層上面および第13層上面では、それぞれ第10層および第12層の中世水田層に伴う畝状遺構が全面で検出された。その畝状遺構はほぼ現在の水田の区画ごとに方向が異なる状況がみられ、現在の水田区画が中世までさかのぼることが確認された。また、褐色弱粘性砂質土の基盤層上面で土壌9や溝6~10、柵列状遺構が検出されたが、さらに第13層の古代水田層に伴うと考えられる鋤痕を7~10区にかけて部分的にではあるがかなりの範囲で確認した。鋤痕は幅15cm前後の平面三角形を呈する。古代以前の土層は認められなかった。 (物部)



第191図 低位部土層断面図 (1/60)

(7) 遺構に伴わない遺物 (第192・193図)

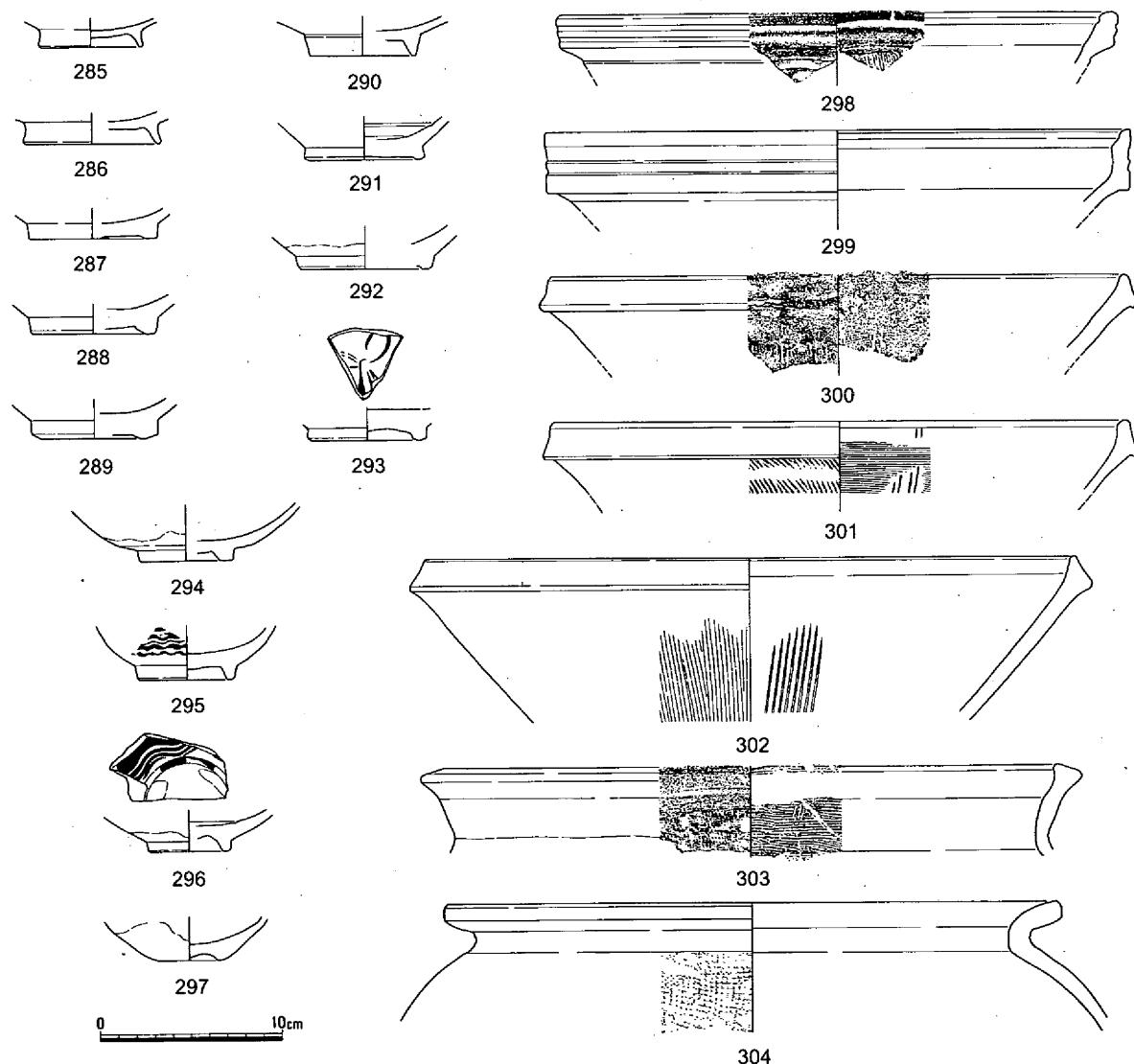
遺構の検出や水田を掘り下げる過程で、土師器や陶磁器、土製品、金属製品などが出土している。土師器285・286はいわゆる早島式土器の椀で、高台径5.5cmの285と7.4cmの286がある。

白磁287～292はいずれも碗の底部であるが、高台が低く削り出しの浅い287～289・291・292と、直立する高台が細く高い290に分けられる。293は竜泉窯系の青磁碗で、高台は低い矩形をなし、内底には割花文を飾る。これらは主に低位部の水田層から出土している。

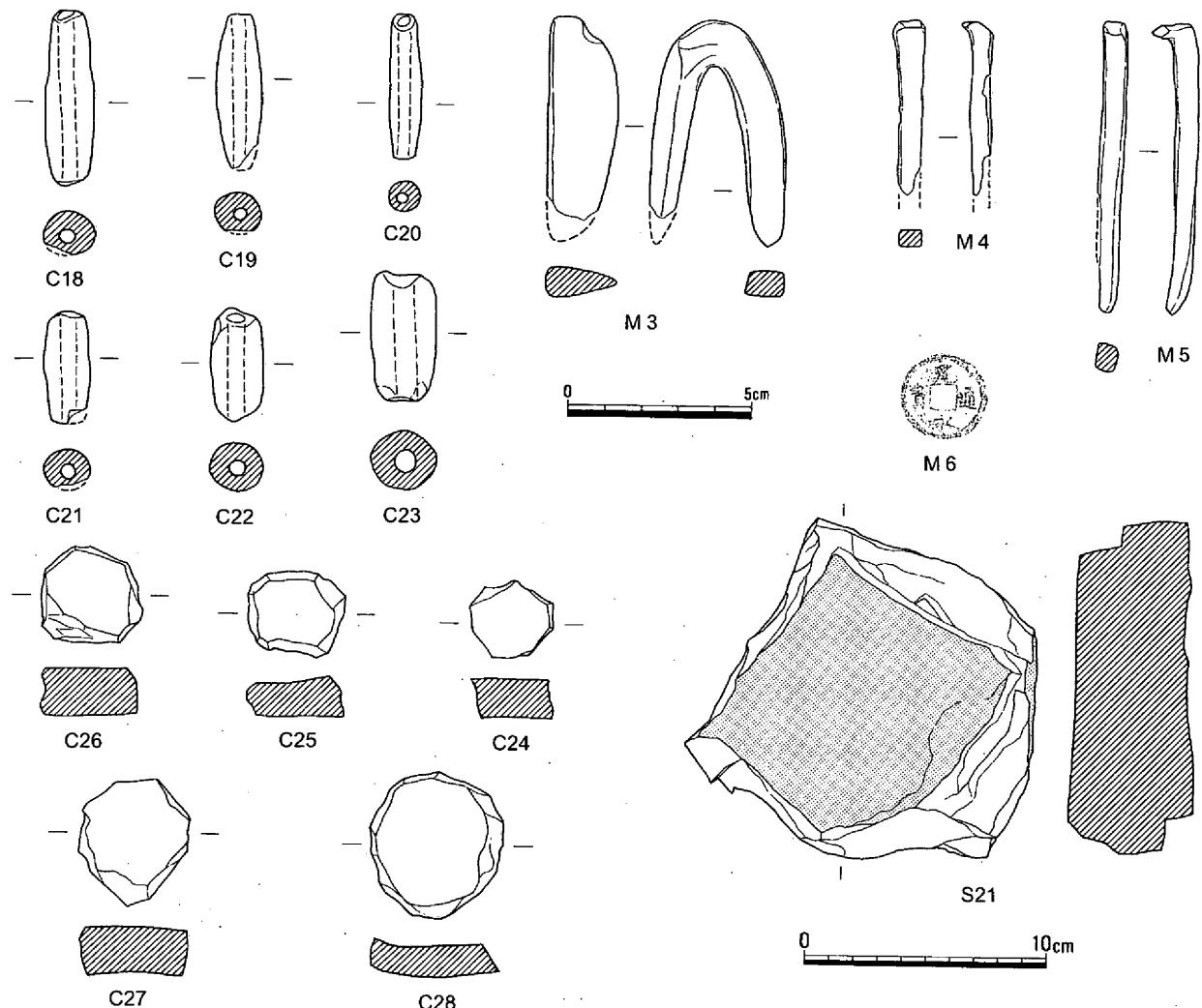
295～297は肥前陶器である。このうち295・296は刷毛目唐津と呼ばれる椀と鉢で、概ね18世紀代に位置付けられる。また、天原遺跡の包含層出土品と接合関係にある297は低位部の客土から出土した。見込みには胎土目を残し、16世紀末の所産である。

299は備前焼、298は関西系の擂鉢で、いずれも口径32cmを測る。299は二重になる口縁部の幅が狭く、なおかつ擂目が全面に施されることから18世紀に位置付けられる。このほか備前焼には甕の胴部破片が若干出土している。

亀山焼には擂鉢と甕がある。擂鉢は口径23.4cmを測る300・301と26.6cmの302があるが、いずれも軟質に焼成されている。口縁端部は肥厚して内傾する面をなし、直線的に広がる体部は内外面を粗いハ



第192図 遺構に伴わない遺物1 (1/4)



第193図 遺構に伴わない遺物2 (1/3・1/2)

ケメで調整したうえ内面に擣目を放射状に施している。甕には須恵質の304と瓦質の303がある。口径25.0cmを測る304は、口縁部が屈曲して水平に短く延び鈍い面をなしておわる。体部外面には格子目タタキを残し、内面はナデで仕上げる。303は斜め上方に延びる口頸部で、その端部は肥厚して平面をなす。口径25.2cmを測り、内外面をヨコナデと粗いハケメで仕上げる。

土製品には土錐と面子がある。土錐はいずれも細長い管状をなし、長さ4.0~4.9cm、径0.8~1.4cm、重量2.7~7.8gのC18~22と、長さ3.6cm、径1.8cm、重量10.7gのC23に分けられる。面子C24~28はいずれも須恵器の壺・甕片を円板状に打ち欠いたもので、径2.2~4.9cm、厚さ0.9~1.3cm、重量6.3~15.8gを測る。これらはいずれも低位部の水田層から出土している。

金属製品には鉄釘のほか不明金具や銅錢がある。M3は低位部の畝状をなす遺構から出土した用途不明の金具で、近世まで下るものと思われる。鉄釘M4・5のうちほぼ完存するM5は、頭部を折り曲げた角釘で、長さ7.9cm、幅0.6cm、重量8.8gを測る。M6は、低位部から出土したいわゆる新寛永錢である。

S21は柱穴の礎板に転用されていた砥石である。長さ13.0cm、幅12.1cm、厚さ5.1cmの板状を呈し、広口面と小口面に使用痕が認められる。香川県産の古銅輝石安山岩で、石室石材として搬入されたものを転用した可能性がある。

(亀山)

第6章 井手天原遺跡

第1節 調査の概要

井手天原遺跡は、総社市井手字天原に所在し、北緯 $34^{\circ}40'38''$ 、東経 $133^{\circ}46'23''$ に位置している。当初、金井戸見延遺跡として調査に着手したが、幅50mほどの低位部を挟んで南と北に微高地が確認されたことから、北側の微高地をその地名をとって井手天原遺跡と呼称することとした。検出された微高地は南北150mを測るが、その北端は国道180号を越えて広がっていることがその後の調査で確認されており、南北約300mほどの東西に延びる微高地上に立地しているものと思われる。同じ微高地上において、西側では金井戸天原遺跡、東側では金井戸天神遺跡と接しており、これらが一体となって機能していた可能性も考えられる。

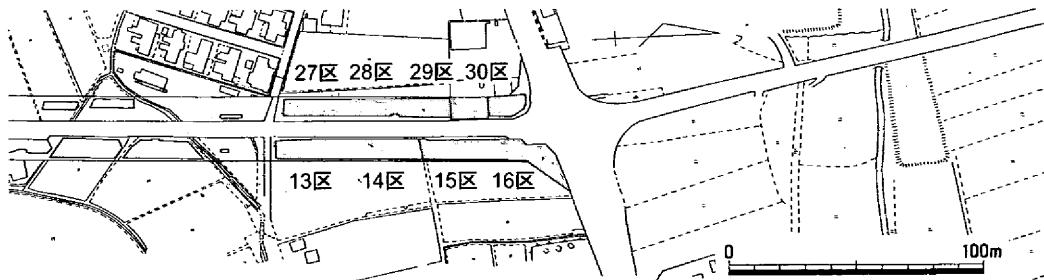
遺跡の現況は水田として利用されているが、近年の市街地調整事業によって国道周辺の宅地化が急速に進んでいる。標高10.1mの地表面下には厚さ約40cmの近・現代の水田層が広がっている。その下には黄褐色の砂質土が堆積しており、弥生時代～中世にわたる遺構はこの上面から掘りこまれている。この遺跡の形成がはじまるのは弥生時代後期である。今回の調査では土壙4基を検出するに留まったが、水道管埋設に伴う立会調査では交差点の北東角で後期の竪穴住居が検出されており、安定した集落が営まれていたものと思われる。

古墳時代に入ると遺構は増加し、竪穴住居9軒、建物1棟、土壙3基、溝1条を数える。これらは前～後期の各期にわたっており、弥生時代末から継続して集落が営まれていた様子が窺える。また、竪穴住居の中には鍛冶滓を出土するものがあり、井手見延遺跡と同様に集落内で鉄器生産が行われていたことを示している。

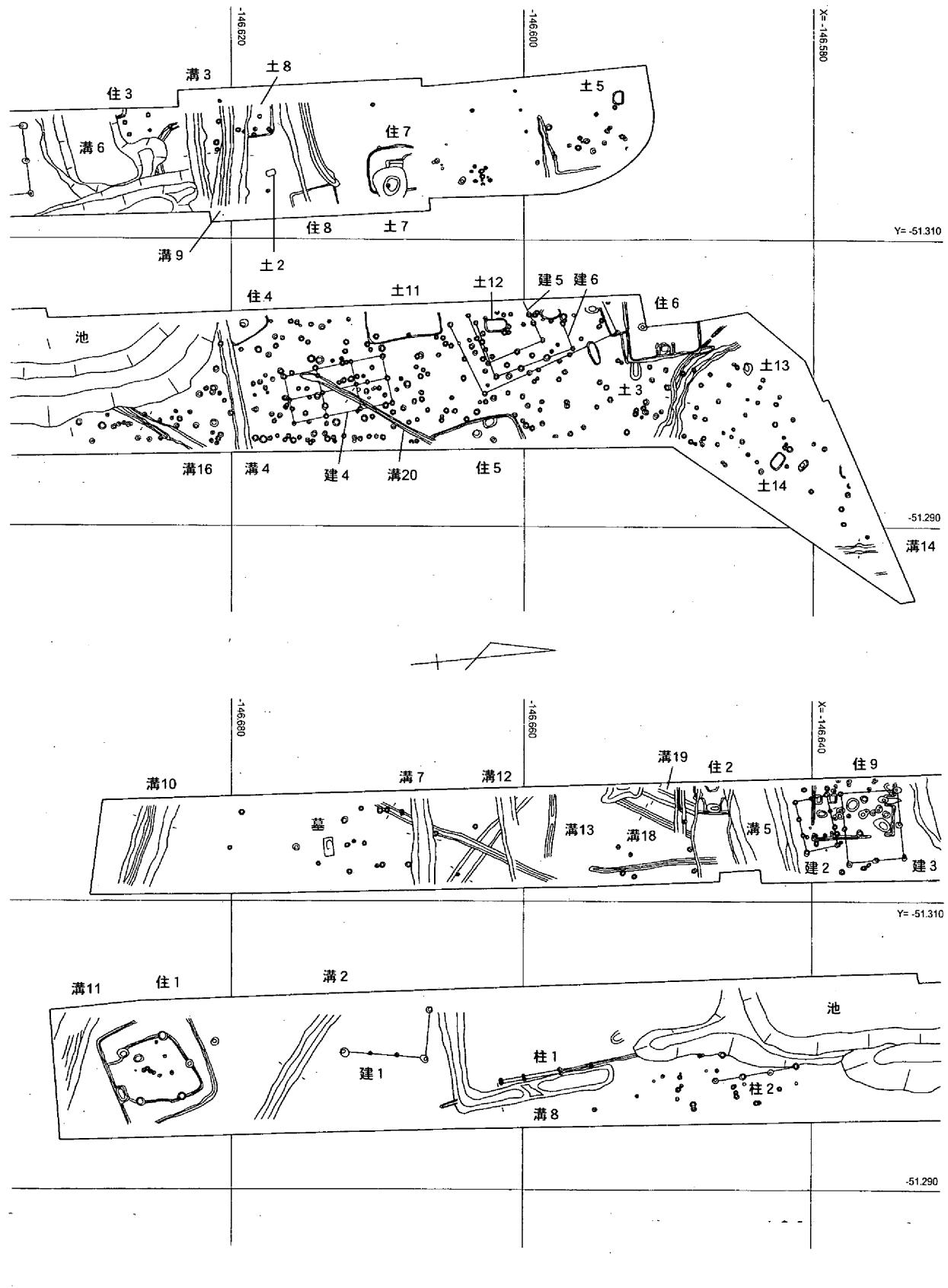
古代の遺構には掘立柱建物1棟、溝1条がある。奈良時代には溝しか確認できず、居住地としての利用はなされていなかった可能性があるが、平安時代後期には再び掘立柱建物が現れており、中世に展開する集落の先駆けをなすものとして理解される。

中世には、掘立柱建物6棟のほか、土壙5基、土壙墓1基、溜池状遺構、溝15条がある。掘立柱建物は北側に集中する傾向にあり、その多くは鎌倉時代に属するものと思われる。区画を思わせる溝も見られることから、屋敷を構成していた可能性がある。また、溜池状遺構は室町時代後期に掘削された後、江戸前期に掘り直しが行われている。

このほか、包含層から出土した陶器に、井手見延遺跡の客土から出土した陶器との接合関係が認められ、明治以降に採土を兼ねた地下げが行われていたことが判明した。 (亀山)



第194図 調査区配置図 (1/3000)



第195図 遺構全体図 (1/400)

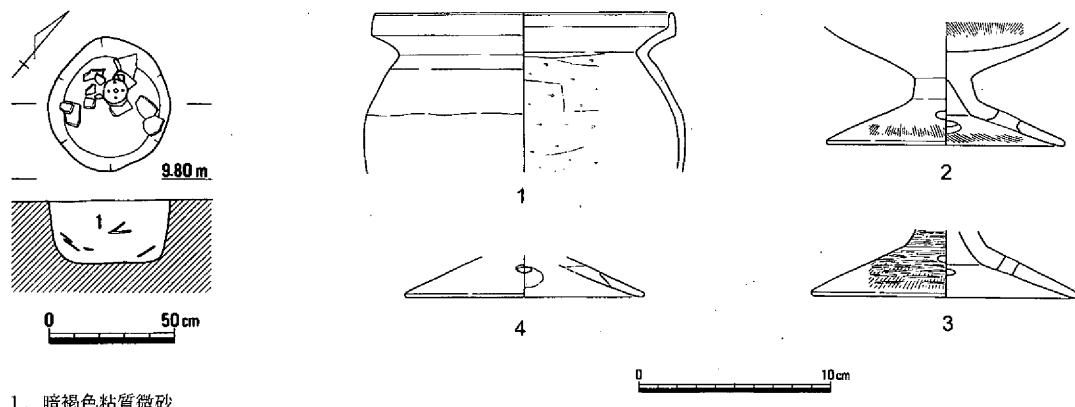
第2節 弥生時代の遺構・遺物

(1) 土壙

土壙1 (第196図)

土壙1は27区中央部に位置する。平面形は直径0.5m前後の円形を呈し、検出面からの深さ0.25m、底面の標高9.47mを測る。断面形はU字形である。埋土中に土器片が比較的多く包含されていた。1は灰白色を呈する甕、2～4は橙～明赤褐色を呈する短脚の高杯である。高杯2は内外面に細かいハケメが見られ、胎土は精良である。高杯3は脚部外面に横方向の細かいヘラミガキが施されている。胎土は精良である。

これらの土器の特徴から土壙1の時期は弥・後・IVと推定される。土壙1の形状は柱穴に類似するが、周辺には中世の柱穴が僅かに検出されたのみである。
(物部)



1. 暗褐色粘質微砂

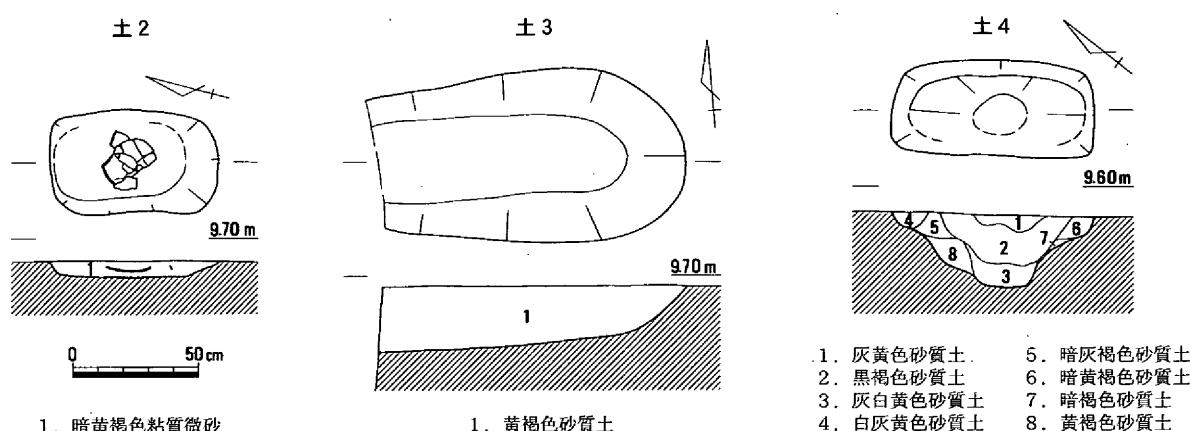
第196図 土壙1・出土遺物 (1/30・1/4)

土壙2 (第197図)

30区の南寄りに位置する土壙で、長軸をほぼ南北にもつ隅丸長方形の平面形を呈する。その規模は長軸0.67m、短軸0.4m、検出面からの深さ0.06mを測り、ほぼ平坦な底面の標高は9.55mである。埋土は暗黄褐色粘質微砂の単層で、遺物は同一個体と考えられる甕片を土壙中央の底面からやや浮いた状態で検出している。

土壙の時期は、出土遺物の特徴から弥生時代後期に属するものと考えられる。

(高田)



第197図 土壙2～4 (1/30)

土壤3 (第197図)

16区に所在し、竪穴住居6に西側を削平されている。規模は現状で長さ1.26m、幅0.69mを測り、平面橿円形を呈する土壤である。深さは検出面から0.26mを測り、西側に向かい徐々に下がっている。埋土は黄褐色砂質土の1層である。

時期は、遺物が出土していないが、埋土の状況などから弥生時代後期と考えられる。 (小嶋)

土壤4 (第197図)

16区の北側に位置する土壤である。検出面での平面形は長辺0.79m、短辺0.38mを測る長方形を呈している。深さは0.39mを測り、底面は中央部で径0.2m程の円形を呈している。断面形は東側が二段、西側が三段となっている。埋土は8層からなり、第1～3層は炭・焼土を多く含んでいた。

出土土器は少なく小片であったため図示できなかった。

時期は弥・後・IVである。 (小嶋)

(2) 遺構に伴わない遺物 (第198図)

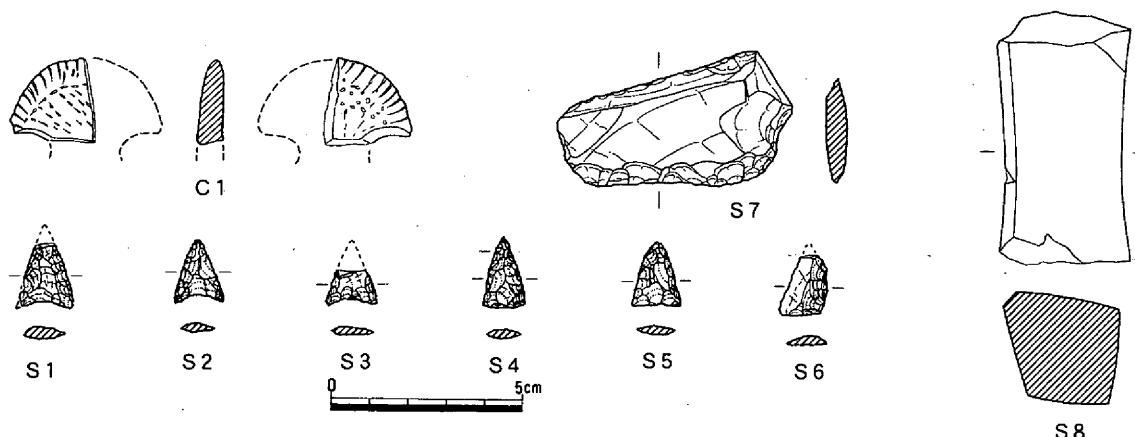
古墳時代の竪穴住居や中世の溝などから弥生時代の遺物が若干出土している。これらは、その特徴から弥生中～後期に属するものと推定される。

C1は分銅形土製品の一部で、幅4cm、厚さ0.8cm余りの小形品になるものと思われる。弧状をなす縁に沿って斜めの刻み、その内側に棒状工具による刺突が、両面から密に施される。後期前半に位置付けられるもので、粗砂を含む胎土をもち、黒褐色の外観を呈する。竪穴住居5の柱穴内から出土した。

石器には、サヌカイト製の石鏃S1～6とスクレーパーS7、流紋岩製の砥石S8がある。石鏃は凹基式S1～3と平基式S4～5に区分される。前者は長さ1.6～2.3cm、幅1.3～1.4cm、重量0.4～1.0gを測る。後者は長さ1.7～1.8cm、幅1.2～1.3cm、重量0.5～0.6gを測る。長さ1.6cm、幅1.2cmを測るS6は、2側辺に調整を加えているものの整った形状をなしておらず、石鏃の製作途上で廃棄されたものと思われる。

S7は、長さ6.2cm、幅3.6cm、厚さ0.6cmを測る小形のスクレーパーで、一側辺に調整を加えて刃部としている。中世の溝から出土した。

S8は流紋岩製の砥石で、一辺3.5～3.8cmの方柱状をなし、両端を欠いているものの現状で6.6cmを測る。遺構検出中の出土である。 (龜山)



第198図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)

第3節 古墳時代の遺構・遺物

(1) 竪穴住居

竪穴住居1 (第199~201図 図版30・34)

13区の最も南に位置する。検出面での平面形は方形を呈する。規模は、計測可能な部分で長軸約7.30m、短軸約6.86mを測る。主柱穴は、平面形が方形にもかかわらず5本有する。柱穴間においては、南辺を除いてそれを結ぶ浅い溝を確認した。床面の周囲には壁体溝が巡る。柱穴間を結ぶ溝と壁体溝の間には高床部を設ける。住居南辺中央やや東よりにおいて方形の土壙を、床面中央やや西よりにおいて長楕円形の土壙を検出した。また、床面中央付近で焼土面を3箇所検出した。この内最も南の焼土面は非常に焼け締り、その下には堀込みを確認することができた。

埋土中および床面直上からは炭化材、炭、焼土を多く検出した。炭化材は外から中央に向かう形で出土し、多くが屋根材の一部であったことが推察される。主柱は確認できない。焼土は炭化材の上層より出土し、これも屋根材の一部だったと推測できる。この竪穴住居は焼失したものと考える。その焼失原因には、柱穴において柱痕が確認できること、柱穴の埋土中に炭、焼土を多く含むこと、さらには使用に耐え得る土器が出土しないことから、竪穴住居をある程度解体した後に火を放つ、意図的な放火が想定できるのではないか。ところで、出土した炭化材の樹種鑑定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼したところ、コナラ属コナラ亜属クヌギ節とコナラ属コナラ亜属コナラ節の二種類があるとのことであった。

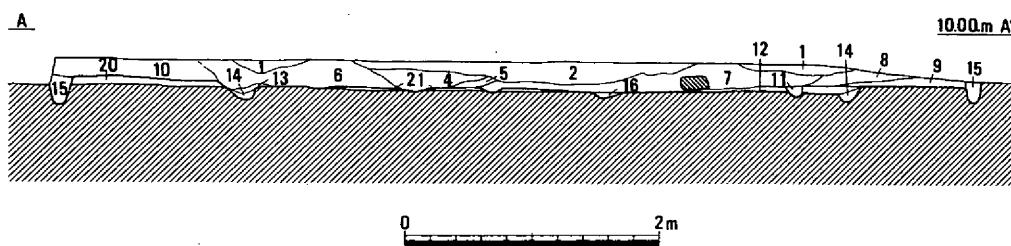
遺物は土師器、石器、鉄器が出土した。いずれも床面、あるいは炭化材・焼土とともに床面直上の埋土中より出土した。甕5は体部外面に煤が付着する。体部内面はケズリの後、工具によるナデをおこなう。甕6・7・9・10は口縁部に櫛描き沈線文を施す。いずれも体部内面の調整技法はケズリである。10の体部外面はハケ調整の後、ミガキにより仕上げる。煤が付着する。高杯11は杯部内外面とともにミガキ、工具によるナデにより仕上げる。高杯12・13は脚柱部のみ出土した。両者とも胎土は精製されたもので、外面の調整はミガキである。12は屈曲部付近に丸い透かし孔を穿つ。14~17は鉢である。鉢15は外面において木葉圧痕を確認した。これは、土器形成の調整過程がすべて終了した後、木の葉を沿えて再度その形を整えた痕跡であろう。M1は鉄鏃破損品である。残存重量は4.2g。S9は流紋岩製砥石の破損品である。遺構の廃絶時期は古・前・IIの中に収まると考える。 (重根)

竪穴住居2 (第202図 図版30・34)

竪穴住居2は28区北半部、竪穴住居1の北北西約37mに位置する。調査区の西壁沿いで検出され、住居の西半は調査区外になり、北端部は溝5によって切られている。壁体溝・高床部・方形土壙を持つ平面方形を呈する竪穴住居である。規模は推定で南北5.0m、検出面からの深さ0.25mを測る。床面の標高は9.36mである。柱穴は床面南東部の高床部内側角に1基検出されたことから、4本柱と考えられる。柱穴の直径は0.45×0.72mで、深さは0.27mを測る。床面の周囲には高床部がみられ、幅0.9m、高さ6cm前後を測る。また、東辺の中央部は1.15mにわたって高床部が途切れ、そこにやや不正形ではあるが方形土壙を設置している。方形土壙の規模は0.9×0.6m、深さ0.3mで、壁は垂直にちかい。さらに、床面中央部は深さ7cm前後深くなっている、その平面形は楕円形を呈すると思われる。

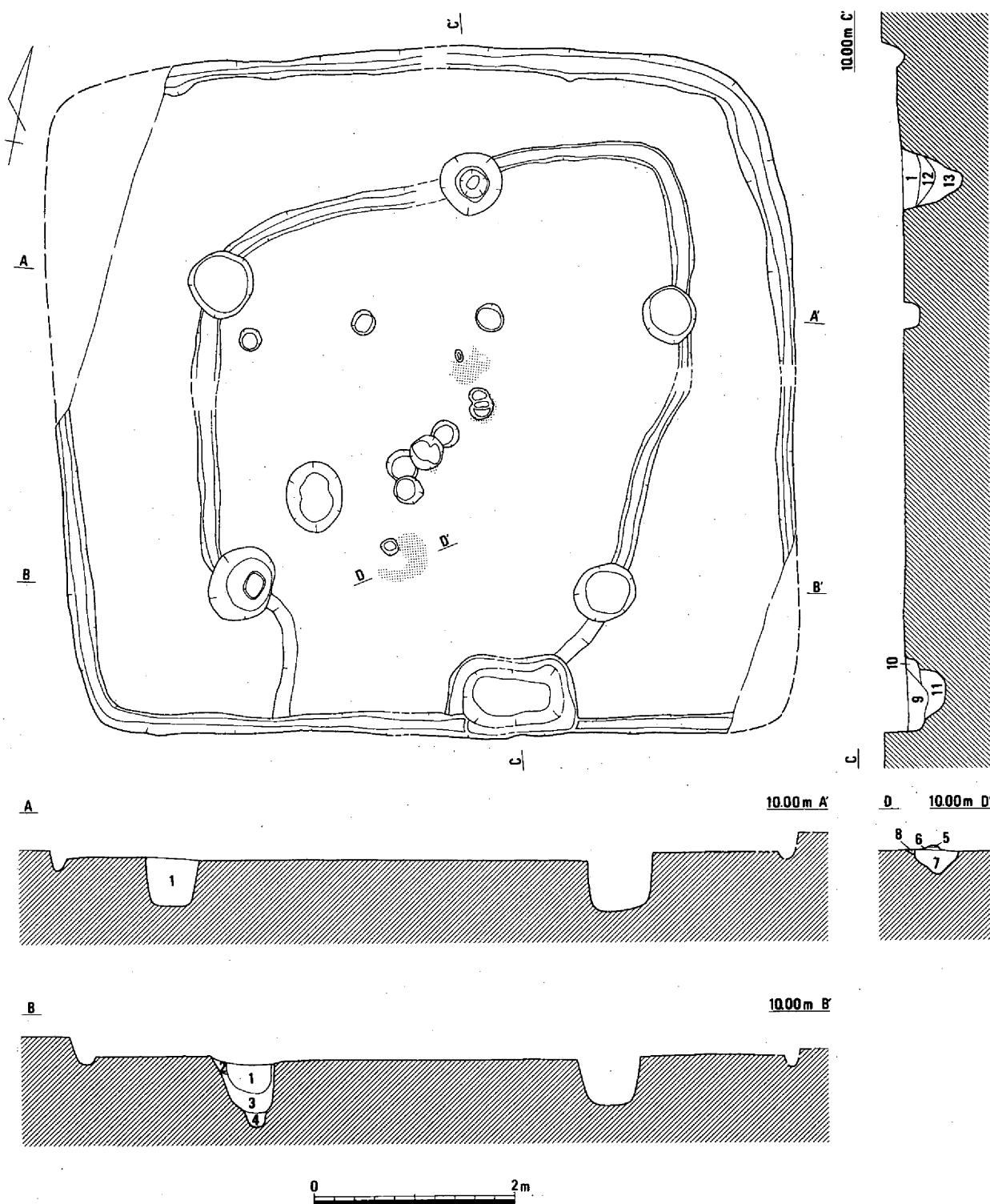
遺物は埋土中から土師器が多く出土した。18は浅黄橙色を呈する甕で、口縁端部外面に櫛描沈線

がみられる。体部が内面過半には指頭圧痕が著しい。23~27はにぶい橙色を呈する小形の壺で、口縁部は大きく外方に開き、底部は丸底である。25壺の胎土は精良である。鉢には小形と大形があり、小形の鉢には口縁部が体部からそのまま内湾し丸くおさまる皿形の鉢19~22と、口縁部が屈曲して外傾して伸びる鉢28、口縁部が甕の口縁部のように短く立ち上がる鉢29の3種類がある。鉢19~22はにぶい黄橙色～にぶい赤褐色を呈し、外面過半はヘラケズリを施す。胎土は1mm以下の砂粒を含む。



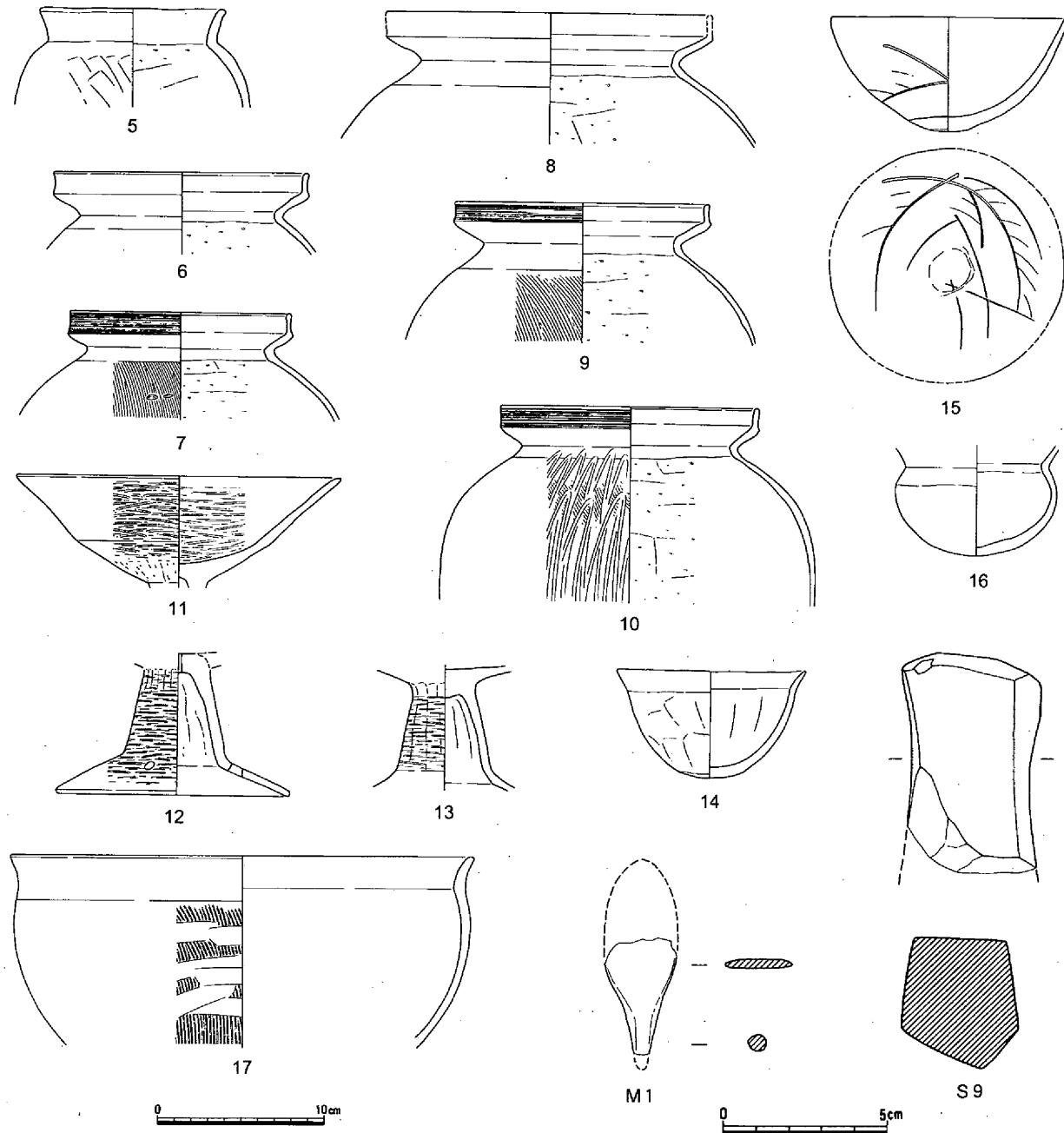
- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 灰黄褐色砂質土(炭・焼土少し含む) | 11. 暗灰褐色砂質土(炭・焼土少し含む) |
| 2. 暗灰黄褐色砂質土(炭・焼土少し含む) | 12. 暗灰黄色砂質土(炭・焼土少し含む) |
| 3. 暗灰黄褐色砂質土(炭・焼土多く含む) | 13. にぶい黄色砂質土 |
| 4. 暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む) | 14. 暗灰褐色砂質土(炭・焼土含む) |
| 5. 黄褐色粗砂(炭・焼土少し含む) | 15. 褐灰色砂質土(炭・焼土少し含む) |
| 6. 暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む) | 16. 暗灰褐色砂質土(炭・焼土含む) |
| 7. 暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む) | 17. 焼土層 |
| 8. 灰褐色砂質土(炭多く、焼土少し含む) | 18. 炭層 |
| 9. 黄褐色砂質土(炭多く、焼土少し含む) | 19. 暗褐色砂質土(炭・焼土少し含む) |
| 10. 暗灰黄褐色砂質土(炭・焼土含む) | 20. 暗灰黄色砂質土(高床部造成土) |
| | 21. 明黄色粘質微砂(貼り床) |

第199図 積穴住居1検出状況（1/60）



- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1. にぶい黄褐色砂質土(炭・焼土含む) | 8. 暗黄灰色砂質土(焼土含む) |
| 2. 暗黄褐色砂質土(炭・焼土含む) | 9. 暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む) |
| 3. 暗黄褐色粘質砂(炭・焼土含む) | 10. 暗灰黄褐色砂質土(炭・焼土少し含む) |
| 4. 黄色粗砂 | 11. 暗灰色砂質土(炭・焼土少し含む) |
| 5. 焼土層 | 12. 黄灰色粘質粗砂(炭・焼土少し含む) |
| 6. 炭層 | 13. にぶい黄色粘質粗砂(炭・焼土含む) |
| 7. 暗灰褐色砂質土(炭・焼土含む) | |

第200図 壇穴住居1 (1/60)



第201図 堅穴住居1出土遺物（1/4・1/2）

30・31は二重口縁を持つ大形の鉢で、橙色～にぶい橙色を呈する。鉢30の口縁部端部は僅かに内湾して立ち上がり先端もそのまま收まる。32はにぶい橙色を呈する高杯で、脚部は中空気味である。胎土は1～2mm大の砂粒を含む。

時期はこれらの土器の特徴から、古墳時代前期前半と考えられる。

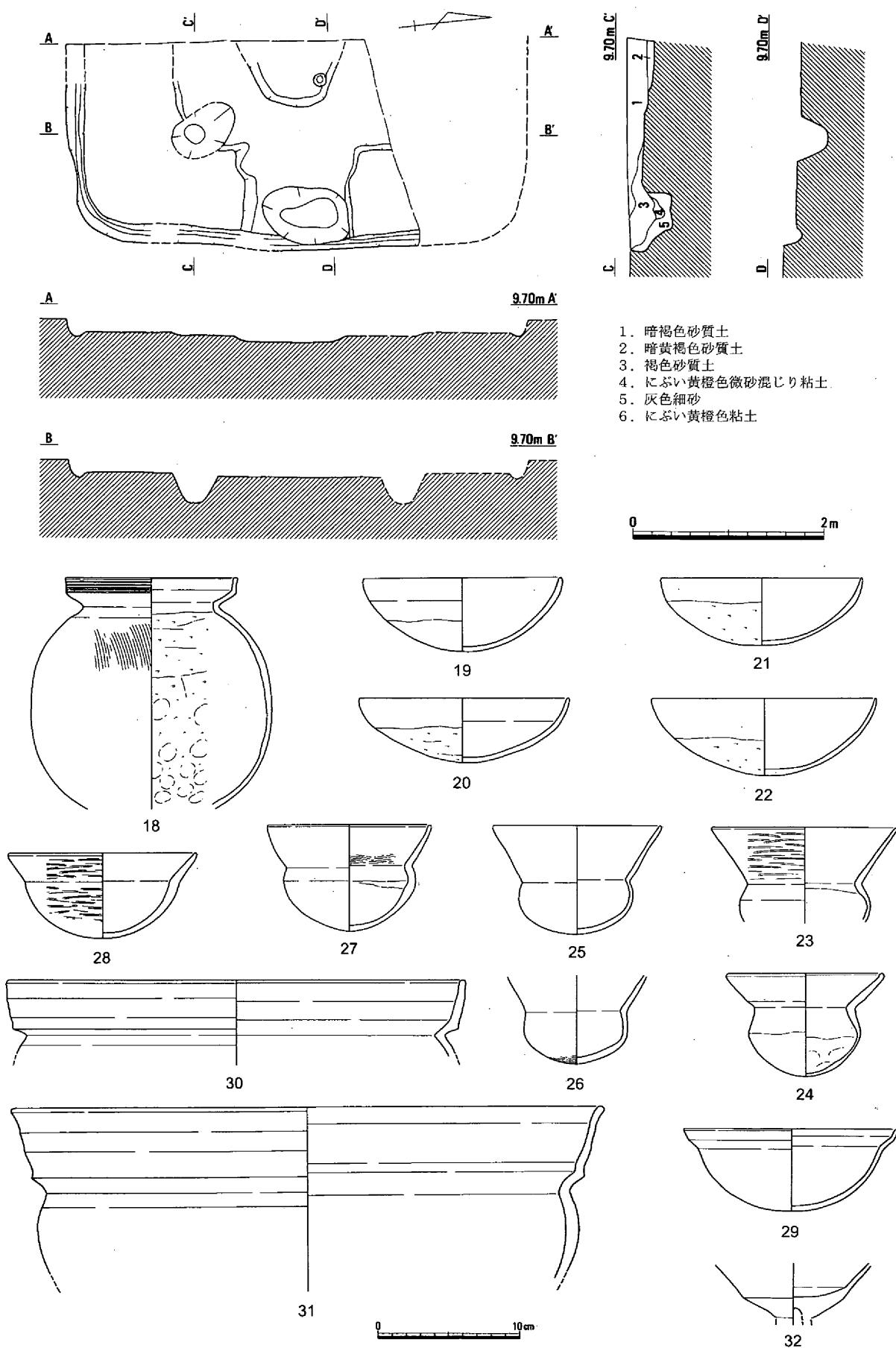
(物部)

堅穴住居3（第203図）

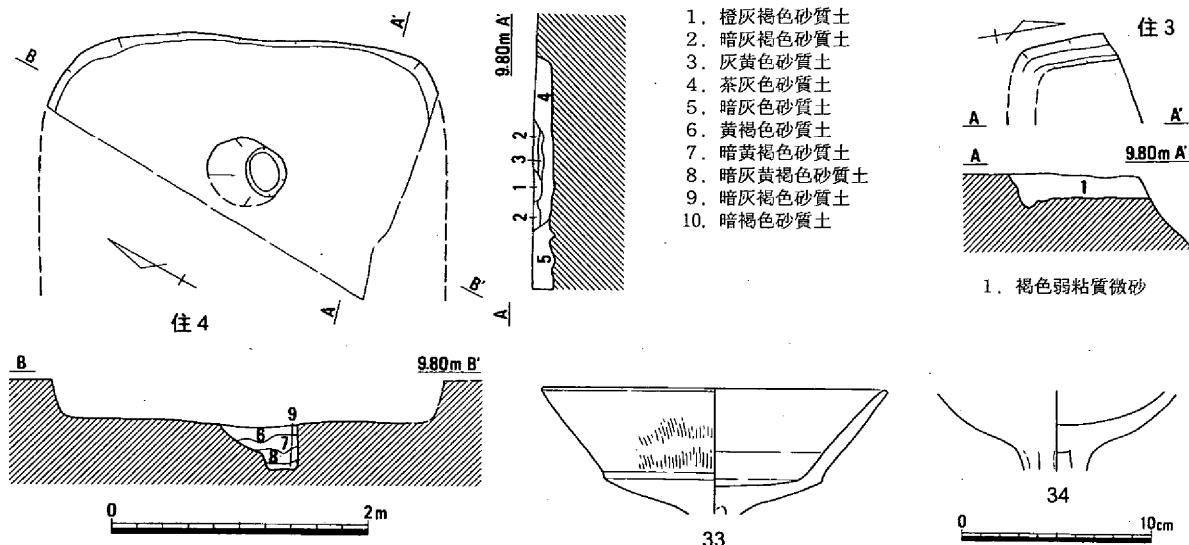
堅穴住居3は29区北部の西壁沿いに位置する。住居の大半は溝6によって削平されており、検出されたのは北東角部分だけである。壁体溝を持つ方形の堅穴住居と考えられる。壁体溝の幅約0.14m、深さ約8cm、床面の標高は9.51mを測る。

出土遺物は無く、従って、古墳時代という以上に時期を限定し難い。

(物部)



第202図 壇穴住居2・出土遺物 (1/60・1/4)

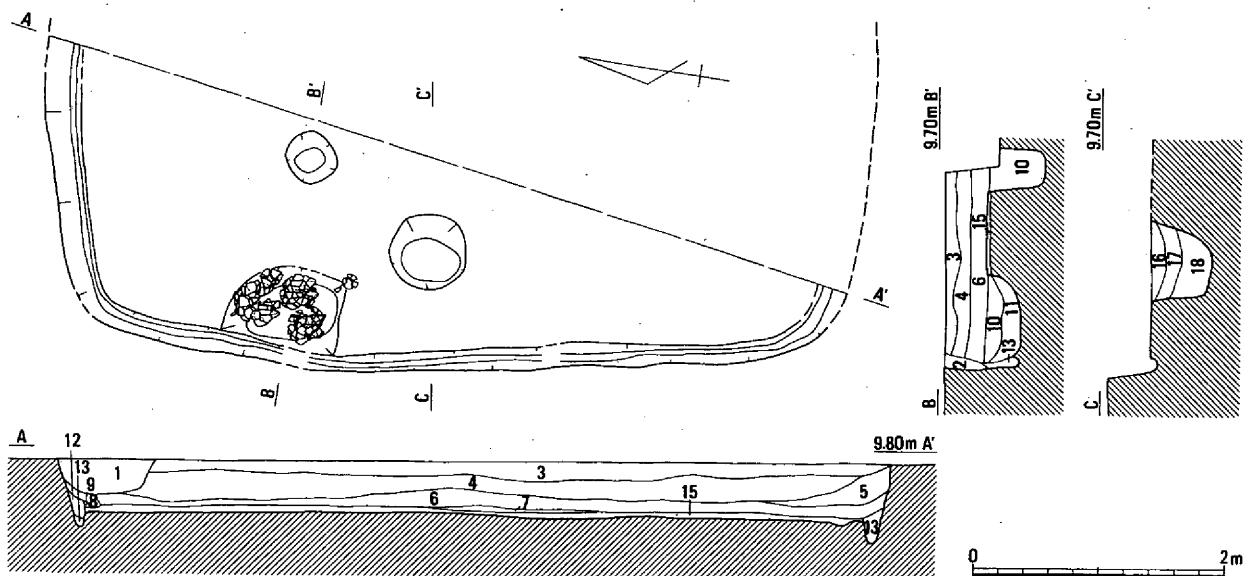


第203図 壇穴住居3・4・出土遺物(1/60・1/4)

壇穴住居4(第203図)

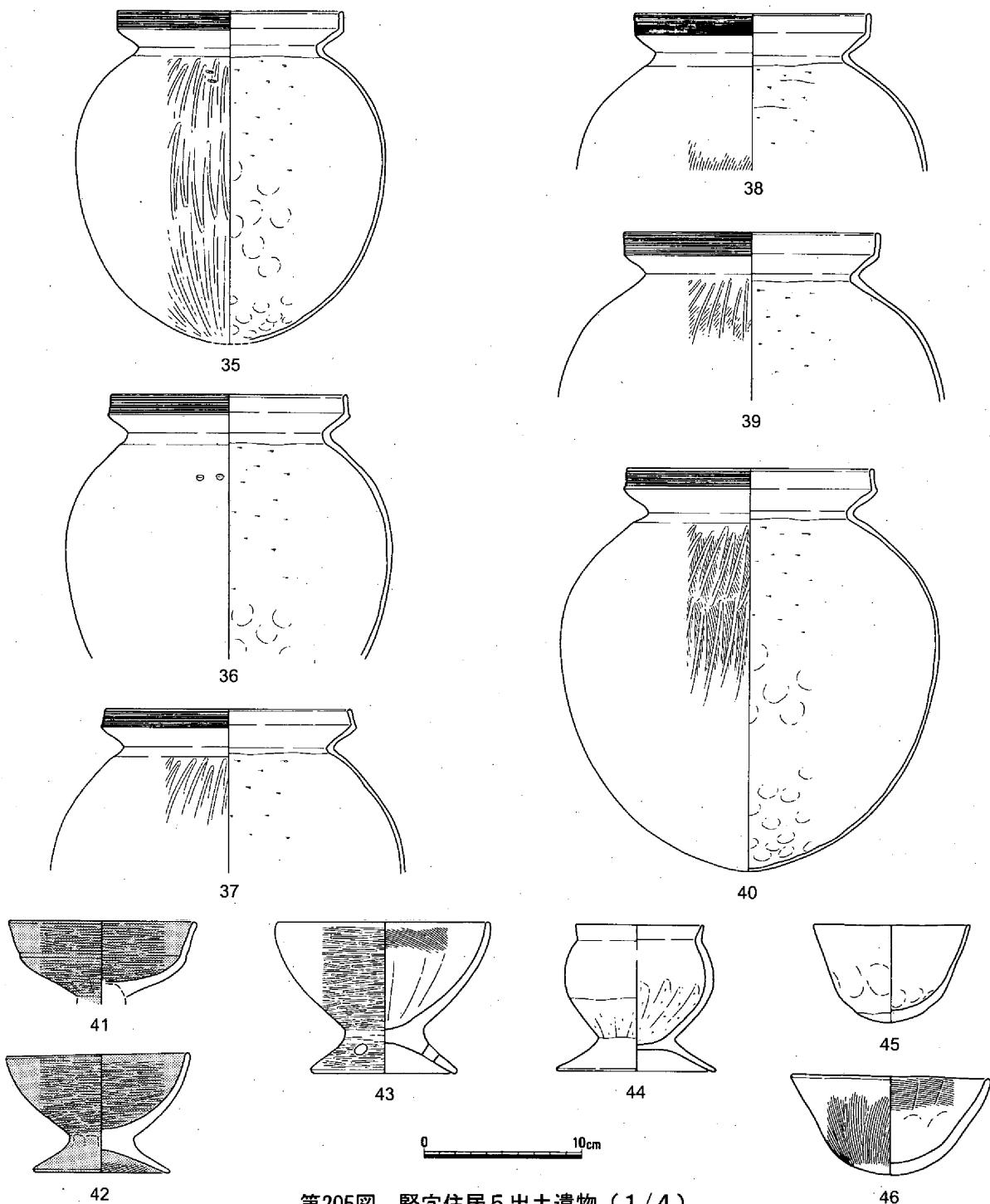
15区の中央西側に位置する。平面形は、南側を溝4により削平され、西側は調査区外に及んでいるため不明であるが、一辺約3mの隅丸方形を呈すると考えられる。床面は検出面から約0.3mを測り、ほぼ平坦であった。壁体溝は認められない。柱穴は一基認められ、楕円形の掘り方をもち、深さは0.35mを測る。この柱穴の位置から主柱穴は2基と考えられる。遺物は33・34の高杯が出土しており、時期は古墳時代前期前半と考えられる。

(小嶋)



- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1. 暗褐色砂質土 | 10. にぶい黄褐色砂質土(明黄色微砂含む) |
| 2. 暗黄褐色粘質微砂 | 11. 暗茶褐色粘質微砂 |
| 3. 黑褐色粘質微砂(炭・焼土多く含む) | 12. 暗黄褐色砂質土 |
| 4. にぶい黄褐色砂質土(炭・焼土含む) | 13. 暗褐色砂質土 |
| 5. 黄褐色砂質土 | 14. 暗茶褐色砂質土(炭・焼土少し含む) |
| 6. 暗黄褐色砂質土 | 15. 明黄褐色砂質土(貼り床) |
| 7. 黄褐色砂質土(炭・焼土多く含む) | 16. 暗茶褐色砂質土(炭・焼土少し含む) |
| 8. 暗黄褐色砂質土(炭・焼土含む) | 17. 暗茶褐色粘質微砂(炭・焼土少し含む) |
| 9. 暗褐色砂質土 | 18. 暗黄褐色粘質微砂(炭・焼土少し含む) |

第204図 壇穴住居5(1/60)

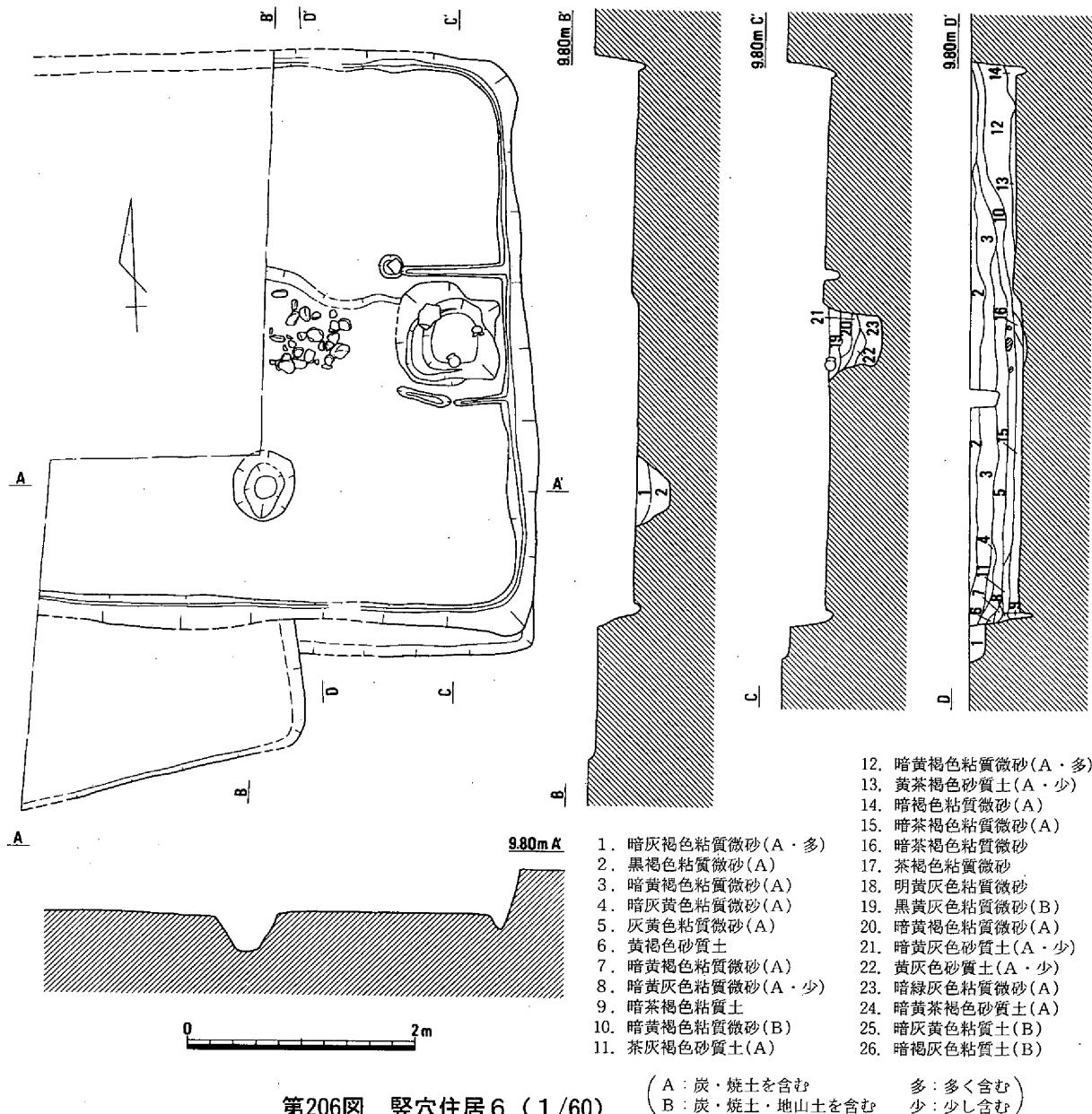


第205図 墓穴住居5出土遺物 (1/4)

墓穴住居5 (第204・205図 図版34)

15区の北東隅で検出され、墓穴住居4の北東約7mに位置する。大部分が調査区外に存在し、約1/4を検出したにすぎないが、一辺約6.3mを測る隅丸方形を呈していたと考えられる。検出面から約0.4mの深さを測る床面は平面隅丸方形を呈し、約0.2mの深さの壁体溝に囲まれている。西辺の中央北側には壁に沿って長辺0.9m、短辺0.6m、深さ0.25mの方形土壙が確認された。この土壙からは35・37・40の土器が出土している。床面は明黄褐色砂質土で貼り床されていた。遺物は、35～40の口縁部に櫛描沈線文を施す甕、内外面に赤色顔料が塗られている41の高杯・42の鉢と43～46の鉢が出土している。時期は古・前・IIと考えられる。

(小嶋)



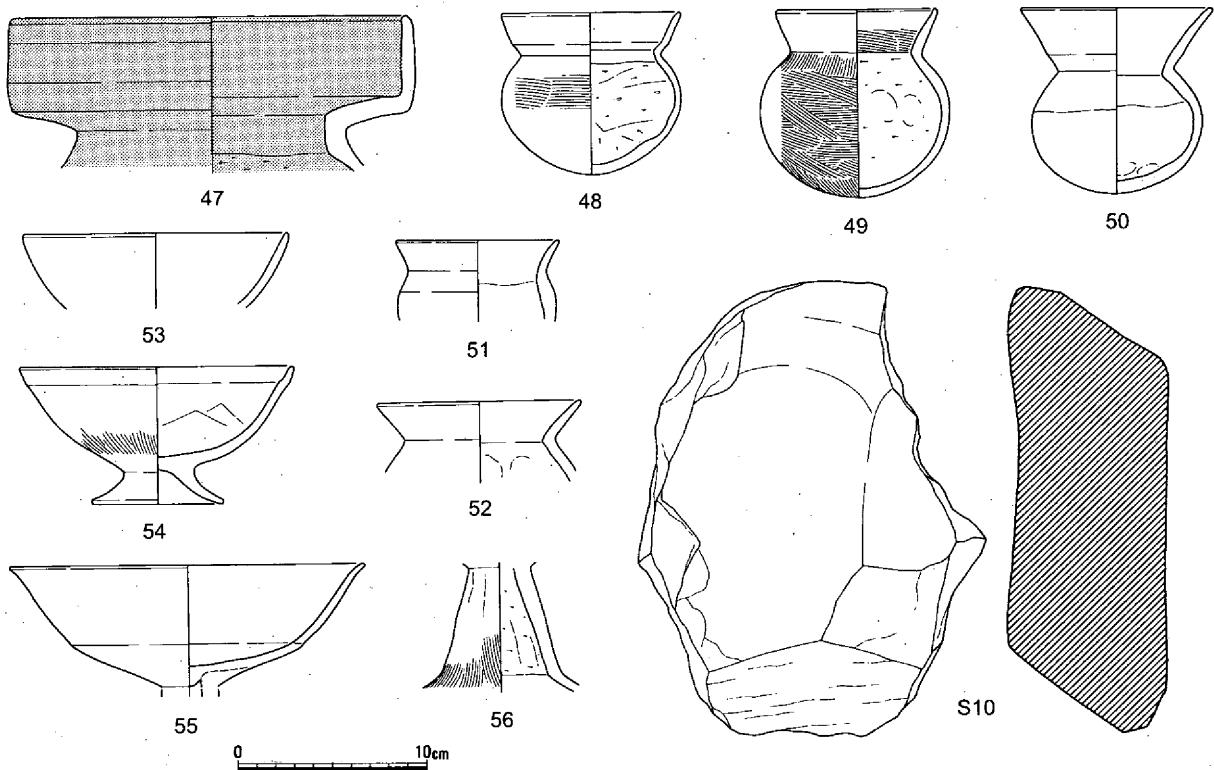
竪穴住居6 (第206・207図 図版31・35)

16区の中央西端で検出した竪穴住居である。西辺と北辺の一部は調査区外となるが、平面形は方形を呈するものと考えられる。検出時の規模は、南北長5.12m、深さ0.45m、床面最深部の標高9.2mを測る。床面には、北東部に高さ0.1mの高床部を造りつけ、東辺中央に接して0.9×0.95m、深さ0.5mの方形土壙を設けている。壁体溝は各辺に沿う幅の狭いもので、深さ0.1m前後を測る。また、この壁体溝から方形土壙を挟む位置には2条の間仕切り溝が延びる。主柱穴は2本と推定され、検出した1本の規模は径0.6m、深さ0.3mを測る。住居のほぼ中央と考えられる位置には拳大程度の円礫が集中している。なお、南辺に接する2カ所の浅い落ち込みは、竪穴住居6に先行する遺構である。

図示した遺物のうち、47～56は土師器で壺・鉢・高杯の器種がある。47は壺の二重口縁部で、内外面に赤色顔料を塗布する。54は山陰系と考えられる台付鉢である。48～50は完形品の小形丸底壺で、いずれも方形土壙の上層部からの出土である。S10は花崗岩製の石皿である。

竪穴住居の廃絶時期は、出土遺物から古・前・Ⅲと考えられる。

(高田)



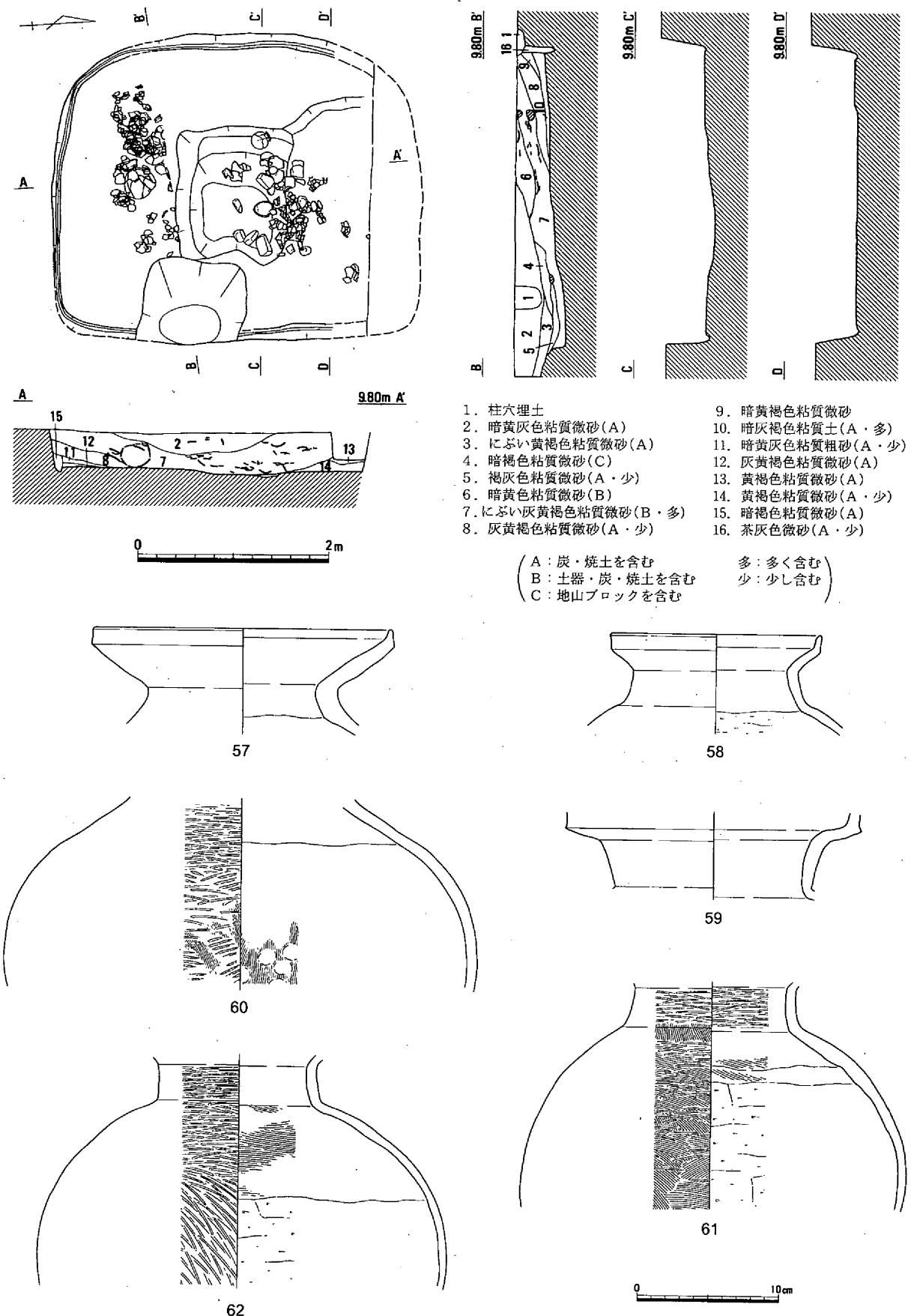
第207図 竪穴住居6出土遺物（1/4）

竪穴住居7（第208～212図 図版31・35）

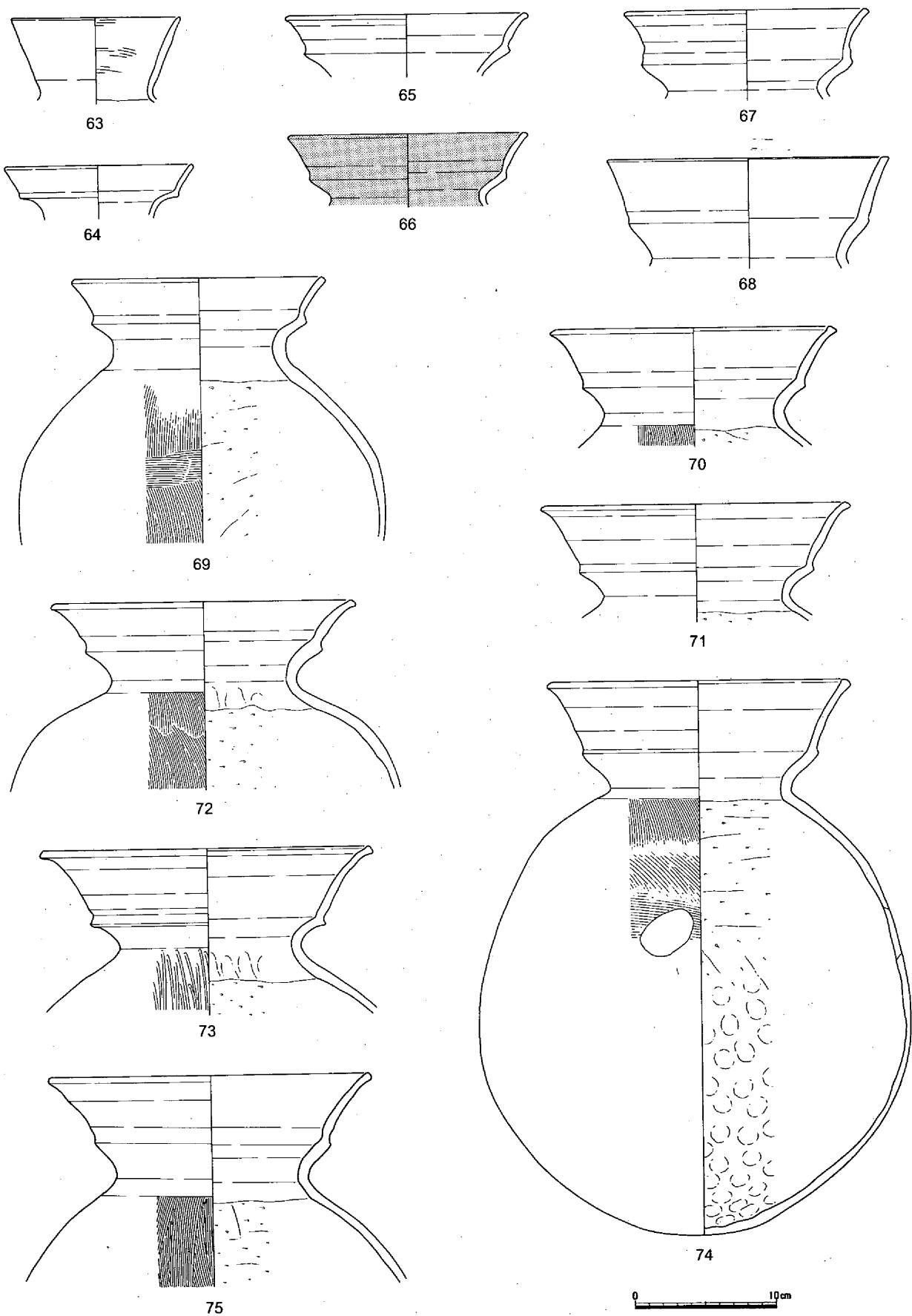
30区のほぼ中央で検出した竪穴住居で、上部に土壙7が位置する。調査区境となるために北辺を検出していないが、直線的な東・南辺とやや弧を描く西辺の構成から平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。検出時の規模は、東西長3.29m、深さ0.5m、床面最深部の標高9.04mを測り、周辺の竪穴住居と比較して最も低位となる。床面の構造は、周囲に幅0.8～1.2mの高床部を造りつけるが、北辺については一段低く不明瞭なものとなる。東辺の中央からやや南寄りには0.9×1.1m、深さ0.12m程度の浅い方形土壙を検出している。壁体溝は、垂直近くに立ち上がる壁に沿って巡る幅の狭いもので、不明な北辺を除く各辺で検出しているが、東辺では方形土壙に一部切られている。なお、柱穴その他の構造は認められなかった。埋土は、第208図断面の第11層の粗砂以外はほぼ近似した土質である。壁体溝から立ち上がる第15・16層は、壁体に沿って置かれた木質等の土質化したものと推定される。なお、第1層は中世柱穴の埋土、第2～5層は後述する土壙7の埋土である。

遺物は第6・7層にほぼ集中し、大量の投棄状況を示す。図示した57～140は土師器で、壺・甕・高杯・鉢・手焙り形土器・器台・製塩土器の器種がある。57～75・112・114は壺である。57～62は短い頸部をもつもので、60の外面にはタタキ成形痕がみられる。63は直立ぎみの口縁をもち、端部を丸く收める。64～75は外反する二重口縁で端部に面をもつものが多い。66は内外面に赤色顔料を塗布し、74は体部穿孔をする。112は手捏ねである。76～97は甕である。「く」字口縁76～81と、二重口縁82～97があり、二重口縁には櫛描沈線をもつものとナデるものがある。また、86・91・93・94の肩部には刺突記号がある。98～111は高杯である。脚柱部から屈曲して開く裾部に4つの透かし穴をもつものが多い。113・115～120は小形丸底壺である。121～132は鉢で体部外面をヘラケズリする。133は大形鉢、134・135は手焙り形土器、136～138は鼓形器台、139・140は製塩土器である。

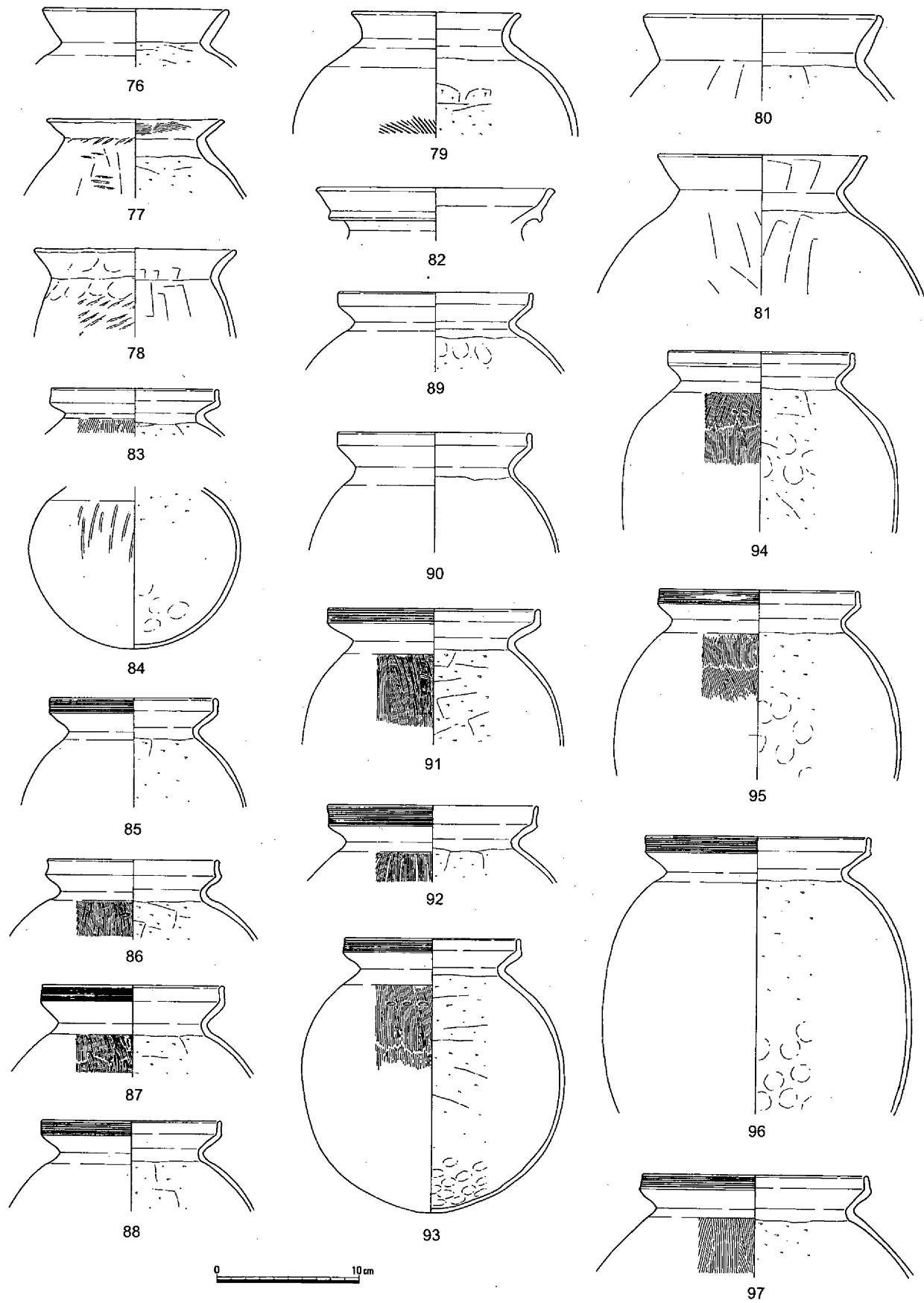
竪穴住居の廃絶時期は、出土遺物が概ね示す古・前・Ⅱに近いものと考えられる。 (高田)



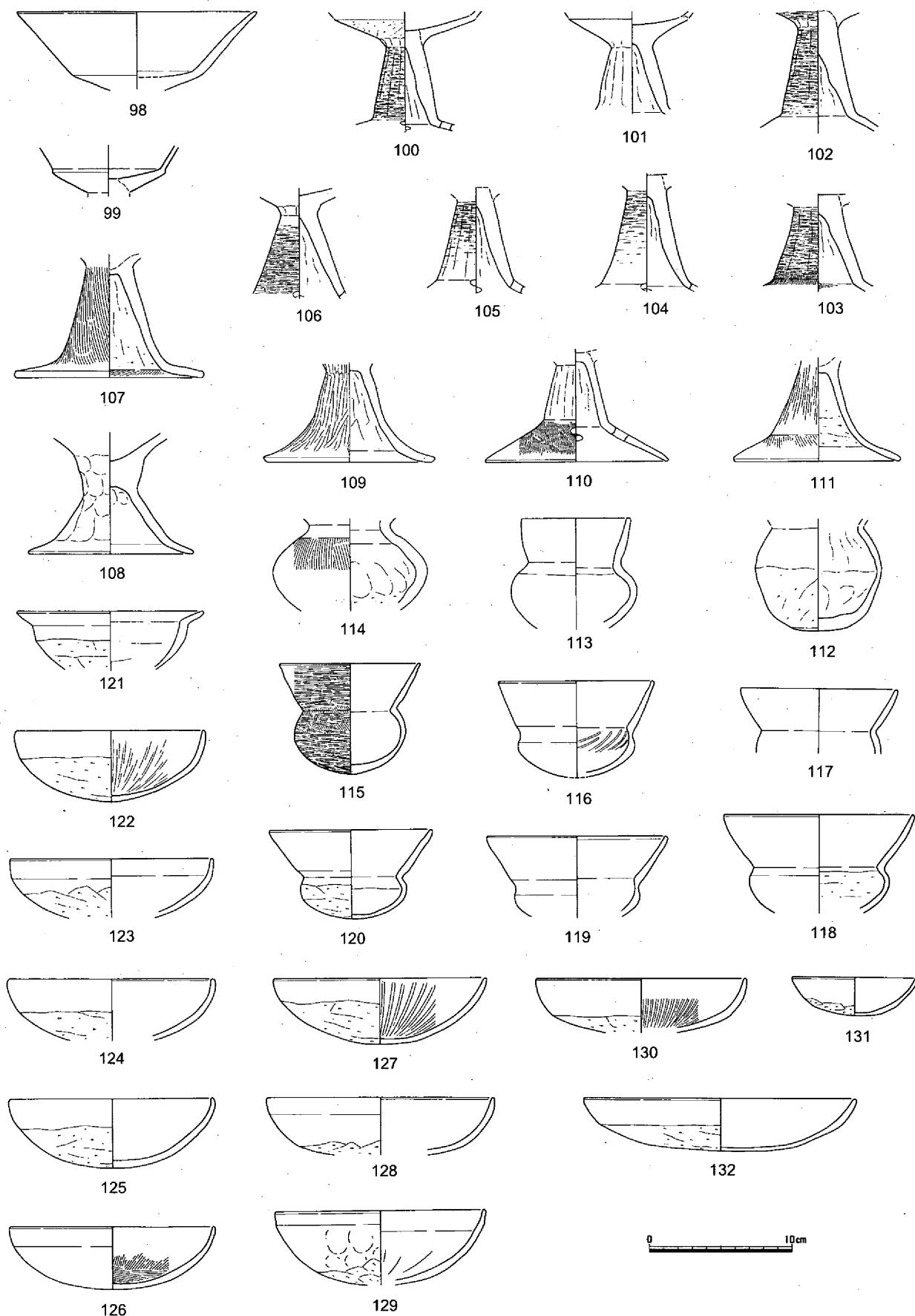
第208図 竪穴住居7・出土遺物1 (1/60・1/4)



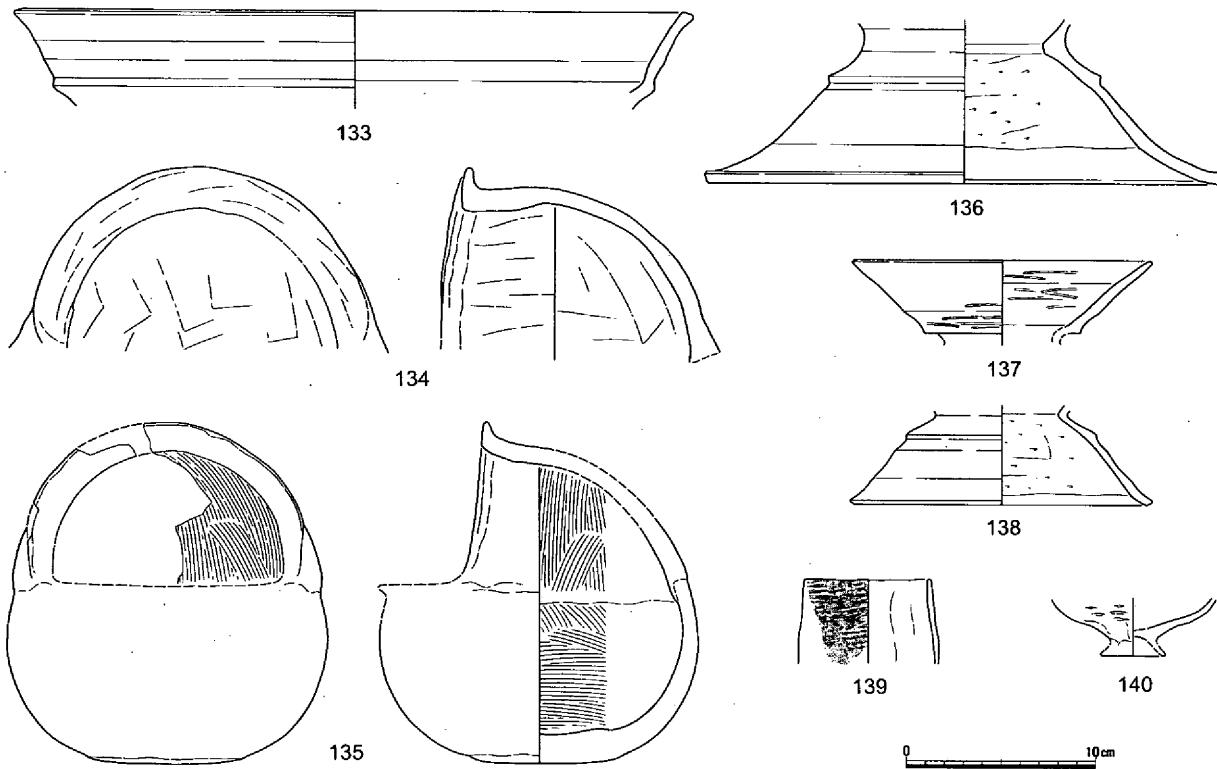
第209図 竪穴住居7出土遺物2(1/4)



第210図 積穴住居7出土遺物3 (1/4)



第211図 竪穴住居7出土遺物4 (1/4)



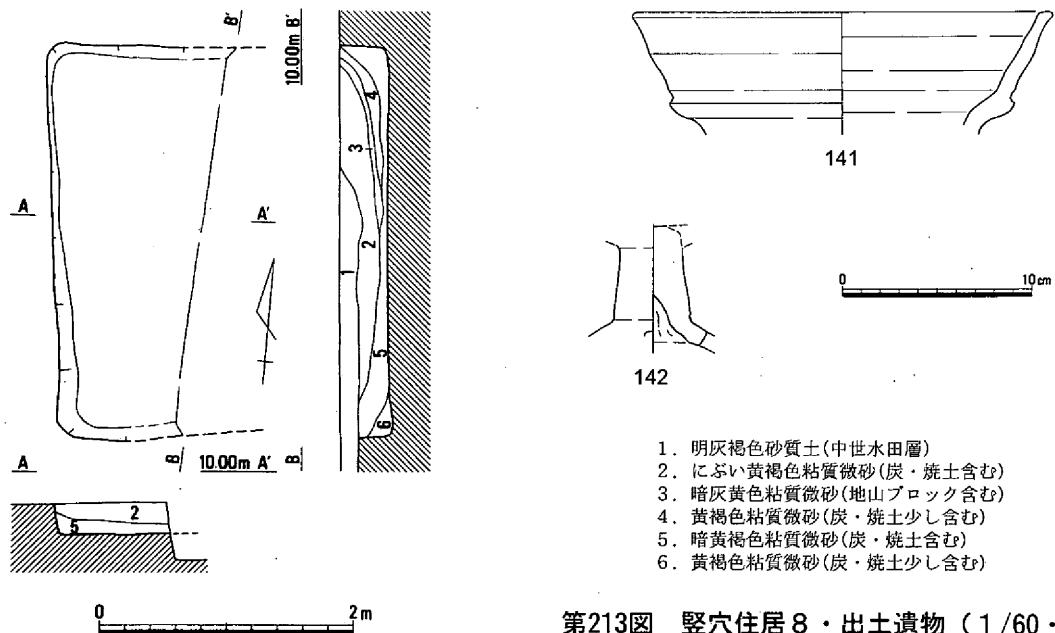
第212図 壇穴住居7出土遺物5（1/4）

壇穴住居8（第213図）

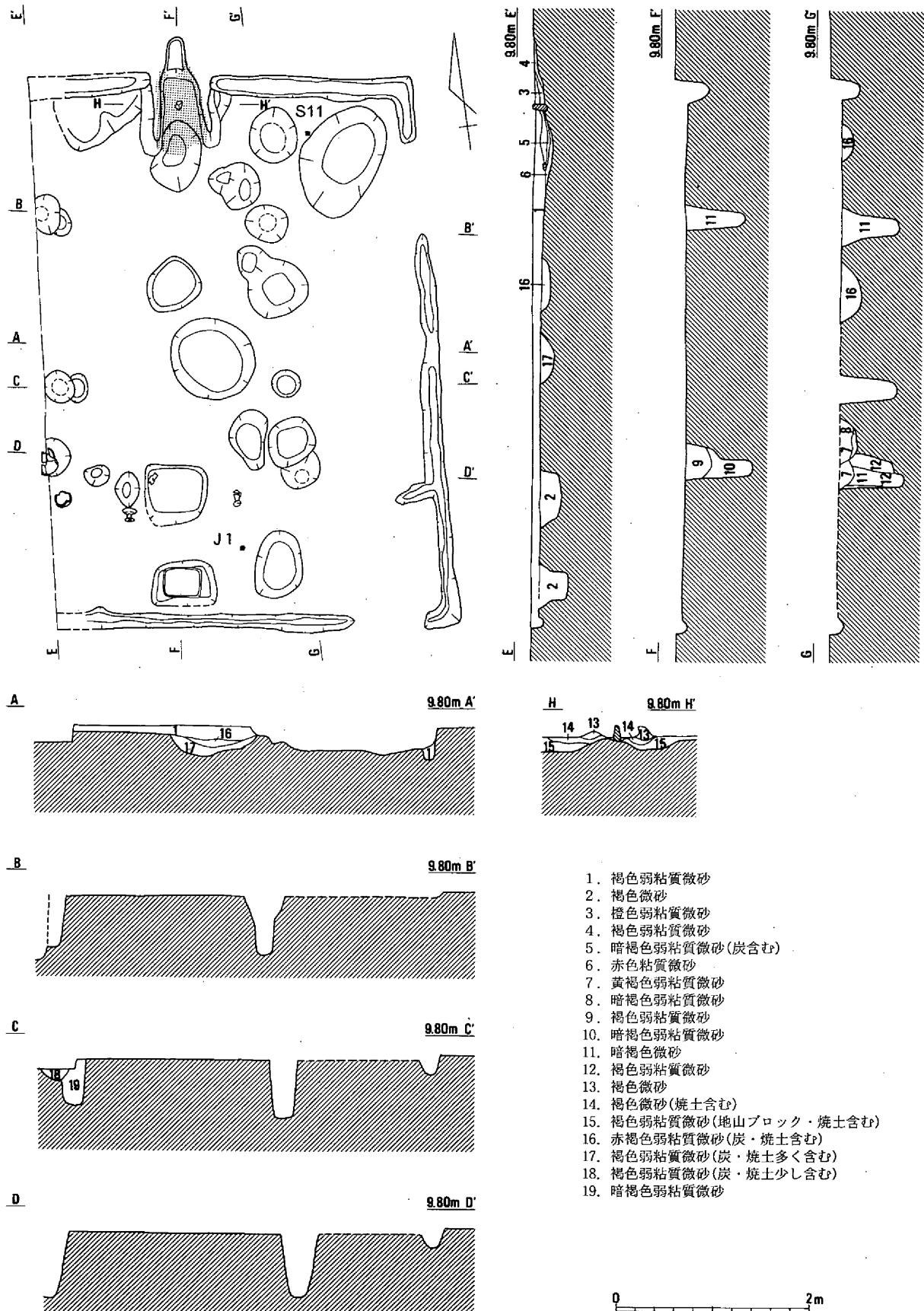
壇穴住居7の南約2.5mに位置するもので、東半部は調査区外となる。平面形は方形を呈すると考えられ、ほぼ平坦な床面から壁が垂直に立ち上がる。検出時の規模は南北長3.13m、深さ0.38m、床面の標高9.3mを測り、検出範囲において柱穴やその他の床面構造は認められない。

出土遺物は土師器と2点の鍛冶滓で、そのうちの1点は凹面にガラス質が付着した椀形滓である。

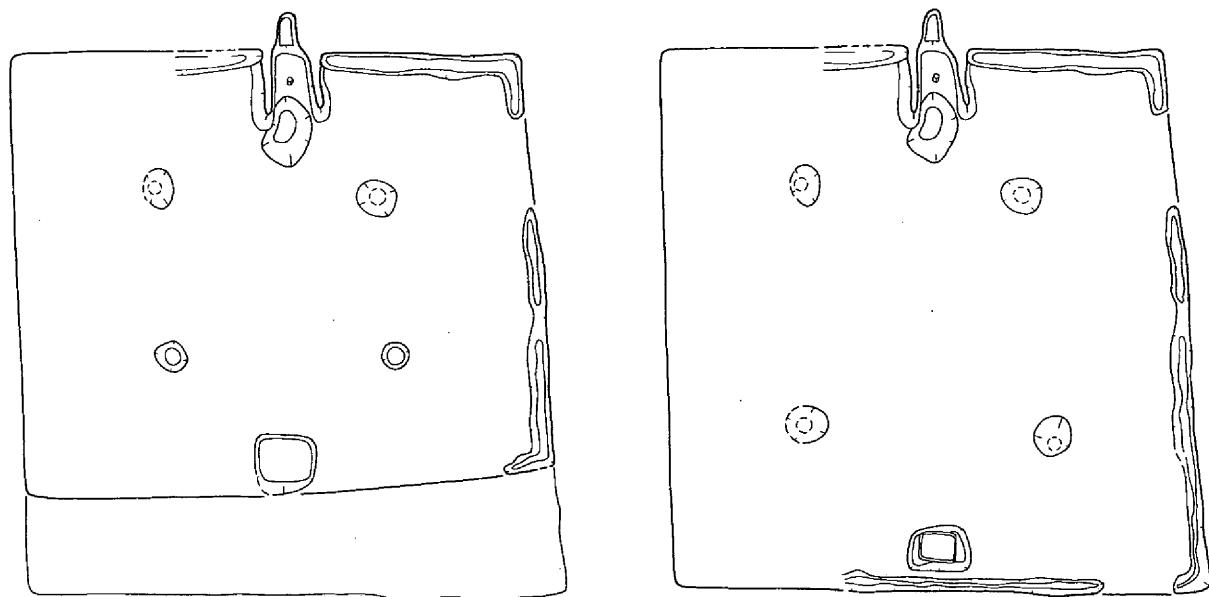
壇穴住居の時期は、検出状況と出土遺物から古・前・IIと考えられる。（高田）



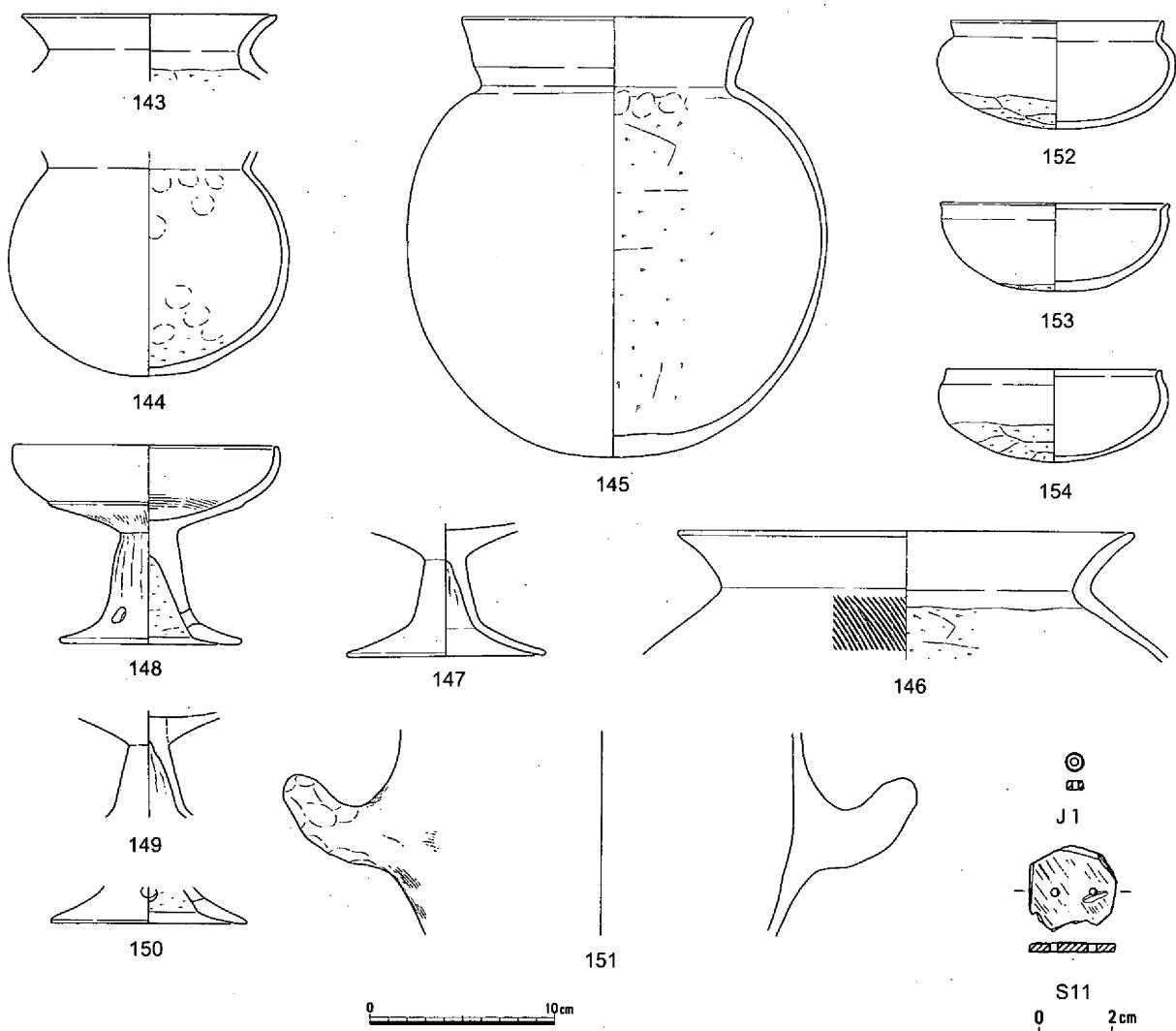
第213図 壇穴住居8・出土遺物（1/60・1/4）



第214図 堅穴住居9 (1/60)



第215図 竪穴住居9 a・b (1/80)



第216図 竪穴住居9 出土遺物 (1/4・1/2)

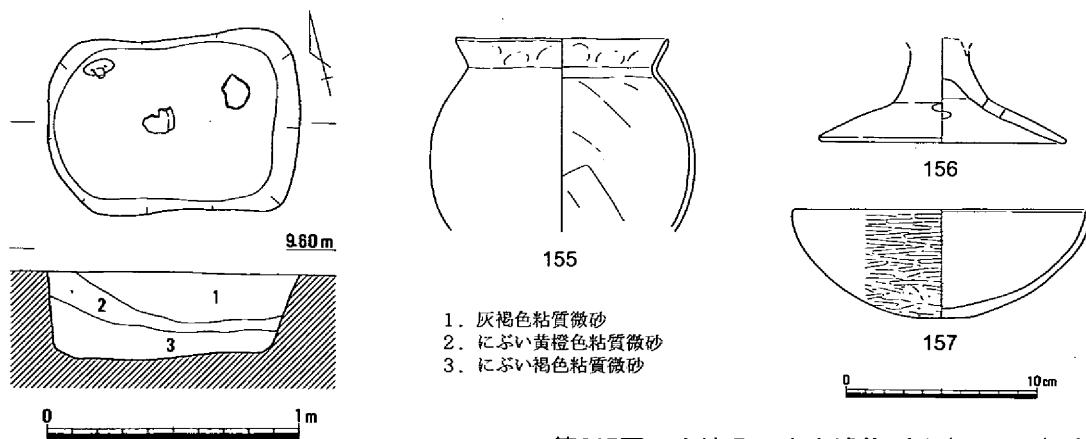
豊穴住居9 (第214~216図 図版31・36)

29区中央部、豊穴住居2の北約5mに位置する。住居の西辺部は調査区外になり、また後世のたわみ状の攪乱が東半部を削平している。豊穴住居9は造り付けカマドや方形土壙、壁体溝を持つ方形の住居で、南辺のみを約1m拡張している。便宜上、拡張前の住居を住9a、拡張後の住居を住9bとする。住9aの南壁は住9bによって削平されているが、僅かに東壁から屈曲して内側に入る壁体溝と南辺の中央部に設置されたと考えられる方形土壙により、住9aの南辺の位置を推定することができる。南北4.71m、東西推定5.6mを測る。柱穴4基のうち北側の2基はおそらく住9bのものと共有あるいは重複していたものと思われる。カマドについては両袖の下層に焼土粒や地山ブロックを含む土で埋まつた不正形な窪みがそれぞれ検出された。これをカマドを造り替えた痕跡と考え、住9aもカマドを持っていたと推定する。南北の柱穴間距離は1.72~1.80mである。カマドの対面にある方形土壙は0.6×0.65mの長方形を呈し、深さは0.17mを測り、壁は垂直にちかい。埋土中から土師器の瓶151が出土した。住9bは南北5.78m、東西推定5.65mの方形を呈する。柱穴は4基で南北の柱穴間距離は2.59~2.72mである。カマドは北辺中央部に位置し、支柱石が残存する。焚き口部の床面は深さ8cmほど窪んでいる。南辺中央部の方形土壙は、壁体溝より内側に位置し、2段に掘り込まれている。上段の掘り方は0.47×0.67m、深さ0.15mを測り、下段は0.30×0.39m、深さ0.21mを測る。下段の壁はほぼ垂直である。また床面には炭粒や焼土粒を多く含む弱粘質微砂で埋まつた浅い窪みが幾つもみられ、床面の整地に關係するように思われる。遺物は、床面に接地して検出された。143~146は甕で、にぶい黄橙色を呈し、胎土は2mm大以上の砂粒を含む。145甕は口縁部がかなり直立氣味に立ち上がり、外面下部にわずかに稜がある。148~150は高杯で橙色を呈し、胎土は1mm以上の砂粒を含む。杯部は浅く、口縁部は内湾し、下端に段を有する。152~154は外面過半にヘラケズリを施す鉢である。橙色を呈し、胎土に1mm以上の砂粒を含む。明瞭な肩部を有し口縁部が短く立ち上がる152と肩部が明瞭でなく口縁部は僅かに縫を持つ153・154がある。J1は滑石製の臼玉、S11は緑色片岩製の双孔円盤である。時期は古墳時代後期前半と考えられる。

(物部)

(2) 土壙**土壙5 (第217図)**

30北区の北端近くで検出された土壙である。隅丸長方形を呈し、検出面での規模は長さ1.0m、幅0.72m、深さ0.35mを測る。断面形は台形を呈し、底面は平坦に掘削されている。埋土は3層に分層でき、最上層部には新しい時期の遺物が混入していたが、下層部からは土師器が出土した。155は甕で、



第217図 土壙5・出土遺物 (1/30・1/4)

口径12.2cmを測る。156は高杯で、底径13.0cmを測る。

157は鉢で、口径15.4cm、器高5.7cmを測る。

これらの出土遺物から、土壌の時期は古・前・Iに位置づけられる。
(岡本)

土壌6 (第218図)

16区の中央で検出され、竪穴住居6の南約2mに位置する。平面形は、長さ1.64m、幅0.69mの長楕円形を呈している。検出面からの深さ0.2mを測る底面は、平坦であった。埋土は5層に分かれ、第2～5層には炭・焼土を含んでいた。

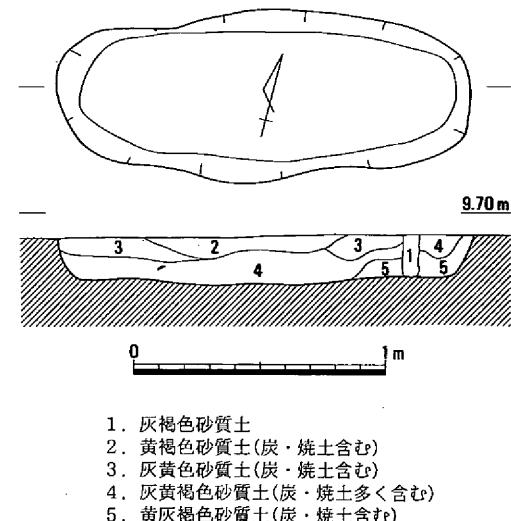
図示できる遺物はないものの、この土壌の時期は古墳時代前期と考えられる。
(小嶋)

土壌7 (第219図 図版36)

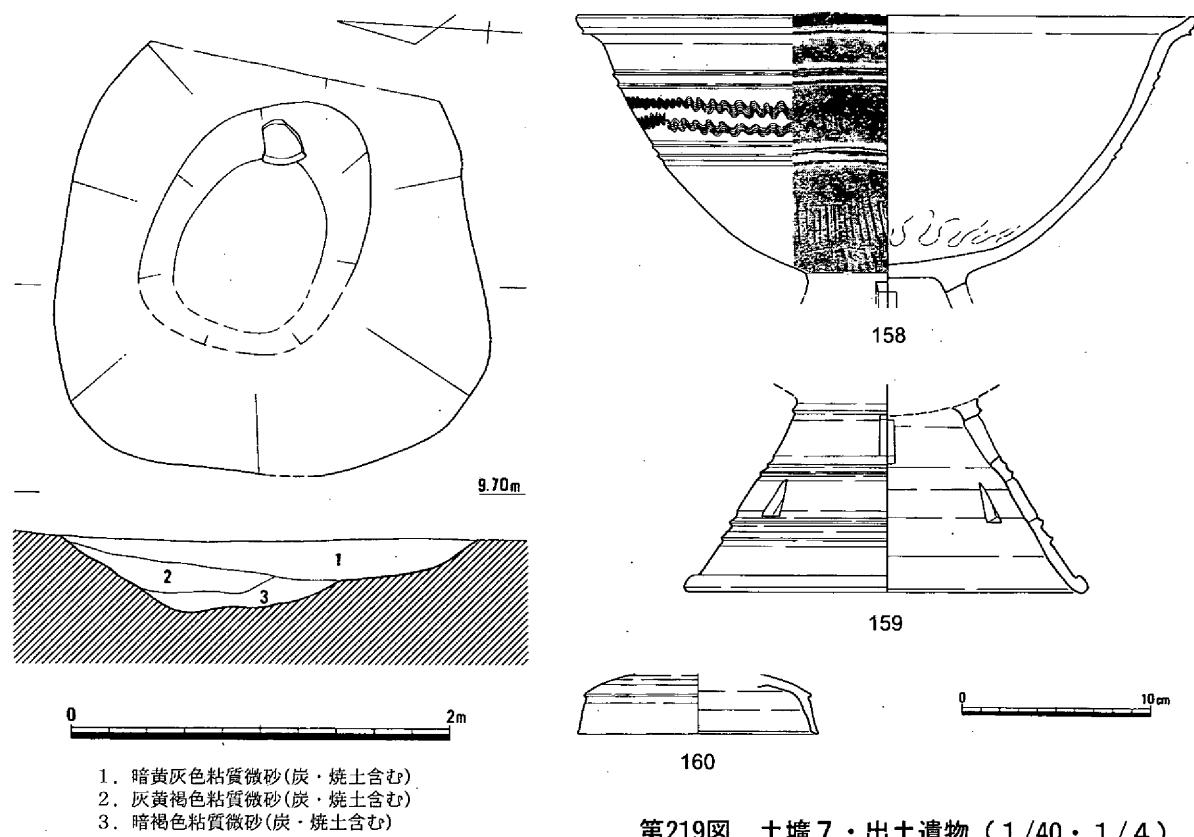
竪穴住居7上にほぼ重なるように位置する土壌である。東側の一部は調査区外に延びると考えられ、検出時の平面形態は不整円形を呈する。その規模は南北2.29m、東西2.31m、深さ0.38mを測る。底は二段に落ち込み、ほぼ平坦な最底面の標高は9.07mである。埋土は3層で、いずれも炭と焼土を顕著に含んでいる。図示した出土遺物はいずれも須恵器で、器台158は受け部外面の2本1対の凸線間に波状文を施し、脚部に長方形四方透かし穴をもつ。器台脚部159は二段の透かし穴をもつもので、158とは別個体と考えられる。160は杯蓋である。

土壌の時期は、検出状況と出土遺物から古・中・IIと考えられる。

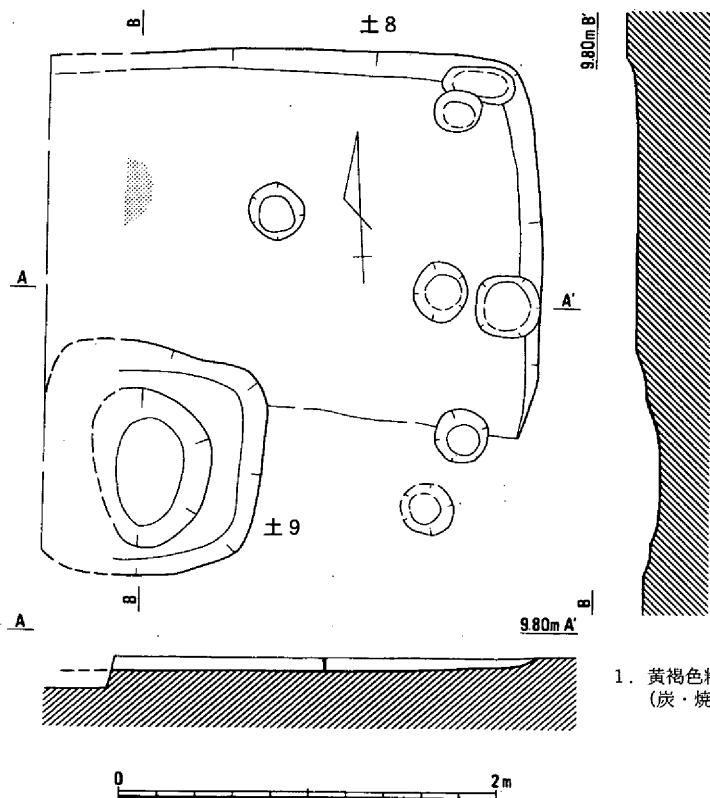
(高田)



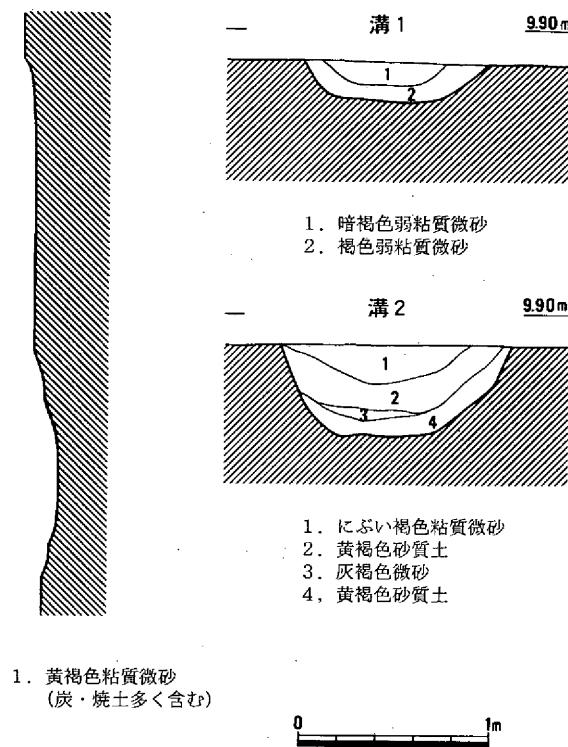
第218図 土壌6 (1/30)



第219図 土壌7・出土遺物 (1/40・1/4)



第220図 土壙8・9 (1/40)



第221図 溝1・2 (1/40)

土壙8・9 (第220図)

竪穴住居8の南西約4.5mに位置する2基の土壙である。いずれの土壙も西側は調査区外に延び、土壙8の南側は中世以降の溝9に切られる。土壙8の検出時の平面形態は方形を呈し、規模は2.21m×2.06m、深さ0.07mを測る。その底面はほぼ平坦で、東側部分に径0.3m前後の柱穴を検出している。土壙9の平面形態も方形を呈し、検出時の規模は1.26m×1.19m、深さ0.12mを測り、底面は二段に落ち込む。遺物は土壙9で古・中・IIと考えられる土師器片がわずかに出土している。

土壙の時期は、検出状況等から土壙9が古・中・II、土壙8がそれ以降と考えられる。(高田)

(3) 溝

溝1・2 (第221図)

溝1は27区南半、溝2は13区中央に位置し、直線的に伸びる同一の溝である。検出長は17.97m、検出面での幅は1.20~0.95m、検出面からの深さは0.50~0.21mを測る。北西から南東への流れが想定される。断面形はU字形を呈し、埋土は褐色の弱粘質微砂~砂質土で底面にはマンガンの沈着がみられる。出土遺物は土器細片が4点あるのみで、時期の限定は難しいが、埋土が竪穴住居9などに似ていることから古墳時代後期頃と推測する。(物部)

(4) 遺構に伴わない遺物 (第222図)

遺構を検出する段階で、土師器や須恵器を出土している。161は、筒状の頸部から屈折して開く二重口縁をもつ非在地系の壺で、竪穴住居2の周辺から出土した。口径12.2cmを測る164は屈曲する二重口縁をもち、球形をなす体部は外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。165は、口径8.2cm、器高9.5cmを測る小形の壺で、体部外面をハケメ、内面をナデないしユビオサエで調整する。167の高杯と伴出した。

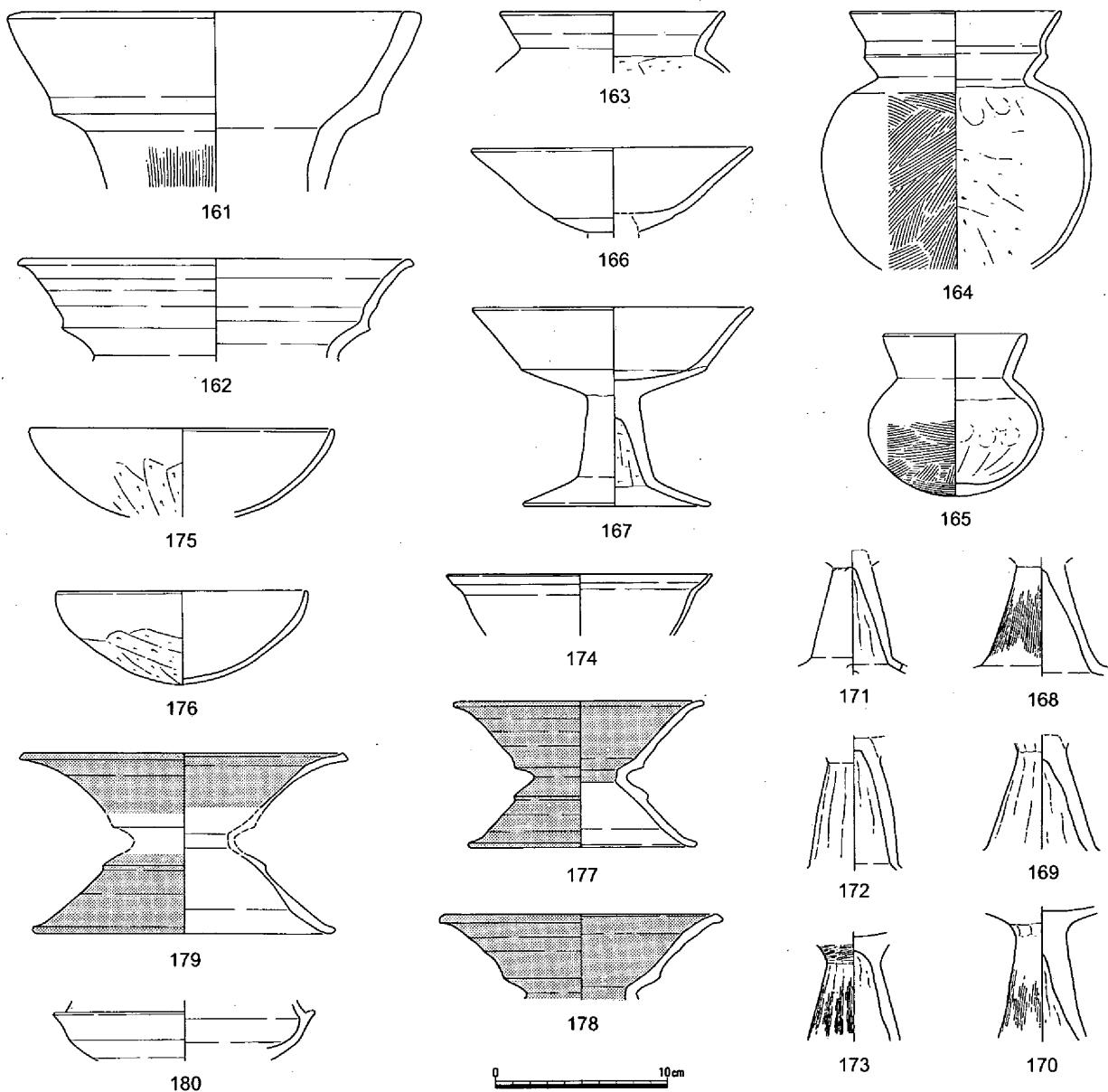
甕163はく字形の口縁部をもち、口径12.8cmを測る。出土状況から竪穴住居2に伴う可能性がある。高杯には166～173がある。166は高杯の杯部で、16.2cmを測る口径に比して底部は狭い。167はほぼ完形に復元できた高杯で、口径16.4cm、脚径11.0cm、器高11.7cmを測る。脚部には透かし孔がなく、内面はヘラケズリで調整する。竪穴住居7の周辺で出土した168～173は別づくりの脚部で、中実ぎみにつくられた内面には絞り目を残し、171では裾部に4つの透かし孔を穿つ。

鉢には二重口縁をもつ174と皿形をなす175・176がある。174は精良な胎土をもつものに対し、175・176は壺や甕と胎土を共通にし底部外面をヘラケズリで調整する。

177～179は鼓形器台で、外面をヨコナデ、内面をヘラケズリとナデで調整した後、赤色顔料を塗布している。いずれも竪穴住居2の付近から出土しており、山間部からの搬入品と見られる。

180は表土から出土した須恵器の杯で、たちあがりと底部を欠いているが6世紀後半に位置付けられる。

(亀山)



第222図 遺構に伴わない遺物（1/4）

第4節 古代の遺構・遺物

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第223図)

弥生時代の溝2と中世の溝8に挟まれた位置で検出した掘立柱建物である。周囲に柱穴がみられず、いずれの柱穴の埋土も近似することから建物としてまとめた。西側が調査区外となるために建物の北・東辺のみ検出している。その規模は、桁行が3間で全長5.84m、梁間は1間で3.42mを測るが、梁間はさらに調査区外に延びる可能性がある。棟方向はN-12°-Eとなる。また、桁側の柱間距離は、北から2m、1.84m、2mを測り、ほぼ揃うことを指摘できる。

柱穴の平面形はいずれも円形か橢円形を呈し、その径は角の3本で0.4~0.65m、桁側の間2本で0.3m前後を測る。検出面からの深さは、角の3本で0.23~0.38m、桁側の間2本で0.03~0.08mを測る。埋土はいずれも近似するもので、炭と焼土を比較的顕著に含んでいる。

出土遺物は、弥生土器片と土師器片がわずかに出土したのみである。

建物の時期については、周囲の中世遺構と軸方向が異なることと、出土遺物から古代に属する可能性を指摘しておきたい。

(高田)

(2) 溝

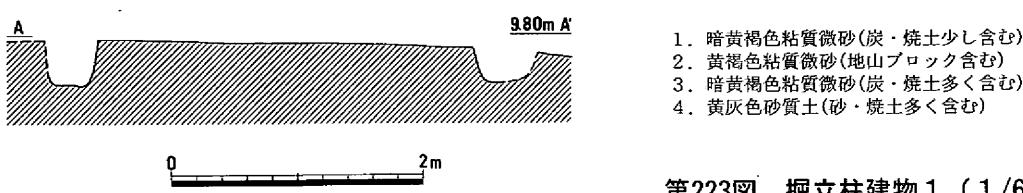
溝3・4 (第224図)

30区南端で検出した溝3と15区で検出した溝4で、検出状況から両者は同一の溝と考えられる。西南西から東北東に向かって直線的に流走するもので、検出時の規模は幅1.2m、深さ0.3mを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で鉄分の顕著な沈着がみられる。遺物は溝3でまとまった量の出土がみられたが、溝4は少量であった。

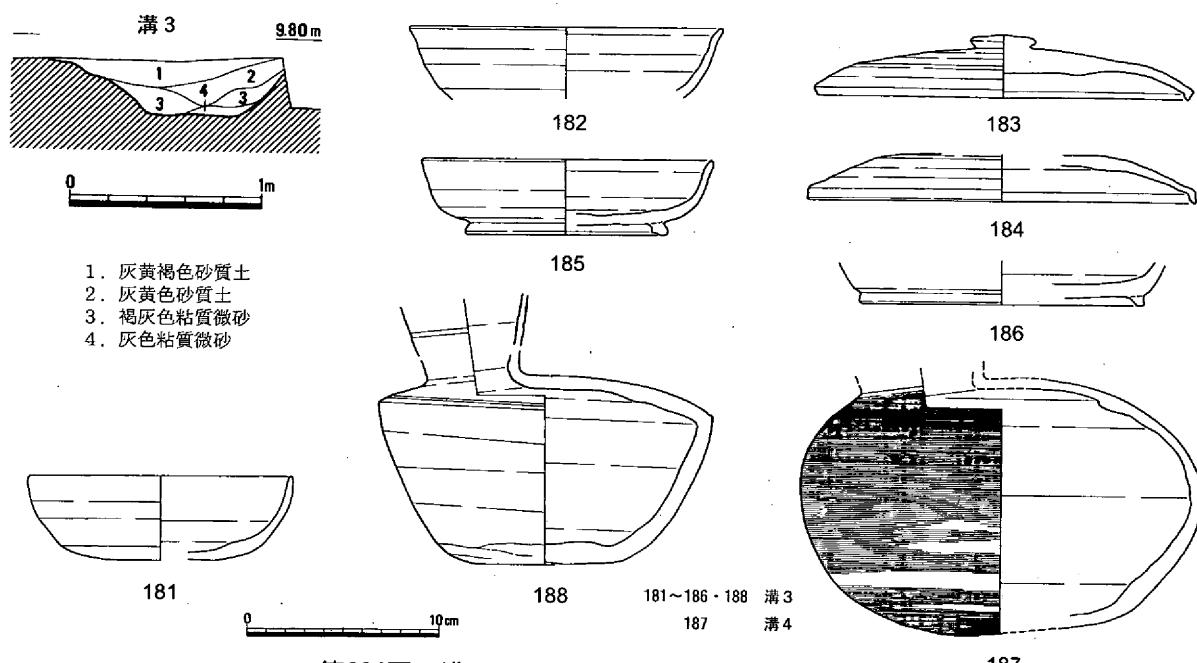
図示した遺物はすべて須恵器で、杯・蓋・平瓶の器種がある。183は蓋で、扁平な碁石状のつまみをもち、折り返した口縁が逆三角形を呈する。185は杯で、ハの字状に開く高台が付く。

出土遺物から、溝の時期は奈良時代と考えられる。

(高田)



第223図 掘立柱建物1 (1/60)

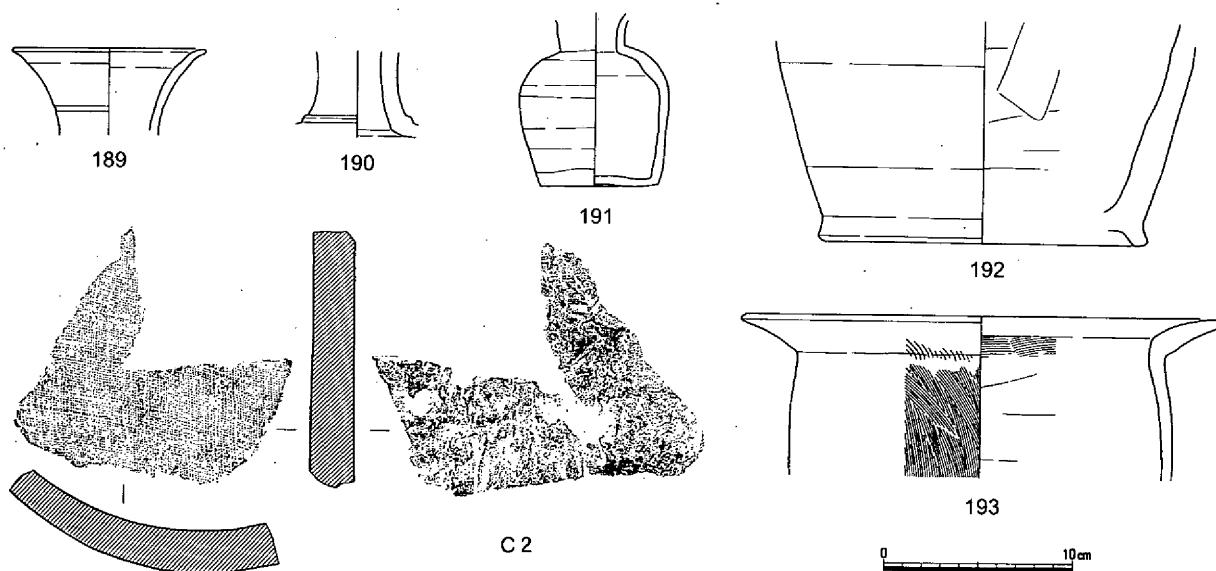


第224図 溝3・4・出土遺物 (1/40・1/4)

(3) 遺構に伴わない遺物 (第225図)

遺構を検出する段階で、8～10世紀の土師器や須恵器、瓦などが出土しているが、その量は井手見延遺跡に比べてはるかに少ない。

須恵器には壺・瓶・甕があるが、甕については図化できなかった。190は上方に向かって緩やかに開く長頸壺の口縁部で、口径は10.1cmを測る。190は精良な胎土をもつ瓶の頸部で、体部との境界に突帯をめぐらす。胴径7.8cm、現存高9.1cmを測る小型の瓶191は、口縁部を欠いているものほぼ完形で出土したが、作りは粗く、形も歪である。192は高台を貼り付けた壺の底部で、底径16.1cmを測る。193は溝11の周辺で出土した土師器の甕である。25.5cmを測る口縁部は体部から屈折して水平に開き、その端部は面をなして終わる。筒状の体部は外面を粗いタテハケで調整し、内面をヨコハケの後ナデで仕上げる。C 2は平瓦で、凸面には粗い縄目タタキを施し、凹面には布目を残す。 (龜山)



第225図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

第5節 中・近世の遺構・遺物

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物2 (第226図)

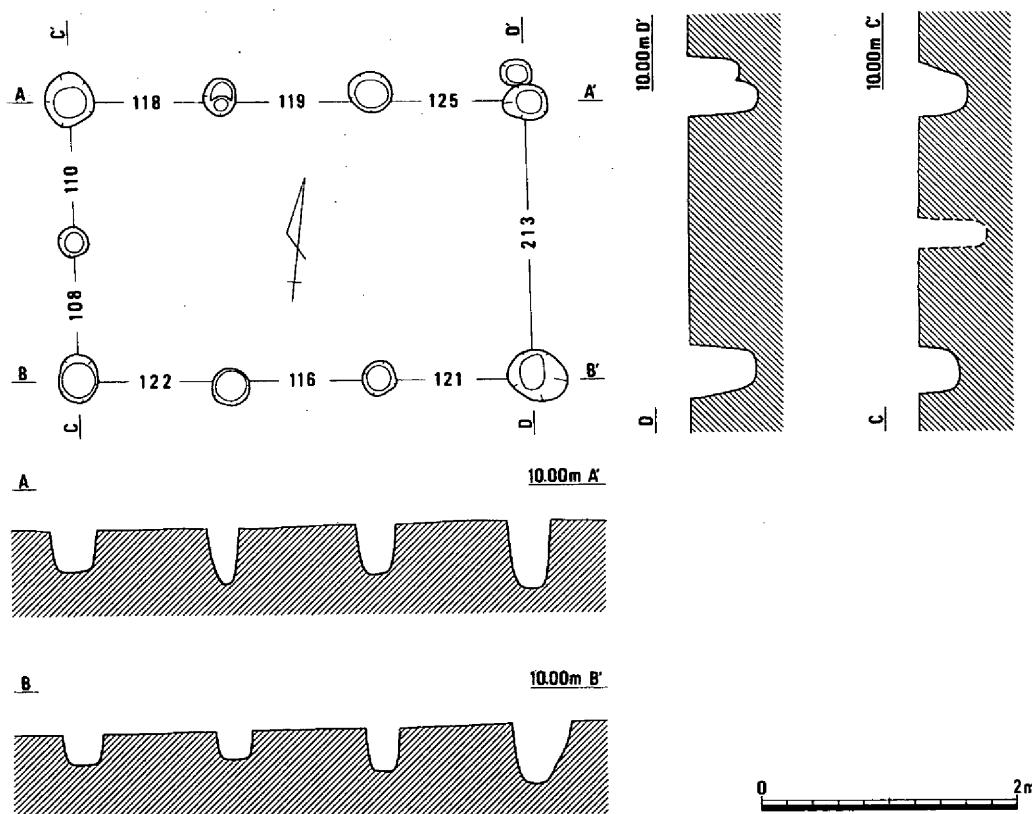
掘立柱建物2は29区南半、溝5のすぐ北側に位置する。3×2間の建物と考えられるが、桁行の東辺には中央に柱穴が検出されなかった。規模は、桁行は $3.62 \times 3.59\text{m}$ 、柱間距離は $1.25 \sim 1.16\text{m}$ を測る。梁間は $2.18 \times 2.13\text{m}$ 、柱間距離は西辺 $1.08 \sim 1.10\text{m}$ 、東辺 2.13m を測る、柱間距離が比較的短い。棟方向はN-84°-Eである。柱穴は円形を呈し、直径 $0.24 \sim 0.40\text{m}$ 、検出面からの深さ $0.25 \sim 0.55\text{m}$ を測り、西から東へ深くなる傾向がみられる。柱穴内にはにぶい黄褐色砂質土が堆積し、柱痕跡は確認されなかった。

出土遺物は埋土中に僅かであるが、早島式土器碗の細片が混入していることから、この建物の時期を中世に求めることができる。
(物部)

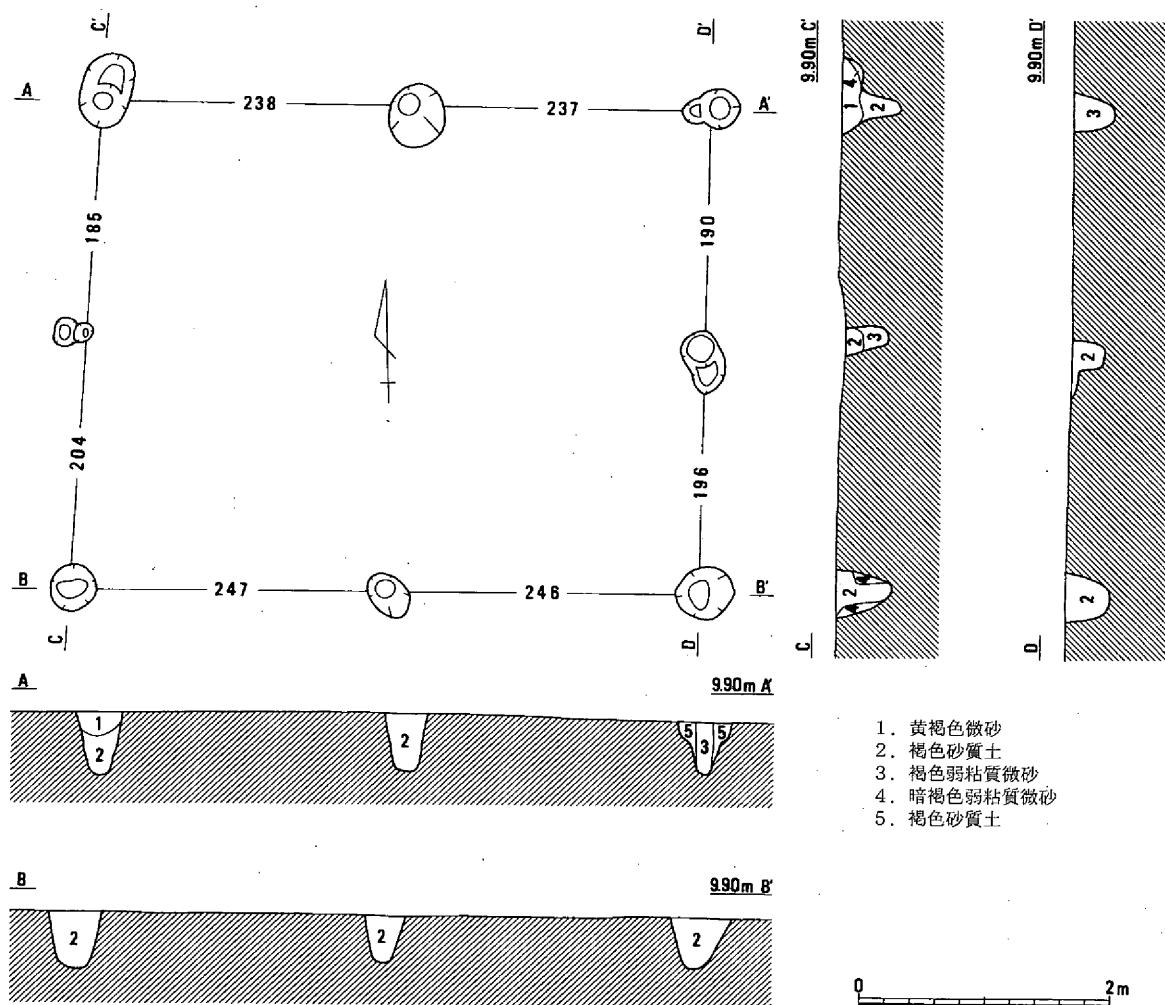
掘立柱建物3 (第227・233図)

掘立柱建物3は29区南半に位置し、掘立柱建物2の北、溝6の南に隣接して検出された。2×2間の建物と考えられ、規模は、桁行は $4.93 \times 4.75\text{m}$ 、柱間距離は $2.47 \sim 2.37\text{m}$ を測る。梁間は $3.89 \times 3.86\text{m}$ 、柱間距離は $2.04 \sim 1.85\text{m}$ を測る。棟方向はN-88°-Wである。柱穴は直径 $0.30 \sim 0.44\text{m}$ の円形を呈し、検出面からの深さ 0.4m 前後である。梁間の柱間の柱穴は他の柱穴と比べ直径・深さともにひとまわり小さく、東柱のようなものかもしれない。

出土遺物は各柱穴埋土中から土師質の土器細片が少量みられたが、そのほとんどは下層の竪穴住居



第226図 掘立柱建物2 (1/60)



第227図 掘立柱建物3 (1/60)

9からの混入である。その中に194黒色土器の椀の小片が1点だけ混じっていた。いわゆる内黒と呼ばれるもので、黄褐色を呈し、胎土に角閃石を多く含む。この土器の時期は11世紀頃と考えられるが、柱穴埋土が中世の柱穴埋土と酷似することから11世紀～中世ととらえたい。

(物部)

掘立柱建物4 (第228・233図)

15区の中央で検出された、桁行3間、梁間2間の南北棟と考えられる総柱の掘立柱建物である。棟方向はN-4°-Wであった。

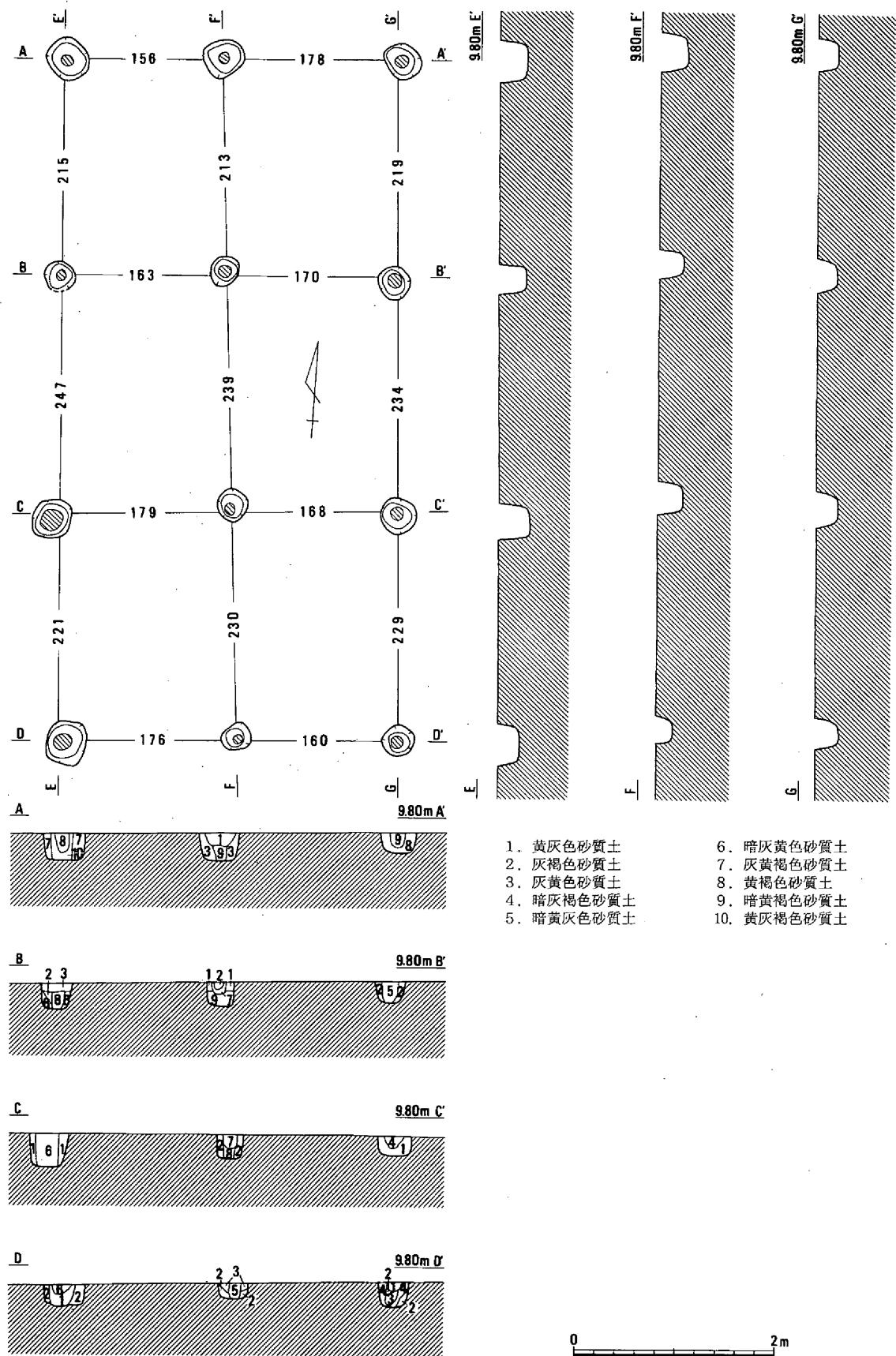
この建物の平面形はほぼ長方形を呈しているが、中央の桁行が東西の桁行と比べると若干東西に振っている。建物の規模は、桁行全長6.83～6.82m、梁間全長3.36～3.34m、面積22.8m²を測る。柱間距離は、桁行が2.47～2.13m、梁間が1.79～1.56mである。

柱穴の掘り方は、径約40cm、深さ約30cm程度の平面円形を呈するものが多い。すべての柱穴から柱痕跡が確認され、それらは掘り方中央に位置している。柱材は10～20cmのものが使用されていたと推定される。

遺物は土師器の椀195・204・207と土師器の皿214・217などが出土している。214は底部ヘラキリである。

これらの遺物から時期は中世（13世紀前半）と思われる。

(小嶋)



第228図 掘立柱建物4 (1/60)

掘立柱建物5 (第229図)

16区の南西で検出され、掘立柱建物4の北約5mに位置している側柱の掘立柱建物である。掘立柱建物6・7の内側から検出されているため、掘立柱建物6・7との同時併存はあり得ない。桁行は2間、梁間は、西側が調査区外のため不明であるが、現状で2間である。建物の規模は、桁行が全長4.02m、柱間距離2.11~1.91m、梁間が全長3.57m、柱間距離2.01~1.71mを測る。平面約0.35mの円形を呈する柱穴は、深さ約0.4mに掘り下げられていた。柱穴からは柱痕跡も認められ、それから推定される柱の径は約0.1mである。建物の主軸はN-15°-Wである。

実測に耐えられる遺物はないが、土師器の椀・皿などが出土している。時期は、遺物と埋土の状況から中世と考えられる。

(小嶋)

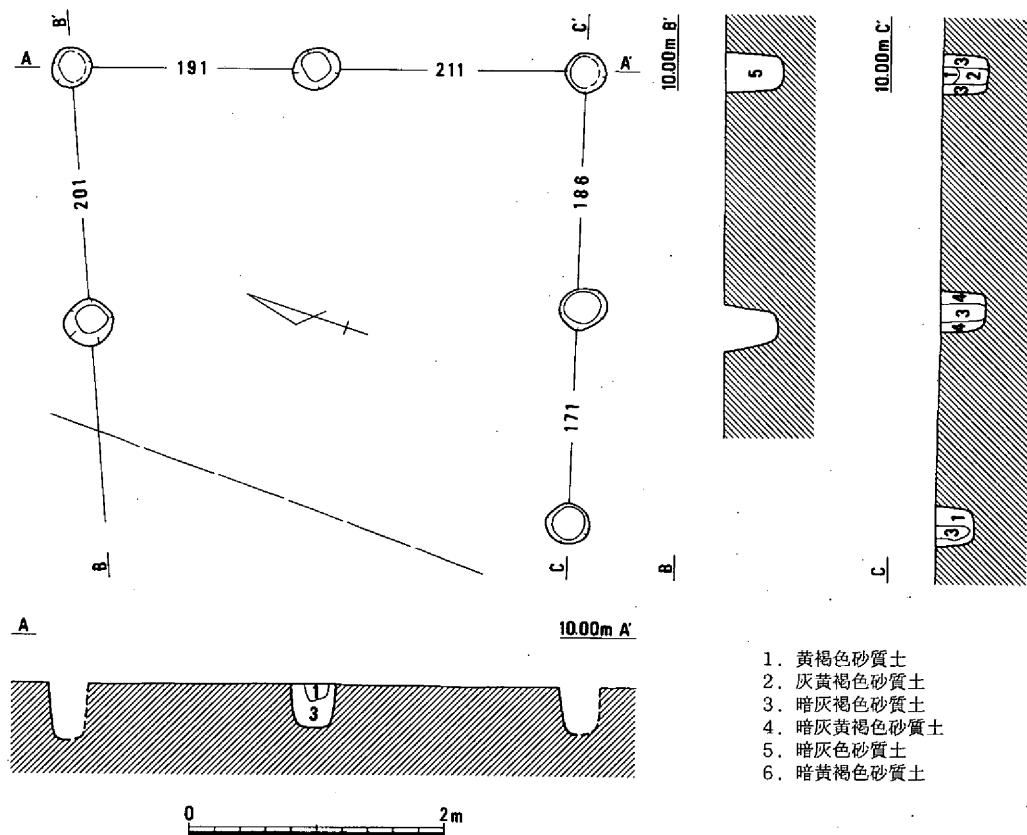
掘立柱建物6 (第230・233図)

16区の南西で検出され、掘立柱建物5を囲むような状況で検出された側柱の掘立柱建物である。また、掘立柱建物7の内側に所在しているため、掘立柱建物5・7との同時併存は考えられない。主軸は掘立柱建物5・7とほぼ一致している。建物は、西側が調査区外のため不明であるが、桁行が3間、梁間が現状で2間である。規模は桁行全長5.57m、梁間全長4.0m、面積22.2m²を測る。柱間距離は桁行が1.89~1.8m、梁間が2.01~1.9mである。柱穴は径0.45~0.25mの円形を呈している。深さは南西端の柱穴が一番深く0.55mを測り、北西端のものが一番浅く0.13mである。柱穴から柱痕跡も認められ、それから推定される柱の径は約0.1mである。

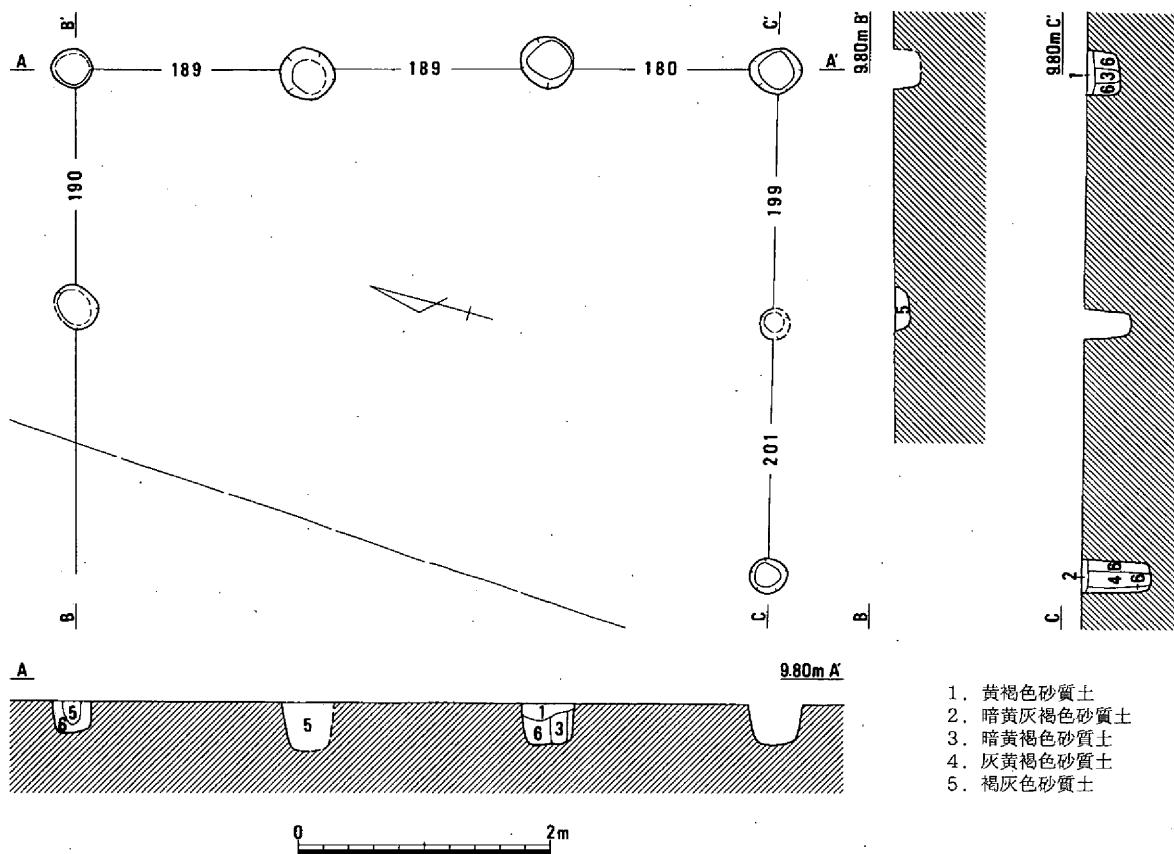
出土遺物は土師器の椀196などが出土している。

この建物の時期は、中世（13世紀後半）と考えられる。

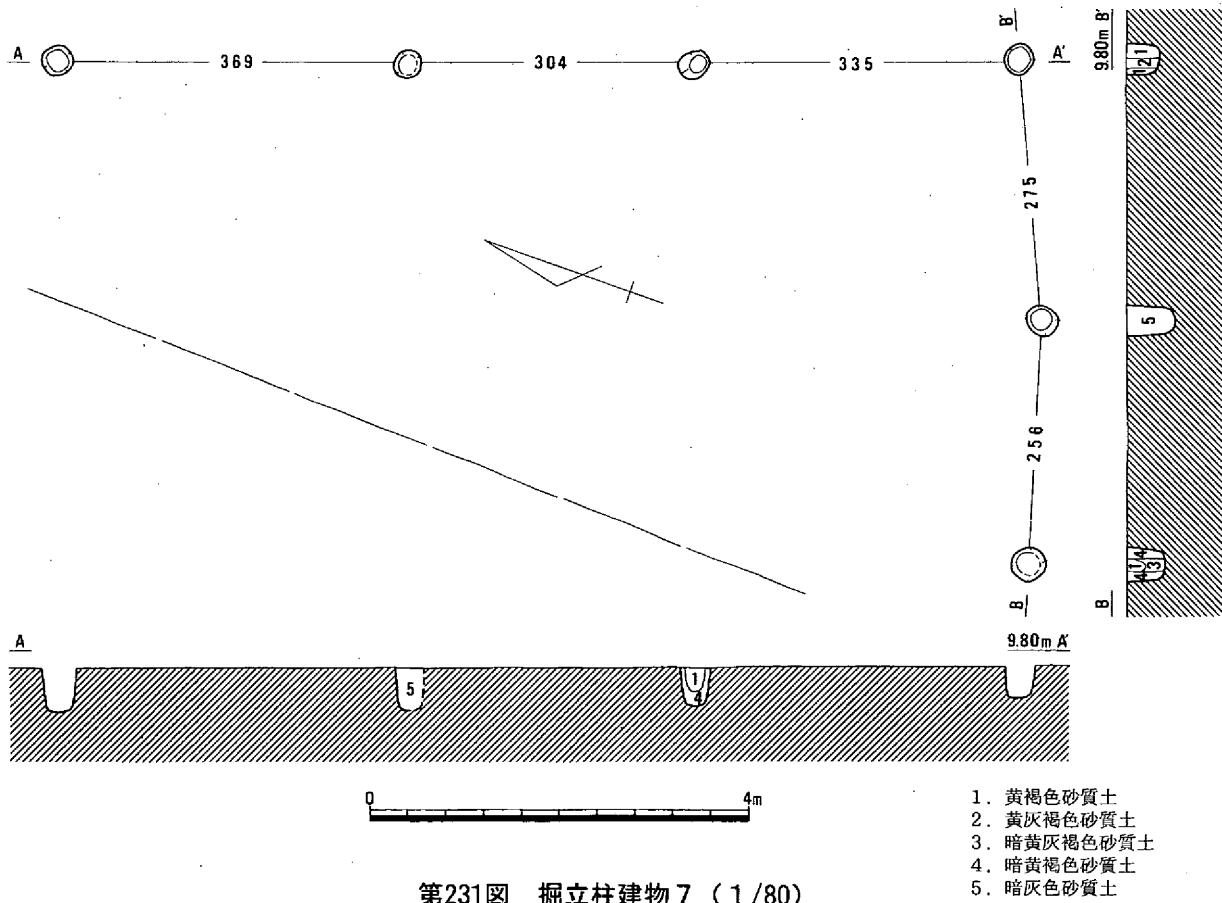
(小嶋)



第229図 掘立柱建物5 (1/60)



第230図 掘立柱建物 6 (1/60)



第231図 掘立柱建物 7 (1/80)

掘立柱建物7（第231図）

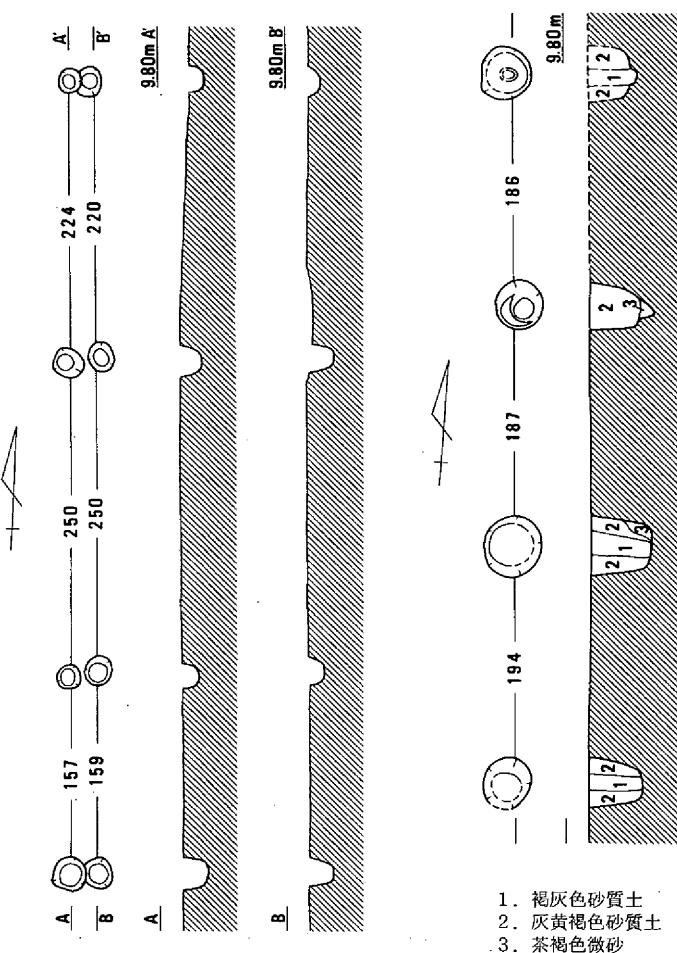
16区の南西で検出された、現状で3×2間の側柱の掘立柱建物である。建物の主軸はN-19°-Wである。掘立柱建物5・6を囲むように位置しているため掘立柱建物5・6との同時併存は考えられない。建物は、西側が調査区外のため規模は不明であるが、桁行全長10.08m、梁間全長5.31m、面積53.4m²を測る。柱間距離は桁行が3.69~3.04m、梁間が2.75~2.56mとかなり広くなっている。柱穴の掘り方は径0.3m程の円形を呈し、深さは約0.4mである。

時期は出土遺物や埋土の状況から中世に比定される。
（小嶋）

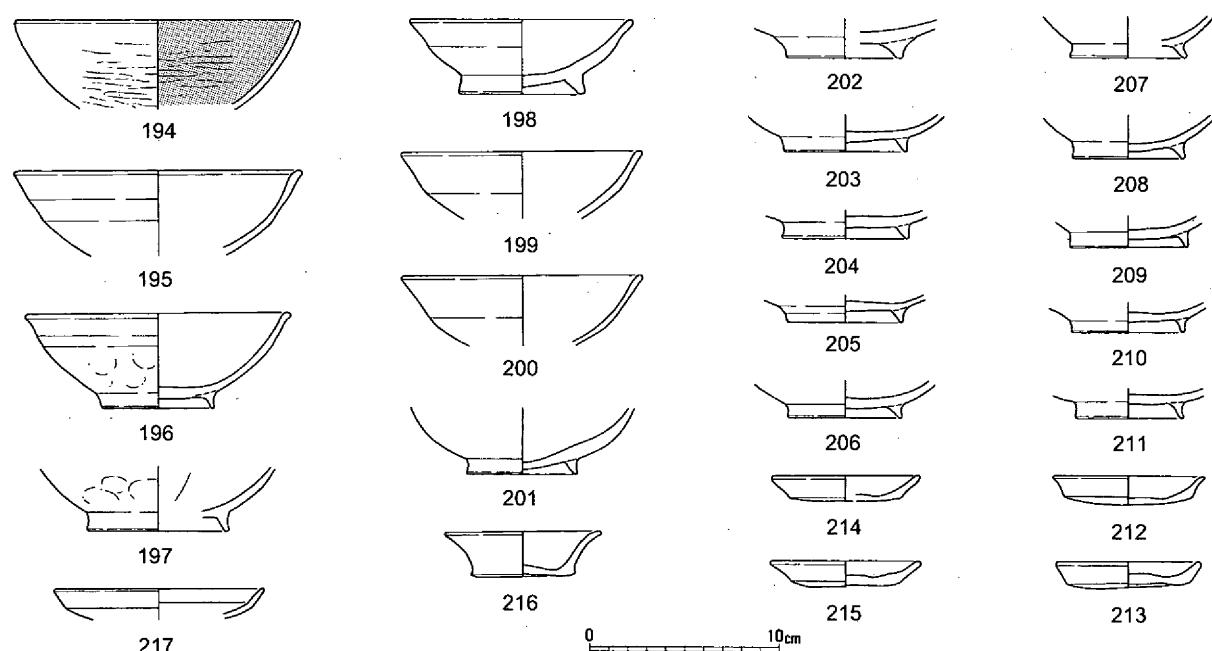
柱穴列1・2（第232図）

溜池状遺構の南東部で検出したほぼ南北方向の柱穴列である。柱穴列1は全長6.3m前後の重複する二本の柱穴列で、西側が新しい。柱穴列2は全長5.67mを測る柱間3間の柱穴列で柱痕跡をもつ。

時期は中世と考えられる。
（高田）



柱穴列1
柱穴列2
第232図 柱穴列1・2 (1/60)



第233図 掘立柱建物出土遺物 (1/4)

(2) 土壙

土壙10(第234図)

土壙10は28区中央部の西壁沿いに位置し、溝18・19を切っている。平面形は不正形で、2/3は調査区外に伸びているものと思われる。検出長3.02m、検出幅1.11m、検出面からの深さ0.79mを測る。埋土上層には礫を多く含む粗砂層がみられる。

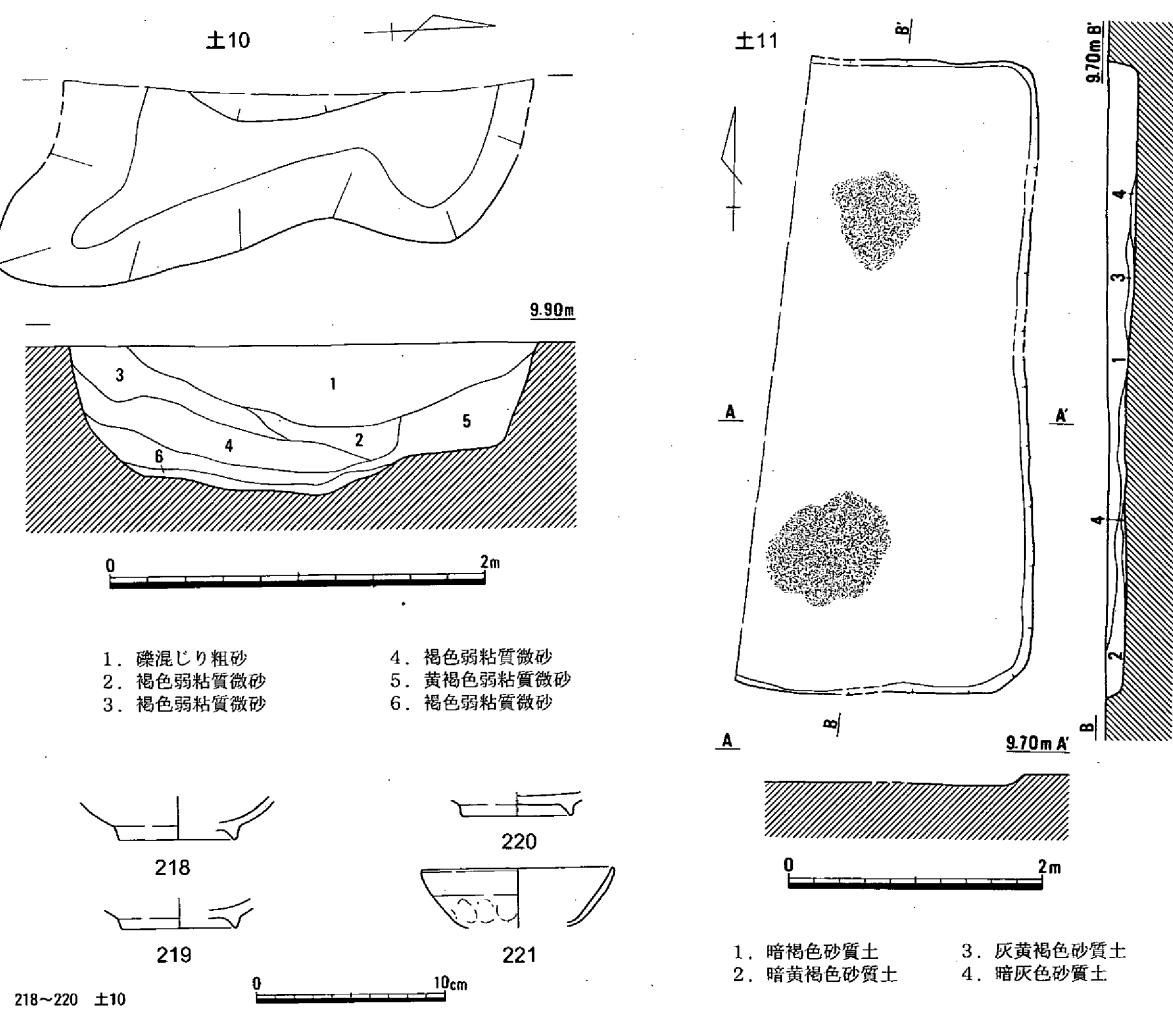
出土遺物は土器小片が少量であった。221はぶい橙色を呈する土師器の椀で、口径は10.0cmを測る。胎土は精良である。時期は土器の特徴から14世紀頃と考えられる。
(物部)

土壙11(第234図)

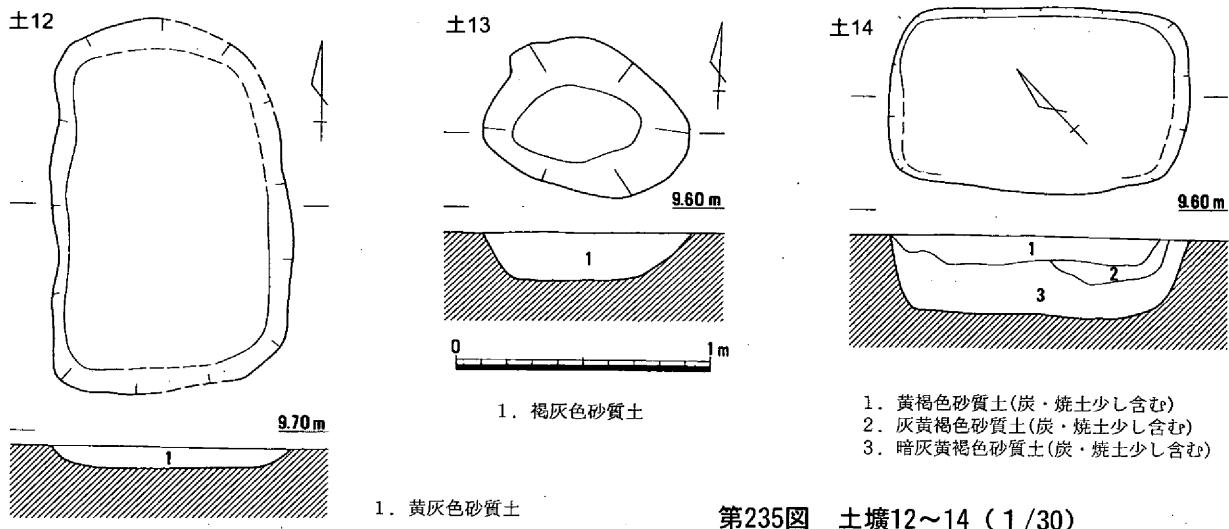
15区の北西隅で検出され、掘立柱建物5～7の南に位置している堅穴状の土壙である。西側は調査区外のため不明であるが、平面方形を呈していたと考えられる。規模は、現状で長さ5.02m、幅2.33mである。深さは検出面から0.23mを測り、底面は平坦で方形を呈している。底面上には炭の集中域が南北に2カ所認められた。両者とも平面は不整円形を呈し、規模は北側のものが径約0.8m、南側のものが径約1mである。この炭の周りや底面上には被熱痕跡は認められなかった。この遺構がどのような用途で使用されていたのか不明であるが、形態的には堅穴住居に近似している。

出土遺物は218～220の土師器の椀の底部が出土している。

時期は中世(13世紀前半)と考えられる。
(小嶋)



第234図 土壙10・11・出土遺物 (1/60・1/40・1/4)



第235図 土壌12~14 (1/30)

土壌12 (第235図)

16区の南西において検出された遺構である。平面形は不整方形を呈している。規模は長さ1.49m、幅0.93m、深さ9cmを測る。断面形は皿状を呈し、底面は平坦であった。埋土は黄灰色砂質土の1層のみであった。

出土遺物から、時期は中世（13世紀後半）と考えられる。

(小嶋)

土壌13 (第235図)

16区の北西隅で検出された遺構である。規模は長径0.79m、短径0.6mを測り、平面橢円形を呈している。深さは検出面から0.19mを測り、断面形は皿状である。底面は平坦であった。埋土は褐灰色砂質土であった。

出土遺物から時期は中世の範囲に収まると考えられる。

(小嶋)

土壌14 (第235図)

16区の北東側、土壌13から東へ約7mで検出された遺構である。平面形は方形を呈し、長さ1.2m、幅0.74mを測る。深さは0.32mを測り、底面はほぼ平坦であった。埋土は3層に区分され、すべて炭・焼土を含んでいた。

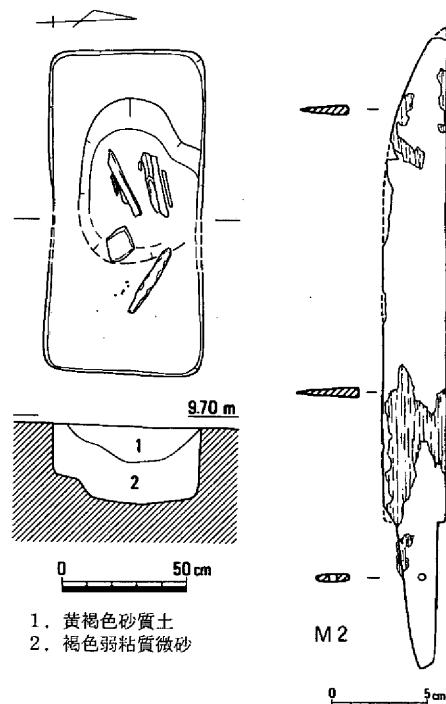
遺物は出土していないが、検出状況等から、時期は中世と考えられる。

(小嶋)

(3) 土壌墓 (第236図 図版33・36)

土壌墓は27区の中央部で検出された。平面形は長さ1.30m、幅0.64mの長方形を呈し、検出面からの深さは0.30mを測る。底面の標高は9.35m、主軸はN-87°-Wである。壁はほぼ垂直で、底面は中央部が若干窪む。内部には人骨が遺存したが保存状態は悪く、歯の細片と足の大脛骨あるいは脛骨が確認された。骨の出土状況から頭を東に両足を曲げて埋葬されている。頭部の北側に鉄刀が1本副葬されていた。木棺の痕跡は確認されなかった。時期は埋土から中世と推定される。

(物部)



第236図 土壌墓・
出土遺物 (1/30・1/4)

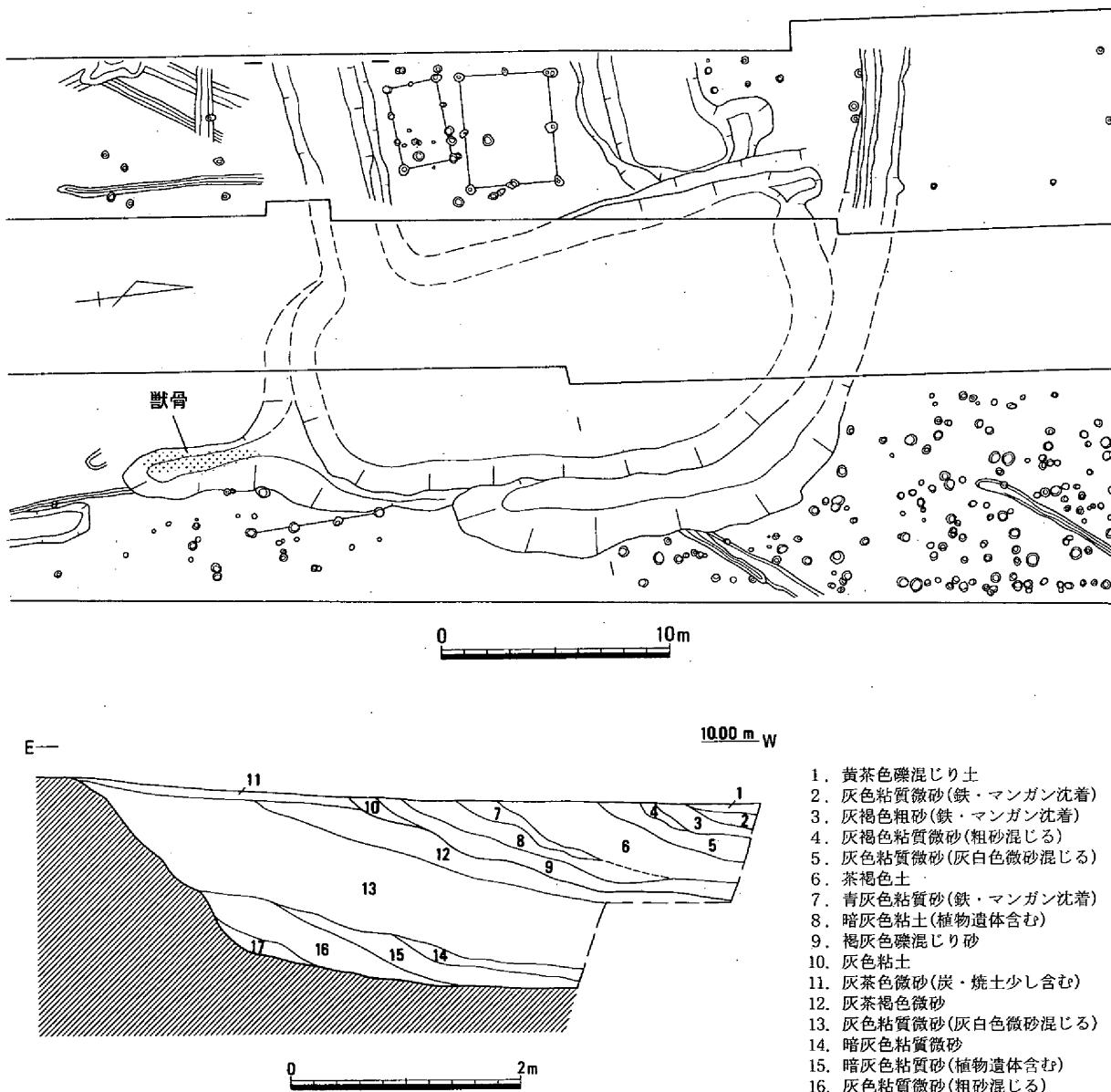
(4) 溝池状遺構 (第237・238図 図版33)

建物2・3の東側に位置するもので、中央に未調査部分がある。平面形は長径約25m、短径約15mの長楕円形と推定され、最深部の標高は8.85mを測る。南西から溝5が、北西から溝9が接続すると考えられる。また南東部には幅約2m、長さ約8mの溝状部分があり、獸骨の大量遺棄がみられた。

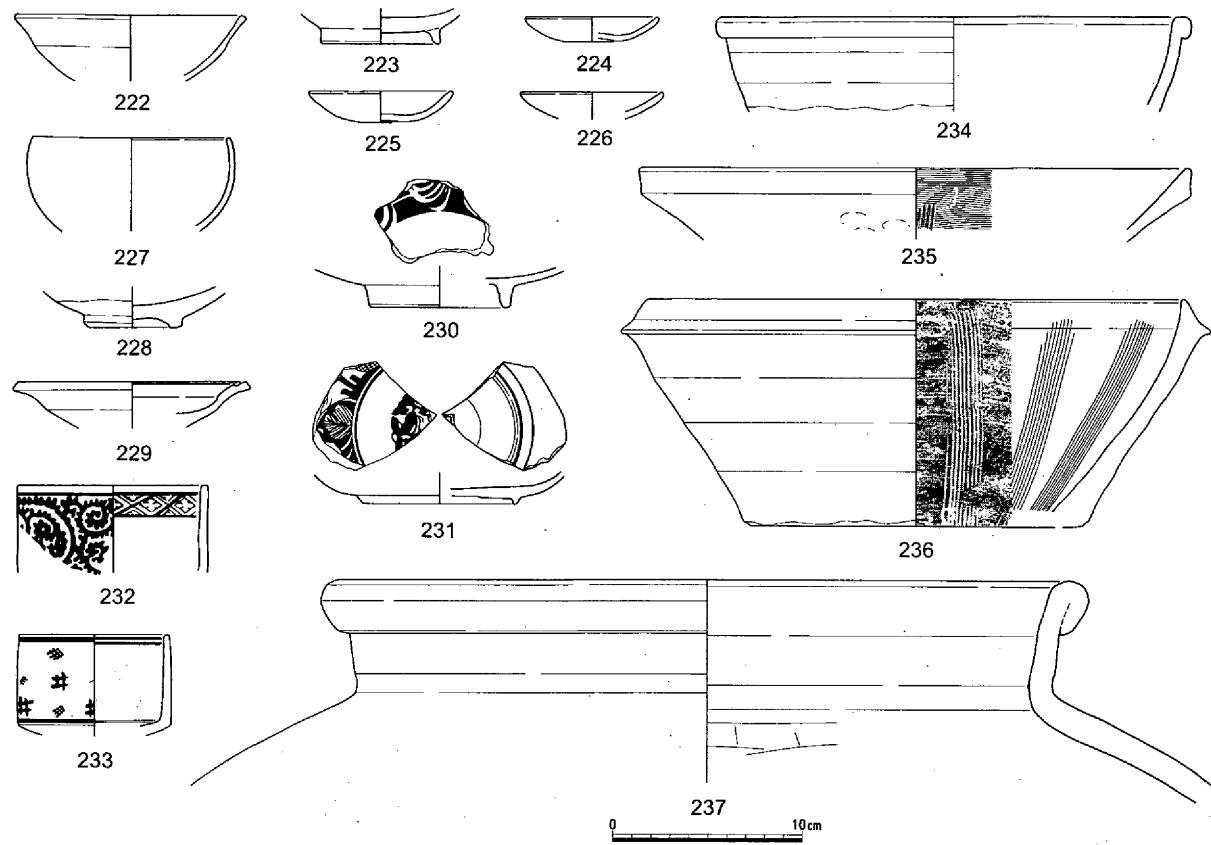
出土遺物は土師器、備前焼、京焼、肥前陶磁器と獸骨である。222～235は土師器で、222・223は高台付椀、224～226は小皿、235は鉢である。236は備前焼の擂鉢、237は甕である。237は口縁を玉縁状に折り返している。227は京焼系の椀である。肥前陶磁器は鉢228・230・234、皿229・231、碗232・233である。228は見込みに砂目積み跡が3カ所みられる。231は蛇の目高台の染付、232・233は染付の筒形碗である。234は鉄釉の片口鉢である。獸骨は南東部溝状部分の2×1mの範囲にほぼ集中するもので、鑑定可能な個体はすべてウシとウマであった。下顎骨の大量出土に特徴がある。

遺構の存続時期は、出土遺物と周辺の遺構との関連から、鎌倉時代以降に使用が始まり、最終的な廃絶は19世紀代と考えられる。

(高田)



第237図 溝池状遺構 (1/300・1/60)

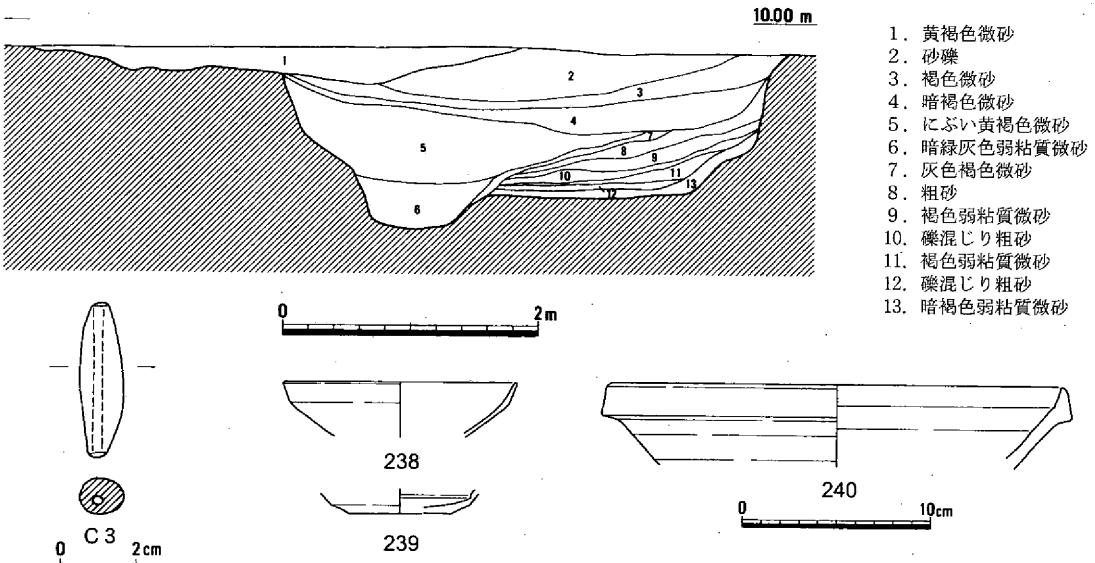


第238図 溝池状遺構出土遺物（1/4）

(5) 溝

溝5（第239図）

溝5は28区と29区の境に位置し、掘立柱建物2のすぐ南で検出された。竪穴住居2を切っている。主軸を西南西—東北東にとり、東側で溜池状遺構に接続していると推定される。検出長6.07m、検出幅3.88m、検出面からの深さ1.43mを測る。溝底部は微高地の基盤である粗砂層を突き抜け、砂礫層に達している。底面の標高は8.34mを測る。断面の土層から少なくとも1回の掘り直し（第2



第239図 溝5・出土遺物（1/60・1/4・1/2）

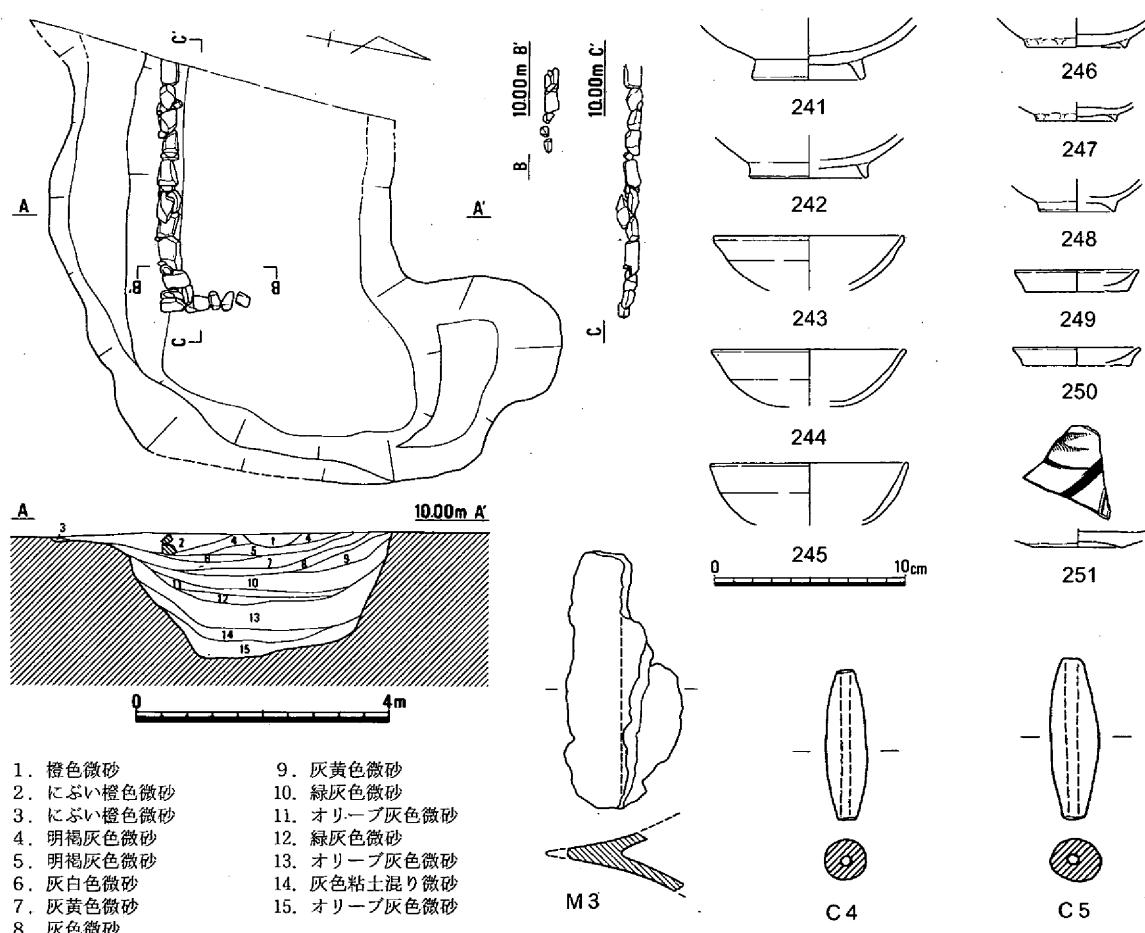
～7層)が観察され、掘り直し以前の堆積層(第8～13層)は弱粘質微砂と粗砂の互層である。周囲で検出される溝と比べると規模が格段に大きい。遺物は埋土中から土器小片や土製品が出土した。238は白橙色を呈する土師器の碗で、器壁が非常に薄い。239は青磁の皿、240は東播系の捏鉢である。この他に土師器の鍋や竈の小片が多くみられる。C3は土錘である。時期は土師器碗の特徴などから14世紀以降と想定される。

(物部)

溝6(第240図)

溝6は29区北半、溝5の北約9mに位置する。主軸を溝5と同様に西南西－東北東にとるが、東側の溜池状遺構には接続せず、東端部は北北西に屈曲し、そこで閉じる。溜池状遺構が掘り方の肩部を切る。検出長6.45m、検出幅4.53m、検出深2.0mを測る。溝底部は微高地の基盤である粗砂層を突き抜け、砂礫層を掘り込んでいる。底面の標高は7.80m。埋土は微砂が下部から上部まで皿状に堆積しており、埋没の最終段階である幅2m、深さ0.3m程の浅い溝になった段階で石組が築かれている。石組みは溝の中央にL字形に組まれ、2段以上積まれていたようである。溝5と同様に規模が大きく、屋敷地を囲む堀のような印象を受けた。遺物は土器小片や土製品、鉄器が出土した。241～248は早島式土器碗と呼ばれるもので、241～243・247は白色を、244～246・248は淡橙色を呈する。241・242は器壁が厚く、しっかりした高台を持つ。それ以外は器壁が薄く、高台も非常に小さいか高台のないタイプである。249・250は器壁の薄い土師器の小皿、251は青磁の皿、C4・5は土錘、M3は鉄製鍬先の側辺部である。時期は土器の特徴から14世紀以降と考えられる。

(物部)



第240図 溝6・出土遺物(1/60・1/3・1/2)

溝7・8（第241・242図）

東西方向の直線的な溝7と、東西から南北方向に直角に折れ曲がる溝8である。未調査部分を挟むが、検出状況から両者は同一の溝と考えられる。溝8の北端は、溜池状遺構の南東端から2m離れている。検出時の規模は幅1~1.5m、深さ0.2~0.4mで溝8に向かって深くなる。断面形は逆台形を呈する。出土遺物は同安窯系青磁皿260である。溝の時期は中世と考えられる。

(高田)

溝9（第241図）

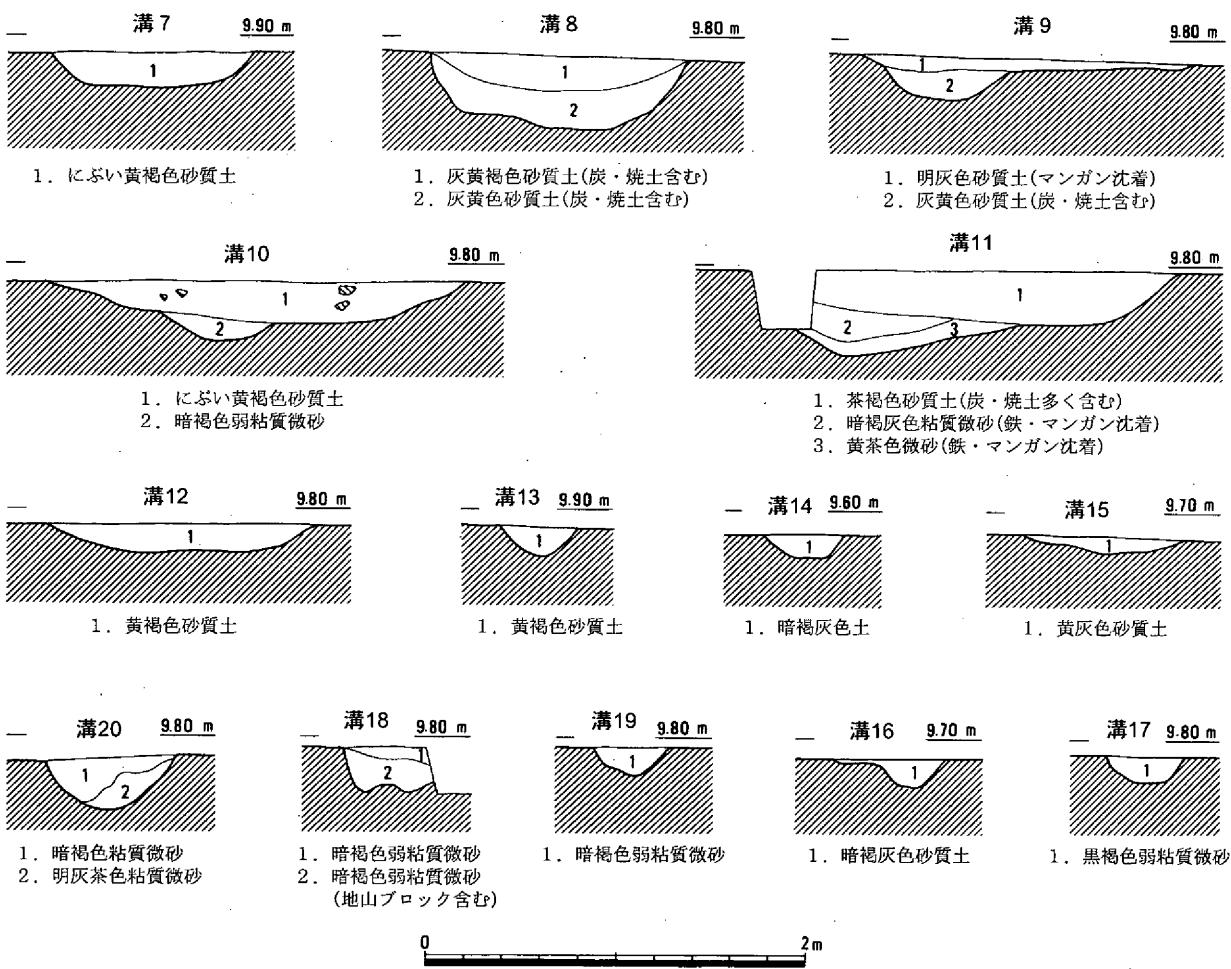
30区南端で検出した溝で、西から東に直線的に流走する。検出時の規模は幅1.8m、深さ0.2mで、底面が二段に深くなる。出土遺物には少量の中世土師器片がある。

検出状況と出土遺物から、溜池状遺構の北端に接続する溝と考えられる。

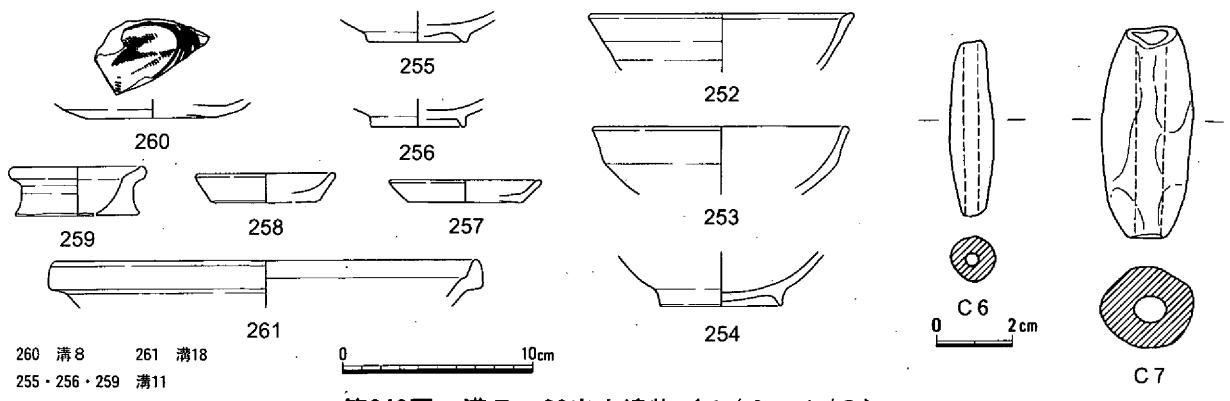
(高田)

溝10・11（第241・242図）

溝10は27区南端部に位置する。溝11は13区南端に位置し、その形状や方向、位置関係から同一の溝と考えられる。井手天原遺跡の所在する微高地南縁部を西北西—東南東に走る溝である。検出長12.26m、検出幅2.05~2.00m、検出面からの深さ0.30~0.21mを測る。また下部にはさらに古い時期の溝底部が検出され、2条の溝が重複している、あるいは、掘り直しが行われたと考えられる。下部の溝の検出幅1.35~0.56m、検出面からの深さ0.27~0.12mを測る。遺物は第1層から土器小片が少量出土した。255・256は灰白色を呈する早島式土器と呼ばれる土師器碗、259はにぶい黄橙色を



第241図 溝7~20 (1/40)



第242図 溝7~20出土遺物 (1/4 · 1/2)

呈する土師器の小杯である。時期は土器の特徴から13世紀前半と推定される。
(物部)

溝12 (第241図)

溝12は28区南半、溝10の北約22mに位置する。溝1・17を切っている。主軸をほぼ東西にとり、検出幅1.35m、検出面からの深さ0.16mを測る。出土遺物は僅かであるが、黄褐色を呈する埋土からこの溝の時期は中世の範疇に入るものと推測される。
(物部)

溝13 (第241図)

溝13は28区中央、溝12の北約2mに位置する。主軸をほぼ東西にとり、検出幅0.40m、検出面からの深さ0.15mを測る。断面は椀形を呈し、埋土は黄褐色砂質土である。遺物はほとんど無く、埋土から時期は中世と考えられる。
(物部)

溝14 (第241図)

16区の北東端、わずか3m程を検出した直線的な溝である。検出面での溝の幅は0.65m、深さは0.15mを測る。断面形は逆台形状を呈している。溝底のレベルから北から南へ流走していたと思われる。

時期は遺物や埋土等から中世と思われる。
(小嶋)

溝15 (第241・242図)

16区の北側で検出した北西から東へと流走する溝である。検出面での溝の幅は1.29m、深さ9cmを測る。遺物は土師器の椀252~254、土師器の小皿257・258などが出土している。

時期は中世に比定される。
(小嶋)

溝16・17 (第241図)

溝16は15区に位置し、溜池状遺構に切られている。溝17は27区から28区にかけて検出され、溝7・12に切られ、また、溝1を切っている。溝の方向や形状から両者は同一の溝と考えられる。遺物は僅かであり、時期は遺構の切りあいなどから中世前半と考えられる。
(物部)

溝18 (第241図)

溝18は28区北半に位置し、後述する溝19の南約1mの間隔をあけて併走する。土壙10・溝5に切られる。検出幅0.37m、検出面からの深さ0.15mを測る。南南西-北北東に主軸をとる。遺物は僅かで、261は口縁端部が上方に拡張する東播系の鉢である。時期は14世紀と推定される。
(物部)

溝19・20 (第241図)

溝19は28区北半、溝20は16区南半に位置し、方向や形状から同一の溝と考えられる。また、溝16・17、溝18、溝19・20は一様に主軸を南南西-北北東にとり、埋土は暗褐-黒褐色の砂質土であるなど 性格は不明であるが、関連性があり、時期も同じ頃と考えられる。
(物部)

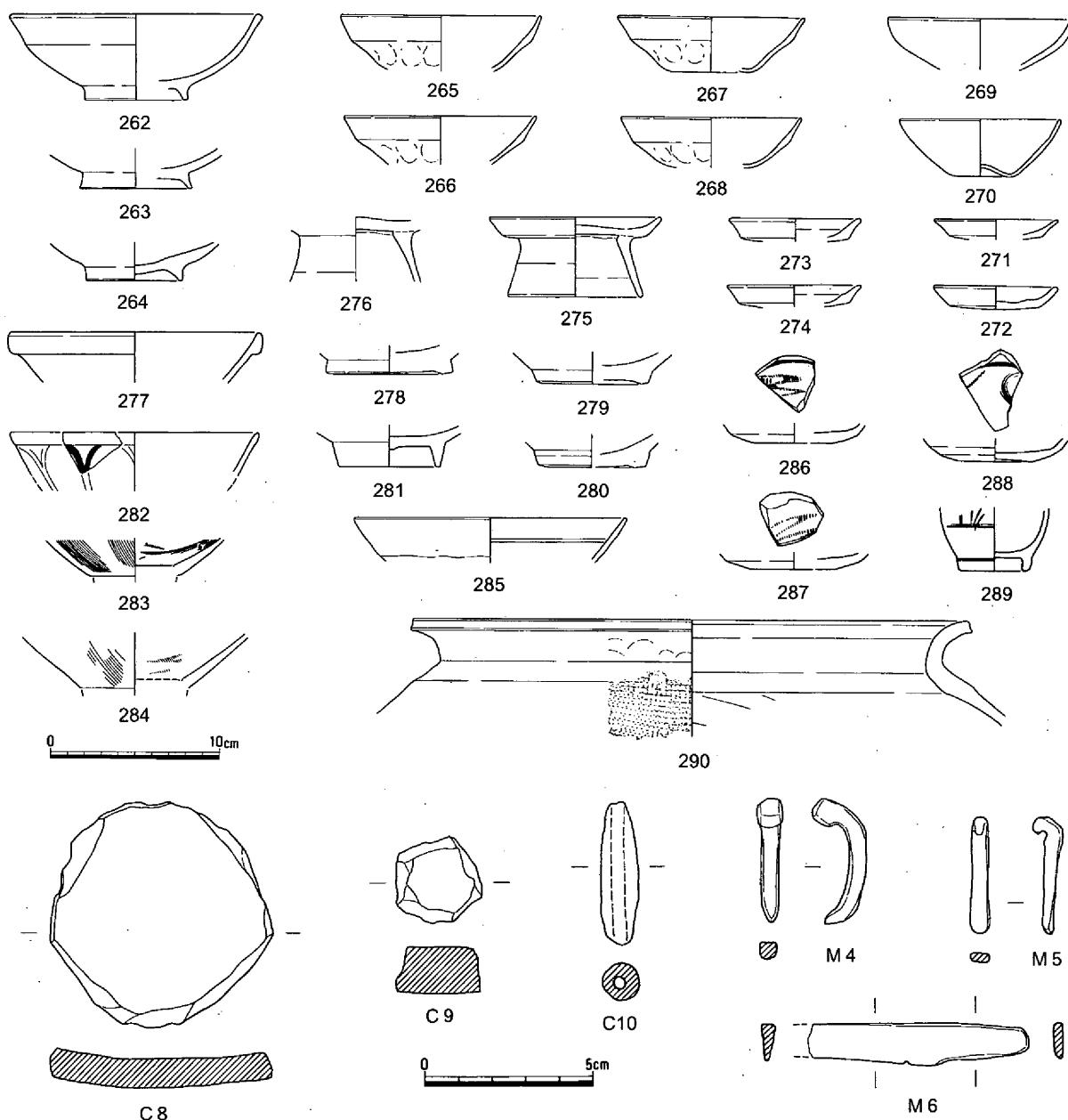
(6) 遺構に伴わない遺物 (第243図)

遺構を検出する段階で、中・近世に属する土器や陶磁器、土製品、金属製品が出土している。

262～270は土師器の碗である。このうち高台をもつ262～264はいわゆる早島式土器で、口径14.4cmを測り、12世紀後半に位置付けられる。また251～256は凹み底をもつへそ碗で、14世紀に属するものである。小皿には底部をヘラキリする271～274と、長い高台を貼り付ける275・276がある。

277～281は白磁の碗で、277は玉縁状の口縁部をもつ。青磁には碗282～285と皿286～288がある。碗は蓮弁文を飾る竜泉窯系の282と、内外面に櫛描き文を飾る同安窯系の283・284が見られる。これらは11世紀後半から13世紀前半に位置付けられる。このほか肥前染付の徳利289や亀山焼の甕290がある。

また、土製品には須恵器片を円板状に打ち欠いた面子C8・9、紡錘形をなす土錐C10があり、金属製品は鉄釘M4・5、刀子M6が出土している。
(亀山)



第243図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)

第7章 まとめ

国道429号線改良に伴い、都窪郡山手村から総社市にかけて所在する7遺跡・1散布地の発掘調査を行った。これらの遺跡の立地は4種類に分けられる。1. 福山・仕手倉山山塊を縦断する谷筋に面した丘陵尾根上およびその裾部、2. 谷筋が北の総社平野に向けて大きく開く緩斜面部、3. 作山古墳と備中国分寺の間の広い低湿地部、4. その低湿地部の北にある旧河道と幾筋もの低位部に区切られた微高地部である。1に立地する前山遺跡では弥生時代後期の集団墓地の検出や初期須恵器の出土、鎌戸原遺跡では包含層からであるが、縄文時代後・晚期～弥生時代前期の土器片や綠釉陶器、灰釉陶器、面取りされた高杯脚部などの出土が注目される。2の緩斜面に立地する岡谷大溝散布地では遺構は検出されず、遺物も僅かで、おそらく調査区の東約100mにある大溝川の氾濫などの影響により調査区の周辺は住居地として利用されなかったものと推定される。3の低湿地部に立地する三須今溝遺跡および4の微高地に立地する三須河原・三須畠田・井手見延・井手天原遺跡については時期を追って概観することでまとめとしたい。ただし、調査地は遺跡のほんの一部分にすぎないので、遺構に加えて出土遺物の時期や量に重点を置き、また、総社市教育委員会の発掘調査の成果をふまえ、その弱点をできるだけ補いたい。

縄文時代晚期 縄文時代晚期の土器は三須今溝遺跡から数点、井手見延遺跡の微高地部にあたる18区から1点出土した。平野部に設定した調査区で確認された最古の遺物であり、遺跡の形成がこの時期まで遡る可能性もある。

弥生時代前期 この時期の遺物も非常に少ない。微高地部では、三須畠田遺跡で頸部に2条のヘラ描沈線文の施された壺375が1点確認された。三須今溝遺跡では、前・Ⅱ期の溝が1条（溝1）検出された。この溝は自然流路か人工水路か判別しがたいが、低湿地の中央部に立地することから、水田耕作の排水路として機能したと考えられ、周囲に弥生前期の水田が存在する可能性もある。

弥生時代中期 中期の前半においては、三須河原・三須畠田・井手見延遺跡で土器が出土しているが、量は少ない。しかし、井手見延遺跡では住居跡は検出されなかったものの土壙3基と溝1条が確認された。これらは調査区内の微高地部で検出された最古の遺構である。中期後半になると井手見延遺跡では遺構に加え遺物もほとんどみられなくなる。逆に三須畠田遺跡ではこの段階で初めて遺構が検出され、土器も大量に出土した。土器は遺構に伴うもの以外に、弥生時代後期から古墳時代にかけてのほとんど全ての遺構埋土中に混入している状況がみられ、実際検出された遺構はそれほど多くないものの、集落として大きく発展していたと考えられる。出土土器の中には壺・甕・高杯・鉢など一般的な器種以外に内面にヘラケズリを施す大形の鉢296や尖底の小形の鉢90・399・400、回転台形土器10個体、分銅形土製品8個体、さらに、箱形土製品C16や鹿と推定される動物形土製品C17・C18などがみられる。回転台形土器は11区を中心に包含層や異なる時期の遺構から出土し、形態の異なる2種類がみられる。天板の直径と筒部の直径とにあまり差がないもの412と、筒部の直径が天板の直径の1/2前後あるいはそれ以下で、筒部が壺の口縁～頸部のような形状を呈し、上半部が大きく外方に反るもの306・413～417であり、後者は筒部や筒部上端および天板外縁端面に凹線文が施される。仮に前者をA類、後者をB類とする。調整は天板部上面にヘラミガキ、筒部外面はナデ・ハケメ、内面は押圧やユビナデである。時期は砂粒の少ない胎土や灰白色の色調などから弥・中・Ⅲと考えられる。岡

山県内の回転台形土器と断定し得るものは、管見の限りでは18点あり、現在のところ、その出土は県南に限られている。形態はA類に筒部上半部の反りが小さいものとやや大きいものがあるが、大枠にはA・B類の2種類がみられる。B類は山陽町門前池遺跡第2地点12号住居跡上部土器溜まり上層出土の1点のみで他は全てA類に属する。A類の時期は、百間川兼基・百間川今谷遺跡の溝出土のものが弥・中・Ⅱ新相、津寺遺跡の住居跡出土のものが弥・中・Ⅲ、門前池遺跡第2地点予備調査土器溜まり出土のものが弥・後・Iである。B類の時期は門前池遺跡のものが弥・後・Iに、そして三須畠田遺跡のものが弥・中・Ⅲに比定される。このことから、現段階ではA類は弥・中・Ⅱ～弥・後・I、B類は弥・中・Ⅲ～弥・後・Iの時期が想定され、B類はA類より後出する形態と考えられるのであるが、資料の蓄積を待ちたい。

弥生時代後期前葉（弥・後・I） この時期、三須畠田遺跡で検出された遺構は井戸を含む土壙11基のみであり、検出範囲は8・11区の南半部に限定される。住居域はおそらく東方の調査区外に位置するものと推定される。また、出土土器の量は中期後半より、格段に減少し、集落としては前段階から存続しているけれど、やや縮小傾向にあると考えられる。それに反するように、中期後半にはまったく遺構・遺物がみられなかった井手見延遺跡では、堅穴住居3軒ほか多数の袋状土壙が検出され、この遺跡の中心を成す時期となる。また、三須河原遺跡の南に位置する美濃田遺跡はこの時期に中心をおく集落である。

弥生時代後期中葉（弥・後・II） 調査した全ての遺跡で、ほとんど遺構・遺物がみられない。

弥生時代後期後葉～末葉（弥・後・Ⅲ～IV） 三須畠田遺跡では再び全盛を迎える。井手見延遺跡・三須河原遺跡では遺構・遺物ともに僅かである。また、この時期にいたり、井手天原遺跡で初めて堅穴住居や土壙および遺物が確認される。

古墳時代前期 前段階で多数の遺構や大量の遺物が確認された三須畠田遺跡は、堅穴住居1軒など遺構は確認されるが、包含層遺物は極端に減る。井手見延遺跡では、比較的多くの土器を包含する溝が確認されたほか、同一微高地に立地する金井戸鴻崎遺跡で堅穴住居3軒が検出されており、この時期の集落は微高地の北東部に展開しているものと思われる。前段階から集落を形成していた井手天原遺跡では、古墳時代前期になって堅穴住居が9軒確認され、遺物も格差をもって増加し、井手天原遺跡の中心時期となる。また、井手天原遺跡の北西に隣接する金井戸新田遺跡でも古墳時代初頭の堅穴住居6軒や溝1条が検出され、金井戸鴻崎遺跡から井手天原遺跡、金井戸新田遺跡にかけて、広域にわたって集落が展開していた状況がうかがわれる。なお、井手天原遺跡の堅穴住居8から楕円形鍛冶滓が出土している。

古墳時代中期 井手天原遺跡では、遺構・遺物とも激減する。この時期には、遺構に伴わない遺物はほとんどみられないけれど、各遺跡ごとに堅穴住居や土壙が点在し、集落がそれぞれ微高地ごとに分散したような印象を受ける。三須畠田遺跡堅穴住居10から出土した粘土と土器の胎土でほぼ同一の分析値が得られた。土器製作に使用する粘土を自らの住居内に保管していた可能性がある。しかし、三須畠田遺跡の弥生時代中期末の粘土塊と弥生時代後期前葉の土壙13での同様の分析では胎土は一致せず、報告文にもあるように複数の粘土を混ぜて焼成粘土とした可能性以外に住居の屋根や壁に塗ったり、床に敷いたり、カマドを作ったりなど、土器製作以外の用途も考慮すべきと考えられる。

古墳時代後期 古墳時代後期においても、中期と同様な傾向がみられるが、全体的に遺構・遺物が増加する。その中で、三須畠田遺跡は遺構・遺物の増加が著しく、6世紀代の堅穴住居15軒が検出

された。6世紀前半代の5軒のうち、堅穴住居12・13・15は住居としては異常なほど多くの遺物を伴う。器種には須恵器蓋杯・甕・高杯・壺・小形直口壺、土師器壺・甕・高杯・鍋・瓶・羽釜、製塩土器、手捏ね土器、砥石、などがある。須恵器の蓋杯は天井部須と口縁部の境の段や口縁端部の段がしっかりとし、天井部のケズリも広く施されているものから、段がはっきりせず、ケズリの幅の短いものまである。杯身においても斬移的な形態差がみられ、陶邑編年MT15からTK10への過渡的な様相を持っている。土師器羽釜539は菅生小学校裏山遺跡出土の5世紀前半の手捏ね土器を除くと、百間川原尾島遺跡の井戸出土5世紀末の羽釜に次ぐ時期の古いものである。また、検出された5～6世紀前半の堅穴住居の半数以上が製塩土器を伴うのに対し、6世紀後半以降の住居からは、出土遺物自体が少なくなる傾向はあるが、製塩土器がみられなくなる。逆に、鉄滓の出土は6世紀前半から増え始め、6世紀末～7世紀初頭になると堅穴住居5軒のうち、2軒で鍛冶滓、1軒で箱形炉の炉底塊が検出された。古墳時代後期III（7世紀前半）では三須畠田・井手見延遺跡で遺構・遺物が若干みられるが、全ての遺跡で前段階に比べ遺構・遺物が減少する。

古代 全ての遺跡で遺構・遺物がみられるようになる。特に、三須河原遺跡では、総社市教育委員会の調査によって、奈良時代の棟方向を同じくする掘立柱建物群や総柱建物群が検出され、さらに「群殿」と墨書きされた8世紀初頭の須恵器杯身・杯蓋4点や丹塗り暗文土師器が出土するなど、窪屋郡衙の可能性が指摘されている。井手見延遺跡では、低位部から円面硯C5、風字硯C6～8が出土し、また、総社市教委が調査した金井戸鴻崎遺跡では掘立柱建物の一部や溝(SD01)から8世紀初頭から9世紀初頭の須恵器と丹塗り土師器が出土するなど、金井戸鴻崎遺跡一帯に8～9世紀にかけての官衙関連遺構が存在している可能性が高く、注目される。また、井手見延遺跡土壙9や金井戸鴻崎遺跡SD01から出土した鍛冶滓や羽口は官衙関連遺構に付随する鍛冶工房の存在を示す可能性がある。微高地端部で検出された土壙8からは須恵器杯身212・杯蓋210・211と土師器の甕213、および丹塗り土師器の皿214と高杯212がそれぞれ完形に近い状態で出土し、一括性の高い遺物として重要である。さらに、井手天原遺跡では、中～近世の溝埋土中に混入して第244図の風字硯C11が出土した。現在のところ、備中国府推定域から出土した唯一の官衙関連遺物といえる。また、東西に直線的に伸びる溝3・4にも留意しておく必要があると思われる。平安時代後半になると全ての遺跡で遺構・遺物がほとんどみられなくなる。

中世 全ての遺跡で遺構・遺物がみられる。平安時代末頃から鎌倉時代にかけては掘立柱建物や柱穴が多数確認されるのに対し、室町時代、特に15世紀以降は溝や畦畔が遺構の中心となり、この辺り一帯の水田化が急速に進んだことが推察される。

以上、おおまかに各遺跡の概要を述べたが、特に、弥生時代中期から古墳時代前期にかけては三須畠田遺跡・井手見延遺跡・井手天原遺跡の3者が中心時期をずらし、相互補完的な状況を呈するのに対し、古墳時代中期以降は遺跡ごとに分散して集落を形成をしているように見える。このことは沖積平野部における集落の動向を考える上で重要と思われる。しかし、部分的な調査の成果を元にしたものであり、今後の調査に負うところが大きい。

(物部)

<主要参考文献>

『総社市埋蔵文化財調査年報2・3・6～9』総社市教育委員会、1993・1994・1996～1999

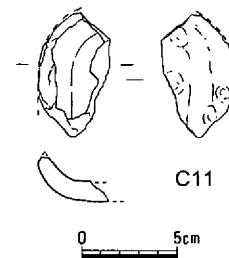
「備中国府跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告書7』総社市教育委員会、1989

『総社市史 考古資料編』総社市、1987

『岡山県埋蔵文化財報告29』岡山県教育委員会、1999

「百間川原尾島遺跡4」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97」岡山県教育委員会、1995

「菅生小学校裏山遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81」岡山県教育委員会、1993



第244図 井手天原遺跡出土遺物(1/4)

第1表 遺跡の変遷 ※岡山県教委・総社市教委の調査成果から作成

	縄文時代	弥生時代												古墳時代									奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	
		前期			中期			後期			前期			中期			後期										
		I	II	III	I	II	III	I	II	III	IV	I	II	III	I	II	III	I	II	III							
岡谷大溝散布地																											
三須今溝遺跡			溝1					溝2											溝1	溝1			溝1	溝2			
三須河原遺跡								溝1				溝1	溝2						住2		住1	溝4	建14 土1 溝2	建	建2		
三須畠田遺跡								住2 土7 溝3	土10 井1	土1	住5 柱列1 土7 溝3	住3 土2		住1			住1	住5 土1	住18 建1 溝1	溝2	土1 溝1	建6 土4 蓋4 井1	建6 土1 溝3 畦1				
井手見延遺跡								土2 溝1		住3 袋14 土2						溝2		住1		住3	土1		建1 土1 溝2	建1 墓1	池1 溝1		
井手天原遺跡																土2	土1	住6	住1					溝1	建3 土2 溝1	土1 池1 溝3	

第2表 岡山県出土の回転台形土器一覧

番号	所在地	遺跡名	出土遺構	時期	残存状況	天板径cm	タイプ	備考	文献	刊行年
1	山陽町	門前池	第2地点予備調査土器溜まり	後期初頭	上部周辺	18	A	上面ヘラミガキ		
2	山陽町	門前池	第2地点12号住居跡上部土器溜まり上層	後期初頭	上半部	19	B	上面ヘラミガキ 上面中央は孔	「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9』	1975
3	山陽町	門前池	第2地点12号住居跡上部土器溜まり上層	後期初頭	上部周辺	27	A	上面ヘラミガキ		
4	山陽町	惣園	第2地点第14号住居跡流入埋積土	中期後半	上半部	18	A	天板部外面ヘラミガキ 内面なで	「惣園遺跡第2地点」『岡山県當山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(4)』	1977
5	山陽町	惣園	第2地点第20号住居跡床面	中期後半	下半部		A	可能性あり		
6	山陽町	用木山	第9住居跡支群出土遊離土器	中期後半	上半部	21	A	上面径15.5~22cm、上面使用痕は不明、天板部外面ヘラミガキ、同内面上端へラ状工具ナ子		
7	山陽町	用木山	第9住居跡支群出土遊離土器	中期後半	上半部	20.5	A		「用木山遺跡」『岡山県當山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(4)』	1977
8	山陽町	用木山	第10住居跡支群遊離土器	中期後半	上半部	15.5	A			
9	山陽町	用木山	第11住居跡支群遊離土器	中期後半	上半部	19	A			
10	山陽町	用木山	第11住居跡支群遊離土器	中期後半	上半部	19.5	A			
11	山陽町	さくら山							同上	
12	岡山市	百間川兼基	1-溝30	百・中・Ⅱ新相	上部	24.5	A	外ハケメ、内指ナデ、上部外湾	「百間川兼基遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』	1982
13	岡山市	百間川今谷	1-溝1	百・中・Ⅱ新相	上部	20	A		「百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』	1982
14	岡山市	後池内	2区包含層	中期後半	上半部			小片	「後池内遺跡」(山陽自動車道建設に伴う発掘調査8)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』	1994
15	岡山市	南方	土壤墓群	後期以前	上面部	20.5	A		「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110』	1996
16	岡山市	津寺	西川調査区 堪穴住居-2	中期Ⅲ	全形	27	A	上面ヘラミガキ、内外面ハケメ、上部外湾	「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』	1995
17	岡山市	津寺	堪穴住居-200	中期Ⅲ	上半部	24	A	上面ケズリのちミガキ、内面ケズリ外ハケメ	「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127』	1998
18	真備町	蓮池尻	油田地区T-28	中期前半	上半部	20	A	上半部 腹部外面ヘラミガキ、打ち欠きあり	「蓮池尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告62』	1986

第8章 自然科学分野における分析・鑑定

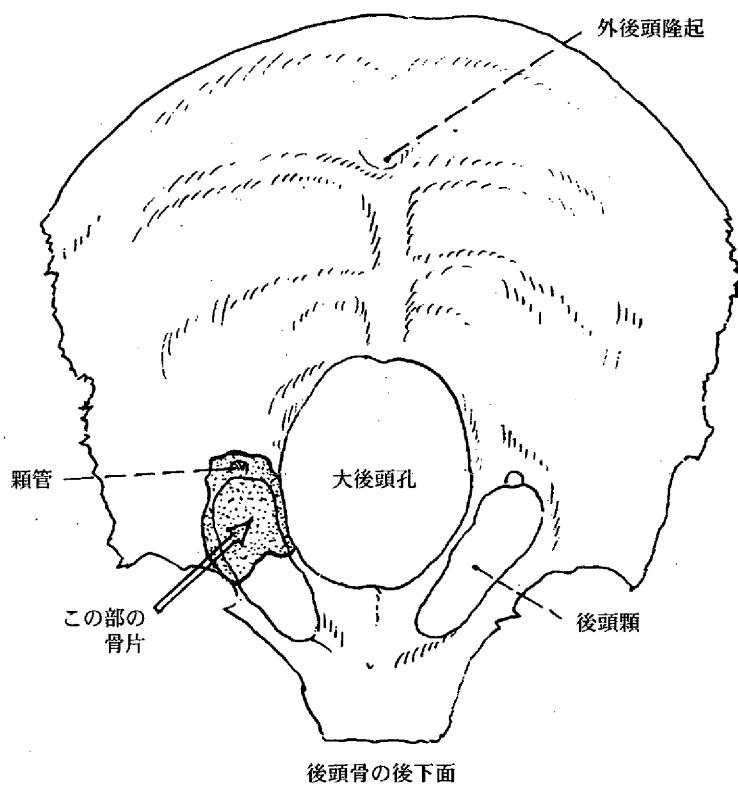
第1節 三須畠田・井手天原遺跡中世墓出土の歯の鑑別

小田嶋梧郎

1. 三須畠田遺跡4区 土壌墓2

歯冠小片3個と骨片(24×16mm)の鑑別で、歯冠片の1個は大臼歯の歯種の判別以外は鑑別不可能である。

骨片は後頭骨の後下面で左側後頭頸上半部のものであろう(図参照)。そのほかのことはまったく不詳である。



2. 三須畠田遺跡4区 土壌墓3

今回の検索鑑別依頼歯は、原形の欠損、咬耗など保存状態不良で、その判別に難儀した症例であったが、決め手になる特徴によって、推定できた歯の鑑別記録を記述する。

歯種、上下、順位、顎側などの判別ができたのは下表の歯列に属する7個の歯である。

右側		左側
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ 3 ○ ○ 6 7 8
8 ○ ○ 5 4 ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

1) 左上顎犬歯（L3）：歯冠幅6.8mm（平均値7.9mm）、歯冠厚7.8mm（平均値8.2mm）で、平均値より小さく、歯冠唇面の歯頸部に3本の横走する溝と横走隆線が認められる（図1）。また、舌面観で、歯冠結節および中央舌面隆線の発育は悪いが、近心舌側隆線が著明である（図2）。

歯冠の接触面の外形は、ほぼ三角形で、その底辺の歯頸線が切縁に向って軽度に凸弯するが、その高さが近心面と遠心面とで差があることから本症例は左上顎犬歯（L3）である判別の決め手となった。すなわち、遠心面の歯頸線の頂点a（図3）は、近心面の歯頸線の頂点b（図4）よりも歯根側に近



図1.唇面観

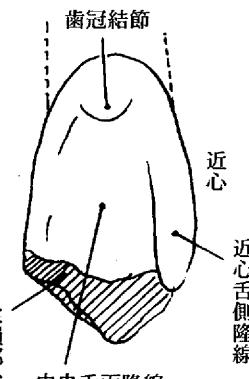


図2.舌面観

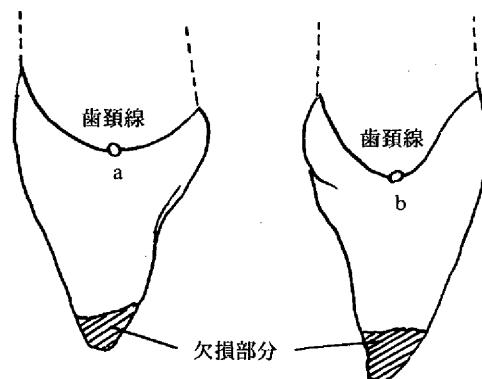


図3.遠心面の歯頸線

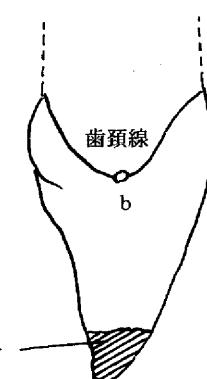


図4.近心面の歯頸線

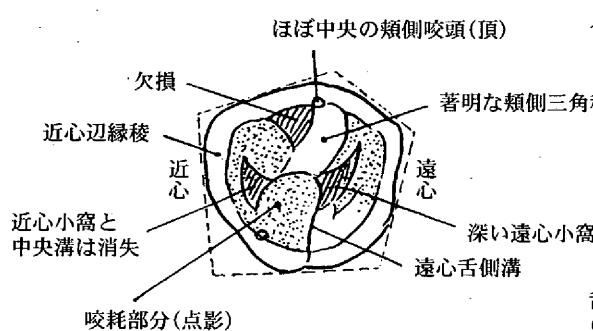


図5.右下顎第一小臼歯の咬合面観

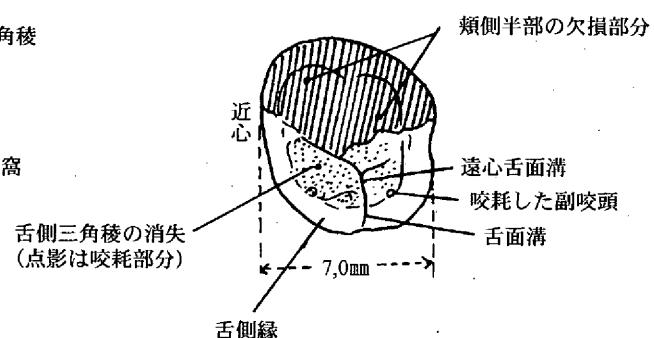


図6.右下顎第二小臼歯の咬合面観

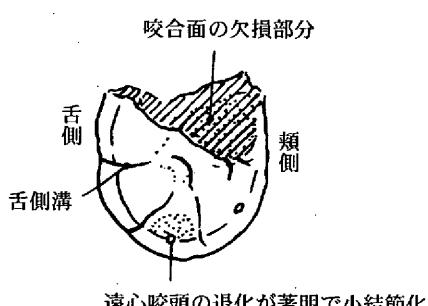


図7.右下顎第三大臼歯の咬合面観

く位置しているからである。

2) 右下顎第一小臼歯 (41)：2個の咬頭のうち、頬側咬頭が高く大きく突出し、その咬頭頂が頬側咬合縁のほぼ中央に位置し、咬頭頂から咬合面に向う傾斜面の中央は頬側三角稜とよぶ高い隆線状をしている。これに反し、舌側咬頭が隆線化して小さく、かつ、低くなるのに、舌側咬頭の発育が良好で、歯冠幅7.0mmは平均値を示すが、歯冠厚6.7mm（平均7.8mm）は小さく華奢な形態から、恐らく女性歯で、しかも咬耗度の強いところから高齢者と推察する（図5）。更に、近心縁に沿う近心辺縁稜（辺縁隆線）と遠心縁に沿う遠心辺縁稜とは共に比較的著明で、前者が後者より短く、しかも高い位置にあることが判別の決め手になった。すなわち、下顎第一小臼歯の近・遠心側の鑑別に役立ったわけである。

3) 右下顎第二小臼歯 (51)：頬側半部の欠損並びに舌側半部の激しい咬耗ある症例であるが、図6に示すごとく、歯冠舌側半部に遠心舌面溝および舌面溝を認め、咬耗もあるが舌側咬頭の発育が良好で、僅かに咬耗した副咬頭の存在もうかがえる。歯冠幅7.2mmで平均値を示すが、頬側半部の欠損がなく、歯冠厚の計測ができれば、判別は可成容易であったであろう。

4) 左上顎第一大臼歯 (16)、左上顎第二大臼歯 (17)、左上顎第三大臼歯 (18)：3本とも舌側半部の欠損した上顎大臼歯列で、歯冠幅の大きさの順、すなわち10.6mm、9.1mm、8.3mmに並んでいる。歯冠類面の外形は、咬合縁を大きな底辺とした台形をなし、歯頸線はほぼ水平にまっすぐに経過する。咬合縁は近心頬側咬頭と遠心頬側咬頭とが下方に向って突きるので、その全体観はW字形を示す。また、近心頬側咬頭は遠心頬側咬頭より高く大きいが、上顎第三大臼歯 (18) の両咬頭には咬耗がなく、他の2者は可成の咬耗を認める。4縁のなす角のうち、近心頬側隅角が鋭角をなし、遠心頬側隅角が鈍角をなす上顎大臼歯群の大きな特徴が判別の決め手となる。なお、第一大臼歯の歯冠幅の計測値は平均値を示すが、第二大臼歯および第三大臼歯はともに平均値を下まわる点から女性歯と推察した。

5) 右下顎第三大臼歯 (81)：近心半部の欠損、特に近心頬側部の欠損が強く、上顎歯との咬合接觸による頬側縁の舌側方向への傾斜が見えないが、歯冠幅9.2mmと小さく、遠心咬頭の退化が著明で（図7）、小結節化している点と、上顎歯との咬合臼磨運動による咬合面の咬耗が強いことなどから、右下顎第三大臼歯 (81) と鑑別した。

3. 井手天原遺跡27区 土壙墓

18小歯片がこまかく、特徴ある歯片の見つからないまま、鑑別不詳であった。

第2節 国道429号線改良に伴う発掘調査出土製鉄・鍛冶 関連遺物の金属学的調査

大澤正己・鈴木瑞穂

1 調査項目

- ① 肉眼観察 ② 顕微鏡組織 ③ ビッカース断面硬度 ④ 化学組成分析

2 調査結果

TMH-1A 梱形鍛冶滓

① 肉眼観察：黒色ガラス質の偏平な楕形鍛冶滓である。上面は凹面を示す。周縁部には2～3mm径の気孔が多数認められる。下面は淡褐色の一面に鍛冶炉床粘土が付着する。

② 顕微鏡組織：Photo. 1 ①～③に示す。①は暗黒色ガラス質滓中に微小析出物が認められる。②③は淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）が暗黒色ガラス質滓に晶出する。ガラス質の楕形鍛冶滓である。

TMH-1B 鍛冶滓片

① 肉眼観察：黒灰色を呈する不定形な鍛冶滓の小片である。上面は平坦気味で、下面中央の凹部は木炭痕と思われる。

② 顕微鏡組織：Photo. 1 ④～⑥に示す。白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。また僅かに微小金属鉄粒が散在する。鍛冶滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 1 ④に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は474 Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ヴスタイト（Wüstite：FeO）に同定される。

小結

井手天原遺跡竪穴住居8（4世紀後半）出土楕形鍛冶滓（TMH-1A）はガラス質滓で、鍛冶炉炉壁及び羽口の溶融物、ないしは赤熱鉄素材の表面に酸化防止粘土汁を塗布した際の派生物であろう。また、ヴスタイト（Wüstite：FeO）、ファイヤライト（Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）組成の鍛冶滓小片（TMH-1B）が確認できた。鍛冶原料鉄は製錬系鉄塊系遺物ではなく、不純物の少ない鉄素材が搬入され、鍛錬鍛冶工程が行われた可能性が高い。

TMH-2A 鍛冶滓片

① 肉眼観察：黒灰色を呈する鍛冶滓の小破片である。緻密で表面僅かに光沢を持つ。

② 顕微鏡組織：Photo. 1 ⑦に示す。白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite：FeO）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。また、錆化鉄（Geothite： $\alpha-\text{FeO}\cdot\text{OH}$ ）が認められる。

TMH-2B 鍛冶滓片

① 肉眼観察：黒灰色を呈する鍛冶滓の小破片である。緻密だが僅かに破面に細かい気孔が認められる。

② 顕微鏡組織：Photo. 2 ①に示す。淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite： $2\text{FeO}\cdot$

SiO_2)、が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。また、微小金属鉄粒が散在する。

TMH-3 梗形鍛冶滓

① 肉眼観察：小型の梗形鍛冶滓である。全面黄褐色の酸化土砂に厚く覆われている。側面1面は破面。破面中央に小さな鋸歯状の凹部がある。

② 顕微鏡組織：Photo. 2 ②～④に示す。鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite : FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite : 2 FeO·SiO₂）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。④は錆化鉄（Geothite : α -FeO·OH）部分である。

③ ピッカース断面硬度：Photo. 2 ②に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は444Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値450～500Hv(注1)の下限を僅かに下回るが測定時の亀裂などによる誤差と考えられる。ヴスタイトといえよう。

TMH-4 A 鉄滓片

① 肉眼観察：僅かに光沢のある黒灰色を呈する。表面は滑らかな流動状で、細かい木炭痕による凹部が2個所認められる。上面1面が破面。外観からは鍛冶滓片の可能性が高いと考えられる。

② 顕微鏡組織：Photo. 2 ⑤～⑦に示す。淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite : 2 FeO·SiO₂）、白色樹枝状結晶ヴスタイト（Wüstite : FeO）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。なお局部的にファイヤライトの巨晶が認められる。この晶癖からは鉱石系製鍊滓の可能性も考えられる。

TMH-4 B 鍛冶滓片

① 肉眼観察：黒灰色で破面の光沢の顕著な鍛冶滓片である。径1mm前後の細かい気孔が散在する。細かい木炭痕が1個所認められる。

② 顕微鏡組織：Photo. 3 ①に示す。白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite : FeO）が凝集して晶出する。その粒間の淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite : 2 FeO·SiO₂）とガラス質滓はごく少量である。これも鍛鍊鍛冶滓の晶癖といえる。

③ ピッカース断面硬度：Photo. 3 ①に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は475Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ヴスタイト（Wüstite : FeO）に同定される。

TMH-5 A 鉄滓片

① 肉眼観察：表面黄褐色の酸化土砂に厚く覆われた平面長方形形状の試料である。錆化のためか2辺に割れている。

② 顕微鏡組織：Photo. 3 ②に示す。淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite : 2 FeO·SiO₂）が暗黒色ガラス質滓中に晶出する。また錆化した微小鉄粒が散在し、木炭の付着も認められる。

TMH-5 B 鉄滓片

① 肉眼観察：黒灰色で僅かに光沢を持つ、表面細かい凹凸が顕著な鍛冶滓片である。

② 顕微鏡組織：Photo. 3 ③～⑤に示す。③は木炭及び錆化鉄部分。④⑤は発達した淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite : 2 FeO·SiO₂）と微小白色樹枝状結晶ヴスタイト（Wüstite : FeO）が暗黒色ガラス質滓中に晶出する。発達したファイヤライト結晶の晶出から鉱石系製鍊滓の可能性も考えられる。

TMH-5 C 鍛冶滓片

① 肉眼観察：無光沢で黒灰色を呈する、小型で緩やかに彎曲する板状の滓片である。

② 顕微鏡組織：Photo. 3 ⑥に示す。微小白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite : FeO）が凝集気味に晶出し、その粒間に淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite : 2 FeO·SiO₂）も認められる。

小結

井手見延遺跡3区の6世紀前半に比定される竪穴住居5・6の出土鉄滓の分析結果、断定は難しいがTMH-4A・5Bでは発達したファイヤライト（Fayalite : 2 FeO·SiO₂）結晶が認められ、鉱石系製鍊滓である可能性もある。製鍊滓とすれば鍛冶原料の鉄塊系遺物の付着滓を除去した残材であった可能性が高い。また他の試料の鉱物組成はヴスタイト（Wüstite : FeO）及び小結晶のファイヤライト（Fayalite : 2 FeO·SiO₂）、ないしは小結晶のファイヤライト（Fayalite : 2 FeO·SiO₂）単相であり、鍛冶滓といえよう。これらの派生物から鍛冶原料鉄の性格について言及することは困難であるが、地域的な特色も含めて考えると鉱石系の原料鉄であった可能性が考えられる。

TMH-6 梗形鍛冶滓

① 肉眼観察：平面楕円状で厚手の梗形鍛冶滓である。側面2面は破面。表面は黄褐色の酸化土砂に覆われる。上面には長さ1cm程の木炭痕がまばらに見られ、下面是きれいな曲面を呈する。表面には割れが広範囲に認められる。含鉄部の錆化と風化双方の影響であろうか。

② 顕微鏡組織：Photo. 4 ①～③に示す。①は錆化した鉄部でフェライト基地に少量のパーライトが析出する組織痕跡が残存する。組織から含有炭素量は0.2%程度の軟鋼と推定される。②③は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite : FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite : 2 FeO·SiO₂）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。

④ 化学組成分析：Table. 2に示す。ガラス質分が高めで、脈石成分（MnO、TiO₂、V）の低減した成分系である。全鉄分（Total Fe）49.48%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.09%、酸化第1鉄（FeO）34.49%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）32.29%の割合であった。ガラス質成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）24.52%で、このうちに塩基性成分（CaO+MgO）1.89%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO₂）0.12%、バナジウム（V）<0.01%と低値で、酸化マンガン（MnO）0.08%、銅（Cu）0.008%であった。鍛錬鍛冶滓に分類される。

TMH-7 梗形鍛冶滓

① 肉眼観察：やや不定形の小型の梗形鍛冶滓である。側面は1面のみ破面。上面には長さ1cm程の木炭痕が数個所認められる。下面是平坦気味で一部鍛冶炉炉床土が付着する。また、銀灰色で光沢のある鍛造剥片が付着している。破面には中小の気孔がやや密にみられる。

② 顕微鏡組織：Photo. 4 ④～⑧に示す。④～⑥は付着鍛造剥片（注2）である。酸化膜の3層構造、外層ヘマタイト（Hematite : Fe₂O₃）、中間層マグネタイト（Magnetite : Fe₃O₄）、内層ヴスタイト（Wüstite : FeO）が確認できる。④は内層ヴスタイトが粒状痕跡を僅かに留める。⑤⑥は内層ヴスタイトが非晶質化する。鍛打工程の後半段階の派生物である。⑦⑧は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite : FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite : 2 FeO·SiO₂）が暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ ピッカース断面硬度：Photo. 4 ⑧に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は458Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ヴスタイトに同定される。

TMH-8 梗形鍛冶滓

① 肉眼観察：小型の椀形鍛冶滓片である。側面3面は破面。黄褐色の酸化土砂に覆われる。地は灰褐色でやや風化気味。細かい気孔がまばらに認められる。裏面は青灰色で光沢のある鍛造剥片が付着する。

② 顕微鏡組織：Photo. 5 ①～⑤に示す。①は付着木炭である。②③は鉄部でフェライト基地に少量のパーライトが析出する組織痕跡が残存する。組織はやや不明瞭であるが軟鋼と推定される。④⑤は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite : FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite : 2 FeO · SiO₂）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。

③ ピッカース断面硬度：Photo. 5 ⑤に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は447Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の下限を僅かに下回るが、測定時の亀裂による誤差と考えられる。ヴスタイトといえよう。

小結

井手見延遺跡土壤9より出土した椀形鍛冶滓（8世紀）の分析結果、TMH-6は脈石成分の低減した成分系から鍛練鍛冶滓に分類される。またいずれの試料の鉱物組成もヴスタイト（Wüstite : FeO）、ファイヤライト（Fayalite : 2 FeO · SiO₂）からなり、ヴスタイト粒内に析出物なども認められないことから、主に繰り返し折り曲げ鍛接の高温作業の鐵器製作が行われたものと推測される。なおTMH-7付着鍛造剥片2点は鍛打工程後半段階での派生物であった。鍛冶原料鐵の性格について言及することは困難であるが、地域的な特色も含めて考えると鉱石系の原料鐵であった可能性が考えられる。

TMH-9 鍛冶滓

① 肉眼観察：小型の鍛冶滓片である。表面は黄褐色の酸化土砂に覆われる。地の色調は黒灰色。上面は凹面を呈している。木炭痕であろうか。

② 顕微鏡組織：Photo. 5 ⑥～⑧に示す。白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite : FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite : 2 FeO · SiO₂）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。

③ ピッカース断面硬度：Photo. 5 ⑥に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は426Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の下限をやや下回るが、測定時の亀裂などによる誤差と考えられる。ヴスタイトといえよう。

TMH-10 椗形鍛冶滓

① 肉眼観察：楕形鍛冶滓の破片である。側面4面は破面。上面には小さな錆痕があり、鉄化割れも認められる。表面黄褐色の酸化土砂に厚く覆われる。滓の地は黒灰色で表面が風化気味である。

② 顕微鏡組織：Photo. 6 ①～③に示す。①③は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト（Wüstite : FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite : 2 FeO · SiO₂）が暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛冶滓の晶癖である。②には鉄部を示す。不明瞭であるがパーライト痕跡が認められる。

③ ピッカース断面硬度：Photo. 6 ③に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は463Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ヴスタイトに同定される。

④ 化学組成分析：Table. 2に示す。ガラス分が高く脈石成分低めの成分系である。全鉄分（Total Fe）50.33%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.11%、酸化第1鉄（FeO）45.27%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）21.49%の割合であった。ガラス質成分（SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O）28.31%で、このうちに塩基性成分（CaO + MgO）2.80%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン

(TiO_2) 0.18%、バナジウム (V) <0.01%と低値で、酸化マンガン (MnO) 0.24%、銅 (Cu) は 0.028%とやや高値であった。鉱石系の鍛治滓の成分系といえる。

TMH-11 製鍛滓（炉内滓）

① 肉眼観察：箱形炉の炉壁内面に沿って生成したガラス質滓主体の炉内滓である。側面4面は破面。1面には炉壁胎土が僅かに付着する。上面は黒色ガラス質滓で被熱を受けた石英粒が多数認められる。また、長さ3cm程の大型の木炭痕が残る。下面側は暗灰色の滓部で径1mm程の気孔が認められる。

② 顕微鏡組織：Photo. 6 ④～⑧に示す。④は暗黒色ガラス質滓中の微小析出物である。⑤～⑧淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite : $2 FeO \cdot SiO_2$)、白色多角形結晶マグネタイト (Magnetite : Fe_3O_4) が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鉱石系製鍛滓の晶癖である。

④ 化学組成分析：Table. 2 に示す。鉄分低く、ガラス質分の高い成分系である。全鉄分 (Total Fe) 11.58%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.14%、酸化第1鉄 (FeO) 3.69%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 12.26%の割合であった。ガラス質成分 ($SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$) 82.72%で、このうちに塩基性成分 (CaO + MgO) 3.94%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) 0.25%、バナジウム (V) <0.01%と低値で、酸化マンガン (MnO) 0.25%、銅 (Cu) 0.005%であった。

小結

三須畠田遺跡竪穴住居18（6世紀末～7世紀初）より出土したTMH-11製鍛滓（炉内滓）は炉壁に接して形成された炉壁溶融ガラス質滓主体の試料であった。また、鉱石系製鍛滓であることが明らかになった。炉壁側に生成した鉄塊を割り取った後の残材であろうか。

TMH-9・10の鉱物組成はヴスタイト (Wüstite : FeO)、ファイヤライト (Fayalite : $2 FeO \cdot SiO_2$) からなり鍛治滓に分類される。また、TMH-10は化学組成から鉱石を原料とした鉄素材を用いた鍛治作業での派生物である可能性が考えられる。

3 まとめ

井手天原・井手見延・三須畠田の各遺跡は共に沖積平野の自然堤防に立地した弥生時代から中世へかけての集落遺跡である。この地区の出土鉄滓を通して鉄生産の展開をみてみると、(i) 4世紀後半代は外来製の鉄素材を原料とした鍛冶加工（鍛錬鍛冶）に始まる。(ii) 6世紀前半になると当地域での鉱石製鍛の鉄生産が開始され、鍛冶加工までの鉄・鉄器生産の全工程が地域内に出そろった可能性を持つ。(iii) この体制は7世紀初頭から8世紀代にかけて継続される。

以上、県北津山方面でみられる鉄生産開始・展開(注3)に類似した様相が読み取れた。

注

(1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968 当刊行物にはヴスタイトの硬度値は450～500Hv、マグネタイト500～600Hv、ファイヤライトが600～700Hvである。

(2) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色(光沢を発する)へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる。

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite : Fe₂O₃）、中間層マグнетイト（Magnetite : Fe₃O₄）、大部分は内層ヴスタイト（Wüstite : FeO）の3層から構成される。鍛打作業前半段階では内層ヴスタイト（Wüstite : FeO）が粒状化を呈し、鍛打仕上げになると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

(3) 大澤正己「大開古墳群・大開遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『大開古墳群・大開遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集 津山市教育委員会 1994

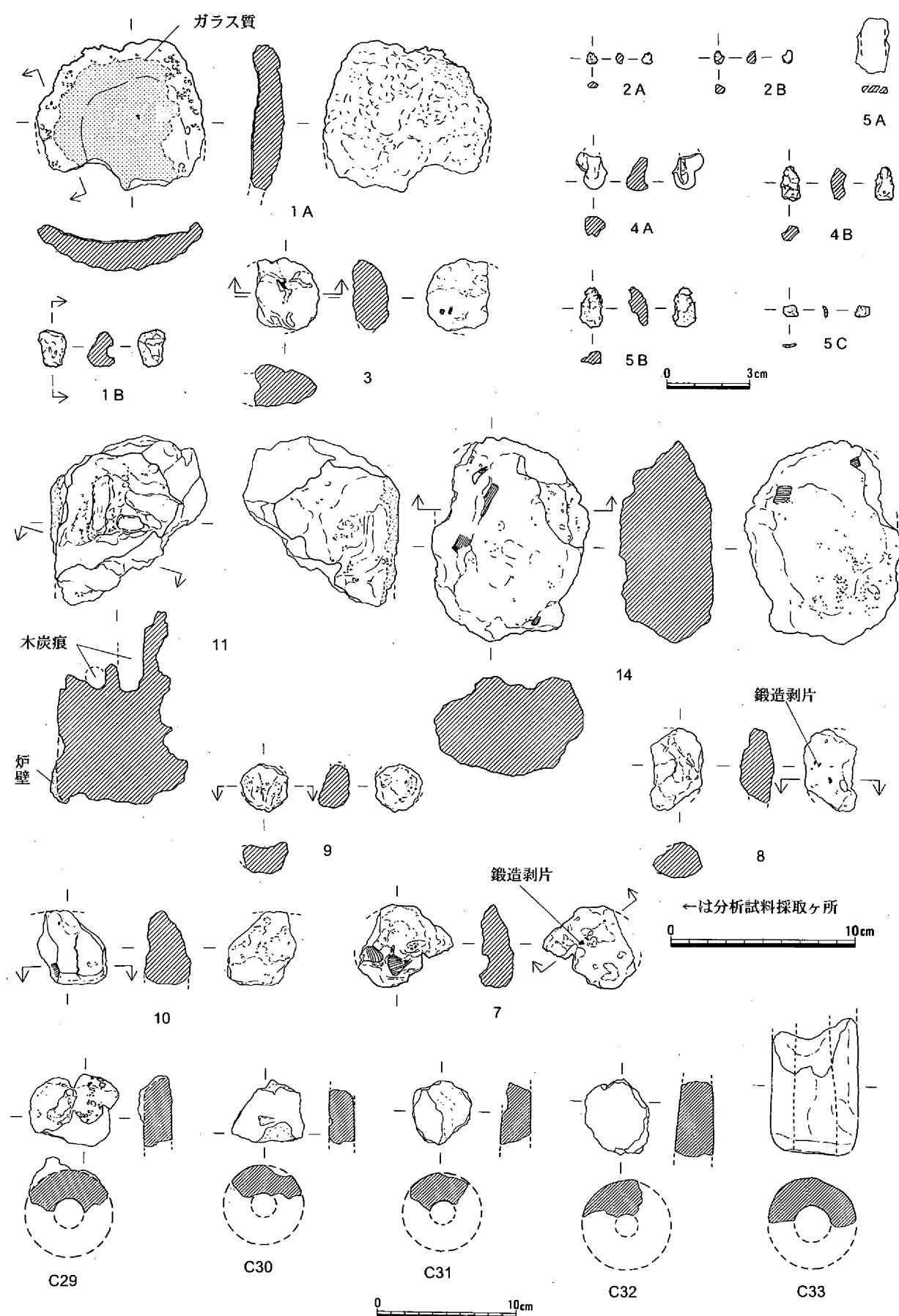


図1 分析鉄滓及び井手見延遺跡土壙9・周辺出土羽口 (1/4・1/3・1/2)

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	鑑定No.	調査項目							備考	
					推定年代	大きさ(mm)	重量(g)	メタル度	マクロ組織	顯微鏡組織	ビカーツ断面硬度	X線回折	
TMH-1A	井手天原	縦穴住居8埋土下層	1 桧形鍛冶滓(ガラス質)	4c後半	78×89×15	93.98	なし	○	○	○	○	○	A・B同一試料に埋め込み
TMH-1B	井手天原	縦穴住居81区	2 鍛冶滓	4c後半	20×15×14	4.32	なし	○	○	○	○	○	A・B同一試料に埋め込み
TMH-2A	井手見延	縦穴住居5床面	3 鍛冶滓片	6c前半	4×4×2.5	0.05	なし	○	○	○	○	○	
TMH-2B	井手見延	縦穴住居5床面	4 鍛冶滓片	6c前半	5×3×3.5	0.05	なし	○	○	○	○	○	
TMH-3	井手見延	縦穴住居6埋土	172 桧形鍛冶滓	6c前半	38×33×22	32.95	なし	○	○	○	○	○	
TMH-4A	井手見延	縦穴住居6床面(E-3)	71 鍛滓片	6c前半	12×9×7	1.18	なし	○	○	○	○	○	A・B同一試料に埋め込み
TMH-4B	井手見延	縦穴住居6床面(1-4)	151 鍛滓片	6c前半	12×7×5	0.83	矯化(△)	○	○	○	○	○	
TMH-5A	井手見延	縦穴住居6床面(E-4)	76 鍛片	6c前半	18×8×2	1.92	なし	○	○	○	○	○	
TMH-5B	井手見延	縦穴住居6床面(E-4)	77 鍛滓片	6c前半	15×9×7	0.47	なし	○	○	○	○	○	
TMH-5C	井手見延	縦穴住居6床面(E-4)	93 鍛滓片	6c前半	5×4×1	0.03	なし	○	○	○	○	○	
TMH-6	井手見延	土壌9	252 桧形鍛冶滓(含鉄)	8c	110×82×52	569.39	H(O)	○	○	○	○	○	
TMH-7	井手見延	土壌9	275 鍛冶滓(鍛造剝片付着)	8c	46×45×18	37.10	なし	○	○	○	○	○	
TMH-8	井手見延	土壌9	306 鍛冶滓(鍛造剝片付着)	8c	44×28×18	18.35	なし	○	○	○	○	○	
TMH-9	三須畠田	縦穴住居17	210 鍛冶滓	6c末	~7c初	25×24×14	17.62	なし	○	○	○	○	
TMH-10	三須畠田	縦穴住居16	249 桧形鍛冶滓	6c末	~7c初	40×36×25	46.22	なし	○	○	○	○	
TMH-11	三須畠田	縦穴住居18	251 製鍛滓(灰内率)	6c末	~7c初	83×79×113	647.2	なし	○	○	○	○	

Table.2 供試材の化学組成

Table. 3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	頭微鏡組織	調査項目						所見	
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	ガラス質成分	
TMH-1A	井手天原	堅穴住居8埋土下層	椀形鍛冶滓(ガラス質)	4c後半	暗黒色ガラス質スラグ、ファイヤライト	-	-	-	-	-	-	-	ガラス質主体の鍛練鍛治滓
TMH-1B	井手天原	堅穴住居81区	鍛冶滓	4c後半	グスタイト+ファイヤライト、金属鉄粒	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓
TMH-2A	井手見延	堅穴住居5床面	鍛冶滓片	6c前半	グスタイト+鍛化鐵	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓
TMH-2B	井手見延	堅穴住居5床面	鍛冶滓片	6c前半	ファイヤライト、金属鉄粒	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓(銹化鐵:フェライト分散)
TMH-3	井手見延	堅穴住居6埋土	椀形鍛冶滓	6c前半	グスタイト+ファイヤライト、金属鉄粒	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓
TMH-4A	井手見延	堅穴住居6床面(E-3)	鉄滓片	6c前半	グスタイト+ファイヤライト	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓、鍛練鍛治滓 (小割り残材)
TMH-4B	井手見延	堅穴住居6床面(E-4)	鉄片	6c前半	グスタイト凝集	-	-	-	-	-	-	-	鍛練鍛治滓
TMH-5A	井手見延	堅穴住居6床面(E-4)	鉄片	6c前半	ファイヤライト+木炭、金属鉄粒(銹化)	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓
TMH-5B	井手見延	堅穴住居6床面(E-4)	鉄滓片	6c前半	ファイヤライト+ヴァスタイト、木炭、 金属鉄粒(銹化)	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓、鍛練鍛治滓 (小割り残材)
TMH-5C	井手見延	堅穴住居6床面(E-4)	鉄滓片	6c前半	微小ヴァスタイト凝集	-	-	-	-	-	-	-	鍛練鍛治滓
TMH-6	井手見延	土壤9	椀形鍛冶滓(含鉄)	8c	グスタイト+ファイヤライト、 銹化鐵(ペーライト痕跡あり)	49.48	32.29	1.89	0.12	<0.01	0.08	24.52	0.008 鉄石系鍛練鍛冶滓、銹化鐵は軟鋼
TMH-7	井手見延	土壤9	椀形鍛冶滓	8c	グスタイト+ファイヤライト、付着鍛造剥片 (3層分離型・内層ヴァスタイト非晶質)	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓、付着鍛造剥片は鍛打後半段階の 派生物
TMH-8	井手見延	土壤9	鍛冶滓(鍛造剥片付着)	8c	グスタイト+ファイヤライト、銹化鐵 (ペーライト痕跡あり)、木炭に鉄置換	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓、銹化鐵は軟鋼
TMH-9	三須畠田	堅穴住居17	鍛冶滓	6c末～7c初	グスタイト+ファイヤライト	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶滓
TMH-10	三須畠田	堅穴住居16	椀形鍛冶滓	6c末～7c初	グスタイト+ファイヤライト、銹化鐵	50.33	21.49	2.80	0.18	<0.01	0.24	28.31	0.028 鍛冶滓
TMH-11	三須畠田	堅穴住居18	製鍛滓(炉内滓)	6c末～7c初	暗黒色ガラス質スラグ、ファイヤライト、 マグネタイト	11.58	12.26	3.94	0.25	<0.01	0.25	82.72	0.005 鉄石系製鍛滓(ガラス質主体)、炉壁溶融物

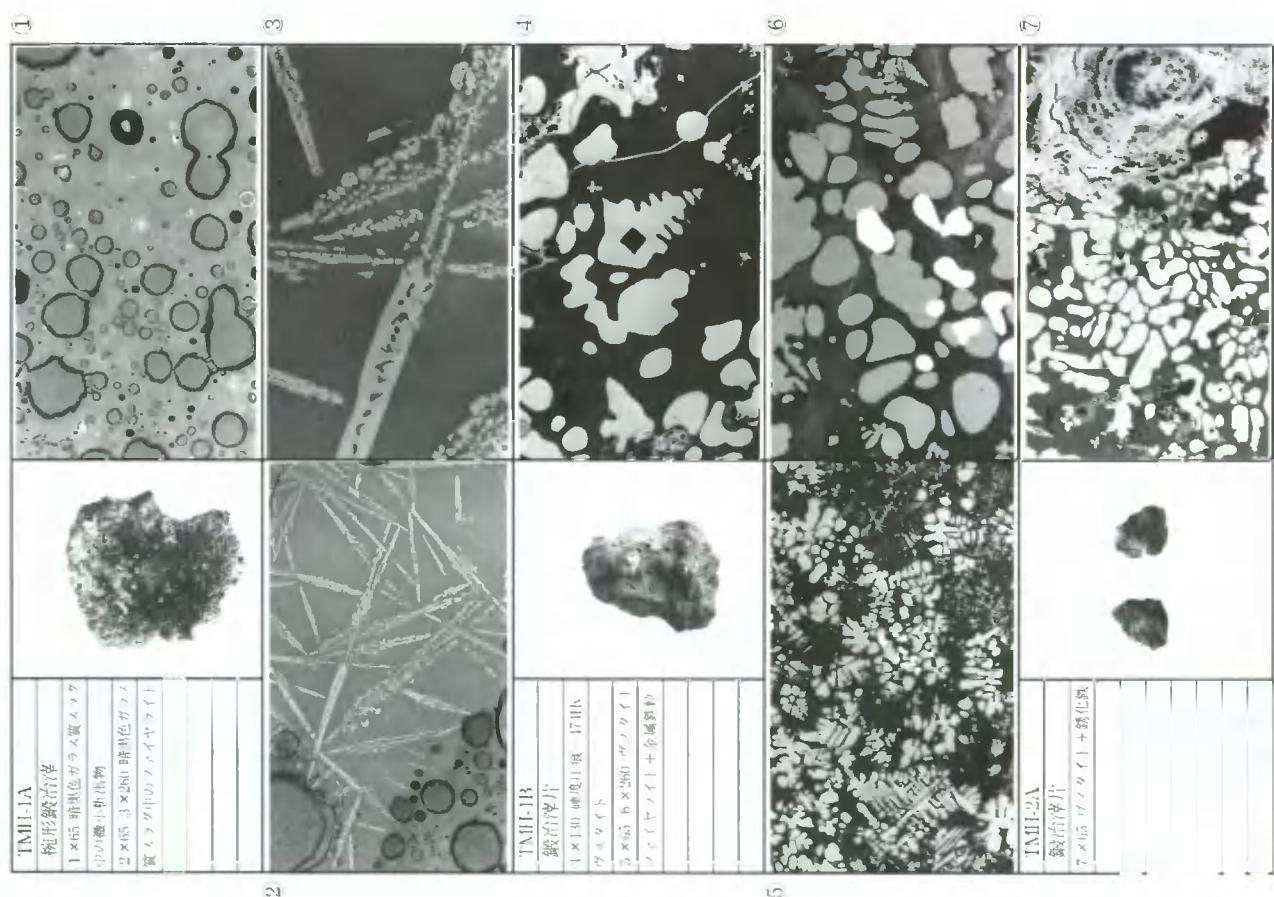
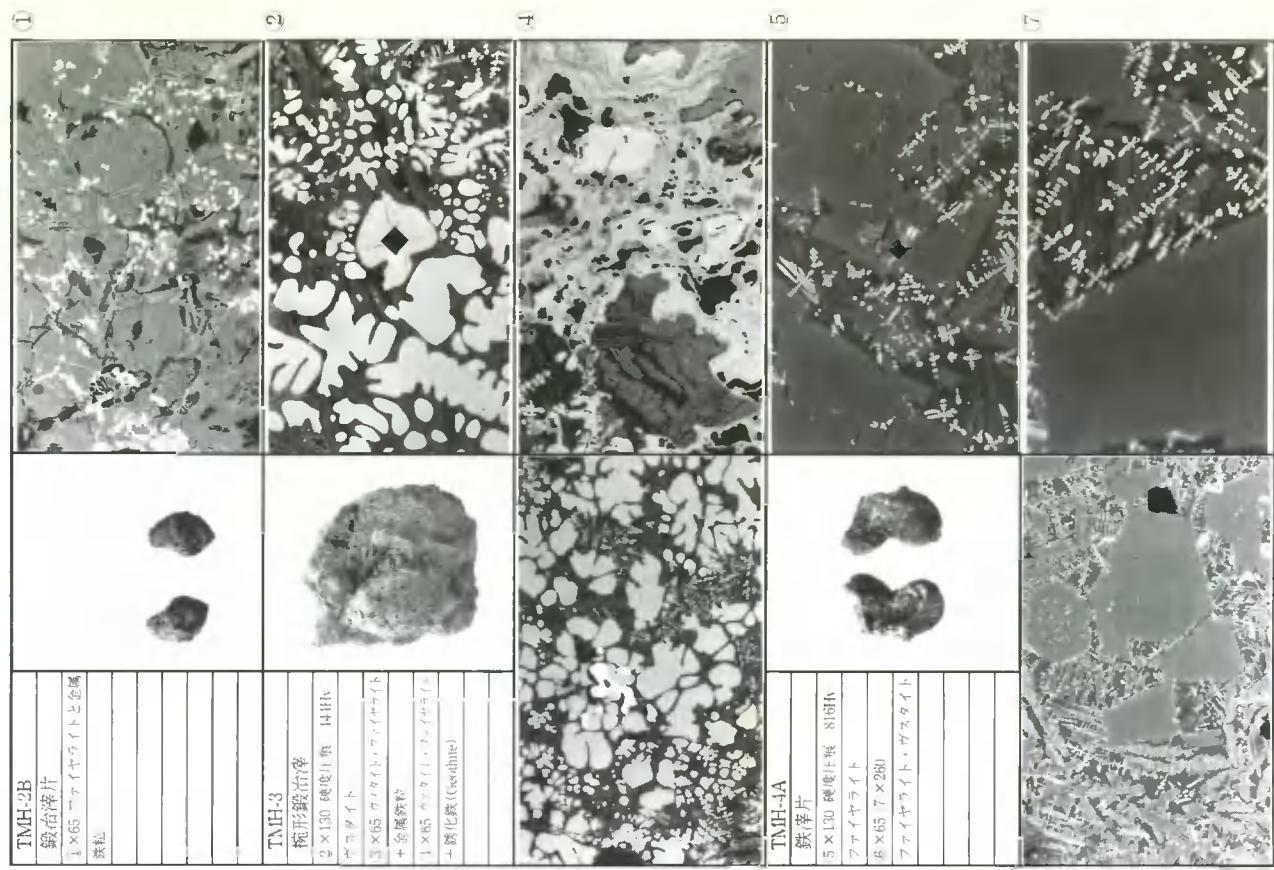


Photo.2 鍛冶津・椀形鍛冶津の顕微鏡組織

Photo.1 椭形鍛冶津・鍛冶津片の顕微鏡組織

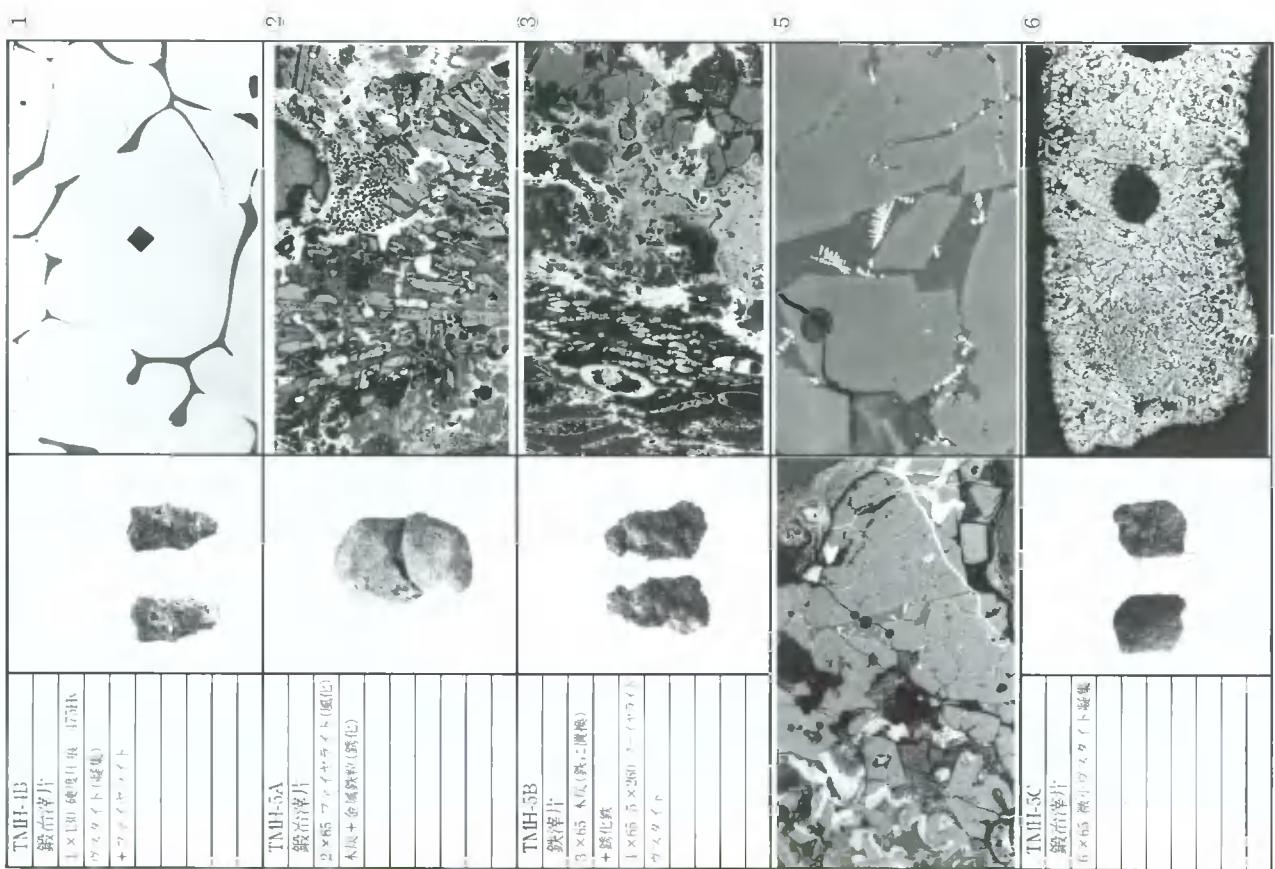
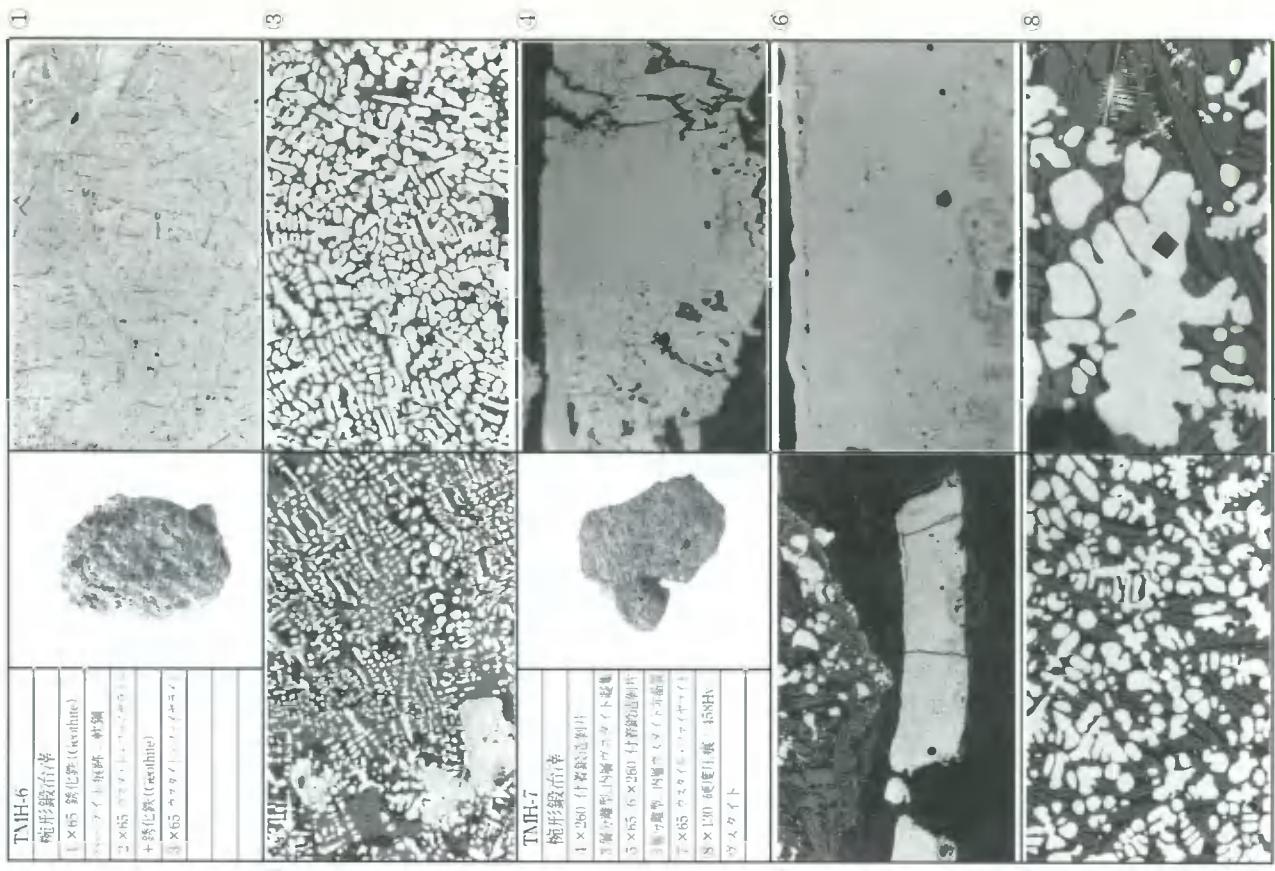


Photo.3 鍛冶津片の顕微鏡組織

Photo.4 楠形鍛冶津の顕微鏡組織

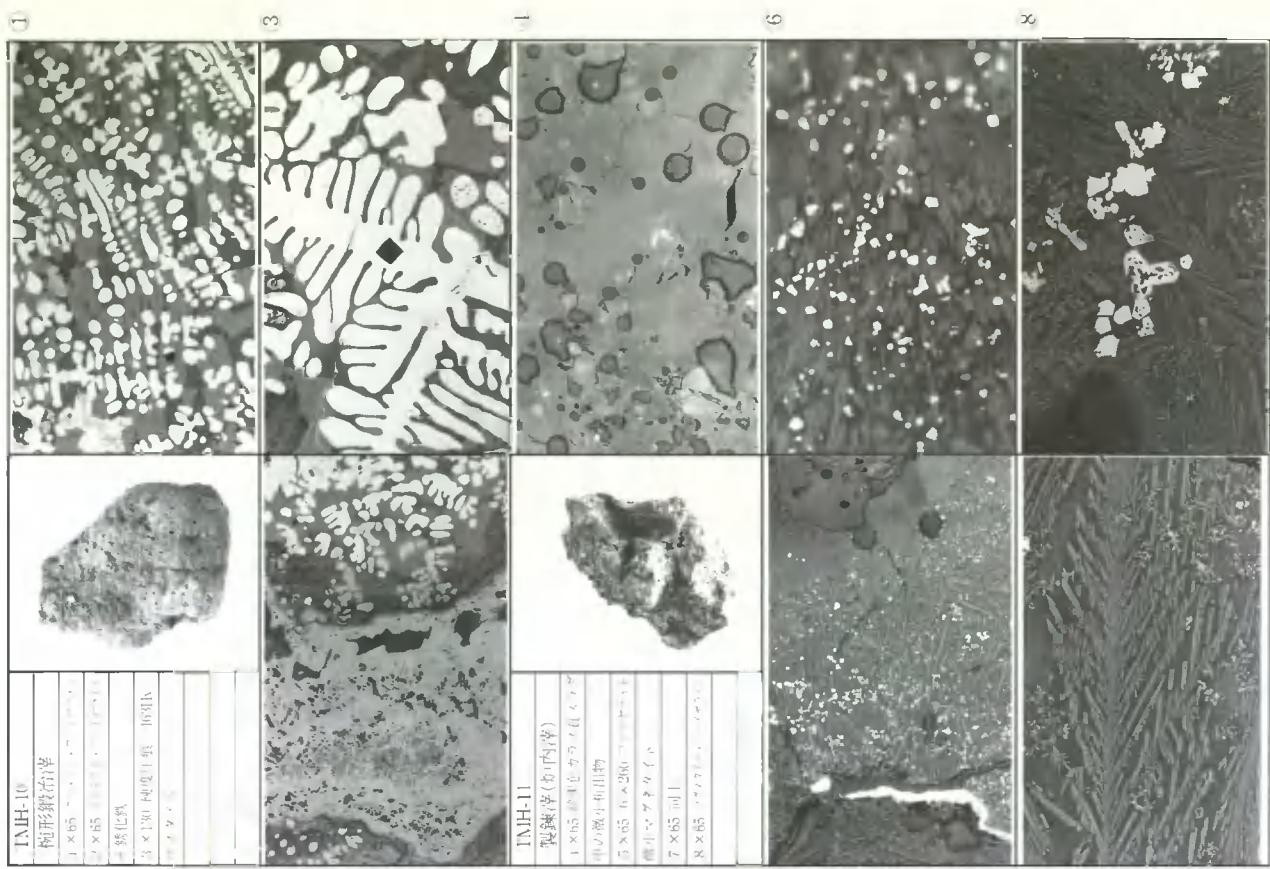


Photo.6 梶形鍛冶・製鍊滓の頭微鏡組織

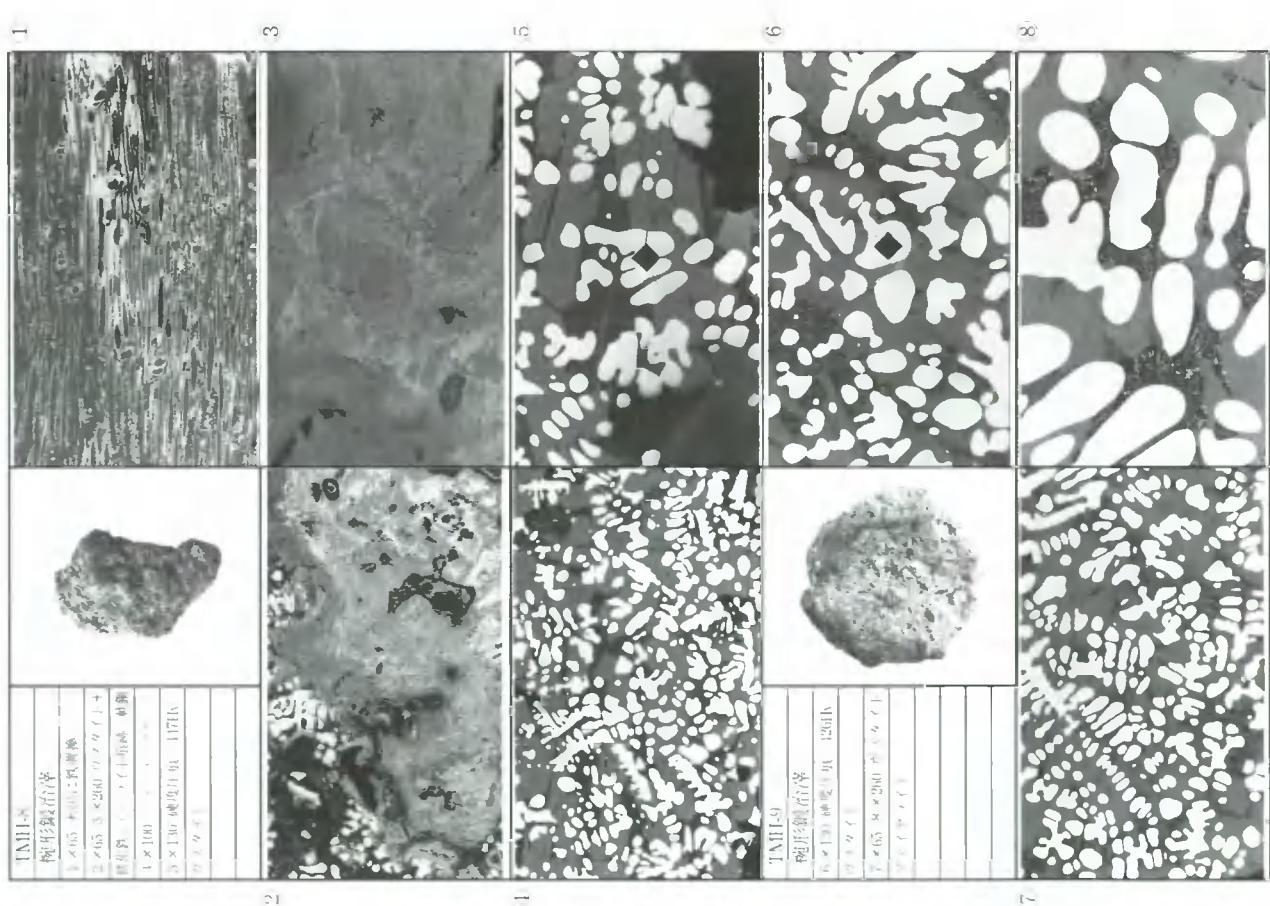


Photo.5 梶形鍛冶津の頭微鏡組織

第3節 三須畠田遺跡出土の白色粘土 および土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白 石 純

1. 分析の目的

この分析では、三須畠田遺跡出土の弥生中期末、後期前葉、5世紀中頃の時期の白色粘土を分析し、それぞれの粘土に伴う土器との差異および時期の異なる粘土の間での差異について検討した。

2. 分析方法および結果

分析は蛍光X線分析装置を使用し、測定方法・条件などは現在まで行っている方法である⁽¹⁾。

測定元素は、第1表に示したK₂O・Fe₂O₃・SiO₂・TiO₂・Al₂O₃・CaO・Sr・Rbの8元素である。このうち第1表から各粘土・土器の分析値に顕著に差異が見られるのはK₂O・CaO・Sr・Rbの4元素である。そこで、これらの元素からCaO/K₂O比、Sr/Rb比をとりXY散布図で検討した。

この結果、第1図CaO/K₂O-Sr/Rbの散布図から各時期の粘土の間での比較では明らかに識別が可能であった。ただ、各遺構の粘土を4点ずつ分析したが、この4点の選び方は一つの塊の粘土から無作為に抽出したものであるが、一塊の粘土でも分析値にばらつきがみられることがわかった。

また、これら粘土に伴う土器との比較では、弥生中期末の粘土と同時期の土器（試料番号2・3・4）の間で明確に識別でき、分析値が一致しなかった。弥生後期前葉の粘土と土器（試料番号6・7・8）の間でも同様の結果となった。5世紀中頃の粘土と土器（試料番号10）の間では、ほぼ分析値が一致し、分析値的には、同一の粘土と推定される。

以上のように、時期ごとの粘土と土器の比較では5世紀中頃の粘土と土器がほぼ同一の分析値と考えられる以外は、粘土と土器が重ならず一致しなかった。このことは、複数の粘土を混ぜて焼成粘土としたことが十分示唆される分析結果となった。

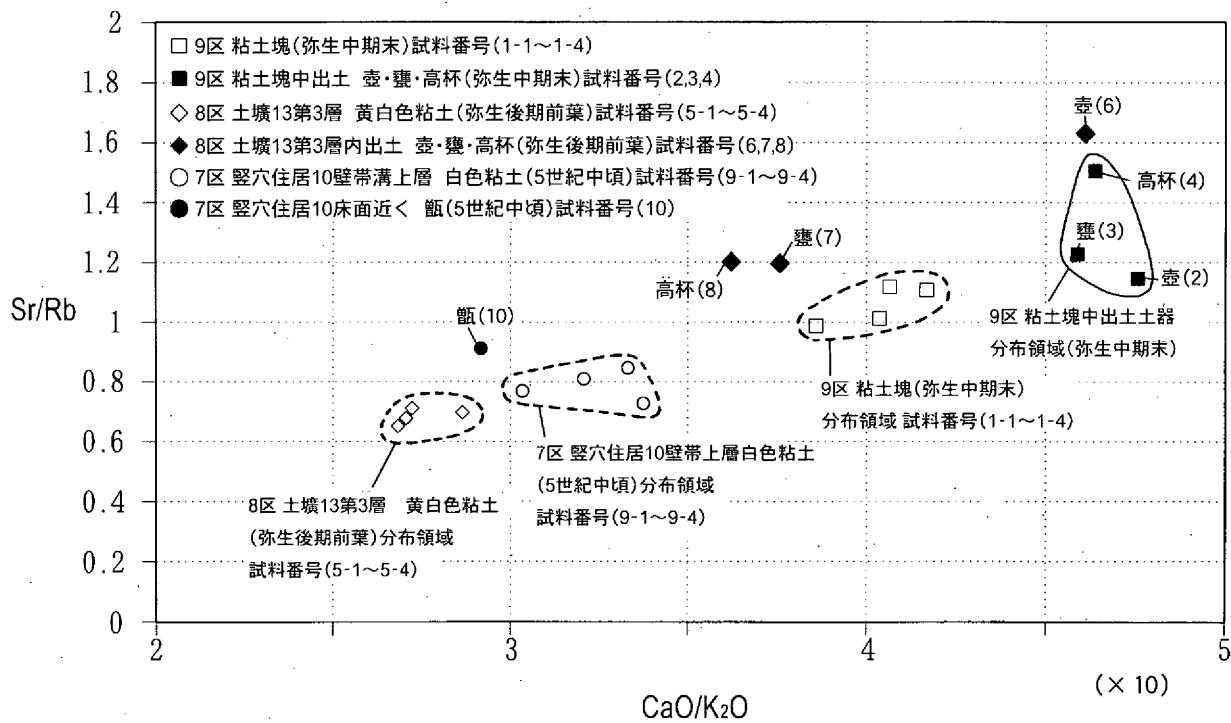
註

- (1)白石 純1986「蛍光X線による考古学遺物（石器・土器）の化学分析（II）」『蒜山研究所研究報告第12号』岡山理科大学 pp.43-54

ただし、Sr, Rbはppm.

試料番号	出土地点	器種(掲載番号)	時期	K ₂ O	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	Sr	Rb
1-1	9区 粘土塊	白色粘土	弥生中期末	2.48	4.52	58.48	0.85	21.68	0.96	137	138
1-2	9区 粘土塊	白色粘土	弥生中期末	2.61	5.12	53.86	0.84	21.01	1.09	155	140
1-3	9区 粘土塊	白色粘土	弥生中期末	2.64	4.85	64.03	0.88	22.81	1.07	147	132
1-4	9区 粘土塊	白色粘土	弥生中期末	2.64	4.81	63.50	0.89	22.07	1.06	147	146
2	9区 粘土塊中	壺(362)	弥生中期末	2.31	4.05	60.88	0.70	20.29	1.10	150	131
3	9区 粘土塊中	甕(366)	弥生中期末	2.40	4.11	60.34	0.86	19.18	1.10	149	121
4	9区 粘土塊中	高杯(369)	弥生中期末	2.32	3.86	61.53	0.84	20.20	1.08	171	113
5-1	8区 土壙13第3層	黄白色粘土	弥生後期前葉	2.35	4.48	60.64	0.74	20.28	0.64	96	135
5-2	8区 土壙13第3層	黄白色粘土	弥生後期前葉	2.27	4.28	63.68	0.70	18.82	0.61	88	136
5-3	8区 土壙13第3層	黄白色粘土	弥生後期前葉	2.52	4.65	67.28	0.73	20.77	0.72	103	148
5-4	8区 土壙13第3層	黄白色粘土	弥生後期前葉	2.46	4.61	66.02	0.76	21.94	0.67	96	143
6	8区 土壙13第3層	壺(180)	弥生後期前葉	2.26	5.60	62.22	0.71	18.84	1.04	176	107
7	8区 土壙13第3層	甕	弥生後期前葉	1.86	4.02	66.59	0.67	18.13	0.70	121	100
8	8区 土壙13第3層	高杯	弥生後期前葉	2.66	5.59	63.61	0.57	18.33	0.96	173	143
9-1	7区 竪穴住居10壁帶溝上層	白色粘土	5世紀中頃	3.05	6.01	58.71	0.71	20.05	0.98	117	144
9-2	7区 竪穴住居10壁帶溝上層	白色粘土	5世紀中頃	2.97	5.38	59.05	0.71	19.77	0.99	126	149
9-3	7区 竪穴住居10壁帶溝上層	白色粘土	5世紀中頃	3.15	5.24	63.52	0.70	20.71	0.96	119	155
9-4	7区 竪穴住居10壁帶溝上層	白色粘土	5世紀中頃	3.03	6.27	62.13	0.72	21.69	1.02	112	155
10	7区 竪穴住居10床面近く	甕(429)	5世紀中頃	2.89	3.41	61.35	0.60	21.13	0.84	140	156

第1表 三須畠田遺跡出土土器および粘土の胎土分析表 (%)

第1図 CaO/K₂O-Sr/Rb散布図 三須畠田遺跡出土粘土・土器の比較

第4節 井手天原遺跡出土動物遺存体

岡山理科大学理学部 富 岡 直 人

(1) 出土状況

井手天原遺跡は岡山県総社市井手に所在し、平坦な沖積面に形成された弥生時代から中世の複合遺跡である。中世後半から近世に属する溝より、本報告の分析対象である室町時代から江戸時代前半に属する動物遺存体群が検出された。この遺構は、溜池状遺構の南々東隅に形成された突起状のプランを持つ東西幅1.5m×南北長8mの広がりの溝である。南側は閉塞し、北側は溜池状遺構に開口している。同定された動物遺存体は全てウシ、ウマであった。遺存体群は任意に上部・中部・下部に分類して発掘されているが、一時期にまとまって廃棄された集合と考えられる。いずれも風化が激しく、一部はビビアナイト（藍鉄鉱[Vivianite : Fe₃P₂O₈ · 8H₂O]）を析出し脆弱化している。

(2) 出土動物遺存体の概要

第1表 井手天原遺跡出土動物遺存体種名表

脊椎動物門	Vertebrata
哺乳綱	Mammalia
ウシ目	Artiodactyla
ウシ科	Bovidae
ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i> Gmelin
ウマ目	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus

ウシ *Bos taurus domesticus* Gmelin

いわゆる在来和牛の特徴を持つ小型のウシの遺存体が多量に出土した（図版1、2-1、3-1）。本遺跡では最も出土量が多い種である。

出土部位は下顎骨、上顎臼歯、第1頸椎、肩甲骨、橈骨、尺骨、脛骨、手根骨、果骨、中手骨、中足骨、距骨、踵骨、基節骨、中節骨、末節骨、肋骨である。出土量が最も多かった部位は下顎骨であるが、それに比べて上顎骨等を含む頭蓋骨の出土量は少ない。

咬合面が観察された左下顎骨（(12)付近③）は小窩連結状態で、前・後臼歯列歯槽最大長122.90mmであった。第4前臼歯の萌出状況から2.5～3歳以上と考えられるが、咬耗から推定するとそれ以上の老齢であることが明らかである。この下顎骨には解体や火を受けた破損痕跡はみられず、意図的に解体処理されたのかは明確ではなかった。

また、右橈骨（No. 2①）が出土した。本資料は遠位端を失っている。遠位端破損面には一部切創がみられるが、破断面の大半は粗面で、風化後に破損した状況を示している。前位には斜方向に鋭利な刃物による切創が6条観察される。このような傷は皮を剥ぎとるのみであれば残らないことから、筋肉の切断と削ぎ落としが行われたと考えられる。食用として解体された可能性が高いであろう。

さらに、出土地点の不明の資料（No.13）は右脛骨骨幹部であった。本資料は近位端と遠位端を失っている。破断面は全て風化後に破損した状況を示している。外側位に鋭い切創が観察される。最大の切創は深さ2.3mmに達している。左下顎骨（(21)①：図版3-2）の舌側には切創があり、頭部が解体されたことがうかがわれる。その他の切創例やスパイラル割れ（SP）は、図版3、5-2・3・4に示した。

ウマ *Equus caballus* Linnaeus

出土試料は全て小型のウマ遺存体であった（図版1-1、2-2）。出土部位は下顎骨、上顎骨、第2頸椎、大腿骨、脛骨、中手骨、中足骨、距骨、踵骨、基節骨、中節骨、末節骨、肋骨である。出土量が最も多かった部位は下顎骨であるが、それに比べて上顎骨等を含む頭蓋骨の出土量が少ない。

咬合面が観察された左右下顎骨（(10)①：図版2-2-2）は小窩連結状態で、後臼歯列歯槽最大長81.82mmであった。臼歯の萌出状況から3.5～4歳以上と考えられるが、咬耗から推定するとそれ以上の老齢であることが明らかである。この下顎骨には解体や火を受けた破損痕跡はみられず、ネズミの噛痕がみられた。本資料は意図的に解体処理されたのかは明白ではなかったものの、右下顎骨（(12)付近⑭）には右外側位に切創があり、頭部が解体されたことがうかがわれる。

また、左大腿骨（(16)⑫：図版2-2-4、4-1）が出土した。近位端回転子には関節を分離した切創がみられる。これは体部から後肢を分離するために残された痕跡と考えられる。その他も切創例は図版2-2、4-1・2・4・5、5-1に示した。

（3）井手天原遺跡におけるウマ・ウシ遺存体集積遺構の解釈と意義

井手天原遺跡からは、中世のウマ、ウシが溝から多量に集積された状態で検出された。岡山県内で発見された同種の遺跡のなかでも、高密度に遺存体が検出された例である。

これらの包含状況は、一括性が高いこと、後述するように人間以外の原因による損壊が少ないとから、意図的に廃棄された遺存体のまとまりで、遺跡内あるいは付近で屠殺・解体され、部位ごとに関節あるいはその付近で分離された後、この地点に運搬され、比較的早い段階で埋存したものと考えられる。

出土状況を検討すると、骨格の配置の方向には明確な法則性はみられないものの、接合資料の一括性が高く、約80cm程度の深度と約2m長、幅約1mの範囲に意図的に集積され埋存したものと考えられる。また、発掘時や遺存体処理時に土壤を詳細に検討したが、溝中で遺存体が流された痕跡は看取されなかった。

出土部位を検討してみると四肢骨に比較して頭部、特に下顎骨が多いという状況がみられ、金子（1996）が指摘するように、骨になった頭蓋および下顎骨を用いて溝内で祭祠が行われた可能性が考えられる。一部の四肢骨と頭蓋骨には激しく横断するように切り通された切創（Aタイプ）、突き刺され骨の中で刃器が停止した切創（Bタイプ）、微細で浅く刻まれた切創（Cタイプ）の解体痕（図版2-2、4-1・2・4・5、5-1・2・3・4）がみられ、これらの遺存体が食用あるいは皮革加工原料として解体された可能性が推定された。ただし、その痕跡は、四肢骨の中でも外側縁と前・後位の検出例が多い。特にBタイプは鉤状あるいは直状の刃部又は突部が骨格に突き刺さり残されたものと考えられる。ただし、残されるはずの大転骨・脛骨の内側縁の解体痕跡がみられないことから、比較的粗雑な解体行為であったのだろう。特に脛骨の外側縁に残された切創は、生体時の屠殺直前直後

に残された可能性が高いのではないかと考えられる。

草戸千軒遺跡第36次調査で室町時代の池から検出されたウシ遺存体は四肢骨を近接させ首から上部を失った状態で出土している。これについて松井（1997）は、「このウシは四肢を一か所で縛られて身動きできないようにしてから首をおとされたことを発掘状況が物語る。四肢の足先で一か所に束ねられているので縛りを解いておらず、皮を剥いだり、頭部以外に解体せずにこの池に捨てられたものであろう。」としている。この資料は解体痕跡が四肢骨にみられない点が、井手天原遺跡の例とは異なるものの、まず屠殺され解体されたウシが利用されたこと、さらに四肢がまとまって出土していることが、井手天原遺跡出土資料と類似している。

一方、イヌによる噛痕は一切検出されず、ネズミの噛痕（図版3-1・2、4-3）もわずかである。すなわち、比較的短期間のうちにこれらの資料群が溝中に集積され、土中に埋存した可能性が推定される。特に、保存処理中に観察したところでも、ウシ・ウマの左右下顎の間に径1～2cm程の小礫が多く含まれることが看取されており、これらの遺存体を包含していた土壤が溝中に比較的速い速度で堆積したものと推定される。

以上の諸点から、これらの遺存体は、①動物犠牲として祭祀に利用された、②弊死して利用された、③殺害され利用された、という3点の可能性が推定される。ただし、埋存状況が良好なことから、一括して廃棄された可能性が高いと考えられることと、年齢組成にもバリエーションがみられることから、②では弊死個体が一時期に多量に生じたこととなり、不自然である。このことから①③の可能性がより高いと考えられる。特に、雨乞いのような犠牲祭祀が実施された可能性が指摘される。

謝辞

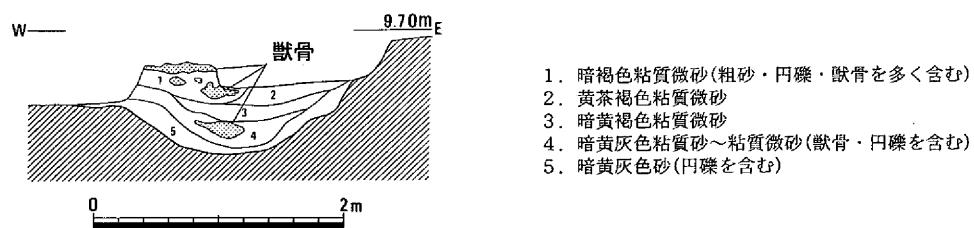
古代吉備文化財センター各位には資料の提供とともに、様々な御教示、御援助を頂いた。また、岡山理科大学学生、田中紀子さん、中村友美さん、重名佐紀さんには、同定・集計作業を手伝っていただいた、記して感謝致します。

参考文献

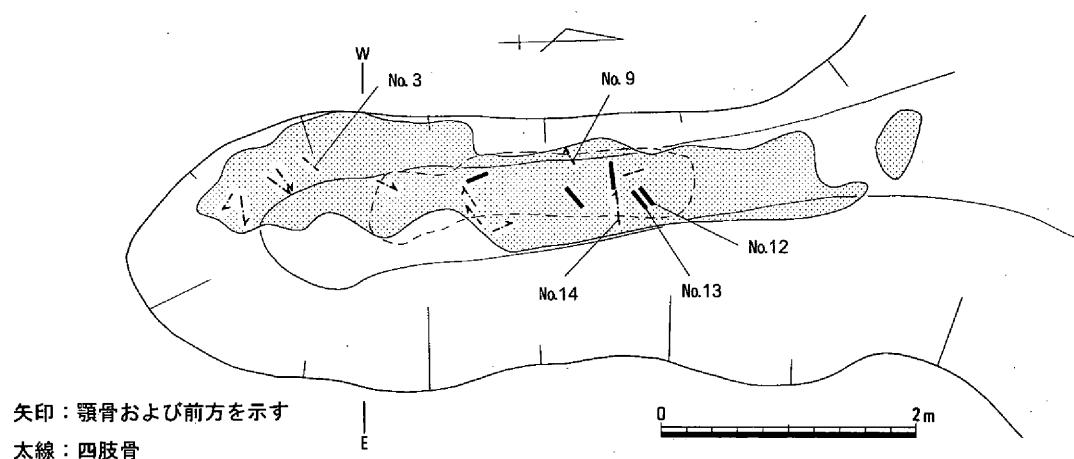
- 金子浩昌 1996 「津寺遺跡中屋調査区出土のウマ遺骸」『津寺遺跡3 山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104:pp.282-285
- 金子浩昌 1995 「津寺遺跡出土の動物遺体」『津寺遺跡2 山陽自動車道建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98:pp.597-604
- 西中川 駿 1989 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究－特に日本在来種との比較』（昭和63年文部省科学研究費補助金研究成果報告書）
- 林田重幸、山内忠平 1954 「日本石器時代馬について」『日本畜産会報』2(2-4):pp.122-126
- 林田重幸、山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6:146-156
- 林田重幸 1957 「中世日本の馬について」『日本畜産会報』28(5):pp.301-306

図版番号	写真番号	骨番号	出土位置番号	出土層位	図版番号	写真番号	骨番号	出土位置番号	出土層位	図版番号	写真番号	骨番号	出土位置番号	出土層位
1 1	1	(12)付近	中部		2 1	9	(12)付近⑩	中部		2 2	7	No12	上部	
	2	(20)・(21)	中部			10	(12)付近⑩	中部		3 1	1	(12)付近⑩	中部	
2	1 a	No.3	上部			11	(12)付近⑪	中部			2	(12)付近⑪	中部	
	1 b	No.9	上部			12	(12)付近⑫	中部			3	(12)付近⑫	中部	
	2					13	(12)付近⑬	中部			4	(12)付近⑬	中部	
	3					14	(12)付近⑭	中部			5	(12)付近⑭	中部	
2	1	1 (11)	中部			15	(12)付近⑮	中部			6	(12)付近⑮	中部	
	2	(17)	中部			16	(12)付近⑯	中部			7	(12)付近⑯	中部	
	3	No.3 下	上部								8	(12)付近⑰	中部	
	4	(12)付近	中部								9	(12)付近⑰	中部	
	5	(12)付近①	中部								10	(12)付近⑰	中部	
	6	(19)	中部								11	(12)付近⑰	中部	
	7	(12)付近	中部								12	(12)付近⑰	中部	
	8	(12)付近	中部								13	(12)付近⑰	中部	

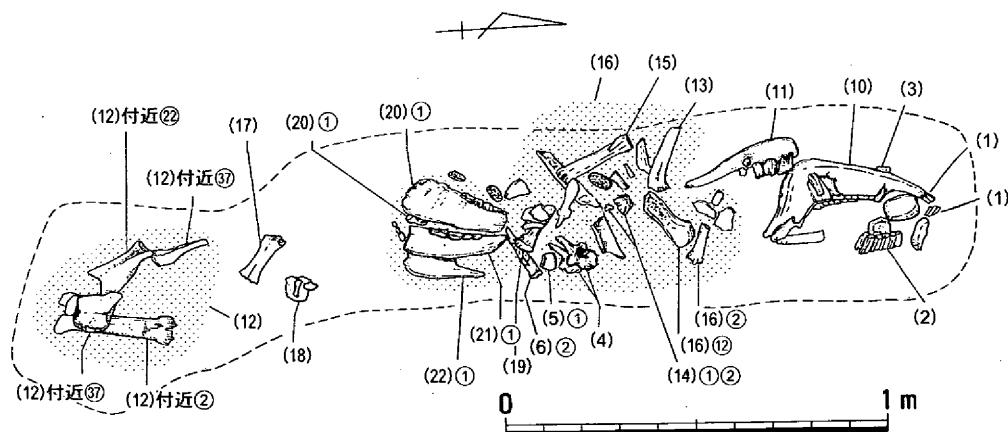
第1表 図版・骨番号と出土位置の対応表



第1図 溝断面図 (1/60)



第2図 獣骨出土状況〈上部〉(1/60) アミ目: 上部獣骨出土範囲、
破線: 中部獣骨出土範囲。(第3図は同範囲の詳細分布を示す)



第3図 獣骨出土状況〈中部〉(1/20) (12)、(16) はアミ部分の骨格を一括して採集した。
分布範囲の破線は第2図の破線に対応する。

出土位置番号	区	遺構	層位	分類	部位	L/R	部分	破損	成長度	測定値	備考
(14)	14 区	溜池状遺 構	中部	ウシ	下顎第2～3 後臼歯	L	完形 遊離歯	cmなし	RM3, RM2: 小窓連結	RM3:咬合面長=29.85,咬合面幅=22.85,頬側歯根又~咬合面高=20.59 RM2:破片のため計測不能	
(16)⑤	14 区	溜池状遺 構	中部	ウシ	下顎関節突起	L/R	近位端	cm?	f	関節幅:38.03	
No 1②	14 区	溜池状遺 構	上部下層	ウシ	下顎第1～3 後臼歯	L	遊離歯	cmなし?	小窓独立	咬合面長:M2=27.86,咬合面幅:M2=14.78,歯槽長:M2=28.04	M1△ M2○ M3×
No 3③	14 区	溜池状遺 構	上部下層	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯 P3～M3	cm不明	若～成熟	M3咬合面長=36.27,M3歯槽長=36.70	M2○3○ M2小窓連結 M3小窓独立
No 7①	14 区	溜池状遺 構	上部下層	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯	cm不明	M3小窓独立	歯槽長:M1～M3=81.14,M2～M3=60.13,M1～M2=43.73,M1=20.75,M2=22.32,M3=31.93咬合面長:M3=36.62,歯槽幅:M1=13.87,M2=15.27,M3=15.66	P3×4△M1△2△3○,②と同一個体
No 8③	14 区	溜池状遺 構	上部下層	ウシ	下顎骨	L	切歯部	cmなし?	?	計測不能	No 8④と同一個体
No 8④	14 区	溜池状遺 構	上部下層	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯 M3	cm不明	成～老	計測不能	M3△,No 8③と同一個体
No 9①	14 区	溜池状遺 構	上部下層	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯 P2～M3	cm不明	M2.3:小窓独立	歯槽長:M1～3=90.29,M2～3=67.00,M1=20.24,M2=26.56,M3=37.90,歯槽幅:M1=15.00,M2=18.46,M3=17.42,咬合面長:M2～3=67.98,M1=29.30,M2=39.30,咬合面幅:M1=14.54,M2=14.25,最大高:75.32	P2△3△4△ M1△2○3○,No 9②と同一個体
(3)①	14 区	溜池状遺 構	下部	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯 P2～	cm不明	3.5歳以上	P2～M3の歯槽長:139.65 M1～M3の歯槽長:88.94 P2～P4の歯槽長:52.28	P2△3△4△ M1△2×3△
(6)①	14 区	溜池状遺 構	下部	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯 P2～M3	cm不明	3.5歳以上	咬合面長M1～3:78.15,M2～3:58.30,P4～M3:96.59歯槽長M1～3:83.57,M2～3:60.40,P4～M3:100.28咬合面長M1:19.96,M2:26.50,M3:35.13咬合面幅M1:14.18,M2:15.34,M3:16.44歯槽長P2:15.37,P3:17.92,P4:18.18,M1:22.70,M2:24.78,M3:34.92	P2△3△4△ M1△2△3△(6)②と同一個体
(6)③	14 区	溜池状遺 構	下部	ウシ	下顎骨	L	関節突起	cmなし?	3.5歳以上	計測不能	(6)①と同一個体
(12)付近③	14 区	溜池状遺 構	下部下層	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯	cm?	成熟	歯槽長M1～3:84.60,M2～3:63.80,P2～M3:129.38,P2～4:53.38,M3長:39.13,M1～M3長:84.36,M1～2長:45.90,M2～3長:65.00,P2～M3長:122.90,P2～M2長:86.42	P2○3△4△ M1○2△3○,P2.P3.P4.M1全面窓,M2.M3小窓連結
(12)付近①	14 区	溜池状遺 構	下部下層	ウシ	下顎骨	L	関節突起,筋突 起	cm不明	不明	計測不能	
(4)③	14 区	溜池状遺 構	中部	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯部	cm不明	?		P2×(5)①と接合
(4)④	14 区	溜池状遺 構	中部	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯部	cm不明	?		P2×(5)①と接合
(5)	14 区	溜池状遺 構	中部	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯部 歯根のみ	cm不明	?	歯槽長:P2～P4=49.02	P3×P4×(4)③④と接合
(21)①	14 区	溜池状遺 構	中部	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯	cm?	M1:全面窓(異常に全てすり減っている)M23:小窓独立	M1～3:歯槽長=(91.23),M1:咬合面長=21.26,咬合面幅=14.44,歯槽長=21.75,歯槽幅=15.50	P2△3△4△ M1○2○3○(20)①と同一個体
(22)①	14 区	溜池状遺 構	中部	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯	cm?	P234M123:小窓連結	歯槽長:M1～3=84.90,M1=19.34,咬合面長:M1～3=83.48,M1=21.08	P2○3○4 OM1○2○3○
(22)②	14 区	溜池状遺 構	中部	ウシ	下顎骨	L	関節突起	cmなし?	p:f	計測不能	
(11)①	14 区	溜池状遺 構	中部	ウシ	下顎骨	L	下顎体+臼歯 P3～M3	cm不明	M3:萌出途次, M1小窓独立, M2小窓独立, P(咬耗開始)	歯槽長:M1～3=98.84,M2～3=71.21,M1～2=56.50,咬合面長:M1=25.90,M2=32.07,M3=39.13,咬合面幅:M1=10.90,M2=12.80,舌側歯冠高:M3=52.42,M2=60.20,M1=34.40	P3○4×M1○2○3○

第2表 出土動物遺体属性表1

部分, P:前臼歯、M:後臼歯、 破損cm:切創、

成長度, p:近位端、d:遠位端、f:化骨化、uf:未化骨化、 測定値, 単位はmm

出土位置番号	区	遺構	層位	分類	部位	L R	部分	破損	成長度	測定値	備考
No 7②	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下頸骨	R	下頸体+臼齒	cm不明	3.5歳以上	歯槽長：M2=23.62, M3=36.20, 歯槽幅：M1=15.47, M2=15.51, M3=14.34	P 3×4×M1×2×3×, No.7①と同一個体
No 8①	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下頸骨	R	下頸体+臼齒	cm不明	成～老	歯槽長：M3=36.20, M2=25.52, M1=23.30, M1～3=86.50, 歯槽幅：M3=14.28, M2=15.48, M1=13.08	P 2△3△4△M1△2△3△, ②と同一個体
No 8②	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下頸骨	R	切歎部	cmなし？	p:f	計測不能	No.8①と同一個体
No 9②	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下頸骨	R	下頸体+臼齒	cm不明	M23: 小窩独立	歯槽長：M1～3=91.16, M2～3=66.94, M1=20.04, M2=25.77, M3=39.79, 歯槽幅：M1=15.06, M2=18.24, M3=17.08, 咬合面長：M2～3=68.07, M1=29.59, M2=37.89, 咬合面幅：M1=14.03, M2=13.81	P 3△4△M1△2○3○, M3の形状が特殊, No.9①と同一個体
(3)②	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ	下頸骨	R	下頸体+臼齒 P 2～M3	cm?(下位)	M3: 小窓独立	P 2～M3歯槽長：141.34 P 2～P 4歯槽長：51.86 M3:咬合面長：37.48, 咬合面幅：16.97 M1～M3歯槽長：90.18	P 2△3△4△M1×2△2△3○
(6)②	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ	下頸骨	R	下頸体+臼齒	cmなし？(ネズミ嗜痕)	3.5歳以上		P 2×3×4×M1○2○3○(6)①と同一個体
(6)④	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ	下頸骨	R	関節突起	cmなし？	3.5歳以上	計測不能	(6)②と同一個体
(12)付近②	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	下頸骨	R	下頸体+臼齒	cm(舌側)		M3歯槽長：37.77, 歯槽幅：14.84	M2△M3△
(7)	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	下頸骨	R	下頸体破片	cm不明	?	計測不能	
(18)	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	下頸骨	R	下頸体+関節突起	cm?	?	計測不能	
(20)①	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	下頸骨	R	下頸体+臼齒	cm?	ネズミ嗜痕	歯槽長：M1～3=88.96, M1=21.86, 歯槽幅：M1=17.90	P 2×3△4△M1△2△3△風化歯根残る(21)-①と同一個体
(16)④	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	下頸第1切歎	L R	遠位端	cm?	?	L最大幅：16.50	
No.11	14 区	溜池状遺構	下層	ウシ	下頸第2, 3後臼齒	R	遊離歯	cm不明	M3: 第1咬頭咬耗開始 M2: 小窓連結	M3咬合面長：38.70, 咬合面幅：12.90, M2咬合面長：30.55, 咬合面幅：12.55	
No.8⑤	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	下頸第3後臼齒	R	遊離歯, 完形	cmなし?	成～老, M3: 小窓独立	頬側歯冠高：13.90mm	
(12)付近⑦	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	果骨	L	完形	cm不明	?	最大幅：31.83	
(15)	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	基節骨	L	近位端+骨幹部	cm不明	p: prox:f	最大長：55.95	
(11)②	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	基節骨	L	ほぼ完形	cm不明(発掘後の新しい傷有り)	p:f	残存全長：50.97	
(12)付近⑨	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	基節骨	L	完形	cmなし	f	全長：56.60	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	基節骨	R	完形	cmなし	f	全長：56.40	
(3)	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	基節骨	R	完形	cmなし	f	全長：52.60 近位関節幅：26.76	
(12)①	14 区	溜池状遺構	下層	ウシ	距骨	L	完形	cmなし	f	全長：60.75	②と同一個体, (12)付近の⑩と同一個体
(17)	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	肩甲骨	L	遠位端	cm不明	f	計測不能	
(12)付近⑫	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	肩甲骨	R	遠位+骨幹部	cm(前位)	d:f	計測不能	
(2)③	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ	尺骨	R	関節部, 破片, 前位	cmなし?	?	計測不能	
(12)付近⑮	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	尺骨	R	関節部	cm不明、ネズミ嗜痕	?	計測不能	
(20)③	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	尺側手根骨	R	完形	cmなし?	f	計測不能	
番外 2②	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ	上頸臼齒	L	遊離歯	cmなし?	すべて小窓独立	咬合面長M1: 23.76, M2: 31.06, M3: 34.98, 咬合面幅M1: 18.42, M2: 20.70, M3: 18.09, 舌側歯根又高M1: 24.25, M2: 30.96, M3: 45.85	P 2○3○4○M1○2○3○③と同一個体
番外 2③	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ	上頸臼齒	R	遊離歯	cmなし?	すべて小窓独立		P 2○3×4○M1×2○3○②と同一個体
No 7③	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	第1頸椎	M	後位破片	cm不明	f	計測不能	

第3表 出土動物遺体属性表2

出土位置番号	区	遺構	層位	分類	部位	L R	部分	破損	成長度	測定値	備考
(12)③	14 区	溜池状遺構	下層	ウシ	第2・3足根骨	L	完形	cmなし	f	最大幅：35.38	(12)付近の⑩と同一個体
(4)①	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	第7頸椎	M	完形	cm(棘突起、前関節顆)	f	椎体長：53.76	
(3)③	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ	大腿骨	L	遠位端破片	cm不明	?	計測不能	
南	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中間手根骨	L	完形(一部欠損)	cmなし?	若~老?	横幅：22.65	発掘後の新しい傷有り
(12)付近②	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中手骨	L	完形	cm不明	d, p: f	最大長：185.35, 近位最大幅：52.30	
(12)②	14 区	溜池状遺構	下層	ウシ	中心第4足根骨	L	完形	cmなし	f	最大幅：51.05	(12)①と同一個体 (12)付近の⑩と同一個体
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中心第4足根骨	R	完形	cmなし		最大幅：51.50	(12)付近①と同一個体
(20)②	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	中心第4足根骨	R	完形	cmなし?	f	最大幅：55.20	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中節骨	L	完形	cmなし	f	全長：37.33, 近位端最大高：29.60	
(16)⑪	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	中節骨	L	近位端+骨幹部	cm?	f	近位関節幅最大高：28.22	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中節骨	R	完形	cmなし	f	全長：37.37	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中節骨	R	完形	cm不明	d: f	最大長：36.94, 近位端最大高：28.50	
(3)④	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ	中足骨	L	遠位端破片	cmなし?	?	計測不能	
(12)付近②	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中足骨	L	近位端	cmなし?	p: f	近位端最大幅：49.19	(12)①と同一個体
(12)付近②	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中足骨	L	遠位端	cm?	d: f	遠位端最大幅：51.98	
(16)③	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	中足骨	L	遠位端+骨幹部	cm?	f	計測不能	ネズミ噛痕
No.6①	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	中足骨	R	近位端+骨幹部	cm?	p: f	近位関節幅：42.65	
(12)付近①	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	中足骨	R	完形	cmなし(ネズミ噛痕)	d, p: f	最大長：198.52, 近位最大幅：49.30, 近位最大高：44.05, 遠位最大幅：53.20, 遠位最大高：28.62	
(6)	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	中足骨	R	完形(骨幹部+遠位端, 一部欠損)	cm(前位)	d, p: f	残存長(ほぼ全長)：216.5	
	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	末節骨	L	完形	cmなし	fused	全長：56.50, 近位端最大高：37.63	
(12)付①	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	末節骨	L	完形	cmなし	f	全長：57.75, 近位端最大高：40.73	
(12)付近⑧	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	末節骨	R	完形	cmなし	f	全長：57.00, 近位端最大高：34.25	
(12)付近⑤	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	肋骨	L, R 不明	骨幹部	cm不明	不明	計測不能	
(12)付近②	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	肋骨	R	骨幹部	cm	不明	計測不能	
(19)①	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	橈骨	L	近位端+骨幹部 近位端寄り	cm?	f	近位端最大幅：78.20	風化
(2)①	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ	橈骨	R	近位端+骨幹部 外側位	外側位にcm	p: f	計測不能	(2)②と別個体
(2)②	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ	橈骨	R	近位端+骨幹部	cmなし?	p: f	計測不能	(2)①と別個体
(2)④	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ	橈骨	R	遠位端+骨幹部	cmなし?	d: f	計測不能	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	橈骨	R	遠位端+骨幹部	cm不明	d: f	遠位端最大幅：78.11	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	橈骨	R	近位端+骨幹部	cm不明	p: f	近位端最大幅：79.48, 近位端最大高：42.28	
No.6②	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	脛骨	L	骨幹部+遠位端	cm(外側位) (発掘後の新しい傷有り)	d: f	計測不能	
(12)付近①	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	脛骨	L	遠位端	cmなし	f	遠位端最大幅：60.78	
No.4②	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	脛骨	R	骨幹部	cm不明	不明	計測不能	
No.10①	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウシ	脛骨	R	骨幹部	cm不明	不明	計測不能	風化

第4表 出土動物遺体属性表3

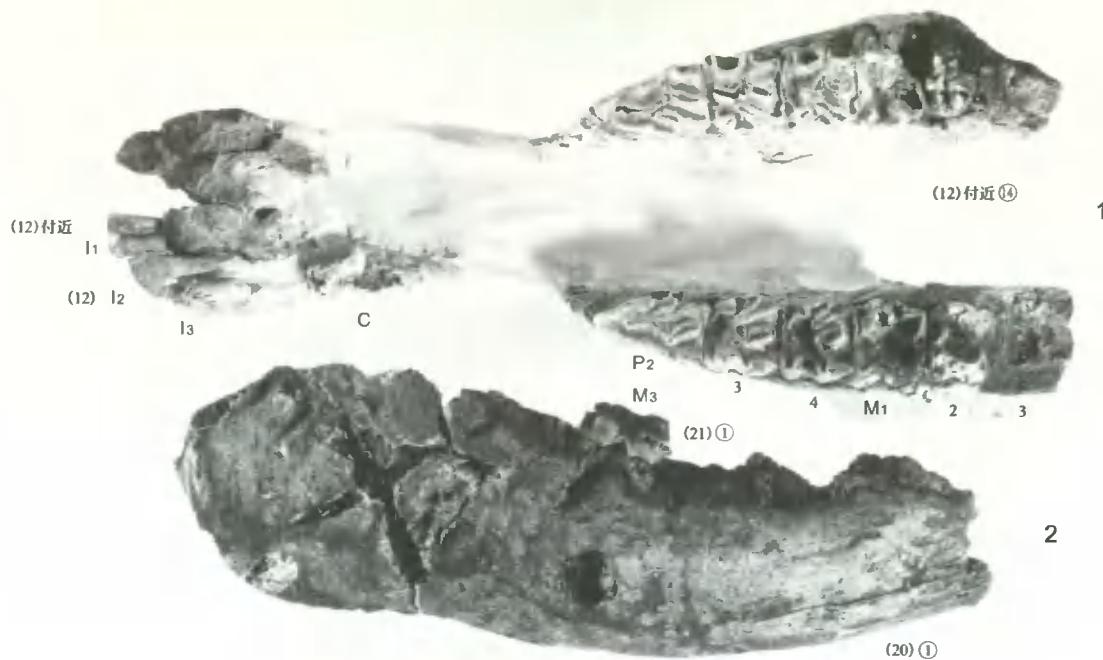
出土位置番号	区	遺構	層位	分類	部位	L R	部分	破損	成長度	測定値	備考
(12)付近⑫ 区	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	脛骨	R	遠位端,外側位	cmなし	f	計測不能	
番外2① 区	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ	脛骨	R	骨幹+遠位	cm?	d:f	計測不能	風化
(13)	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ	脛骨	R	骨幹部	cm(外側位)	?	計測不能	
(12)付近⑯ 区	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	踵骨	L	完形	cmなし	p:f	最大長:120.92	(12)の①②と同一個体
(12)付近⑰ 区	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	踵骨	R	完形	cm(外側位、遠位端)		最大長:124.32	
(12)付近⑯ 区	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ	踵骨	R	完形	cm不明		最大長:120.46	
番外1⑤ 区	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウシ/ ウマ	下頸骨	L	関節突起	cm不明	f不明	計測不能	
番外2④ 区	14 区	溜池状遺構	下部	ウシ/ ウマ	寛骨	L	寛骨臼 股骨坐骨部	cm不明	f	計測不能	
(23)③ 区	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ/ ウマ	寛骨	L	寛骨臼 坐骨部	cm不明	f	計測不能	風化
(4)② 区	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ/ ウマ	胸椎	M	棘突起+関節突起欠損	cmなし	f	椎体長:62.22	
(12)付近⑯ 区	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ/ ウマ	頸椎	M	骨幹部,破片	cm?	pos:u	計測不能	
(23)② 区	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ/ ウマ	頸椎	M	前位破片	cm不明	f	計測不能	風化
(12)付近⑯ 区	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ/ ウマ	腰椎	R	右外側隙,骨幹部破片	cmなし?	不明	計測不能	
(12)付近⑯ 区	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ/ ウマ	仙骨	M	骨幹部,破片	cm不明	ant:f	残存長:53.00	
(23)① 区	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ/ ウマ	仙椎	M	前位破片	cm不明	f	計測不能	風化
中	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウシ/ ウマ	大腿骨	L	近位端	cm(関節部後位より)	prox:f	関節最大径:42.05	
No.12① 区	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウシ/ ウマ	肋骨	?	破片	cm不明	不明	計測不能	風化
(16)⑥ 区	14 区	溜池状遺構	中部	ウシ/ ウマ	橈骨	L	遠位端+骨幹部 破片	cm?	f	計測不能	
No.5③ 区	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下頸骨	R	破片(歯根欠損)	cmなし	小窓独立	M2,咬合面長:20.09,咬合面幅:11.96	
No.5② 区	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎臼齒	L	破片(歯根欠損)	cmなし	小窓独立	M2,咬合面長:20.09,咬合面幅:11.96	
No.2① 区	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎臼齒	L	遊離齒	cmなし?	P2 P4 M1: 小窓独立	咬合面長:M1=26.80, P2=30.10, P4=26.40,咬合面幅:M1=14.84, P2=14.02, P4=13.20	P2 P4 M1 2 No.2①とは別個体 成長障害著 Na.3③と同一個体
No.2② 区	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎臼齒	R	遊離齒	cmなし?	M1:小窓独立	咬合面長:M1=26.13,咬合面幅:M1=14.89	P2 M1 No.2②と同一個体 成長障害同一
No.3① 区	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎骨	L	下顎体+臼齒	cm不明	成~老齢	P3~M2長=95.90, P3~M1長=76.13,齒槽長M1~3:81.10, P3~4:51.26, P3~M3:131.17	P2△3○4○M1○2○3○ M3以外小窓独立
(10)② 区	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	下顎骨	L	P3~M3	cm不明	小窓連結	省略	P3○4○M1○2○3○ ①と同一個体 重なって出土
(1) 区	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	下顎骨	L R	遊離齒	cmなし	8~18歳	11~3長=36.70, 11~長=14.46, 幅=10.90, 12~長=14.99, 幅=14.99, 13~長=14.87, 幅=9.07(全て右)	I123+C ♂
No.3② 区	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎骨	R	下顎体+臼齒	cm不明	成~老齢	P3~M3齒槽長=129.70mm, P4~M3長=102.56mm, M2~P3長=97.50mm, 齒槽長M1~3:77.82, P3~4:51.42	P2△3○4○M1○2○3○ M3以外小窓独立
(10)① 区	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	下顎骨	R	P2~M3	cm不明(ネズミ嗜痕)	小窓連結	齒槽長:M1~3=81.82, M2~3=56.88, M1=22.28, M2=23.50, M3=30.46, 齒槽幅:M3=13.26, 咬合面長:M1~3=75.84, M2~3=50.87, M1=22.30, M2=25.34, M3=29.21, 咬合面幅:M1=15.85, M2=12.90, M3=11.76	P2○3○M1○2○3○ ②と同一個体 重なって出土
No.1① 区	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	下顎第1~3後臼齒	R	遊離齒	cmなし?	小窓連結	咬合面長:P4~M2=71.00, M2=26.32, P4=24.27, 咬合面幅:M2=14.92, P4=12.82	M1○2○3○
No.4③ 区	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	基節骨	R	ほぼ完形(一部欠損)	cm不明	f	残存長:70.55	

第5表 出土動物遺体属性表4

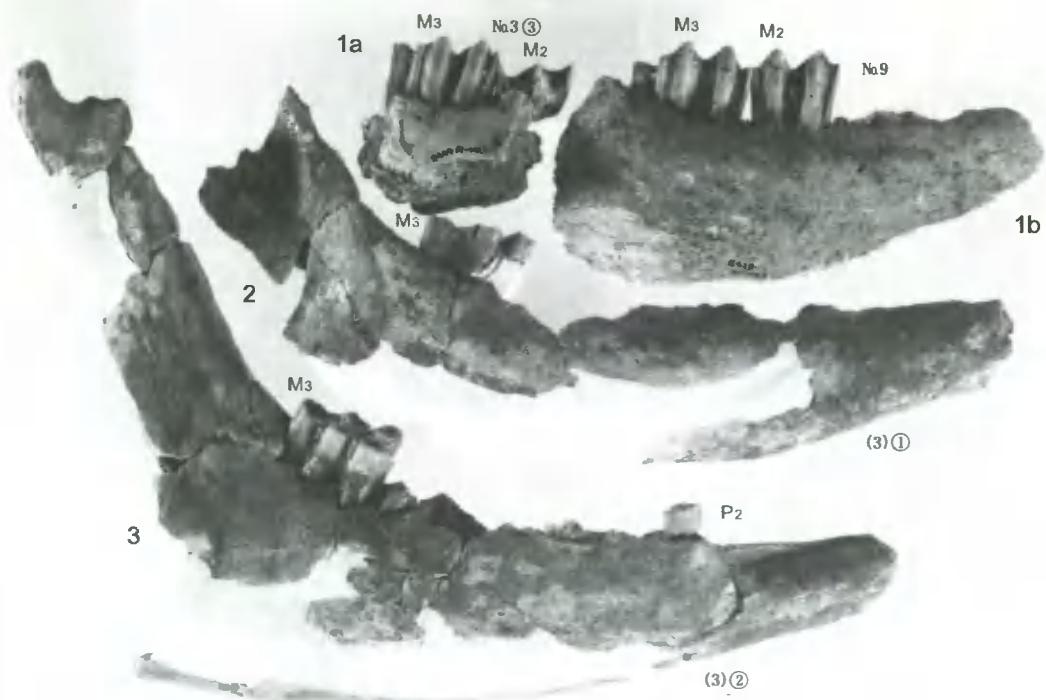
出土位置番号	区	遺構	層位	分類	部位	L/R	部分	破損	成長度	測定値	備考
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	距骨	L	骨幹部破片	cmなし?	不明	計測不能	
(16)⑦	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	距骨	L	内側位破片	cm?	f	計測不能	
番外1①	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	距骨	R	ほぼ完形	cm?	fused	最大幅: 55.60	
No.5①	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	上顎臼歯 P 2	L	遊離歯	cmなし(発掘後の傷有り)	小窓独立	咬合面幅: 21.04	P 2
(2)①	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	上顎臼歯 M 1 ~ 3	L	遊離歯	cmなし	小窓連結 3.5 ~ 4.5歳以上(萌出より)	M 1: 咬合面長 = 23.70, 咬合面幅 = 24.80, M 2: 咬合面長 = 24.31, 咬合面幅 = 24.00, M 3: 咬合面長 = 24.22, 咬合面幅 = 19.93	M123
(2)②	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	上顎臼歯	R	遊離歯	cmなし	小窓連結	P 3: 咬合面長 = 27.37, 咬合面幅 = 25.94, P 4: 咬合面長 = 27.48, 咬合面幅 = 26.66(大きめ象牙質の付着物も計測), M 1: 咬合面長 = 23.74, 咬合面幅 = 25.50, M 2: 咬合面長 = 24.40, 齒槽長: P 2 ~ 4 = 24.88, 咬合面幅 = 23.84	P34M12
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	上顎骨	L/R	上顎体 + 臼歯	cm(右外側位)	成~老	L: M 1 咬合面長 = 19.12, R: 咬合面長: M 1 = 20.77, M 2 = 20.95, P 2 ~ 4 = 29.76, 咬合面幅: M 1 = 25.50, M 2 = 24.40, 齒槽長: P 2 ~ 4 = 80.75, M 1 ~ 2 = 43.74	P2○3○4○(小窓独立)M1○2△3×(全面窓)
No.14①	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	上顎第2~4前臼歯	L	遊離歯	cmなし?	P234: 小窓独立	咬合面長: P 2 ~ 4 = 87.95, P 2 = 34.32, P 3 = 27.20, P 4 = 26.90, 咬合面幅: P 2 = 22.65, P 3 = 24.78, P 4 = 23.75	P2○3○4○ No.14②と同一個体
No.14②	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	上顎第2前臼歯	R	遊離歯	cmなし?	P 2: 小窓独立	-	P 2 No.14①と同一個体
番外1③	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	上腕骨	L	骨幹部	cm	f?	計測不能	
番外1④	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	上腕骨	L	遠位端	cm不明	f 不明	計測不能	
番外1⑤	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	上腕骨	R	遠位端+骨幹部	cm	d:f	計測不能	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	第2頸椎	M	前位左外側位, 破片	cm?	a nt:f	計測不能	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	大腿骨	L	骨幹部	cmなし?	不明	残存長: 156.26, 前位幅: 45.14	
(16)⑩	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	大腿骨	L	近位端+骨幹部	cm(回転子)	f	近位関節最大幅: 27.85	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	大腿骨	R	遠位端, 骨幹部破片	cmなし?	不明	計測不能	
(16)⑨	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	中節骨	L	遠位端	cm?	f	計測不能	
(16)⑩	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	中節骨	R	遠位端	cm?	f	遠位関節幅: 39.96	
No.12③	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	中足骨	L	骨幹部	cm不明	不明	計測不能	風化
(16)②	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	中足骨	L	骨幹部+遠位端	cm?	f	近位関節幅: 42.79	
(4)⑤	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	末節骨	R	完形(前位一部欠損)	cm不明	?	関節幅: 38.09	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	脛骨	L	遠位端+骨幹部	cm(前位)	d:f	遠位端最大幅 62.64, 遠位最大高: 35.78	
(16)①	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	脛骨	L	骨幹部+遠位端	cm(骨幹部外側位)	f ネズミ噛痕	遠位端最大幅(復元値): 66.20	
No.13②	14 区	溜池状遺構	上部下層	ウマ	脛骨	R	遠位端+骨幹部	cm	d:f ネズミ噛痕	計測不能	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	ウマ	踵骨	L	関節部破片	cmなし?	不明	上部踵骨関節幅: 30.30	
(16)⑧	14 区	溜池状遺構	中部	ウマ	踵骨	L	骨幹部	cm?	f	上部距骨関節幅: 31.44	
No.12②	14 区	溜池状遺構	上部下層	哺乳類	四肢骨	?	骨幹部	cm不明	不明	計測不能	風化
No.14③	14 区	溜池状遺構	上部下層	哺乳類	四肢骨	?	骨幹部	cm不明	不明	計測不能	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	哺乳類	四肢骨	不明	骨幹部	cm?	不明	計測不能	
(12)付近⑩	14 区	溜池状遺構	下部下層	哺乳類	手根 or 足根骨	L/R 不明	完形	cmなし?	不明	計測不能	
北	14 区	溜池状遺構	下部下層	哺乳類	部位不明	?	骨幹部破片	cm不明	不明	計測不能	

第6表 出土動物遺体属性表5

図版1

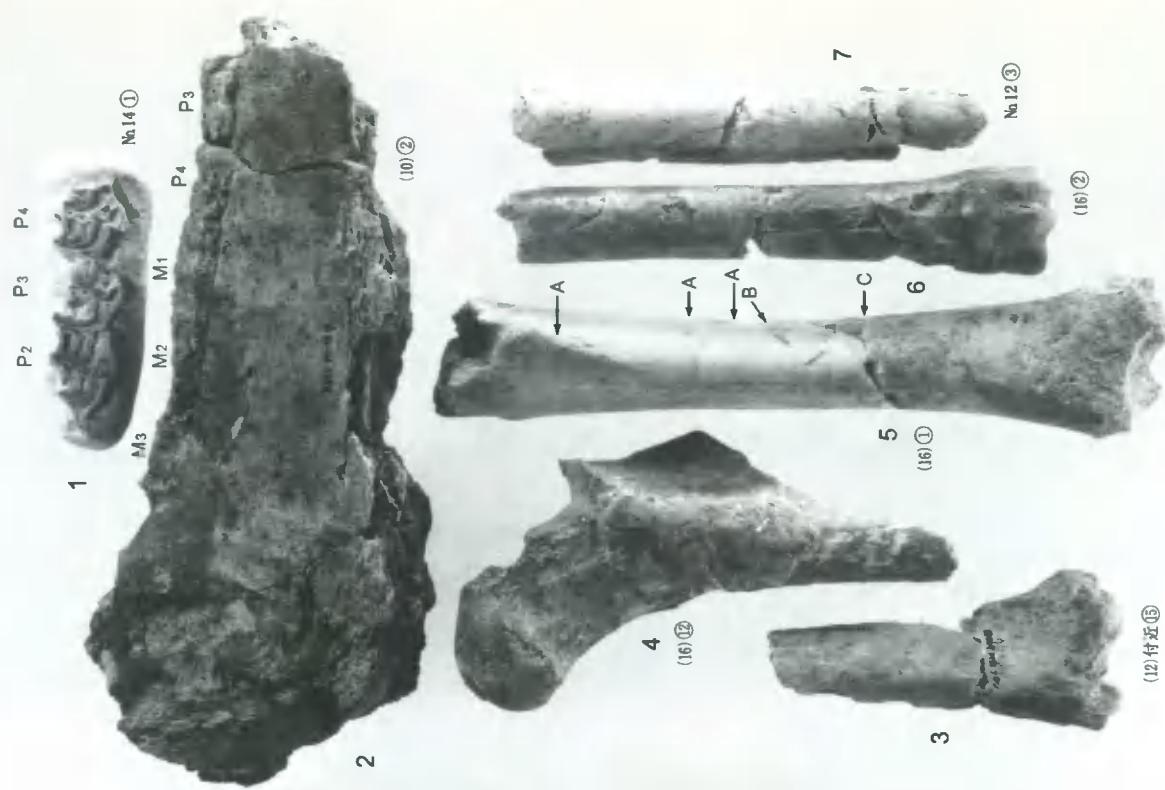


1. ウマ・ウシ遺存体 1. ウマ上顎骨 咬合面 2. ウシ左下顎骨 頬側



2. ウシ遺存体 下顎骨 1. 左下顎骨 舌側 2. 左下顎骨 舌側 3. 右下顎骨 頬側

図版2

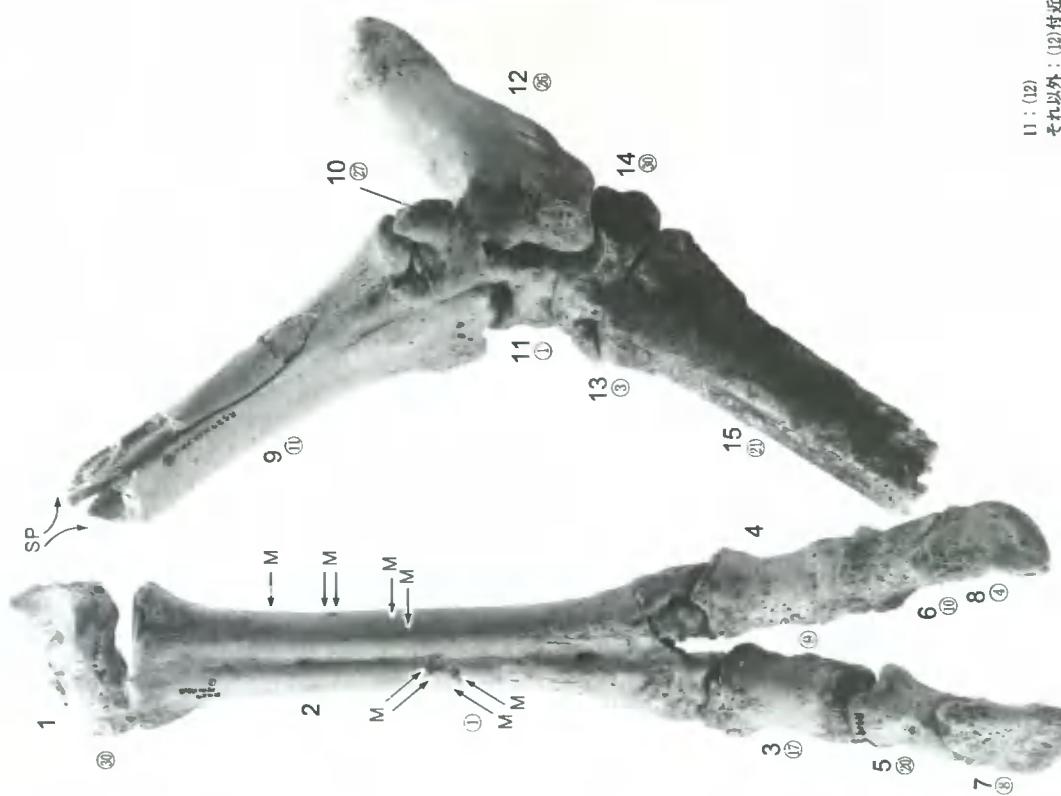
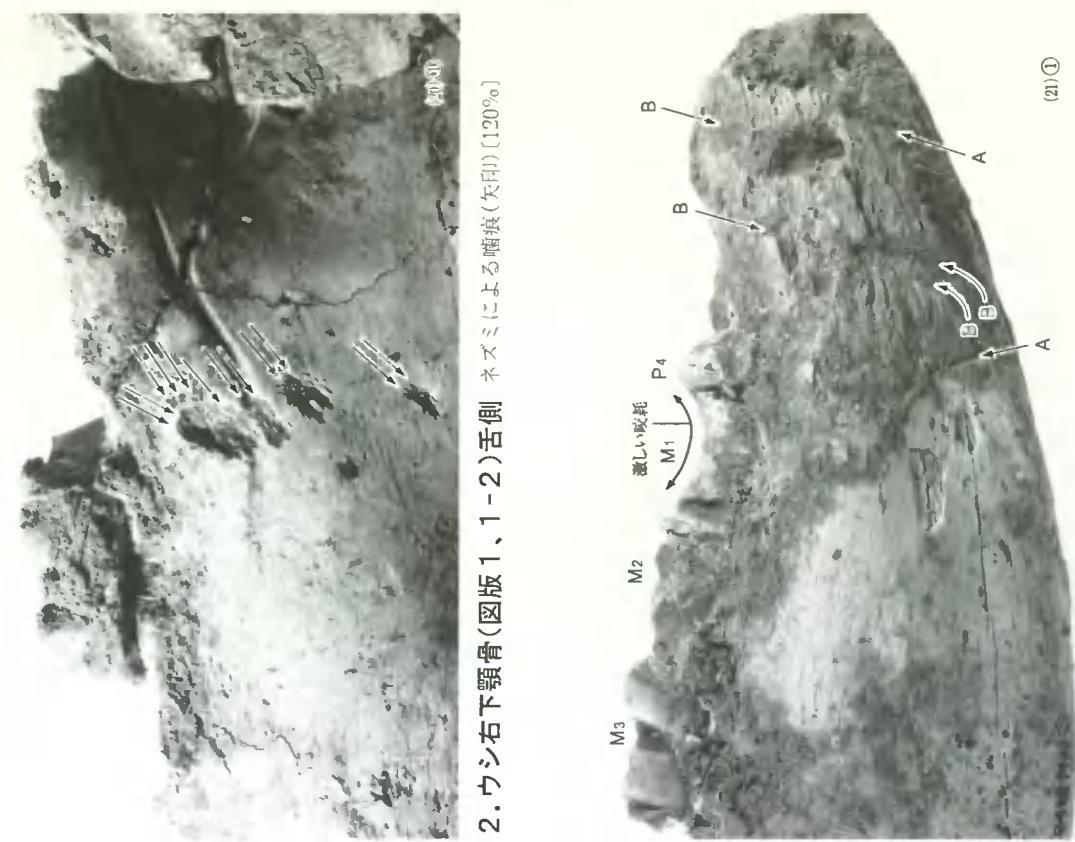


2. ウマ遺存体 [47%] 1.左上顎臼齒 2.右下顎臼齒 3.左脛骨
4.左大腿骨 5.左脛骨 6.左中足骨 7.左中足骨



2. ウシ遺存体 [37%] 1.左下顎骨 2.左肩甲骨 3.右脛骨 4.左中足骨 5.右中足骨 6.左橈骨
7.左距骨 8.右蹠骨 9.右脛骨 10.右橈骨 11.12.基節骨 13.14.中節骨 15.16.末節骨

図版3

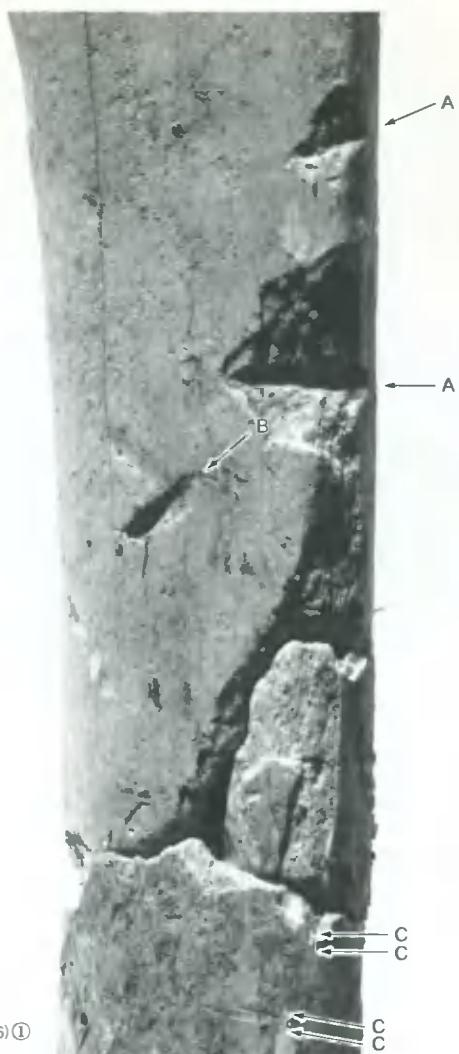


1. ウシ遺存体 [41%] 1. 右中心足根骨 2. 右中足骨 3・4. 基節骨 5・6. 中節骨
7・8. 末節骨 9. 左脛骨 10. 距骨 11. 左距骨 12. 左蹠骨 13. 左第2・3足根骨
14. 左中心足根骨 15. 左中足骨 M: ネズミの歯痕 SP: スパイラル割れ
11: (12)
それ以外: (12)付近

図版4



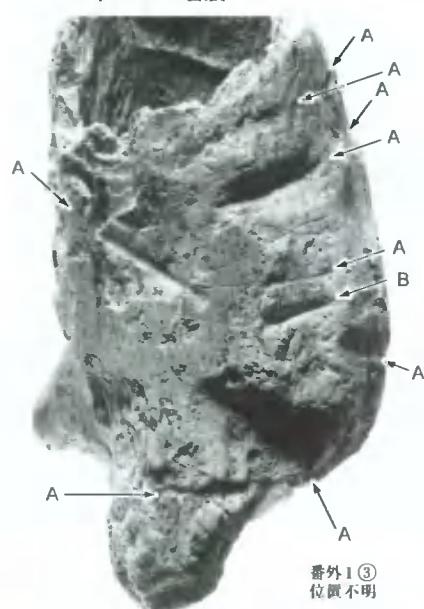
1. ウマ大腿骨頭(近以関節)切創(カットマーク) [100%]



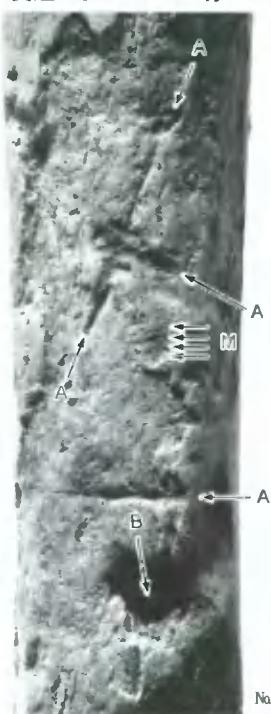
2. ウマ左脛骨 骨幹部外側面切創(カットマーク) [147%]
A・B:激しい切創(A.貫通パターン B.停止パターン) C:微細な切創

3. ユシ右中足骨 骨幹部内側位 [150%]

M:ネズミの噛痕



4. ウマ左上腕骨
骨幹部外側面
[100%]



5. ウマ右脛骨
骨幹部外側面切創
(カットマーク)
[94%]

図版5



1. ウマ左上腕骨 骨幹部後面 [133%]



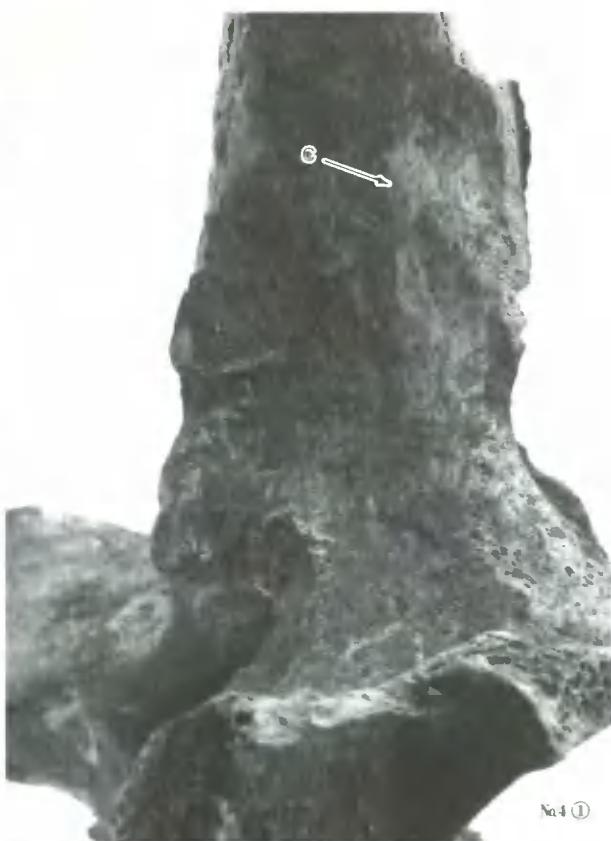
2. ウシ右肋骨 骨幹部内側面切創 [240%]

C: 軽微な切創



3. ウシ第7頸椎 椎頭 前面切創 [200%]

C: 軽微な切創



4. ウシ第7頸椎 棘突起 左外側面切創 [200%]

C: 軽微な切創

図版 1

岡谷大溝散布地



1. 近景 南から



2. T 6 西壁
東から



3. OT-1 東壁
西から



4. OT-3 東壁
西から

図版2

岡谷大溝散布地



1. OT-5 西壁
東から



2. OT-8 西壁
東から



3. T5 東壁
西から



4. 出土遺物

三須今溝遺跡



1. 溝1
西から

2. 溝3護岸
北から

3. 溝4
南西から

図版4

三須今溝遺跡



1. 溝8
南西から



2. 溝10
西から



3. 溝11
北から

図版5

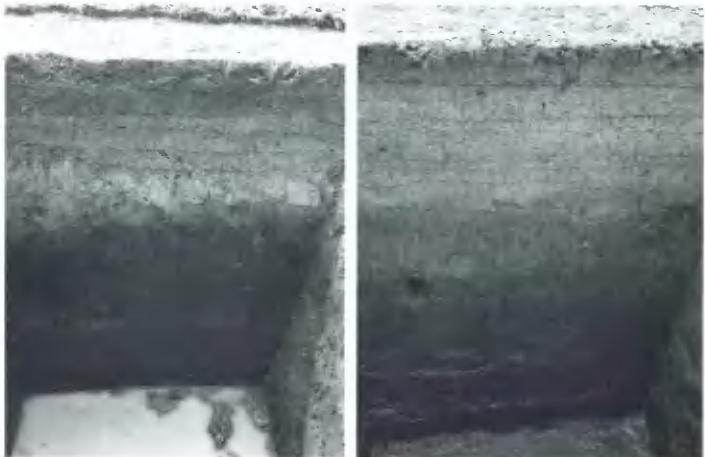
三須今溝遺跡



1. 溝11
南から



2. 溝11護岸
北東から

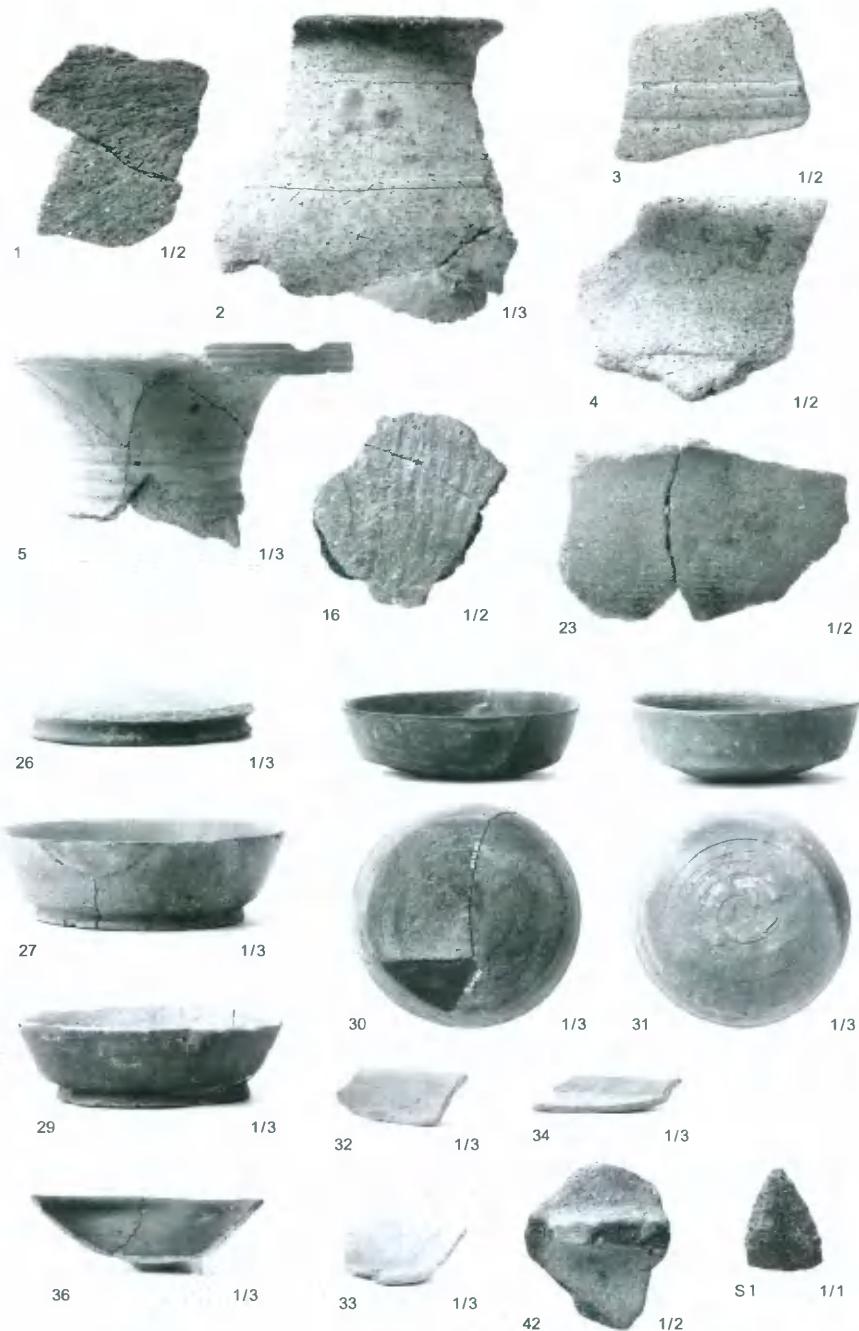


3(左). T 4 西壁
東から

4(右). T 1 西壁
東から

図版6

三須今溝遺跡



溝1・溝2・溝11出土遺物

三須河原遺跡



1. 遺構全景（13区）
南から



2. 溝16・溝10・溝9・
溝8（手前から）
北から

図版 8

三須河原遺跡



1. 壺穴住居3
北から

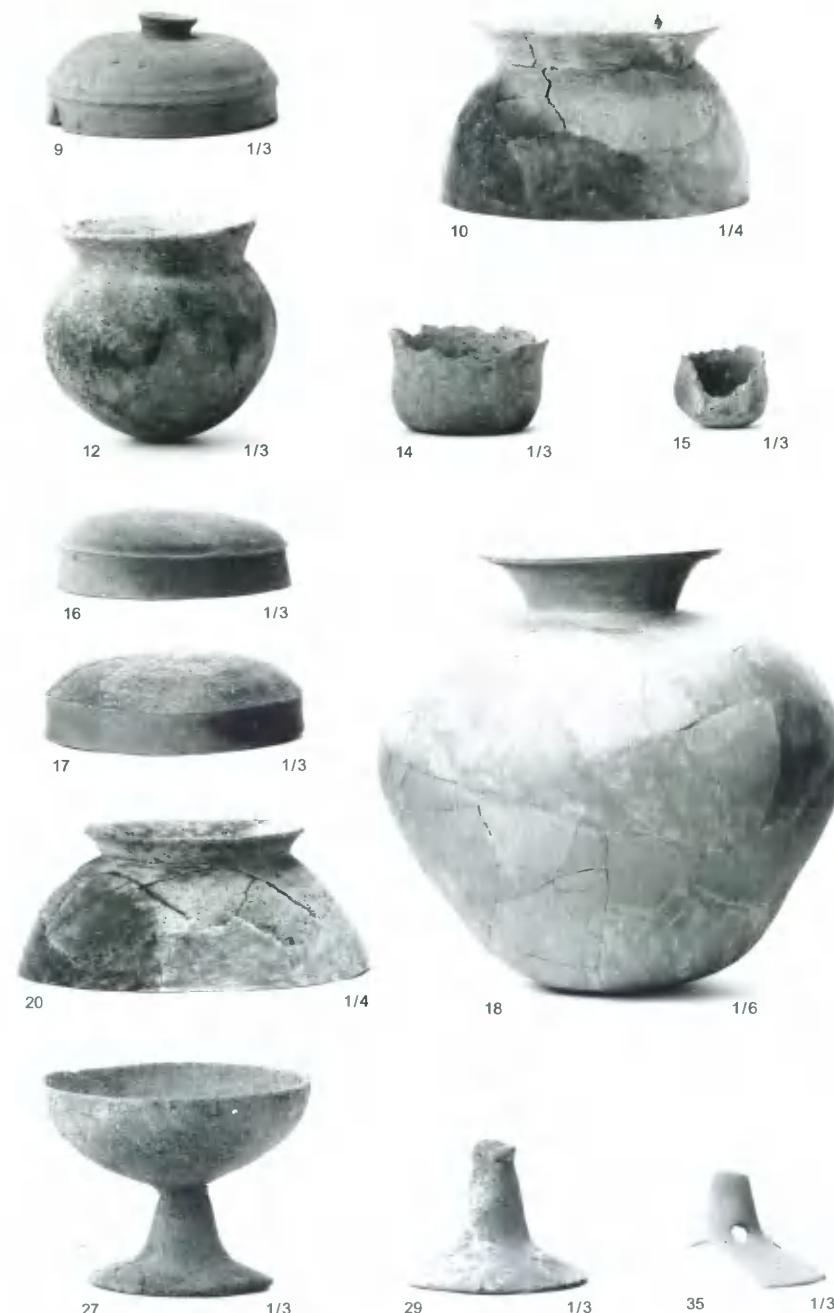


2. 壺穴住居4
南東から



3. 柱穴列
北から

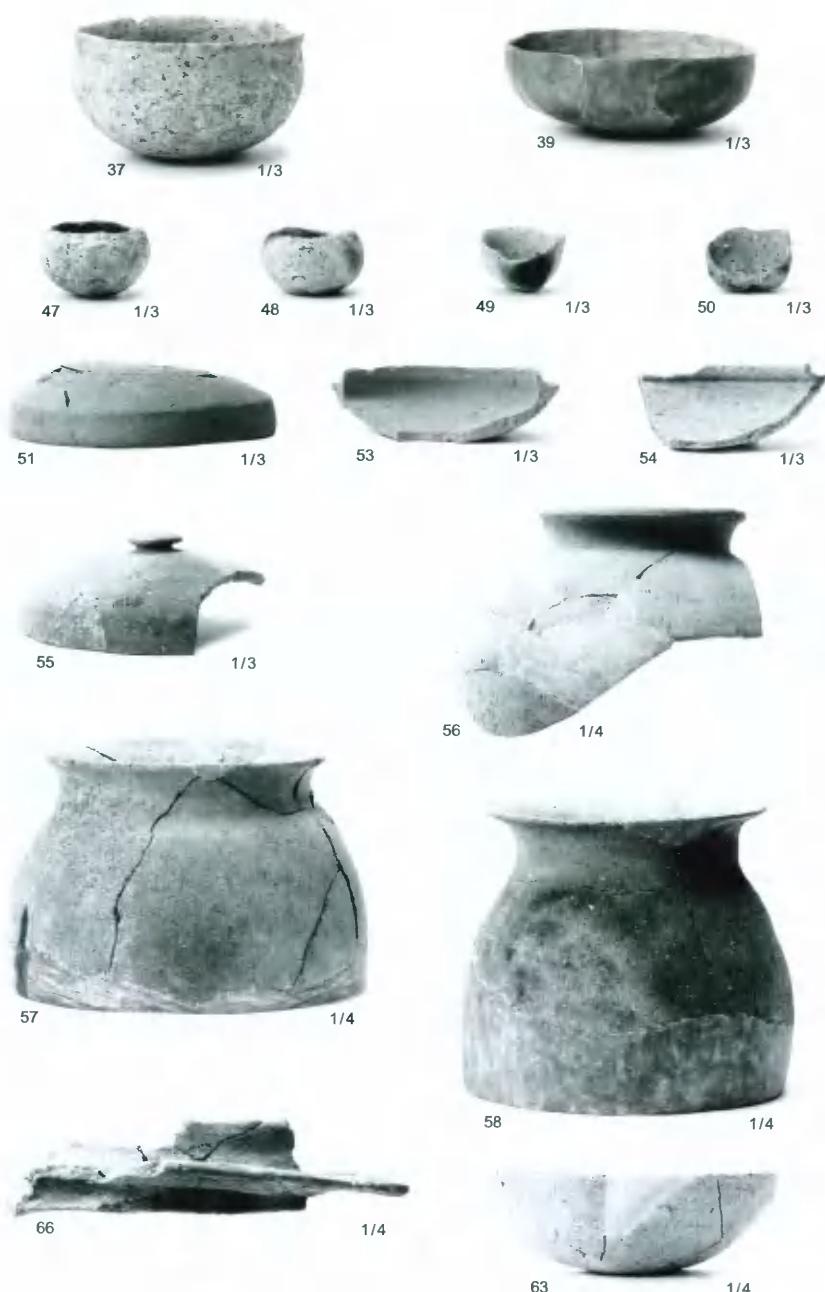
三須河原遺跡



竪穴住居 3・4 出土遺物

図版10

三須河原遺跡



竪穴住居4・溝12出土遺物

三須畠田遺跡



1. 壺穴住居 6
上層床面
西から



2. 壺穴住居 7
北から



3. 壺穴住居 8
南から

図版12

三須畠田遺跡



1. 土壌7
南東から



2. 土壌8
南西から



3. 粘土塊
北西から

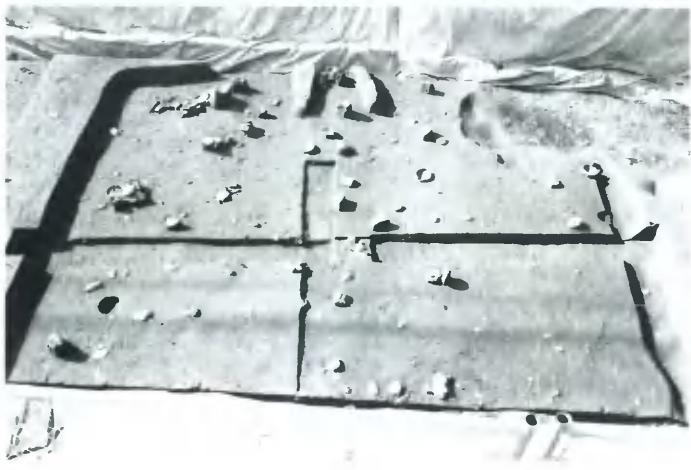
三須畠田遺跡



1. 壓穴住居10
西から



2. 壓穴住居12
南から



3. 壓穴住居13
東から

図版14

三須畠田遺跡



1. 竪穴住居15
南から

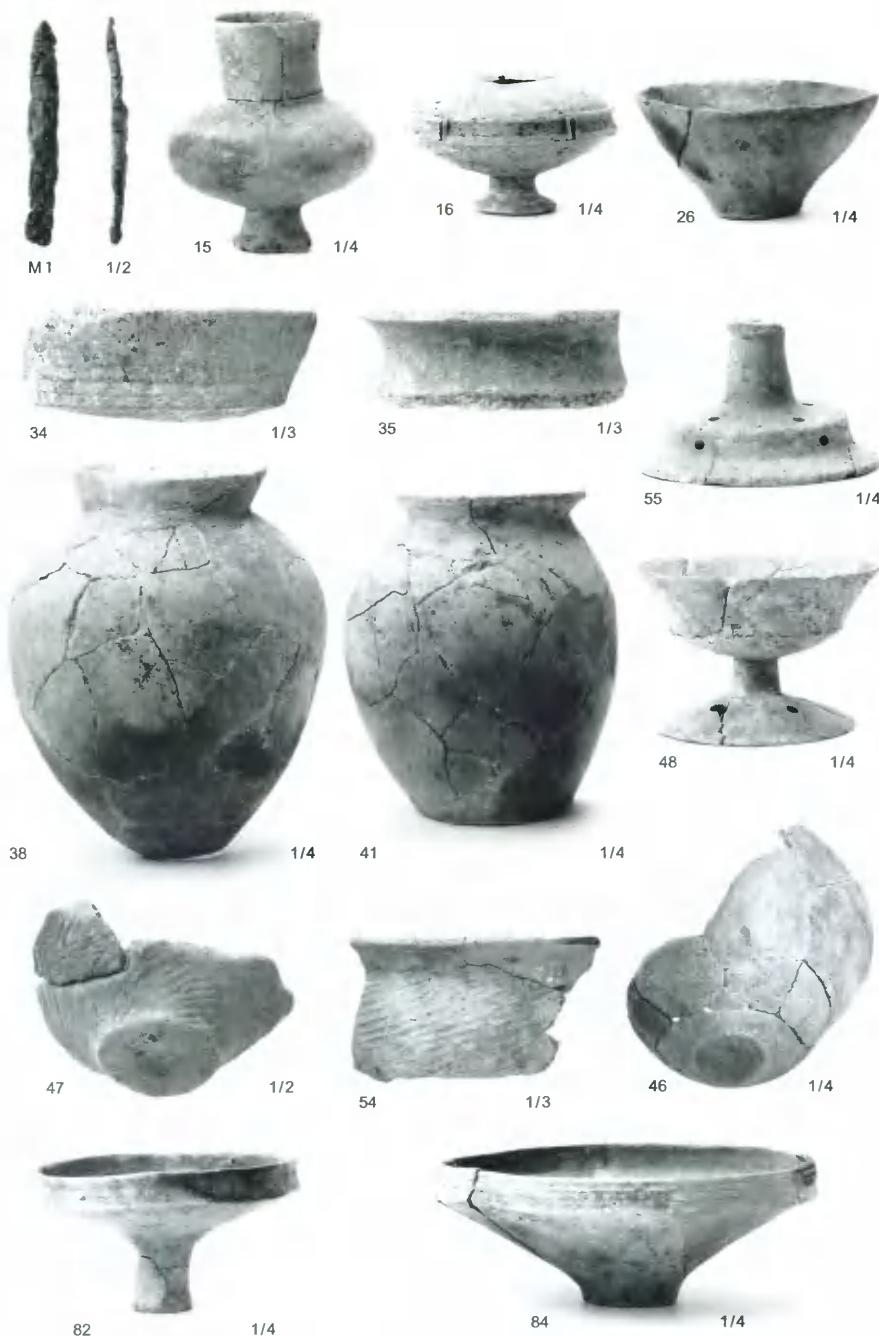


2. 竪穴住居18
鉄滓出土状況
西から



3. 竪穴住居20
南西から

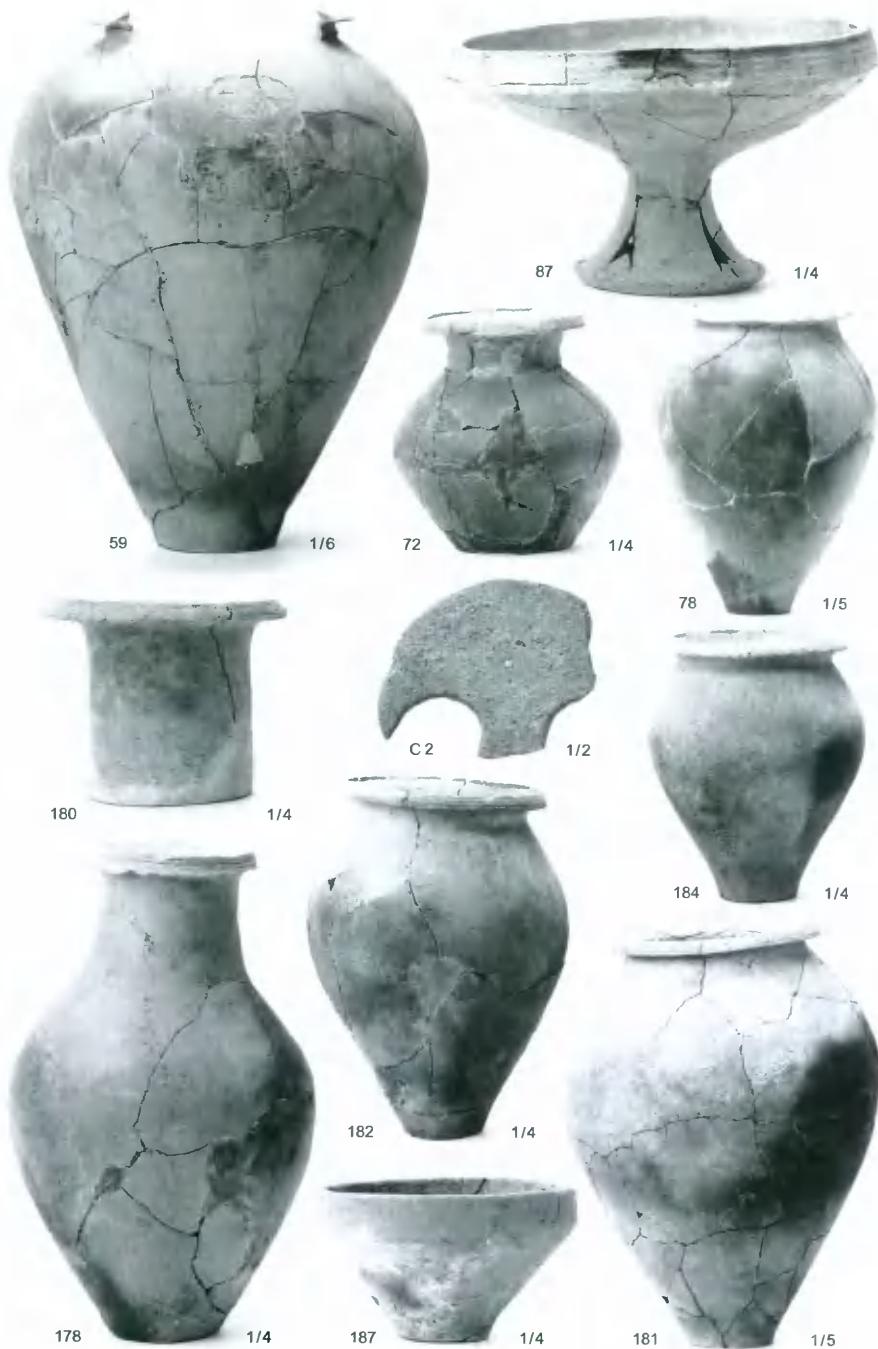
三須畠田遺跡



堅穴住居2・4・6・8・土壤7出土遺物

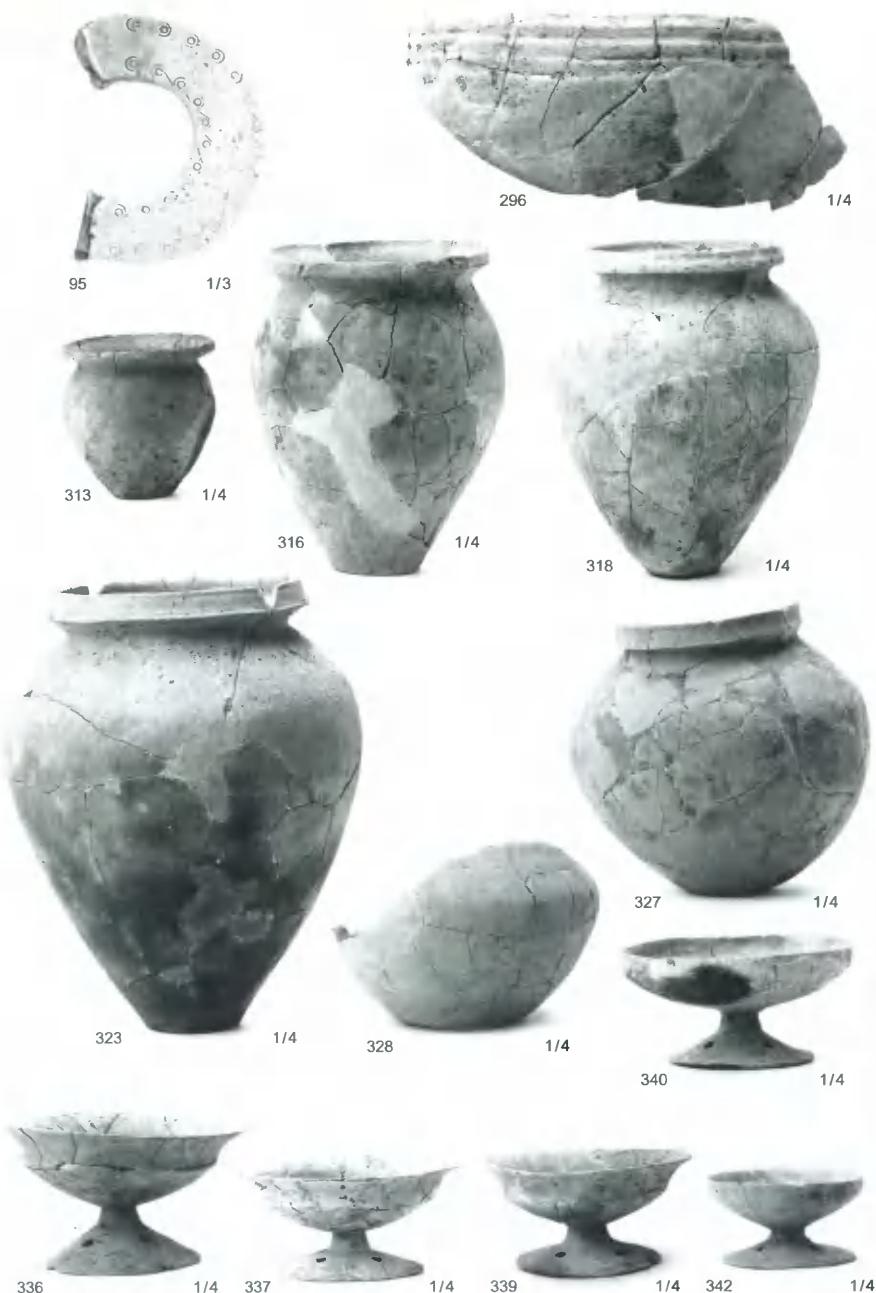
図版16

三須畠田遺跡



土壤7・13出土遺物

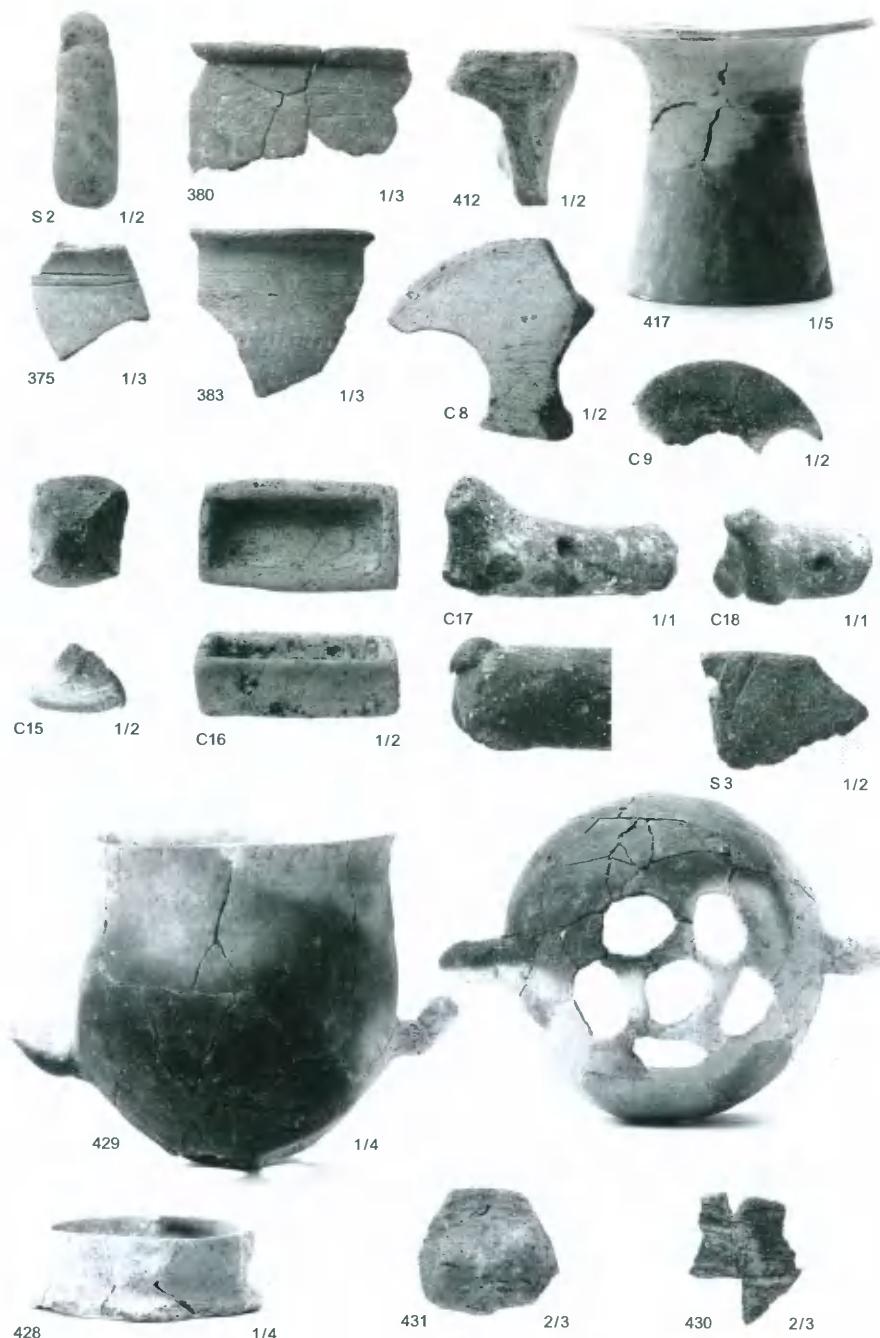
三須畠田遺跡



土壤8・溝9出土遺物

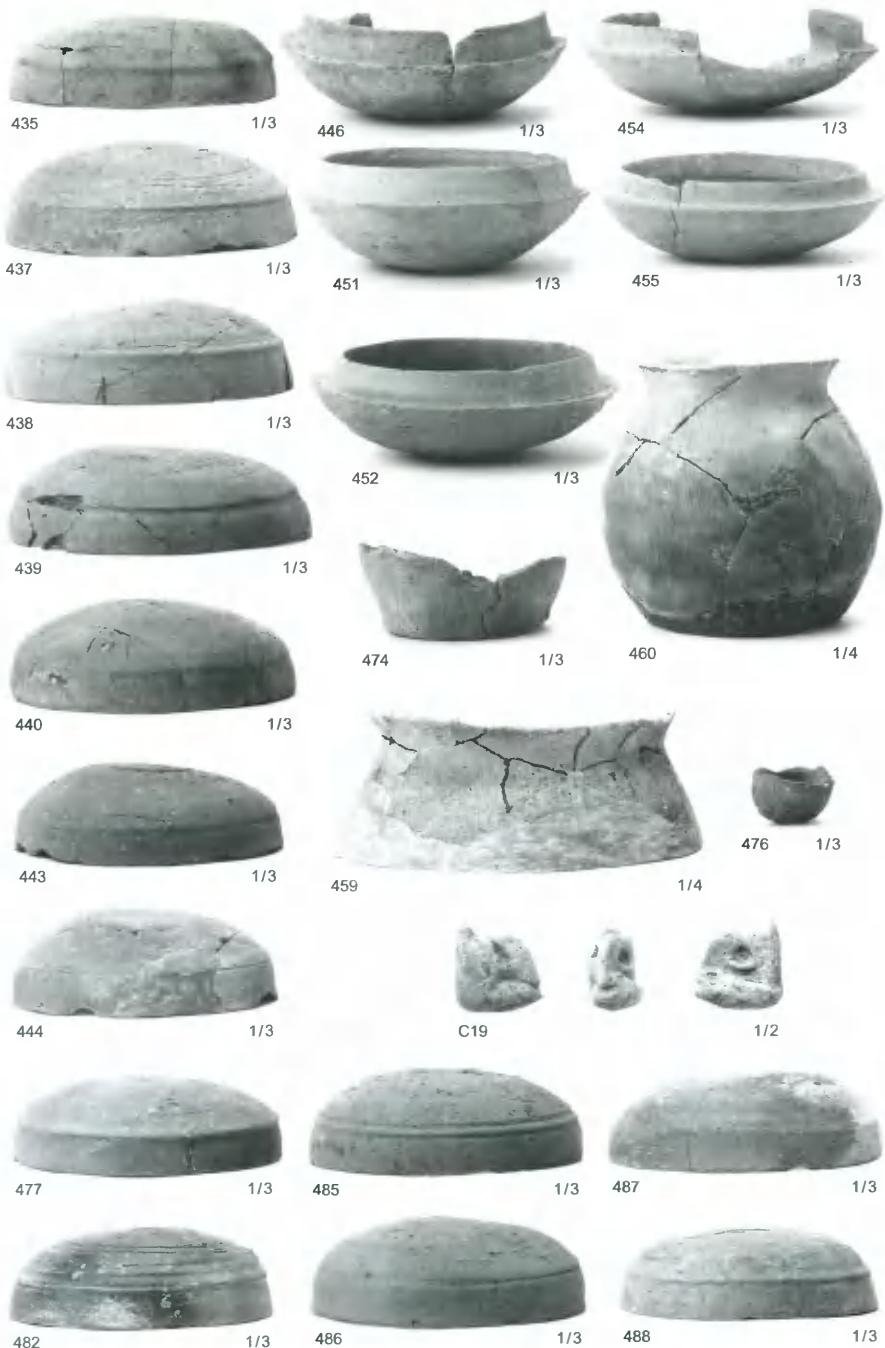
図版18

三須畠田遺跡



遺構に伴わない遺物、竪穴住居10出土遺物

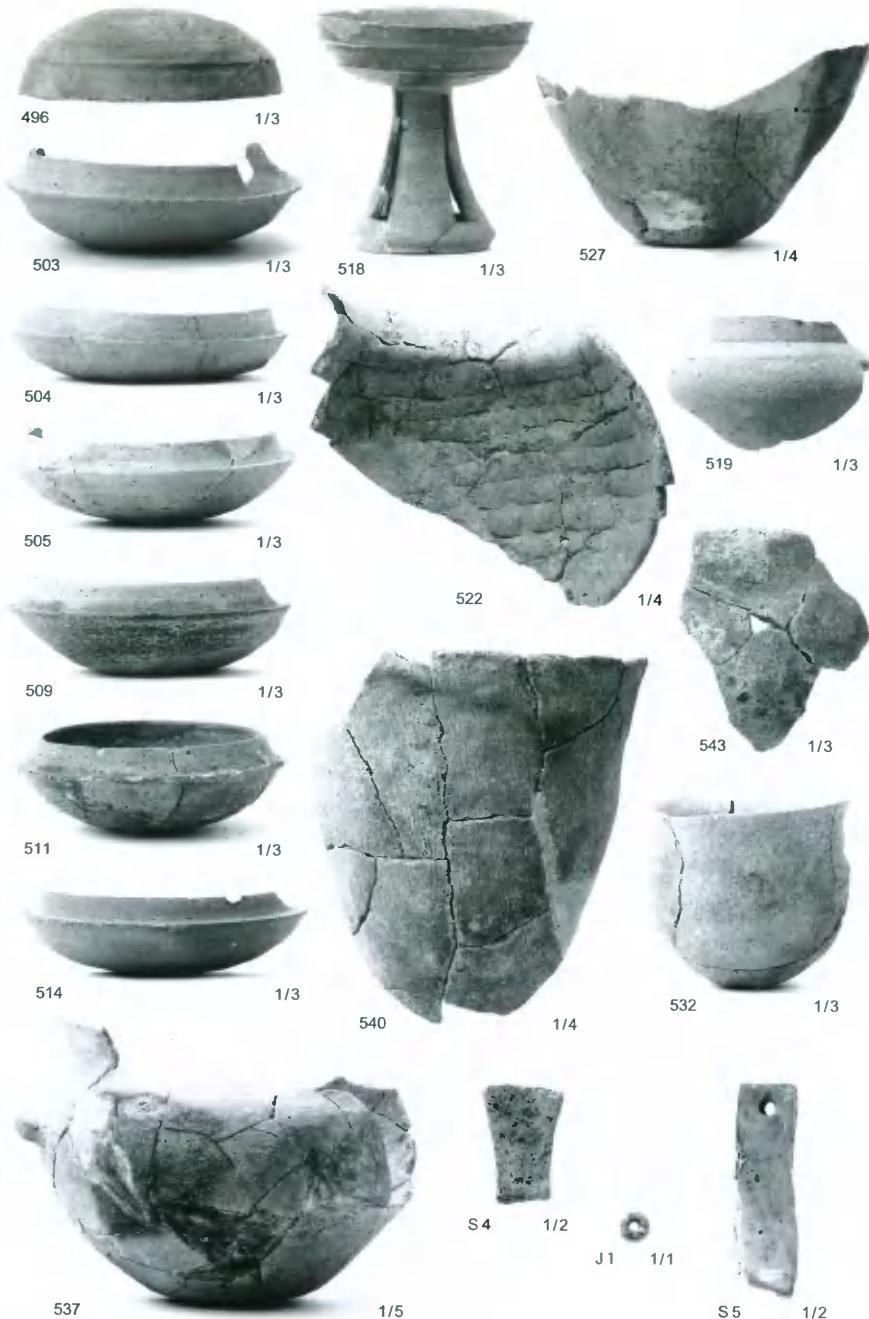
三須畠田遺跡



堅穴住居12・13出土遺物

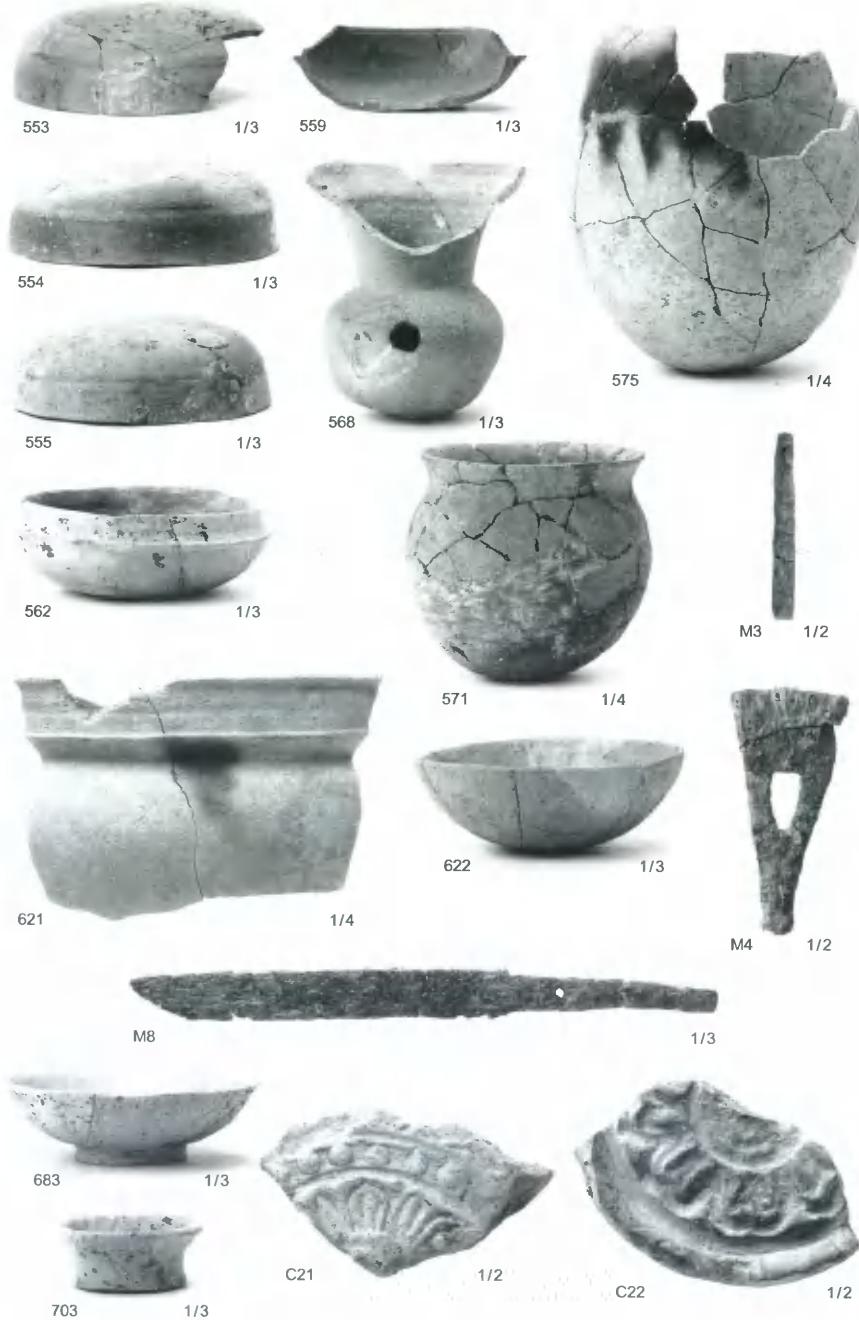
図版20

三須畠田遺跡



堅穴住居13・14出土遺物

図版21
三須畠田遺跡



竪穴住居15・土壙31・土壙墓3・柱穴出土遺物、遺構に伴わない遺物

図版22

井手見延遺跡



1. 遺構全景（2区）
北から



2. 竪穴住居 1
北から



3. 竪穴住居 2
南西から

井手見延遺跡



1. 袋状土壤4
南から



2. 袋状土壤6
北東から



3. 袋状土壤15
西から

図版24

井手見延遺跡



1. 壇穴住居5
南から

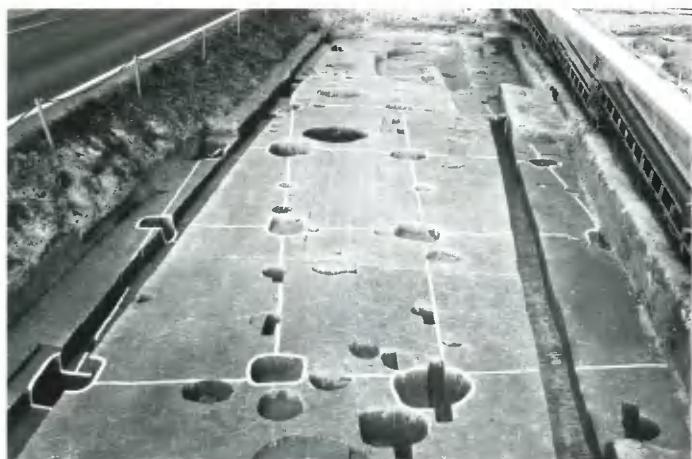


2. 壇穴住居5カマド
南から



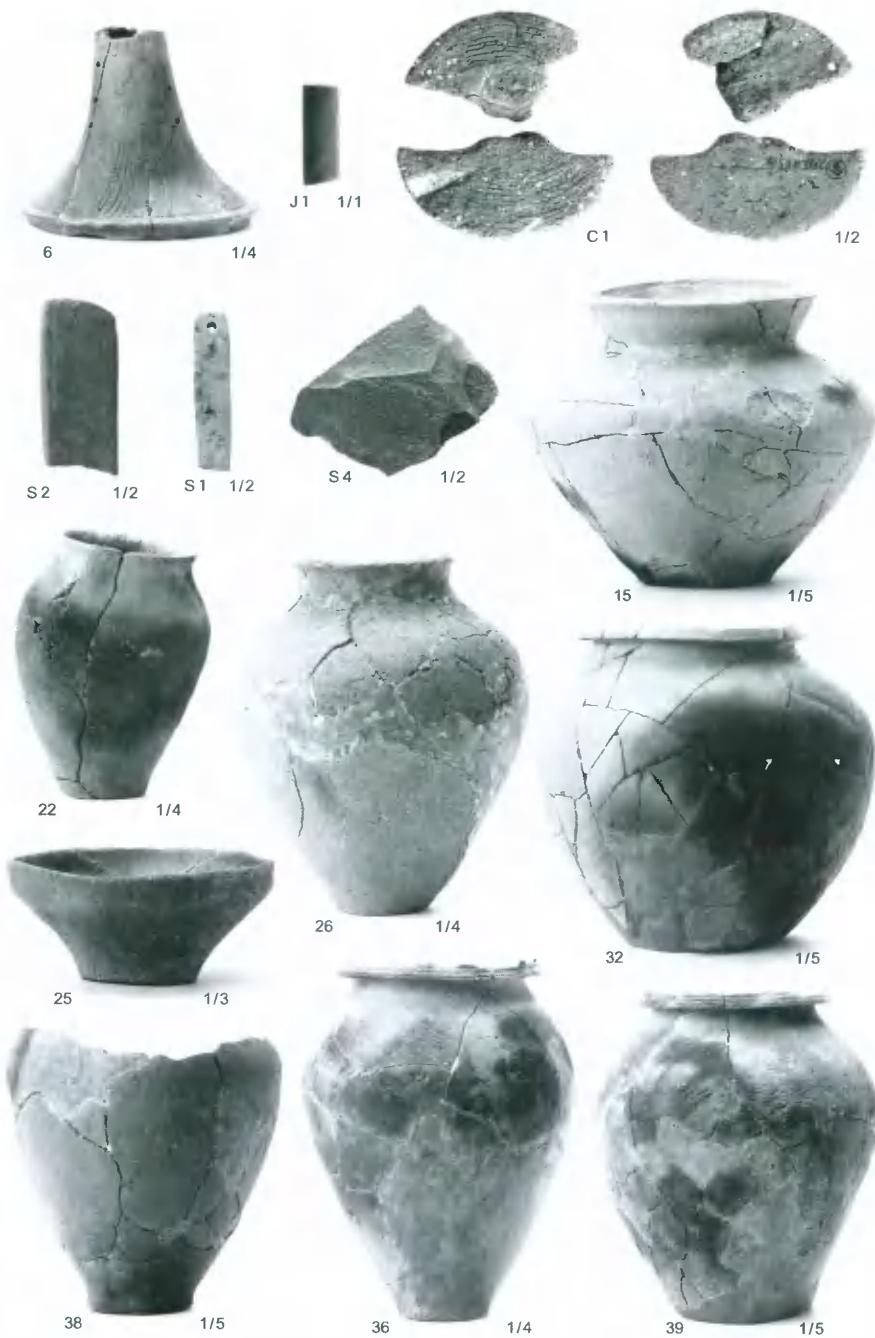
3. 壇穴住居6
南から

井手見延遺跡



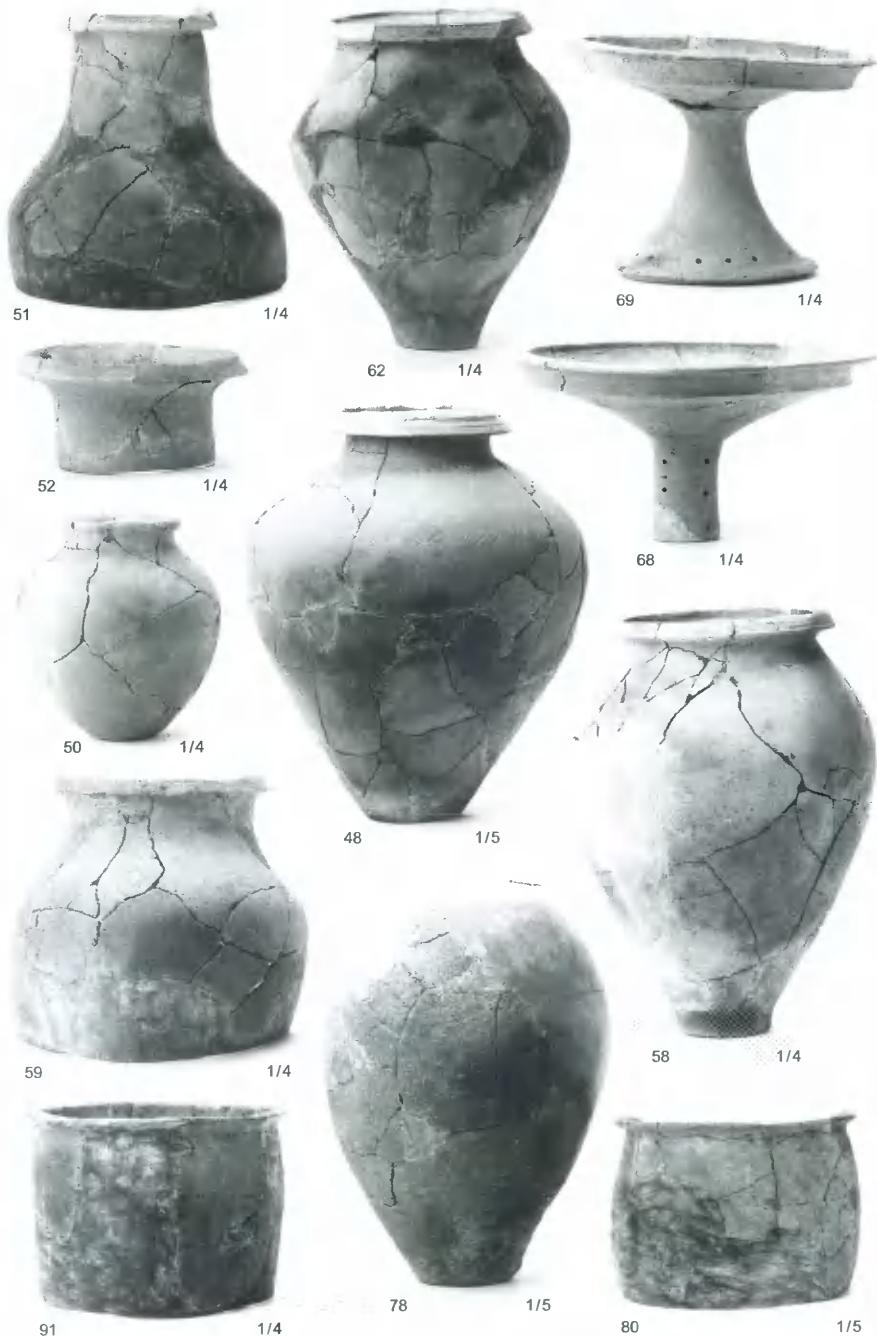
図版26

井手見延遺跡



堅穴住居1・袋状土壙2・4・6出土遺物

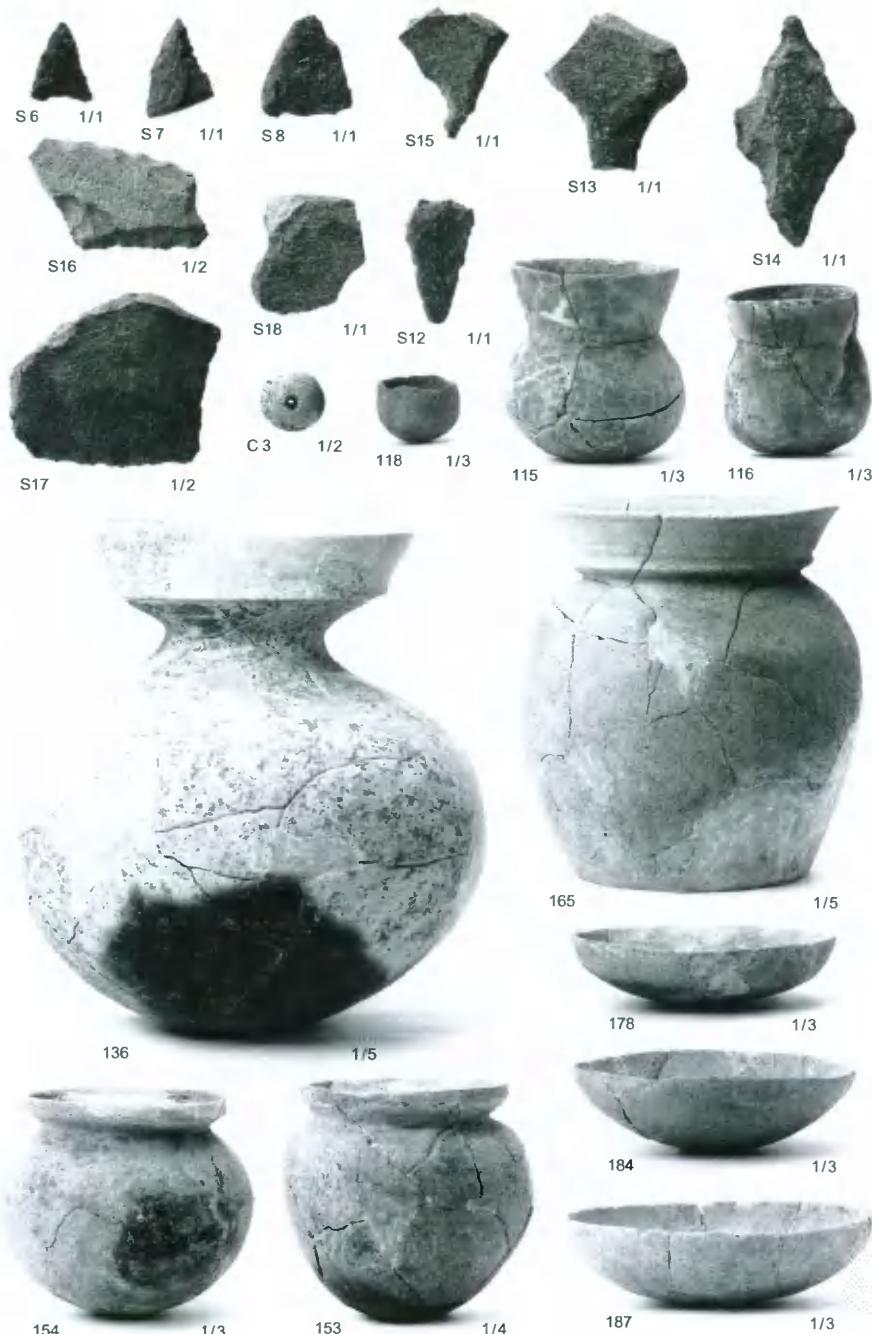
井手見延遺跡



袋状土壙9・土壙2出土遺物

図版28

井手見延遺跡



土壤2・竪穴住居4・溝4出土遺物、遺構に伴わない遺物

図版29
井手見延遺跡

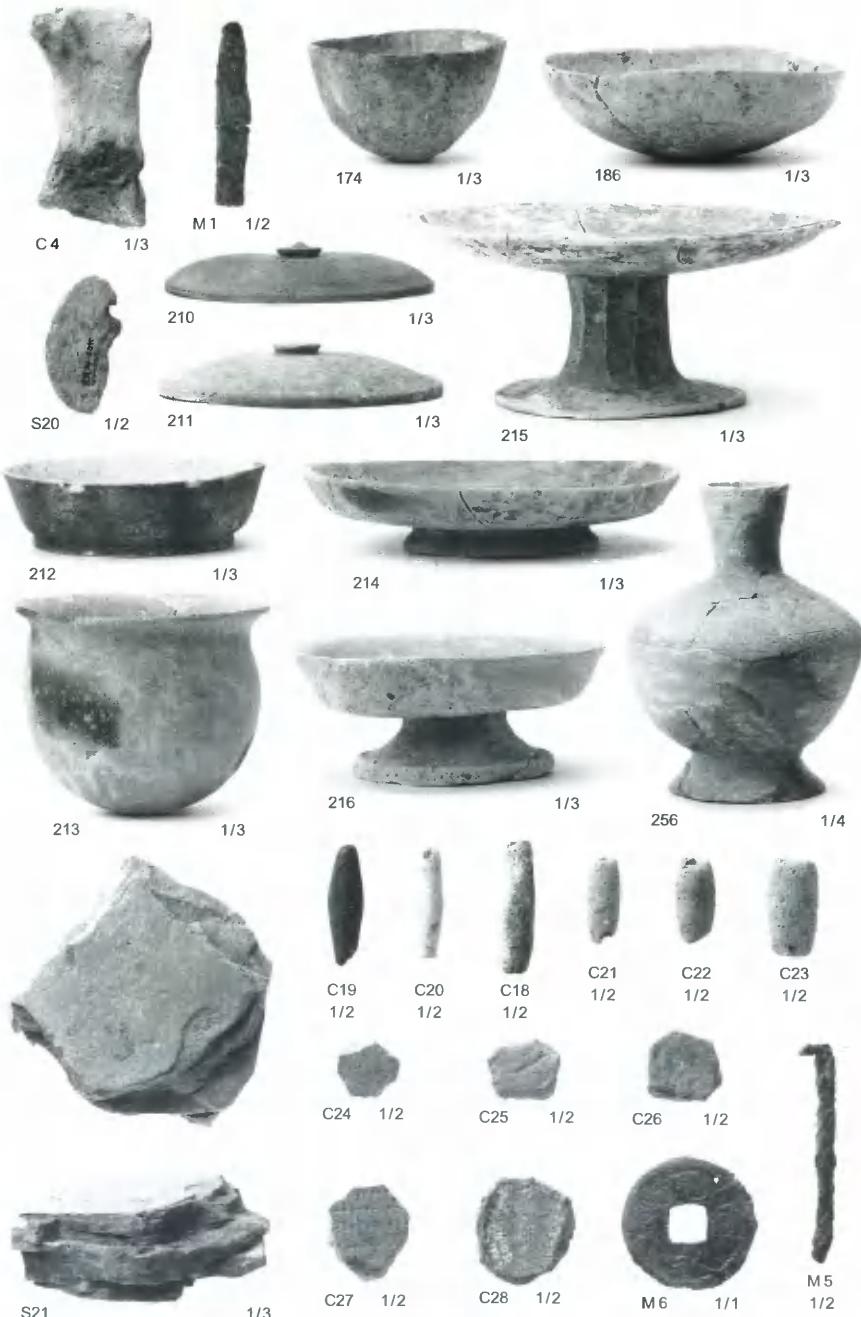


図4・土壤8・溝5出土遺物、遺構に伴わない遺物

図版30

井手天原遺跡



1. 竪穴住居 1 検出状況
北から



2. 竪穴住居 1
北から



3. 竪穴住居 2
南から

井手天原遺跡



1. 壺穴住居 6
南から



2. 壺穴住居 7
南から



3. 壺穴住居 9
南から

図版32

井手天原遺跡



1. 中世遺構全景
(16区) 南から



2. 中世遺構全景
(15区) 北から



3. 中世遺構全景
(29区) 南から

井手天原遺跡



1. 土塚墓
南から



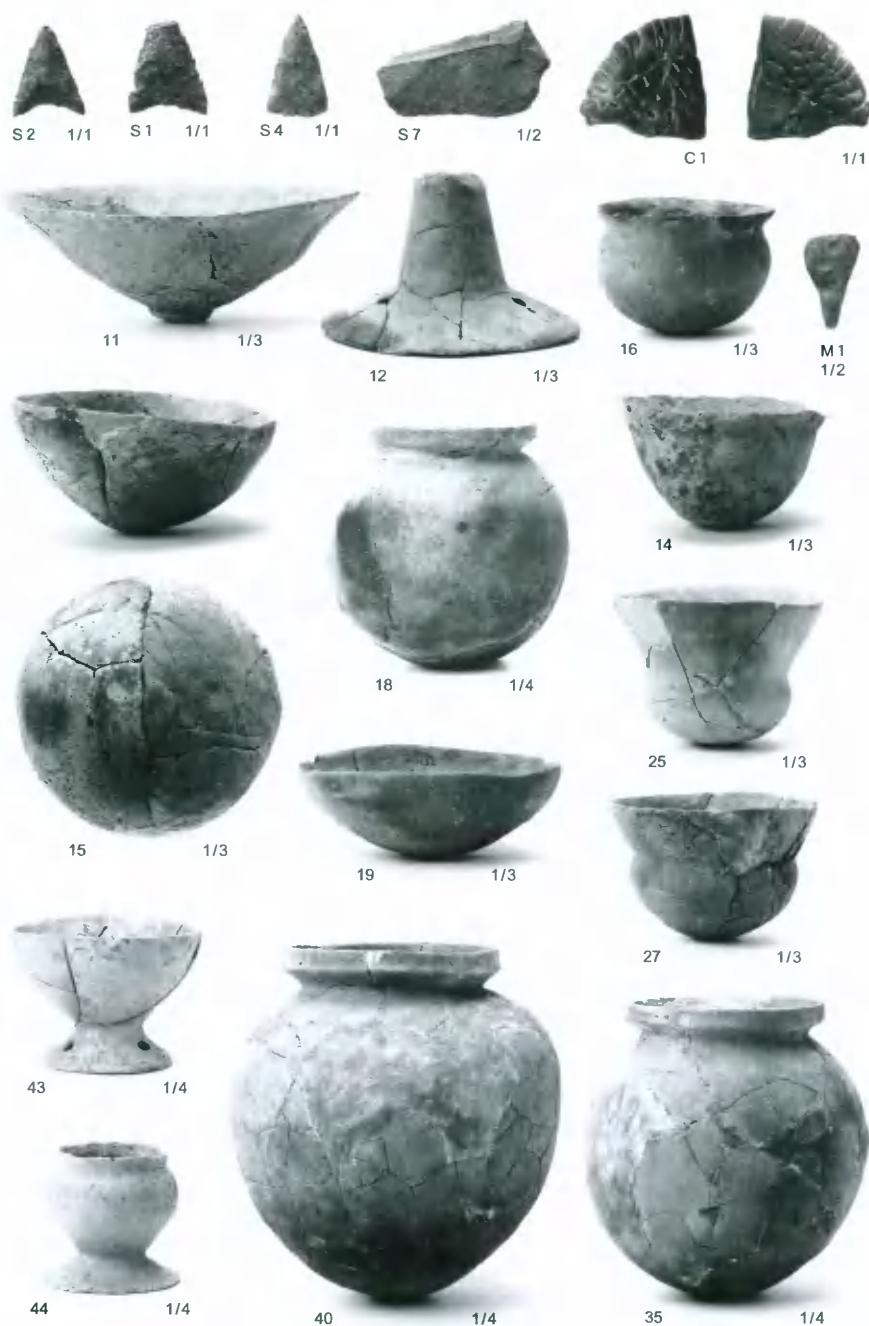
2. 溝8
南から



3. 溝池状遺構出土
獸骨
南から

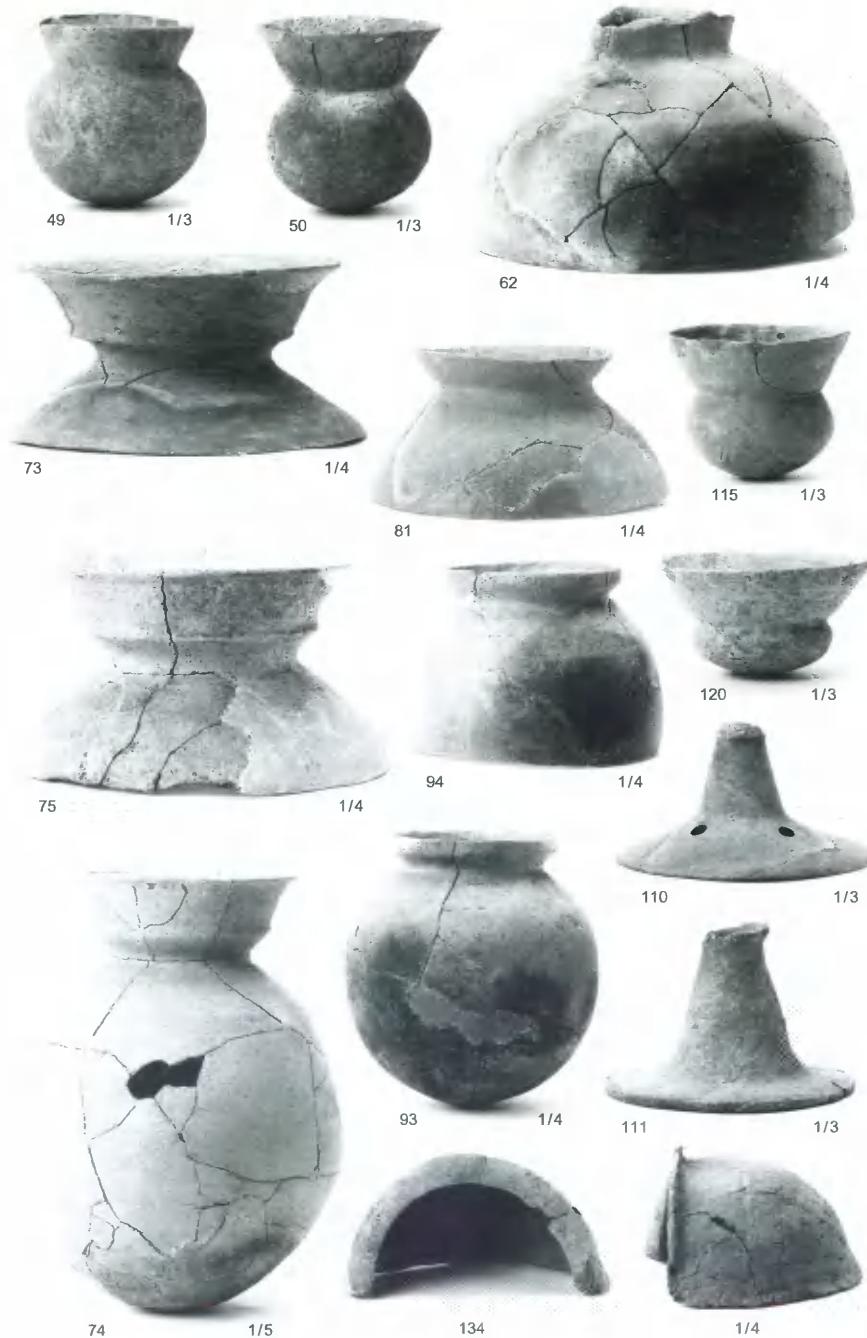
図版34

井手天原遺跡



竪穴住居1・2・5出土遺物、遺構に伴わない遺物

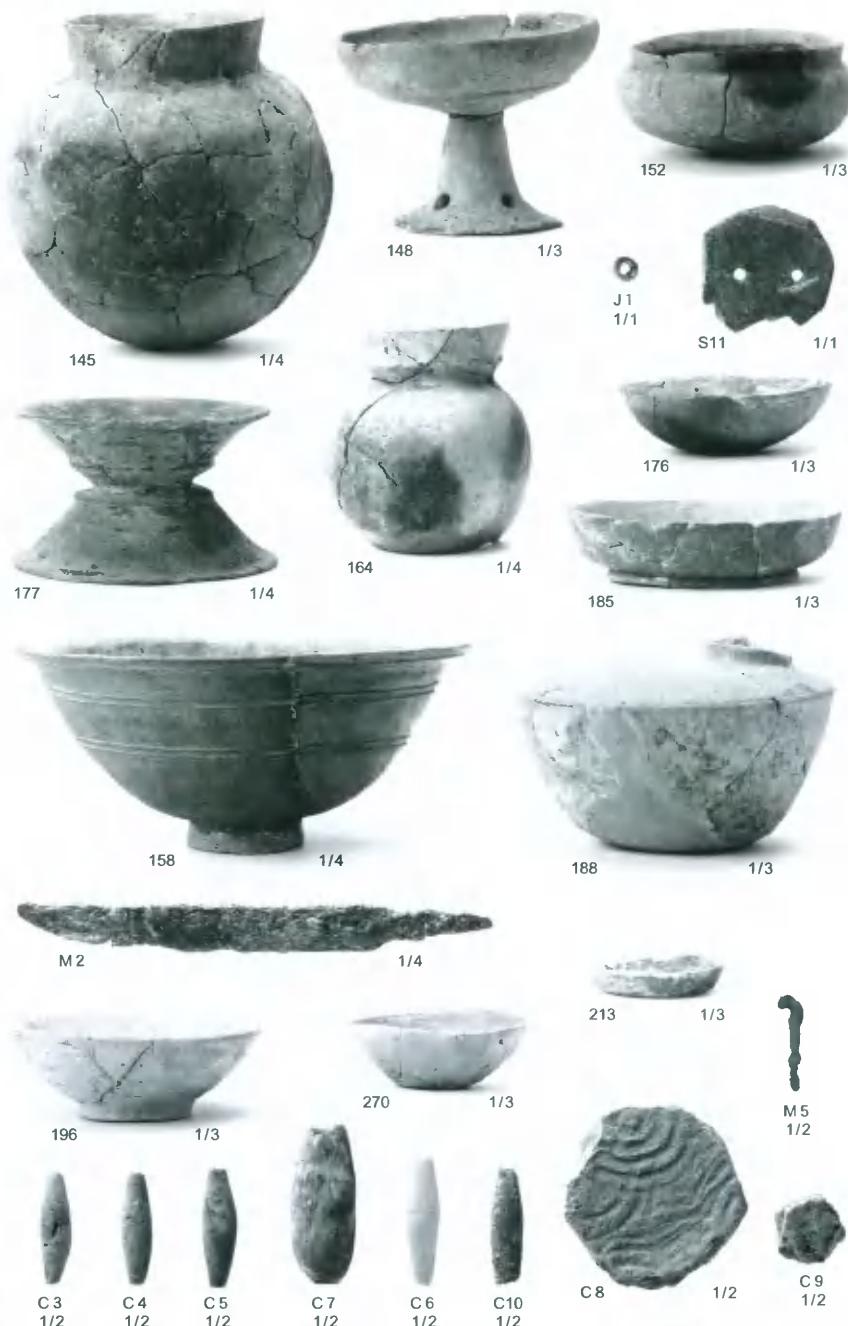
井手天原遺跡



竪穴住居6・7出土遺物

図版36

井手天原遺跡



竪穴住居9・土壙7・溝4~20・土壙墓・柱穴出土遺物、遺構に伴わない遺物

報告書抄録

ふりがな	おかだにおおみぞ みすいまみぞ みすこうら みすはたけだ いでみのべ いでんばら							
書名	岡谷大溝散布地 三須今溝遺跡 三須河原遺跡 三須畠田遺跡 井手見延遺跡 井手天原遺跡							
副書名	国道429号線改良に伴う発掘調査							
卷次	II							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	156							
編著者名	物部茂樹・亀山行雄・小嶋善邦・金田善敬・蛇原啓介・高田恭一郎・葛原克人・重根弘和・宇垣匡雅・岡本泰典・小田嶋悟郎・大澤正己・鈴木瑞穂・白石純・富岡直人							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL(086) 293-3211							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL(086) 224-2111							
発行年	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
おかだにおおみぞさんぶら 岡谷大溝散布地	つくばんやまでそんおかだに 都窪郡山手村岡谷	33427		34°39'30"	133°46'39"	930125～930128	113	道路改良
みすいしまいせき 三須今溝遺跡	そうじやしみす 総社市三須	33208		34°39'49"	133°46'32"	930127～930331	460	道路改良
みすこうらいせき 三須河原遺跡	そうじやしみす 総社市三須	33208		34°40'18"	133°46'25"	940117～940331 950421～950512	503	道路改良
みすはたけだいせき 三須畠田遺跡	そうじやしみす 総社市三須	33208		34°40'12"	133°46'24"	940401～941222 981101～990131	1983	道路改良
いでみのべいせき 井手見延遺跡	そうじやしいで 総社市井手	33208		34°40'24"	133°46'24"	941107～950929 960513～960613 961001～961105 970605～970625	2917	道路改良
いでんばらいせき 井手天原遺跡	そうじやしいで 総社市井手	33208		34°40'38"	133°46'23"	950517～950822 961125～961224 970401～970627 980604～980716	1960	道路改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
岡谷大溝散布地	散布地	弥生～近世		弥生土器・須恵器・土師器・瓦	流入遺物			
三須今溝遺跡	水路	弥生～中世	溝	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・瓦・石器	弥生前期の溝を確認。護岸を伴う古代の水路。			
三須河原遺跡	集落跡	弥生～中世	竪穴住居・掘立柱建物・柱穴列・溝	弥生土器・須恵器・土師器・土製品・瓦	多量の遺物を伴う5世紀後半の竪穴住居を検出。			
三須畠田遺跡	集落跡	弥生～中世	竪穴住居・掘立柱建物・土壙・溝・中世墓・畦畔	弥生土器・須恵器・土師器・土製品・石器・金属器・瓦・鉄滓	弥生時代後期と6世紀に中心を持つ集落。特に6世紀前半の住居は豊富な遺物を伴う。			
井手見延遺跡	集落跡	弥生～近世	竪穴住居・掘立柱建物・土壙・溝・中世墓	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・土製品・石器・金属器・瓦・鉄滓	弥生時代後期前半を中心とする集落。袋状土壙を多数検出。一括性の高い8世紀の須恵器土師器を伴う方形土壙を確認。円面硯、風字硯が出土。			
井手天原遺跡	集落跡	弥生～近世	竪穴住居・掘立柱建物・土壙・溝・中世墓・溜池状遺構	弥生土器・須恵器・土師器・土製品・石器・金属器・瓦・鉄滓	古墳時代前期を中心とする集落。中近世の溜池状遺構からは多量の獸骨が出土。風字硯が出土。			

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156

岡谷大溝散布地
三須今溝遺跡
三須河原遺跡
三須畠田遺跡
井手見延遺跡
井手天原遺跡

国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅱ

2001年2月20日 印刷

2001年2月28日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発 行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印 刷 ワシュウ印刷株式会社
岡山市当新田381-3